

日付変更線

―伊藤博文と岩倉使節団―

木曾 朗生

これからお読み頂くのは、幕末維新談義です。舞台は、岩倉使節団。明治四年冬、米欧視察に向けて横浜港を旅立った船内での談義です。

登場する私と奴と川原（河原）は、架空の人物です。モデルを探しても、いません。それゆえ、放談となりますが、幕末維新の真相が隠されています。談義のなかには、伊藤博文、木戸孝允、岩倉具視、三条実美、大久保利通、西郷隆盛といった明治新政府の要人も登場します。これらの人たちに關する事は、歴史資料を使い再現しましたが、放談の關係上、一部はフィクションとなっております。

尚、この『日付変更線』は、二〇一〇年二月四日から二〇一一年三月一日まで楽天ブログにおいて、北の天神小僧の歴史小説として公開したものを一部、加筆修正したものです。

流石に外の風は冷たかった。空には雲が覆い、星の瞬きを隠していた。闇に閉ざされ、月の輝きは失せていた。微かに航海の山当ての北斗と三武（さんぶ）が垣間見えるだけであった。私が旅路にある時は、何時もそうなのだ。青白い月の光が黒雲の合間からこぼれ落ちた。

それにしても使節団は異様であった。岩倉大使を囲み談笑する木戸、大久保、伊藤、山口の四副使の傍らに、幕臣たちが誇らしげな顔をして立っていた。呉越同舟とはまさにこの事だ。討首をぶら下げ名乗りを上げる賊軍に、お構いなしに銃弾を放ったのは、何時の日の事であったのか。

木戸先生も山田先生も変わられた。倒幕の暁には、攘夷決行ではなかったのか。生死を共にした山田先生も、戦場での勇姿は影を潜めていた。木戸先生はモンテスキューとかいう学者の著作を学ぶという。長州の諸先生方は、小塚原（こづかはら）の刑場に露と消えた松陰先生の無念をお忘れのようだ。

『身はたとえ武蔵の野辺に朽（く）ちぬとも留（とど）め置（お）かまし大和魂（やまとだまし）い』
白雪を頂いた富士が、やけに美しかった。

「何を考えて居った？」

奴の声でした。

「何も」

「留学ともなれば、帰国の時分も分からぬ事だ」

「その事はもうよい。木戸先生のお考え次第だ」

私は語気を強めた。

「それでは、もうちよつと晴れ晴れとしたらどうだ。評判が悪いぞ」

「評判など、どうでもよい」

「そう申すな。何時までも松陰先生の事に拘つて居るから、評判が悪くなるのだ」

「お主は何故に、松陰先生の教えを知ろうとしない」

「知ろうとしないのではない。君と考えが違うだけだ。松陰先生はアメリカに渡り、世界の大事を御自分の目で確かめようとされたのだ。象山先生から諭されたのだ」

「象山先生は本当に、開国論者だったのか」

「象山先生は開国論者だ。西洋の文物、国の制度は、我が国より優れて居ると諸藩の方に説かれたのだ。鳳輦を彦根に遷さんとして殺されたのも、会津の者と開国の事を計られたからだ。象山先生は古代神聖のおれを舎(す)て、人に従う事にされたのだ」

「人を煙に巻くような事を言うのはよせ」

「煙に巻いてなど居らぬ」

「それでは、どういう事だ。言うてみろ」

「象山先生は人に取りて善をなす政治を行なおうとされたのだ」

「何時もそのような事を言う。お主は何故に、松陰先生の下田踏海(とうかい)の精神を知ろうとしない。夷情を探り

に行つたなどと、分かつたような事を申すな。松陰先生はペリーを斬りに行かれたのだ。いやしくとも、長州人たる者、アメリカ渡航に際して、これが一義ではないか」

奴は困つた顔をした。

「君は赤根武人を知つて居るだらう」

「赤根先生が、どうしたと言ふのだ」

「何故、山口鰐石で梟首となつた者を先生と呼ぶ」

「それは何かの間違えだ。赤根先生は松陰門下生だ。高杉先生は赤根先生を大島の土百姓と罵倒されたそうだが、高杉先生は御存知じやなかつたのではないのか。赤根先生は周防大島郡柱島の医師の御子で、十六にして周防遠崎妙円寺住職月性殿に就いて学ばれた方だ」

「どうしてそのような事を知つて居る」

「木戸先生から聞いた。月性殿は『仏法護国論』を著され、僧侶の身でありながら、海防の急務を説かれた方だ。

おまこそ、誰に赤根先生の話を聞いた。伊藤先生か。どうして、伊藤先生はお主にばかり話をする」

「それは君の思い過ぎだ。心を開いて居らぬからだ。何故、心を閉ざす」

「心など閉ざしては居らぬ。心を閉ざされて居られるのは、先生方だ。伊藤先生は赤根先生の事を何と申されたのだ」

「高杉先生と国事を共にしないようにと言われたと」

「そのような事があるものか。お主は高杉先生が松陰先生の弟子ではないとでも言いたいのか」

「そのような事は、言つては居らぬ。赤根は伊藤先生を凋落し、高杉先生と離間せんとしたと言つて居るのだ」

「何故にだ」

「高杉先生は、放れ牛と渾名されただけであつて、何をするか分からぬ。松陰先生も高杉先生に申された」

「何をだ」

「浪士などならず、長州藩士として動くようにと」

「松陰先生の御言葉とは思えぬ。本当に松陰先生はその様な事を申されたのか」

「本当だ」

「松陰先生は、何故にその様な事を申された」

「高杉家は、毛利家恩古の臣。松陰先生も高杉先生の御心情を察せられた」

「何を言つて居るのだ。お主は、高杉先生を松陰先生の愛弟子にしたくないのではないのか。それでは誰が愛弟子といふのか」

奴は黙つた。

「山田先生か」

「違ふ」

「山県先生か」

「違ふ」

「まさか伊藤先生と言うのではあるまいな」

「そのような事、断じてない」

「それではお主は、誰が愛弟子と言うのか」

「君は誰だと思ふ」

「松陰門下、英才数あれど、第一は久坂玄瑞先生ではないか」

奴は私の顔を見た。

「入江先生はどうだ。松陰先生と最後まで事をなされたのは、入江先生をおいて外に居らぬ。久坂先生は、松陰先生を見捨てたではないか。それとも、松陰先生の密書を携えて京に向かわれた弟の野村先生とでも言うのか。入江先生は遺される母御を思つて逡巡されたという話もあるが、そのような事で逡巡されたのではない。母御は村上氏。幼き者には分からぬ事だ」

私は奴の顔を睨んだ。

「お主は、直ぐ人の揚げ足を取る。誰がそのような事を。また伊藤先生か。お主の話は、辣蕪みたいで困る」

「辣蕪とは何だ。どういう意味だ」

「話が幾重にもなつて、皮を剥いても、種がない」

「よいではないか。世の中、君の考えるほど単純ではないのだ」

「もうよい。それより伊藤先生は赤根先生をどうした」

「どうするも、赤根は筑前に逃げた。高杉伊藤両先生、馬関拳兵直前の事だ。赤根は新撰組と内通して居つたのだ。

君は何も知らぬのだな。本当に木戸先生の遠縁なのか」

「そうだ。それが、どうした」

「それでは聞くが、来原先生は何故、腹を切られた」

「良蔵殿は、尊皇攘夷の先鋒たらんとして腹を切られた」

「君の親戚筋ではそういう話になって居るのか。誰がそのような事を申した」

「誰でもよいではないか。お主に関係ない事だ」

「来原氏は多々良姓にして、大内正恒から出たと聞いて居るが」

「どうしてそのような事を聞く。僕が嘘を言つて居るといふのか。来原家に養子に出られたのだ。御実家は福原家だ」

「木戸先生の妹様の治子殿を娶られたのは、土屋蕭海先生が両家を取持ったからと聞いて居るが」

「お主は穿鑿が過ぎるのだ。良蔵殿は尊皇攘夷の先鋒たらんとして、腹を切られたのだ。それで、高杉先生も伊藤先生も、尊皇攘夷の先鋒たらんとして英国公使館を焼討にされたのだ」

「そうではなからう」

「また、そのような事を」

「そうでなければ、木戸先生や伊藤先生が洋行などと言い出す訳がないではないか」

「お主は、直ぐ事を悪く言う。悪意を感じる」

「何を言いたいのだ」

「長州の要人で、松陰先生の教えを受けなかつた方が居られるか。松陰門下に非ずんば、人に非ずだ。もうよい。あつちに行つて居れ。雨が降るやもしれぬ」

「雨。酔つて居るのか」

「酔つてなど居らぬ」

「また悪い夢を見たのか」

「もうよい。少し気分が優れぬだけだ。よいからあつちに行つて居れ」

奴は諦め顔で戻つて行つた。涼しい顔をして居るが、内心恨んで居るに違いない。なにしろ奴が伊藤先生の随員になる筈であつたのだから。それも自業自得というものだ。根も葉もない事を言いふらすからだ。幕府が勅許を得ずして条約調印した事は、それほど叛逆した事ではないと、松陰先生が申されたなどと。

「…夷国船さえ来なければ」

何度も心に浮かんと言葉を呑み込んだ。木戸先生は何時も、本当の事を言つて呉れない。何時も伊藤先生任せだ。山県先生までも開化先生となり、牛肉食わぬ奴は開花不進奴（ひらけぬやつ）とばかりに、牛鍋屋に連れて行かされたが、臭気多く、とても食える代物ではなかつた。

『聖人南面して天下を聴き、明に嚮いて治む』。世は慶応から明治と変わり、東京と名を変えた江戸の町を只々、彷徨うだけであつた。九段に桜は咲くも、上野の森はひっそりとしてた。団十郎の芝居も、心の慰めにはならなかつた。何故か、今は誰も顧みぬ昌平齋の廃れた孔子孟子の木像に、言い知れぬ思いが込上げて来た。

月は青白き光を放つも、闇の中に消えていた。誰かが此方の様子を窺つて居つた。

「そこに居る者は誰か」

私は声を上げた。

「怪しい者ではない。貴殿が血相を変えて出て行つたものだから、老婆心ながら様子を見に来たまでよ」

闇の中から三十半ばの眉の太い浅黒い男が現われた。

「旧幕臣、河原聖堂と申す」

男は名乗つた。幕臣と聞いて思わず身を引いた。

「噂は承知して居る。心配無用だ。貴殿のような若輩者を殺したところで、世の中変わるものでもあるまい」

正論であつた。男は傍らに來た。

「龍馬が生きて居つたなら」

龍馬。坂本先生を知つて居るのか。懐かしい響きを久しぶりに耳にした。

「龍馬の事だ、もう世界を駆け回つて居るか」

男はまた呟いた。

もしあの時、坂本先生が居らねば、今の長州はなかつた。下関に迫り來る幕府海軍。坂本先生は我が藩の艦船を率いて、小倉沖合いにて砲煙上げての戦闘。見事、幕府艦隊を敗走させたのだ。その坂本先生も、もうこの世に居らぬ。風が出でできたのか、揺れが一段と激しくなつた。慣れぬ食事も災いした。

「海舟殿も船酔いには随分悩まされた。海舟殿直伝の船酔いの薬を進ぜよう。遠慮に及ぶまい」

川原に背中を押され、船内に戻つた。川原の部屋は廊下の奥にあつた。廊下の向こうで、夷人の夫妻が此方の様子を窺つていた。

川原はポケットから鍵を取り出し、ドアを開け、私を促した。部屋には綺麗な刺繍を施したカーテンが掛けてあり、テーブルには二脚の椅子が置いてあつた。

川原は席を勧めると、戸棚から硝子瓶を取り出して來た。怪訝な顔をする私に心配無用といわんとばかりに、白い粉を舐めてみせた。

「御一人で居られるのですか」

「拙者も使節団に加わる予定であつたが、選から漏れた。落胆して居つたところ、アメリカ公使のデ・ロング殿から日本人秘書の求めがあつた。万一に備えての事だ。当面の仕事はない。何が幸いするか分からぬものだ」

川原は苦笑した。

「それで川原殿は何時、坂本先生と」

私は間髪を容れずに尋ねた。

「あれは慶喜公が將軍後見職となり春嶽殿も政治総裁職に就任した頃だから、文久二年の夏の事か。ある夜、海舟殿の赤坂元氷川の御宅を訪ねたところ、どこかの浪人が門の周りをうろついて居った。海舟殿に話を聞くと、その浪人、勤王攘夷を信奉するあまり連れの者と海舟殿を殺しにやつて来たという。所が海舟殿の話に感服し、御宅を警護するようになったと。その浪人が龍馬であった。海舟殿も海舟殿であるが、龍馬も龍馬だ。

それから二年ばかりして、拙者は幕命で長崎の語学所に行った。龍馬も長崎に居った。浪人を集めて、龜山社中とかいうものを創って居った。龍馬が長崎に来たのも、幕吏から神戸海軍塾の塾生の素性を疑われての事。海舟殿は塾頭の龍馬を西郷に頼んで、神戸を後にした。海舟殿は、すっかり幕府に睨まれ氷川の御宅に閉門、地所まで取り上げられた。氷川様の裏手にあつた御宅は、海舟殿が安政六年、長崎海軍伝習所の閉所にもない江戸へ戻られた時の御住まい。拙者も世界の情勢を伺いに、氷川の御宅に随分御邪魔致した。

氷川様は紀州藩の産土神。御祭神は素盞鳴命、奇稲田姫命、大己貴命。浅野内匠頭夫人遙泉院様の御実家跡にある社殿は、享保十五年、吉宗公が岡崎城主水野和泉守忠之殿に命じて造営されたもの。境内にある銀杏の木は、我が人生の証だ」

川原は晴れやかな顔をした。

「川原殿は、勝先生とどのような御関係のですか」

「咸臨丸でアメリカへ行った時の上役だ。海舟殿の考えは分かっていた積もりでいたが、浪人のする事は違つてた。イギ

リス人グラバーから銃器を薩摩藩名義で購入し、貴藩の井上殿と伊藤殿に渡して居った。薩長連合など、無茶な事をし居ると思つたよ」

昔話をするうちに、すっかり川原への疑念はなくなつていた。薬が効いてきたのか、腹の具合も良くなつていた。白湯を一杯所望すると、川原は薬の因縁を話し始めた。

「この薬は、海舟殿が高野長英という医師から教えて貰つたものだ。長英殿を御存知かな。陸奥国水沢の人で、藩医高野玄斎の養子となり、長崎に遊学し、あの御禁制の日本地図を持ち出そうとしたシーボルトに医学を学んだ方だ。

その長英殿が自害なさる前の事、海舟殿を尋ね、自写した荻生徂徠（おぎゅう そらい）『軍法不審』を進呈した。その書に付せられた跋は、まさに長英殿の遺書だつた。『今の兵法は、大率（おおむね）、祭後の肉に類し、実用に益なき等の語は、三百年来いまだ世人のいわざるところにして、卓然たる高妙の確論なり。文勢凜々（りんりん）秋風の樹葉をはらうがごとく、また電雷の耳目を驚かすがごとし。敬服の余り黙止することあたわず』と」

川原は薬瓶を棚に戻すと、独り言のように昔話を始めた。

「長英殿の逃亡生活には、とんだお尋ね者の捕物があつた。長英殿は市ヶ谷鈴法寺に、御宗旨を信仰いたし終身かたく相まもると庇護を願ひ出た。住職は、町医にては宗門のご趣意に欠け候えば、気の毒ながら成就しがたしと断つた。その夜、十手を打ちかざした者たちが寺に押し掛け、すみやかに渡すべし、越前守殿のお差図なりと迫つた。住職は動ずる事なく、ここは古来よりおん掟（おきて）を堅固に相守つて居る武門の隠れ家と申すと、取り囲んだ役人もその道理に屈服した。翌日、寺社奉行松平伊賀守忠固（ただかた）殿の使者が来て、昨日越前守殿のお指図と申せしは全く口様にて、おさたなしに頼みいると言つて来たのだ」

川原は私を困惑させたと思つたのか、詫びた。

「とんだ昔話をしてしまった。退屈されたでしょう」

私が頭を振ると、川原は安堵の表情を見せ、勝先生の話始めた。

「海舟殿が今、安芳（やすよし）と名乗って居られるのは、海軍奉行拝命時に安房守を仰せつかったからだ。海舟という号は、佐久間象山殿が書いた『海舟書屋』という額を見てつけたものだ。これもなかなか言い得て妙だ。人世は海の如し、巨舟これを渡る。

海舟殿は江戸本所亀沢の生まれで、御父上は小普請の無役の貧乏旗本であったが、それでも海舟殿は幼少の时分には大栄進の機会があつた。七歳の時から家慶公の五男初之丞君の御学友としてお城住まいだ。本丸のお庭拝見に上がつた際に、家斉公がお決めになられたそうだ。

初之丞君が一橋家を相続されると、一橋家の家臣との内命を受けられた。海舟殿十五歳の御時だ。一橋慶昌殿が將軍という事にでもなれば、海舟殿の出世は間違いなかつた。天保九年、慶昌殿がお亡くなりになり沙汰やみとなつた。

海舟殿も運のない方だ。それから貧乏暮らしのどん底だ。九歳の時、野良犬に金玉を噛まれたのが、けちの付け始めだつた。医師に傷を縫い合わせて貰つて往生したという。

運がないと言えば、我々の渡米もそうだつた。安政五年正月、幕府はアメリカ総領事ハリスとの間に修好通商条約の妥結をみ、六月アメリカ艦船ポーハットン号の艦上で仮調印。日本から使節をワシントンに送り、批准書を交換する事になった。

万延（まんえん）元年正月、外国奉行新見正興殿を正使とする使節が、ポーハットン号に乗り込み横浜を出立した。日本の軍艦もサンフランシスコまで航海する事になった。長崎の海軍伝習所での成果を披露しようというのだ。

日米修好通商条約締結を機に、我々の手で新しい日本が生まれる筈であつた。下田箱館に続き、神奈川、長崎、新潟、兵庫が順次開港され、江戸と大坂も開市される手筈であつた。開港場にはアメリカ人が自由に遊歩できる区域を設け、要塞化しない事を条件に土地の借り受けも認めた。更に幕府は、開港場にアメリカ領事を駐在させ、国内旅行の権利をも与えたのだ。

日本側もアメリカの港に領事を置く権限を手にした。関税も日本に有利な高率なものを設定した。日米両国は貿易を手始めに交際を厚くする事を誓つた。これとて我々の夢の一步に過ぎなかつた。幕府は踏み絵を止め、礼拝所を建てる事も許したのだ」

「幕府は何故に、耶穌教などを」

「宗教は人に善を勧め悪を誡むるもの。宗教に仏教儒教耶穌教あるも、その道は異なるものではない。怖れあればこそ、人の道。無宗教な者ほど危険なものはない。幕府は開国を機に、宗教の事は人民の自由に任せ、干渉しない事にしたのだ」

「そのような話、聞いた事がありませんが」

「それは、我等の夢だ。安政開国の」

「安政開国の夢」

「幕府は宗教の事に偏私せず、人民をして他の宗門を誹議妨害させる事なく、一凶に善を勧め、その福運を増進させる事を勧めんとしたのだ。仏なり儒なり、或は耶穌教にても、その宗門に入り修むるは、益あるも害はないものだ。

しかし、すべてが頓挫してしまつた。宗門の事も、御国商民通商居留の事も。アメリカで見聞を広めようという気概も幕府にはなくなつた。使節派遣も条約批准という抜け殻だけが残つた。だからといつて、咸臨丸の価値が下がる訳で

はない。なにせ、長崎でオランダ人から航海を学び始めて僅か五年で太平洋を横断したのだ」

川原は誇らしげに言ったが、私の反応が芳しくないのか、怪訝な顔をした。

「それにしても、前途有用の面々にあつて貴殿の浮かぬ顔はどういう訳かな」

「奴等のハイカラ好きは、考えものです。此度の事は、木戸先生から海外の知識が必要だと諭されただけの事です」

「木戸殿とは、どういう御関係か」

「遠縁に当たります。東京に来て木戸先生の書生をして居りましたが、此度は伊藤先生の口利きで、伊藤先生の随員にして貰いました」

「それでは恩人ではないか」

「伊藤先生とお知り合いなのですか」

「いや、面識はない。ただ、昨年のアメリカ視察に随行した福地源一郎から話は聞いて居る。伊藤殿の話は面白いではないか」

川原の口調は、伊藤先生を弁護するかのようであつた。

「そうでしょうか。伊藤先生の話の何処が、面白いものなのでしょうか」

私は反駁した。

「將軍家では正月元旦、江戸柳営において、兎の羹(あつもの)を佳例として食して居つたのだ」

「何故に、兎の羹など」

「家康公乃祖(ないそ)親氏公、故あつて、信濃国林郷は林藤介光政なる者の家に投じられ、兎の羹を供ぜられると、それより武運開けたる故だ」

川原は可笑しな事を口走った。幕臣の川原が、何故に伊藤先生に興味を持つのか、不思議な事であつた。

「伊藤先生の話は、何時も自慢話です」

私は辟易した顔で答えた。

「伊藤殿は何と自慢して居るのだ」

川原は冷やかすように聞いてきた。

「自分もかつては一端の尊皇攘夷論者であつたと。高杉井上両先生と品川御殿山の英国公使館を焼き討ちにもしたと。井上先生がイギリスに留学するといふので、伊藤先生も加えて貰つたそうです」

「それで、イギリスはどうだつたと」

「ロンドンに着いて驚いたと。テムズ河口には帆檣（はんしょう）が林立し、煉瓦の建物は宏麗で、汽車が黒煙を漲らせ疾走して居る。眼の色を変えて攘夷を叫んでいた我が身が恥ずかしくなつたと。それで日本も一日も早く頑迷な夢から醒めて、文明に倣わなくてはと思つたそうです」

「それで」

川原は話を促した。

「それから工場生産の盛大なことなど、頻りに話されました。伊藤先生と一緒に留学された井上先生に至つては、市中に満ち溢れている珍しい品々の事など、まるで商人のような事を申されます」

「それで貴殿はどう思つた。納得したのか」

「とんでもありません。私は夷国艦隊が馬関を砲撃するといふので、微力ながら一命を賭する覚悟でした。郷党の誰かが神州の正気を頂いて、天下我より強いものは無いと信じて居りました。婦女子も白鉢巻に襷を掛け、長刀を持つ

て戦の準備を致しました。

夷人との戦に敗れはしましたが、幕府を倒して攘夷を執行するものと覚悟を新たにし、戊辰の役を戦いました。あの戦の事を思うと、右足の古傷が疼きます。私は山田先生のもと、遙々箱館まで行って戦つて来たのです。それを薩摩の黒田などは、あの榎本武揚の助命に奔走して居ります。木戸先生が反対して居るといふののです。

村田先生はいつも西郷は手ぬるいとお冠でした。賊軍を殲滅させるまで戦うと申して居られましたから、声を荒立てる私に、川原は唸っていた。

「伊藤殿の話も尤もだし、貴殿の興奮も分からんでもない。木戸殿にも立場があるだろうし。事の成り行きというものは、当事者であつても分からぬものだ」

川原は空を仰ぎみた。

「何を申されて居られるのですか。今日、皇国独立あるのも、尊皇攘夷の志、あつたればこそです。そうは思いませぬか」

私は反駁した。

「それはそうだ」

川原は言葉を濁した。

「川原殿は攘夷の念を抱かれなかつたのですか」

「そのような事はない」

「それでは何故に、事の成り行きは当事者でも分からぬなどと申されるのですか」

「それは孫悟空が暴れたようなものだからだ」

「真面目にお話し下さい。そのような申され方をされては、あの戦で亡くなられた方々が、浮かばれぬではありませんか」

「それでは、三蔵法師が天竺を去る時、何を見た。江戸の町人は、今もあの時のままに、仕合せに暮らして居るではないか。潔いと思わぬのか」

「潔い？」

「海舟殿も拙者も、国家百年の大計を案じ、一身の生死はもとより、徳川三百年の幕府を棒に振る事さえ厭わなかったのだ。

それとも、貴殿は生き残った幕臣が、新政府で大きな顔をして居るのが、気に入らぬのか。官軍と一戦を交えて華と散った者達の方が、美しいとでも思つて居るのか」

「そのような事を申して居るではありません」

「木戸殿は何と申して居るのだ」

「時勢だと」

「伊藤殿は」

「平気です。そのような事、頭の片隅にもありません。可笑しな方です。伊藤先生と初めて会った時の事です。行く行くは東京でも河豚を食せるようにしたい。秀吉に倣い幕府で誰が河豚禁食令を出したか、調べておいて呉れないかと言われるのです。長州藩では河豚を食べ死んだ者の家は、断絶となるのです。松陰先生は、河豚など決して口にされなかつたと聞いて居ります。

伊藤先生はロンドンに行かれて、化学の勉強をされたとか申されますが、いい加減なものです。大隈先生に頻りに女

風呂の効能を説いて居りました。西洋の化学の説では、生娘のつかったあとは、独特の脂肪とたくさんの蛋白が遊離して居るから、それに浸ると精気を受けると」

川原は笑っていた。

私は、ここぞとばかりに畳み掛けた。

「箱館での戦を終えると、木戸先生の命令で東京で書生をする事になりました。その頃、伊藤先生は兵庫県知事を辞められ、東京の築地に居りました。伊藤先生は薩摩の五代先生、肥前の大隈先生、幕臣の渋沢栄一などと交際し、築地梁山泊の分類と呼ばれて居りました。師の吉田松陰先生が集いし江戸桶町の鳥山塾が梁山泊と称された事に倣ったのですが、その精神は月と鼈です。伊藤先生も薩摩の高崎先生とご交際なされればよいものを」

「高崎猪太郎を存じて居るのか」

「薩摩藩の方で、高崎先生が一番です。高崎先生は松陰先生を豪傑と申され、気も浩然として居つたと申されました。そのような方を差置いて、伊藤先生は渋沢などと交際して居りました。聞けば、渋沢は將軍慶喜のお付きをしていた者というではありませんか。そのような者と交際を行うのは如何なものかと、伊藤先生に諫言致しましたが、伊藤先生は全く意に介されませんでした。先生方に万一の事があつてはと、老婆心ながら、渋沢の素姓を探れば、驚いた事に、渋沢の従兄には浅草本願寺にて彰義隊の隊長となり、あの榎本武揚と箱館に落ち延びた輩が居ると分かりましたので、伊藤先生に早速問い質しました」

「それで、伊藤殿は何と申された」

「如何にも渋沢成一郎は、東北の地で官軍に抗し、箱館にて投降した者なれど、彼の者たちは元々は、野武士宜しく高崎城を乗っ取り、横浜を焼き討ち、倒幕せんと企てたる者。渋沢栄一に至つては徳川昭武の随員となりて、フラン

スの地にあつたれば、輪王寺宮を奉じ官軍と一戦交えし者にあらざればと申され、赤い腰巻をひらひらさせて、おなご遊びです。耳を貸しません。

何故に、倒幕を企てたる者が、將軍慶喜のお付きになる事など、出来ましようか。そのような事、三歳の童でも分かります。後は知らぬ顔の半兵衛を決め込んで、大隈先生の所為にするのです。

何でも大隈先生が渋沢を見込んで、足下は八百万の神、神計りに計り給へという祝詞の文句を知つて居るかと言つて、日本に新しい文明をもたらすために新政府に出仕させたというのです。これも可笑しな話ですが、可笑しいのは伊藤先生の方です。

流石に築地梁山泊にあつても伊藤先生のおなご遊びは目に余るものでしたから、弾正台の伊地知殿から御咎めを被りましたが、そんな時も伊藤先生は意氣軒昂でした」

「どのようにか」

「これから我々が行う事は、あたかも未開の荒野を拓くもので、酒を飲み、美人の膝に枕して、浩然の氣を養わずして、どうして敢行する事ができようかと。伊藤先生は、松陰先生の教えを分かつて居られぬのです。ただ……」

「ただ、どうした」

川原の問いに、言葉が詰まった。私は苦しい言い訳をした。

「一言長州人の名誉のために申し上げときますが、長州人の遊び好きは単なる道楽ではありません」

「どういう事だ」

「これは長州人の使命です」

「使命ねえ」

川原は含み笑いをした。

「そうです。使命です。高杉井上伊藤の諸先生は、イギリス大使館焼き討ちに出掛けるときも、品川遊郭土蔵相模からでした」

「そういうえば、その方面では長州人は重宝がられて居ったな。拙者の友人で大坂の緒方洪庵の塾で塾長して居った者が、面白い話をして呉れた。

江戸から徳川家の藩医の息子が学びに来て、親から拝領した葵の紋付きなどを誇らしげに着て居る。北の新地などに遊びに行ったら勉学の妨げになるからと言うて、行ったら頭を坊主にする約束させた。それで本当に遊びに行っていないかと、贋の遊女の手紙を拵えて試してみた。『ソレあのととき役足のじゃこはどておます』など片言交じりの文にし、麝香の無心などあれらが言いそうな事をおわせて。字は長州の塾生に御家流の女文字で書かせたとか」

「山口は西の京と称された如く、雅な事は京に劣りません。祇園での長人の遊興は有名です。木戸先生が幾松さんと出会われたのも祇園です。御一新になってからも長人の遊び好きは変わりません。広沢先生が殺されたのも九段坂上の妾の家でした。長州をよく思わぬもの達でしょう、木戸先生の手の者の仕業との噂を流して居りました」

私は真顔で答えた。

「それで、貴殿はまだ攘夷の考えを捨てて居らぬのか」

「今は、只々釈然としないだけです。攘夷は我が藩の宿論です。木戸、山田、山県、高杉、伊藤の諸先生の師であられた吉田松陰先生は、かつて申されたそうです。防長に生ずる衣食は防長人が衣食し、日本に生ずる衣食は日本人が衣食す。アメリカ、イギリス、ロシア等に互市を許すと、我が国有用の宝を失う。ミニストルを江戸におき、通商を勝手にすれば、神州も是れきりだと。松陰先生は、『七たびも生かへりつゝ夷をぞ攘はんこゝろ吾れ忘れめや』との歌を

遺され、この世を旅立たれたのです。

伊藤先生などは、師の教えをお忘れなのです。通商開国の策ばかりです。佐藤信淵の『經濟要録』などを読めと。その創業・富国編は、今も読むに値するものと。

列強が大挙して押し寄せて来ている時にです。神功(じんぐう)皇后以来の雄大な戦略に思いを致され、大和魂を發する時ではありませんか。松陰先生が御存命ならば、朝鮮を責めて、北の満州の地を割き、南の台湾・呂宋(ルソン)諸島を収め、進取の勢を示している筈です」

「貴殿は誰から寅次郎の話聞いたのだ」

川原は思わぬ人の名を口にした。

「川原殿は、松陰先生を御存知なのですか」

「存じて居る。話は佐久間象山殿から聞いて居る」

「木戸先生も、すっかり腰抜け侍になりました。朝鮮出兵の事を口にしなくなりました。木戸先生は、丸山作樂先生を見捨てられたのです。外国の襲来を坐して待つよりは、近隣の地域を併合し、そのうえで通商を育成すべきだと松陰先生は申されて居られたのにです。木戸先生も伊藤先生も、松陰先生の事となると何故か口を閉ざされてしま

います。
木戸先生は、今はそういう御時世だと言うばかりです。伊藤先生からは横浜に連れていかれ、今まで見た事のない数多の夷人と横浜の繁栄をみせられました」

「それで貴殿は、東京で何をして居った」

「木戸先生の書生となりましたので、木戸先生に皇学を学びたいと申し出ました。京の皇学所漢学所に次いで東京に

も大学校が設立されましたので」

「それで木戸殿は何と」

「それには及ぶまいと」

「どういう事だ」

「道の体である皇学は僕らに任せて、君ら若い者は道の用である洋学を先ず学べと。それで福沢先生が書かれた『西洋事情』などを渡され、怪訝な思いで読んで居りました。然しと言うべきでしょうか、矢張りと言うべきでしょうか。明治三年正月大教宣布の詔勅が出され、いよいよ祭政一致の政治が始まるとの思いでした。

所が今度は長州の様子がおかしくなりました。奇兵隊を始めとする諸隊が、新政府の部隊に再編される事になりましたが、これに不満な者たちが農兵とともに藩庁を包囲しました。この時、木戸先生は長州の鎮圧に行かれましたが、もし私が長州に居ったなら、脱退方に荷担していたと思います」

「人の運命とは分からぬものだ」

「鬚を切り落とすにも木戸先生とは一悶着ありました。親戚筋からは、裏切り者呼ばわりされて居ります。木戸先生が長州から戻られてからは、先生が何を考えて居られるのか分からなくなりました。

まさか英語を学ぶようになるとは夢にも思いませんでした。初め木戸先生からは独語を学ぶよう薦められました。が、伊藤先生からこれより外国と交際を行う者なればとのお話があり、英語を学ぶことになりました。

それで、大隈先生の紹介で福沢先生の塾生から英語を教えて貰う事になりました。これも御時世というものなのでしょうか。何しろ大隈先生に紹介された塾生が話す事といえは、今度新橋横浜に鉄道が出来るから、その周辺の土地を云々せよと言うのです。というのも大隈先生は、世の中が攘夷攘夷と喧しい時から、安政条約から十年後には

大坂・兵庫辺りの不毛の砂原でも地価が上がるからと言って、藩の重役に買い占めておくよう説かれていたそうです」
川原は頷いていた。

「そうかと思うと、時代に取り残された者も居りました。世の中は広いようで狭いものです。福沢先生の再従弟で増田という者が居るから、会ってみると言われました。福沢先生の再従弟と申しますから、随分ハイカラな輩と思いましたが、歳は二十二で九州中津の田舎者でした。話を聞くと、この増田君、年若くして幕府の長州再出兵に反対し、長州加勢を藩に申し立てた強者でした。時を同じくして全国の若者が、私共と考えを同じくしていたとは感激です。

しかしながら増田君には、何か尋常でないものを感じました。私も政府要人の書生です。東京には、絶望の余り政府要人の暗殺を企てる者が居りましたから。そう言うものの、私も増田君と同じ思いです。往時は本居平田の学説を知らぬものは人間じゃないと言われたものです。福沢先生に至っては楠公を権助呼びわりです。増田君が塾生と上手いかぬのも無理からぬ事です。郷里の中津に戻って学校を創るとか言って居りました」

「時の流れとは何とも残酷なものだ。そう思わぬか」

「私も東京で暮らしているうちに、攘夷などと口走る事はなくなりましたが、それでも遣る瀬無い思いです。多くの同志がああ戦いの最中、傷つき亡くなっていきました。今も良心に苛まれる事があります。しかし、時代はお構いなしに動いていきます。

それで此度の使節団です。今遽（にわ）かに談判を開いても、法制の不備を理由に我が方の要求は退けられると。それで先ず使節を派遣し、各国の意向を探り、条約改正の素地を作ると。

それと並行して我が国が整備すべき制度の視察を行うこととなったのです。そのような国家の大事に、要人の遠縁というだけで洋行する事になろうとは思ひもよらぬ事でした」

「何故、洋行に同意した。攘夷の念は何処へ行った」

川原は意地悪な事を言った。

「伊藤先生は分かつて居られたようです。ご自分もそうだったと」

「どういう事だ」

「攘夷論仲間で頭のある者は、皆そうであつたと。伊藤先生も最初の洋行の際、久坂先生に相談されたそうです。それで久坂先生は、外国へ渡航などと言う事はもう遅い、是非やめろと申されたそうですが、その時攘夷論の先鋒であられた久坂先生も、一時期、政事の事から手を引かれ、蘭学に専念されたそうです。松陰先生から国家に在つて力を蓄え鋭を養う時と諭されたからです」

「それで伊藤殿は貴殿に何と申したのだ」

「萩の片隅で一生を終えたいのかと」

「英断であつたな」

川原は意味有りげに言った。

「大した事ではありません」

「貴殿の事ではない。新政府がだ」

川原は赤面する私をよそに話を続けた。

「廃藩置県の大事を断行して半年も経っていないのだ。かかる時に、岩倉殿を始め、大久保木戸の薩長の両巨頭までもが洋行とは。どうも新政府の人事は、よく分からん所があつた。

薩長土肥の寄り合い所帯でどうなる事かと心配して居つたが、薩長の譲り合いだ。大久保は政務の統一を欠くか

ら、木戸殿を参議とし、他の者は諸省に下り内外の政務に当たろうと提唱したそうじゃないか。

それで木戸殿は、自分は適任でないと西郷を推した。廃藩置県を断行するや、大納言であつた岩倉殿が異例の外務卿、大久保は大蔵卿だ。身軽な旅支度という事か」

「使節団の事は、大隈先生の発案であつたそうです。噂では……」

私は慌てて口を噤（つぶ）んだ。

「噂ではどうした。伊藤殿と岩倉殿が、横取りでもしたというのか」

口は禍の門。心の動揺を悟らせまいと、平常心を装つた。

「岩倉公は外国の事情に不案内でありますから、海外経験のある伊藤先生に案内役を頼まれました。伊藤先生は木戸大久保両先生を副使とし、自分は外務少輔（しょうふ）の山口先生と共に補佐役に当たると岩倉公に申されたそうです。

木戸先生はこの機を逃しては生涯に悔いを残すと、何度も伊藤先生に洋行の斡旋を頼まれました。伊藤先生は自分が表に出ると差し障りが出るので、山尾先生から岩倉公に話して貰いました。岩倉公は、反対こそされませんが、随分困惑されたそうです」

「それまた、どうして」

「参議の西郷さんと板垣先生が、内治の整わないうちに廟堂の主要人物がうち揃つて国外に出るのは問題だとの正論を唱えられたからです。三条公もその意見を容れ、木戸先生に情において忍びないが、目下の国内の形勢ではと自重を求められたそうです。

ところが木戸先生の洋行が見送られると大久保先生の渡航にも影響しますから、今度は岩倉公が木戸先生に大久

保先生とともに欧米諸国を視察するよう説かれたそうです。是非とも同行して、帰朝後二人協力して視察の成果を
実行すれば、国民の信頼も一層増すと。

木戸先生は「ご事情を岩倉公から三条公に話して貰い、三条公から西郷さんと板垣先生に話して貰いました。最後
は木戸先生自ら西郷さんを訪ね、了承して貰いました。西郷さんも洋行したかったようです」

「それで大隈の方は引つ込みがついたのか」

「木戸先生の話では、三条公に自分も使節団に加えて貰うよう大久保先生に掛け合って呉れるよう頼まれたそうで
すが、三条公は情実云々は言い出せなかったそうです。大隈先生は使節要人の補佐役を閑職の伊藤先生に取られて
悔しかったのでしょうか。三条公から大久保先生に伊藤先生を工部卿に栄転させるよう進言して貰うよう話されたそ
うです」

「何故、閑職などと申す。福地源一郎の話では、伊藤殿は今年五月、アメリカでの財政調査を終え日本に戻られる
と、随分メリケン風を吹かせたというではないか。貨幣鑄造に際して世界に先立ってアメリカがメタリック公秤量法を
採用する模様であるとか、紙幣や公債の発行はどうなつて居るとか、あちらの事情を事細かに彼方此方で話されて
居つたと聞いて居るが」

「民部大蔵二省大合併の国家一大事の時に、自分は大阪造幣局での紙幣造りです。伊藤先生は兵庫県知事を辞めら
れた後、東京で大蔵少輔（しょうふ）と民部少輔を兼任されて居られましたから、その事で早く東京に戻るよう大
隈先生に手紙を書かれて居られたそうです。

紙幣の事は、西郷さんの推薦で三岡八郎殿が遣られて居られましたから、大久保先生に嫌われ、大阪の造幣局に
左遷されたのです。工部卿昇進の事は、大隈先生が伊藤先生に友情を示されたという所ですか」

「そのような事で、大久保は左遷などせん。考えあつての事だ。それにしても、岩倉殿だ。一省の長官となりての洋行とは」

「詳しい経緯は存じませんが、何か並々ならぬ思いがあられたようです。岩倉公は大隈先生に夷人が書いた建白書の回付を頼まりましたから」

「誰の建白書だ」

「フルベツキという夷人のです。条約改定に関する建白書です。使節を米欧に派遣する事を提案したのは、この夷人で、大隈先生に提案したそうです。その夷人は西欧諸国の現状を理解するには、実際に視察する必要があると説いたそうです。」

それで岩倉公がこの夷人に会い、その者の意見に基づいて外務大輔(たいふ)の副島先生と外務少輔(しょうふ)の山口先生に使節団の計画を立てるよう命じられたのです。この夷人は長崎で宣教師をしていたそうだから、川原殿は御存知じゃありませんか」

「フルベツキ殿の事ならよく存じて居る。安政六年に長崎に来られ、薩英戦争で一時上海に避難されたが、長崎に戻られてからは幕府の済美館の校長として英語数学科学の教授をされた。それから佐賀藩が長崎に到遠館を開くと、そこで大隈、副島、江藤、大木等の藩士を教えられたのだ。大隈や副島などは、到遠館でアメリカ国憲や聖書を読むで居った」

「それでは、大隈先生はフルベツキの弟子という事ですか」

「そうだ。知らなかったのか。それだけではないぞ。到遠館は他藩士にも門戸を広げ、薩摩では大久保、西郷、小松が、長州では高杉、木戸、井上、伊藤が、変わったところでは帝の侍講をして居る加藤弘蔵なども出入りしていたの

だ。木戸殿や伊藤殿は、フルベッキ殿の事を話して居らぬのか」

「それらしい話をされた事はありますが、長崎での話は専ら薩長同盟の事ばかりです」

「肥前は新政府で大きな顔をしていると評判が悪いそうだが、進歩的などころは薩摩に劣るものではない。なにせ閑叟殿は、西洋文明の移入に関しては、薩摩の斉彬殿以上のものであった。日本で初めて反射炉を造ったのも佐賀藩だ。

それでも閑叟殿が鳥羽伏見の役を傍観していたには、訳がある。薩長土の尊皇攘夷の帰趨を見定めての事だ」

そう言い終えると川原は暫し黙っていたが、おもむろに言った。

「昔話をする、尽きないものだ。もし貴殿がよければ、咸臨丸でアメリカに行った時の事など、話して進ぜよう。サンフランシスコまでの長旅、退屈凌ぎにでもなろう」

川原と話し込んでいるうちに、夜はすっかり更けていた。

デッキに出ると、土佐の岡内重俊殿と福井の瓜生震君が、夜空を仰いでいた。海援隊の事で坂本先生を偲ばれて居られるのか。煌々と耀く月に、黒い雲が立ち籠めていた。

部屋に戻ると、奴は寝ていた。

翌日目覚めると、奴はもう起きていた。

「こんな栈敷みたいな所で十日も二十日も寝るのはかなわぬ」

私は小言を言った。

「贅沢言うな。僕等は中甲板の広間に放り込まれても可笑しくはない身分だ。あのような俄（にわか）作りの棚に、十日も二十日も寝ずに済んだのだ。有り難いと思え」

「眠れなかったのか」

「君は知らぬのか」

「何をだ」

「雨だ」

「雨」

「君が言った通り、雨が降った」

「雨など降っては居らぬではないか」

「今朝、早くに止んだ。風が強くなり、俄（にわ）かに雨が降り出したのだ」

「僕をからかつて居るのか」

「君は夢の中。運のいい男だ」

「分かった事を申すな」

「そうではないか。君が木戸先生の遠縁でなければ、今ごろ叛乱兵に与して、路頭に迷って居るところだ。昨夜は、何処へ行つて居った」

「知人と話し込んで居った」

「時間は厳守だ。木戸先生の耳に入ると事だぞ。怪しげな者も居るといふから、交際には気を付ける。ランチ後、木戸先生の部屋に集合だ」

「何事だ」

「行けば分る」

奴は私を窘めると、部屋を出ようとした。

「こんなにも早く何処へ行く」

「ブレック・ファストだ」

「早くはないか」

「茶を飲むのだ。君も来るのか」

奴は少し嫌な顔をした。

食堂に行くと、夷人が何やら話をしていた。

「あの黒いものは、何だ」

「珈琲だ」

「珈琲。美味しいのか」

「止めておけ。苦くて飲めたものではない」

そう言うと、奴は茶器から茶碗に茶を注いだ。

西洋の茶というものは、何とも妙なものであった。色は赤く、口に渋い。奴は砂糖を入れて飲むものだと言って、砂糖壺を差し出した。牛の乳を入れて飲む者も居るといふ。

ふつくらとした絨毯の上で茶を飲む気分は、格別であった。こんな気分になろうとは、夢にも思わなかった。奴は笑って居った。

「何を笑って居る。無礼ではないか」

「掛け違えて居るぞ」

「何をだ」

「ボタンだ」

慌ててボタンを掛け直すと、奴は昨夜の話を蒸し返した。

「君も議論に加わったらどうだ」

「どうだと言われても、お主たちの議論にはついていけぬ」

「それでは、君は欧米に行つて何をしようというのか」

「何もない」

「何もなくて、どうする」

「どうするも、何をしたらよいか、見当もつかぬ。多少学問の真似事もしたが、ほんの二、三年前まで攘夷だ、賊軍だと騒いで居つたのだ。勘弁して呉れ。木戸先生が随行せよと言うから行くだけだ。

『かくすればかくなるものと知りながら やむにやまれぬ大和魂』だ」

「彼の地で、討ち入りをする気ではあるまいな」

「僕はお主が思っているほど愚かではない。そのような事をして、この文明開化の御時世が変わると思うて居るのか。それより、食事の席はどうかならぬものか」

「何故、そのような事を気にする。席は乗船時に渡された札で決まつて居る。替える事など、出来ぬ。野村先生の隣ならば、文句はあるまい。何故、そのような事を言う。

歳の事を気にして居るのか。伊藤先生、三十一。野村先生、三十。内海先生は幾つか」

「二十九だ」

「内海先生も伊藤先生のお陰というではないか」

「そうだ。神奈川県の大参事をして居られたが、是非とも洋行したいと申されたそうだ。皆が何故に大参事にしたと評判が悪かったから、伊藤先生に内々に話されたそうだ」

「誰が内海先生を神奈川県大参事にしたのだ。伊藤先生ではあるまい」

「大久保先生だ」

「何故、薩摩の大久保先生が長州の内海先生を神奈川県の大参事にされたのだ」

「そのような事、分からぬ。大久保先生の御信任が篤いという話だ」

「親しいのか」

「話を二、三度した事はあるが、特に親しいという事ではない」

「山田先生は、幾つになられた」

「二十八になられた」

「五歳違うというつても、山田先生とは、蝦夷地に行った仲ではないのか」

「そのような事ではない」

「それでは何故、席を替えてほしいなどと言う。野村先生と岡内先生の隣と喜んで居ったではないか。岡内先生と何かあったのか。岡内先生は坂本先生の弟分、顔見知りと言って居ったではないか。岡内殿は佐々木殿の随員をして居るの
だろう」

「そのような事ではない」

「それでは、何故」

「お主は留学生と一緒に、気楽でよいな。斜め向かいに居る方が、頻りに顔を顰めて咳をするのだ」

「何方だ」

「平賀義質殿と申される司法省の方だ。隣の席に居られる久米先生の話では、アメリカに留学されて居られたそう
だ。慶応三年に福岡藩が派遣したそうだ」

「伊藤先生に教えられた通りに食事の作法をして居るのか」

「勿論だ。伊藤先生に教わった通りにして居る」

「それでは何故、平賀殿は顔を顰められる」

「分からぬ。久米先生は、気にせぬようにと申して呉れるのだが。兎に角、席を替えて貰えぬものか。一々咳などされ
ては、食欲が落ちる」

「よいではないか。彼の地に行つてから、恥をかかぬようにせねばなるまい。それに、君が留学生と一緒になつては面倒
が起きる」

「どういう事だ」

「留学生にも困つたものだ。書生気分では外国人船員から侮りを受ける。食事を告げる銅鑼が鳴るや、一目散に食堂
へ向かつて駆け出し、テーブルに置いてあるパンや卵を我先にとり、懐に入れてしまう。君などは、手をあわせてから
食事をするからまだよいが、西洋人は感謝の祈りを捧げてから、食事を始めるのが習慣だ」

「それは、随員とて同じ事。仕方がないではないか。あのように臭いものばかりでは、外に食するものがないではないか。
お主は、あのように生臭いものを平気なのか。」

「それにだ、可笑しいと思わぬのか」

「何がだ」

奴は怪訝な顔をした。

「西洋人は、肉汁滴る獣肉を旨いというて食べるくせに、パンを神の子の肉といい、葡萄酒を神の子の血といつて飲む。まるで、次休蔵主の神通方便のようではないか。なますを食つて生き返らせようというのか」

「君の物言いは、偏見に満ちている」

「何が偏見に満ちている。獣肉を食すると四つ足になると言つて居るのではないのだ。そういうお主は、どうなんだ」

「何がだ」

「アメリカに行つて何をしようというのだ」

「僕か。僕は、アメリカで大統領の学問をしようと思つて居る。それで、・・」

「それで、どうした」

今朝の奴は、ちよつと変だつた。何時もの能書きが、続かなかつた。奴が口ごもつて居る所に、支那人のボーイがハムとエッグとパンをテーブルの上に置き、何事か奴に言つて、その場を離れて行つた。食事を告げる銅鑼の音を聞きつけた留学生数人が食堂に入つて来ると、奴は塩肉を呑み込み席を立つた。

「何処へ行く」

「岩倉大使の部屋に行く」

「何の用だ。こんな朝っぱらに」

「十一月十七日に執り行われる大嘗祭の話をする。船内の外国人を招き、大嘗祭を祝す事になった」

「大嘗祭に夷人を招いて、どうし様というのだ」

「シャンパンを挙げて祝意を表す。大使が大嘗祭の由来をスピーチし、デ・ロング公使が通訳される。夫人も娘御も同席される」

「夷人に大嘗祭の所以が分かるのか。お主は、桓武帝以来の仕来りを疎かにするのか」

「そのような事はない。君は大嘗祭の由来を知らぬのだ。部屋に戻ったら話す。よいか、ランチの後に木戸先生の部屋に集合だ」

そう言い終えると、奴は鍵を手渡し食堂を後にした。

奴が居らぬと、矢張り心許なかった。ボーイが頻りに此方の様子を窺うから、早々に引き上げる事にした。帰りがけに、山田先生の部屋に顔を見せる事にした。

「朝餉（あさげ）は済んだのか」

「済みました。先生は」

「今朝はいい。慣れたか」

「背に腹は変えられません」

「そうか。何か用か」

「奴の事で参りました」

「その事なら、伊藤さんに申せばよいではないか」

「そのような事、伊藤先生に申せませぬから、山田先生の所に来たのです」

「馬が合わぬのか」

「あの男の放言は、腹に据えかねます」

「何を言つて居るのだ」

「松陰先生の事です。野村先生など、奴と相部屋になったと聞いてから、口も聞いて貰えません。木戸先生には、何かお考えがあつての事でしょうか。野村先生から松陰先生のお話を聞こうと楽しみにして居つたのにです」

「奴は、何と申して居るのだ」

「幕府が勅許を得ずして条約調印した事は、それほど叛逆した事ではないと、松陰先生が申された」と

「どういう事だ」

「戯れ言です。松陰先生がこう申されたのも、井伊大老が紀伊新宮藩主水野土佐守忠央(ただなか)と手を切つたからだと抗弁し居ります。それで、松陰先生が生きて居られたら、賊軍に与して東北の地に行かれたと言つて居るのです」

「松陰先生が、官軍に抗したと言うのか」

「そうです。果ては、蝦夷地に渡り皇国を再建された」と

「松陰先生が、榎本軍に与したと言つて居るのか」

「そうです。ロシアに備えるため蝦夷地に行かんとされたなどは、ましな方です。ナポレオンを起こしてフレーヘッド(***オランダ語の自由)を唱えねば、腹の虫が収まらなくなれたと。蝦夷地にナポレオンを起こすとは、困つたものです。それでもフレーヘッドを唱え蝦夷地に渡られたなどは、まだ許せるのです。御存命ならば、新撰組にも与された。そのような放言が、幕臣の耳に入ったなら、とんだ物笑いです。どうかして居るのです」

山田先生は複雑な顔をされて居られた。

「奴の事は、僕から伊藤さんによく言つておく」

「お願いします。所で噂は本当なのですか。旧幕臣が木戸先生のお命を狙つて居るといふのは」

「その事か」

「本当なのですか」

「大鳥圭介の手の者だ。急遽、乗船が決まった」

「箱館の残党ですか」

「違ふ。板垣さんが日光を攻めた時の者だ」

「何故に、そのような者を」

「通詞じや」

「誰がその様な事を」

「伊藤さんに決まつて居るではないか」

「木戸先生は、そのような事を認められたのですか」

「認めるも何も無い。木戸先生の通詞にするのだ」

「それでは、誰があのような噂を」

「そのような事、知らぬ」

山田先生は困つた顔をされた。

「先生は何故に、フランスで法律の勉強をなさる気になられたのですか」

「前にも話したではないか。僕はナポレオンを崇拜して居ると」

「お話は伺つて居ります。ロシアを征伐に、命を懸けてモスクワに向かわれたと。それでは何故に、兵学を学びに行かれ

ないのですか」

「兵学も学ぶ。伊藤さんは何も話して居らぬのか」

「伊藤先生が何か」

「文明の民は自由の権を有して居ると」

「それは、毎日」

「ナポレオンを知るには、羅馬(ローマ)法を知らねばならぬのじゃ」

「羅馬？ナポレオンは、耶蘇なのですか」

「耶蘇教徒ではない」

「ナポレオンは、耶蘇教を信仰して居らぬのですか。西洋人は皆、耶蘇教を信仰して居ると聞いて居りますが。それは、ナポレオンは何教を信仰して居ったのですか」

「それは、一言で申す事は出来ぬ」

「山田先生は、悔しくないのですか」

「何がだ」

「馬関の大砲を戦利品よろしくフランス人に持ち去られた事です。少しは土佐藩兵を見做ってはどうか」

「泉州堺事件の事か」

「そうです」

「フランス人を殺害して、どうし様というのだ」

「長州藩士の気概を見せ付けてやるのです」

「伊藤さんが長州藩士の気概を見せ付けてやったではないか。日本の武士の面目が立つよう、事後を取り仕切ったのを知らぬ訳ではあるまい。土佐藩兵隊長以下十一名が、腹を十文字に掻っ切り、隊長の箕浦猪之吉などは検分に来たフランス軍艦艦長の眼の前で己が五臓六腑を取り出し眼前に並べ、艦長に投げつけたのだ。それでも、気が晴れぬのか」

「フランス人は耶蘇教を以て、我が神州を蹂躪しようとしたのです」

「まだ、鬱憤をはらす気で居るのか」

「首を刎ねられても構いませぬ。ただ、十字架に釘付けにされるのは御免蒙ります。一層の事、首を斬られ、曝し者にでもなった方が、清々するといふものです。鳥の餌食になつても、構わぬ位です。夷人に神州の覚悟の程を見せてやるのです」

「馬鹿な事を申すな」

「だとしたら、山田先生はどうされます」

「裁判に掛ける」

「また、山田先生までもが、そのような事を申される。何故に、そのように涼しい顔をされるのですか」

「今はそのような時ではない。君も一からの勉強だ。幕臣から侮りを受けぬよう、そのような馬鹿な考えは持つな」

「御安心下さい。そのような馬鹿ではありません」

山田先生は安堵の表情を浮かべ、机に向かわれた。

出帆時の喧噪が嘘のように、船内は静かであった。昨夜、見かけた夷人の姿は、何処にもなかった。

想えば、幕府の専横が事の発端ではなかったのか。嘉永六年、ペリーが四艘の軍艦を率い、幕府に開国を迫る。翌

年、ペリーが再来するや、幕府は日米和親条約を結び、下田箱館の二港を開いてしまった。更に安政五年、井伊直弼が大老となるや、幕府は朝廷の勅許を得ずして日米通商修好条約を締結したのみならず、英仏蘭露にまで交易を許したのだ。

幕府の専横に御心を痛められた孝明帝が、水戸藩へ攘夷の密勅を下されるや、井伊直弼は斉昭公慶篤殿父子を始とする尊皇攘夷派の弾圧に乗り出し、その弾圧の嵐は青蓮宮・鷹司政通卿輔熙卿父子・近衛忠熙(ただひろ)卿・三条実万卿と官家公卿の方々にまで及んだのだ。

安政の大獄で極刑に処せられた松陰先生を始め鶴飼吉左衛門・幸吉父子、日下部伊三次殿、橋本左内殿、梅田雲浜殿の御無念を晴らすべく、八年の歳月を経て、倒幕の密勅が薩長両藩に下されたのではなかったのか。

懐に抱きし家宝の密詔の写しを握り締めた。徳川家、政権を専横し朝廷を蔑ろにする事、二百六十有余年。浅草本願寺に集結し彰義隊は上野山内に籠もり官軍を討たんと試み、仙台米沢両藩は輪王寺宮を戴いて抵抗した。錦旗に背きし会津藩主・松平容保は奥羽諸藩と同盟を結び官軍に抗するも、会津若松城は土佐の板垣先生率いる官軍に落城。飯盛山に在りし白虎隊は自刃して果てるも、前桑名藩主松平定敬、幕臣大鳥圭介、新撰組土方歳三らは会津若松城をぬけ、なおも官軍に抵抗せんと仙台より榎本武揚率いる軍艦にて、箱館の五稜郭に立て籠もりし者たち。

『天の將に大任を是の人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞せしめ、其の皮膚を餓えしめ、其の身を空乏にし、行其の為す所を払乱す』

松陰先生下田踏海(とうかい)に連座された象山先生が、獄にて一日一回必ず暗誦せし御言葉。壁板一枚隔てて居られた松陰先生も、自らの励ましにされた。私も最北極寒の地にて、萎える心を何度、励まされた事か。

玉は磨かれ連城の玉となり、鋼鉄もきたえられて干将となる。艱難辛苦に耐えて、志は遂げるもの。松は雪の中にあっても青々としていた。

「おいでになられたのですか」

誰かの声があった。日下義雄であった。

「ノックをしたのですが、御返事がなかったものですから。お相手は、何処へ」

「大使の部屋へ行つた」

「そうですか。宜しいですか」

「何をだ」

「お話しても宜しいでしょうか」

私は気のない返事を繰り返したが、日下は諦めなかった。

「野村先生も事なきを得ました。井上先生が、山口の動乱からお連れ出しにならなければ、此度の洋行の事もなかったのです」

相変わらず、嫌な事を言う男だ。日下義雄は、井上先生が明治四年七月、伊藤先生の大阪造幣寮頭転任と入れ替わりに民部大輔(たいふ)となり東京に転任して来た時、大阪から連れて来た男であった。

「小生は、井上先生にお世話になりました」

「知つて居る」

「私がしつこく留学をお願するものですから、癩癩を起こされましたが、井上先生はああ見えても中々の人情家です。東京では、世間を憚つて居りましたが、ここでは何も隠し立てする事はありません。春輔聞多御同様の御付き合

いをさせて頂きたく参りました」

「奴と付き合つて居ればよいではないか」

日下は残念そうな顔をした。

「伊藤副使の随員の方にして、そうなのですか」

「僕は、井上先生を好かぬのだ」

「私の事は、伊藤先生にお確かめになられれば、分る事なのです。波多野小太郎殿は、伊藤先生の下、兵庫の県官をして居られたのですから」

日下は口惜しげな顔を見ると、部屋を後にした。奴の仲間といえ、日下のように薄気味悪い連中ばかりであった。

奴とはこの先、上手くやつていけるとは思えなかつた。あの動乱の最中、何をして居つたというのか。木戸先生も、吉川の若様の従者にさせておけばよいものを。封建の世が終わり、旧藩主の子弟と雖も、新知識を身に付け、他日に期せよとはどういう事か。

昔日の事に想いを寄せていると、時間の過ぎるのは早かつた。昼食を知らせる銅鑼が鳴り、我に返つた。

部屋を出ると、何処にも人影は見あたらなかつた。皆、船酔いで部屋で横になつて居るものかと考えている所に、大久保先生の二人の御息が廊下を駆けて来た。兄の彦熊君が勢いよく廊下を駆け抜けると、弟の伸熊君が息を切らせ歩いて来た。

「お父様は」

碁盤縞の赤いシャツを着た伸熊君は、食堂の方を指差した。

「船酔いは」

伸熊君は怪訝な顔を見ると、兄を追って駆けて行つた。子供は正直なもの。矢張り嵐などなかったのだ。奴にからかわれたという事か。

食堂に行くと、既に皆が集まっていた。平賀殿が席を立たれ、食前の儀式の講釈を始められたが、耳を貸す者などなかった。ボーイがスープを運び始めると、平賀殿は諦められたのか、席に座り、スプーンを手にした。平賀殿は、金魚を掬うようにスプーンを動かし、範を示すも、無駄な事であった。

私といえば、伊藤先生に教わつた通り、フォークとナイフでステーキを切り裂くも、筋が固くて上手くいかなかった。漸く切り裂いた肉片を口にする、パンに砂糖をまぶし呑み込んだ。後は、林檎と蜜柑を食べて食事を終えた。

テーブルの一团が食事を終え団欒を始めると、また平賀殿が立ち上がり講釈を始めた。隣に居られた久米先生は、頻りに顔を顰めて居られた。

平賀殿が講釈を終え席を離れると、語らずとも同士は集うもの。肥後の安場保和先生と薩摩の村田新八先生が、氣勢を上げられた。久米先生も話の輪に入られたが、その趣旨は少し違って居られた。

久米先生は、山口副使と同じ肥前の方で、歳も同じ三十三。大隈先生の話では、久米先生の渡航は、和漢の学問に造詣の深いものを随行させんとされた岩倉大使が鍋島閑叟殿とお話で、急遽決められたそうだ。

一同が昼飯を終えると、木戸先生の部屋には予定通り長州人が集まって来た。船内の規則を訳したものを渡され、木戸先生から日本人の名を汚す事のないようにとの訓戒を受けた。特に室内にての飲酒は、呉々も慎むように申し渡された。

散会後、有志による何時もの議論となつた。長州の留学生は、飛び切りの西洋被れの上に、無類の議論好きときて

いるから始末に負えなかった。木戸先生も顔を出されたが、議論には参加されなかった。今日の所は、伊藤先生からアメリカ最新事情を聞いて散会となった。帰り際、木戸先生が声を掛けて呉れた。

「留学生は皆、才覚のある者ばかりだ。気後れしないように。春輔にも言っておいたが、貴公の留学先は西洋諸国の視察を終えてから決める事にした。春輔や聞多の話だけで、決めるわけにいかない。僕もこの目で確かめてみたい」

木戸先生の部屋を出ると、内海先生が声を掛けて来られた。

「木戸さんは、何も話して居らぬのか」

「何をです」

「松陰先生の話だ。君は根掘り葉掘り、聞き回って居るといではないか」

「木戸先生からは、色々話を伺って居ります」

「元治甲子の事は」

「勿論、伺って居ります。真木和泉殿には、若殿の軍を待つようと諫められたそうですが、久坂先生と真木殿は御上を諫争申上げると言われて、天王寺の陣所から堺町御門へ向かわれたそうです」

内海先生は冷たい視線を投げかけられた。

「それだけか。因州の事は」

「因州。木戸先生は、因州に居られたのですか」

「そうではない。京は油小路の因州藩邸に居ったのだ」

「内海先生は、何処に居られたのですか」

「有栖川宮邸の警護をして居った。木戸さんは、因州の事は話して居らぬのだな」

「何も」

内海先生はこれを聞くと安堵して、木戸先生の部屋に戻られた。

廊下では、留学生たちが耶蘇の話をして居った。然もありませんとの事であった。奴の落ち着かぬ素振りも解せた。部屋に戻り、奴を問い質す事にした。

「お主は、大統領の学問などしてどうする」

奴は私の血相に驚いて居ったが、何時の調子で答えた。

「彼の国の精神を知るのだ」

「賢者を大統領に選び、国の政を行わせる国のか」

「君の知つてる事は、その位だろう」

「それでは、お主は何を知って居るといふのか」

「ワシントンはお国の逆境を救わんと、イギリスとの戦争で大將軍になられた。大統領に選ばれと、今度は国事に奔走された」

「それが彼の国の精神といふのか」

「よいから黙つて聞け。大統領は国から負った務めを果たすと公職を退き、ポトマック河の岸边に一農夫となり、静かに余生を送られたのだ」

「それがどうした」

「なんと偉大な事ではないか」

「他愛もない。それでお主はどうする。大將でもあるまいに」

「その仕事は西郷さんがなされた」

「それで西郷さんが、どうだと言うのだ。お主は、まさか西郷さんを大統領にしようというのではあるまいな」

「君は話を作り過ぎる。そのような事、西郷さん自身がお認めになるまい。軍人は、政治に携わらぬが、ワシントンの遺訓だ」

「それでは何故に、西郷さんは陸軍の事を引受けた。木戸先生は猛反対して居られたぞ」

「それは廃藩置県の大事を見守るためだ。使節が帰国したなら、職を辞されて故郷で余生を送られる筈だ。なにしろ、西郷さんはワシントンの大の崇拜者だから」

「それで、お主はアメリカで大統領の学問をして、どうし様というのだ」

「君はリンカーンという大統領を知って居るか」

「名前は聞いた事はある」

『『人民の人民による人民のための政治』を説かれた偉い大統領だ。今まで君には内緒にしておいたが、特別に教えてやろう』

「偉そうに何だ」

「これからは諸国の者と交わるのだ。防長人の無知は防長人の恥だ。よいから聞いておけ。大統領はケンタッキーという荒野でお生れになられた。それから、一家は馬車に家具を積んでインディアナという土地に移られた。そこに小さな丸太小屋を建てられ、幼い大統領は御父上と荒野を開墾された。困窮のなかでお育ちになられた大統領は、小学校にも行かれる事なく、読み書き教え方を母御から教わったのだ」

「それが彼の国の精神というものか」

「伊藤先生や僕など家柄のない者も、生きて行ける国にするのだ」

「リンカーンという大統領は、そんなに偉いのか」

「そういう話をして居るのではない。リンカーンを大統領にする国が、偉いという事を言つて居るのだ」

「それは大した物言いだ。しかし、大統領は殺されたというではないか。そのように偉い大統領が殺される国が偉いのか」

「大統領は大義のために殉じられたのだ。君の考えの及ぶところではない」

「お主のような物知りの西洋被れが居るから、長州は混乱するのだ」

「酷い事を言うな。僕が西洋被れなら、木戸伊藤の両先生はどうなんだ。君が攘夷と騒いでいた頃、両先生はアメリカ彦蔵とコンステチューション云々して居つたのだぞ。」

それに僕は尊王家だ。誤解せんで呉れ」

「言うて呉れる。お主のどこが尊皇家なんだ。お主の話は何だ。『人民は靈物であるから衣食を生産する』だと。『人民はそれぞれ自分の職を持つて、互いに利益を分けあい助け合つて世間を渡っていく』だ。松陰先生の教えなどと嘯（うそぶ）いた事を言うな。お主はやはり……」

「やはり何だ。君は何を疑つて居るのだ」

奴はもどかし氣に言つたが、私は口から出かけた言葉を呑み込み、話を変えた。

「陶晴賢（すえはるかた）の事だ」

「陶晴賢の何を疑つて居る」

「陶晴賢は何故に、大友晴英を迎え、大内家を相続させた」

「大内義隆の臆病は嘆かわしい限りだ。元就公は、多々良義興は楠正成の生まれ変わりと申されたものを、息子の義隆はただ調伏（ちようぶく）の大法秘法ばかり。調伏（ちようぶく）で敵を打ち負かす事が出来るなら、天台座主や園城寺法親王こそ天下人というものだ」

「それで陶晴賢（すえはるかた）が大内義隆を殺害し、反乱を起こしたというのか」

「そうだ。家臣が山口に攻め入る事など、琳聖太子以来、一度もなかった事。義隆は大寧寺で自害し、義隆を頼りし三条前左府公頼（きんより）公も打ち殺された。二条前関白尹房（これふさ）公に至っては、法泉寺から逃げ出し、神明山の覚雄寺に入るも、杉勘解由判官の家来に問答無用で首を斬られた。それもこれも、義隆が丹朱の子であったからだ」

「やはり、陶晴賢（すえはるかた）は怪しい」

「陶晴賢の何が怪しいと言うのだ」

「陶晴賢は、切支丹ではないのか」

「そのような事はない。元就公が陶入道の首を黄龍山洞雲寺に納め、石塔を立て懇ろに供養されて居られるのだ」

「陶晴賢（すえはるかた）の首は、苔深い谷のはるか彼方、谷川の流れる岩の下にあったというではないか。本当に陶晴賢（すえはるかた）の首であったのか。お主は、何か隠して居らぬか」

「何も隠してなど居らぬ。確かに入道の首であったのだ。元就公を始め隆元様元春様隆景様が確かめられて居られるのだ。間違いなどない。怪しい事などない」

「それでは聞くが、お主は何故に、昼前、キリスト降誕祭に行ったのだ」

「どうして、知って居る」

「知るも、知らぬもない。今日は西洋暦の十二月二十四日だ。西洋被れのお主たちが、何をしでかすか、分からぬとも思つて居るのか。前から何か起こらぬかと心配して居つたのだ。交際には氣を付けろと言つたのは、お主ではないか」
「あれは公務だ」

奴は平然と答えた。

「公務？公務なら、何故に僕に内緒にした」

「君に話したら、どうなるか、君が一番知つて居ろう。そういう君こそ、交際に氣を付けたらどうなんだ」

奴は抗弁に出た。

「何をだ」

「留學生が噂して居つたぞ。昨夜、外国人部屋に怪しげな男と入つて行つたと」

「虎穴に入らずんば虎子を得ずだ」

「何が虎穴に入らずんば虎子を得ずだ」

「使節団には怪しい者も乗船して居る。木戸先生に万が一の事があつては、大變だ」

「密偵を行つたと言うのか」

「そうだ。お主が、キリスト降誕祭に行つたのとは訳が違う。話を摩り替えるな。何故に、降誕祭に行つた」

「だから、申したではないか。公務だと。僕はデ・ロング公使夫人の通詞兼連絡役だ」

「降誕祭が公務だとは、どういう事だ。耶蘇教は御禁制だぞ」

「それでは聞くが、耶蘇教なくしてどのようにして彼の地で交際を行えというのだ。それでは外交もあつたものではな

い

「伊藤先生も、キリスト降誕祭に行ったのか」

奴は黙った。

「何故に黙って居る。岩倉大使大久保先生は御存知なのか。まさか木戸先生も行かれたというのではあるまいな。お主は、耶蘇教を交際のための方便と言うのか」

「僕に踏み絵を踏めと言うのか」

「お主は、船内での大嘗祭に顔を出すのか」

「勿論だ」

「また、二枚舌を使う気で居るのか」

「二枚舌などではない」

「それも公務と言うのか」

「僕は尊王家だ。そこいらの尊皇攘夷家とは訳が違う。一緒にせんでほしい」

「お主の話はいつも耶蘇教の事か共和政治の話だ。何故に、共和政治云々する」

「誤解が生じるからだ。だから彼の国にては、王は居らぬのだ」

「誤解？何のだ」

「国人を同等にするためだ。幕府のように禄を世襲させないためだ」

「それが共和政治というのか」

「支那では、堯舜が共和政治を行った。支那だけではない。我が国においてもそうだ。新井白石は『我きみにして堯舜のきみとなし、此民をして堯舜の民たらしめん』として家宣・家継両将軍に仕えた。真に将軍たれば、政治は共和政

治となり得るものだ」

「そのように、すぐ幕府の肩を持つような事を言う。お主は本当に尊皇家なのか」

「そうだ。尊王家だ」

「それでは、何故に箱館に逃げた」

「逃げたのではない」

「それでは何だというのだ」

「防長二国を五大洲中、第一の富国にするため箱館に勉強しに行ったのだ」

「それがお主の勤皇という事か」

「そうだ。勤王という事だ」

「そのような夢みたいな事を信じて居るのか」

「勿論だ」

「随分な自信じゃないか。お主は耶蘇と疑われるのを恐れて、心にもない尊皇家などと言うて居るだけではないのか」

「何を言うか。僕は君などより、よつぼど尊王家だ。僕は伊勢に七度、熊野に三度、御多賀様には月参りをして居った

のだ。御伊勢を参る者は多いが、御多賀様を参るものは少ない。山口にある多賀神社は、その昔近江より移され祀ら

れたものである事を知らぬ訳でもあるまい」

「それがどうした」

「何時も大和魂、大和魂と言って騒いで居るからだ。君は大日本（おおやまと）の意味を知って居るのか。耶麻土（やまと）と読んで山迹（やまあと）の意だ。大昔、今の大和に大きな湖があり、山上から眺めた時に、虚空見日本国（そら

みつやまとのくに」と言っていた時の名残だ。湖上に浮かぶ島々が敷島の大和の所以だ」

「誰がそのような戯けた事を言うた」

「戯けた事ではない」

「大和の何処にそのような湖がある」

「水が引けて、盆地となったのだ。その大和の地にわが君が群衆のなかから傑然と現れ、人々に五穀の育て方を教え、身に纏うものの作り方を教え、養蚕の仕方まで教えたから、民はこの傑然たる者の支配に自ずと服すようになった」
「またそのような事を。その我が君とは誰だ。耶蘇ではあるまい。御多賀様と何の関係ある。そのように夢みたい事を言うとなると、壱岐に流されるぞ。山姥とでも洗濯して居れ」

一一

翌日から空は晴れ渡り、穏やかな航海となった。デッキでは、解き放たれた鳥のように、使節一行が散歩を楽しんでいた。波間には海鳥が漂い、遙か沖合には小さな島影が見えた。デッキの片隅には、振袖に紫の袴姿の女子留学生たちが戯れていた。傍らには世話役のデ・ロング夫人が、一等書記官の福地殿と三等書記官の川路の旧幕臣と何やら話をして居った。奴も話の輪に加わっていた。おなごの後見役になったという。

政府も年端も行かぬ娘を異国に留学させようなどと、無謀な事を考える。あの黒田の開拓使からの派遣だ。彼方

流の教育を施して、何をしようというのか。初めて伊藤先生に連れられ夷人の宴会を見物に行った時もそうだった。顔から火の出る思いがした。

人力車で遣つて来たかと思えば、旦那が車夫の真似事をする。手を携えて歩いて来ると、旦那は奥方の手を取つて先導する。食膳では主人が奉公人のように客人の膳に仕えて居る。会食が一段落すると、今度は男と女が寄り添つて踊りをする。挙げ句の果てには、包容接吻して、別れを告げて帰つて行く。

あの者達が抱擁ダンスをやるようになったら、皇国もお仕舞いだ。皇国の先行きを想うと、なんとも嘆かわしい気分になった。そこに愛想笑いを浮かべて奴が寄つて来た。奴に釘を刺しておかねばなるまい。

「また西洋の善からぬ仕来りを説いていたのか」

「善からぬとは何だ。知りもせぬくせに。外国に学ぶ者の心構えを説いていたのだ」

「おなごにワシントンの話でもなかる」

「洋の東西を問わず正直は肝要だ。外国で生活するのだ。向こうの事情を知らぬでは済まされぬではないか。でも、今日は違う」

「何が違う」

「麗しの我が大八洲の由来を教えていたのだ。遙か彼方の島影を見えるに、遠く神世の時代に想いを馳せずにはいられた。おなごたちに皇祖が建国したこの国の成り立ちを教えていたのだ。異国にあつても天照大神の御心に叶うようにと」

「年端のいかぬおなごに、まさか交の道を教えていたのではあるまいな」

「蛭子を生むというのか」

「葦船に入れて流す事になつては、国家の大事ではないか。お主は何故に、おなごの事に入れ込む」

「伊勢の斎王も、宇佐八幡の禰宜も、皆おなごだ。尊王攘夷の事、おなごに始まるものだ」

「また、そのような事を」

「リンカーン大統領の母御は極貧の暮らしのなかにあつて、朝な夕なに聖書を読み聞かせ諭した。その身富貴にあつても心腐り魂迷う者は、真の貧賤に陥るものと。正しき道を歩めと。それより、出来たのか」

「何をだ」

「文だ。恋しい人への文だ」

「また、和歌か」

「皇国の嗜みというものだ。此度は月や星を頼りにする船旅だ。先ずは、

『天の海に雲の波立ち 月の船星の林に漕ぎ隠る見ゆ』

どうだ。叙情が湧いて来るであろう。次に船出の夜を詠むのだ。

『海原の道遠みかも 月読の光すくなき 夜はふけにつつ』

これなど君にびつたりだ。

そこでだ。昨夜の嵐を詠むのだ。

『海原に浮寝せむ夜は 沖つ風いたくな吹きそ 妹もあらなくに』

それで恋心を伝えるのだ」

「もうよい」

「そう申すな。恥ずかしければ、少し雄々しくするのもよい。

『ますらをの心は無しに 秋萩の恋のみにやもなづみてありなむ』

「もうよい」

「いやしも君は萩藩士。これはどうだ。

『恋しくは形見にせよと わが背子が植ゑし秋萩 花咲きにけり』

「人の事はよい。それより、お主の連添いは、どうして居るのだ」

「東京に居る」

「里に戻さなかつたのか」

「我等の恋は一途だ。隅田川の都鳥を見に、船に乗せて来たのだ」

「また、そのような事を。隅田川に都鳥など見た事ないぞ。鴨なら居るが。怪しいものだ」

「それより、君の和歌だ」

「よいと言って居るのだ」

「何故、そのように頑なになる。岩倉公もおっしゃられたではないか。将来ある身、和歌の修養を疎かにしないように」と

「お主は、そのように歌ばかり詠んで居ったから、呑気な事が言えるのだ。よいか。世界の列強は、虎視眈々と皇国を窺って居るのだ。高杉先生は、上海に渡られ、清国を我が物にせんとする英仏をこの眼で見て来られた。お主は世界の大勢というものを知らねばならぬのだ。

よいか。ロシアは満州支那を窺い、イギリスは印度を奪い、清国に続き朝鮮台湾を窺い、フランスと謀り我が蝦夷唐太(からふと)を奪わんとして居るのだ。アメリカも油断はならぬ。

油断して居ると何時の日にか、皇国も伊西班牙（イスパニア）の呂宋（ルソン）、和蘭（オランダ）の爪哇（ジャワ）、英吉利（イギリス）の斉狼（セイロン）の如きものになるやもしれぬのだ」

「かかる世であるから、国典を学び、至誠を貫き通すのだ。ますらをの心で」

「もうよい。浮世離れをして居れ。おなごが呼んで居るぞ」

何が益荒男（ますらお）の心でだ。軟弱者が何故に大きな顔をする。僕がお馬に乗って、行進して来たとても思っているのか。

奴が去ると、後ろで様子を窺っていた日下義雄が近づいて来た。

「あの娘は、山川咲子と申して会津藩家老の娘です。御存知の事と存じますが、此度は開拓使からの御派遣。咲子の右に居ります二人は、吉益亮、上田悌と申しまして、歳は共に十六です。吉益の父は旧幕臣で外務大録をして居る者で、上田の父は新潟県士族で外務中録をして居ります。左に居ります永井繁は十一、津田梅は九つです。

咲子も十二にして、母上が名を捨松と改めての旅立ちです。父上の尚江殿は御維新前に世を去られました。兄上は健次郎と申されまして、昨年、正院よりの命により米国はニュージャージという所で留学して居ります。兄上の留学も、偏に黒田先生の御尽力の御陰です。黒田先生は、本当に男気のあるお方です。官軍に勇猛に戦いし会津藩と庄内藩の有為の者から選ばれたのです。捨松も母上と若松城に籠城せしも、此度の洋行の事は、皇后様の拜謁を賜つての大切なお役目です。真に有難い事です」

私は相手にしなかつたが、日下は長州人に取り入れようと必死であつた。

「何をお話してましたか。万葉のお話しをして居られたのではありませんか。宜しければ、ひとつお話しして頂けませんでしょうか。お忙しいのですか」

「会津の者に話す話ではない。平野国臣先生の事を論じて居ったのだ」

日下は驚いた顔をした。

「平野先生を存じて居るか」

「福岡藩の方では」

「そうだ。『我胸の燃ゆる思にくらぶれば 煙はうすし桜島山』。平野先生が、薩摩は伊集院にて尊皇攘夷の想いを詠まれたものだ。『神武必勝論』をも著わされたお方だ」

日下は口を噤むんだ。

「平野先生は、三条実美卿と我が長州藩と今楠公と呼ばれた筑後国久留米の神官・真木保臣殿と図り、先帝による神武天皇陵御参拝の事を行わんと大和行幸の策を推し進められたのだ。大和行幸の策はならずも、大和天誅組の挙兵に呼応され、文久三年十月但馬国生野で義挙を起こされたのだ。義挙に敗れ京都六角の獄に投ぜられ、元治元年七月我が藩が禁門堺町御門の事を起こすと、平野先生は獄中の同志三十二人と共に斬に処せられたのだ」

海は蒼く、輝いていた。

「そういう事ですか」

日下は残念そうな顔をした。

「長い船旅の事、また機会もございましょう。その時は宜しく御願ひ致します」

日下はそう言うと、中甲板に降りて行った。

甲板は散策する留学生で溢れていたが、話し相手は何処にも見当たらなかった。色々と思案するも、話し相手は結局、川原しか思い浮かばなかった。

川原の部屋を訪れると、川原は歓待して呉れた。

「よく来られた。幕臣相手の与太話。内心、案じて居ったのだ。どういう心持ちで参られた」

「皇国の先行きを案じての事です」

「それはそれは」

川原は驚いて見せた。

「その様な大それたものではありません。詰まらぬ話です」

「まあ、謙遜なさるな。拙者も話し相手が居らず、退屈して居ったところだ。而(し)て、どういう話かな」

川原は私に席を勧めて言った。

「私と同室の者の話です」

「貴殿の相方がどうされた」

「大統領の学問をするのだとか言つては、ワシントンがどうした、リンカーンはこうしたと色々講釈し居ります。博学をひけらかして居りますが、その実、攘夷主義者を恐れた小心者で、斬られはしまいかと案じて箱館に逃げ惑っていた奴です。メリケンにでも密航していたなら、それはそれで、その勇気を褒めてやったのですが」

「密航？」

「箱館で密航を誘われたそうです」

「誰にか」

「何処の者か明かしませんでしたが、七五三太(しめた)とか呼んで居りました。ロシアのニコライと申す僧侶に日本語を教えていた者です」

「その方は今どこに」

「メリケン船にて密航したという事しか」

「何時の事か」

「元治元年甲子（きのえね）の事と言つて居りました」

「相方は密航を何故やめた」

「お里が恋しくなつたのでしょうか。そういう奴です。国禁を犯してまでの勇氣はなかつたのです。そうした小心者によくある事です。親の事、親戚筋の事、許嫁の事など根ほり葉ほり聞き居ります。私にはお美津という十六になる許嫁がおります。此度の洋行の事で娘を不憫に思われたのでしょうか、母御が『なぜに舟に宿る旅をなさいます』との文を寄こして参りました。そんな事をうっかり口にしたものですから、奴は頼みもしない和歌の指南などし居ります」

「それは面白い御仁ではないか」

「面白い御仁などと、とんでもない。奴が言うには、おなごに決意の程を示すには、和歌の一つでも添えるぐらい氣の利いた事をせねばなるまいと。例えば、『白波の寄する渚に世をつくす 海女の子なれば宿もさだめず』などはどうかと。私を海女の子などと戯けた事を言い居ります」

「貴殿はその娘御とどうする気で居るのか。差し障りがなければ、話して呉れぬか」

「そう申されても困るのです。これから留学する身ですから」

川原がこのような事に興味を示すとは、意外であつた。

「お美津は、父の側について陰から支えて呉れた恩人の娘御です。ただ実直だけが取り柄の父に、世間を渡る術を親切に教えて呉れました。そのお陰で父も何とか御役目を勤める事が出来ました。しかし、世の中は皮肉なもので、父が

栄達を遂げると、時を同じゅうして主殿はお亡くなりになりました。それからというもの、御一家は没落の一途を辿りました。父は絶えず援助の手を差し伸べましたが、どうする事も出来ませんでした。そうした父に母御は涙ながらに、せめて娘を貰つて御家を再興して頂けぬかと申されたそうです。

何分、父も他界し、私もまだ幼少の事ゆえ、これ以上詳しい事は存じませぬ。今も郷里に居る兄が心に掛けて居ります。私も父の想いを考えますと、何とか致したい事は山々ですが、御一新の動乱でどうする事も出来なくなりました。母御も一日千秋の思いで私の帰郷を待ちわびて居りましたが、此度の洋行です。

こうした私の苦しい胸の内を奴にあかすと、昔の恩人は大切にされるものだと言つて居ります。待たせる身も辛いですが、待つ身も辛いものだ。すぐにその母御に手紙を書くように言い居ります。海女が嫌なら、『さ月まつ花橘の香をかげば 昔の人の袖の香ぞする』くらいの歌を添えたら心が伝わりと。誰の歌だと聞いても知らぬと言ひ居ります。西行法師くらいの歌であれば、様になるものを。余りにも得意げに指南し居りますので、近時誰の歌が秀作かと聞いてやりました。すると、三条公の御父上・実万（さねつむ）公のものだと答え居りました。どの歌かと問えば、二、三首あげ居りました」

「どのような御歌か」

「『契り置きて松の十かへりいくかへり 花さく世にもあはむとすらむ』」

「ほかには、どのような御歌を」

「『天の戸のあくるひかりを待ちつゝや 田づらのいほに鳥のなくらむ』」

それからもう一首。

『天地とともにつきせぬきみが代は 神代のまゝのちぎりなりけり』」

「流石に三条実万卿。今道真と称されただけあって、本当によき御歌だ」

「そうでしょうか。畏れ多い事ではありますが、私には何処が秀歌なのか分かりません」

「御相方は何と申されて居られるのか」

「君には、分からぬのかと言ひ居ります」

「何をだ」

「遠い昔の記憶です。そのような記憶、私には御座いませぬ。それで、奴は言うのです」

「何と」

「遙か彼方の記憶を辿れば、蘇る筈だと。そのように言われれば言われるほど、御歌が陳腐なものに思えて来ました。鼻眞目ではないかと言えば、その様な事はない、恩知らずと言ひ居ります」

「恩知らずとは、どういう事か」

「これも遠い遠い昔に恩恵を施して呉れた者の事だと。今となつては、その者の声も詞も届かぬが、朝夕の食物から衣服住居に始まり、鳥や獣は言うまでもなく、草木金石に至るまで、人間の用に立つ物すべてが、その者の大恩ではないかと言ひます。何でも高松藩儒青葉士弘とかいう者の教えだとか」

「よき御仁ではないか」

「そうでしょうか。訳の分らぬ藩儒の話など、宜しいのです。それより本当なのでしょう。その昔、支那で日本を東夷と呼んだというのは」

「本当だ。支那が日本を蔑んでそう呼んだのではない。夷の字は、大・弓に従うの意。敬意を込めて、そう呼んだのだ」
「本当ならよいのです。それなど、まだよい方です。奴は、妙な事を言ひ居ります。頼朝の覇府を称賛する類の事です」

「それが妙な事か」

「どういう事でしょうか」

「白河鳥羽帝の御代の頃から院政が始まると、古の政治が衰えたのではないか」

「だから此度、西国人が王政復古を果したのではありませぬか。我が藩主毛利家では、正月元旦の夜も明けぬうちから、幕府追討の間答が交わされた御家柄なのです」

「そういう話ではないのだ。後白河院の世の兵乱を鎮めたのは誰だ。頼朝公、伊豆蛭ヶ島に起こるや、板東八平氏その麾下に入り、乱世を鎮めたのではないか」

「そういうお話なれば、それでよいのです。奴の話は、それだけではないのです。承久の事なのです。奴は北条の善政をみよと称賛し居るのです。北条の何処が善政なのでしょううか」

「貴殿は存じて居らぬかも知れぬが、北条氏は西国地頭に不法な課税を禁じていたのだ。北条氏は心得て居ったのだ」

「北条は何を心得て居ったと申されるのですか」

「従四位下までの官位を受け、過分の振舞いはしなかったのだ。政道に専念して仏神を敬し、万民を憐れんで慈しんだ。それで、人々は吹く風が草木をなびかすように従ったのだ」

「それでは、あの承久の事は」

「北条氏は心得て居ったのだ。泰時は出陣の馬を引き戻し、義時に申し聞いて居るのだ。もし鳳輦を先頭に、錦の御旗をうちたてられて、院御みずからお出ましになられたら、如何に対処しましょうかと」

「それで義時は、どうしたと申されたのですか。義時は兜を脱ぎ、弓を切って、ひたすら恐懼の心をあらわして、身をおまかせ申しあげよと言ったのではありませぬか。それが、北条の善政というものなのではないか」

「海舟殿も同じ事を申されて居った」

「勝先生が」

「承久の時、泰時は明恵上人に申された。恐れ多い事だが、民百姓の事を思うと、已むなしと。貴殿もただ闇雲に皇威が衰えたと幕府を罵るのは止したほうがよい。東国には西国の者には計り知れぬ事があるのだ」

「どういう事でしようか。そもそも皇威が衰え南北の御争いになられたのも、北条が姦計を巡らしての事。後嵯峨院の御遺勅を反古にし、御在位を十年を限りとし交替するなどという事を勝手に決めたのです。

後嵯峨院の御遺命は、一の御子であられる後深草院御即位後は、二の御子であられる龜山院の御子孫が累代断絶せず御治世を続けられる事。その代り、後深草院の御血筋が、長講堂領百八十か所を御領される事にされたのではないですか。

龜山院の御孫様であらせられる後醍醐帝の御怒りも御尤な事。北条などの下の者が天下の位を定めたる事は、神武帝始まつて以来なかつた事なのです。百歩譲つて、持明院統の御在位間は、御治世と長講堂領の両方を手にされて居られるのですから、せめて長講堂領は大覚寺統に渡されるのが筋というものではありませんか」

「それは政を知らぬ者の申す事。御在位を十年限りに交替する事に至つたのは、後深草院の御子であられる伏見院がおつしやられた事」

「川原殿は、後嵯峨院の御遺勅が反古にされたのは、北条の姦計ではないと申されるのですか」

「そうだ。後深草院の御子孫が御即位されたのは、天下のため」

「天下のため」

「貴殿は、浅原為頼を存じて居るのか」

「浅原為頼？存じませぬが。何者ですか」

「甲斐源氏小笠原氏の一族だ。それでは、三条宰相中将実盛の事は」

「浅学の私には、知る由もない事です。三条家の方が何を」

「浅原為頼と謀り、持明院統の伏見天皇を亡き者にせんとしたのだ」

「三条家の方が、そのような事を」

「黒幕は亀山上皇。亀山院の御子孫の御在位が続けば、三条実盛のように御治世の威勢をもつて諸国の武家を操らんとする者が起こるのだ。それで天下のため、後深草院の御子であられる伏見天皇が御即位されたのだ」

「そのような事があるものなのでしょうか。信じられませぬ」

「朝廷では蔭位の制以来、徳のないものが高官に昇り、驕り昂るようになったのだ。そのような者が、天照大神や天兒屋根命の怒りにふれぬ訳がない。天朝に仕える者は、肝に銘じねばならぬ事だ。古の昔、磐余彦尊（いわれひこのみこと）こと後の神武天皇が、東征されたのも、塩土老翁（しおつちのおじ）から東方に青山が四方にめぐる美しい国があるとお話をお聞きになり、国家統治（あまつひつぎ）の大業をひろめるために行われた事ではなかったのではないのか」

「川原殿のおっしゃられる通りです。日向を出られた磐余彦尊は、宇佐を経て筑紫国の岡水門に、そこから進路を東に取られ安芸国の埃宮（えのみや）に入られました。翌年には、吉備国に移られ、三年の歳月を経て、波速国（なみは）やのくに）に入られたのです。皇軍は川を溯って河内の草香邑（くさかむら）の青雲の白肩津に至り、更に竜田に向かわれたのですが、その路は狭く、引き返されたのです。磐余彦尊（いわれひこのみこと）は、東の方の生駒山を越えて再度内国に向かわれようとされたのですが、そこでそれを阻止せんとした長髓彦（ながすねひこ）と戦になるのです。磐

余彦尊（いわれひこのみこと）は、まつらわぬ者たちを討伐に東征されたのです。磐余彦尊の兄上の五瀬命（いつせのみこと）は、孔舎衛坂（くさえのさか）で長髓彦軍の流れ矢を受け命を落されて居られるのです」

「その様な事は申して居らぬ」

川原は少し不機嫌な顔をした。

「心得て居ります。国家統治（あまつひつぎ）の大業をひろめるために大和に入られた経緯です。磐余彦尊は、天照大神様が遣わされた頭八咫鳥（やたのからす）の案内で、険しい山道を越え大和に入られたのです。日向を出られて六年、畝傍山（うねびやま）の東南の檜原の地に山林を切り開き、宮を建てられ皇位に就かれたのです」

「拙者が話したい事は、そのような事ではないが、貴殿がその話に終始するならば、聞こう。磐余彦尊（いわれひこのみこと）が何故、熊野に回り大和に入ったのだ。日の神の綾威（あやおどし）を背にして、その光に照らされた影をふみながら敵に向かう事を、天の道に背いた事と考えたからではないのか」

「確かに、おっしゃられる通りです。日の神の御子孫であられる磐余彦尊が、日に向かつて賊を討つことを恥じられたのです。磐余彦尊は、天神の神々の祭祀を行われ、賊に向かわれたのです」

「それでは、もう一つ聞こう。何故、熊野での進軍はうまく行かなかったのだ」

「暴風が吹き荒れ、皇軍の行く手を阻んだからです」

「そうだ。磐余彦尊の兄の稲飯命（いなひのみこと）は、『わが祖先は天神、母は海神であるのに、なぜ陸でも海でも進軍を阻まれねばならんのか』と嘆かれた。また、もう一人の兄の三毛入野命も『我が母と叔母は二人とも海神だ。なのに何故、我々が波によって進軍を阻まれねばならんのか』と。磐余彦尊に至っては、皇子の手研耳命（てぎしみみのみこと）と軍を率いて丹敷戸畔（にしきとべ）という女酋を誅殺したために、神は毒気を吐き皇軍を病み伏せさせてし

まったのではないのか」

「川原殿は、何を申されたいのですか。磐余彦尊は巢や穴に住むまつらわぬ土蜘蛛(つちくも)を誅戮されたのです」「如何にも。層富県(そほのあがた)の波多丘岬には新城戸畔(にいきどべ)という者が、また和珥の坂下には居勢祝という者がおり、臍見長柄(ほそみのながら)の丘岬には、猪祝(いのほふり)という者がいた」

「その者たちが、どうだと申されるのですか。その者たちは、武力をたのんで皇軍に帰順しなかつたのです」「拙者が申したい事は、そのような事ではないのだ」

川原はもどかしげな顔をした。

「それでは、どの様な事を申されたいのですか」

「拙者が申したい事は、その先の話だ。磐余彦尊が大和に入られてから、吉野の地に軽装兵を率いて何故、巡幸されたかだ。その地にては、井戸の中から光りがやき尻尾のある国神の井光(いひか)と申す方が出て来られたのだ。そこからすこし進むと、また尻尾のはえた人が磐石(いわ)を押しわけてあらわれ、『私は磐排別(いわおしわけ)の子でございます』と名乗られたのだ。また、川に沿って西に行くと、梁を作つて魚をとっている人があつたのだ」

「それが、どうしたと申されるのですか。川原殿は、何をおっしゃりたいのですか。私など政に携わるには、まだ学が足りないとおっしゃりたいのですか」

「そういう難しい話をして居るのではない。今は顧みられなくなった習俗が、古の昔にはあつたという事だ」

「どういう事でしょうか。それと皇国と如何なる関係があると申されるのですか」

「推古天皇亡き世において、人心が乱れ、日照りが続いた。皇極天皇は明日香は南淵の川上におでましになり、跪いて、四方を拝して天を仰いでお祈りになられると、雷が鳴つて五日も大雨が降り続いたのだ。それまでは、牛馬を殺し

諸社の神々に供えて祈つて居つたのだ。蘇我蝦夷は、僧に『大雲経』を読ませ、自ら香をたいて発願したが、わずかに雨が降っただけだった」

「それは、逆臣の悪しき心が招いた事。蘇我入鹿は、大王に代わらんとした者なのです。中大兄皇子（なかのおおえのおうじ）と中臣鎌足（なかとみのかまたり）公の御決断なくば、大化の大変革はなかったのです」

「そのような大げさな話をして居るのではないのだ」

「それでは、どの様なお話なのですか」

「蘇我であろうとも、中臣であろうとも、藤原であろうとも、政を行おうとする者が肝に銘じておく事だ。貴殿にも分かるように話せば、天空にあるもので日月より明るいものはない。為政者たる者は常に天を畏れて、日月の光を仰いでも、己の心の汚さゆえにその心に俗する事が出来ぬのではないかと思うぐらいの謙虚さがなければならぬという事だ。『吾が児この宝鏡を視る事、まさに吾を視るがごとくすべし』と。天照大神の御心に背き、心に一物を持つ者が集うと、たちまち国難に至る。そうなつては、我が国がいかに神国であつても、神風の吹きようがないではないか。

朝夕に長田狭田の稲を食せるは、皇恩の御陰。昼夜に真名井生井栄井の水を飲めるのは、神恩のかたじけなさ。我が国が皇国たる所以は、皇祖天照大神の誓いが常に世を照らし、君臣の道を厳然と守りたればこそだ。

近頃、薩長の下からぬ噂が聞こえて来る。薩長新政府に驕りはないのか。負け惜しみで言うて居るのではないのだ」

これが年の功というものか。川原殿の話には、重みがあつた。長州の西洋被れの留学生の話とは、訳が違つた。幕臣にして、皇国の先行きを案ずる方なれば、蒸気船にての長旅、先人の話に耳を傾けるのも悪くはなかつた。

翌日も川原の部屋を訪ね、川原の若かれし頃の話を拝聴することにした。

「貴殿は、幾つになられた」

「二十三になります」

「何時のお生まれか」

「嘉永元年戊申の生まれです」

「そうか。嘉永元年戊申のお生まれか。あの頃、生れた者が、もうこのような歳になるものか。つい昨日の事のように思われるのだが。月日は、あつという間に過ぎて行くものだな。嘉永、安政、万延、文久、元治、慶応。そして今は、明治か。」

人間五十年 下天のうちを比ぶれば」

川原は呟いた。

「川原殿は、御幾つになられたのですか」

「拙者か。拙者は天保四年生れの三十九になる。確か、木戸殿と同じ歳ではないか」

「そうです。木戸先生も天保四年生れの三十九です」

「慶喜公が三十五、岩倉殿は四十七。西郷が四十五に大久保が四十二か。三条殿は三十五か」

「松陰先生が生きて居られたなら、四十二かと。高杉先生は三十三、久坂先生は、伊藤先生の一つ上で三十二になられて居られます」

「龍馬は三十六か。皆、歳を取るのも無理からぬ事だ」

「土佐の佐々木先生は四十二、東久世通禧卿は三十九、確か肥後の安場先生が三十七ではなかったかと」

「一等書記官の田辺殿が四十一。同じく福地が三十一、何(か)が三十二。肥田殿も、四十二になられたか」

「肥田殿？」

「使節で会計をされて居られる方だ。存じないのか。肥田殿は江川太郎左衛門殿の高弟で、長崎の海軍伝習所では蒸気機関を学ばれた。咸臨丸でアメリカに行った時は、機関方を勤められた。元治元年、神戸軍艦操練所の教授頭取となられ、一時、監督もされた。」

確か井上聞多殿も江川太郎左衛門殿に兵学を学ばれたと聞いて居るが」

「そうのですか」

私は気のない返事をした。

「肥田殿も四十二か。拙者が安政七年咸臨丸で渡米したのは、二十八の時。もう十一年前の事か。海舟殿は文政六年のお生まれだから、三十八歳の時か。」

海舟殿からは、天保、弘化、嘉永、安政と海の向うから押し寄せてくる時代の様を聞くも、事の次第が分かるには、十年の歳月を要した。拙者も今の貴殿よりは少しは齢を重ね、分別はあつた積りで居つたが、何せ未曾有の出来事ばかり。分別などというものには、程遠かつた。若気の至りというか、今思えば赤面する事ばかりだ。

それにしても、あの時の暴風雨は凄かつた。船体が三七、八度も傾いたというから、皆、たちまち大狼狽。諸藩から従僕名義で乗組んだ者は、航海の訓練など経験ないから、皆へドへドだ。

慶長年間には帆船（はんせん）にて太平洋を渡つて居るのだ。咸臨丸は小艦といえど洋艦。西洋の機器もある。気楽な気持ちで咸臨丸に乗り込んだが、冬の海は想像以上であつた。拙者も何時、海の藻屑となるか気が気ではなかつた。

所が福沢は平気な顔をして居る。『牢屋に入って毎日毎夜大地震に遭つていると思えばいいじゃないか』と。あの頃は福沢も悄（しお）らしかつた。甲斐甲斐しく船酔いの木村喜毅殿の介抱をして居つた。

福沢と初めて会ったのは、安政五年秋、桂川先生の御家だ。福沢が江戸に来たのは、中津藩の命で、筑地鉄砲洲の中屋敷で蘭学を教える事になったからだ。福沢は拙者より三歳下だが、大坂の敵塾の塾頭だけあって、蘭学は我等に引けを取らなかつた。

それから一年もしない内に、アメリカに行くと言ひ出した。どういう事だと聞くと、今度、幕府が通商条約の批准にアメリカに行くから随行するという。拙者も内々に話を進めて居つたから、驚いた。陪臣の福沢には、幕府にその様な知り合いなど居らぬと思つて居つた。どういふ事だと聞けば、桂川先生の紹介状を持つて、軍艦奉行の木村喜毅殿の御家を訪ねたという」

「それで、どうなつたのですか」

「どうもこうもない。桂川先生の奥様は、木村摂津守の妹御。話は付いて居つた」

「桂川先生とは、何方ですか」

「御典医だ。桂川家は代々の蘭医の名門。といつても、桂川家には、医学を志したものだけが集まつたのではない。柳河春三、神田孝平、箕作秋坪、成島柳北といった蘭学を志す俊英も集まつた。宇都宮三郎などは、何時も丸に十の大きな五つ紋の黒の羽織を着て、皆の前で化学の実験をしてみせた。藩主の尾張侯はもとより、紀州侯からも拝領があり、羽振りが良かった。

甫周先生も世間から、道楽坊主と呼ばれて居つた。御家は築地の仲通にあり、御門跡さまの側で、朝に晩に鐘の音が聞こえて来る。福沢とは、夜を徹して蘭書の翻訳をし、鐘の音で目覚めたものだ。

貴殿は江戸は初めてだから、存じないかもしれないが、築地本願寺は、西本願寺の別院で、今ある筑地別院が建てられる前には、浅草御門内に浅草御堂というものがあつた。巷間この御堂を海辺坊舎と称して、坊地を浜町と言つて居

つた。明暦の大火で御堂が筑地に移ると、別院の境外持地宮沢町の替地として、橘町が与えられた。橘町という町名は、浅草御堂の門前に立花を売る家が多くあったからだ。浅草御堂の跡は松平越前守光通殿の屋敷となり、門跡の井は筑地に移された。

万治元年、御堂が落成するも、それは仮の建物。延宝二年、寂如宗主が幕府に紫宸殿を見做って建造する事を請われ、幕府の許すところとなった。紫宸殿型の本堂は、延宝七年に落成、土蔵には白土で壁を塗って本堂を囲った。その後、天保七年に梵鐘を鑄立し、鐘堂を落成させたのだ」

「そういう謂れなのですか。私も東京に出てきてから、随分、築地界隈を奔走しました。我が藩は皇居御警衛の任に当たって居りましたが、山口に異変が起き、藩兵を帰藩させました。山口での乱は事なきを得ましたが、その後が大変でした。藩兵は翌年、東京に帰還しましたが、なかなか宿舎が決まりません。私も岡山藩徳島藩高知藩に話を付けて奔走しましたが、引受け手はなく、増上寺か本願寺か何れかにという事になりました。流石に増上寺にてはという事で、本願寺が山口藩兵の屯所となりました」

「増上寺にてはとは、どういう事かな。あの赤門の徳川將軍家菩提寺ゆえの事か」

「勿論です。我が藩は、尊皇倒幕の先鋒の任に当たった藩なのです。何故に増上寺などを我が藩兵の屯所に出来ましようか」

「毛利家御家臣にして、その口上。困ったものだ。増上寺は家康公のお馬も立ち往生する程のお寺なのだ。」

抑の話、江戸千代田城にても、皇国鎮護を専として、天朝守護の為め將軍家の居城として定められたものなのだ」
「また御冗談を」

「冗談などではない。世に全く知られて居らぬ事であるが、大名御参勤の儀も天朝守護の御軍役なのだ。」

『わが庵は松原つづき海近く富士の高根を軒端にぞみる』

これは関東管領扇谷上杉定正の執事・太田道灌が京にて、天子様が武州の景色をお尋ねになられた時、答え奉った和歌だ。

今では江戸城を築きし頃とすっかり景色も変わり、松原つづきし海近くにて、富士の高嶺を臨み見るといふ事もなくなつてしまつた。太田道灌ありし頃、城門は三十六もあつたというのだから

「隅田川に都鳥は見られるものなのでしょうか」

「道灌も、見掛ける事はなかつた。川原に宿あれども我まだ知らぬと天子様に申上げたそうだ。今時の御時世、都鳥など何処を捜しても見られるものではない。捜しても無駄というものだ。貴殿は、別の物を捜した方が良いのではないか」

「どういう事でしょう」

「貴殿は、梶森神社に参つた事はあるか。太田道灌、雨乞祈願に靈験のあつた神社だ」

「ありませぬ」

「それでは、上野徳大寺に参つた事は」

「何の神様がお祀りされて居るのですか」

「摩利支天だ」

「摩利支天」

「そうだ。弓矢をもち猪に乗り悪魔怨敵を破邪する武勇神の摩利支天だ。古来より、大名武士力士の信仰を集めて居る。貴殿は摩利支天に興味はないのか」

「ありません」

「陽岳寺には」

「ありません。今は廃仏毀釈の時なのです」

「陽岳寺には、天明の伏見義民の墓があるのではないのか」

川原は不思議そうな顔をした。

「それにしても市ヶ谷八幡の梵鐘の事は、残念な事をした」

「梵鐘が、どうしたと申されるのですか」

「時報に用いられていた梵鐘が、行方が知れぬのだ。幕末の混乱とはいえ、由緒ある物。一説には、神仏判然の令に依つて取り壊されたと言われるのだが、そのような事で消失する代物ではないのだ。何しろ家康公江戸千代田城入城の際、太田道灌由来の陣鐘として、市ヶ谷八幡神社に寄贈された物なのだから。

それにしても昔話をして居ると、ほんの数年前の事が、遙か昔の事のように思われるから不思議だ。若さが、羨ましい歳となったという事か」

「若さが、羨ましいい？」

「そうだ。若さが、羨ましいい」

「そうでしょうか」

「歳を重ねると、色々な事が見えて来る。我等も若かった。我等が蘭学を止め、英学を始めたのも、使節をアメリカに派遣する事になったからだ。幕府は通商条約を締結し、世界に乗り出さんとしたのだ。

先ずは安政四年八月、水野筑後守忠徳（みずの ちくご）のかみ たくのり（殿と岩瀬伊賀守忠震（いわせ いが）のかみ

ただなり）殿が長崎表に出向かれ、在留オランダ領事官から貿易筋の取調べを行われた。この時、江戸にて岩瀬伊賀守を香港に差し遣わす儀が起きたのだ」

「香港に」

「如何にも」

「香港は、イギリス属領の地」

「如何にも。各国と通商を始めるに当り、外国の入船を待ち受けるだけでは、貿易の利益は薄い。実地経験の為め、香港に岩瀬殿を差し遣わす儀が起きたのだ。国家不朽の貿易基本を定めんが為だ」

「そのような事、誰が申したのですか」

「世界の大事を知る賢明な方々だ。老中方の中にも万国の形勢事情探索方々、西洋の科学を学ぶためオランダに留學生を送る事も考えて居られた方も居られたのだが」

「何をおっしゃりたいのですか」

「幕府は西洋諸国と交際を始めるに当たり、外国の評判記を読み、渡来外国人からは諸国の情勢の聞き取りなどをして居つたのだが、その話には異同があり、各国の評判も一様ではない。そこで、直に見聞しようという事になり、取り敢えず、バタビアに留學生を遣わす事と相成つたのだ」

「爪哇（ジャワ）にですか」

「そうだ。爪哇（ジャワ）ならば蘭領。問題はないと。これには、儒役林大学頭復斎（ふくさい）殿が反対された。世界一の富国は、イギリスなればと香港視察を御老中へ上申されたのだ。もしバタビヤに差し遣わされるのであれば、香港にも立ち寄られる様にと上申された。

この上申にも異論が出された。貿易の事は、何事も蘭人の手を離れてはとも出来間敷と。香港の調査も、山海の地形風俗制度の大略ぐらいの調査は出来ても、毫毛の利を争う貿易筋の駆け引きなど精細に研究できるものではないと。オランダは二百年来の通商の国。彼を信じ申さずして、昨今条約を取り結びしイギリスにては、とても信用成り難きとの論が起きたのだ」

「御尤もな話です」

「それで江戸にては、香港取調べは見合せとなつたが、長崎にては、岩瀬殿は水野筑後守に説かれた。今日、この好機を失いては、国家の大幸を見逃す事になると」

「大幸？」

「世界は有無を融通し合つて居るのだ。早晩、日本もそうなるものだ。老中方は、世界の大勢を知るも、旧慣に固執され新たな事をなさろうとされない。岩瀬殿は、將軍家の御力添えを得て、大いなる一步を踏み出されたのだ」

「將軍家の力添え」

「そうだ。いくら岩瀬殿が能吏といつても、將軍家の御意向がなければ、通商条約の締結など行えるものではない。

江戸に戻られた岩瀬殿は、井上清直殿とともに下田より参府されたハリス殿と通商条約の交渉に入られた。交渉はハリス殿の出された通商条約案をもとに行われたが、ほぼ妥結を見た時、岩瀬殿はハリス殿に日本の蒸気船を遣わし、ワシントンにて条約書を交換する事を申し出られたのだ。安政四年十二月の事だ。これには、流石のハリス殿も驚かれた。

岩瀬殿のお考えは、こうだ。日本にて条約の仮調印を行い、一年以内にワシントンに於いて条約書を交換する。それまで国内にては、御上の勅許を得、幕府有為の人才を集め、条約書交換にアメリカに赴かせ、併せて歐洲諸国の状況

を視察させれば、大いに我が国開明の歩を進める事になるうと。

それだけではない。交易が盛んになれば、日本人にても彼の国へ居留いたす者も出てくる。日本側もアメリカに公使領事を置かねばならぬ。駐米公使には水野筑後守忠徳（みずの ちくごのかみ ただのり）殿が有力なれど、御本人はそれを望まれて居られぬ。御辞退ともなれば、岩瀬殿自らワシントンに駐在する御覚悟であられた」

「それで、咸臨丸が派遣される事になったのですか」

「咸臨丸の話が出るまでには、まだ紆余曲折があった。井伊大老が慶喜公御養君の事で岩瀬殿を退けられると、条約批准使節の任は水野筑後守忠徳（みずの ちくごのかみ ただのり）殿を始めとする永井玄蕃頭、津田半三郎殿、加藤正三郎殿の四名が当たるとなつた。

ここに到りアメリカでの公使領事の話は、断ち切れとなり、更に水野殿がロシア人殺害事件の責任を問われて外国奉行から軍艦奉行に転任されると、日本から蒸気船を遣わすという話もなくなつたのだ」

「何故に」

「日本から蒸気船を遣わす事に快く思わぬ者たちが、アメリカに使節派遣のための軍艦を頼んだのだ」

「それでは、我が国の面子が立たためではありませんか」

「如何にも。そこで水野殿が、軍艦奉行として蒸気船一艘別段で仕立てる事を申し立てられたのだ。この別船の儀には、江戸の軍艦操練所教授方始め水夫までもが反対した」

「何故にです」

「蘭人より伝習あれど、実地の修業は長崎近海並びに長崎より江戸までの航海のみ。数千里の外洋にてはと。針路も不案内だと。

江戸の軍艦操練所の教授連は、万一途中で過ちが起きれば、海軍創設の事にも影響が出るとも申された」

「情けない話です。口では上手い事を言ってますが、長崎の者に手柄を取られてはと、嫉妬したのではないですか」
川原は「尤もという顔をした。」

「それで、軍艦派遣の儀はどうなつたのですか」

「そこで、海舟殿が動かされたのだ。江戸での議論を長崎で耳にされ、おれに考えがあると江戸帰府を願い出られたのだ。安政六年正月、長崎から朝陽丸に乗り、下関に寄港し江戸に向かわれた。途中、讃岐の塩飽(しわく)島に立ち寄られた」

「塩飽(しわく)島」

「咸臨丸に乗組んだ水夫、十五名が長崎の者、残り三十五名は塩飽の水主(かこ)だ。別船の候補に挙がったのは、観光丸、朝陽丸、蟠龍丸、鵬翔丸の四隻。水野殿は、螺旋蒸気機船の観光丸朝陽丸の二隻の内、索具充分にして堅装なる朝陽丸を別船に選定された。」

とはいえ、遠洋航海、風が頼り。風良ければ直ちに米国西海岸に到り、不良ならば、サンドイッチ諸島にて薪水を補う事とした。目論見にては、百馬力の蒸気船なれば、我一時に六里走る。

江戸の経度は東経百三十九度五十二分なれば、サンドイッチ諸島まで経度は、六十四度違う。これを赤道上にての航海に換算すれば、二十六日半の航海となる。実際、アメリカ人にもサンドイッチ諸島まで二十七、八日、早きもので二十四日という事であった。サンドイッチ諸島よりアメリカまでは十四、五日。

水野殿は石炭の量を七日間昼夜焚く量とし、食糧薪水等の準備をして居った所、新たに軍艦奉行に就任された井上清直殿から、朝陽丸は乗船定員不十分ゆえ、別船は観光丸とのお話を聞かされた。

航海を考えると朝陽丸なれど、乗り損ねた者から、別船派遣中止の儀が起きては面倒だ。水野殿は、観光丸にて渡航致す事にされた」

「アメリカに航行したのは、観光丸であつたという事ですか」

「そうではない。咸臨丸だ」

「それでは、何故に」

「今度は、アメリカ側が注文を付けて来たのだ」

「どの様な」

「日本使節が乗船致す軍艦ポーハタン号の提督が、日本の別船は喜望峰回りで行くようにと申すのだ」

「何故に、そのような事を」

「冬の太平洋は天候が悪いと」

「それは、嫌がらせというものではありませんか」

「拙者もそう思ったが、観光丸は東インド諸島でオランダ人が海賊追跡に使っていた船を改造した物。とても冬の北太平洋航海に耐えるものではなかつたのだ」

「それで、咸臨丸が」

「そうだ。咸臨丸は三本マストの蒸気螺旋仕掛けの軍艦。それでも、幕府には大小の喧しい議論があつて、出帆を承諾しない」

「喧しい議論」

「別船はポーハタン号と同行するとか、しないとか。果ては、海の藻屑になるかも知れぬから、船員家族に金を払う払

わぬだとか。かかる小事が多々あつて、埒が明かぬ。

それで、海舟殿が『勝隣太郎が、自ら教育した門生を率いてアメリカへ行くのは、日本海軍の名誉である』と申され、安政七年正月十九日、御親書護衛の任を受けて、我等は日章旗を掲げ太平洋に乗り出したのだ。

本来ならば、艦長として水野忠徳殿が乗り込むのが然るべき所、木村喜毅殿が乗り込む事となった」

「何故にです」

「井伊大老は、水野忠徳殿がお嫌いなのだ。元々、大老は海軍の事によい顔をされなかつた。水野は剛気な者と」

「剛気な者」

「そうだ。井伊大老は、海軍創設など水野殿のような剛気な者に任せると、面倒が起き、行く末、皇国に災いをもたらすというのだ。井伊大老は、阿部伊勢守が始められた城門の守衛に西洋銃を用いさす事を止め、弓を飾られたお方。

事の遠因は、ペリー来航後、長崎奉行をして居られた水野殿が、欧式海軍を建設したいと阿蘭陀(オランダ)商館長に軍艦購入を申し入れた事だ。その時は、オランダ商館長がそのような事をすれば、ロシアやアメリカが本国に対して如何なる暴挙に出るか分からぬと言つて話にならなかつたが、その代わり、仕官を派遣し、日本の青年に教育を行なうという事になった。それで、幕府は長崎にオランダ人を招き、砲術を手始めとして、軍艦運行に必要な天文学、欧式算術、代数、幾何を伝習生に学ばせたのだ。

だが、やはり軍艦がなければ、訓練にならぬ。幕府は阿蘭陀(オランダ)商館長を介して、爪哇(ジャワ)にて軍艦を建造して貰う手筈にしたが、阿蘭陀(オランダ)本国も気が変わつて、軍艦二隻を本国で建造して売ると言つて来た。

その一隻が咸臨丸だ。

長崎海軍伝習所の初代総監も、水野殿が勤められる筈であつたが、初代総監に永井玄蕃頭が就任され、その後を受けて木村殿が二代目の総監になられた。それで、木村殿が使節別船の咸臨丸の艦長になられたのだ」

「艦長は、勝先生ではなかつたのですか」

「海舟殿は艦長取扱だ」

「艦長取扱」

「そうだ。水野殿が艦長であれば、海舟殿も木村殿に頭を下げ、艦長取扱になる事もなかつたのだ。

咸臨丸は、正使新見豊前守、副使村垣淡路守一行を乗せたポーハタン号に先立つ事三日前に、出航した。咸臨丸が太平洋に乗り出すと、忽ち荒波が打ち込んで来た。日本人全員船酔いだ。水夫たちは、帆をたたむのも、あげるのも十分出来ない。悪天候での訓練が十分でなかつた。乗船したアメリカ人仕官の言葉も分からなかつた」

「勝先生は、何をされたて居られたのですか」

「キャビンの中で寝て居られた」

「寝て居られた」

「海舟殿は熱病を患つて居られたのだ」

「熱病」

「海舟殿は、十日前から風邪をひかれて居られたそうだ。浦賀の出帆時には、頭に向こう鉢巻を巻いて来られた。観光丸から咸臨丸への荷物の詰替えをしていて、養病の暇もなく、乗船間もなく発熱された。

畳の上で大死するよりはましだと、奥方様に『ちよつと品川まで船を見に行く』と言つて出て来られたそうだ。熱が高くて吐血された時には、コレラにでも罹られたのではないかと心配したが、サンフランシスコに着く頃までには、すつ

かりよくなられた」

「艦長は、何をして居ったのですか」

「何も。木村殿は長崎海軍伝習所総監なるも、操船は素人」

「艦長が操船の素人とは、どういう事なのでしょう」

「幕府の役人とは、そういうものだ。長崎海軍伝習所での話だ。木村殿が海舟殿に航海の稽古がそう短くて直ぐ帰つて来るようでは宜しくない、もつと遠くまで行ったらどうだと言うから、木村殿を乗せて遠くまで行つた事があつた」

「それでどうなつたのですか」

「風が立ち波が荒くなると、木村殿がもう帰つてはと言うから、海舟殿がここはまだ天草から五、六里と申されると、木村殿は『もうよい、もうよい』と反吐を吐いて居られたとか。

とても木村殿が嵐の中、操船の指揮など出来るものではない。万事がそうだ。それで、心配になつたのさ」

「何をです」

「アメリカ人船員の乗船を頼み込んだのさ」

「咸臨丸にアメリカ人船員が乗つて居つたのですか」

「幕府も心配したのさ。日本人だけで太平洋を横断できるものかと。それでハリス殿に相談したのだ。

若手連は、今度の航海は日本人の手でやるとの意気込みであつたから、米国人乗船に大反対だ。難破船の船長だとか言つて」

「難破船の船長」

「咸臨丸に同乗されたブルック殿は、フェニモア・クーパー号という小帆船で日本近海を測量中、難破し、横浜に居ら

れたからだ」

「そのような者を乗船させて、咸臨丸は大丈夫だったのですか」

「貴殿はブルック殿を知らぬのか。福地の話では、去年の伊藤殿渡米の際にサンフランシスコにて世話になったと言つて居つたが」

「そのような話、聞いて居りませんが。何者のですか」

「アメリカ海軍切つての北太平洋航海の達人だ。このような小事で、別船派遣が取り止めの話が蒸し返されては、面白くない。アメリカ人士官一人を案内人という事で咸臨丸に乗船させる事にしたが、アメリカ人水夫も乗り込む事になった。それでも心配な木村殿は、中浜万次郎殿を乗船させたのだ」

「ジョン万次郎を」

「左様。あの嵐の中、天候以上に咸臨丸の中は險悪であつた。日本人船員は外国人を嫌つて居つた事は言うまでもないが、日本人の万次郎殿が命令を下しても、水夫たちは帆桁(ほげた)に吊るすぞと万次郎殿を脅して居つた」

「勝先生自ら教育した門下生を率いて行つたのではないのですか」

「水夫は血気盛んな者たち。万次郎殿は漂流民というても、アメリカにてアメリカ仕込みの航海術を学ばれた方。その上、江戸築地の軍艦操練所教授方となつて居られたから、長崎方の水夫は面白くない。

そういう訳で、水夫は思う様に動かない。艦長の木村殿は、海舟殿に相談しないわけには行かなくなつたのだ。ある時、海舟殿は太平洋の真中で、己はこれから帰ると木村殿に申され、水夫にバッテリーを降ろすよう命じられた」

「帰るとは、どういう事ですか。太平洋の真中で、何があつたのですか」

「幕府の役人が、水夫を使うのだ」

「それが、勝先生が帰ると申される程の事なのですか」

「出立前、海舟殿は艦長に立ち代り、乗組諸士に船中にての申し合わせを行ったのだ。『水夫を役するに公用にあらざれば慢にする事なかれ』と。」

海舟殿は申された。彼の国にては、水卒水夫に指揮官の諸用を弁じ役使用する事は、奴隷を扱うが如き恥ずべき事と。水夫の大半は、塩飽(しわく)ののの者」

「塩飽の者がどうしたと申されるのですか。瀬戸に浮かぶ小島の者なれば、海賊の末裔ではありませぬか」

「塩飽は人名(にんみょう)」

「人名」

「そうだ。秀吉が船形衆に朱印状を下し、幕府が引き継いだ。塩飽は大名小名の手によらず、年寄が自ら治める島。寛政年間には、年寄の世襲をやめ、入れ札による一代限りとした者たちだ。残りの水夫も長崎の者たち。長崎は御領なれば、御老中も手を出さぬが筋の自治の町。」

海舟殿は船中にての申し合わせを厳正にし、封建因循の風を一掃されようと言われたのだが、弊風は一夜にして一掃されるものではなかった。木村殿は、金子(きんす)で事を解決されようと言われた。

それでも、長崎での伝習は、太平洋を横断するに十分であった。あの嵐は特別なものだった。あるアメリカ船の船長が嵐の中、咸臨丸と併走して居ったと言うのだから、咸臨丸はよく走って居ったという事だ。

サンフランシスコに着いて向うの新聞紙を見たが、日本の水夫は、航海技術によく精通して居り、マストの上高く登って実に敏活に帆の上げ下げをやる。彼等は航海術を長崎の学校で学び、器械はおもにオランダとイギリスの物で、船を動かす号令はオランダ式であると書いてあった」

「随分、褒めて居るではありませんか」

「御世辞ではない。航海中、日米それぞれが測量を行い、その結果を比べていた。ある時、双方の数字に違いがあり、やり直した所、我が測量方に手落ちはなかったのだ。」

ブルック殿は、咸臨丸乗船前から、航海長の小野友五郎殿の聡明さに驚いて居られた。まさか地球の裏側に居る東洋人が、クロノメーターで時差を測定し、六分儀で月の観測を行っているなど、西洋人の誰が想像できようか。

咸臨丸はサンドイッチ諸島に立ち寄る事もなく、サンフランシスコに向かったのだ。ブルック殿も当初、咸臨丸をゆっくり航行させ、ポーハタン号の先導にて咸臨丸をサンフランシスコに導く考えであったようだが、考えを改められたようだ。

生死を共にする航海だ。飲み水の事で、アメリカ人船員が不正を働き、日本人船員と一触即発の事態となった時、ブルック殿はアメリカ人船員を航海共同の敵と見なし、銃撃にしても構わぬと申されたのだ。

サンフランシスコに入港した時、向こうの人は、咸臨丸の偉業に驚嘆して居った。沖合いに日の丸の旗章を建てた軍艦を見た時、ポーハタン号の来着と思つたようだ。アメリカ人の知るよしのない事だ。サンフランシスコの誰もがポーハタン号が使節を連れ来るものと思ひ込んで居った。それが、日本の咸臨丸であったから、その驚きは尋常なものではなかった。

木村殿はインターナショナル・ホテルの大広間に案内され、ソファーに腰を下し、大満足だ。カルフォルニア州の統領が現われるのを待ったが、なかなか現われない。ブルック殿からカルフォルニア州の統領だと紹介されても、一人の家来も居らねば、従者の行列もないのだ。西の果ての地の統領なれば、然（さ）もあらんと思つていたが、彼の国では、大統領までもがそうであった」

「大統領がですか」

「そうだ。使節一行がワシントンに赴いた時、夜に旅館の別房にて影絵劇があつた。そこに、大統領が一人の従僕も従わずに、馬車にて女人二、三人を乗せて遣つて来たという。傍にいた衆人も平然として居る。頭を下げる者もなければ、ましてや土下座をする者など無い。誰が大統領なのか分からなかつたそうだ」

「そのような者たちと、如何なる交際をせよと申されるのですか」

「真実だ」

「真実？」

「上下の隔たりなく、交際するのだ」

「袴を脱げと申されるのですか。木村殿は、袴を脱がれたのですか」

「木村殿は、袴を脱がれなかつた」

「それでは、どのような交際をされたのですか」

「向うの統領が、東西の国がカルフォルニアの地に親善関係を結び通商を開くようになった事を喜ばしく思うと申されるので、木村殿は親切な御心遣いを感じるとの言葉を申し伝え、シャンパンで乾杯をした」

「それだけでですか」

「それから、木村殿が咸臨丸の修繕を申し出ると、統領は快諾して呉れた。そうこうするうちに、使節一行を乗せたポーハタン号が入港した。異国の地で、同胞に再会できた喜びは、また格別なものだった。

ポーハタン号も難儀をしたとの事であつた。提督が申されるには、二十年来航海するも、未だ斯くの如き嵐を見た事のないとの事であつた。

アメリカでの歓迎は、我等の想像を超えたものであった。万次郎殿からアメリカの話聞いて居ったから、内心心配して居った」

「万次郎はどんな話を」

「黒人の如き浅黒き者は教会にも学校にも入れずと。それも杞憂であつた。使節一行の歓迎会がアカデミイ・オブ・ミュージック座で開かれ、米国陸海軍の高官に案内されて会場に入った。会場には、イギリス・フランス・ロシア・オランダを始とする各国の領事が礼装をこらして使節の入場を迎えて呉れた。日本使節を祝して、スピーチと乾杯が限りなく続いた。ブルック殿が上手く段取りを付けて呉れたのだ。

宴会にては、外国人の囂(かまびす)しき事、言語に尽し難かつた。村垣殿は辟易して居られた。帰路、江戸市中の鳶人足の酒盛も、かくある事であらうとおっしゃられた。

咸臨丸がよければ、パナマまで御国書運ぶ手筈になつて居つたが、使節一行は咸臨丸の修繕を待たずに、パナマへ向かわれた。咸臨丸の修繕費に関しては、日本側からアメリカ側に支払いを申し出たのだが、大統領の命で頂かない事になつて居ると言う。こちらの面目が立たぬから、向こうの役人と相談して、サンフランシスコの寡婦のために三千ドル寄付してきた」

川原は誇らしげな顔をした。

「かかる左右も分からぬ異国にて、身分低き者の方が、交際をよくするものだ。アメリカ人は、至れり尽せりの歓迎をして呉れた。日本人は風呂が好きだと言って、毎日、風呂に入れて呉れた。慣れぬ食事に魚を持ってきて呉れた。

咸臨丸の水夫達も、すっかり贅沢を覚えてしまった。余りにも交際が親密になるのも、困つたものだ。工場を見に行くと、如何わしい者が頻りに近寄ってくる。奥方をどうだと言う。これには海舟殿も困惑された。此方も此方

で、春画を持ち歩くものだから、海舟殿が裁判所に呼び出されて大騒ぎさ。そこへ行くと、身分教養の有る方の行いは違う。趣がある」

「趣？」

「旅立ちの門出に際して、拙者の親父殿は御礼かたがた村垣殿の御屋敷をお訪ねした。例なき遠き国への御遣いを蒙り、家の女子の打ちしほれたる様は、昔、唐の国に遣いを送り出す御家の様が偲ばれた。折りしも月のよく晴れた夜、村垣殿は親父殿と酒を酌み交わし、御恵のかしこさを祝われたのだ。

愚かなる身を心得て居られたという事だ。井伊大老は使節御用命に際し、日米両国間に永久の平和親交をもたらすようにと申されたのだ。

『あつまれる 国の司に わか喜美の あふせつたへて 帰るうれしさ』

新見豊前守が、彼の国のワシントン府を出立する日に詠まれたものだ」

「夷人の司に我が君の逢瀬を伝えるとは、どういう事なのでしょうか。新見豊前守は何者なのでしょうか」

「正使の新見殿は、奥の衆。將軍の左右に侍する御小姓の出だ」

「將軍」

「家慶公だ。正使新見豊前守四十歳、副使村垣淡路守四十七歳の旅立ちであった」

「村垣淡路守は、何者なのでしょうか」

「世々幕府の御庭番だ」

「御庭番。伊賀者ではありませんか」

「家康公にお供した伊賀の方達とは違う。吉宗公が紀州から菓込役としてお供した家系のお方だ」

「密偵に違いないではありませんか」

「村垣殿は御庭番の出と申しても、御祖父の淡路守定行殿は、松前奉行や勘定奉行を勤められたのだ。福地などは、村垣殿の事を俗吏と申しているが、その経験は万人に代え難いもの」

「どのような」

「嘉永年間には、松前に渡り内情を探られた。安政三年には、蝦夷地を渡り歩かれた。拙者等がオランダ語を学んで居る時に、村垣殿は蝦夷語を調べられて居られた。親父殿にサク・ルペシペの事など蝦夷地の話をされたいた」

「サク・ルペシペ？」

「蝦夷語で夏越える沢道の意だ。夏小沢とでもいうべき所を、村垣殿は小沢と名付けて来られたそうだ。そこから仰ぐ蝦夷の富士は格別であったと」

「それが万人に代え難き経験と申されるのですか」

「そうだ。ペリーが来てから、蝦夷地も開けていった。安政三年、箱館奉行竹内保徳殿と堀利熙殿の尽力で、諸術調所というものが箱館に出来た。武田斐三郎殿が教授となり、蘭学を始め化学、航海、測量、諸金属の分析、器具の製作などを教えられたのだ。武田殿を存じて居らぬのか」

「存じませぬが」

「貴殿等が攻め込んだ五稜郭を造られた方だ。貴藩の井上勝殿は、諸術調所で学ばれて居られたのではないか。存じてないのか」

「井上勝先生の事は、箱館で英国副領事から英語を学ばれたと聞いて居ります。何でも江戸に出られた後、藩公の許しを得られて箱館に参られたとか。伊藤井上聞多両先生と一緒に英国に密航され、鉄道技術を学ばれ帰国されま

した。

川原殿は、井上勝先生を御存知なのですか」

「拙者の親父殿から話を聞いた事がある」

「何故に」

「井上勝殿の御父上の勝行殿は、御役目で長崎に来られた。御役目の傍ら蘭式銃陣を習われて居られた」

「それはいつの話ですか」

「天保年間の事だ。勝行殿は安政の時、相州警衛の任に就かれ、親父殿と再会を喜んだとの事。御子息は幼くして江戸、浦賀に遊び、十六にして藩命を受け、長崎にて蘭人仕官から兵式を学ばれた。それから江戸にて幕府蕃書調所に学ばれるも、もの足らず、箱館の武田先生のもとに学びに行かれたのだ。」

幕府は箱館にて諸藩の者にも門戸を開き、広く人材を求めて居ったのだ。新政府で郵便事業を手掛けられて居られる前島密殿も諸術調所で学ばれた方だ。世間は狭いものだ。そうは思わぬか」

「そういうお話でしたか。それで、村垣淡路守はアメリカで何を探られたのですか」

私は改めて川原殿に問うた。

「村垣殿は、何もされなかった。新見殿は、学校、病院、養老院など市内を見て回られたそうだが」

「何故に、村垣淡路守は」

「歯痛と申されて、外出されなかった。施薬院も悲田院も、平城の都にありしもの。ただ、一度、外出された」

「何を探りに行ったのですか」

「何も探っては居らぬ。天文台に行かれたのだ」

「天文台？」

「望遠鏡を覗きに行かれた」

「村垣淡路守は、天文方なのですか」

「御天守台下御庭番だ」

「御庭番。それで村垣淡路守は、何を見たと申されるのですか」

「月だ」

「月」

「雲に梯して渉るようであつたと。それから木星を見た」

「木星」

「歳月はかく流れるものだ。それから土星も見た」

「土星」

「月に輪をかけたるが如しと申された」

「ペリーは皇国を窺つて居つたのです。忍びの者がそのような事で宜しいのですか」

「卑しくも皇国に仕える臣下たる者は、君を崇め民を憐れみ、天を恐れて身を縮め、足音を殺して地を踏み、月日の光を仰いでも、雨露の恵みを見ても、その恩恵の有り難さに我が心の汚さを恥じ入る者ではなければならぬと申したではないか。」

『あめ理かの山に入さの影は今 我うら安のあさ日なるらん』

村垣殿がニューヨーク入港時に詠まれたお歌だ。皇国を開帆して一万里、神と君の恵で海を渉り来たのだ。実に神明

の御加護。

咸臨丸にては、海舟殿は荒れ狂う洋上で、皇天に祈りを捧げて居られた。祈りが天に通じたのか、無事、太平洋を横断すると、海舟殿は次ぎに世界一周を試みんとされた」

「世界一周」

「そうだ。日本人の手による世界一周だ。咸臨丸にてアメリカ大陸南端のマゼラン海峡を通り、ニューヨークに及び、帰路はインド洋を経て、日本に戻ろうとされたのだ。これには、アメリカ人が反対した」

「また、アメリカ人が」

「マゼラン海峡は、世界一の難所。ペリーもマゼラン海峡を避け、遙々インド洋を回って来た位だ」

「無謀とおっしゃられるのですか」

「これも元はと言えば、海舟殿と木村殿の争いから起きた事。海舟殿は、ブルック殿と一緒にワシントンに行く算段を付けられて居られた。それで太平洋上で俄（にわ）かに軍艦奉行職にある木村殿をアドミラルにされたのだ」

「アドミラル。何処に操船の出来ぬ海軍提督など居りましょうか」

「そう申すな。咸臨丸には、優秀な船乗りが居るのだ。されば、アドミラルの木村殿に咸臨丸の帰還を任せて、海舟殿はワシントンに赴かれんとされたのだ」

「それで、勝先生はワシントンに行かれたのですか」

「いや、行かれなかった」

「何故に」

「木村殿がサンフランシスコにて、使節に随行してワシントンに赴く事を申し出られたのだ。日米通商条約により米国に

て艦船や武器の購入のみならず、科学者・軍人・職工・水夫も雇う事が出来るようになって居ったのだ。木村殿は海軍奉行なれば、そのお話にも無理はない。咸臨丸の事は、艦長取扱の海舟殿に任せて帰還させる腹積りであった。

それでは、海舟殿が面白くない。そこで、海舟殿は咸臨丸による世界一周を企てられたのだ。これには流石の木村殿も面を食らった。万一の事あらば、海軍起立の盛衰にも関係する。木村殿は、泣く泣くワシントン行きを断念された。それで、咸臨丸一行は日本人だけで帰航することになり、サンドウツチ諸島に寄港し、カメハメハ王と謁見し、浦賀に戻って来たのだ。

拙者もワシントン、ニューヨークに出向きたかったが、船舶の往来が自由になれば、その日もそう遠くならぬと思ひ諦めたが、まさか再度の渡米がこの様な形にならうとは」

「恨んで居られるのですか」

「そのような顔をされるな。これも定めと申すもの。そう申さず、幕府の心意気をお聞きください」

「何なりとお話し下さい」

川原は表情を弛めた。

「太平洋を横断した日本人は、実は咸臨丸一行が初めてではないのだ」

「存じて居ります。慶長十八年、仙台藩主伊達政宗が、支倉常長に命じてスペイン及びバチカンに使節を派遣したと聞いて居ります」

「そうだ。今から二五〇年前の事。政宗公は、スペイン人の手を借り、船を建造し、使節を欧州に派遣して居られるのだ。だが、話はそれだけではない。政宗公が遣欧使節団を派遣する三年前の慶長十五年、家康公は、スペイン船に田中勝介ら京都大阪の商人を乗せ、ヌエバ・エスパニーヤ、今のメキシコにスペイン人の様子を探りに行かせて居るのだ。田

中勝介ら一行は、帰路もスペイン船にて浦賀に戻つて来て居る。

又エバ・エスパニーニャはスペインの東西大陸を結ぶ拠点。スペイン人は、太平洋西端のフィリピンから東洋の香辛料、磁器、絹を船で又エバ・エスパニーニャに運び、そこから本国に持ち帰っていたのだ。もしあの時、スペイン人が宗教の事に固執して居らねば、家康公により、又エバ・エスパニーニャと通商の事が成っていたやもしれぬ。アメリカが独立致すずっと前の事だ」

「さすれば、ペリーも浦賀に来港致す事もなかったと」

「拙者が左様な事、何時申した」

川原は笑みを浮かべ、話を続けた。

「伊達政宗公の慶長遣欧使節団は、又エバ・エスパニーニャ太平洋岸のアカプルコから陸路、大西洋岸ベラクルスのサン・ファン・デ・ウルア港に向かわれ、そこから欧州に向かわれたが、新見殿村垣殿の万延（まんえん）遣米使節は、サンフランシスコから海路、パナマ国に向かわれた。

パナマ国にては鉄道に乗り大西洋に出で、海路北上された。当初、ニューヨークに向かうはずであったが、入港前日に大統領直々にワシントンに直航せよとの命が下つたそうだ。ワシントンは、海を隔てる事二百里余、川浅くして大艦の交通困難な事ゆえ、ワシントンより迎船が来た」

「ワシントンに何があつたのですか」

「ニューヨークとの先陣争いがあつたようだ。ワシントン、ニューヨークにての歓迎の儀は、壮麗であつたという。ワシントンの議事堂にて態々（わざわざ）、金子（きんす）の事が決議されたそうだ。白亜館の住人は、質素儉約を旨として居ると聞いて居つたから、かような事で金子（きんす）を使う事はないと思つて居つたのだが」

「川原殿は、アメリカは世界一、二の富裕な国と申されたではありませんか。どういふ事なのですか」

「広東での話だ。各国の領事が、旗竿の高さを競って居ったそうだ」

「それが、どうしたと申されるのですか」

「まあ、そう申すな」

「それで、何処が一番だったのですか」

「アメリカだ」

「それが、どうしたと申されるのですか」

「領事が千五百ドルの勘定書きを本国に送ったところ、本国政府は門前払いだ。日本に来航したアメリカ艦隊の乗員にても、余りにも質素なので此方が気の毒に思った位だ。大統領の一年の俸給が二万五千ドルというお国柄だから、無理もない。大統領のお住まいの白亜館も、他の家とそう変わらなかつたそうだ」

「他の家とそう違わぬとは、どういふ事なのですか」

「城郭も経営して居らねば、風雅の趣もなかつたそうだ」

「何故に、彼の国はそのような事を」

「善悪吉凶、皆衆と同ぐしする共和政治。内乱なき事にて、内を守るは粗にして、専ら外寇を防ぐのみ。唯だ海岸の要地に砲台を設け、堅固にするのみだ。かかる寂寥たる地に国都を建て、政を行なわんとしたワシントンの深慮が思ひ量られる」

「而て、白亜館の主は如何なる人物であつたのですか」

「大統領のブキャナン殿は、齡は六十を越え七十にならんとする老翁。髪白く穏和な様相にても、威厳があつたそう

だ」

「大統領の井出たちは」

「黒羅紗の筒袖。イホレットは着用されなかつたとの事」

「イホレット？」

「肩に着ける金色の飾りだ」

「袴は」

「彼の国の者は、袴を穿かぬ。ズボンだ」

「イギリスの者は、袴を穿くと聞いて居りますが。それでは、太刀は」

「大統領は、帯刀などせぬ」

「それでは、大統領のとの面謁の様子は如何様に」

「大統領のとの面謁は、条約書引渡しの際、東の間で行なつた。同席していた軍人が居並ぶ中、部屋後方には、老少婦人打交わり、謁見の様子を見物して居つたそうだ」

「それが彼の国の仕来りなですか」

「そうだ」

「而て、使節の井立ちは。聞く所に依れば、慣例の大紋を着用されるところ、幕府は狩衣を用いたとか。狩衣は野外遊獵の服なれど、四品の方が用いられるもの。大紋は諸大夫着用が仕来りではないのですか。彼の国は、入札にて統領を定める国柄。そのような事を為すまでもないと申されるのですか」

「將軍家に、そのような軽率な考えはない。幕府も初めは、使節に十萬石以上の格式を与え、大統領謁見に際して、

大名行列時の台傘に赤坂奴に大烏毛の槍を振らせる趣向であつたが、あまりにも異様だといふので取り止めたのだ」

「皇国の礼式を海外に示すよい機会ではなかつたのではありませぬか」

「御国書を遣わされるのだ。国王の礼を用いぬ筈がない。幕府も先例を検討した」

「先例」

「享保年間には、幕府は諸大夫の面々にも狩衣を着用させて居るのだ。正徳の朝鮮信使饗宴の時には、万石以下の司人にも狩衣を許した。井伊掃部頭たるう方が、そのような事を知らぬはずが無い。大統領謁見の節には、諸大夫以上狩衣、以下は身分に応じて礼服を着用する事にしたのだ」

「狩衣の話は、もう宜しいのです。それより、大統領との謁見の儀は、どのように執り行なわれたのか、お教え下さい」

私は不満な顔をして見せた。

「作法というものはない。役人の案内ありて、入口より正使、副使、監察が進み、二三步相進み一拝、中央に進み一拝、正使新見殿の御口上演達に及んだのだ」

「正使は如何なる演達を」

「大君陛下は、両国の親密なる関係の層一層永続せん事を希望し、使節を大統領陛下のワシントンの首都に遣わしたと。新見殿は演達を終えると、御書を大統領へ手渡し、箱は成瀬正典殿より国事事務頭のカッス殿に渡し退かれた」

「それだけですか」

「これには、向うの役人も驚いたようだ。シュポントと申す役人が来て、貴国の礼は済みやと問うたという。儀礼厚きの使節が、かかる口上のみで退いたからだ。それで、アメリカ側が出でよと申すから、再び謁見の間に戻り、大統領のスピーチを拝聴したそうだ」

「大統領は、何と申したのですか」

「諸卿の大帝国が、外国に派遣したる最初の使節を合衆国に派したるを深く満足に思うと。これが両国間の永久の平和と友情との前駆たるを信ずるとも。」

「プレジデントが他の所望を申し終えると、プレジデントから正使の新見殿へ口上書が手渡され、退室と相成ったとか」
「随分味気ないではありませんか」

「此度の御役目は、批准書の交換。それでも使節退室に及び、アメリカの政府高官は手を取り、挨拶に限りなかつたという。プレジデントは、日本使節のために格別の配慮を払われたとの事」

「格別な配慮」

「使節をコンGRESに案内致した」

「そのような事が、格別な配慮なのですか」

「彼の国では外国からの使節でも、議事堂に案内致す事はなかつたそうだ」

「それで、議事堂は如何様であつたと」

「日本橋の魚市のさまによく似て居つたと。副統領が高き所に居り、議員と言ひ合つて居つたそうだ」

「魚市？アメリカに一心太助でも居つたと申されるのですか。それとも大久保彦左衛門が、怒鳴つて居つたとも申されるのですか。副統領は何物なのですか」

「分からぬ。案内されたただだと申されて居られた。西洋人の事なれば、罵り合い常なれど、拙者が思うに、義人の話し合いに相違ない」

「義人の話し合い。何故にその様な事を申されるのですか」

「一年を隔てぬうちに国を南北に二分する戦だ。黒人の人質が悪いとか言つて隔たりをなして居つたが、上下の別なく真実を表して治むる国なればだ。アメリカ人の義挙、天晴れなる事だ」

「義挙。川原殿は何故に、アメリカ人を御信用なさるのですか。義挙など申されて、奸計があつたに違いありません」
「如何なる奸計か」

「分りませぬ、そのような事。狡猾なる西洋人ゆえ、申上げて居るのです」

「西洋人にもアメリカ人は、氣質寛容にして正直。イギリス人の及ばぬ所だ。兎も角、アメリカ人の歓迎は徒(ただ)ならぬものがあつたという。」

ワシントンからニューヨークに至るボルチモアでもフィラデルフィアでも、街の至る処に日の丸の旗章を建て、家々の軒端にも日の丸をかざし、歓迎して呉れた。なかでも、フィラデルフィアは素晴らしい所であつたそうだ」

「フィラデルフィア？」

「ペンセルヴァニア州にある街だ。富有の商人多く、土地柄は格別。黒紋付(もんつき)を着た者あれば、大日本と記した幟(のぼり)もある。仁義礼智信と書いた額行燈(がくあんどん)もあつたそうだ」

「アメリカ人が、何故に」

「フィラデルフィアは、仁愛篤厚の人フランクリン出で、人を能く教える街。彼の国の文明の郷にして、学校大いに開かれ、能く諸物製造する所なれば、新しき品物も多く、新見殿御一行に最新の発明品を贈つたのも、この街の人達だ。」

フィラデルフィアに比すれば、ニューヨークは貿易盛んな地なれど、人情薄情。街に出るも、必ず二人、警衛をなしたとか。アメリカ側は、外国人が妬み日米両国の和親を妨げんとして居ると申したそうだが、街の質の悪さを隠すための口実。外出もままならなかつたそうだ。

致し方なく、使節が泊まった旅館の傍らで、『コムドル・ペルリ 日本下田に渡来して応接の次第』と題する狂言を見に行ったそうだ。見物人が、雲の如くあつたそうだ」

「狂言。物笑いにされたのではありませぬか。矢張り、打払いにしておくべきであつたのです」

「幕府はペリーに迫られて、和親条約を締結したのではない。寛大の仁徳をもつて、アメリカを和親の国としたのだ」

「また、その様な事を」

「貴殿のような攘夷家には想像もつかぬ將軍家の話だ。我等安政開国派は、將軍家あつたればこそだ。それをハリス殿が後押ししたのだ」

「後押し」

「ハリス殿がアメリカの都府の繁昌、住民の繁華を実見するよう薦められたのも、尤もな事であつた。彼の国の家は石造りにて、大火の災難から街を守つて居つた。人々の往来も、真昼の隔たりなく、ホテルにては、取っ手を回すと蓮の裏から湯が降り注ぐ。夜でも部屋の灯は、煌々として居る。

彼の国の西の端において、かかる備え。彼の国強大に成りたる根元、此処にありと思つた。小高き丘に登り、サンフランシスコの街並みを眺めた時の感激は、生涯忘れぬものだ。幼き日の夢が叶つた」

「夢？」

「我が親父殿は、長崎の西山奉行所から蘭船の出入りを遠眼鏡で見るのが御役目。親父殿には異国船に乗せて呉れと言つては困らせたものだ」

川原は少し含羞んだ表情をして見せた。

「咸臨丸一行はサンフランシスコに残り、サンフランシスコの街を見て回つたが、福沢とはアメリカ人に案内されて砂糖

工場を見に行つた。拙者も福沢も日本で漂流民から英語の発音を習つたぐらいだ。話がすべて解せる訳がない。ホテルに戻り福沢と話をすると、砂糖の清浄には骨炭で漉すとか、釜を真空にして沸騰させるとか色々知識をひけらす。何故分かつたと言うと、以前から承知だと言う。

福沢もしつこい。エレキトルを知つて居るかと思つて来る。勿論だ、平賀源内がやつたやつだと言つてやつた」

「何者です。その平賀源内とは」

「讃岐国志度生れの宝暦の坂本龍馬だ」

「宝暦の坂本先生？」

「高松藩主松平頼恭（よりたか）公のお氣に入りで、足輕から御薬坊主（おやくぼうず）に引立てられた。諸国を漫遊し、奇想天外な事、龍馬以上だ。蘭癖の坂本龍馬だ」

「そんな方が、居られたのですか。それで、福沢先生が、どうしたと申されるのですか」

「エレキトルは、どのようにして起こすかと聞いて来るのだ。摩擦にて起こすと言うと、フアラデーとかいう英人の電氣説を鼻高々に説明し居る。何でも福沢の師の緒方洪庵殿が、筑前の黒田侯から拝借した蘭訳本で知つたという。

福沢は先の見える男だ。安政六年の事だつた。福沢は横浜見物から戻ると、これから英学の時代になるから英語を手掛けると言う。拙者は長年慣れ親しんだ蘭学を捨てるには、なかなか決断がつかかなかつた」

「村田先生も申されて居られたそうです。蘭書の翻訳で十分だと」

「それはそうだ。蘭学は深遠にして、英学にはない奥行きがある。しかし、時勢というものには逆らえぬものだ。拙者もペリーが持参した蒸気機関車や電信装置を見た時から、こうした物が世の中を変えていくと薄々気付いて居つたのだが。

福沢は蘭学仲間から新し好きと言われたが、新奇のこうした知識が世の中を変えて行くものだ。見聞しないとなかなか実感できない事だ。世界には新奇な物に溢れて居る。

世の中には凄い人が居るもんだ。榎本殿の事もそうだ。貴殿は榎本殿の事を賊軍の大將くらいにしか見て居らぬよ。うだが、それは違う。榎本殿に比べれば、福沢の化学の知識などは素人芸だ。

榎本殿は、長崎海軍伝習所では海舟殿の一年後輩で、安政五年に江戸築地海軍操練所の教授となられた方。文久三年にはオランダに留学され、軍事技術や万国公法の研究の傍ら、電信や化学など西洋の最新技術を学ばれたのだ。

留学仲間には神田孝平殿や西周殿が居られた。榎本殿は慶応三年帰国するも、箱館戦争に敗れ、牢獄で明日をも知れぬ身となるも、人々の暮らしのためにと石鹼製造法や新式養蚕法を書き残されたのだ。

今、榎本殿の助命嘆願をして居る黒田は、西郷の子分。榎本殿ほどの者の首を斬っては、亡き斉彬公に申し訳が立たぬからな」

川原は何時もの含み笑いを浮かべ、私にお構いなく話を続けた。

「福沢は運がいいのか、咸臨丸でアメリカから戻ると、郷里に錦を飾る間もなく欧州に行く。中津では、アメリカで死んで塩漬けにされ江戸に帰って来たという話になったとか。欧州行きのお役目は、開市開港の延期交渉の翻訳方だ。フランス、イギリス、オランダ、プロシア、ロシア、ポルトガルを回って帰国すると、長崎に手紙を寄こしてきた。欧州第一の政治家フランスのナポレオン三世の事やオランダのアムステルダムでの地元有力者との面談の事など書いてあった。

福沢は、此度の使節で鉄道の本当の凄さを実感したと言ってきた。蒸気船が河川と大洋を結ぶなら、鉄道は地の果てから人と物資を運ぶ。人の往来の盛んな事、諸国の人々が集まって来ると。

岩倉大使一行も欧米で初めて汽車に乗るのでは体面に係わるとか言つて、品川から横浜まで汽車で行つたというではないか」

「鉄道の事は、大隈先生伊藤先生の尽力の賜物です」

「拙者が咸臨丸でアメリカに行つた時は、まだ、大陸横断鉄道はなかつた。今はサンフランシスコからシカゴ、ニューヨーク、ワシントン、ボストンまで鉄道で行ける。」

フルベッキ殿も鉄道技師を夢見てニューヨークに赴かれたそうだが、鉄道建設に従事している時に体を害され、伝導の道に入られた。フルベッキ殿は、オランダはユトレヒト州ゼーラストのお生まれであるが、アメリカでダッチ・リフォームド・チャーチの宣教師となり日本に遣つて来られたのだ。

フルベッキ殿のお話では、今のニューヨークは幕府が鎖国を始めた頃にはニューアムステルダムといつて、オランダの属領だったそうだ。今でもオランダ人が少なくないのは、そういう訳だ。それにして不思議だ」

「何が不思議なのですか」

「ペリーだ」

「ペリーの何が不思議だと申されるのですか」

「ペリー艦隊が浦賀に入港して、初めての日曜日の事だ。全艦員がサスケハナ号の甲板に上り、従軍牧師に従い、讚美歌を歌つたそうだ。」

『エホバの畏るべき御座（みくら）の前で、諸人よ、聖き喜びを以て頭を垂れよ』云々と」

「それが不思議な事なのですか」

「そうだ。」

それにしてもアメリカ、イギリス、フランス、オランダの関係は複雑だ。フルベッキ殿から初めてオランダの話聞いた時、頭が混乱した。

室町末期、ポルトガルスペインの南蛮人が日本に渡来した時、オランダはスペイン国王の支配下にあつたそうだが、オランダはオレンジ公ウイリアムを頭領として、オランダ七州を結集してスペインに対抗したそうだ。

江戸幕府が出来て程なくして、イギリスとフランスの助力を得てオランダ連邦共和国というものが出来たと言うのだ。七州の中で一番勢力のあるホルント州が国の名になって居るが、ネーデルラント共和国とも言ったそうだ。

スペインの支配を脱すると、今度はフランスのルイ十四世の軍がオランダに攻め込んで来たそうだ。オレンジ公ウイリアムの曾孫のウイレム三世は、スペインと同盟を結び、フランス軍を撃退したと言うのだ。

幕府が鎖国をしている間、欧州はまさに戦国時代だ。オランダは洋上の支配権をめぐってイギリスとの戦争に敗れると、ニューアムステルダムなどのアメリカ領を失ったというのだ。その後、イギリスで新教徒の革命が起き、国王が追放されると、イギリス人は国王の娘の夫のオランダ人のウイレム三世をイングラント王に即位させたというのだから、頭が変になつてきた。それでも、アメリカがイギリスとの独立戦争を始めると、オランダはアメリカに味方してイギリスと戦争を始めたと言うのだ。

イギリスとオランダの奇妙な関係にも驚いたが、フランスとオランダの関係にも驚いた。フルベッキ殿がお生まれになられたのは、天保元年であるから、その三十年ちよつと前の事か。フランスに大革命が起こり、その六年後には、オランダはフランス革命軍に占領され、バタヴィア共和国というものが出来たと言われる」

「バタヴィア」

「ホルント州に古の昔に住んでいたゲルマン種族の名だ。自由を求めるアムステルダム商人が、フランスのナポレオン一

世と手を結び、オランダに新国家を創らんとして名付けた国名だ。ネーデルラントの者たちを束ねていたオレンジ家のウィリアム五世は、イギリスに亡命したというのだ。

これにも驚いたが、フルベッキ殿はもつと驚く話をされた。フランスでナポレオン一世ことナポレオン・ボナパルトが皇帝になると、ナポレオン一世の弟がオランダ国王となったというのだ」

「ナポレオンの弟がオランダの国王に」

「そうだ」

「ルイ・ボナパルトといつて、新国家をホラント王国と称して、国王になったと言うのだ。このルイ・ボナパルトという男、なかなか出来た男で、オランダのために尽力したというのだ。その御蔭で兄と仲違いをし、王位を退位させられたというのだ。」

「このルイ・ボナパルトの三男が、福沢が欧州から手紙で書いて来たナポレオン三世ことシャルル・ルイⅡナポレオン・ボナパルト、通称ルイⅡナポレオンの事だ」

「それで、幕府はフランスに近づいたというのですか」

「そうだ。幕府もこの事をひた隠しにしていた。出島に来るオランダ人は、王党派の者なれば、ナポレオン云々はせぬ。無理からぬ事だが。親父殿に話を聞きたい所であったが、親父殿はもうこの世の人ではなかった。」

オランダ王党派との付き合いは、幕府が鎖国の惰眠を貪るには好都合なれど、海の向こうから開国の嵐が吹き荒れて居つたのだ。フランスがレオン・ロッシュを駐日大使に遣わしたのを機に、幕府はフランスと繋がつたのだ。

長崎でフルベッキ殿から欧州の話を聞いた時には、頭が混乱したが、要は欧州においては絶対的な王政の時代は終わったという事であった。それで西洋人でこの動きをいち早く純粋な形で体现したのが、欧州を離れたアメリカ人であつ

たと。

そう言えば、アメリカ人のイギリス人に対する敵愾心もなかなかなものだった。下田で総領事をして居られたハリス殿の祖父は、独立戦争出征中にイギリス軍によって家を焼かれたそうさ。

独立に際して、総大将のワシントンを国王にとの声もあつたそうだが、彼の国では国の頭領は選挙で決し、公共の精神をもつて国事を総裁する事にしたのだ。大統領の権柄は賢人に譲つて子孫に伝える事はしない。まさに堯舜の禅讓政治ではないか。慶喜公が大政を奉還されたのも同じ精神だ」

俄（にわ）かに雲行きが怪しくなつてきた。川原の口調は、何故か奴と似てきた。

「榎本殿が蝦夷地に立て籠もつたのもそうさ。榎本殿の出した檄文でも嘆願書でもみられよ。姑息な新政府に対して、蝦夷地にてこの精神を試みんとされたのだ。榎本殿はアメリカに倣い総裁以下各役職を選挙したのだ」

幕臣に姑息と言われては、黙つては居られなかつた。

「放言なされては困ります」

「何が放言と申されるのか」

「私は新政府の要人を間近にして来ました。少なくとも川原殿よりは、新政府の事は知つて居る積りです」

「貴殿は何を知つて居ると申されるのかな」

川原は私の憤慨に驚いていた。

「新政府の精神です。帝は公卿諸侯政府官吏を率いて、紫宸殿において御誓文を御神明にお誓いになられたのです。

川原殿に姑息などと申されるような事は、何もありません」

「神明にだな」

「そうです。我が国は天照大神が天祖を伝えた神国である事は、川原殿に申されるまでもない事です。岩倉公は天子が誓いを立てるなどは支那の霸道であつて、我が朝には断じてない事と反対されましたが、木戸先生が今は是非とも御誓約が必要な時であるからと申され、岩倉公を説得されたのです。」

「版籍奉還を巡つても、新政府には随分議論がありました。岩倉公は、王政復古後の方針は建武中興の例に依るものとお考えでしたので、伊藤先生が玉松操殿の説を引かれ、神武東征の例に則る事を説かれました」

「それでは聞こう。その玉松操殿が新政府の欧米列国との締盟の布告に際して、政府要人に詰め寄つたというではないか。」

「そもそもペリー来航嘉永癸丑（きちゆう）以来、朝廷鎖国攘夷の説を執り、朝野皆、欧米諸国醜夷とみなし攘夷を叫ぶなか、不忠の汚名を蒙られしも開国の国是を掲げられたのは、他ならぬ慶喜公だ。攘夷と言つて居つた長州藩が、御維新後、開口一番、開国を口にするのはおかしい話ではないか」

返す言葉もなかった。

「貴殿は事情通のようであるから、もう一つお尋ねしよう。鳥羽伏見の戦いにおいて日月章の錦旗を翻し西軍が何故、箱館攻めに際しては、日章旗を掲げたのだ」

「それは、箱館の賊軍を欺くためです。日の丸の事は、源平の戦いで平氏の女性が掲げしもの。源氏を標榜する徳川が、掲げた事の方が、御門違いではありませんか」

「源義仲も掲げて居る」

「それは木曾義仲の事となれば、後白河法皇を欺く謀略ではありませんか。日章旗の事は、後醍醐帝が掲げし事と仄聞して居りますが」

「後醍醐帝は、日の丸を掲げし事はない。南朝方が笠置軍の条城において、日月章の錦旗を打ち立てられた事は、貴殿の知るところではないのか。幕府が日章旗を掲げたるは、家康公関ヶ原出陣に際し、足利学校の長たる田代三喜殿を賞し、白地に日の丸の旗を号（しるし）に用いたが故」

「何故にそのような事を申されるのですか」

「田代三喜殿は、曲直瀬道三（まなせどうさん）殿の師なれば、毛利家の御家臣なれば、御存知のはず。今日、毛利家もあるも、曲直瀬道三殿のお陰ではないか。

そもそも日章旗の事は、ペリー来航後、薩摩の島津斉彬公が憚りながら阿部閣老に、日の丸こそ日本の名号に取りて相当するものと申され、日の丸の雛型を差し出されたものだ。

開国派の有司の中には、日の丸を日本船の総船印に、延いては日本国の国章と申される方も居られたが、日の丸は琉球船が用いしもの。幕府に異論多く、斉昭公に大船蒸気船建造の際には、新田源氏の徽章である中黒を用いられよと申される方もあったのだ。

木戸君は、日章旗の事を話して居らぬのか」

川原は強い口調で言った。

「何も」

「貴殿は、薩摩の中屋敷に行ったことはないのか」

「藩の用向きで出かけた事がありますが」

「装束屋敷と呼んで居ったのを知らぬのか」

「それが何か」

「琉球の使節が江戸に来ると、薩摩の中屋敷で装束を改めたのだ。それで、装束屋敷と呼び、その門を黒門と呼んで居るのだ。それでは、政体書の事は」

川原は半ばあきらめ顔で言った。

「木戸先生からは、何も聞いて居りません。奴は太政官を立法、行法、司法の三権に分け権力に偏重を来たさぬようにした事は、開化文明の一大変革であつたなどと、偉そうな事を言つて居りますが、御一新の混乱に乗じた西洋被れの所業です。川原殿は、どう思われのですか」

「相方の申される事、誇張もあるが、嘘ではあるまい。幕府を倒せし薩長新政府は日章旗を掲げ、西洋文明に倣い新政体を樹立せんとしたのではなかつたのではないのか。何故に幕府の二の舞を踏んで、日の丸を商船の船印に止めたのだ」

川原の詰問は、私の慷慨を誘つた。

「それでは改めて、川原殿に伺いたい儀が御座ります」

「何だ。何なりと申せ」

「それではお伺いしますが、西洋人は民衆を愛育する政を行つていと言いますが、本当なのでしょう。か。

もし本当にそのような政を行つていたのであれば、イギリスが清国に対してあのような無道な行いをするはずがありません。清国政府は阿片の売買を禁じていたのです。それを武器を用いて売りつけるなどは。西洋諸国がイギリスを諷めたという話も、聞いた事がありません。長州の攘夷は当然の事です。

それにあの時、果たして条約を締結する必要があつたのでしょうか。我が神州の地は、金銀・米穀・山種・海産何一つとして、他に求めなければならぬ物などなかつたのです。

国を閉ざす事が罪なのでしようか。太平の世が何百年と続きました。倭寇などが他国を侵す事もなくなつたではありませんか。水戸の斉昭公がおつしやられた様に、アメリカのいらざるお節介としかいいようがないではありませんか。しかも条約では夷人の日本人に対する犯罪は、夷人の法で裁く事になって居ります。これなどは至極不当なものではないでしょうか。彼らが公明正大であるという証が、どこにあるのでしょうか。彼らの正直など当てになりませんまい」「貴殿の言い分も尤もだが、幕府も漫然と外国人のいいなりになつていたのではない。貴殿の不信も謂れない事ではない。向こうも人だ。すべてが真実ではあるまい。虚偽もあろう。それが政事だ。致し方ない事もあるう。

しかし、我が方にも道理に適わぬ事も沢山ある。その事が道理に適っている事ならば、意固地になる事もあるまい。福沢も言つて居つた。条約交渉をしてみても分かつたと。日本の弱みにつけ込んで無理難題を仕掛ける外国政府には困つたが、その国に来てみれば、案外公明正大で優しい人も居るものだ。ロンドンでの事だ。ある人が、ある議員に建白したそうだ。

その趣意は、在日英国公使オールコックが、日本国民の霊場として尊拝する芝の山内に騎馬で乗り込むなどは、新開国日本に対してあたかも武力で征服した国民に臨むが如きもので、誠に無礼な振る舞いだ。

我が国も開国の国是を決めたのだ。交際しなければなるまい。ただ、文明開化と言つて西洋被れするのもただけでない。西洋の学問を学ぶにも手順というものがある。見聞しただけでは、すぐに合点のいくものではない。人間というものは、習慣や慣習が骨の髄まで染み込んでいて、そこからなかなか自由になれないものだ。やはり頭で納得し努力しないと、元の木阿弥だ。だから、先ずは道理を学ぶ必要がある」

「道理を学んでどうしろと申されるのですか。それでは、皇国の精神と申すものがありません」

「残念な事に、国学はまだ学問とはなつて居らぬ。そこで古くから我が国では儒教と仏教を学問としてきたのだ。神道

にも儒教や仏教に劣らぬ教えはあるが、攘夷の念に埋没させられて居る」

「道理と申しましても、人の情というものがなくては、生きてはいけません」

「だから、学ぶものにならないのだ」

「それは傲慢というものではありませんか」

「傲慢なのではない。謙虚なのだ」

「謙虚。どういう事でしょうか」

「この世で人は救われぬものだ」

「それは、随分この世を見放した物言いではありませんか」

「見放したのではない。人は煩惱に苛まれ、この世を去るものだ」

「それでは、この世で何を学べと申されるのですか」

「我等に出来る事だ。政事に出来る事だ」

「政事に出来る事」

「そうだ。我々は西洋諸国を訪ね、政事に出来る事を探るのだ」

「それが西洋の学問にあるというのですか」

「ある。だが、洋学を学ぶにしても、我らが依つて立つ立場というものが必要だ」

「それは、どうすればよいのですか」

「儒教を学ぶのだ」

「儒学を。川原殿は、昌平黌を再興されようと申されるのですか」

「今さら忠孝云々など説こうとは思わぬ」

「それでは、川原殿は儒学の何を学べと申されるのですか」

「舜の徳だ」

「舜の徳」

「舜の徳は天地のように私心がなく、四季の運行のように万物を感化する。四海はその教化を受け、周囲の夷狄にもゆき渡り、鳳凰は空高く飛び、麒麟はやって来て、鳥や獣までもその徳に従ったのだ。詩経にあるではないか。『天下あまねく、王土ではない土地はなく 四海の内 天子の臣民ではない人はない』と」

「そのような事、この世の何に役立つと申されるのですか」

「先ず、大地の大きさを感じるのだ」

「大地の大きさ？」

「そうだ。アジア洲の大きさを感じるのだ」

「川原殿は、アジア洲の大きさをどの様に感じれとおっしゃられるのですか」

「古のアジア洲にては、東方は碣石山より朝鮮を過ぎ、大人の国を通り、東方の日の出の場所、樽木（くれき）の地、青丘の樹木の野に至ったのだ。南方には委火炎風の野があり、西方は三危の国の民のいる不死の野があった。そして北方は氷が張り詰め、雪霰霜霰が降り、湿润に河川が行き交う野だ。そして、アジア洲の中央には、崑崙があり、その東北の両恒山までは、ただ日月の通る地となつて居った」

「それで川原殿は、どうせよと申されるのですか」

「道のあるところを知るのだ。天は円く、地は四角く、道はその間にある」

「そのような所に道があると申されるのですか」

「天道は万物の育成に力を尽くし、地道は植物を生長させる。日は徳を行い、月は刑を行なうのだ」

「日が徳を行い、月が刑を行なうとは、何の事でしょうか」

「月がかけると万物は死に、日が南に至ると万物は生ずるではないか」

「川原殿が道と申されるのは、何なのですか」

「万物を創造した天は、人間だけを貴く造られた。天地の大経は、生民の須臾（しゅゆ）も離るべからざるもの。人の道は政事に力を尽くす事だ。政事の任務は、民が富裕で長寿をなす事だ。そのため賢人を用いるのだ」

「賢人を用いると申されますが、一体どのような人物を指して賢人と申されるのでしょうか。賢人を見分ける方法など、あるものなのでしょうか」

「顔淵は、孔子に道徳を完成した人物の行いを質問した事があった」

「孔子は何と答えられたのですか」

「造化の働きを知っている者を賢人と答えた。愚者は道徳、道徳と申すが、造化の働きを知らぬものだ」

「造化の働き」

「そうだ。天理自然の変化を知る者は、徳の盛大な成人だと」

「そのような徳、聞いた事、ありませぬが」

「周代に道を離れたのだ」

「今の道は偽りだと申されるのですか」

「そうだ。儀礼を繁雑にし、衣冠を麗々しく飾り立て、見せかけの徳を行なうようになったのだ。孔子は鬱鬯（うつち

よう)を振り撒いた先は、見たいと思わぬと云うて居る」

「鬱鬱(うつちよう)とは」

「神さまをお招きする好い匂いのする酒だ。弓も目的が違つて来た」

「今の弓は、道に外れていると申されるのですか」

「そうだ。古の弓は、神様を招くもの。皮を射る事が目的ではなかった。教えは四方の夷狄に残存して居る」

「川原殿は何故に、そのような話を私にされるのですか」

「手立てにするのだ」

「手立て？何のですか」

川原は俄(にわ)かに、西洋鞆の中から書き物を取り出した。

「今、徳川の世の事を密かに書き留めて居る。今は顧みられる事はないが、何時か必ず役に立つ時が来る。これが我等幕臣が、貴殿達のために出来る事だ」

「徳川の世の事が、どうして我等のためになると申されるのですか」

私は戸惑いの表情をして見せた。

「今、貴殿等に伝えておかねばならぬのだ。そうしなければ、この先十年、いや百年先にあつても、人は我等を、いや御維新までも誤解する」

「それでは何故に、長州の私に話をされるのですか」

「御当家は格別な御門地の事に付き申して居るのだ。中には偽りを申す者も居るから」

「私が偽りを申さぬとでも」

「深くお悩みのようであるから。手前味噌では駄目なのだ。薩長の力が要る」

「薩長の力？長州には幕臣に力を貸そうなどと思う者は居りませぬ」

「そう幕臣を毛嫌いされるな。毛嫌いされるのなら、相手の正体を知ってからでも遅くはあるまい。合点のいかぬ事もあろうが、貴殿の成長を頼むのみだ。知らぬという事は、恐ろしい事だ」

川原は祈るように言った。

幕臣とは、こういうものなのか。それとも川原が特別なのか、私には分からぬ事であった。

「話だけでもお聞き下され」

川原はそう言った。

我が藩の狼狽を考えると、頭の下がる思いもした。明日また訪れる事を約束し、川原の部屋を後にした。

三

秘密。それは私の心を動かした。いつの世も敵の秘密を知る事は、楽しいものだ。川原はモリソン号来航の事から安政開国の事を語り始めた。

「天保八年、アメリカ船モリソン号が日本人漂流民を乗せて浦賀に来航すると、老中の水野越前守忠邦殿はロシア使節レザノフに準拠して対処せんとした。」

ロシアもキリスト教国ではあるが、当時の將軍家斉公は通商通交に熱心であられた。文化元年、アメリカ商人の使用人でもあったレザノフが、アレクサンドル一世の親書を携えて、仙台漂流を伴って長崎に通商を求めて来航すると、幕府は文化三年に薪水給与令を下し、ロシア船の再来航に備えたのだ」

「それでは何故に、ロシアと交易を行なわなかったのですか」

「その時も、交易に反対の者が騒いだのだ。レザノフの前に来航したラクスマンに信牌(しんぱい)を与えた時、朝廷に何も知らせなかったと。家斉公も内乱を起こさぬようにと譲歩された。出羽守なき後、この勢力に立ち向かう者はなかった」

「出羽守」

「水野忠友殿だ。忠友殿は田沼意次殿の御子を養子とし、田沼時代の蝦夷地開発の夢を叶えようとされて居られた。ロシアは十年程経ってレザノフを再度、使者として送って来たが、ラクスマンに信牌(しんぱい)を与えた出羽守は、亡くなられて居られた。」

「モリソン号の時も、交易に反対する者たちが漂流民を利用するとはけしからぬと申し立てた」

「尤もな話ではありませんか」

「家康公は慶長十五年、上総大多喜浦で難破したスペイン商船の漂流民を墨西哥(メキシコ)のアカプルコ港に送り届けて居られるのだ。」

評定所の評議が打払いに決すると、評議の座に居られた芳賀市三郎殿が、評議の有様を尚齒会でお話しされた」

「尚齒会」

「紀州藩儒で評定所記録方の遠藤勝助殿の提唱で開かれた集りだ」

「儒者が集まって何を論じたのですか」

「尚齒会は儒者の集まりと言っても、高野長英、小関三英、渡辺崋山、江川英龍、川路聖謨といった当時の俊英が名を列ねて居ったのだ。モリソンという学者が来航するとの噂を流した」

「モリソンとは、アメリカ船の名ではありませんか」

「そうだ。船の名だ。尚齒会で学者の名にしたのは、モリソンに特別な意味を持たせようとしたからだ」

「何故にですか」

「水野忠邦殿の見識に働きかけようとされたのだ」

「見識」

「そうだ。当時、知者の間では共和政治と富国への関心が高まって居った。勿論、水野忠邦殿もだ。水野殿は、尚齒会に一目置かれて居られたのだ。そこで、高野殿は『外国事情』にアメリカの事を書かれたのだ」

「アメリカのどのような事を」

「外国の政体には賢才豪傑を推して君主とし、一国を公共の所有とする共和国があり、アメリカは安永五年の頃から共和の政を行い、わずか五十年で世界第一の富裕な国となったと」

「それとモリソンと、どういう関係があると言うのですか。モリソンとは、何者のですか」

「ロンドン伝道会が清国に遣した宣教師で、新旧の聖書を漢訳された方だ。この時、すでにモリソン殿は亡くなって居られたが、尚齒会は評定所の打払いの決議を聞いて、モリソン渡来の噂を流したのだ。」

御目付の鳥居耀蔵殿などは、モリソン渡来など信じ難い噂だと、その辺の事情をよく御存知であられたが、水野殿はそのような事に頓着はない。耀蔵殿は、水野殿に英国よりモリソン罷越候とも打払うべしと諭勸された。

耀藏殿は鳥居家の御養子なるも、林大学頭述斎（じゅつさい）殿の御次男。御目付となり、水野越前守の信頼を得られたのだ。鳥居家は尋常の旗本ではない。三河御譜代の御家柄。耀藏殿は林家の子息なれば、漢学も相応に修めて居られる。それで、耀藏殿は儒者の弾圧を始められたのだ」

「鳥居耀藏が弾圧したのは蘭学者ではないのですか」

「儒学から蘭学に入る者も居ったのだ。表向き蘭学の弾圧だが、その実は異端の儒学を弾圧したのだ」

「どういう事でしょうか。お話し下さい」

私は食い下がった。

「夷狄の説から開国に関心を抱く者が出てきたのだ。それを快く思わぬ者たちが居っても、不思議ではなからう。それにオランダ人が荷担した」

「オランダ人がですか」

「鳶に油揚をさらわれるのを恐れ、長崎から、渡来したモリソン号は、イギリス船との噂を流したのだ。イギリスと聞けば海賊としか考えぬ幕閣の反感を煽り、交易を妨害しようとしたのだ。それで、高野殿が幕閣の考えを改めさせようとして、『夢物語』というものを書いたのだ」

「『夢物語』には、何が書いてあったのですか」

「イギリスの政治の仕組みや打払いの得失だ。川路聖謨殿と江川太郎左衛門殿が、『夢物語』を閣老に内奏した。それで鳥居殿が、蛮学に対する弾圧を始めた。」

その手始めは、小笠原渡航計画の暴露だ。この計画はイギリスの小笠原諸島占領計画に対抗するため、有志が新島を開墾するというものだった。ゆくゆくは官命で渡航する手筈であったが、この密計に加わっていた者が鳥居殿に唆さ

れ、山の手に住む蛮学者仲間を訴え出たのだ。鳥居殿はこれらはみな大塩の一味であると申し立てた。

計画者の意はどうあれ、その者たちは外国渡航の罪で捕らえられた。渡辺崋山殿は証拠物件として『慎機論』『西洋事情答書』の乱稿を押収された。そのなかに神武以来、未開地をつぎつぎと平定し、蝦夷・奥州を開き、のちにはカラフト島の一部、エトロフ島、クナシリ島までしだいに開けていった云々と書いたものがあつたのだ」

「それが、何の罪に当たるのでしょうか。幕府は神武帝のご偉功を恐れたのでしょうか。ロシアが蝦夷地に迫っていたのではありませんか。幕府は何を恐れたのですか」

「蝦夷地に大志を抱く者がいたのだ」

「それは、ロシア人に対抗するためではないですか。斉昭公は、蝦夷地の事に心を砕かれて居られたではありませんか」

「あの『大日本史』の書名でさえ、世に出す事が憚られた時代だ。あの水戸藩にしてそうだ」

「何を申されて居られるのですか」

私は憤りを隠しきれなかった。

「光圀(みつくに)公が考案された『大日本史』の書名は、光格天皇の御代まで朝廷に願ひ出られる事はなかったのだ。

光格天皇の御代に、関白鷹司政熙(まさひろ)卿を通じて、朝廷に願ひ出られたのだ」

「何故に、光格天皇の御代に」

「光格天皇は、宇多朝以後廃絶せし諡号(しごう)を贈られた天皇。仏教に帰依された天皇には、諡(おくりな)はない。光格天皇は、『大日本史』の書名を大変お喜びになられたとの事だ」

「それでは何故に、水戸藩にて『大日本史』の書名が憚(はばか)られたなどと申されるのですか」

『大日本史』の編纂事業が再開されたのは、斉昭殿の祖父、六代藩主治保(はるもり)侯の時。立原翠軒(すいけん)

殿が、彰孝館総裁を勤められた。七代藩主治紀（はるとし）侯の時、『大日本史』の編纂事業に藤田幽谷（ゆうこく）殿が登用された事は御存知か」

「勿論です。治紀公は明君であられ、藩の門閥政治を打破らんと人材を登用されたと聞いて居ります。時あたかも、夷国船が常陸沖に出没。治紀公は藩政改革を断行されんとされた矢先に非業の死を遂げられたと聞いて居ります。それが何か」

私は怪訝な顔を浮かべた。

『大日本史』の書名をめぐり、立原翠軒殿と藤田幽谷殿が対立されたのだ。藤田幽谷殿は、『大日本史』の書名に反対されたのだ」

「そのような事があるものですか。藤田幽谷先生は、『正名論』において『天に二日なく地に二王なし、皇朝に真天子あれば、幕府は宜しく王朝と称すべからず』と申された尊皇家です。

何故に『大日本史』の書名を憚（はばか）られたなどという事がありますでしょうか。何かの間違いではないのですか。水戸藩の木村謙次殿は、エトロフ島に『大日本恵登呂府』と書した木標を立てて来られたのです。何故に、水戸藩が『大日本史』の書名を憚る事などありましたでしょうか」

川原は私の剣幕に驚いた顔をした。

「貴殿は、孔子が大勇という事を説いたのを存じて居るか」

「心得て居ります。自ら反省し正しければ、たとえ相手が千軍万軍であろうとも、勇往邁進する事です。それがどうしたと申されるのですか」

「それでは、林羅山が井伊直孝（なおたか）殿に向かって、大勇を求められた事を存じて居るか」

「存じません」

「それでは、一つ話して進ぜよう」

川原は席を進めた。

「直孝殿は自分の勇猛さを広言して居られた。それを羅山が、戦場の勇のみが、勇ではないと窘（たしな）められたのだ」

「どういう事でしょうか。川原殿は、何をおっしゃりたいのですか」

私は川原の腹を探った。

「貴殿の事を申して居るのではない。羅山は直孝殿に將軍忠諫の勇を求められたのだ」

「將軍忠諫」

「家光公は、羅山殿に『本朝編年録』の編修を命じて居られたのだ」

「それが、どうしたと申されるのですか」

「家光公は、修史事業の事で病と称して諸侯に面会されなくなったのだ」

「それが忠諫を必要とする事なのでしょうか」

「家光公の修史事業は、宇多天皇の項を加えて醍醐天皇以後を編修しようとしたところで、中断となったのだ。家光公が世を去られると、羅山殿の息子の恕殿が家綱公の命で続編を編修し、『本朝通鑑』として幕府に献上されたのだ」

「それと『大日本史』の事と、どういう関係があると申されるのですか」

「羅山殿は、洛東山建仁禅寺に入り修行するも、剃髪が嫌で寺を出られたお方。幕府の仕官の際は、目を瞑って髪を

きり、縫掖(ほうえき)を着、法印の官をうけられたのだ。羅山殿が法印をやめ、大学頭に任じられる事になったのは、光圀(みつくに)公の建議によるもの。光圀公は、彰考館で縫掖(ほうえき)を着た者たちの髪をのばさせ、初服にかえさせて居ったのだ」

「それでは、光圀公と羅山は同志だとも申されるのですか」

「そうだ。光圀公は尾張公紀伊公とともに將軍に謁見する際、幕府に献上される『本朝通鑑』をみて驚かれたのだ」
「何故にですか」

「日本の始祖は、呉の太伯(たいはく)の後裔であると書かれてあったからだ」

「全く、酷い話です。外国の書物などには、我が皇室を姫氏であるなどと書いたものがあると聞いた事があります。あの水戸藩が修史した『大日本史』にしても、北朝の五主を後小松紀の冒頭に掲げてあるのです。誰がそのような愚かな事をしたのでしょうか」

「愚かな事ではない。尊王家の事ゆえ、事を秘されたのだ」

「何故に、そのような事を申されるのですか」

「編年や年次表現に事実が隠されて居るのだ。修史事業には困難が付き纏うものだ。それは、神代にもまして謎多き事だ」

私は川原の説明に不満な顔をして見せた。

「神代の事は本当なのでしょうか」

「それは分からぬ事だ。光圀公も神武紀の冒頭に載せるわけにいかないとおっしゃり、上古の神々の御功業・御徳化の事は、『大日本史』では儒教の考えを参考に天神本紀・地神本紀を作られ載せられたのだ」

「何故に、光圀公は儒教を手本とされたのですか。我が国には、固有の神道があるではありませんか」

「太古の事は、唐土にては消え失せ我が方に僅かに面影が残るも、その事蹟の説明は彼の地の文献の方が優れて居るからだ。何れにしても神代の事には、あの北畠親房も困惑して居る」

「北畠親房公が、何を困惑されたと申されるのですか」

「伊弉諾尊（イザナギノミコト）・伊弉冉尊（イザナミノミコト）が生みたもうた大八洲という山海草木の地には、それらにはみな神名がついて居るが、神がまず天より降って物を生みたもうたものか、または物がまず発生してから神がそれに依りたもうたものか、神代の事ゆえ、分からぬと」

川原は更なる困惑の表情を浮かべた。

「神代の事は、致し方ないとしても、神武天皇をはじめ、代々の天皇の御陵の場所さえ明らかにされて居らぬのは、皇国の恥ではないでしょうか。ある方のものは、深い山の苔の下に埋もれ、ある方のものは、荒れた野原の草むらに放置されて居るのです。」

神武天皇に至っては、文久年間に漸く宇都宮藩によって治定されたのです。大君の御陵がこの有様では、何とも情けない話ではありませんか。幕府の罪、甚だしいと言わざるを得ません。そのような者たちが、蝦夷地開拓云々するなど、言語道断の事です。幕府は一体、何を恐れたというのです」

「カムチャツカに古代日本の郡県制を再興しようとする者たちだ」

「あのような地の果てに、何が出来るというのですか」

「やり方次第では、大きな良い土地が出来る。オランダ国の首都アムステルダムも北緯五十一度で、気候もカムチャツカと同じだ。オランダ人は遠くに渡航して、数多くの土地を開発した。」

本多利明殿などはカムチャツカの地に、清国の康熙帝が国中の英雄豪傑を選舉し国政を改革したように、あるいは古日本国が身分を問わず抱負のある人物を官吏に用いたように、あるいはまたオランダ国の開祖が国を興したように、国を興そうとしたのだ。国を治める根本は、渡海運送交易にある。カムチャツカのような最果ての地でも国は興せる」と

「川原殿も、地の果てでも国を興せるとお思いのですか」

「そうだ。我が国も国内のみならず広く海外と交易を行えば、飢饉で餓死する者もなくなる。もし自然治道が行われていたなら、大塩殿も乱を起こさずに済んだものを」

川原は口惜しげに言った。

「川原殿が申される自然治道とは一体、どのような事なのですか」

「簡単に申せば、有無を融通する事だ。我が国三千数百万人の民のうち、人並み以上の生活をしている者は五、六百万人。残りは食うや食わずの生活だ。今も、多くの者が職にも就けず空しく日を送って居る。地方地方の物産を興し、流通をよくし、海外の貿易を行えば、この者たちも職に就ける。そのために渡海運送交易を盛んにするのだ」

「諸藩に交易を認めぬ幕府に、そのような事、行える筈がありません」

「そうだ。交易の事は、幕府の存亡にかかわる大問題。だから、本多利明は蝦夷地の遙か彼方に皇国を再興しようとしたのだ」

「そのような途方も無い事、信じる者が居ったのでしょうか」

「耳を傾ける者などなかった。桃太郎が鬼が島に鬼を退治に行くようなものだと言って。寅も東北に行ったではないか」

「川原殿は松陰先生が、東北に鬼退治に行つたと申されるのですか。今日はそのような事を申されようと、お話されたのですか」

私は立腹して言った。

「からかつてなど居らぬ。」

『多賀の古址(こし)に古碣(こけつ)を尋ぬ、蝦夷鞅鞞(まつかつ)字なほ新たなり。

憶ふ昔朝廷遠図を壮にし、胡を呑むの氣象百蕃を備(おそ)れしむ。

千余年後往時を問へば、空しく男児をして涙巾(きん)を沾(うるほ)さしむ』

寅が多賀城の碑を見て詠んだものだ」

「それでは、幕府は何を恐れたのですか。本多利明とは、何者なのですか」

「天下の万国の内、何れの国から人道最初に開闢(かいびやく)したかを探索された方。利明殿唱えるに、六千余年の前、アフリカの埃及(エジプト)なりと」

「世界の文明は、アフリカから始まつたと申されるのですか」

「そうだ。支那と日本はこれに大いに遅れ、堯の代より三千八百余年、神武帝より一千五百余年。我が国の文明の歴史は、エジプトの半分にも至らぬと」

「神武帝より一千五百年と申されるのは、誤りでは」

「誤りではない。兎も角、幕府は蝦夷地の事で王制復古をはかろうとする者を警戒した。今でこそ尊王思想は憚れる事はないが、その頃幕府の忌諱(きき)に触れたら、どうなった事か。だが流石の幕府も、將軍家の学問を禁じる事は出来なかつた」

「將軍家の学問」

「古学の伝統を伝えたのは、將軍家だ。家康公は誰よりも天下が泰平たる事を欲せられた。その將軍家の学問は、一橋家島津家に継承された」

「薩摩が何故に」

「一橋家を創設された宗尹（むねただ）殿は、吉宗公の第四子で、娘様の保姫（やすひめ）様を島津重豪（しげひで）殿に嫁がせて居られる。その重豪殿の茂姫様は、第十一代將軍家斉公の夫人となられるが、その家斉公は宗尹（むねただ）殿のお孫様。家斉（いえなり）公の弟様であられた一橋斉敦（なりあつ）公の英姫（ふさひめ）様は、重豪殿の曾孫斉彬（なりあきら）殿に嫁がれたのだ。」

家斉公といえば、お妾四十人、お子が六十人という光源氏さながらの生活を送られたが、家斉公は歴代の中でも英主に数えられる將軍であられたのだ。晩節を汚されたのは、真に残念な事であったが。

そもそも幕政が行き詰まったのも、家康公の大道術を継承しなかったからだ」

川原は真面目な顔をして言った。

「大道術？」

「そうだ。家康公の深慮だ」

「深慮」

「林羅山の師・藤原惺窩（せいかわ）は、海外貿易の心得として義理鄭重、人類交通の要を説かれた。家康公がオランダ人の宗門に対し見識を示され、英人ウィリアム・アダムスと蘭人ヤン・ヨーステンを重用されたのも故無き事ではない。

幕府が長年の鎖国を破り開国に至ったのも、古学の復興があつたればこそだ。

寛永七年に幕府は宣教師による三十二種の漢訳洋書の輸入を禁じて居ったが、吉宗公の時、解禁されたのだ。吉宗公が神田佐久間町に天文台を設けられたのは、清朝の治世に影響を受けたものだ。

本多利明殿は、宝永五年にイタリア人シドッチが来日したのは、天主教とともに自然治道を教示するためだと申されたのだ」

川原は異人と韃靼(だつたん)人を崇拜する類の事を口にした。川原は何を言いたいのか。松陰先生は満州族と闘った明末の王党派を理想とされたのだ。満洲族の韃靼(だつたん)王など相手にするから、幕府は滅びたのだ。

「清朝の治世」

「順治帝・康熙(こうき)帝父子の治世だ」

「それで、どのような影響を受けたと申されるのですか」

「順治帝は、太子冊立に際して文武両道に精進している康熙帝を選ばれた。武を尊ぶ韃靼(だつたん)人として当然の事であるが、それ以上に康熙帝は漢書を読まれ、耶蘇会派の宣教師から幾何学や天文学を学ばれた。康熙(こうき)帝のもとには、フランス耶蘇会から宣教師が派遣されて居ったのだ」

「それと將軍家と、どういう関係があると申されるのですか」

「康熙(こうき)帝は万機親裁を旨とされたのだ。毎日、六部の長官と拝謁し、大事は閣老に意見を求めたが、裁定は自ら下された。中央地方の要職には聡明な善吏を置き、行幸に際して官吏の不正に対しては直訴が認められたのだ。康熙帝は更に、民の便益と商業の便宜を図るために運河橋梁小舟の整備に莫大な資金を費やされた。

家斉公が薨去(こうきよ)されるや、家慶公が自らの新政を公事上聴に基づく將軍の親裁である事をお示しになられたのも、この為だ。

所で、吉宗公が『六諭衍義大意(りくゆえんぎたいい)』というものを出版なされたのを御存知かな」

「存じませぬ」

「清朝で康熙(こうき)年間に出来た道德書だ。薩摩藩より吉宗公に献上され、室鳩巢が幕府の命で和訳したものだ」

「吉宗は清朝の道德書など、何故にそのような事を」

「綱吉公の時代に儒者が学問をやめたからだ。吉宗公は、荻生徂徠に密かに治世に関する意見を求められた」

「徂徠(そらい)は何を申したのですか」

「徂徠は、吉宗公に驚くべき事を申された。孔子も『人民を富ませてから、その後に教える』と説いて居るように、国や天下を治めるにはまず経済を豊かにするようにと」

「吉宗は道德を説いたのではないのですか。それが、驚くべき事と申されるのですか」

「このような事、驚くに値しない事だ。話はまだあるのだ。それで徂徠(そらい)は、御蔵に所蔵されている切支丹宗門の書籍を儒者に見せ、吟味させるよう吉宗公に申し出たのだ」

「儒者に切支丹宗門の書籍を。徂徠(そらい)は何故にその様な事を」

「先王の道を古代では、道術と言って居ったからだ」

「それと儒者に切支丹宗門の書籍を吟味させる事と、何の関係があるのでしょうか」

「道としたのは、後世の儒者が術の字を嫌つての事だ。康熙(こうき)帝などは、儒教の原理と天主教の原理とが吻合(ふんごう)するものと信じて居った」

「儒教と天主教がですか」

私は耳を疑った。

「耶蘇会士マッテオ・リッチの『天主実義』を読んで悟られたのだ。儒教における天や上帝の語が、切支丹神学の天主と同一の意味だと」

「それは韃靼(だったん)人の王の事ゆえ、考え違えでは」

「考え違えなどではない。ロシア人もだ」

「ロシア人も」

「彼らは『書経』『詩経』『論語』を翻訳し、ペテルブルクの大学で検討した」

「それでどうになりましたか」

「自分たちの信じているキリスト教と同じだという事になった」

「そんな馬鹿な」

私は声を上げた。

「馬鹿ではない。太古の昔、幸福な時代があつたのだ」

「幸福な時代？」

「道は整えられ、高い山々は低く削られ、深い谷間は高くもり上げ、国境の中に住む生きとし生けるものすべてが、神の救いを見出す事が出来た。それが不幸な時代となると、天界は作用を及ぼさなくなり、大地は活力を発揮しなくなった。人間が生み出したものといえ、虚無と混乱のみだ。人間の罪ゆえに、摂理への働きかけは妨げられ、人間の営みは邪道に陥つたのだ」

川原はそう言うと、例の鞆の中から書き物を取り出し読み上げた。

『古今の時勢を通考するに天下の民は速かに相親しむ者にして、其の勢ひ人力のよく防ぐ所にあらず。蒸気船を創

制せしよりこのかた、各国相距る事、遠きも猶近きに異ならず。かくの如く互に好みを通ずる時に当たり、独り国を鎖して万国と相親しまざるは、人の好みにする所にあらず。貴国歴代の法に異国人と交を結ぶ事を厳禁し給ひしは、欧羅巴州にて遍く知る所なり』

「それは何ですか」

「オランダ国王ウイレム二世の家慶公に宛てた親書だ。弘化元年、西洋暦の一八四四年、特使コープス海軍大佐が、国王親書を携え軍艦パレムバン号にて長崎に来航した時のものだ」

「川原殿は何故に、そのような重大なものを」

「桂川甫周（ほしゅう）先生が訳されたものだ。渋川先生や森山殿が訳されたものもある」

川原は続けた。

『「今、貴国の幸福なる地をして、兵乱の為に荒廃せざらしめんと欲せば、異国人を厳禁する法を弛め給ふべし。これ素より誠意に出る所にして、我が国の利を謀るには非ず。夫れ平和は懇（ねんごろ）に好みを通ずるにあり。懇に好みを通ずるは、交易に在り。冀（こいねがわ）くは、また叡知を以て熟計し給はん事を』」

川原は文書を鞆に収めると、また話を始めた。

「オランダ国王ウイレム二世は真摯に家慶公に御忠告されたのだ。天も上帝も顧みられない不幸な時代になると、こうなるのだ。どうだ。文意簡素にして、オランダ国王の至誠が感じられるではないか。家慶公も、開国に備えられた。

先ずは、江戸・大坂近傍十里四方にある大名・旗本の土地を返上させ、幕府の直轄地にしようとされた。その上で、家慶公は公認の株仲間を解散させ、品物の行き来を自由にせんとされたのだ」

「それが開国の備えと申されるのですか」

「そうだ。しかも、江戸の物価も下がる。水野越前守は家慶公に『上を損じ下を益し候の御仁政、上代に恥じざる御美事』との賛辞を述べられたが、内心忸怩(じくじ)たるものがあつた」

「忸怩(じくじ)。どういう事なのでしょう」

「紀州家の御付の安藤飛驒守と水野土佐守が、水野越前守に意見されたのだ」

「紀州が何を」

「大納言家御領分の儀だ。御国初めの砌(みぎり)より、深き御趣意あつての事と申される。それで水野越前守は御三家の御領地は天領も同様と、上知に及ばぬとの考えに改められた。

この時、耀蔵殿は鳥居家の者なれば、紀州家の申し出に荷担されるが筋なれど、水野越前守に鋒を反し、御三家御領地例外の儀を排されたのだ。阿部遠江守などは、三河御譜代の武士には似合わしからぬ挙動と非難されたのだが」

「鳥居耀蔵は何故に」

「耀蔵殿は、江戸に生れ玉川の上水にて産湯を遣いたれども、鳥居一門の傲骨(ごうこつ)は存じて居らぬ。政治の上にては、その説、合すれば疎遠の人とも手を携え、その説、同じからざれば、信交の人たりとも手を振って分かれると申されたのだ」

「それで、將軍家慶は」

「水野越前守の職を免じられた」

「鳥居耀蔵殿に与したと言う事ですか。それで、開国の話は頓挫したと」

「頓挫などして居らぬ。天保十三年、難破船に対して再び薪水を給する事になったが、家慶公はこれをオランダ甲比丹(カピタン)に命じて欧州各国に伝達させて居られるのだ。国書を贈つて来たオランダ国王が、軍艦を遣わしたの

も、将軍家の返翰を護るためだ」

「将軍家の返翰？」

「シーボルトの事があつたからだ」

「シーボルトの事」

「文政十一年、シーボルトを乗せ帰国せんとした商船コルネリウス・ハウトマン号が、台風で座礁していたからだ。十六年の月日を経てウイレム二世は、もし開国和親の策に関心があるならば、オランダの優秀な人物を日本に送ると提案されたのだ」

「オランダは、ナポレオンの支配下にあつたのではないのですか」

「ナポレオン一世がライプツヒヒでの戦いに敗れると、文化十年、西洋暦の一八一三年にウイリアム五世のご子息のウイレム一世が英国から戻られ、新たなオランダ王国の国王となられた。ウイレム二世の御父上のウイレム一世は、御国を富裕にせんと力の政治を信奉されたが、天保十一年、西洋暦の一八四〇年に御即位されたウイレム二世は、国民との対話に努められた開明的な英主であられたのだ。

幕府はオランダとの折衝を、若き日の阿部殿に委ねた」

「何故に、阿部伊勢守が」

「水野越前守では差し障りを来たす。第一、国内が収まらぬ。福山藩の阿部殿ならば、御三家御領地云々はしない。蘭語も出来る。先ずは、長崎のオランダ商館に祖法を変えられぬと返答し、海防掛を設け、開国和親の事に備えることとした。弘化元年には、フランス軍艦が唐人を乗せて琉球に来航し、和好貿易天主教の三件を求めて来た」

「琉球人は何と」

「勿論、断った」

「それでフランス艦隊は」

「那覇に宣教師を残し、後で大艦隊が来ると言つて去つて行つた」

「大艦隊は来たのですか」

「大艦隊は来なかつたが、弘化三年再来航し、一昨年申し出の返答を求めた」

「幕府は何をして居つたのですか」

「琉球の事は家慶公の御意向だ。薩摩藩の調所殿が奔走された」

「その薩人は何をしたのでですか」

「和好貿易天主教の三ヶ条すべて拒絶してはと、阿部殿に交易を少々行かうよう申された。イギリスも琉球に貿易を求め、ベッテルハイムという宣教師を残し去つて行つた」

「イギリスもですか」

「そうだ。幸いな事に、イギリスもフランスも清国の事で手一杯であつた」

「イギリスもフランスも申し合わせたように何故に、宣教師を残し去つて行つたのですか」

「天文の時代に日本に伝えられたキリスト教と違う事を証するためだ」

「そのような事、信じる者などいたのでしょうか」

「いた」

「誰でしょうか」

「家慶公だ。家慶公は、天主教を信仰されて居られたのだ」

「将軍家が天主教を」

「そうだ。斉昭殿は姉小路という大奥の上臈（じょうろう）に口添を頼んだ程だ」

「何をです」

「交易すれば邪教が広がるから、交易をなさらぬようにと。この姉小路は、京の大納言橋本実久卿の娘で、あの水野忠邦殿にして憚られたという才識兼美。家斉公の後房に入り、家慶公の時に上臈（じょうろう）となられた。

斉昭殿がどのように申されようとも、家慶公の御意向が変わるものではない。姉小路は阿部殿に御内意を伝えられた。薩摩の世子を帰藩させ、交易など時宜に応じて取り計られるようにと」

「それで薩摩藩は」

「帰藩された斉彬（なりあきら）殿が琉球に人を遣わし、イギリス、フランスの宣教師から西洋の国情を聞き出したのだ」

「それで」

「彼らのキリスト教が、天文の時代に日本に伝えられたキリスト教と違う事をお確かめになられた。

斉彬殿は琉球での交易も考えられたが、琉球人が清国を憚って応じない。自藩の山川港開港も考えられたが、藩内もそのような情勢になかった。

家慶公が欧州各国に打払い中止を伝達したものだから、嘉永年間には異国船が頻繁に近海に出没し、イギリス船に至っては浦賀や下田沖で測量を始めた。これには、国の面目に拘わると、阿部殿は文政の異船打払令の復旧を有司に諮問された」

「それで有司は何と」

「不可と」

「何故に」

「上下の不和を起こしたくなかつたのだ。水戸藩もだ」

「水戸藩もですか」

「そうだ」

言葉を濁す川原を更に問い詰めると、川原は水戸藩の内情を話して呉れた。

「御存知の事と思うが、斉彬（なりあきら）殿はペリーが来航した時、幕府に申し出られた。アメリカに三年間、貿易開始の猶予を求め、その間に戦艦を建造し、諸侯に沿岸防備を命じられるようにと」

「それで幕府は」

「薩摩の斉彬殿が何を申されようとも、幕府は聞く耳をもたぬ。水戸の斉昭殿にも一国一郡の狭隘な防備では皇国の軍備とはならぬと再三、申し上げて居られたが、斉昭殿とて幕府第一だ」

「斉昭公までもが。幕府は事前にペリー艦隊の来航を知っていたという話ではありませぬか」

「数年前からオランダ商館の風説書（ふうせつがき）で幕府は知って居った。アメリカ艦隊が浦賀に来航したのは、ペリーが初めてではない。ペリーが来航する七年前の弘化三年にも、アメリカ東インド艦隊司令長官ビッドルが来航して居る。浦賀奉行に大統領の親書を渡し、幕府への回付を依頼してきた」

「幕府は何と」

「鎖国は国是だと断った」

「それで、ビッドルは」

「引き上げて行つた。アメリカとは、そういう国だ。大統領から言い含められて居つたのだ」

「ペリーは言い含められて居らなかつたのですか」

「言い含められて居つた」

「それでは、ペリーは何故に」

「ペリーは誇り高い男だ。ビッドルの二の舞になる事を恥じたのだ。ペリーは皇帝宛の親書を受領するにふさわしい人物を任命しないのなら、上陸して武力に訴えてでも親書を手渡すと迫つたのだ」

「それでは、ペリーは大統領の命に背いた背信者ではありませんか」

「それでもしなければ、大統領の国書が家慶公のお手元に届かぬとでも考えたのであろう。江戸城に乗り込み、家慶公と直に交渉すれば、好みを結べるものと考えたやもしれぬ」

「ペリーという男は、傲慢な男ではありませんか」

私は憤りを新たにした。

「それで幕府は、どうしたのですか」

「ペリーの容易ならぬ姿勢を察知した浦賀奉行戸田伊豆守が、ペリーの手限の御指図ではないかとの上申書を江戸に送つたのだ」

「それで幕府は」

「此度のペリーの態度は、ビッドルと異なり強引だ。老中・若年寄が議論し、戦争は出来ぬという事で国書を受け取る事とした。ペリーは浦賀奉行と接見し大統領の国書を渡すと、来春の再来航を告げて日本を去つて行つた」

「ペリーはそれで満足して、去つたと言うのですか」

「通商の事など申して居ったが、ペリーは日本に関する書籍を読み漁り、シーボルトにも会っていたくらいだ。日本の内情にかなり精通して居ったのだ。米清通商条約を記した小冊子を日本側に贈り、書簡に白旗二旗を添え渡し、引き揚げて行つた」

「その書簡に無智の政体と嘲笑してあつたという話は、本当なのですか」

「それは、松平春嶽公がペリーの書簡を読み、無智の政体と称する類のものと申された事だ。ペリーは、無智の政体などと書いては居らぬ。尤も我が国は皇国。封建の制を無智の政体と言われても致し方あるまいが」

「そのような事がありますでしょうか。挑発したではありませんか。やはり一戦交えようと」

「そのような事ではないのだ」

「それでは、どのような事と申されるのですか」

川原の話には、何時もの快活さはなかった。

「幕府の英明な者達の奮起を促したのだ。それでペリーは大統領の国書を渡すと、引き揚げたのだ。ペリーは日本を離れ、琉球、香港、広東、マカオで諸外国の動向を探った。長崎にはロシアのプチャーチンが来航して居る。フランスにも動きがあつた。だが清国の情勢は、ペリーの再来航を許すものではなかった」

「それでは何故に、ペリーは再来航したのですか」

「日本の事で、フランス、ロシアに先を越されてはとの思いだ」

「再来航の事も、ペリーの独断であつたと申されるのですか」

「そういう事だ。真冬の悪天候を承知で、日本巡航を執行した。それでペリーの再来航が早まったのだ」

「ペリーは本当に通商を求めて皇国に来たのでしょうか。皇国に対する野心があつたわけではありませんか。アメリカと

の交易が取り分け盛んになったとは、思えませんし」

「それは国を南北に分けた内乱、交易どころではなかつたのだ。幕府もアメリカの真意を掴みかねていた。オランダ商館長にアメリカの狙いを問い質したりもした」

「商館長は何と」

「アメリカは、世界に先駆ける国だと」

「アメリカは、何を世界に先駆けようというのですか」

『「さても又ついには洩らす声なるを待つにつれなき時鳥哉」。阿部殿の御心境だ』

川原は話を逸らした。

「そのような呑気な事を言つて居るから、アメリカから侮りを受けるのです。オランダはアメリカとの和親交易の事を承知したのですか」

「オランダは欧州の小国。アメリカを止める力など持ち合わせては居らぬ」

「オランダ国王への信義は、どこへ行ったのですか。ペリーは、一体何をしに来たのですか」

「通商を求めに来たのだ。ただ、幕府は頑なだ。それでペリーは幕府に申したのだ。オランダ船より通達した通り、諸方の通商是非に希に非ずと。不承知ならば、干戈（かんか）を以て天理に背くの罪を糺（ただ）すと」

「矢張り、恫喝しに来たのではありませぬか。傲慢不遜な物言いです。通商を是非になど申して居らぬなどと。それで英明な者が奮起するでも考えたのでしょうか。愚かな者ではありませぬか。外にペリーは何を申し立てたのですか」

「その方も国法を立て防戦いたすべしと」

「国法？」

「通商の法だ。さすれば、日本も世界と敵対する事もなくなるだろうと。その節には、此度贈った白旗を押立てるよ
うにと。然らば此方の炮を止め、艦を退けると」

「それこそ、恫喝と申すものではありませぬか」

「馴染みの話だ」

「馴染み。何が馴染みの話と申されるのですか」

「これはケンペルの時からある話なのだ。西洋では神の子として生きる人民は、全人類の共同の住所として選ばれしこの地球の上で、有無相通じ人倫互に扶助しながら通交同好の法則を厳守せねばならぬ事になつて居る。もしこれに従
わぬ者あらば、天心を軽侮するものとして、その罪は人を殺したものに等いと」

川原は諭すように言つた。

「そのケンペルとは、何者ですか」

「オランダ商館付の医師だ。綱吉公に謁見した事もある」

「そのケンペルが、どのような話を。ケンペルも開国を迫つたのですか」

「いや、その逆だ」

「逆？」

「ケンペルは記紀や源平合戦の事から日本人の習俗を知り、日本人は世界のどの国民よりも優れていると」

「それは幕府に取り入れられようとしただけではありませぬか」

「そうではない。ケンペルは日本人が世界で稀にみるほど幸福でありえたのは、世界との交通を断ち切つたからだ。

そうした事は、あちらの伝説にもあるのだ」

「伝説？」

「長崎で通詞をして居られた志筑（しつき）忠雄殿が、ケンペルの書いたものを翻訳されて居られる。バビロン国にバベルという名高き高台があったと」

「それがどうしたというのですか」

「太古に大洪水あり、万民悉（ことごと）く沈溺（ちんでき）し、ノアの一党だけがアルゲという大きな樽（いかだ）を作り災を免れた。そのノアの一党はバビロン周辺に国をなし、大洪水から百年ばかりして、衆人が塔を築こうとした。しかし、天は民を徒党に分け一体となる事を出来なくしてしまった。四方に分散したノアの一党は、この者たちの上世の習いで、その地で国権を手にする事なく、その地の人と仲睦まじく生活を送る事にしたのだ」

「天は何故にそのような事をしたのですか」

「人の増長を憎んだのだ」

「何故に」

「人が世界一統を目論んだから」

「そのような事が、増長というものなのではないですか」

『『春の風に花さき緑そふといえ共、秋の霜来て、葉おち木しぼむ』』

「何をおっしゃられたいのですか」

「兵法の心得ではないか。物の十成する所、天道の成敗というものだ。人も同じ事だ」

「それが天罰というものなのではないですか」

「そうだ。天は人の増長を憎み、二度とその様な事が出来ぬように、言葉を乱したのだ」

「それではペリーが日本に遣つて来たのは、バベルに塔を築くようなものではありませんか。それにしても妙な話ではありませぬか」

「何がだ」

「ペリーが白旗を幕府に贈つた事です。ペリーは本当に日本に通じて居つたのですか。將軍家は源氏の総大将。源氏の白旗は清和天皇第六皇子・貞純親王が日本弓矢將軍として武門を相続した時に由来するものではありませんか」

「それで、ペリーが將軍家に白旗を掲げると申したと言うのか」

「そのような事は、申して居るものではありません。武門の誉れ高い將軍家が夷人相手に一戦も交えないとは、まるで安倍貞任（あべのさだとう）の時のようではないかと」

「ペリーは足許を見たのだ」

「足許？」

「御内意だ。家慶公の。ペリーが再来航すると、林復斎（ふくさい）殿がペリーの応接に当たる事を申し出られたのだ」

「林大学頭がペリーの応接をしたのですか。学者など軍人の応接役に当てる、侮りを受けたものではありませんか」

「復斎（ふくさい）殿は兵法の達人。アメリカ側が浦賀本牧鼻に白旗を掲げた事ゆえ、先ずは私どもへ御任せ下されと申されたのだ」

「兵法の達人？」

「そうだ。復斎（ふくさい）殿は兵法の達人だ」

「それでは復斎殿は、ペリーの裏を突かれたという事ですか」

「どういう事だ」

川原は腑に落ちぬ顔をした。

「木の樹皮を削り白くしておいて、夜に文字を認めに来た者の火を目掛けて、石弓を打ち放つのです。孫子の兵法です」

「貴殿は知って居るのか」

川原は驚いた顔をしていた。

「何をです」

「小柴村の事だ」

「小柴村に何があったのですか」

「小柴村の崖の事だ」

「崖に何があったと申されるのですか」

「崖の上に松があり、アメリカ人がその松を仰ぎ、頭を下げて居った事だ。知らぬのか。相模警衛の松平誠丸典則（つねのり）殿の家来が、怪しみ、調べに行くと、そこには、横文字が記されてあったのだ。本牧（ほんもく）鼻八王子大権現社下の岩にも横文字が認めてあった」

「それで、大学頭は石弓を打ち放ったのですか」

川原は笑った。

「そのような事、復斎（ふくさい）殿は致さぬ。復斎殿は斉昭殿の再登用に、御上の嫌疑を以て退隱を命ぜられしものと反対されたお方だ」

「それでは林大学頭は、ペリーに何をしたと申されるのですか」

「急ぎ大統領国書に対する返信をペリーに送られた」

「どのような」

「古来の法律に愛着をもち続ける事は、時代の精神を取り違える事であると思われるが、家慶公が病気で亡くなられた今、古来の諸法律の変更は不可能となったと」

「時代の精神とは、大袈裟な物言いではありませんか。ペリーは何と申して来たのですか」

「漂流民に対する苛酷な取り扱いを続けるならば、わが国はそれを敵対行為と見なし、戦う覚悟はできている。墨西哥(メキシコ)のようになるかもしれないと」

「やはり交戦の口実を探してたではないですか」

「ヤンキーは駆け引き上手だ」

「ヤンキー？」

「アメリカでは、ニューイングランドの変わり者をそう呼ぶ。海舟殿も、ペリーは変わった男だったと言って居られた。偽りを以て真を得る。表裏は兵法のいろはだ」

「ペリーは、何者なのですか」

「彼の者の氏素姓は分からぬ。ただ、ペリーは機前という事をよく心得て居った。やはり、兵法の達人だ」

「それで林大学頭はどう応じたのですか」

「情勢上やむを得ないのなら、わが国も戦を始めようと」

「林大学頭はアメリカと一戦交える気であったという事ですか」

「そうではない。貴殿の申立ては誤っていると、ペリーに申したのだ。ペリーは、日本が遭難者を奴隷のように扱って居

ると言つて来たのだ。幕府は遭難者をそのように扱つては居らぬ。オランダ商館に引き渡し、母国へ送り返していたのだ。以前、松前に漂着したアメリカ人の身柄を拘束した事はあつたが、我が国の国情を探らうとした者だ」

「幕府は何故にその者を打ち首にしなかつたのですか」

「そのような人道に外れた事、幕府の行方う所ではない。林殿もペリーに申した。この件は、戦争を要する問題ではないと。ペリーもそのような事、百も承知だ」

「それでは何故に、ペリーは。恫喝でもすれば、幕府が折れるとでも考えたのではありませんか。無礼ではありませんか。ペリーも頭を下げるという事を知るべきです。傲慢というものではありませんか。奴等は、いちやもんを付けずにいられないのです。心の安寧を知らぬ者たちなのです」

「それがヤンキーの交渉というもの。だが、貴殿が考へて居るほど、ペリーは傲慢な男ではない。ペリーは象山殿には頭を下げたのだ。居並ぶ幕府高官を差し置いてだ」

「何故に、ペリーは象山先生に。やはり象山先生は、アメリカと内通して居つたのでしょうか。それ故、松陰先生の下田密航の事も」

「そのような事、断じてない」

「それでは、何故にペリーは象山先生に頭を下げたのでしょうか」

「あの威容だ。日本人でも、象山殿のどんすの羽織に古代模様の袴姿を見たら、畏れを抱かない者は居らぬ。ペリーも徒(ただ)ならぬものを感じたのだろう」

「その様な事、思ひ過ぎではありませんか。それはいつの話ですか」

「応接所警備の松代藩陣屋を通つた時だ。何れにしても、アメリカとの交渉は、友好的なものであつた。アメリカ船に

は、下田箱館兩港にて薪水・食料・石炭を供する事とした。難破船員の取扱いも、公正な法に処して取り扱う事とした」

「アメリカの法に服せと申されるのですか。鯨を捕りに勝手に日本近海に来た者たちに何故に、薪水や食料を与えねばならないのでしょうか。それこそ、頭を下げるべき事ではないのではないのでしょうか」

私は不満な顔をしてみせた。

「万国万民に共通にして公正な法に服するのだ。アメリカ側も、日本側の誠意に伝えて、ポーハタン号にて宴会を開いた。軍楽隊が西洋音楽を奏で、謂われあるエチオピア人軍団が踊を催し、我等を歓迎して呉れた」

「エチオピア」

「エジプトを流れるナイル川上流にある国だ。勿論、エチオピア人が踊って居ったのではない。白人が顔を黒塗りにして、踊って居った」

「そのような物、面白い物なのではないか」

「ペリーは、復斎（ふくさい）殿を楽しませんとしたのだ」

「林大学頭を。どういう事でしょうか」

「復斎殿は、『通航一覽』を編纂されしお方だ。復斎殿は、にがにがしい顔をされて居られたが、御付きの松崎満太郎殿などは、ペリーに抱きつき、ペリーの肩章を押さえて『日本とアメリカ、皆同じ心』と言って喜んで居られた」

「打払えと言って居られた方々は、黙って居られたのですか」

私は憤りを隠せなくなつた。

「斉昭殿も道理の分からぬ方ではない。江戸を焦土にしてまで攘夷を貫こうとは思わぬと申され、下田箱館の開港を

承諾された。直弼殿も幕府の意向を確かめるべく、二度の上申を行った」

「二度。それで井伊は如何なる上申を」

「最初の上申は、アメリカの兵船を自負して威嚇する姿は無恥蛮夷の常態、鎖国の祖法を変えるべきでない。蛮夷の日夜、損益利害を常談とし、交易の利を公然と掲げる事を恥辱とも思わぬ習俗は、義勇節烈を士夫の職分とし商売の業を卑しむ皇国の風儀と相容れぬものと申上げた」

「勅許を得ずして通商を始めた者の言葉とは、思えませんが」

私が当惑した顔を見ると、川原は少し笑みを浮かべられた。

「直弼殿も斎昭殿に負けぬ慷慨（こうがい）家だ。最初の上書には藩の家老たちも安堵したが、阿部殿が忌憚（きたん）のない意見を申し述べるようにとおっしゃたのだ」

「それで、二度上申を」

「そうだ。阿部殿は、暗に直弼殿に考え直すようにとおっしゃたのだ。それで、井伊殿は再度の上書に及び、蘭領で出貿易を行うよう申し出られた」

「出貿易」

「貿易船を爪哇（ジャワ）のオランダ商館に遣わし、貿易品の一部をアメリカやロシアなどに割り当てるのだ。これとて、井伊殿にしては大讓歩というものであった」

「大讓歩」

「幕府は直弼殿が彦根藩主を継がれる時、藩政改革諮問役に成島司直殿と中川禄郎殿を当てたのだ」

「その者は誰ですか」

「成島司直殿は凶書頭として、林復齋殿の父上であられる述齋(じゅつさい)殿のもと『御実紀』を編述された方だ」

「中川と申される方は」

「井伊殿の二度目の上申書を書かれたのが、中川禄郎殿だ。直弼殿は中川殿の『有無相通ずるは天地の大道也』との文案を見られて、交易方に肩入れしている様に聞こえると、取り除こうとされたのだ。

中川殿は彦根藩士西郷路殿の門に遊び、漁村と号され、漢学で一家を成して居られたが、天保十三年、藩主井伊直亮(なおあき)殿の御召しで、儒員として弘道館の教官となられた。中川殿は長袖者流(ちようしゅうしやりゅう)「長袖者流」

「通商の事は、有無(うむ)相通ずるは天地の大道。中川殿は、寛永十二年に幕府が通商を禁じて以来、日本は世界の田舎となつてしまつたと嘆いて居られた。

そもそもこの話だ。大船建造禁止の事も、吉利支丹(キリシタン)より薩摩を恐れての事であつた」

「それは、どういう事ですか」

「幕府は薩摩日向より一夜にして江戸を襲う事あらばと言つて、慶長十六年、大船建造を禁じたのだ。幕府はオランダ加必丹(カピタン)の返り忠よりも薩摩の邪教の変を憂えたのだ」

「邪教の変」

「慶長十四年に、薩摩藩が琉球に侵攻したからだ」

「薩摩藩が琉球に侵攻したから、慶長十六年に幕府は、大船建造を禁じたと申されるのですか」

「そうだ。後世に至つて、水野忠邦殿が薩州は油断できぬと警戒されたのもこの為だ。藩主が斉彬(なりあきら)殿にならぬ、斉昭殿に大船建設の解禁を説かれた時、老中連が耳を貸さなかつたのは、これとは逆の意味でだ」

「大船建造の事は、切支丹（キリシタン）の事と関係ないと申されるのですか」

「そうは申して居らぬ。兎も角、アメリカとの和親の事は、決して居ったのだ。ペリーが再来航すると、溜間詰（たまりのまつめ）大名、何れも畳に頭を打ち、打ち払いの儀は御免と申し出られた。それだけではない。溜間詰大名は朝廷の意向をもって直交易を主張したのだ」

「先帝の御意向は攘夷にあらせられたのです」

「そうだ。先帝は通信交易の儀はどこまでも許可されなかったが、幕府は只管（ひたすら）平穩に御済ませとの御廟算を下された事にしたのだ」

「そのような事、斉昭公がお許しになられたのですか」

「斉昭殿は、阿部殿に不用意な直貿易をしないよう申し入れたが、阿部殿は今回は通信交易は許さず、五年後を期すものだと御承諾を求められた。和親条約締結後、斉昭殿は阿部殿に防守の策を講ぜず、国法を破るに至ったと御役御免を迫られた」

「御尤もな事です」

「それで、誰が老中筆頭にといい事になったが、席次から言えば、第二席の上田藩主松平忠固殿だ。これには斉昭殿が強く反対した。廟堂俗論の根元である」と

「廟堂俗論？」

「長袖者流（ちようしゅうしゃりゆう）ゆえ。堂上方の御清論だ」

「それで、誰が後任に」

「堀田殿と井伊殿を斉昭殿に諮った」

「堀田備中を」

「そうだ。備中だ。安政四年ハリス参府応接の次第を聞かれた斉昭殿が激怒された話を聞いて居ろう」

「勿論です。斉昭公は、備中・伊賀は腹を切らせ、ハリスは首を刎ねてしかるべしと申されたのです」

「そうだ。堀田殿は天保十二年に老中になりしも、将軍家日光社参の儀で水野越前守に厭われ、他日大任の任に当たらんと、天保十四年、溜間詰格に退かれた。以後、佐倉藩の改革に御専念され、十二年の歳月を経られた。

堀田家の御先祖は、春日局（かすがのつぼね）の御子。阿部殿が堀田備中老中就職の事を斉昭殿に申し入れるも、斉昭殿は大任担当の人ではないと拒絶さる。それで、井伊殿が老中という話になったのだが、これにも斉昭殿は、以ての外と申された。

直弼殿は、品川砲台築造を無用の業と申されたから。直弼殿は世子時代には、攘夷を決行しない幕府の優柔不断な態度を嘆いて居られたのだ」

「井伊は何故に、そのような心変わりをも。成島中川両人のなせる業なのでしうか」

「堀田殿と交際するようになったからだ。溜詰大名、いずれも交易論。井伊家のみ邪論」

「堀田備中に諭されたと申されるのですか」

「堀田殿は歌道に造詣が深く、直弼殿に老中の内証、奥の衆の勤向を巨細にお話になられた。直弼殿も要々のきまりが有り、筋道違いでは万事が運ばぬ事を御悟りになられた」

「それで、堀田備中が阿部伊勢守の後を」

「そうだ。斉昭（なりあき）殿には松平忠固（ただかた）殿を老中から退ける事で納得して貰った。老中首座を堀田殿に譲った阿部殿も、老中に残り堀田殿を支えられた。

斉彬（なりあきら）殿の建言で長崎に挙国的な海軍伝習所が開設される事になり、オランダ国王から蒸気船が献上された。幕閣の間には軍制改革は水戸の隠居と伊勢守のいらざる主張と後言する者も居った」

「堀田備中は、軍制に関与しなかつたのですか」

「阿部殿と斉彬殿に任せられた」

「それでは堀田備中は何を」

「外国事務取扱となり、ハリスとの交渉に当たった」

「堀田備中は、ハリスを如何様に取り扱つたのですか」

「堀田殿には、アメリカの事は然（さ）したる事ではなかつた。イギリス軍艦が渡来し、貿易開始を押し付けられぬうちに、アメリカ・オランダとの貿易開始を布告されるよう阿部殿に申し出られた。

間、限りある国産を限りなき外国の需要に応ずるのに、如何（いか）に経済上、我が国力を維持する事が出来るかと。貴殿は何と答える」

「如何にと申されても困ります。交易の必要はなかつたのです」

「それでは、食うや食わずやの者たちは、どうなるのだ。貴殿も次男なれば、嫁も貰わず、何時までも部屋住みの冷や飯食いでよい訳でもなからう。赤子も何時の日にか立ち上がり、歩き出すものだ。ペリーやハリスは少々お節介が過ぎたが、我等は歩きだそうとしていたのだ。答申を受けた諸有司大名の中には、阿部殿の真意を解さず、斉昭殿を総将とし勝敗を天運に任せると贅言を勞す者もいたが。

西郷も似たような者であつた。斉彬殿に兵備を整え人材を養成して国家万一の危急に備える時に、水戸あたりで

も蘭癖ある者を悪むもの少なくないと意見したのだ」

「蘭癖ある者とは、堀田備中の事ですか」

「そうだ」

「それで斉彬侯は、何と申されたのですか」

「国家の一大革新を行う時である。眼孔を大きくして再びかかる事を申すものでないぞと。当時、強兵には富国が必要であるとの論があつた」

「存じて居ります。軍艦を造るにしても鉄が必要です」

「斉彬殿は、その先を見通されて居られたのだ」

「その先と申されますのは」

「斉彬殿は『民富めば国富む』を一日も忘るべかざる格言とされた。いち早く西洋文明の優れた所を見抜かれた斉彬殿は、製鉄所、造船所、銃砲弾薬製造場は申すまでもない事だが、日用品製造工場を建てられたのだ」

「日用品」

「ある時、斉彬殿が臣下の寺島殿に洋書の翻訳を命じられた事があつた。それには綿の事が書かれてあつた。その事を斉彬殿に申上げると、斉彬殿は無論の事だと答えられた」

「綿などが、どうしたと申されるのです」

「斉彬殿が恐れられたのは、西洋の軍艦や大砲ではない。西洋の綿布だ」

「川原殿は、綿布の如きものが、軍艦や大砲だと申されるのですか」

「そうだ。世界は交易による戦争を行っているのだ。だから、ペリーは国法を立て防戦せよと申したのだ」

「それでは幕府は一体何を防戦したというのですか。ハリスもペリーのように外との交わりを拒めば、世界一統のために取り除くと脅かしたのではありませんか」

「幕府はアメリカに屈したのではない。自らそうしたのだ。幕府は交易を盛んにし、皇国をして世界万国の大盟主、大皇帝と仰がれるようにせんとしたのだ」

「交易を盛んにし、世界万国の大盟主ならんとは、幕府も大風呂敷を広げたものです」

「大風呂敷などではない。正統な学問をした者の所為だ」

川原は真面目な顔をした。

「それでは正統とは、どういう事でしょうか」

私は反駁した。

「今直ぐ分かる事ではない。何時の日にか、思い出して呉ればそれでよい」

「また、その様な事を申される」

「真に分りあえるには、時を要するものだ」

「どうしてその様な事を申されるのですか」

「急(せ)いては事を仕損ずるものだ。巧言令色、鮮(すくな)し仁。本末転倒は禍の元だ。悪用する者も居る」

「悪用」

「そうだ」

川原はそう言うと、鞆の中から書き物を取り出した。

「拙者が今まで書き溜めたものだ。『幕末開国秘史』とでも名付けて世に出そうと思つて居る。今、堀田備中守とハリ

スとの会見のあらましを書いた所だ。よければ、目を通して呉れぬか。兎に角、正しく学問を積む事が肝要だ。お願ひ申す」

幕臣から「お願ひ申す」と言われても、困る事であった。

四

部屋に戻ると、奴は何やら書物を読んで居った。

「何を読んで居る」

「ペリーの日本紀行だ。今、ペリーが久里浜に上陸する所だ」

「それは面白い。何と書いてある」

『軍艦から海岸を見渡すと、久里浜の左手に当たって海岸の山麓の間に屋根の尖った家が離れ離れに一群が見える。

右手には五、六百にも余る日本船が海辺に沿って平行に並んで艦(ろ)に赤旗を翻して居った。総ての光景が怖しいというよりは寧ろ珍しく賑(にぎ)やかで丸で絵でも見るように面白い。夫に太陽は朗らかに照輝いて、青々した野山、派手な軍旗、閃々(せんせん)とする軍勢に一層の活気を添えた』

「それは、幕府も随分夷人に見下されたものではないか。絵でも見るようななど。それもこれも、井伊の茶華凡(ちやかぼん)の所為だ」

「どういう事だ」

奴は本を置いた。

「彦根の者たちは、夷人が太鼓に笛を打ち鳴らし持ち場を通り抜けられても恥とも思わぬ者たち。百姓から喉(けし)かけを受ける様は、情けないの一言だ。我が藩も来原殿の意見を入れて居れば、夷人から要らざる侮りなど受けなかつたものを」

「来原殿は、どのような意見をされた」

「幕府より相州警衛の命を受けた肥後藩主細川斉護殿と諮り、幕府に相州移住の許可を請うべきであると。あの時、藩公は強い御意志を秘められて居られたのだ」

「どの様な御意志だ」

「敢然と夷人の求を拒絶し、沿岸の防備を厳かにし、将来覬覦(きゆう)の念を断たしむるとの。警衛の地は、浦賀千代崎より三崎を経て鎌倉腰越に及ぶ沿岸二十里、毛利家未曾有の面目躍如と申すものではないか」

「君は、相州は如何なる地か存じて居るのか。相州は毛利家縁の地にして、朝廷要害の地」

「その様な事、お主に言われるまでもない事。井伊の腑抜けが警衛などするから、ペリーに江戸湾奥深くまで侵攻されるのだ」

「そうではない。ペリーが艦隊を江戸湾奥深くまで進行させたのは、將軍家に敬意を表すべく、宮城の見える地点で祝砲を放つためだ」

「また、そのような間抜けた事を申す」

奴は何時もの節を曲げなかつた。

「お主は、西夷を水草を追って移り住んだ類の人間だと考えているのではあるまいな。そのような悠長（ゆうちょう）な話を本気にして、どうする。

それとも、お主は僕に本当の事を知られまいとして、そのような美文を読んで聞かせたのか。松陰先生は申されたそうだ。夷人の狡猾（こうかつ）な事、幕府の小役人の及ぶところではないと。ペリーの目的は何だ。その本には何と書いて居る」

「また、そのような事を」

「よいか。西夷の船艦や大砲は、皇国の及ぶものではない」

「そのような事、君に言われずとも分かつて居る」

「分かつては居らぬ。よいか、ペリーが浦賀をなんなく通り抜け、本牧浦まで乗り入れたのも、幕府が象山先生の御意見に耳を貸さぬからだ。

せめて、千代崎砲台を浦賀港の防備に残し、品川沖の中洲に百五十ポンドの砲台を築いておけば、砲弾交差し、ペリーは江戸湾奥深く侵入出来なかつたのだ。さすれば、ペリーの野心も、容易に打ち砕けたというものを」

奴は複雑な顔をしていたが、何時ものように夷人の弁護を始めた。

「そうではない。ペリーは日本に文明を齎（もたら）しに来たのだ。この本にも書いてある。世界の新進国たるアメリカが、鎖国の障壁を破壊して、和親通商の条約を結び、日本を世界の商業国民の間に紹介する先達（せんだつ）となる」と

「ペリーも自惚（うぬぼ）れが過ぎるのではないか」

「そうではない。ペリーは遠大な計画を立てたのだ」

「どうせ、他国の土地を奪う計画ではないか」

「そうではない。徳によつて士民を強化し、良風美俗を成す長久の謀だ」

「また、そのような事を言う」

「英雄は大事を決行するに当たり、天下の形勢を見定め、遠い将来を見通し、一定不変の永久策を立てるものだ。ペリーほどの者になると、当たり前前の事だ」

「お主は、ペリーを英雄と申すのか」

「そうだ。ペリーは、世界の大勢を察し、進んで世界を強化せんとしたのだ。我が国は攘夷と騒ぐだけで、ペリーの真意を解さぬ。ペリーは書いて居る。西洋人は日本人に対して、傲慢不遜（ごうまんふそん）な振舞いをしたと」

「随分、謙虚ではないか。どういう事だ」

「イギリスの海軍士官は日本の海上で乱暴を働き、ロシアは日本の北海の島嶼（とうしよ）を占領し、盛んに黒龍江口の防備を堅め、日本を覗つて居ると」

「アメリカは、イギリスやロシアと違つても言いたいのか」

「そうだ。アメリカのみが、未だ嘗（かつ）て日本人に不快な連想を惹起させるような交渉を持たせなかつたと言つて居る。一度修好の目的でビートルを司令官として二隻の軍艦を派遣したが、日本人の希望通りに帰つたと」

「自分の事は、棚に上げて、その物言いは何だ。ペリーは都合のよいことを書き並べているだけではないか」

「そう申すな。ペリーは、日本人の事をよく知つて居るのだ」

「どう知つて居るといふのだ」

「日本人は、屈辱と名誉との何物なるかを善く知り、正義と親切との上に立つて居ると」

「変な事を申すな。ペリーに皇国の何が分かる。神武天皇に始まる皇国の歴史をペリーが知って居ると言うのか。ペリーの勝ち誇った物言いは何だ」

「変な事ではない」

「また、そのような事を申す。よいか。夷人は万里の波濤(はとう)を越えて、遣つて来たのだ。なにか姦計があつての事だ。そのような客人を持成すような態度でよいか。夷人の甘言に騙されるな。何故に、アメリカは節介を焼く」

「知識を世界に広めるためだ」

「知識など広めて、どうする」

「人々の頭を開化させる。地理学者は風土氣候山川原野の状態を調べる。博物学者は動植物や鉱物の状態を調べる。

航海者は暗礁(あんしょう)潮流港灣を調べ、商人は産物工業その他貿易売買の情況、需要品の模様を調査する。ナポレオンは、埃及(エジプト)に学者を引き連れ遠征を行った。ペリーも、ナポレオンに倣つて学者を連れ来た」

「それは、皇国を手にいれんがための奸者だ。お主は、ペリーが琉球、小笠原を手に入れんとしていた事を知らぬのか。よいか。皇国を一個の大城と考え、太平洋を池とし、戦術を立てるぐらいでなければ、皇国の先行きは危うい。もうよい。それより、その本をどのようにして手に入れた」

「デ・ロング公使から借りた」

「もう読んだのか」

「何故、そのような事を聞く」

「松陰先生下田踏海(とうかい)の事が書かれてあると聞いた事がある。読み終えたら、僕に貸して呉れぬか」

「駄目だ」

「駄目だとは、どういう事だ。僕には難しいというのか。それなら、松陰先生の事だけでも、教えて呉れぬか。お主は、言うたではないか。防長人の無恥は、日本の恥と。それとも、僕が読んだら、何か都合の悪い事でも書いてあるのか」

「そうではない。君も読めば、下田踏海（とうかい）の事情も氷解する。松陰先生はペリーを斬りに行かれたのではない」

「それでは、何故に僕に読ませぬ」

「君には和歌の稽古（けいこ）がある。万葉人の心が分からぬ者に、皇国の先行きを任せる訳には行かぬ」

「僕には、万葉人の心が分からぬというのか」

「『武蔵の海さし出づる月は天飛ぶや かりほるにやに残る影かも』」

「誰の歌だ」

「象山先生の歌だ。横浜に錨（いかり）おろせるペリーに代わりて、詠まれたものだ」

「戯（たわむ）れはよせ。象山先生が、カリホルニヤなどと詠まれる訳がない」

「本当なのだから、致し方ない」

「君は知らぬのか。象山先生が、下田を開くとせば、それより横浜を開くに若（し）かずと申された事を」

「好い加減な事を申すな。象山先生が横浜開港を推し進めたなどと。象山先生は夷人に港の土地を貸すならば、江戸に近い横浜がよいと申されただけだ。江戸近くに夷人が碇泊して居れば、天下の人も油断がなくなる。いざ鎌倉という時に、攘夷を決行するためだ。」

象山先生が横浜開港を唱えたなどと言うのは、幕府の役人が象山先生を貶（おとし）め入れんが為になした事ではないのか」

「そうではない。象山先生は横浜を開港して、新しい世を創ろうとされたのだ。君は知って居るのか」

「何をだ」

「大統領の国書だ。ペリーが開国を迫った時のだ」

「知って居る。それがどうした」

「どう知って居る。まさか、その様な事も知らずに、条約交渉などと言って居ったのではあるまいな」

「貿易を行うようにと言って来たのだろう」

「それだけか。もし日本にその考えがなければ、五年ないし十年間保留してもよいと言って来た事もか」

「勿論だ」

「君は大統領の国書の事をいつ知った」

「最近だ」

「最近？どうして知った」

「伊藤先生から聞いた」

「それでは幕府が大統領の国書を大小名に示し、意見を求めたのを知って居るか」

「勿論だ」

「朝廷にも奏聞した事もか」

「勿論だ」

「庶民にもした事もか」

「話は聞いた」

「幕府は、どうしてそのような事をしたか分かるか」

「幕府の事など、分からぬ」

「衆議に従って和親の方針を執る事にしたのだ」

「また、共和政治の話か。それでは聞くが、アメリカは、宗教の事で国民に干渉するのを禁じて居るといふのは、本当か」

「本当だ」

「それでは何故に、彼の国の者は、耶蘇(ヤソ)教を信仰せよと言うのだ」

「耶蘇教を信仰せぬ者は、文明国では生きて生けぬ」

「また訳の分からぬ事を言う。それでは聞くが、耶蘇教と天主教とどう違う。スペイン、ポルトガル、イタリアは天主教国なのか、それとも耶蘇教国なのか。イギリス、フランスはどうなんだ。教えて呉れ」

「僕にも分からぬ」

「奴は困惑して言った。」

「分からぬとは何だ。何時も、夷人通のような顔をして」

「宗教の事は、各国千差万別だ」

「アメリカは、どうなんだ」

「アメリカにも沢山の宗派がある。それで政府は宗派の事で干渉する事を止めた」

「ロシアは」

「ロシアのキリスト教は、西洋のキリスト教と様子が違う。西洋では十字架を掲げるが、ロシアでは末広がりに横木を三

本入れたものを掲げる。ロシア人は、神の事をボフと呼んで居る」

「ボフ？」

「ロシアの言葉で上の意だ」

「誰から聞いた」

「本で読んだ。伊勢の船頭大黒屋光大夫（こうだゆう）が漂流し、ロシアで見て来たものを桂川甫周（ほしゆう）という蘭学者に話したものだ」

「甫周先生にか」

「先生？君は桂川甫周を知って居るのか」

奴は驚いた顔をした。

「勿論だ。前野良沢、杉田玄白と『ターヘル・アナトミア』を訳された方だ」

「君が桂川甫周を知って居るとは、意外だ。伊藤先生に聞いたのか」

「伊藤先生は、そのような話はされぬ」

「それでは、木戸先生か」

「木戸先生は医家の出なれど、僕にはそのような話はされた事はない」

「それでは、大村先生か」

「何故に、大村先生が僕にそのような話をしなければならぬのだ」

「君は知らぬのか。木戸伊藤両先生が、小塚原（こづかつばら）に松陰先生の御遺骸をもらい受けに行かれた時の事を」

「馬鹿を申せ。僕がそのような事を知らぬと思つて居るのか。木戸先生と伊藤先生は、回向院（えこういん）に出向かれ、松陰先生の御遺骸をもらい受け、橋本左内先生の隣に葬（ほうむ）られたのだ」

「それでは、その時、大村先生が小塚原（こづかつばら）にて、おなごの腑分けをして居られたのを知つて居るか」
「また、そのような戯れ言を」

「戯れ言ではない。木戸先生は、話されて居らぬのか。君は、本当に木戸先生の遠縁の者なのか」

奴は妙な顔をした。

「親類縁者でも知られたくない事はあるものだ。腑分けの話など、どうでもよい。それよりロシアの話だ。光大夫は何を話した。教えて呉れぬか」

「ロシアの話聞いてどうするのだ。また戦の口実にするのか」

「そのような事はしないから、話して呉れぬか。ロシアの事を知つて居るのは、お主しか居らぬのだ」

奴は嫌な顔をしたが、重い口を開いた。

「桂川先生が、ロシアには雁は年中居るかと尋ねられた」

「何故に、そのような事を聞かれた」

「大和の国に未だ雁が卵を生みしを聞かぬ故。それから、ロシアの冬至は如何様であるかと尋ねられた」

「何故に、そのような事を聞かれた」

「分からぬ」

「分からぬとはどういう事だ。君は箱館（はこだて）に居つたのだろう。ロシアの事は何でも知つて居ると申したではないか」

「僕が世の中の事、すべて知って居るわけではない。僕が知って居る事は、ロシアのキリスト教は、西洋のキリスト教よりも由緒正しいものだ」という事ぐらいだ」

「怪しいと思わなかったのか」

「何をだ」

「福沢先生はロシアで間諜（かんちよう）の話を持ちかけられたそうだ。お主は、ロシアの僧侶と何を話したのだ。蝦夷人の事を聞かれなかったか」

「聞かれた」

「何と言うた」

「蝦夷人は和人に追われ、蝦夷地に移ったと。日本人はエゾと言い、蝦夷人は自らアイノと言って居ると」

「矢張り、会沢先生が申された通りではないか。ロシアは蝦夷地のアイヌ人を邪教で誘って居ると。アメリカ人とも話したのか」

「外国人と気安く話など出来るものではない」

「それでは何故に、アメリカ人云々する」

「箱館には、異人通が沢山居って、色々と話をして呉れた」

「何の話をした」

「ペリーが箱館に来た時の話だ」

「ペリーは箱館で何をして居った」

「石材を探してたと」

「石材？石材などを探して、どうする。商館でも造るのか」

「そうではない。塔を建てるのだ」

「その塔は箱館の何処にある」

「箱館にはない」

「それでは、何処に塔はあるのだ」

「ワシントンだ」

「ペリーは、箱館の石をアメリカに持ち帰ったのか」

「そうだ。箱館だけでない。下田でも、琉球でも、石材を探した。日本だけでない。ペリーは世界各地の石を集め回って居るとか。琉球では、鐘も探してたそうだ」

「鐘などをどうしようというのだ」

「塔の先端に掛けるとか」

「その塔は建ったのか」

「分らぬ。出来たという話は、聞いた事が無い」

「それこそ、賽の河原の鬼も笑うというものだ。そういえば、妙な話を聞いた事がある。井伊直弼の小姓（こしよう）にアイヌの者が仕えて居ったというのだ」

「誰がそのような事を申した」

「奴は急に真面目な顔をした。」

「弘前藩の者だ。翌春の箱館攻略を期して、長州の整武隊ほか、福山藩、弘前藩、徳山藩の藩兵が青森に集結した。」

そこでの四方山話（よもやまばなし）だ」

「どうして、そのような話になった」

「信玄湯の話をして居った時だ。その者が、武田信玄と松前藩の藩祖は、同じ新羅三郎義光の裔だと言うのだ。義光の子が甲斐国武田に抛り、その末裔が若狭武田を起こし、信広と申す勇猛な者が、蝦夷（えぞ）地に渡り、松前藩の藩祖となったと。」

蝦夷地での話だ。当てにならぬ。井伊直弼の小姓の話も、当てにならぬ。何しろ、徳川討伐の头号令が下るや、親藩の紀州、尾州までもが王師に恭順の意を示し、あの彦根までもが官軍に従ったのだ。彦根に何があっても驚かぬが、大方は罵倒か法螺（ほら）話の類だ。お主でも法螺話を聞きたいのか」

「是非、聞きたい。その法螺話を」

奴は笑ってみせた。

「これから戦だ。気にも留めて居らなかつたが、村山某とか安中某とかいつて居った」

「村山たか女と申して居らなかつたか」

「お主は知って居るのか。その者は、蝦夷地から連れて来たのか」

「違う。滋賀多賀神社の娘だ」

「どうして知って居る」

「ある幕臣から聞いた」

「どういう事だ。教えて呉れぬか」

「君は高田屋嘉兵衛（かへえ）の事を知って居るか」

「勿論だ。蝦夷地で廻船業を営み、財をなした商人だ。近藤重蔵先生の命で、国後島（くなしりとう）と択捉島（えとろふとう）に渡り、アイヌの者たちと交易を行った者だ。文化年間に、幕府がロシア人ゴローニンを捕らえると、ロシア人はその報復として、嘉兵衛を国後島（くなしりとう）で捕え、カムチャツカ半島に連れ去ったのだ。それと多賀神社とどういう関係がある」

「嘉兵衛は淡路島生まれだ。君は記紀云々して居るから、伊弉諾（いざなぎ）大神が天照大御神によって淡路島の多賀の地に幽閉された事を知らぬ訳ではあるまい。嘉兵衛は蝦夷地のアイヌの者たちと古の好みを結ぶために蝦夷地に行ったのだ」

「また、そのようないい加減な事を申す。もうよい。それより京の黒谷（くろだに）には、何かあるのか。教えて呉れぬか」

「何故、黒谷の事を聞く。まだ会津藩邸に討ち入りしようと考えて居るのか」

「そうではない。彦根では麻疹酒湯祝儀を終えると、京の黒谷に行くというのだ。井伊の茶華凡（ちやかぼん）の話は、可笑しな話ばかりだ。木俣何某（なにがし）という家臣などは、井伊八幡宮造管御用を申し付けられて居るのに、暇を願ひ出て城崎温泉に行ったというのだ。井伊の茶華凡（ちやかぼん）には呆れる」

「痘痕（あばた）を治しに温泉に行ったのではないか。松陰先生も痘痕で苦勞されたと聞いて居る」

「お主は何故に、松陰先生を嫌う」

「嫌つては居らぬ」

「嘘を申すな」

「嘘ではない。僕は尊王家だ。知り合いに、御宮柱の残り木に少彦名命（すくなびこなのみこと）像を刻み朝夕礼拝し

て居る者が居る」

「何故に、そのような事をする」

「少名彦命は医の祖神。古くから風習だ」

「お主は何故に、井伊を庇う。お主は、やはり松陰先生を嫌って居るのだ。この話は終わりだ。ロシアの話をして居るのだ。聞いて居るのか」

「聞いて居る」

奴は呆れた顔をした。

「お主は何故に、レザノフが仙台の漂民を伴って長崎に来たのか知って居るのか」

「それが、どうした」

「法螺話などどうでもよいのだ。それよりロシアの事だ。ロシアの話を得意げにしていたではないか」

「昔の話は、そうは知らない。強いて言えば、プチャーチンの事ぐらいだ」

「流石に伊藤先生が見込んだだけの事はある。お主から聞きたかったのは、そういう話だ。プチャーチンが大坂天保山沖に現われた時、幕府は何をした。打ち払いの用意は出来て居ったのか」

「幕府は打ち払いなどしない。プチャーチンは和親条約を締結する談判を、大坂の地で行わんと幕府に申し入れて居ったのだ」

「幕府は、ロシア艦隊が大坂天保山沖に現われると知って居ったと言うのか」

「そうだ」

「大坂に異国船が現れば、朝廷が怖れをなして、勅許が得られるとでも考えたのか。幕府はプチャーチンと何を企

てた。ロシアの狙いは何だ」

「交易による富国だ」

「ロシアも交易による富国を勧めたのか」

「そうだ。カムチャツカの魚を運び、蘭領スندا列島から米を入れよと」

「日本は何を交易せよというのだ」

「採鉱せよと。米や魚を捕る労力を金銀の採鉱に使えと」

「それは、松陰先生が最も軽蔑された教えではないか。かつて津藩儒が国務を問うに、信淵答えて、伊勢国は稻田を廃し草綿を植えよ。利を収める事倍徒せんと言った類のものだ」

「兵学を学ぶ者は、先ずは経学(けいがく)を学べと、象山先生が説かれた所ではないか」

「お主は経学にとらわれて居る」

「君は伊弉諾(いざなぎ)・伊弉冉(いざなみ)の二尊が万物を生み出し給もうた所以を知らないのか。君も松陰先生云々するのなら、先生の『武教全書講録』くらい目を通すべきではないか」

「松陰先生は兵学者だ」

「如何にも山鹿流の兵学者だ」

「兵学者であられる松陰先生が、人民を靈物などと坊主のような事を説かれる筈がない」

「松陰先生は、王者は民人を以て天となすと申されたのだ」

「お主のような考えが、国を滅ぼす事になるのだ。蘭領スندا列島が凶作になったらどうする。ロシアが米を融通して呉れると思うのか。穀を軽んじて金を重んじて居れば、国は滅ぶ。松陰先生の教えだ。」

もうよい。お主に話しても無駄だ。それより、幕府の事だ。幕府はロシアの申し出を承知したのか」

「幕府もそこまで愚かではない。交渉事だ」

「外にロシアは幕府と何を交渉した」

「千島はエトロフ島以南を日本に、カラフト島はアニワのみ日本領とする」

「それでどうしようというのだ」

「蝦夷の北端ないしアニワ湾をヨーロッパ人に開拓させ、ヨーロッパ商品とこの地で獲れた魚や毛皮と交換する」

「お主はその話を誰から聞いた」

「ある幕臣だ」

「滋賀多賀神社の娘の話をした者か」

「そうだ。プチャーチンの申し出は、『世界周航記』という本に書いてある」

「その幕臣はロシアの言葉が分かるのか」

「蘭語で書いたものを読んだそうだ。その本はその昔、高橋景保（かげやす）がシーボルトに御禁制の日本地図を渡す

際、引き換えたものだ」

「高橋という者は何者だ」

「幕府天文方で御書物奉行だ」

「その高橋は何故に、シーボルトに御禁制の地図を渡した。シーボルトから何を得んとしたのだ」

「隠密御用が命じられて居ったのだ」

「シーボルトの事は隠密行動だったというのか」

「そうだ。だから、高橋はシーボルトを御文庫に入れたのだ」

「御文庫」

「宮城内紅葉山にある文庫だ。隣には霊廟もある」

「何故に、そのような所に夷人が入れるのだ」

「幕医に秘密裏に眼薬の伝習をされて居られたからだ」

「そのような事で、夷人が城内奥深く立ち入る事が出来るものなのか」

「シーボルトは葵の御紋の衣服を贈られたのだ。秘薬の多くは、豚から作られる」

「それで、慶喜が豚を食したというのか」

「その様な事、分からぬ」

「豚一が、そのような愚かな事をするから、幕府は諸外国から侮りを受けるのだ。お主は分かって居るのか」

「僕は慶喜公の話などして居らぬ」

「もうよい。隠密の話だ。シーボルトは、幕府の何を探らんとしたのだ。その文庫に何があるのだ」

「幕府秘蔵の書物だ」

「それで高橋とかいう国賊は、どうなった」

「塩漬けにされ、瓶（かめ）に入れられた。存命ならば死罪の所、病で亡くなられた」

「塩漬け？」

「塩魚のようになった」

「塩魚？」

「尻から鯨(ささら)のようなものをさし込まれ、ぐるぐる回し、腸(はらわた)を引き出し、口から尻の穴から塩がぶち込まれた。それで、景保(かげやす)殿は骨と皮だけになられた」

「他の御書物奉行は、何をして居った」

「人知れずやるのが隠密行動だ。ペリーの応接した林大学頭復斎(ふくさい)殿も、御書物奉行をして居られた」

「復斎(ふくさい)も塩漬けにされたのか」

「何故、復斎殿が塩漬けにならなければならないのだ。復斎殿は、嘉永七年ペリーが再来航すると、幕府全権となり、ペリーの応接に当たられたのだ。日米和親条約締結の際、佐藤一斎殿と相協力して幕府の外交文書を作成されお方だ」

奴は意味ありげに言った。話の察しは付いたが、奴の顔を立てやる事にした。

「それで、塩漬けにされた高橋の隠密行動はそれだけか」

「高橋殿は、満州語の研究もされて居られた。それにロシアの清国への国書の翻訳もされて居られた」

「どうして、ロシアの国書が手に入る。高橋はロシアと内通して居ったのか。それとも、シーボルトがロシアと昵懇(じつこん)だったのか」

「その様な事、さしたる事ではない。血相変えるほどの事ではない」

「何故に、さしたる事ではないのだ」

「オランダのウイレム二世の妃は、ロシア皇帝の娘なれば、そのような事、問題ない」

「吉宗が清国に入れ込んで居ったというのは、本当か」

「本当だ。康熙帝は万機親裁を旨とし、行幸の際には民に直訴を認めて居った。どうして、そのような事を聞く」

「胡散(うさん)臭いと思わぬか」

「何がだ」

「紀州のやる事だ。捨て子の吉宗が、どうして家督を継げる。兄を毒殺したというではないか。吉宗が、何故に將軍になれるのだ」

「それは朝廷幕府が親密ならざる時代だから、そういう話になるのだ。目安箱の事にしてもそうだ」

奴はまた訳の分らぬ話を持ち出してきた。

「どういう事だ」

「僕なら、吉宗公の御意向をこう代弁する。『凡そ中古以上天皇味爽(まいそう)毎に殿椅に出御して南面したまひ、大臣以下百官左右に椅し、高案を陛下に設け箱を置く』と」

「何の事だ。味爽(まいそう)とは何の事だ」

「夜明け方の事だ。朝廷の目安箱の話だ」

「椅子とは唐風ではないか。そのようなものあったのか」

「平城天皇の御代まであった」

「庶民も投書できたのか」

「出来た」

「そのような恐れ多い事」

「なにも畏れる事はない。五畿七道の訟人、極小の民に至るまで、状を箱中に投じて退いた」

「それで、どうされた」

「左右の少弁・少納言・史・外記が、御前にてこれを陳（ひ）ねて読み、群臣が議して判し、時に天子一語を出だし決し給われる。たが嵯峨天皇の御代に、これを外朝の諸臣に委ね、深宮に在らせられた。僅かに虚椅が旧位に設けられ、藏人が椅傍に坐し、群議を聴き出し相達した。長州藩も古制に学んだのだ」

「お主の博学は分かった。」

まだ、何か言いたいのか。何だ」

奴は物言いたげな顔をしていた。

「君は『いで吾が駒 早く行きこそ 真土山（まつちやま） 待つらむ妹を 行きてはや見む』という和歌を知って居るか」

「また、歌か」

奴は話に詰まると、何時も和歌を持ち出して来た。

「何故に、和歌の話をする」

「君が紀州が変だと言うからだ」

「その真土山（まつちやま）というのは、紀州にあるのか」

「そうだ。これはどうだ。『麻衣着ればなつかし 紀伊国の妹背（いもせ）の山に麻蒔く我妹』」

「お主は、如何（いかが）わしい女と密通して居るのではないか」

「密通などして居らぬ。真実を語って居るのだ」

「お主は真実などと申して、安珍清姫（あんちんきよひめ）の娘道成寺の話などしようとして居るのではあるまいな。」

それが、お主の大和魂か」

「そうだ。僕の日本（やまと）魂だ」

「岩国藩には、大和魂というものはないのか」

『馬の音(と)の轟(とど)ともすれば 松蔭に 出でてそ見つる けだし君かと』

「また松陰先生を愚弄する事を申す。松陰先生は蒸気船の音を聞き、ペリーを斬りに行かれたのだ。お主は、世界の
大勢というものを知らぬから、呑気な事を言つて居られるのだ」

奴は笑つて居つた。

「何故に、笑う。それより、幕府はプチャーチンの申し出をどうしたのだ」

「どうもこうもない。ペリーに先を越された」

「幕閣は何故に、ペリーに戦陣をつけさせた」

「僕に何を言わせたいののだ」

「お主は何時も交易、交易というが、交易はいかほどのものなのか。開港してからの物価の高騰は何だ」

「開港して豊かになつた者も居る」

「あくどい商人であろう」

「君には分からぬ事だ。やがて大勢の者が恩恵に与(あずか)る時が来る。交易の事は、人間の考えの及ぶものではな
い」

「それはおかしな話だ。交易するのは、人ではないか」

「おかしくはない。水が高き所から低き所へ流れるように、交易も世界に拡がるのだ」

「夢みたいな事を申すな」

「夢ではない。この波は誰にも止められぬ。日本人もこれからは世界に伍して行かねばならぬのだ。ペリーは申して居つ

たそうだ」

「何をだ」

「日本人が西洋の機械に関する知識を身につけた時、驚くほどのものになると」

「お世辞を言われて喜ぶな。お人好しいいい加減にせい。疫病（えきびょう）の流行は何だ。まさに疫病神（やくびょうがみ）だ。大名行列も四辻で前後左右から葬式行列に取り囲まれ、立ち往生したではないか」

「君こそ時代遅れの考えに捕らわれるのは止せ。昔の仲間にあわれてもよいではないか。君も僕らの議論に加わったらどうなんだ。いつまでも気分がすぐれぬでは済まぬぞ」

「僕にはなさねばならぬ事があるのだ」

「もうよい。君には何も申さぬ。ペリーを恨むのは止せ」

奴は諦め顔をして、部屋を出て行った。

長州の留学生は、相変わらず熱心に議論をしていた。木戸先生は時折、議論にお出になられたが、伊藤先生は率先して議論に加わっていた。早速、伊藤先生から呼び出され、お小言を頂戴（ちようだい）した。

「貴公は朝食を済ませると、そそくさと何処（どこ）かに消えるが、いったい何処で何をして居る。部屋に戻ると何事かを書き留めて居るといってはいないか。」

噂では、幕臣と何事かを話し合って居るというではないか。今更、薩長だの幕府だのと言う気はない。

それにしてもだ。貴公は何故、留学生との議論に加わろうとしない。貴公が孤立するからあらぬ噂もたつ。疑われても仕方がないではないか。貴公は僕の随員だ。誰と何を話して居るのか、報告する義務があるのではないか」

私は返事に詰まった。

「もとより私は先生の随員でありますから、御命令とあらば包み隠さず申し述べます。誤解を招き兼ねない儀もありますので、手短にという訳には」

伊藤先生は渋い顔をされた。

「何を意固地になつて居る」

「何も意固地などなつて居りません。親戚筋には木戸先生からお話して下さいました。もう、その話はよいのです」

「それでは、何故、留学生と議論せぬ」

「それは、先生が一番御存知ではありませんか。奴らの西洋被(かぶ)れを」

「それは、仕方のない事ではないか。西洋に留学に行くのだ」

「それでは、耶蘇(やそ)教を信仰しても構わぬと」

「信仰するしないは、貴公の問題だ」

「先生がそのように申されるなら、致し方ありません。国家の大事。私のような者が何を申しても詮(せん)無き事。然(さ)りながら、奴の放言をこの儘(まま)放置しておく、長州の恥を世界に晒(さら)す事に成りかねません。」

伊藤先生は何故に、松陰先生の事になると口を閉ざされるのですか。伊藤先生は、松陰先生から教えを受けられたではありませんか。何を私に隠して居られるのですか」

「何も隠して居るわけではない」

「それでは、何故に。奴になら、話す事が出来ると申されるのですか」

「秘するにあらず。秘するは知らしめんが為。貴公は未だ道くらき者」

憮然とする私に、伊藤先生は窘(たしな)められた。

「松陰先生の事は、そう簡単に口に来るものではない。現に土屋蕭海(しょうかい)が松陰先生の伝記を書いて、高杉さんに見せたところ、高杉さんは引き裂き捨ててしまわれた。

松陰先生を精神を伝える事は、至難の業だ。松陰先生の事蹟(じせき)を解すには、学ばなければならぬ事が沢山ある。先ず始めに松陰先生は何故、東北に行かれたかだ。貴公は如何様(いかよう)に答える」

「松陰先生が東北へ行かれたのは、嘉永年間の事。蝦夷地には、ロシア船をはじめ多くの夷国船が出没したからではありませんか。松陰先生は罪人の汚名を被る覚悟で、旅立たれたのです。居ても立つてもいられなかったのです。

松陰先生の事蹟を解するには、何を学べと申されるのですか。やはり、兵学を究める事が肝要なのではないでしょうか。兵学の事なら多少心得がある積りなのですが」

「貴公は木戸さんから聞いて居らぬのか」

「何をですか」

「松陰先生が東北に行かれた経緯だ」

「勿論、聞いて居ります。肥後藩の宮部鼎蔵殿とのお約束を守るために東北に行かれたのです。江戸藩邸を発たれた松陰先生は、先ず筑波山神社に詣で、水戸に『新論』を著された会沢正志斎先生を訪ねられました。残念な事に、松陰先生の想いは会沢先生に伝わらなかつたそうです。

それから鹿島に神宮を詣でられた後、勿来の関を越えて奥州白河に入られました。白河から新潟に入られた先生は、佐渡に渡り順徳天皇の御稜を拝されました」

「貴公が聞いた話は、それだけか」

伊藤先生は不満な顔をされた。

「私も王臣を自負して居る男です。ただ、木戸先生が申されるには、冬の東北には見るべきものもなく、松陰先生は失望されて居られたそうです。特に佐渡の相川にては、荒れ狂う北の海を見て過ごされて居られたとか」

「貴公の話は、それだけか。松陰先生は新潟に戻られると、津軽に向かわれたのだ。津軽では十三湊（ときみなと）に遊び、海峡に至りて遙か蝦夷地を臨み、江戸への帰路、松島、塩釜、一荒（ふたら）、足利をみて帰られたのだ。

『普天（ふてん）の下（もと）　王土に非（あら）ざる莫（な）く　率土（そつと）の浜（ひん）　王臣に非（あら）ざる莫（な）し』。

貴公は、これに何か感じる所は、ないのか」

「私も伏見の役後、一旦帰郷するも、賊軍征伐に英船サントー号にて三田尻港から佐渡、秋田に至り、秋田より雪路、官軍集結地の青森まで行軍しましたが、取り立てて見るべきものもなく、松陰先生も亡命などされずとも、時季を見計ってもよかつたのではないかと思つた事があります」

「その件に付いては、来原（くるはら）先生から君公にお話されて居られた」

「君公は何とおっしゃられたのですか」

「参政と議すると」

「参政は何と」

「公裁を仰がずば不可と。それで、来原先生が窮余の策を掛け合われた。藩府の過所（かしよ）を持たずに出立した前例があると」

「前例？」

「松平大膳大夫(だいでん)の臣・吉田大次郎と称するのだ」

「幕府の眼を欺くという事ですか」

「松陰先生は、それを良しとされなかつたのだ」

「何故にですか」

「松陰先生は十一歳の時、君公の御前にて山鹿素行の『武教全書戦法篇』を講ぜられたのだ」

「それでは、松陰先生が赤穂義士の討ち入りの日に江戸藩邸を出入られたという事に、深い訳があつたと申されるのですか。」

松陰先生は、罪を犯してまで東北に行かれる事はなかつたのです。来原殿は、松陰先生の事で藩よりお咎(とが)めを受けました。その事がもとで、後日、松陰先生の鎌倉隠棲の事で親戚筋から悪い噂が立ちました」

「どのような噂だ」

「寅次郎は何か悪事をなさんとして鎌倉に隠棲(いんせい)などと言い出したのだと。また、ある者からは、出過ぎた事をするとか、祖先を忝(はずか)しめるものとか言われ、仕舞いには松陰も鎌倉にて隠棲して居つたなら、あのよ
うな事にならずに済んだものをと」

「貴公の考えは」

「人情の機微に触れぬ愚かな者たちの議論、申す事など何もありません。松陰先生の鎌倉隠棲の事は、悪業を同志に及ぼさぬための方便なのです。松陰先生も苦悶(くもん)されたに違いありません。夷人といえども、殺生は殺生です。松陰先生は、先君の忌日(きにち)に食膳に魚類を供されても、食されなかつた聞いて居ります」

「何が言いたい」

「あの承久の時も、僧侶と申す者がなければ、幾人の者が命を落とした事か」

「何の事じゃ」

「京で北条泰時が残党狩を始めた時の事です。殺生禁断の地である梅尾に京兵を匿い捕らえられた明恵上人は、泰時に申されたそうです。愚僧が首を刎ねられよと。」

以前から鎌倉で何かあつたのではないかと思つて居りました。鎌倉は松陰先生の母方の伯父様竹院上人様が瑞泉寺（ずいせんじ）にて住職をして居られた所。上人様は、後に鎌倉円覚寺、京都南禅寺の住職を勤められし高僧。松陰先生は、夷人殺害の事を思い悩まれて居られたのではないですか」

私は予（かね）てからの疑問を伊藤先生にぶつけてみた。

「松陰先生は、伯父様の所に密航の相談に行かれたのだ」

「またその様な事を申されます」

「松陰先生は、プチャーチン率いるロシア軍艦に乗り込まんとして長崎に赴かれたが、事ならず、鎌倉にて隠棲（いんせい）される事にされたのだ」

「それで、鎌倉で何をされて居られたと申されるのですか」

「松陰先生は、鎌倉にて法華堂などの史蹟を見てまわれたのだ」

「その法華堂に、何があると申されるのですか」

「頼朝公、島津忠久公、大江広元公の墓だ」

「覇府を拵（こしら）えた頼朝の墓にですか」

「そうじゃ。頼朝公と忠久公の墓は、故あつて島津重豪（しげひで）公が修せしものじゃ」

「松陰先生も物好きな事をされたものです。頼朝の墓を詣（もう）でるなど。松陰先生は何故に、鎌倉隠棲などという事をされたのですか」

「ロシアに備えての事だ。先生はオランダ文典を携え、文化年間の北地の文書を取り寄せ、頭を埋めて精研されようとしたのだ。外にありては、ロシアの南下に備え、内にありては、ロシア鼻肩（びいき）の論者を論破せねばならぬ。先ずは、ロシアを待つ長策を立てんとされたのだ。」

もし、あの時、兄上の梅太郎殿の御忠告に従って居られたら、松陰先生は今頃は大学者になって居られた。血判して兄上に誓文まで差し出されたのに」

「誓文を」

「そうじゃ」

「松陰先生は、どのような誓文を書かれたのですか」

「安政元年甲寅（きのえとら）からきたる文久二年壬戌（みずのえいぬ）の年まで、天下国家の事を論じたり、蘇秦（そしん）・張儀（ちようぎ）のように各地を遊説したりしないと。富嶽（ふがく）が崩れようとも、利根川の水が涸（か）れようとも。」

とは言っても、そこは松陰先生。何をされるか分からない。妹の千代さんは、野山獄に九年母（くねんぼ）と蜜柑（みかん）を差し入れられ、松陰先生に観音信仰を勧められた」

「観音信仰を。千代殿は、松陰先生に何をお諭しになられようとしたと申されるのですか」

「何もそのような事は申して居らぬ」

「それで松陰先生は何と」

「観音経は未だ読み申さずと。されど法華経普門品（ふもんぼん）にて観音力と申す事は知つて居ると」

「千代殿が九年母（くねんぼ）と蜜柑（みかん）を差し入れられたのは、袖に橘を入れた孝行者の陸績（りくせき）の事を思われての事ではないのですか。母上様のお気持ちに察せられて」

「徳がもたらす和合の境地というものじゃ。四海皆兄弟にして唐も大和も心は一つ。睦（むつ）まじきは、天の道というものじゃ」

「それは伊藤先生の思い込みではありませんか」

「最澄は唐に渡つた時の宿願を果たそうと、筑紫に下り八幡の神宮寺にて法華経を講じて居る。天台山の鎮守も比叡山の鎮守も同神じゃ。大比叡神社は天智天皇の御代、大和国三輪の大神を近江国比叡山に祀つたものじゃ。伊予の越智直（あたゐ）は白村江の戦いに赴き、唐国に捕らわれるも、観音菩薩の靈験により無事帰来し、天子様にその樂しむ所を申しあげられた」

「樂しむ所。伊藤先生は、本当に松陰先生に教えを受けられたのですか。伊藤先生は、まさか夜郎自大（やろうじだい）に一味せよと」

私は暫し慥然とした顔をした。

「誓文の事は、本当なのですか。松陰先生は、幽閉の身にあつても、藩庁に建策されて居られたと聞いて居りますが」「そうじゃ。松陰先生は、執政の益田弾正に建議する事があつた。銃陣を興し、航海学を講じ、開港通商して、士人をして海勢を習い、針路を曉（さと）らしむるを急務と」

「松陰先生が、開港通商を説かれて居られたと申されるのですか。それとも幽閉の身ゆえ、要路の者に迎合されて居られたとでも。松陰先生の事なれば、何か深慮があられた筈です」

伊藤先生は、否定も肯定もされなかつた。ただ、事実だけを語られた。

「松陰先生は江戸伝馬町の獄から萩の野山の獄に移され、安政二年十二月からは御実家の杉家にての幽居となられた。安政三年五月には子弟教授の事が許されたが、安政五年に至る迄、過激な論を唱えられる事はなかつた」

「松陰先生は、安政五年に変わられたと申されるのですか」

「そうじゃ」

「兄上様とのお約束は。文久二年壬戌(みずのえいぬ)の年まで待てなかつたと申されるのですか」

「そうじゃ。それまで封印されてされて居られた先生の想いを行動に移されたのだ。安政五年四月、幕府の条約勅許の奏請が朝廷に拒絶せられるや、朝廷に建策され、更に間部(まなべ)下総刺すべしの論によって、この年十二月再び野山獄に入られる事になられた。

この間、江戸にては水戸の斉昭殿慶篤(よしあつ)殿父子を始め、尾張藩主・徳川慶勝殿、越前藩主・松平慶永殿、土佐藩主・山内豊信殿、一橋慶喜公が隠居謹慎となつた。京にても、青蓮院(しょうれんいん)宮、前関白鷹司(たかつかさ)政通卿、前内大臣三条実万(さねつむ)卿、左大臣近衛忠熙(ただひろ)卿、右大臣鷹司輔熙(すけひろ)卿が、隠居落飾謹慎となり、鶉飼吉左衛門(うがいきちざえもん)・幸吉父子、日下部伊三次(くさかべいそうじ)殿、橋本左内殿、梅田雲浜(うんぴん)殿は死罪獄死の憂き目に遭われた事は、知つての通りじゃ。

井伊大老は安政の大弾圧を終えるに当り、藩庁に松陰先生召喚を命じ、松陰先生は安政六年五月二十六日、檻送(かんそう)されたのだ。

『箱根山越すとき汗の出でやせん 君を思ひてふき清めてん』

高須久子殿が、東送される松陰先生の汗をふき見送られた時、松陰先生が詠まれたものだ。

東送される松陰先生の御心境、凡人には解せぬもの。松陰先生は江戸に檻送（かんそう）されると、評定所にて幕吏より訊問を受けた。梅田源次郎長門下向の節、何の密議をせしやと

「松陰先生は、何と申されたのですか」

「梅田は奸骨あれば、何の密議をなさんやと」

「奸骨。松陰先生は、雲浜（うんびん）先生の事をそのように申されたのですか」

「そうじゃ。尚も幕吏は訊問して来た。御所内に落文あり、その手跡（しゅせき）汝に似たりとの源次郎その外の者の申立があるがと」

「松陰先生は何と」

「光明正大なるを好む吾性にて、落文などの隠味な事をどうしてしようかと。ここに至り松陰先生は幕吏に六年間の幽閉中の苦心を語り、伏見要駕（ようが）の策と間部要撃（ようげき）の事を幕吏に告白されたのだ」

「それでは、松陰先生は落文などして居られぬですね」

「そうじゃ。幕吏が雲浜先生との不和を利用し、松陰先生を貶め入れんとしたのだ。雲浜先生も幕吏に落文なるものを見せられ、その筆跡に松陰先生のものに似たものがあると申されたのであろう」

「松陰先生が伏見要駕（ようが）の策と間部要撃（ようげき）の事を幕吏に告白されたという話は、本当だったのですか」

「ほんとうじゃ」

「松陰先生は何と申されたのですか」

「書を大原三位に致し、彼を我が藩に召し下し、藩主を論諫せんとしたと。更に同志を募り間部を要撃（ようげき）」

せんとしたと。

伏見要駕(ようが)の策にて、大原三位と岩倉公とでは、お考えが違われた。岩倉公は開国の論に、大原三位は攘夷の論に荷担されて居られたのだ。文久二年薩摩の久光侯上洛の経緯を聞けば、分かる事じゃ」

「松陰先生は何故に、そのような事を幕吏に申したのですか」

「幕閣を諫めんとされたのだ」

話が佳境に入った時、戸を叩く音がした。山口先生がみえられた。御子息も一緒だった。伊藤先生は俊太郎君の頭を撫で迎えた。

「俊太、元気にして居ったか。勉学のほうはどうじゃ」

「おじさんには、負けませぬ」

「そうか」

伊藤先生は声を上げて笑われた。山口先生は恥ずかしそうに、私に頭を下げた。

勤皇の志士も、親馬鹿を隠せるものではなかった。何も山口先生に限った事ではなかった。山県先生の伊三郎君は、ドイツ留学のため同乗していた。大久保先生の所の彦熊君はフランスに、伸熊君はドイツに留学するという。

私が部屋を後にしようとする、伊藤先生が声を掛けに来られた。

「貴公は『鶯の子になりにける時鳥(ほととぎす)』という歌を知って居るか」

「存じませぬ」

『』ほととぎす花橘の香をとめて鳴くは昔の人や恋しき』という歌は」

「誰の御歌ですか」

「ただ、聞いてみただけじゃ。それより、夜遅くにもう一度部屋に来て呉れぬか」

そう言うと、伊藤先生はまた山口先生と話を始められた。

その夜、伊藤先生の部屋を再び訪れたのは、皆が床に入ろうとする頃であった。同室の畠山先生の姿はなく、伊藤先生は椅子に腰掛け本を読んで居られた。伊藤先生に促されて椅子に座ると、机の上には使節団の名簿が置いてあった。伊藤先生が名簿に目をやると、私は命ぜられるままにした。勿論、川原聖堂(せいどう)の名が見当たる筈もなかった。三等書記官の川路の名が目にと留まった。

「貴公は誰と何を話して居るのか」

伊藤先生は静かに言った。

「川路とは何方(どなた)でしょうか」

「貴公と付き合っているのは川路寛堂(かんどう)なのか」

「違います」

「それでは、誰じゃ」

「川原聖堂(せいどう)と名乗って居りました。見あたりません」

「偽名を使って居るといふのか。川路なら歳は二十七、八だ」

「そのように若くはありません。三十半ば過ぎです」

伊藤先生は取り立て気にもして居られなかった。

「それはそうと、貴公はどうして幕臣の部屋に出入りする気になったのだ。木戸さんに、幕臣の加わる使節などには

と意見したのではないか」

「坂本先生の話を読まれたからです。長崎に居られたそうです」

「龍馬の」

「薩摩藩を介して、坂本先生が伊藤先生に銃を売り渡したと申しましたから」

「それで、河原と申す者と何を話して居った」

「幕府の内輪話です」

「今更、幕府の事など知ってどうする」

「密偵です」

私は得意げに言った。

「密偵？川路が木戸さんを殺すとても考えて居るのか」

伊藤先生は怪訝な顔をされた。

「何故に、そのような事を申されるのですか」

「川路の祖父殿は聖謨（としあきら）殿というて、官軍江戸総攻撃という日に腹を切られ、古式にのっとり自害された。絶命は頭にピストルを撃たれた」

「それでは、万が一の事があつては大変ではありませんか。何故に、そのような者を使節団に入れたのですか」

伊藤先生は笑った。

「川路なら大丈夫（だいじょうぶ）だ」

「どうして、そのような事がいえますでしょうか。相手は賊軍（ぞくぐん）です」

「聖謨（としあきら）殿は松陰先生の命の恩人じゃ」

「恩人？」

「下田踏海（とうかい）の事が失敗し、獄中の身となられた時、聖謨殿が阿部伊勢守に掛け合つて呉れたのじゃ。それで、松陰先生は死罪を免れたのだ」

「それでは、阿部伊勢守も命の恩人という事ですか」

「そうじゃ。貴公はそのような事も知らず、松陰先生、松陰先生と申して居つたのか」

伊藤先生は呆れ顔をされた。

「それより密偵の話じゃ。貴公は、その河原とやら申す者から何を聞き出しのだ」

「幕府の内幕です」

伊藤先生は驚きの表情をして見せた。

「それでは、その成果を聞こうではないか。貴公の申立て次第では、国家の大事に至るやもしれぬ」

伊藤先生は大袈裟（おおげさ）に言った。

「ペリー来航の噂が流れると、阿部伊勢守様は薩摩の島津斉彬殿に相談されたそうです」

「何をじゃ」

「彦根の井伊直弼を大老とし、水戸の斉昭公を將軍後見職にと」

「誰の將軍後見職じゃ」

「慶喜のです」

「幕府は、何をしようというのだ」

「開国です」

「斉昭公が將軍職後見じゃぞ。開国を許すのか」

「幕府は、ハリスが下田に来てから、方針を轉換したのです。開国して富国強兵を致すと。幕府は大方針を明らかにし、それに対する意見を求めたとか」

「如何(いか)なる方針じゃ」

「我より通船を外国に遣わし、交易互市の利益を以て富国強兵の基本とする」

伊藤先生は不思議そうな顔をされた。

「それで」

「交易に於(おい)て限りある国産を限りなき外国の需要に応ずるのに、如何(いか)に經濟上我が国力を維持する事が出来るかと。伊藤先生なら、何とお答えなさるのですか。通商を勝手にすれば、神州も是(こ)れきりだと松陰先生は申されたのです」

伊藤先生は漸(ようや)く私の意図を察せられたようであった。

「西洋の技術を入れ産業を興すと」

「嘘を申されては困ります」

「僕は工部卿(こうぶきょう)だ」

「それで平気なのですか」

「僕の幼名は利助じゃ。来原先生の志を継いで、舜輔(しゅんすけ)と称した。君子は仁義を離れて生きえず、小人は欲望を離れて生きえないものだ」

伊藤先生は苦しげな弁明をされた。

「伊藤先生は、筑波山旗揚の謀議に加わったではありませんか」

「軽卒(けいそつ)の身だ。考えなどなかった。同志と行動を共にしただけじゃ」

「御国の為め妖気を払わんが為に謀議に加わったのではないのですか。それとも一時の戯れと申されるのですか」

「家老の毛利筑前の家来に多賀屋勇という慷慨(こうがい)家が居った。その男が脱藩し、大橋訥庵(とつあん)の家で攘夷断行の為に輪王寺宮を奉じ筑波山に立て籠もるといふ計画を立てていた。その仲間に家老益田弾正(だんじょう)の家来荻野隼太が居り、誘われただけじゃ。」

長井雅楽(うた)を暗殺する計画をたてた時もそうじゃ。他の者は藩に自首状を出したが、僕は馬鹿々々しいから届けなかった。それでお咎(とが)めなしじゃ」

「どういう事でしょうか」

私は追及の手を緩めなかった。

「その昔、秀吉軍が因州吉岡の城に攻め込んだ時の事だ。吉岡入道質休と長男の吉岡安芸守は、僅か二、三百騎で城に立て籠もった。ある夜の事、吉岡方が秀吉方に夜襲をかけ、多賀文蔵という者の指物を盗み取った。指物を取られた多賀文蔵は、八幡菩薩も御覧じ給えとばかりに、秀吉から授かった瓢箪(ひょうたん)の馬印を船の舳(へさき)に押し立て湖を渡り先陣を切ったが、吉岡方に生け捕りにされてしまったのだ」

「それで吉岡殿は、その者を如何様に」

「安芸守は多賀文蔵の首を芸州の元春公のもとに送られた。人々は弓取る身として名誉な事と称えたが、実は安芸

守は多賀文蔵の命を助けようとしたのだ。話はそういう事だ」

「伊藤先生は何をおっしゃりたいのですか、分かり兼ねます」

私は困惑して言った。

「維新後も藩の者から宗社（そうしや）を滅ぼすと激しく攻撃されたが、何も後ろめたい気はない。この話は、また後でゆっくり話す。今は貴公の話じや」

伊藤先生は話を変えてしまわれた。

「河原とやらは、貴公に何を申したのだ」

「学問を積めと」

「それまた、如何（いか）なる」

「儒学を。されど今、俄（にわ）かに分かれとは申さぬと」

「どういう事じや」

「分かりません。それから、堀田備中の事蹟のあらましを書いたものを渡されました」

「備中のどんな話じや」

「評定所での話です。ハリスの將軍謁見に当たり、自らの所信を披瀝（ひれき）した時の話です」

「備中は如何なる所信を表した」

「近來世界の形勢は一変し、各国互に同盟和親を結び、和親もなく戦争もなく外交を絶つて昇平を楽しむ国は一国もなほいと」

「如何にも」

伊藤先生は満足げに頷(うなず)き、話を促した。

「今謂(いわ)れなく同盟和親を拒むは万国の妨害となり、外国人一同力を併せ軍艦を連ね戦伐に及ぶのは当然の儀である」と

「貴公はその儀をどう思う」

「この儀は、松陰先生の最も憎む所。堀田備中は、佐倉に引つ込んで居ればよかったです。伊藤先生は、どう思われなのですか」

「貴公もそろそろ頑迷な夢から醒めては、どうじゃ。皇国も世界万邦を敵に回し、いつ迄も東隅の一孤島に特立して居られるものではないのだ。強兵も富国より生じる。その富国は貿易互市を第一とするものじゃ。」

堀田備中も乾坤(けんこん)一変の機会に乗じ、和親同盟を結べば、事は開けると考えたのだ。広く万国に航し、貿易を通じ、彼が長所を採り国力を養い、世界万邦至治(しち)の恩沢(おんたく)を蒙(こうむ)るのだ。然(しか)らば、何時の日にか、世界万国の大盟主大皇帝と仰(おほ)される日も来ようというものじゃ。すばらしいと思わぬか」

伊藤先生は得意満面であった。

「先生がその様な事を申されては、困るのです。尊皇倒幕の名分が立たぬではありませんか」

「よいのじゃ」

「薩長政府の面目が、潰れても構わぬと申されるのですか」

「そのような事、よいのじゃ。河原も怪しい者ではなからう。急遽乗船した黒田侯か鍋島侯辺りの者だろう。薩摩守と無駄口を叩く者も居る。」

堀田備中の話が出る者など、そうは居らぬ。明晩、河原殿をお連れして呉れぬか。僕も堀田備中の話を聞きた

伊藤先生も、思い込みが激しくなられた。随分お喜びの御様子であった。

「先生は何故に、私のような者を随員にされたのですか」

「貴公を随員とする事には色々議論があつたが、貴公を見込んで加えたのじゃ」

「私のような無学の者を」

「皆、似たようなものだ。来原先生への恩返しだ。これからは貴公のような者が、世界の大勢を理解できるようにならねばならぬのじゃ」

「来原殿は何故に、腹を切られたのですか。攘夷の先鋒たらんとして、腹を切られたではありませんか」

「そうではない。来原先生は、藩の攘夷を諫(いさ)めるために、腹を切られたのだ」

「それは可笑(おか)しな話です。来原殿は前原先生に、『水戸の御隠居様、登城と相成り庶政を執られる事にならば、おめおめと交易を許すという事は、ある間敷く、来春、異国船参り節は、一合戦あるもの』と書き送られたと聞き及んで居りますが」

「それが武士というものじゃ。来原先生は、安政元年正月に来島又兵衛(きじま またべえ)殿と忠義会を結成されたお方。その意のある所は、中々分らぬものじゃ。松陰先生が夷情を探問せんと金子重輔(しげのすけ)と海外に遊ばんとされた時も、来原先生始め同志、これを荘として賛同し、来原先生と木戸さんは、松陰先生のために小舟を求めようとされたのだ」

「それでは、来原殿はペリー艦隊と一戦交える気はなかったと」

「我が国の武備の整わざる事、誰の目にも明らか。来原先生は、早くから西洋式の銃陣をやらねばならぬという事を

主張され、自ら太鼓を敲(たた)いたりもされた。そのために、相州警衛から外され、国に追下された事もあったが、幕府の論が変じ、我が藩も西洋調練を習わねばならぬという事になった。安政五年には、来原先生は藩の者三、四十人引連れ、長崎に行かれたのじゃ。

所が文久年間に藩論が攘夷に急変し、長井雅楽(うた)が割腹という事態に至った。窮地に立たされた来原先生は、同志を募り、横浜の外国公使館を焼き払おうとされた。それを世子が聞き及び諫められたが、来原先生は翌日、江戸桜田藩邸内のお宅で切腹されたのだ」

「それでは矢張り、来原(くるはら)殿の志は、攘夷にあったという事ではありませぬか」

「忠義というものだ。武士の鏡じゃ。来原先生が『従来忠義と相考候事都(すべ)て不忠不義と相成』との遺書を残されたのじゃ」

「それで、来原殿の志を継がれたと申されるのですか」

「そうじゃ。高杉さんと聞多が、武州金沢郊外に散策する外国公使を要撃する計画を立てたのじゃ。募った同志は江戸藩邸外に在って英学修業をやっていた者たち。僕は、来原先生の遺髪(いはつ)を萩に届けに戻ったが、それと入れ違いに高杉さんが江戸に来て遣ったのだ」

「伊藤先生の話は、矛盾して居ります。何故に、英学修業をしようという者などが、外国公使を要撃しようと言うのですか」

「矛盾はして居らぬ」

「矛盾して居ります」

「話は最後まで聞くものじゃ」

「それでは先生方は、どうされたのですか」

「外国公使要撃の事で、高杉さんは断固決行の論を唱えたが、玄瑞が止めた」

「久坂先生がですか。何故にですか」

「今回の企図は無謀であると」

「久坂先生が無謀と申されたのですか」

「そうじゃ。玄瑞は同志一致して正々堂々の態度を執り、真の攘夷を実行するのが上策だと高杉さんに言ったのだ」

「伊藤先生は、高杉先生が久坂先生の度量を試されたとしても申されるのですか。それで、高杉先生は、久坂先生に何と申されたのですか」

「久坂の論は、迂闊（うかつ）だと」

「迂闊。久坂先生の何が迂闊なのですか」

「それは、言わずもがなという事だ。高杉さんは、玄瑞の事を漢籍の学力はあるが、時勢を達観出来ないと行って居られた」

「どういう事なのでしょう。久坂先生が時勢を達観出来ぬと申されるのは」

『龍田川 無理に渡れば紅葉か散るし 渡らにや聞えぬ鹿のこえ』。

玄瑞の見込みにては、現に事は成らなかつたのだ。元治元年七月の堺町御門の事で、玄瑞は死期を早める結果となつて仕舞つた。高杉さんは、真の攘夷を実行するため、万延（まんえん）元年八月、東国遊歴に出られた。先ずは小塚原（こづかはら）にて松陰先生の墓に参られ、九月に日光に遊び、信州松代にて佐久間象山先生に面会し、十月には福井にて横井小楠と会われた」

「迂闊（うかつ）なのは、高杉先生の方ではありませんか。英学修業をしようという者に外国公使を要撃させようなどというのは。高杉先生は何を考えて居られたのですか。久坂先生の方が正論ではありませんか。同志一致して正々堂々と真の攘夷を実行するのが上策というものではありませんか。無謀なのは、高杉先生ではありませんか」

「あの時の事を今から考えようと、随分おかしな事があつた。高杉さんが外国公使要撃決行に備え下田屋に居ると、江戸に勅使として下降して居られた条公の使者が来られた」

「三条公は何と申されて来たのですか」

「此度の計画は、朝旨貫徹の妨害になるから止めるようにと」

「三条公も止めよと申されて来たのですか。それは変ではありませんか。三条公こそが、攘夷の先鋒であられたのではないませぬか。伊藤先生は、三条公が仮初（かりそ）めの攘夷を唱えて居られたと申されるのですか。それで、高杉先生は」

「高杉さんは、条公のお立場を斟酌された。僕はその場に居らんかったが、聞多が盛んに『聴くな、聴くな』と高杉さんに言うたそうじゃ」

「何故に、井上先生は何時もそのような事をなさるのですか」

「聞多（もんだ）は三条公が過激な攘夷を唱えるも、いかほどのものか、察しは付いて居つたのだ。聞多には公卿のお立場など眼中になかったが、高杉さんは条公の使者の言葉に耳を貸すのだ。そこは、高杉さんらしい所じゃ。」

高杉さんが、松下村塾に来られた時もそうじゃつた。高杉さんは、小忠太殿の目を盗み、御家の菊屋横丁から松下村塾に来られた」

「何故に高杉先生は、そのような事をされたのですか」

「高杉さん親父殿の小忠太殿は、長井雅楽（うた）と入魂じゃったのだ。そこが、高杉さんの悩ましい所じゃ」

「高杉先生の父上様と雅楽が」

「雅楽殿は生前、秘書を小忠太殿に託されて居られた」

「秘書」

「藩と幕府になした建白書じゃ。雅楽殿の切腹は見事であつたという。浅黄（あさぎ）色の装束に、白羽二重の座布団の上に座つて、介錯人は福原又四郎殿じゃ。生前、このような事もあるうかと、親類のもので見所のある又四郎殿に介錯を頼んでおいてたそうじゃ。国司信濃等が居並ぶなか、弓八幡を謡う雅楽殿の声は、野外まで琅々（ろうろう）と響きわたつたのじゃ」

「長井雅楽など奸物の事など、どうでもよいのです。それより、攘夷の事です。高杉先生の武州金沢での夷人要撃の事は、どうなつたのですか。伊藤先生は、英国公使館を焼き払つたのではないのですか。先生方の攘夷は、何なのですか。松陰先生のお教えをお忘れなのですか」

「そう申すな。僕等の攘夷は、貴公の考えて居る攘夷ではないのだ。僕等は、幕府の罪を糺（ただ）さんとしたのだ。外国公使要撃の事は、これも世子の知る所となり、高杉さんは止められたが、改めて高杉さんは御殿山に英国公使館を建てた幕府の罪を糺（ただ）す事にしたんじゃ。それで、文久二年十一月に英国公使館を焼き打ちを決行したまでの事だ」

「それが伊藤先生の尊皇攘夷と申されますか」

「そうじゃ。僕が攘夷の事に頭を突っ込んだのは、万延（まんえん）元年水戸藩士となした成破（せいはい）盟約の時からだ。木戸さんが参謀となり、僕が有志の間を奔走した。井伊大老のために幽閉されている斉昭公と春嶽（しゅんがく）

公を幕政に参与させ、老中で最も評判のあるものを斬るといふ事になった。長州藩が幕政の事を、水戸藩が老中の事を行う事となった。それが文久二年正月の安藤対馬守の襲撃だ。これも尊王の大義といふ事からみれば、姑息な策であつたかもしれぬ」

「何故にですか」

「内田万之助殿の事は、存じて居ろう。坂下見付にて安藤対馬守を襲撃せんとするも、時刻を取違え、有備館にて切腹された方だ。有備館の監督をして居られた木戸さんは、奉行所で取調べを受ける事になった」

「何故に、内田殿は長州藩邸内で切腹をされたのですか。水戸藩邸にて切腹されるのが筋というものではありませんか。内田殿は、木戸先生を陥れんとしたのではありませんか。幕吏にしてみれば、鴨が葱を背負つて遣つて来たようなものではありませんか」

「内田殿は、木戸さんを死を以て諫めに來られたのだ」

「諫め」

「内田殿は妻子を我が藩に託され、最期を遂げられたのじゃ。事は、安藤閣老襲撃の事。木戸さんへの御咎めは如何ともし難い。そこで、僕は聞多（もんだ）と野村和作に相談し、雅楽（うた）殿を動かして、木戸さんを救う事にした。聞多が雅楽殿に頼み込んだのだ」

「また、井上先生ですか。井上先生は、長井雅楽（うた）と昵懇（じつこん）だったのですか。木戸先生は、長井雅楽を嫌わっていたのではありませんか」

「そうじゃ。木戸さんは嫌な顔をされたが、そうも言つては居られぬ。雅楽殿は、公武合体の事で老中と面識があり、幕府には顔が利いた。

井伊大老亡き後、安藤対馬守は、掃攘（そうじょう）の事は決して出来ぬ事ゆえ、外国の真相を奏し、幕府が攘夷の勅を奉ぜざる理由を陳述せんとしたが、久世大和守は違勅の責を恐れ、幕府の十年間に掃攘すべしとの証言をその儘（まま）とし、和宮降嫁の後、事情を徐（おもむろ）に奏聞せんとしたのじゃ。安藤対馬守は、実に英明な幕閣であった。それ故、安藤対馬守を襲撃したのじゃ。

木戸さんも九死に一生を得た。何しろ、雅楽殿が久世大和守に頼み込んで、安藤対馬守に木戸さんを浪士取締に推挙する事を承諾させたのだから」

「変な話です」

「安藤襲撃は、姑息な策じゃったかもしれぬ。尊王の大義という事から言えば、我が藩の越智斧太郎（おのたろう）が、塙（はなわ）次郎を亡き者にした事の方が、意義は大きい」

「その塙次郎とは何者ですか」

「盲目の国学者・塙保己一（はなわほきいち）の子じゃ」

「何故に、そのような者を」

「顕彰したのだ」

「顕彰。何を顕彰したと申されるのですか」

「塙保己一の事蹟じゃ」

「事蹟」

「塙保己一は賀茂真淵に国学を学び、幕府の庇護のもと『群書類従』編集の大事業をなした者だ。武蔵児玉の人で、幼くして失明するも、学問を志して江戸に出た」

「伊藤先生は、話を作つて居られる」

私は少し憤慨して言った。

「話を作つては居らぬ。嘘と言われては致し方ない。福地さんに聞けば分かる事じゃ」

「何故に、福地殿に話を聞けば分かるのですか」

「福地さんは、安藤対馬守に仕えて居つたのだ。尤も、仕官先がなく、致し方なくであつたが」

伊藤先生の話は、私の不信感を募らせるばかりであつた。

「伊藤先生は、攘夷の過去を抹殺されようとされて居られるだけではありませんか」

「そのような事はない。攘夷の考えがなかつたと言えば、嘘になるが」

「それでは、何故に洋行などされて平気なのですか」

「僕の洋行の志は、安政三年相州宮田の警衛に行つた時からじゃ。安政五年十月に僕は来原先生の若党となり長崎に行つたが、相州警衛の時から英学修業の事をお願いしておいたからだ。あの時分、来原先生と松陰先生は、雅楽（うた）殿の事で意見を異にされて居られたが、その根は来原先生が祐筆（ゆうひつ）になられた頃からあつた。松陰先生は、来原先生には学がないと申されたそうじゃ」

「学がないと申されますのは。来原殿は、先生の師では」

「そうじゃ。来原殿は僕の最初の師匠だ。今でも来原先生を尊敬して居る。先生の漢学の素養といい、経世の見識といい、精神上的の鍛錬といい、群を抜くものがあつた」

「それでは何故に、松陰先生は学がないと申されたのですか」

「松陰先生と来原先生とは、国是（こくぜ）の在る所が違われたのだ」

「どのように」

「松陰先生は下田踏海（とうかい）後、罪を減じられ萩に戻られると、象山先生の教えに従い、一旦は国是の在る所を経学（けいがく）に求められたが、史学への想いを断ち切る事が出来ないで居られた。

松陰先生は申された。一口に経学といっても、四書の集註を読んだ位ではだめだ。周廉溪（しゅうれんけい）とか程伊川（ていいせん）・朱子（しゆ）はいうに及ばず、明・清諸家も学ばなければならぬ。また史論も読まねば駄目だ。ひとかどの学者になるには、通鑑や綱目ぐらゐでは駆け出しで、あの膨大な二十一史も読まねばと。

兄上様の梅太郎殿とは、史学と経学と何（い）ずれが修養教育に有益かを論じて居られた。勿論、松陰先生は史学の有益を論じられたが、経学の研究を疎かにされて居られたわけではない。松陰先生は、純一に朱学を尊奉し、理や性や気や心や天や太極や五行や陰陽など根を尋ね葉を拾い精研されて居られた。その上で、大義のある処を専らに論じられたのだ。松陰先生は、春秋を主として三礼を究められると、経済有用の学を経術と申されたのだ。僕等の及ぶ所ではない」

「経術」

「偽作（ぎさく）だと申されたのだ。梅太郎殿は、松陰先生に再三に互り、経学の優れる事を説かれ、殖産興業の事も論じられたのだが」

「兄上様がですか」

『武教全書』張註の事でも、梅太郎殿は議論の仕様では他国人に勝てると申されたのだが、松陰先生は、疎漏（そろう）なもの、議論に負けると申された。

兎も角、嘉永安政の頃は皆が、経学々々と言ひ、同志であった。来原先生も周布政之助殿も長井雅楽殿も。松陰先

生の玉木叔父様などは、盛んに実践を以て志と為すと申され、周布殿と盛んに経史を講究して居られたそうだ」

「それでは、佐藤信淵の事も」

「松陰先生も佐藤信淵を読むも、その雄偉を喜ばれたが、その人となりには敬服されて居られてなかつた。四海を混同する策だと申されて。そうこうするうちに、経学の高大なる故に、皆、経学を離れていった。玉木叔父様も経学の虚なるを知れりと、経学と袂(たもと)を分かつた。それだけではない。攘夷の事でも、齟齬(そご)が生じた。松陰先生は、長崎に行く者までも好ましかざる者と」

「何故に」

「攘夷の事を遅延する者と」

「伊藤先生は長崎で何をされて居られたのですか」

「海軍操練所で洋式操練の訓練を受けた。伝習所にはハン・トロエンという幕府の雇教師のオランダ人が居った。僕は師範役の杉山徳三郎殿から、厳しく歩調訓練を受けた。藩邸にあつては、小銃雷管の製造を学び、萩に機械を持ち帰り、藩士に伝授した。」

長崎行きに際しては、松陰先生から熊本に行つて、轟武兵衛(とどろきぶへい)という方に面会するようにと紹介状を頂いたが、真直ぐ長崎に行つた」

「轟殿には、お会いにならなかつたのですか」

「そうじゃ」

「松陰先生の紹介状は、どうされたのですか」

「持つて居る」

「それには、何と」

「才劣り学穉（おさな）きも、質直にして華なしと」

「それは、あまりのお言葉では」

「松陰先生は、それを愛する所と書いて呉れた。あの時、松陰先生の紹介状を携えて轟（とどろき）殿の所に行つて居つたら、玄瑞（げんずい）と事を共にしていたかも知れない」

「それは、どういう事ですか」

「文久三年、賀茂社と石清水八幡に將軍家の行幸（ぎようこう）があつたが、その時、玄瑞は轟殿と攘夷の期限を定めるようにとの上書を幕府に行なつたのだ。

長崎に行く前にも、藩が松陰先生の遊学論を容れて、僕等六名の若者を京に遣わした事があつた。安政五年七月の事だ。松陰先生からは、利介も中々の周旋家になりそうだと心に掛けて呉れたのだが」

「それで、京で何をされてたと申されるのですか」

「梅田雲浜（うんぴん）殿、梁川星巖（やながわ せいがん）殿、頼三樹三郎（らい みきさぶろう）殿の諸先生に面会し、京の情勢を探つた」

「京は勅許を得ずして条約を調印したと、大騒ぎになつて居つたのではないのですか。梅田雲浜（うんぴん）先生は青蓮院（しょうれんいん）宮様に謁し、通商条約条約不可と攘夷決行の儀を上申されたと聞いて居りますが」

「確かに、そうじゃ」

「その前には梅田先生は、下田踏海（とうかい）に及び江戸伝馬町の獄にあつた松陰先生を救い出さんとされたと聞いて居りますが」

「そうじゃ。よく知って居るではないか。肥後の中村篁齋殿と相談され、獄吏に賄賂を贈り、松陰先生を救い出さんとされた。松陰先生も安政の大獄が始まり、雲浜（うんびん）殿が投獄されると、赤根武人（たけと）を遣わし、伏見の獄を破らんとされた。」

雲浜殿は若狭小浜藩士で、近江国大津で上原立斎に学び、湖南塾を開かれたお方。ご多分にもれず、嘉永五年、藩に海防策を建白されるや、守旧派の反発を買い士籍を奪われた。

松陰先生とは江戸にて交わりを持たれ、京にては海防僧月姓と交際を持たれ、安政三年十二月、萩に参られ、松下村塾にも参られた。

山県狂介も京に一緒に行つたが、狂介は余り乗り気ではなかつた」

「何故に、山県先生は」

「雲浜殿は尊攘を説き、海防を論じられるも、その志は、常に濟世にあられた。雲浜殿は士の気節を養う事が肝要だと申された」

「士の気節」

「浩然（こうぜん）の気を養うのだ」

「また、その話ですか。女人と交わるのが、浩然の気なのですか。松陰先生も周旋家になりそうなどと、とんだ見込み違いをされたものです」

「そう申すな」

「梅田雲浜（うんびん）先生は、萩にて松陰先生とどのような話をされたのでしょうか」

「その事を話す前に、貴公には、雲浜殿来訪の経緯を話さなくてはなるまい。雲浜殿は、秋良（あきら）敦之助を使つ

て、先ずは周防国阿月に行かれたのじゃ」

「秋良殿とは」

「当役をして居られた浦鞆負（うら ゆきえ）殿の御家来じゃ。世間では、非常な攘夷家として知られて居った方じゃ。雲浜殿は、秋良（あきら）殿の紹介で浦殿の相談人となって居る坪井殿と萩にて議論を交わされる事にされた」

「あの佐幕派の坪井九右衛門（つばい くえもん）ですか」

「そうじゃ。手元役の坪井殿は祐筆も兼ねて居られたからじゃ。雲浜殿は、阿月を離れると、熊毛郡田布施（たぶせ）を経て都濃（つの）郡戸田に入られた。宿をとられた国学者の山田鞆負（ゆきえ）殿のお家の客間には酒瓢（しゅひょう）が残され、湯殿の近くの竹林には雲浜殿の三尺白布の越中褌が乾し忘れてあったとの事」

「何故に、梅田先生はそのような事をされたのですか」

「己が正体を隠されたのだ。僕のように、おなごの腰巻を置き忘れるような事はされない」

「伊藤先生は、方便と申されるのですか」

「山口より萩に入るのも大変な事なのだ。萩に入られた雲浜殿は、坪井殿と話をされた」

「どのような話をされたのですか」

「勤王の端緒を開かんがため、長州と京摂との間に気脈を通じる機関を拵えよと」

「気脈」

「長州には、紙、蠟、食塩といった物産がある。それを大坂で販売して、五畿内地方の物産と交換するのだ。大和には雲浜（うんぴん）殿の親戚筋の豪商が居られたから、長州から大和に食塩などを入れ、大和の木材と交易して、その木材を大坂で販売したら如何と申されたのだ。」

安政四年五月に京の藩邸に居った宍戸九郎兵衛(ししどくろううびょうえ)殿が、物産取組内用掛となられたが、閏五月に坪井殿が物産御用掛となり、京都大坂大和に参られた。

安政五年正月に、雲浜殿の親戚筋の村島長兵衛殿と長次郎殿が萩に來られて大和の物産を献納されると、君公父子の拝謁を賜ったのだ。雲浜殿も長州産物御用掛となられ、交易の業を営まれて居られた」

「それで、長州に参られたと申されるのですか。尊攘党四天王といわれたお方とは、思えませんが」

「雲浜(うんびん)殿は申されたのだ。毛利家は、御先祖より勤王の御家柄。藩祖元就公は、陶賊(とうぞく)を討つ詔を請い、天下の名分を明らかにされたと。正親町(おおぎまち)帝御即位の時には、御即位料を献じられたと。

その上で雲浜殿は、申された。我が藩を皇国首位の藩屏(はんぺい)と致し、富強の基礎を鞏固(きょうこ)にせんとして、上国と物産交易の道を開かれよと」

「梅田先生は、十津川郷士をもつて京都の守護にあたらんとされた方ではないのですか」

「そうじゃ。安政元年九月、ロシアのプチャーチン艦隊が大坂天保山沖に現れ時、雲浜殿は十津川の郷士をもつて京都の守護にあたらんとされた。折りあらば、十津川郷士と図り、風輦を十津川にと考えて居られた。それにしても、あの標札は今、何処にあるのか」

「標札」

「村塾を訪れられた雲浜(うんびん)殿に、松陰先生が揮毫を請われたのだ。学童をして居った品川弥二郎が、墨を磨った。

安政という時代は、開国策なくして議論にならぬ時代であった。安政元年春、江戸に出られた雲浜殿は、鳥山殿のお宅で密航せんとする松陰先生と一夜を共にされ、翌日、武田耕雲斎、金子孫二郎、高橋多一郎らの水戸藩諸氏に

会わんと水戸に出掛けられた」

「梅田先生は、水戸藩の方にも物産交易の道を説かれたと申されるのですか」

「先ずは、勤王の心構えを説かれた」

「如何なる」

「お国は、昔から『大日本史』を著述して居られ、勤王心に篤い賢君が代々出て居られる。京にては既に計画が立つて居る。既に十津川を興してあるから、何時でも風輦を箱根まで御出ましになるように都合がついて居ると。

風輦が一たび御出ましになれば、幕府は一も二もなく勤王になるものと。本家の徳川家が国是を定めるのに躊躇して居る今、本家に国是を定めしむるは、本家に対する勤めであると。家康公の霊も悦び給うであろうと」

「そのような事が、ありましようか。風輦が一たび御出ましになれば、幕府は一も二もなく勤皇になるなどと。徳川は北条の如く振る舞うが必定。何故に風輦が箱根まで御出ましになれば、幕府は一も二もなく勤皇になるのですか。それ故に松陰先生は幕府を掃き清めるため、箱根の山を超えて東送さる事を善しとされたのではないですか」

「小人の徳、風に靡（なび）く草のようなもの。況してや君子の徳においては。それ故、雲浜殿は家康公の霊も悦び給うであろうと申されたのだ。雲浜殿は、この前年にも東湖殿に議論を申し入れられた。水戸の老公を大将とし、貴君を副将とし、攘夷の旗を進めれば、天下の人は雲の如く霞の如く起こつて来るものと」

「それで、藤田東湖先生は何と」

「水戸には人物が居らぬから、その任に堪えぬと」

「藤田東湖先生が、そのような事を申されたのですか」

「あの藤田東湖にして、そうじゃ。水戸の藩論は、動かなかつた。それで、雲浜先生は水戸を後にして福井に赴かれた」

「福井で何をされたのですか」

「岡田準介殿に面会された」

「岡田準介殿とは」

「福井藩儒吉田東篁の弟で、橋本左内、横井小楠に交われた方じゃ。雲浜（うんびん）殿は安政五年五月京に戻られ、梁川星巖（やながわ せいがん）殿に策を勧められた。雲浜殿の策に反感を持たれて居られた松陰先生は、ある意見書を朝廷に奏上された」

「『愚論』と称されるのですか」

「そうじゃ。朝廷の御意向は、安政元年の神奈川条約をその儘（まま）に致し、鎖国を続けるが御定論。幕府は、安政五年に堀田備中が持ち帰った勅答を諸大名小名に下問するも、勅旨遵法する意はない。されど幕府の俗吏のみならず、天下の材臣智士と称する者までもが、叡慮鎖国の御定論を流行後れのものと思なして居ったのだ」

「流行後れのもの」と

「そうじゃ。『愚論』で松陰先生が鎖国を開くと申されたのも、天下の材臣智士の籠絡（ろうらく）のため。一刻も早く、天朝が神功皇后（じんぐうこうこう）以来の真の雄略を御鑑み遊ばれ、墨夷（ぼくい）の撻伐（たつぱつ）を仰せ出でられれば、精忠義憤の人々は、撻伐の愉快に正気を伸ばし、材臣智士も雄略を喜び、天下の人心、天朝に帰趨するものと。尤も、松陰先生も恥じ入るところがあった。外夷に要求せられ泣き出て呉に女（めあわ）す謀と」

「本当にその様な事をおしやられたのですか」

「本当じゃ。雲浜殿は、松陰先生が朝廷に度々建策されるものだから、秋良殿を介して忠告された。余り分らぬ事を書き散すものではないと。雲浜殿は、松陰先生の事を青書生と言って、小児扱いにされて居られた。」

松陰先生も、雲浜殿を傲慢で奸相ありと嫌つて居られたから、自らの志を打ち明ける事はされなかつた」

「その様な事、本当にあったのですか」

「本当だから、仕様が無い。松陰先生は、安政五年に至る迄は、自らの策を示される事はなされなかつた。玄瑞（げんずい）が入門を請うた時も、そうだった。玄瑞は、土屋蕭海（しょうかい）殿を介して三度も松陰先生に書を贈つただ」

「三度もですか」

「玄瑞は、皇国の土に居り、皇国の粟（あわ）を食むと入門を請うた」

「久坂先生は、飯を絶たれる御覚悟で入門を請われたのですか」

「そういう事ではない。玄瑞は、萩は平安古（ひあこ）に生まれし医師の子。玄瑞は、松陰先生を、慷慨気節（こうがい きせつ）の天下の豪傑と見込んで、松陰先生の門を叩いたのだ。松陰先生の御覚悟、何処にありやと」

「久坂先生は、互市を許さば、天下の人、益々その無事に狎（な）れて、兵備厳ならぬと、北条時宗に倣い、米使を斬ると松陰先生に申上げ、入門を請われたのではないですか」

「確かにそうじゃ」

「それで、松陰先生は何とおっしゃられたのですか」

「久坂の論を妄見だと」

「妄見」

「松陰先生は、何故にそのような事をおっしゃられたのでしょうか」

「松陰先生は家居して以来、誓つて世と通ぜずと、頑なに門を閉ざされて居られ、誰にも心の内を打ち明けられな

つたのだ。黙霖（もくりん）殿に対しても、そうであった」

「黙霖殿とは、あの盲目の僧の方の事ですか」

「そうじゃ。安芸国賀茂郡長浜の方で、幼名を采女（うねめ）と申され、史狂王民と号された。松陰先生の『幽囚録』を読まれ、安政二年萩に参られ、土屋蕭海（しようかい）殿を介して松陰先生と書を交わされるようになった」

「黙霖殿は、松陰先生と何を談じられたのですか」

「夷の狡猾傲慢なことじゃ。黙霖殿は、今や夷虜（いりよ）軽悍（けいかん）、蝦夷に入り崎港に碇し、浦賀に迫り、摂津を測り、横行無状、振古未曾有の君恥と申され、倒幕の事を迫られた」

「それで、松陰先生は何と」

「今日征夷をもって桀紂（げつしゆう）とすれば、わが主人なども飛廉（ひれん）・惡来（あくらい）とならんと」

「どういう事でしょうか」

「松陰先生は、皇国の話を漢土の事に託してお話されたのだ。松陰先生は『今の征夷は、古の征夷。今の国司は、古の国司。今の臣民は、古の臣民』と申されたのだ」

「何を申されて居られるのか、分かり兼ねます。伊藤先生は、何を隠そうとされて居られるのですか」

「何も隠して居らぬ。松陰先生は、われ等のごとく主人持ちは絶えて相謀らざるものと申されたのだ。僕は毛利家の臣なりと」

「それで、松陰先生は高杉先生に浪人などになるなとおっしゃられたのですか」

「そうじゃ。それで尽くしても尽くしても、征夷が応じぬ時は、罪を知れる諸大名と相共に天朝にこの由を奏聞し奉るべし」

「それで、松陰先生は伏見要駕(ようが)の策に及んだのですか」

「そうじゃ。松陰先生は、周布(すふ)殿が危計を企てて居ると申されたのだ」

「危計」

「藩公の参勤にて、江戸で勤王の事を決せんとされて居られたのだ。それで、松陰先生が周布殿に申された。藩公出るは、危計なりと。吾輩(わがはい)出てて之を試み、事成れば公出てて之に継ぐと。若(も)し事成らずして、吾輩戮死するも国に損なしと」

「御尤もなお話です。それで、周布殿は」

「書生、妄動すべからずと。折しも、雅楽(うた)殿が世子の内命を奉じて、江戸より萩に戻つて来た。松陰先生は申された。長井帰るは藩公参府を促し、媚(こび)を幕府に献ぜんと。この時、長崎から戻られた来原(くるはら)先生に、松陰先生は参府の失計を論じ、雅楽殿を斬ると申されたのだ」

「それで、来原殿は何と」

「来原先生は雅楽(うた)殿の従弟(じゅうてい)。雅楽殿を訪ね、松陰先生の言を伝えられた」

「それで、雅楽は何と」

「吾を以て大義を知らざる者と為すかと」

「伊藤先生は、幕府に媚(こび)を売らんとした者に、どのような大義があると申されるのですか。伊藤先生が、御存知ない筈がありません。間部(まなべ)下総を要撃せんと、松下村塾塾生門下同志十七名の方が血盟されたではありませんか」

「貴公にいわれる迄もない事。間部要撃の事で、四藩の藩士も我が藩に援を求めて来たが、我が藩は先ずは山県半蔵

殿を伏見に遣わし、薩摩藩の動向を探ったのだ」

「宍戸璣（たまき）殿にですか」

「そうじゃ。松陰先生とともに玉木文之進（たまき ぶんのしん）殿の塾に学ばれ、明倫館でも学ばれた。嘉永元年に、明倫館学頭・山県太華（たいか）の養嗣子（ようしし）となられた。山県太華（たいか）の養嗣子になられただけあって、松陰先生とは議論が合わぬ事もあった」

「それで、薩摩藩の動向は、どうだったのですか」

「我が藩は藩公の参勤にて、江戸で勤王の事を決せんとしていたが、島津斉彬（しまづ なりあきら）侯亡き後の薩摩政府には、我が藩に同調する動きはなかったのだ。それ故、我が藩は四藩合従（がつしよう）の事から手を引いたのだ。

僕等も、松陰先生のお考えに賛同しておらなかったのじゃ。高杉さんも、久坂も、勿論、来原先生も、木戸さんもだ。松陰先生の挙は、却（かえ）つて社稷（しゃしよく）を害すると。松陰先生は、彼ら尊攘心なく自ら絶つと申され、交際を絶たれたのじゃが」

「信じられません。木戸先生もですか。木戸先生は松陰先生に涙を流されて、誓われたと聞いて居ります。『吾れ江家の支族を辱（かたじけな）くす。報国の志、他人に比して足れりと為さんや』と。どういう事だったのでしょうか」

「木戸さんは、松陰先生の激論が門下生に及ぶ事を恐れ、門下生に松陰先生との接触を禁じられたのじゃ。松陰先生が、尚も間部要撃の策を企てられたから、周布殿が松陰先生を野山獄に投ぜられたのだ」

「そのような事が、あるものなのでしょうか。お答えになって居りません」

「そもそも貴公は誤解して居る」

「何をです」

「松陰先生の伏見要駕の策じゃ」

「伊藤先生は何を申されるのですか」

「それでは、貴公は松陰先生の伏見要駕の策をどのように聞いて居る」

「君公御参府時に、同志一同が大原三位卿と共に伏見の御旅館にて、君公、行相、政府の諸君子に面謁の上、尊攘の旨趣を申し述べ、君公をお誘い入洛し、我が藩をして尊攘の魁にならんとされたのです。それで、松陰先生は入江先生を京に遣わそうとされたのです。私が何を誤解して居ると申されるのですか」

「確かに貴公の申す通りじゃ。じゃが、その先があるのじゃ」

「先？」

「そうじゃ。松陰先生と入江兄様は、要駕の策において合すも、その義は違つて居つたのじゃ。松陰先生は、杉藏を犬死させるわけにいかないと申されたのだ」

「犬死。松陰先生は、三井寺にでも隠れよと申されたのですか。嘘を申されては困ります」

「嘘ではない。僕は入江九一の義弟なのじゃぞ。松陰先生の策は、叡山臨幸（りんこう）じゃつた」

「松陰先生は、御上を叡山にお連れになられて、何をなされようとしたのですか」

「諸宗の本山に勅し、末寺の僧徒を会させ、墨夷（ぼくい）の調伏（ちようぶく）をさせる。これは後醍醐帝が、かつて試み給もつた策じゃ。松陰先生は申された。ハリスの言、逐一行わるる時、神州実に危しと。彼れ必ず貧院を起こさんと。彼れ必ず幼院を設けんと。彼れ必ず施薬医院を造らんと。是れ愚民の心を結ぶ下手の一着と」

「何故に松陰先生は、調伏（ちようぶく）などと些末な事を申されたのでしょうか。天朝より征夷の罪を問われれば、よい事ではありませぬか」

「松陰先生は天朝より征夷の罪を問われれば、幕府より逆節の事あらんと申された。それで東叡山法親王を仙台藩か米沢藩に託し、皇太子・親王・法親王は正義の大諸侯に託すと申されたのだ。松陰先生は、入江兄様にもこの策を秘されて居られたのじゃ」

「それで諸侯は、松陰先生の策に応じたのですか」

「松陰先生が頼りにしていた加・薩・肥前・土・勢も我が藩も征夷の鼻息を仰ぐだけじゃ。それで松陰先生はナポレオンをおこしてフレーヘードを唱えねば、腹の虫がおさまらなくなられたのだ。松陰先生は死に急がれた」

「死に急がれた」

「粉骨碎身すれど裨益(ひえき)なしと。あとは草莽崛起(そうもうくつき)の人を望む外、頼なしと。されど」

「されど何でしょうか」

「匹夫(ひつぷ)の諒(まこと)に負けると」

「匹夫の諒に負けるとは、どういう事でしょうか」

「松陰先生は恐れられて居られた」

「松陰先生は何を恐れられたと申されるのですか」

「草莽崛起(そうもうくつき)の人を頼むと、本藩の恩と天朝の徳を忘ると。今思えば、封建の觀念にとらわれて居られたやも知れぬ」

「どういう事でしょうか」

「松陰先生は、申された。『近世海外の諸蛮、各々其の賢智を推挙し、其の政治を革新し、駸々(しんしん)然として上国を凌侮(りょうぶ)しようぶ)するの勢あり。我、何を以て是を制せんか』と」

「それで、松陰先生は何を以て制するとおっしゃられたのですか」

「我が邦の国体じゃ。松陰先生は、我が邦の国体が外国と異なる所以を明らかにする事だと申され、皇国と漢土の国体の違いをお話された」

「松陰先生は、どのようにお話されたのですか」

「我が邦は、上天朝より下列藩に到る迄、千万世、世襲して絶えざること、漢土の比に非ずと申され、我が邦の臣も譜第の臣なれば、主人と死生休戚を同じくし、死に至ると雖ども主を棄て去るべき道は、絶えてなしと申された。

それに比して、漢土にては、聡明叡智を有する者が君長となるが、漢土の臣は半季渡りの奴婢の如きものであると。封建制と郡県制の議論じゃ

松陰先生は、封建の観念にとらわれて居られた。下田踏海(とうかい)の事が上手く行って居たら、また先生のお考えも違ったかもしれぬ。高杉さんは、松陰先生に再度のアメリカ行きをお話された事があった」

「それで、松陰先生は」

「十年後お互い幸いにして生きて居たら、大計商議致すと申された。その気になれば、洋行の機会は幾らでもあったのだ。長州藩では万延(まんえん)元年、北条源藏殿が咸臨丸にて幕府の遣米使節の随員としてアメリカに行かれて居られる。杉徳輔殿は文久元年、幕府遣欧使節の竹内下野守に随行されて居られる。高杉さんも、文久二年上海視察を行ったのも、幕吏根立助七郎に同行しての事じゃ。松陰先生も文久二年壬戌(みずのえいぬ)の年まで、兄・梅太郎殿とのお約束を守られ、天下国家の事を論じたりして居らねば、洋行の事は容易な事であった。

亀太郎殿の事も残念な事をされた」

「亀太郎」

「松陰先生の肖像を描いた、松浦松洞（しょうどう）殿じゃ」

「吉田稔麿（としまろ）殿、増野徳民殿とともに、松下村塾三無生と言われた方ですか」

「そうじゃ。松洞殿は、文久二年京都にて長井雅楽（うた）殿を同志と暗殺せんとするも、宍戸九郎兵衛（ししどくろうべえ）殿に諫められ、粟田山にて自害されたのだ。もし、あの時、アメリカに行かれて居られたなら」

「アメリカ」

「安政の時分、松洞（しょうどう）殿は、藩の要路の者に頼んで、幕府が派遣する遣米使節に随行してアメリカに行くかと考えて居られたのだ。その事を松陰先生に申し上げた」

「松陰先生は何とおっしゃられたのですか」

「最早その時にないと。ただ深念ありての事なれば格別、左もなくば面白からずと」

「深念とは」

「松陰先生の宿論じゃ。松陰先生は、富国の事には関心がお有りでは無かった。皇国が、宋のように亡びて胡元となりはしまいかと、明のように滅して満清となりはしまいかと恐れられた」

「そのお話は、木戸先生から承って居ります」

「松陰先生は、皇国の中原を恢腹（かいふく）する事だけを願われた。只管（ひたすら）、時機を失したと後悔された。癸丑（きちゆう）・甲寅（こういん）の時、宿論を遂げる機を逃したと。米露と和親して間に乘じて富国強兵を致すな

どと悠長な事をしたと。一刻も早く、蝦夷を墾（ひら）き、満州を奪い、朝鮮を来たし、南地を併せ、然る後にアメリカを拉（ひし）ぎ欧洲を折（へ）がないと手遅れになると。尤も無理な話である事は、松陰先生御自身がよくご存じであつた」

「何故にですか」

「朝廷の陋習(ろうしゅう)は、幕府より甚だしい。外夷を近づけては神国の汚れと申す計りで、上古の雄図遠略の事は少しも思召(おぼしめ)しがないと。囚われの身にあつて八方手を尽くすも、それが徒勞であると悟られると、死して吉田松陰の想い後世に伝えるのみと、死に場所を求められたのだ」

「死に場所を」

「松陰先生はこの世に想い残す事などもう無かつた。『亦此の身を恋ふるなかれ、万劫(まんごう)煩惱の根、亦此の身を厭(いと)ふなかれ、一聚虚空(いつしゅうこくう)の塵』。白樂天の詩に託された松陰先生の御心境だ。僕など煩惱の塊(かたまり)じゃ。来原(くるはら)先生と僕が長崎から萩に戻つたのは、安政六年六月の事であつた」

「それでは、松陰先生を見捨てられたという事ではありませんか」

「そうじゃ。安政六年四月に長崎の海軍伝習所が閉鎖され、来原先生とお役目を終えてからも、暫く長崎に居つた」
「松陰先生が江戸に檻送(かんそう)されたのは、安政六年五月。先生方は何をして居られたのです。萩に戻られ、松陰先生御宥免に奔走するのが筋と言うものではありませんか。それでも伊藤先生は、松陰先生の門弟だったのですか」

「あの頃は、皆同じ想いであつた。高杉さんも、久坂も、木戸さんも。じゃが、松陰先生は、高杉さんにだけは想い伝える事があつたようだ。安政六年七月、江戸の伝馬町の獄から高杉さんに書を贈られ、彦根・間部等の所は誠実に忠告するに如かずと申された。井伊大老も後悔しているようだ」と

「井伊が、何を後悔して居ると申されるのですか」

「奥向きの事に与した事じゃ。大老が暗殺されてからも、彦根鳳輦奉迎の風説が絶えなかつた。朝廷御憂慮深く、僕

が彦根藩の内情を探りに彦根に入った」

「先生がですか」

「そうだ。藩は先ず片山貫一郎、楢崎八十槌を彦根に遣わしたが、城下の警備は厳しい。そこで僕と堀真五郎が偵察に入った。僕は越智斧太郎、堀は有田又四郎と変名した」

「越智斧太郎？」

私は耳を疑った。

「それは伊藤先生の変名なのですか」

「そうじゃ」

「それでは、塙次郎を殺した越智斧太郎とは、伊藤先生の事なのですか」

「そうじゃ。僕が塙次郎を殺した越智斧太郎じゃ。イギリスに留学した山尾庸三と一緒にやった」

「伊藤先生は何故に、そのような大事をお話されるのですか」

「貴公が僕を尊攘派ではないと疑って居るからじゃ」

「それで、彦根の風説は本当だったのですか」

「城池を修繕したる事絶えてなく、鳳輦を迎えんとするが如きは、途方もない風説であると要路の者から聞いた。その旨を長藩より朝廷に申し上げた」

「城下にどのようなようにして入られたのですか」

「西川吉輔（よしすけ）という者を頼った。その西川が多賀神社の神官を紹介して呉れて、その伝で彦根藩の寺社方元締役や至誠組の者に会う事が出来たのじゃ」

「その西川とは、何者のですか」

「近江八幡の商人だ。多くの勤王の志士が、西川を頼って八幡に入り、西川の家で修養した」

「何故に、西川の家で修養をされるのですか」

「西川の家には、幕府が憚る書物が沢山あったのだ」

「それで、伊藤先生は、彦根で何をされたのですか」

『『太平記』を講釈して居る渋谷という医師の家に行き、至誠組の者と酒を飲み交わした。皆、学問もあり、皇室の式微(しきび)を歎き、外夷の跳梁(ちようりよう)を憤って居った。

僕は座敷で一曲舞った後、庭に降り、小さな池の畔(ほと)りにある老松の下枝を気合いもろとも斬りつけ刀を収め座敷に戻ると、一同から盃を献(さ)された」

「井伊の膝元(ひざもと)に、何故にそのような方が居るのですか」

「世に言う佐幕勤王と言うものは、奸佞(かんねい)忠誠の異名に過ぎないのだ」

「どういう事なのでしょう」

「尊攘党四天王といわれた頼三木三郎(らい みきさぶろう)殿は、若き日、幕府の横暴を憤り、不忍池にて池畔の灯籠(とうろう)を蹴倒された。不忍池は琵琶湖を、弁天島は竹生島をなぞらえ幕府によって造られたものだ」

「その話は、伺って居ります。頼三樹三郎(らい みきさぶろう)先生、十八にして江戸に遊び、昌平黌で学ばれるも、ある日、友人四、五人と徳川将軍家菩提寺である寛永寺に至り、朝廷を侮蔑し顧みない徳川氏に憤り、その怒りを灯籠の前頭に彫られていた葵の紋にぶつけられたのです。国家の奸賊にして滔天(とうてん)の罪悪、志士仁人の悪(にく)む所なりと」

「そうじゃ。寛永寺は、幕府によつて比叡山延暦寺になぞらえて建立されたもの。開祖は天海。頼三木三郎殿の至誠に比べれば、戊辰戦争時、官軍につきし彦根藩士・谷鉄臣など取るに足らぬ者達じゃ。

寛永寺の石灯籠を蹴倒すという事件を引き起こしたことで、三木三郎殿は自ら昌平鬘を退き、旅に出られたのだ」
「旅」

「そうじゃ。三木三郎殿は江戸にて阿部四郎五郎という旗本の家に出入りして居られたが、そこで信州人の勝野豊作という方と交わり、奥州漫遊に出かけられる事にされたのだ」

「奥州漫遊？幕府の追っ手が迫つて居られたのですか」

「そうではない。寛永寺石灯籠の事は、昌平鬘の舎監が神官に穩便に話をつけ、事なきを得たが、三木三郎殿の志はそのような事で萎えるものではない。奥州漫遊を終えられると、歩を蝦夷地に進められた」

「頼三樹三郎先生も蝦夷地に赴かんとされたのですか」

「そうじゃ」

「初めて伺うお話です」

「そうじゃろう。蝦夷地に赴かれた三木三郎殿は、箱館（はこだて）にて九州は久留米から来られた柴山文平殿と出会い、その方の案内で幌泉（ほろいずみ）、石狩（いしかり）、小樽を旅し、伊勢の人・松浦武史郎（まつうら たけしろ）殿と江差（えさし）の寺の鐘楼堂にて、三木三郎殿が詩を作られ、松浦武史郎殿が詩題を篆刻（てんこく）された。江差は面白き所。姥神（うばがみ）様が祀られて居る所じゃ」

「姥神（うばがみ）様」

「その昔、江差（えさし）におりんと言う天変地異を告げる姥（うば）が居ったそうじゃ。ある夜、その姥に白髪の翁

（おきな）が現れ、壺を与え、中の水を海に注げば、鯨（ニシン）が来ると告げて、漁の仕方を教えて消えたそうじゃ」

「それで蝦夷地に鯨漁が栄えたと申されるのですか。何故に、伊藤先生はその様な事をお話されるのですか」

「後で対馬藩の内訌（ないこう）を内偵した時、面白いと思つたからじゃ」

「それで、頼三樹三郎先生は、どうされたのですか」

「蝦夷地遊歴を終え京都に戻られると、心新たに梁川星巖（やながわ せいがん）殿、梅田雲浜殿と尊攘の大策を交議されるも、彦根藩士・長野主膳の策謀によつて捕らえられた事は、知つての事」

「勿論、存じて居ります」

「三木三郎殿の御辞世の句は？『かへりみる比叡の山影くもり 我が行く先はしら雲の空』だ。

三木三郎殿は、井伊大老とその家臣の挙動を憎み、佐幕の説に心酔せしものは、彦根藩の長野主膳なりと袂（たもと）に短銃を隠し持ち、常日頃から狙つて居つたのじゃ。

お父上は『日本外史』で有名な頼山陽先生。僕はイギリスに密航した時、山陽先生の『日本政記』を携えて行つた。

三木三郎殿は、古狂生と号され、毎日、三升の酒を飲み干して居られたそうじゃが、その勤王の志、芳醇にして迷いがなかつた。三木三郎のお名前の御由来は、京都の三本木にお生まれになられたからと聞いて居つたが、それと合わせて誕生の日に日野資愛（すけなる）卿から祝い酒八升を贈られ、我が邦酒を『みき』と唱える事から三樹八郎と命名されたそうじゃが、後で八男にあらずと三樹三郎と改められたそうじゃ」

「そのお話は、誰からお聞きになられたのですか」

「大楽（だいらく）源太郎さんから聞いた」

「何故に大楽（だいらく）先生が」

「大楽さんは、頼三木三郎殿と昵懇(じつこん)じゃったのだ。安政四年から京のお宅を訪れ、長州の動向をお伝えして居られた。大楽さんの事は聞いて居ろう」

「勿論です。大楽先生は久坂先生と同じ平安古(ひあこ)の生まれで、無二の親友で行動を共にされて居られたと聞いて居ります。十二歳の時、養子に入られた大楽家は、大内氏譜代の臣で、陶晴賢(すえ)はるかた)がキリシタン大名の大友氏と謀り大内義隆を亡き者にした際、大内義隆に従って討死された御家と聞いて居ります」

「そうじゃ。幼少の頃、吉松淳藏殿の塾に入り漢文を学ばれ、勤王僧月性の時習館でも学ばれた。安政四年には、京にて頼三木三郎(らい みきさぶろう)殿のお宅に出入りされ、梁川星巖(やながわ せいがん)殿、梅田雲浜(うんぴん)殿とも交際され、この頃西郷さんとも面識を持たれた。

安政五年四月には、江戸に赴かんとして、三木三郎殿から桜任藏(さくらじんぞう)殿にあてた紹介状を書いて頂いたそうじゃ」

「桜任藏(さくらじんぞう)殿とは、何方ですか」

「常陸は真壁(まかべ)の医者の子に生まれ、藤田東湖殿に学ばれた方じゃ。松陰先生や西郷さんとも交際された方で、高山彦九郎殿を崇拜されて居られて、松浦武史郎殿とも交際を持たれて居られたそうじゃ。斉昭侯の雪冤(せつえん)運動に奔走され、水戸藩での立場を危うくされた。

大楽さんの話では、頼三木三郎殿も、愚天狗現出いたし天下有志有用な物の邪魔致し困り入ると申されて居られたそうじゃ。

安政五年七月には、江戸から京に入った西郷さんが梁川星巖(やながわ せいがん)殿の家で、頼三木三郎殿と大楽(だいらく)さんと議する所があった」

「何を議論されたのですか」

「島津斉彬（しまづ なりあきら）公亡き後の方策じゃ。この時、井伊大老が上洛し、主上を彦根城に移し奉らんとこの報があった。井伊に対抗して我が方は西国へ還幸あるべきか、それとも一先ず吉野へ赴かせられるかとの議論となった。あの頃が、運命の分かれ道じゃ。大楽さんの事も玄瑞（げんずい）の事も、本当に残念な事をした」

そう言うと、伊藤先生は暫し話を止めた。

「松陰先生が御存命の頃、玄瑞は大楽さんが周旋していた契丹（きつたん）に赴かんとして、松陰先生に止められた事があった」

「何故にですか」

「大楽さんと玄瑞は、佐藤信淵の論を実践しようとしたのだ」

「久坂先生が佐藤信淵の論を。松陰先生は、佐藤信淵の姦計を嫌悪されて居られたのではないですか」

「姦計などではない。玄瑞は王事に死せんと欲した男。玄瑞は、朝鮮・満州・広東・呂宗（ルソン）・爪哇（ジャワ）・印度をはじめ、亜墨利加（アメリカ）・欧羅巴（ヨーロッパ）にも自由に往来し、皇威を海外に輝かせようとしたのじゃ。松陰先生は玄瑞の多岐に失せん事を憂うと申され、木戸先生を重んじられるようになられた。松陰先生は玄瑞には随分期待して居られたのじゃが」

「どういう事なのでしょう」

「あれは、安政四年十二月、玄瑞十八歳の時じゃった。玄瑞は、松陰先生の妹の文さんを娶（めと）ったのじゃ。僕は木戸先生がお文さんを娶られるものと思つて居つたのじゃが、松陰先生は玄瑞に娶らせた」

「何故にですか」

「松陰先生は小五郎は壮士なれども、読書の力と憤夷の志は、玄瑞の方が遙かに勝ると申されたそうじゃ。僕も来原先生の若党になって長崎に行つて居らなければ、堺町御門の事で玄瑞と生死を共にして居つたやも知れぬ。僕に華がなかつた分、生き長らえたわけじゃ。松陰先生を見捨てたような後ろめたい気持ちにはあつたが」

「久坂先生は、松陰先生に忠誠を誓われたと申されるのですか。伊藤先生は、久坂先生と入江先生の妹さんのお墨殿への恋慕の情を争つていたと聞いて居りましたが。それでお墨殿と結婚されたのですか」

「お墨との事は、そのような事ではない。確かに、僕と玄瑞はお墨への恋慕の情を争つて居つたが、お墨との婚儀の話は、僕が文久二年秋に江戸京都を行き来している間に萩にて生じたものだ。伊藤家のばい様がいたく乗り気で」

「御婆様が」

「盛んに文を遣わしてきた。根負けして、いか様とも御存分に御取計らいくだされと書き送り、ほつといた。そうこうして居るうちに、今度は京都で辞令を受けた」

「辞令」

「松陰寅次郎に従学し、尊王攘夷の正義を弁知し心得宜しきを以て、十分に挙げると。あれは文久三年三月の事じやつた。上京した親父殿から萩の話聞いて困惑した」

「それまた、どうしてですか」

「入江の兄様も正月に士分に挙げられたとの話であつたが、梅太郎殿は取立ての話を断られて居られたのだ」

「松陰先生の兄上様の梅太郎殿が、藩の取立ての話を断られた」

「そうじゃ。梅太郎殿ほど、御見識のある方が、断られたのだ。それに、方角も定まらなかつた」

「方角」

「その前に藩所有の軍艦壬戌丸（じんじゅつまる）の乗組員として、十分に取り立てるとの話があつたんじや。木戸さんに相談したが、今はその時ではないと言う」

「その時ではないと申されますのは」

「壬戌丸（じんじゅつまる）の船長が、後に俗論党により野山獄で処刑された甲子殉難十一烈士の一人の山田亦介（またすけ）殿から幕府の威臨丸にてアメリカに行かれた北条源藏殿に替わられたからじや。何しろ山田亦介（またすけ）殿は、長沼流兵学者で、松陰先生に明倫館にて兵学を教授されて居られたのじやから。」

その直後、京で藩論が攘夷に転じ、同志は攘夷決行の準備のため帰国するも、僕と聞多（もんだ）は武器購入の用務のため江戸に行く事にした。そこで、横浜から密航したのじや。

僕が英国に留学出来たのも、聞多の御陰じや。木戸さんには事後承諾じやつた。聞多が横浜の下田屋で嘆願書を書いて送って呉れた。春輔（しゅんすけ）の事は京都において内々同盟決心致した事。胡冠を蒙り胡服を着、断髪して、洋行するのも、束髪は乗船の昔信に差し贈りしものと。聞多は六歳年上だが、常に同志として接して呉れた」

「お墨（すみ）殿の事は、どうなされたのですか」

「ばい様には、御承知致したと手紙を差し上げ、イギリスに密航した。イギリスから帰国してからも難事が続いた。元治元年七月の堺町御門の事で、入江兄様が討死にされた。僕は上京の途、備前岡山の城下で品川弥次郎と大楽さんからその報を受けた。お墨には、御時勢とはいえ入江母上様の御心を御なぐさめ致すようにとの文を送った」

「それでは何故に、お墨殿を離縁されるような事をされたのですか。何か、お墨殿に落度でもあられたのですか」

「そのような事はない。同志にも随分相談した。高杉さんだけが、その論が宜しいと言って呉れた。僕が長崎に出張している間に、お墨さんは、伊藤家先祖の位牌に礼拝し、ばい様を始め家族の者に別れを告げて、実家に戻られた。この

離縁の式には、吉田家御母堂様が立ち会われた」

「吉田家御母堂様が、立ち会われたのですか」

「そうじゃ」

「松陰先生の養母様の御実家には、澤宣嘉（さわのぶよし）卿を始とする尊皇攘夷の志士が出入りされた御家と聞いておりますが」

「そうじゃ」

「それで、今の奥方様と」

「そうじゃ。馬関で芸者をして居ったお梅と、下関新地に新居を構える事にしたのじゃ」

「それでは、二度も松陰先生をお見捨てになられたという事では、ありませぬか。何故に、そのような事をされたのですか」

「血じゃ」

「血？」

「血がそうさせたのじゃ。僕の家は孝靈（こうれい）天皇を祖とする伊予国越智氏の出だ」

「また、そのような戯れを」

「戯れではない。越智氏は衰退するも、同族の河野氏は通信の時、西国にあつて頼朝公挙兵に呼応し、平氏追討に加わったのだ」

「それが、どうしたと申されるすか」

「僕の祖先は、海の民だという事だ。尤（もつと）も一時期、山の民にもなつたが」

「それまた、どういう事ですか」

「河野氏は、通堯（みちたか）の孫の通弘が伊予の本家から別れ美濃大野郡清水に移り、稲葉氏を冒した。それより通弘の孫通兼の時、清水より郡上に移り、通兼の子の土佐守通村が安八郡林ノ荘に移り、新たに林氏を冒したのじや。同族にて伊予国越智郡拜志（はやし）より出た林通種は、伊予の林氏の祖じや」

「それで、林氏を名乗られて居られた」

「そうじや。通村の次子の通忠は美濃で別に越智姓林氏を興した。通忠の第三子の淡路守通起は、秀吉の四国侵攻で危機に瀕した本家の河野氏の救援に美濃より赴くも、敗れ、毛利氏を頼つたのじや。」

その毛利も関が原で敗れ、窮地にあつた故、家老の福原広俊（ひろとし）殿の好意で熊毛郡束荷（つかり）村に落延びた。それで僕は束荷村で生まれた。僕が百姓の出でありながら、侍気質も故無き事ではない」

「それで、伊藤先生は何故に、萩に居られたのですか」

「父・林十蔵（じゅうぞう）は畔頭（くろがしら）を勤めていたが、故あつて郷里を離れる事になった」

「故とは」

「親父殿は、義侠心の篤い、僕に似て剛直者じや。困っている人に所管の米を流用した。それを補填するために萩に出て、米搗（つき）き薪採りなどの雑役をして居つたが、木戸さんの家に入出入りするようになった。木戸さんは我が家の素姓を知つて、蔵元付中間（ちゅうげん）から足軽となつた伊藤直右衛門（なおうえもん）の養子にして呉れた。安政元年、僕が十四歳の時だ。尤も、親父殿は不満じやつたのだが」

「御不満と申されますのは」

「親父殿はもつと名のある家に入りたかつたのじや。しかし、僕等を村に残して居るから、贅沢言つても居られん。親父

殿が居らねば、今の僕もなかった。

相模国宮田番屋に詰めた時、来原先生が僕の組頭になられたのも、親父殿が木戸さんを介しての事だ。松下村塾に入れたのも、親父殿のお陰じゃ。来原先生が松陰先生に頼んで呉れた。この者の父は義兄の桂小五郎の愛する者故、一人前の武士にして呉れるようにと。

当時、木戸さんはまだ、桂小五郎と名乗って居られたが、その名を剣術のみならず、名士との交際においても、轟（とどろ）かせて居られた。木戸さんは松下村塾の門こそ潜（くぐ）られなかったが、明倫館で松陰先生から兵学を学び、その交際においては終始、愛弟子の扱いを受けて居られた」

「伊藤先生は、木戸先生に嫉妬されて居られるのですか」

「嫉妬などせぬのが、僕のいいところじゃ」

五

航海も三日、四日と日が過ぎると、倦怠感が漂って来た。日に三度、食堂に出掛けるか、雑談を重ねるだけであった。海の眺望も横浜を出立した時と違い、殺伐としたものに感じられるから不思議だ。

この様な時、小人閑居して不善をなすと言うのか。使節団の無作法に業を煮やした平賀殿が、ナイフ、フォークの置き方から西洋料理の食べ方まで凶画したものを岩倉大使に差し出したという。その凶画は各部屋に回状されたが、反

感を招くだけであつた。

村田先生は、フォークでビフテキを芋刺(いもざし)にして喰いちぎり、平賀殿の方を見て笑つて居られた。岡内殿は、これ見よがしに匙音(しおん)を立て、スープを舌打ちし飲み干した。

「おまんも、気を付けんといかんぜよ」

「何をです」

「賊軍の残党が居つて、命を狙ちよる」

「木戸先生なら、大丈夫です」

「木戸さん？おまんじゃ」

「何故に、私が」

「山田市之進は、何も言うちよらんのか」

「何をです」

「二等書記官をして居る林董(ただす)を知らるか」

「旧佐倉藩の方では。牛込早稲田の明治義塾で英語を教授して居られたとか。陸奥先生の紹介で、伊藤先生が使節団に入れられたという話です。歳は二十二と私より一つ下ですが、デ・ロング公使の通訳をされて居られたとか」

「危ない、危ない」

「何が危ないのですか」

「そんじゃ、安藤太郎は」

「伊藤先生とは、勝先生の海軍塾で顔なじみの方とか」

「益々、危ない。林董も安藤太郎も箱館の賊軍ぜよ。二人とも一年半前まで、弘前の寺に監禁されちよつたが、許されて東京に来たんぜよ。木戸さんは、何も話しちよらんのか」

岡内殿は笑われた。木戸先生の事だ。本当の事を話せば、私が洋行しないと言い出すと思つたのであろう。何時もの事だ。部屋に戻ると、奴も様子が変だった。

「どうした」

「大事だ」

「何事だ。やはり刺客が居るのか。木戸先生はどうして居られる」

「そうではない。悪戯(いたずら)をされたと騒いで居るのだ」

「誰がだ？夷人か」

「おなごだ」

「何を取り乱して居る。おなごが悪戯された位の事で」

「他愛無い事でも、大事に至る事もある。悪戯されたおなごが、大久保先生に直訴したのだ」

「直訴。それまた、雄々しいおなごだ。だから言うた事ではないか。おなごに西洋の教育を施そうなどと考えるからだ」

「おなごに罪はない。悪戯されたのは、おなごの方だ」

「お主の監督が行き届かぬからだ。それで下手人は誰だ」

「長野某とかいう幕臣の書記官だ。大久保先生は、執り成しを伊藤先生に一任された。裁判を行うとの事だ」

「伊藤先生のハイカラ趣味か」

「少し趣が違う。福地殿が伊藤先生に提唱したそうさ。裁判官は伊藤先生か山田先生か、何方かが務められるとの事だ」

「それは見上げた心掛けではないか。同僚を自ら糺(ただ)そうというのだ。幕臣も捨てたものではない」
「どうした。普段の言動と違うではないか」

奴は目を丸くしていた。

「何をそんなに狼狽して居る」

「土佐の佐々木殿が、反対して居られるのだ」

「佐々木先生が」

「何故、裁判に反対されるか分からぬのだ。事ある毎に幕臣を目の敵にして居られるのに。敵に塩を贈るといふのもあるまい」

「伊藤先生は、何と申して居られるのだ」

「彼方(あちら)流でも公明正大に行えば何の問題もないと。兵庫裁判所総督の東久世通禧(ひがしくぜみちとみ)卿の輔佐役をして居られた時も、外国人との裁判に問題はなかったと申された」

「佐々木先生は、彼方(あちら)流の使節団のやり方が気に召されないのだ。御不満の根は深い。礼服一つとってもそうだ。木戸先生に苦言を呈して居られた。彼の地では御国の礼服を用いるようにと。」

何も木戸先生、大久保先生、山田先生までも、西洋の狩猟服にてアメリカ号に乗船される事はなかったのだ。浅野内匠頭(たくみのかみ)が松の廊下にて刃傷(にんじょう)に及んだのも、勅使饗応役(きょうおうやく)の装束をめぐつての事だ。ましてや、条約改正の事が絡むと尚更だ。

そういえば、佐々木先生の随員に長野という方が居られたな。まさか佐々木先生の随員なのか」

「確かに幕臣の長野と言うた。おなごが偽りを言うて居ると言うのか」

「誰が言うた」

「梅子だ」

「あのおちびチャンか。他のおなごは」

「何も言わぬ」

「伊藤先生は、何と申して居られる」

「裁判の前だ。公には出来ぬと」

「何処へ行く」

「何処でもよいではないか」

「伊藤先生なら、部屋には居らぬぞ。上甲板に居られる筈だ。君から話を聞いておいて呉れぬか」

奴と雑談している暇はなかった。川原殿と話を付けねば。序(ついで)に長野とやらの事も聞いてみる事にした。川原の部屋を訪れると、此方(こちら)から用件を切り出すまでもなかった。

「何かあったのか。若い者が騒いで居ったぞ」

「悪戯(いたずら)されたと言うて、おなごが長野という書記官を訴えたそうです。裁判をするとか。川原殿は長野と
いう御仁を御存知ではありませんか」

「トミーの事だろう」

「トミー」

「ワシントンへ通商条約批准に行つた時、通詞をされた立石得十郎殿の甥だ。トミーは立石殿の養子となり、立石斧次郎と名乗り、無給通詞見習として、万延(まんえん)の使節に同行した。今は、長野桂次郎(けいじろう)と名乗つて居る」

「何故に、トミーなどと申されるのですか」

「彼の地でトミーと呼ばれたのだ。斧次郎の行く所、何時もおなごが取り囲んだ。彼の地でも振る舞いの事でお咎(とが)めを受けた」

「身内を売るような事をするものでしょうか」

「何の事だ」

「福地殿が、伊藤先生に裁判をするよう提案されたそうです」

「それは、むめの世話をして居るからだ」

「むめ」

「津田梅だ。女子留学生のなかで、一番小さい者が居るだろう」

「御存知なのですか」

「親父殿は仙(せん)というて、旧知の仲だ。佐倉藩士だ。江戸にて手塚律蔵(りつぞう)の又新堂(ゆうしんどう)で蘭学を学ばれた」

「何故に、福地殿は津田殿の娘御を」

「津田殿は時勢を察せられ、安政六年、横浜の福地の英語塾で学んでいたが、物足りなくなつてイギリス人医師から生きた英語を学ぶ事にした。その時、福地の家に世話になつたのだ。世が世であつたら、栄達も夢ではなかつた。慶応

三年、幕府の使節でアメリカに渡った。帰国後、新潟奉行になるも、王政復古の大号令に戊辰戦争だ」

「それでは津田殿は、官軍と一戦交えたと申されるのですか」

「アメリカで鬻(まげ)を切つて帰つて来られたお方。そのような事は致さぬ。築地船板町の軍艦操練所跡に建てられた築地ホテル館の仕事をされて居られたが、その仕事も今年で辞められ、今は開拓使の仕事をされて居られる」

「開拓使の仕事」

「地所を麻布本村町に買い入れ、アスパラガスの栽培を始めた」

「アスパラガス？」

「西洋うどだ。津田殿は米国公使館にあつた書物を頼りに栽培した。うめも手伝つて居つた」

「それで、娘御を開拓使に」

「そうではない」

川原は笑つた。

「それでは何故に」

「昨年、黒田が農業の視察にアメリカに行った時、おなご教育を視察して来た」

「黒田が」

「そうだ。彼の地のおなごが、聡明な事に感心して帰つて来た」

「黒田は、おなごに教育を施して何をしようというのですか」

「児子の襦袢(むつき)に在りて菽麦(しゆくばく)を弁ずるのは、母に學術があるからではないのか。蝦夷地(えぞち)には、おなごに教育を施す学校もなければ、教える者も居らぬ。開拓使が率先して、蝦夷地で新しい教育を行なうの

だ。そこには薩長も会津もない。黒田という男、面白い男ではないか」

「そうでしょうか」

「貴殿も黒田の口ではなかったのか」

「何がです」

「鉄道建設の事だ。不急の冗費だと。況（まし）してや外債を募るなどという事は。

黒田も洋行前、大久保に大隈の首を斬って貰えぬかと言って居ったが、帰国後、大隈に謝ったというではないか。諸外国の文明開化は、想像以上であったと。井の中の蛙（かわず）であった。今後は、貴公等の驥尾（きび）に附してやるつもりだと。

兎に角、賊軍の処遇でとやかく言うのは、愚かな事ではないのか」

川原は笑っていた。

「お願いがあるのですが」

「改まって、何事だ」

「伊藤先生に会って頂きたいのですが」

川原は驚いた顔をした。

「どういう事だ」

「長州の留学生にお話をして頂きたいのです」

「それは済まぬ事になった。デ・ロング公使の御要望で、翻訳の仕事に取り掛からねばならなくなった」

「お急ぎなのですか」

「そうだ。暫（しばらく）くは雑談の方も止めにして呉れないか。それから福地の事だが」

川原は何かを思い出したように言った。

「トミーのハイカラが鼻に付いたのであろう。デモンストレーションだ」

「デモンストレーション?」

「売り込みだ。幕臣の」

川原の部屋を出て上甲板に上がると、伊藤先生を囲み、野村先生、福地殿、渡辺殿、小松殿、冲殿が腰掛椅子に座り、議論をしていた。留学生書生連も傍らにいて、伊藤先生の講釈に耳を傾けていた。野村先生と目が合ったが、野村先生は目を逸（そ）らされた。

『漢土が胡元満清に一民一土も屈すべき訳なけれど、人物及ざれば、宋明滅亡に及ぶ。墨夷（ぼくい・アメリカのこと）もし徳川を滅せず、深く援救し属国にせば、坐ながら滅するが道理。草莽崛起（そうもうくつき）の豪傑ありて神州の墨夷（ぼくい）の支配を受けぬ様にありたし』。

伏見要駕（ようが）の策に敗れし松陰先生の御言葉をお教え下さった時の事をお忘れなのか。あの野村和作も、夜郎自大（やろうじだい）の仲間に入られたという事か。今はただ、詮無（せんな）き事なのか。これが時勢というものなのか。今日の所は、佐々木先生の部屋に挨拶をしに行く事にした。

佐々木先生の部屋を訪ねると、佐々木先生は眉を顰（ひそ）められた。

「君か。何の用だ」

「御相談に参りました」

「相談。裁判の事ではあるまいな。伊藤に頼まれたのか」

先手を打たれてしまわれた。

「佐々木先生は、裁判長になられるのですか」

「裁判長。予がどうして裁判長にならねばならぬのだ」

「佐々木先生は、司法大輔(たいふ)であられますから」

「予が裁判長にならぬから、反対して居ると思つて居るのか」

「いえ。他意はありません。それでは、何故に裁判に反対なされるのですか」

「裁判などと申して、見世物にしてどうするのだ。夜這(よば)いだ」

「夜這い？」

「君は皇国の恥を晒す気で居るのか。長野桂次郎も幕臣なれば、おなごの方も幕臣の娘。昼間から夜這いをしたのだ。そのような事を聞きに態々(わざわざ)来たのか」

佐々木先生は表情を変えられた。

「いえ。今日は耶蘇(やそ)教解禁の事で参りました」

「その事か」

佐々木先生は表情を緩められた。

「政府は本気で耶蘇教を解禁する気なのでしょうか」

「予も心配して居る」

「木戸先生もハイカラになられ、心配して居ります。木戸先生は、坂本先生と秘策を練られて居られたと聞いて居り

ましたから、御存知ではないかと」

「龍馬の事か」

佐々木先生は少し困った顔をされた。

「佐々木先生は、御存知のですか」

「あれは、薩長提携の話を進めて居った時だ。坂本が薩長が共になる計画が失敗したら、耶蘇（やそ）教を以て人心を扇動し、幕府を倒すと言うのだ」

「坂本先生が、そのような事を」

「予は神道を基礎とし、儒教を輔翼（ほよく）とし、正々堂々大義を天下に唱える様と申したが、坂本は、今日はそんな姑息の事では到底目的を達する事は出来ぬと言うのだ。」

そのような事をすれば、暴を以て暴に代わるようなものだ。後世に災禍を胎（のこ）す事になる。木戸君とは、龍馬を介して会って、色々と論じた。予は変通出来ぬ。何処（どこ）までも、神儒を以てする事にした」

「それで木戸先生は」

「耶蘇（やそ）の代わりに仏教を以てすると」

「それが木戸先生の秘策と申されるのですか」

「木戸君の真意、何処（どこ）にあるのか分からぬが、あの時は、我等は根本において勤王の為に身を捧げ、時機を計って幕府を倒そうという事では一致して居った。」

この頃の木戸君の言動には、予（よ）も気になって居った。君も裁判などと下らぬ事で騒ぐのは控えるように。伊藤の飛びっきりのハイカラにも困ったものだ。予からも木戸君によく言っておくから、君も将来ある身、言動を慎みたま

矢張り、佐々木先生であられた。明治元年正月四日の伏見の戦いの報、長崎に達するや、佐々木先生は野崎伝吉殿と共に海援隊壯士二十四名を率い、奉行所を占領されたお方。時の長崎奉行河津伊豆守、米国汽船にて江戸へ逃走せんとするや、市中は大混乱。治安の回復に尽力されたのが、佐々木先生であられた。

上甲板に上がると、諸先生方の姿はなかった。留学生連は議論をする事もなく、散歩を楽しんでいた。川原殿の事を報告に、伊藤先生の部屋を訪れる事とした。

伊藤先生の部屋を訪れると、また畠山先生は隠れるようにして姿を消された。相変わらず、伊藤先生の机の上には書類が無造作に積んであった。伊藤先生から席を勧められると、書類の合間から、大星力弥・岩倉具綱（ともつな）、桃井若狭之介・東久世通禧（ひがしくぜ みちとみ）の御名が見えた。

「そう妄りに触るな。国家の機密が山積みだ」

伊藤先生は私を窘（たしな）めた。

「これは、何です。仮名手本ではありませんか」

「そうじゃ。仮名手本忠臣蔵（かなでほんちゅうしんぐら）じゃ」

「何故に仮名手本など」

「長州の留学生に尊王倒幕の話をして居ったが、色々と差し障りがある。そこで、忠臣蔵に話を託して話して居ったのだ。それが好評で、旅の慰めに仮名手本にて一芝居企てようと思ったのじゃ」

伊藤先生は楽しみに言った。

「岩倉大使が、大星由良之助（おおぼしゆらのすけ）を演じられるのですか」

「岩倉公は、薬師寺次郎左衛門（やくしじ じろうざえもん）じゃ」

「大星力弥（おおほしりきや）が岩倉具綱（ともつな）卿なれば、岩倉大使が大星由良之助ではないのですか。誰が大星由良之助なのですか」

「木戸さんじゃ」

「木戸先生が」

「大久保さんが加古川本蔵（かこがわ ほんぞう）、村田新八さんが定九郎（さだくろう）じゃ」

「塩冶判官（えんやはんがん）は」

「五辻（いつつじ）さんじゃ」

「女形はどうされるのですか」

「お石は田中光頭（みつあき）。戸無瀬（となせ）は安場保和（やすば やすかず）さんじゃ」

「それでは、伊藤先生が高師直（こう の もろなお）という事ですか」

私が納得顔で言うと、伊藤先生は眉を顰められた。

「僕が高師直（こう の もろなお）とはどういう事じゃ。何か、僕が鹽冶判官（えんや はんがん）の麗しき妻に恋心を抱き、兼好に艶書を頼んだ好色家の師直が似合いだというのか」

「そのような事は申して居りませぬ。それでは、誰が高師直なのですか」

「それを思案して居ったのじゃ。仮名手本にては、吉良上野介（きらこうずけのすけ）の上と、吉良の格式の高家を取つて、高武蔵守師直に見立て居る。この高家なるものが厄介じゃ。福地さんにも色々聞いてみた」

「福地殿も伊藤先生の戯作者（げさくしゃ）の仲間なのですか」

「そうじゃ。福地さんは本物の戯作者になるやもしれぬ。色々な事を知つて居る。吉良家の祖先は、足利左兵衛督（さひょうえのかみ）長氏。長氏の玄孫の尊義の時、東条吉良を興し、吉良は嫡流を西条、庶流を東条として居ったが、東条吉良に男子が無く、家康の祖父清康が叔父の義春が、その後を継いだのじゃ。」

その東条の義春の孫にも男子無く、西条の吉良義堯（よしとか）の次男義安が相続すると、今川に捕らえられ、幽閉され死ぬ。西条の吉良は、義安の弟の義昭が継ぐが、三河に一向一揆が起こると、家康に反旗を翻し討死じゃ。その後、家康は叔母の俊継尼（しゅんけいに）と義安の間に出来たという義定を召し出し、その子義弥が秀忠に仕えた時に、四位少将を賜り、吉良は高家として家系を義冬、義央（よしひさ）と継いだのだ」

「その話は本当なのですか」

「どうした」

「お話をお聞きして、氷解致しました」

「何をじゃ」

「家康が新田義貞公の末裔（まつえい）とならんとして、今川家の浪人をして居った吉良を取立て、三河の幡豆郡（はづのこおり）に三千二百石をあてがったと聞いて居りましたが、そういう話でしたか。それで戯作者どもが幕府を憚（はばか）り、仮名手本などの如何（いかが）わしい話に作り変えたのですか」

伊藤先生は満面の笑みを浮かべられた。

「よいのですか」

「何がじゃ」

「そのような話に首を突っ込まれて。今は欧米列強と相對峙する大事な時ではありませぬか。そのような話に、現（う

つつ)を抜かされて」

「そう申すな。一口に戯作と言っても、学識がいるものじゃ。例えば、高家というものは、足利三代將軍義満の時、細川武蔵守頼元の才覚で、公家衆謀反の芽を摘み取らんと、公家の次三男といった厄介者の中から相応の者を召し出し高家とし、公武合体の基(もと)とい)としたものじゃ。徳川氏は、大沢、吉良、武田、今川、横瀬、畠山、由良、織田、大友を高家としたが、家康の本意、どこにありや思案して居るところじゃ」

「どういう事でしょうか。徳川が朝廷を蔑(ないがし)ろにする事、事例に欠かぬ事。何を思案されて居られるのですか」

「貴公は播州浅野家の興りを知って居るか」

「詳しくは存じませんが、浅野内匠頭長矩(たくみのかみ) ながのり)は浅野家支流。本家は安芸広島では」

「そうじゃ。浅野内匠頭長矩(たくみのかみ) ながのり)は浅野家支流。長矩の父は長友、祖父は長直(ながなお)、曾祖父は浅野長政(ながまさ)の三男・長重(ながしげ)じゃ」

「そのような事が、思案に値する事なのでしょうか」

「貴殿は薩摩の重野安繹(やすつぐ)殿の事を聞いて居るか」

「聞き及んで居ります。岩倉大使が使節派遣に当たり、和漢の学識の有る方をお求めになられたと聞いて居ります。重野殿ご辞退に及び、岩倉大使が肥前の久米先生に白羽の矢を。重野安繹(やすつぐ)殿がどうされたのですか」

伊藤先生は微笑まれた。

「重野安繹(しげの やすつぐ)殿ほどの学識の有る方がいなければ、僕の手になんか負えぬ事なのじゃ。戯作者というもの、奥の奥を考えるものじゃ。よいか、浅野長政の妻は、北政所の妹。長政は太閤の死後、知行地の甲州二十四万石は長

男の幸長（よしなが）に譲り、武蔵府中に隠居。浅野家は家康とも親しく、関ヶ原後、幸長は甲州より紀州和歌山の三十七万石の大名となり、隠居した長政には、常陸の真壁（まかべ）五万石があてがわれたのだ。

紀州浅野家は、幸長が病で亡くなると、弟の長晟（ながあきら）が継ぎ、その長晟は福島政則改易に伴い、安芸備後四十二万石を与えられたのじゃ。和歌山には駿河府中より家康の十男の頼宣（よりのぶ）が五十五万石で入ったのは、知つての事」

伊藤先生の講釈は止まらなかった。伊藤先生は少し興奮気味に話をされた。

「浅野長政が三男・長重（ながしげ）は、將軍秀忠の采女正（うねめのしょう）となり、大坂陣の功績により、真壁と笠間との双方を領し、笠間城を築いたのだ。この長重が、播州浅野家の祖となるのじゃ。長政が卒すると、長重は常陸国真壁を賜り、笠間に城を築き、その子の長直（ながなお）の時、赤穂城主・池田輝興（てるおき）が妻を斬り殺し、領地没収となると、長直が播磨国赤穂郡を賜り、新たに城を築いたのじゃ。この長直殿は、明君であられた。長直殿は、あの山鹿素行先生を赤穂藩に招聘されたのだ」

「仮名手本忠臣蔵の話に無理があるのではありませぬか。足利直義（ただよし）が兄・尊氏の名代にて鶴ヶ岡八幡に詣で、越前で討死された新田義貞公の冑（かぶと）を宝蔵に納めんと、落散したる四十七の冑を取り寄せたるなどと、四十七士の話を太平記よろしくするのは」

「そうか。上手く出来て居るではないか」

「そうでしょうか。新田義貞公は清和源氏の嫡流（ちやくりゆう）なれば、足利の所業、さもありなん事。何も殊更に浅野内匠守（たくみのかみ）を伯州城主・塩冶判官（えんやはんがん）などとし、吉良上野介義央（きらくこうずけのすけよしひさ）を鎌倉執事・高武蔵守師直（こうのむさしのかみもろのお）に事寄せなどしなくても。

塩治判官高貞(えんやはんがんだかさだ)は、実は雲州の守護職などというのも、如何にもうそ臭い話ではありませぬか。正室の顔世御前(かおよごぜん)に至っては、後醍醐帝に官仕(かんし)したれば、義貞公に賜りし胄(かぶと)を見知つて居るなどと、笑止千萬です」

「事の本質を伝えるのは至難の業じゃ。芝居には誇張は付き物」

「仮名手本の何処(どこ)が、事の本質を伝えているのでしょうか。事は元禄十四年、年頭の勅使関東下向に当たり、幕府に勅使饗応(きょうおう)の御馳走役を命じられた播州赤穂の浅野内匠頭長矩(たくみのかみながのり)が、吉良上野介義央(きらくこうずけのすけよしひさ)に遺恨を抱き、殿中にて烏帽子(えぼし)かけし額めがけて、刃傷沙汰(にんじょうさた)に及んだのです」

「そうじゃ。貴公の申す通りだ。浅野内匠頭が高家衆吉良上野介に抱きし遺恨の数々。浅野内匠頭は吉良上野介と共に日光に詣でられるも、上野介傲慢の振舞い多く、伝奏御馳走の大役に付きて堪忍袋(かんにんぶくろ)の緒も切れ、殿中にて刃傷沙汰に及んだのじゃ」

「それを何も、高師直高師直(こうのもろなお)が叶わぬ恋の無念の腹いせに塩治判官(えんやはんがん)を罵りたれば、塩治判官、高師直を切り付け刃傷沙汰に及んだなどと。仮名手本は、上手くできた話とは思えませぬが」

「面白き話は、思案が要るのじゃ。仮名手本にて、浅野内匠頭夫人・阿久理(あぐり)殿を鹽治判官(えんやはんがん)が妻に引き当て、美人の誉を得せしめたるは妙と申すもの」

伊藤先生は鼻の下を伸ばされた。

「その何処(どこ)が面白い話なのでしょううか」

「阿久理(あぐり)殿は、浅野因幡守長治(ながはる)の娘で、内匠頭亡き後、瑤泉院(ようぜんいん)と号せしお方。

長治は長晟（ながあきら）の庶子にして、長男の光晟（みつあきら）が広島浅野本家四十二万石を継ぐに当たり、長治に備後三次（みやし）にて五万石を与え治めさせたのだ。話はそういう事だ」

「そう申されても、何の事だか分かりません。そもそもこの話、家康が新田義貞公の裔とならんとして、吉良を取り込まんとしたから、仮名手本などという胡散臭（うさんくさ）い話が出来たのです。それで興行は何時されるのですか」

「止めた」

「止めた」

「ひと芝居してはという事になったが、役者の面々が今ひとつ興に乗らぬのじゃ」

「それで、今度は裁判などを行おうというのですか」

私は呆れ顔で言った。

「裁判の事は、余興などで行うのではない」

伊藤先生は真面目な顔をした。

「それでは、何故に夜這（よば）いを行った者を見世物にするのですか」

「裁判の事は、木戸さんとも相談した」

「木戸先生は、承知されて居られるのですか」

「勿論だ。初め、福地さんが大久保さんに相談したのだ。随行員の中から裁判官を造って、両人の取調べをさせ、相当の罰に処してはと」

「それで大久保先生は、何とおっしゃられたのですか」

『馬鹿な事は言はつしやい、そぎや事が出来るか』と取り合われなかった。それで、木戸さんに相談したのだ」

「木戸先生は何と」

「木戸さんも、裁判はと申されたが、外国人に醜態を見られては不味（まず）い。嚴重に取締りをせねば、外にも女性が居る。それで、僕を呼んで相談されたのだ」

「それで、伊藤先生が裁判官になられた」

「裁判官は木戸さんだ」

「木戸先生が裁判官。それでは伊藤先生は」

「僕は検事だ。弁護人は安藤君がする」

「そのように面白がつてよいのですか。安藤太郎など弁護人にして」

「面白がつてなど居らぬ。隠れた悪を裁くのだ。まあ、覩て居れ。それより、河原殿はどうされた」

「色好い返事を貰えませんでした」

「顔見せでよいのに」

伊藤先生は怪訝（げげん）な顔をされた。

「御多忙との事で」

「そういう事か」

「申し訳ありません」

「貴公が謝る事ではない。是非、青年諸子に話をして頂きたかったのだが。それより昨夜の続きじゃ」

伊藤先生は無邪気に言った。

「お疲れなのではありませんか」

「僕の事など、どうでもよい。彼のナポレオンは、寝る間を惜しんで国事に勉強に励んだというではないか。その位の気概がなくては、太平洋の荒波はおろか、日本に打ち寄せる小波さえ防ぐ事も出来ぬではないか。我等には、早急になさねばならぬ事が山のようにある。貴公の講釈もその一つだ。昨夜の続きだ」

伊藤先生は元氣であつた。京と江戸を何度も往復されたという話は嘘ではなかつた。

「伊藤先生は、悔しくないのですか。馬関（ばかん）の大砲を戦利品よろしくフランス人に持ち去られた事を」

「僕とて武士の端くれじゃ」

「ナポレオンは耶蘇（やそ）教を信仰して居つたのではないですか。夷人は皆、耶蘇教を信仰して居ると聞いて居りますか」

「ナポレオンは耶蘇教を隠れ蓑とする者たちを打ち砕き、封建の世を開明の世に導いたのじゃ。ナポレオンの事は、山田さんに聞くとよい。それより將軍継嗣（けいし）問題はどうか。福地さんから幕府の内情を色々聞いて居るが、もう一つ合点が行かぬ。貴公は幕府の秘密を知つたのらう。ひとつ、僕を驚かす話をして呉れぬか」

伊藤先生に促されて、今夜も講釈を始める事となつた。先生を驚かすには、あの話しかなかつた。

「川原殿の話では、將軍家は天主教を信仰していたというのです」

「どういう事だ」

伊藤先生は思ひのほか冷静に言つた。

「天主教は日本でこそ邪法であるが、彼の国においては広大深遠の道法政教で、日本のため深く心得る人には格別のものであるが、そうでない人には切支丹（キリシタン）の天主教となると」

「切支丹の天主教とは何の事じゃ」

「存じませぬ」

「誰がそのような事を申したのじゃ」

「斉昭（なりあき）公です」

「誰に申されたのだ」

「大奥の上臈（じょうろう）にです。大奥の節約の事で、斉昭公は顰蹙（ひんしゆく）を買われて居られたのにです。大事のために宜しく頼むと申されたそうです」

「大事とは何じゃ」

「弘化年間に、琉球にフランス、イギリスの軍艦が交易を求め渡来しました。將軍家慶（いえよし）は、琉球で交易を行おうとしました。しかも併せて天主教も許されようとされました。それで斉昭公は大奥の上臈（じょうろう）に口添えを頼まれたのです」

「どんな口添えじゃ」

「琉球に貿易を許すと天主教となり、ひいては薩摩も天主教となると。將軍家慶の学問は相当なもので、斉昭公は御心配されたそうです。琉球にフランス、イギリスの軍艦が相次いで渡来すると、オランダ国王の関与を疑われた斉昭公は、阿部殿にオランダ国王の国書の開示をせまられました」

「それで阿部伊勢守は」

「国書を斉昭公にお見せする事にしました」

「斉昭公は、何と申されたのだ」

「オランダ国王は利心なしと言って居るが、陰で謀略があるに違いないと申されたそうです」

「その国書には、何と書いてあったのだ」

「フランスは漢蘭両国と懇意の国だと書いてあったそうです。それで斉昭公は、オランダとフランスは耶蘇（やそ）教において一つ穴の狐だと申されたそうです」

「それでは何故、家慶公は斉昭公の御子に一橋家を継がせた」

「幕臣の話です。多少、誇張はありますが、一橋邸の父老をして前代未聞の御英邁と感嘆せしめたそうです。それもその筈です。慶喜は斉昭公の御意向で江戸の風俗に染まる事なく、水戸の地で文武の修行に励みました。水術・弓術・馬術の修業はいうまでもなく、日々弘道館に通い、会沢正志斎（せいしさい）殿から文学を学ばれましたから。川原殿の話では、斉昭公も天主教を学ばれて居られたと」

話が水戸藩の事ともなれば、流石に何時もの伊藤先生ではなかった。

「どういう事だ」

「斉昭公は天保十二年弘道館を起こされ、文武・礼楽・射御・兵法・銃砲・操練・医学・数学等を講じさせました。文庫には蘭書も所蔵されたという話です。斉昭公は家慶公の御引見を受けました際に、水野越前守から藩政改革に関してお言葉を賜りました」

「どのような」

『『文武共に絶えず研究これある趣、一段の事』との』

「それでは何故、幕府は斉昭公を隠居させた」

「將軍家の御意向に反する建議をされましたから」

「何と建言されたのだ」

「交易と耶蘇(やそ)教は他国を侵略する手段であると。蘭学者は邪宗門(じゃしゅうもん)の媒介者になる虞(おそれ)がある」と

「それで幕府はどうした」

「斉昭公を謹責(けんせき)しました。『御三家方は、国持始め諸大名の模範たるべきの所、御遠慮も在らせられざる儀、御不興の御事に思召され候』と。それで斉昭公は弘化元年五月に隠居謹慎の身となりました」

「それで水戸藩はどうなったのだ」

「水戸藩の将来は、慶篤(よしあつ)殿に託される事になりました。阿部伊勢守は慶篤殿に斉昭(なりあき)公の影響が及ばぬよう、水戸の三連枝(れんし)こと高松、大炊頭(おおいのかみ)、播磨守を慶篤殿の後見としました。

水戸藩では斉昭公の藩政改革により儉約が奨励される一方、弘道館や銃砲製造などの費用の事で、門閥派が怨嗟(えんさ)の声を上げて居りました。斉昭公謹慎後、家老の結城寅寿(ゆうきとらじゆ)が幕臣の鳥居耀藏(とりいようぞう)と結びついて藩政を牛耳ろうとして居りましたから、阿部伊勢守は防備上の事を考えて、將軍家慶と斉昭公の関係修復に努めました」

「阿部伊勢守は何をした」

「島津斉彬(しまづなりあきら)殿と協力して、將軍家慶に説かれました。軍艦がなければ難破船も救助できないと。また、浦賀沖にて異国船が廻船運送の通路を絶てば、江戸の兵糧に支障をきたすと。その際、斉昭公は御三家にあつて最も信頼すべき人物であると」

「斉彬殿は何をされた」

「斉昭公に幕府天文方から入手した『ゼーアルチルレリー』の翻訳『海上砲術全書』をお貸しすると申し出られました

た。幕府が斉昭公を海防参与にしたのは、ペリーが来航して、慌ててそうしたのではありません」

「ここまで話すと、伊藤先生は話を遮(さえぎ)った。

「どうだ、貴公が長州を代表して有志の前で議論してみては。さすれば、留学生の誤解も解けるといふものだ」

「誤解?」

「いつも不平を言い居るのだ。貴公を何故、随員にしたと。兎に角、明日、薩摩土佐福井の者と議論する事になって居る。その席で貴公を紹介するから、今宵(こよい)の話すれば、長州の名声も高まるというものじゃ」

「私のような者では、とても」

「そのように謙遜(けんそん)するでない。貴公は僕の見込んだ通りであった。今夜の調子で話をすればよいのじゃ。貴公ももう少し大人になったらどうじゃ。これから薩長も幕府もない。況(ま)してや会津だの桑名だの事は。その事が大事なのじゃ」

「それでは、矢張り日下義雄の話は、本当だったのですか」

「本当じゃ」

「井上先生は、何故に会津の者などを書生にされたのですか」

「日下義雄(くさかよしお)が聞多(もんた)の書生になったのは、二等書記官をして居られる小松済治(さいじ)さんの紹介じゃ。日下は会津藩御殿医・石田元道の子で、五助といい、長崎に遊び海外に新知識を求めんとするも、願いが叶わず、京にて会津藩士・山本覚馬(かくま)の勧めで、何礼之(がよしゆき)さんの門に入ろうと大坂に居ったのだ」

「何(が)さんとは、一等書記官の何さんの事ですか」

「そうじゃ。何さんは、長崎唐通詞の子で、僕より一つ歳上の三十二。長崎英語伝習所で英学を修められ、慶応元年に塾を開かれ、その後江戸の開成所の教授となり、維新後に大坂で造幣局権判事をして居られた。

何さんは、昨年渡米に同行して貰った芳川頭正(よしかわ あきまさ)さんの英学の師じゃ。僕は、何さんの孫弟子という事になる。何さんには、明治二年正月新政府に郡県政治を説いた『国是綱目』(こくぜこうもく)を書いた時、文面を見てもらった」

「何さんの事は分かりました。それで日下義雄(くさか よしお)の事は」

「日下は大坂に行つて、洋学を修養せんとするも、御維新の動乱。日下は会津は中村藩の者。素姓を疑われた時、欧州から帰朝された小松済治(さいじ)さんが、大坂で造幣寮頭をしていた聞多(もんだ)に保護を頼んだのじゃ。聞多は、長州の日下家の養子にし大坂英語学校に入れたのじゃ。新政府の偵吏(ていり)が聞多の家に来て、日下の身元を問うも、長州の日下義雄であると申し渡すと、偵吏も引き上げて行つた。

日下(くさか)の事は、そういう事じゃ。日下は十九。貴公ら若人が率先して新しい世の中を創らねば、誰がやる。それこそ幕末の動乱で亡くなつた者への供養というのもじゃ。それとも、坊主になる気ではあるまい。そろそろ世の中と折り合いをつける頃合じゃ。講釈などせよと申さぬから、話だけでも聞きに來い」

とうとう伊藤先生に押し切られてしまった。一体、どのような者を相手に何を議論せよというのか。諸先生方の間でさえ、御一新の蟠(わだかま)りが漂つて居るといふののだ。

部屋に戻ると、奴(やつ)が待ちかまえて居つた。

「何処(どこ)へ行つて居つた、搜したぞ」

「何の話だ」

「食事の席だ。木戸先生に相談してみた所、木戸先生が岩倉大使にお話された。岩倉大使は平賀殿と相談され、金子堅太郎（けんたろう）と申す旧福岡藩の者が居るから、その者と食事を共にすればよかろうという事になった。金子は十九の若輩なれど、君のよい話相手になると」

全く余計な事をする。奴に相談した方が、馬鹿であった。怪しげな者も居るから、交際には気を付けろ、特に筑前の者とは、よく言ったものだ。

「所で回状は、何だったのだ。留学生を甲板に集合させ、伊藤先生は何を話された」

「濡れ衣だ」

「濡れ衣」

「便所の事だ。広間に大便をなした者が居ると。今後は便器に腰掛け用をたすようにと。艦長から注意を受けたとの事だ」

「証拠はあるのか」

「紙が日本のものであったとか」

「それでは何故に、濡れ衣などと言う」

「留学生にそのような作法知らずの者は居らぬ。使節一行にも注意を促すようにとの声が上がった」

「そうか」

「大嘗祭（だいじょうさい）の方は、どうなった」

「シャンパンを振舞う事になった」

「夷人も来るのか」

「勿論だ」

「夷人に皇国の古式床しいならわしが分かるのか。お主のような俄（にわか）西洋被（かぶ）れが、大きな顔をして居ると、皇国の先行きも危うくなる」

「君は本物の攘夷家というものを知らぬから、そのような事を申すのだ」

「どういう事だ」

「天照大神（あまてらすおおみかみ）、天狭田（あまのさなだ）・長田（おさだ）を御田（みた）にされるも、素戔嗚尊（すさのおのみこと）の御乱行。新嘗祭（にいなめさい）にて新宮に糞（くそ）を撒き散らかされたのだ」

「また、そのような事を申す」

「それより、何処（どこ）に行つて居つた」

「伊藤先生と話をしていた」

「随分、遅かつたではないか。何を話し込んで居つた」

「先生に懇願された」

「何をだ」

「明日、長州を代表して、諸藩の者と議論するようにと」

「君がか」

「そうだ」

「誰と議論する」

「そのような事、分からね。伊藤先生が来いと言うから、行くだけだ」

「それで、何を議論する」

「水戸の斉昭公の事だ」

「何を話す」

「海防参与に就任された経緯を話す」

奴は不安げな顔をした。

「何だ、その顔は。役者不足だとも言いたいのか。よいか。よく聴いて居れ。君より水戸藩の事は、知って居る」

「どう知って居るといふのだ」

「寛政四年、ロシア使節ラクスマンが、文化二年、レザノフが、日本人漂流民を伴って通商を求めて来たのは、知っての事」

「勿論だ」

「ロシアはカムチャツカに出先機関を設け、さらに進んでウルツプ島に拠点を作り、その前線はわがエトロフ島の北まで迫っていた。寛政十年、幕府は近藤重蔵（じゅうぞう）殿を遣わして、蝦夷地を巡察させ、北はエトロフ島まで行かせた。エトロフ島にはロシア人が十字架様の標柱を立てて居り、水戸藩の木村謙次殿がその標柱を抜き去り、『大日本恵登呂府』と書した木標を立てて来られたのだ。」

皇国を窺（うかが）っていたのは、何もアメリカ、ロシアだけではない。文政七年、イギリス船が水戸藩北岸に現われ、大津村に上陸した。お主は、この話を知って居るのか」

「知って居る。水戸藩の漁師はイギリス船に乗り込み、船長から捕鯨の手解きを受けたという話を聞いたことがある。」

船長は、中々の趣味人であったようだ。本草学（ほんぞうがく）の心得があるらしく、漁師に本の挿絵（さしえ）を示し、日本語でなんとか尋ね、書き入れて居ったそうさ。船室には草木禽獣（そうもくきんじゅう）の絵を飾り、いつも本を読んで居ったそうさだ」

「お主は呑気（のんき）で困る。よいか、海賊の船長だ。皇国を窺っていたのだ。それを幕府はどうしたか知って居るのか。訊問を行なった付家老の中山備前守（びぜんのかみ）は、難破上陸に準じた取り扱いをしたのだ。」

幕府の取り締まりの手緩さに業を煮やして居られた斉昭（なりあき）公は、天保七年に幕府に懇願して多賀郡の助川に塞（とりで）を築き、家老の山野辺（やまのべ）兵庫頭（ひょうごのかみ）を住ませたのだ。それまでは、中山備前守（びぜんのかみ）知行地の多賀郡松岡で取り締まって居ったのだ。これでは盗賊に鈴をつけさせるようなものさ。どうだ。安心したか」

「いや、益々心配になった」

「心配になったとは、どういう事だ」

「君は、斉昭（なりあき）侯が藩主になられた経緯を知って居るのか」

「馬鹿な事を申すな。僕がそのような事も知らぬと思つて居るのか。斉昭公は七代藩主治紀（はるとし）公の御子で、異母兄の八代藩主斉脩（なりのぶ）公に御子がなかったので、世継ぎをめぐつて藩内で採めたのだ。」

十一代將軍・徳川家斉（いえなり）の子の恒之丞（つねのじょう）を藩主にせんとする輩が居ったのだ。それがどうした」

「それでは君は、木村謙次殿が立原翠軒（たちばら すいけん）先生に学ばれた方だと知って居るのか。木村殿が近藤重蔵殿一行の幕府蝦夷地探検に同行出来たのも、翠軒（すいけん）先生が推薦されたからだ」

「何が言いたい。お主は、何を心配して居るのだ。僕がロシアに戦を仕掛けるとでも思つて居るのか」

「そうではない。昨日、僕も他の藩の者と議論して来た」

「何を議論して来た。耶蘇(やそ)教の事か」

「他の藩の者とは、そのような議論はせぬ。伊藤先生の命で維新の話をした」

「戦も知らぬのか」

「そうではない。維新の所以(ゆえん)だ。君は『周は旧(ふる)き邦(くに)なれども、其(そ)の命維(こ)れ新たなり』と
いうのを知らぬのか」

「また、その話か。お主が維新、維新というから、耳に聒(た)こが出来た。それで、議論はどうなった」

「そのような話、分かる者など居らなかつた」

「そうであろう。今時、詩経(しきよう)に耳を傾ける者の気が知れぬ。お主は周の始祖・后稷(こうしよく)の生まれ
を、いかがわしいとは思わぬのか」

「帝嚳(ていこく)の妃(きさき)の姜原(きやうげん)が、野に出て巨人の足跡を踏んで、身ごもり生まれた事か」

「そうだ」

「少しも思わぬ」

「どうしてだ」

「そもそも毛利家の繁栄も、ひとえに厳島(いつくしま)大明神のお恵みによるものではないか。厳島大明神が初めて
渡り給うた時、平裏を下ろした所を裏の浦というのを知らぬのか」

「そのような事、知らぬ」

「それでは、光圀(みつくに)公が『伯夷(はくい)伝』を読まれ、何故、後継者を英侯の御子にしようと思われたか、分かるか」

「甥御(おいご)に政治の模範を示し、政治に誤りのないようにされたのだ。御子(おこ)では、親の情が入り、過ちを犯す」

「それでは何故、『伯夷伝』なのだ」

「伯夷(はくい)は、封禄を受け官に取り立てられる事を潔しとされなかったからだ」

「そうだ。世俗を離れ、高潔に生きる事を選ばれたのだ。光圀(みつくに)公も由来の正しい神を祀(まつ)られる事に生涯を捧げられた。ある村に管公を祀(まつ)った祠(ほこら)があつたが、光圀公はそれが天神七代の神である事を知り、社殿を建立(こんりゅう)された。

幕府は日光山の御廟所(ごびょうじよ)を仏法を用いて祭るが、水戸藩では神道、儒教で祀るのだ。何故、水戸藩では神道のみならず儒教を用いるか、知って居るのか」

「そのような事、分からね」

「水戸藩では初代藩主頼房(よりふさ)公が薨去(こうきよ)された時、瑞竜山(ずいりゅうさん)に儒法を以て葬られた。城内にも廟を造営された。彼の国で先王というのは我が国の神皇の事、昊天上帝(こうてんじようてい)というのは、天照大神を仰ぎ奉る事になって居る。『詩経』に『爾(なんじ)の祖を念(おも)う事なからんや、その徳を聿(の)べ修む』とある」

「それでは、何故に伯夷は首陽山(しゅようざん)で餓死したのだ」

「天道が味方したからだ」

「また、そのような戯(たわ)けた事を。そのような天道あるものか」

「孔子第一の門人の顔淵(がんえん)は、無一文となつて若死にして居るのだ」

「そのような天道、間違つて居る。いや、天道が間違つて居るのではない。お主が間違つて居るのだ」

「明日に道を聞かば、夕べに死すとも可なり。俗人の考えの及ぶ所ではない。顔淵(がんえん)は、貴いものを身に付けられたのだ」

「お主の講釈はもうよい。それより、ハイカラは居つたか」

「そのような者は居らぬ。安心しろ」

「それでは、何を議論して居つたのだ」

「薩摩の倒幕の話だ」

「どうだった」

「議論にならん」

「どうしてだ」

「薩摩は、君以上だ」

「どういう事だ。何が言いたい」

「土佐も越前も音をあげた。伊藤先生も維新の精神を熱弁するも、話にならぬ。君など議論に加えて、伊藤先生は何をしようというのだ」

「心配には及ばぬ。お主は僕の本当の姿を知らぬのだ」

翌日からは福岡藩の者と食事を共にする事になった。スープの肉片を食べては顔を顰(しか)めて居る所を見ると、西洋作法云々する輩ではないと直ぐに分った。聞けば、金子君も黒田斉溥(ながひろ)公が催された送別会で、初めて洋食を食べたという。話せば、中々話せる奴であった。思わぬ同志を手にする事となった。金子君も、旧知の友のように話をして呉れた。

「藩費生として、東京に参りました。洋学生などは貢進生(こうしんせい)として大学南校東校両校に通学せしも、我ら漢学生は昌平黌(しょうへいこう)も廃止されて居る事ゆえ、漢学の家塾を尋ねる事となりました。

その間、芝居など見に行きました。猿若町(さるわかまち)にては、あの有名な団十郎、半四郎、菊五郎等が忠臣蔵小山田庄左衛門(おやまだしょうざえもん)敵討(かたきう)ち漏れの段を演じて居りましたが、江戸の芝居の猥雑(わいざつ)な事には驚きました。

男女公衆の面前にて、小山田が酒色に迷い、婦人と同衾(どうきん)など繰り広げられる醜態の数々。三河武士の士気廃滅、この辺にありやと思ひ、劇場を出で、帰途、吉原仲の町の松飾りや羽根撞きの有様を一見し、上野を巡り、九段坂上にては招魂社(しょうこんしゃ)を参拝し、霞ヶ関の藩邸に帰りました」

「私も同じ思ひで、江戸の町を彷徨(ほうこう)したものだ。それで、御勉学の方はどうされた」

「藤野正啓(まさきひら)先生の門に入りました」

「藤野先生と申される方は」

「昌平黌で中博士をして居られた方です。御維新に新政府の官吏として伊予松山藩の大惨事となられた方です。私は塾で漢学の勉学の傍ら藤田東湖（ふじたとうこ）先生の『弘道館記述義』を読んで居りましたが、音読する暇馭慮島（おのころじま）や伊弉諾（イザナギ）・伊弉冉（イザナミ）尊という言葉聞いた塾生の告げ口でしょう、藤野先生から、塾は四書五経を基本とする儒学を教授する所なれば、水戸学の研究は廃止して貰いたいとお話がありました。

『弘道館記述義』は我が国建国の歴史と精神を闡明（せんめい）にしたものです。明治の維新に依り天皇親裁の御代となりたるは、多くは水戸の学流に起因するものです。建国の歴史と精神を知らずして、どうして明治維新の政体を了解する事が出来ましょうか」

「お話、御尤も。而（し）て破門にでもなられたのか」

「そのような大層な話ではありません。藤野先生から諭されました」

「何と藤野殿は申された」

「日本建国の歴史と精神を研究する事は不可なしと。然（しか）れども、今日の和学者には頑固過激に流るるの弊あるべし」

「頑固過激と申されたのか」

「丸山作樂（まるやま さくら）と権田直助（ごんだ なおすけ）は、明治政府の罪人となりて獄舎に繋がれて居ると申されるのです」

「丸山先生権田先生を御存知なのか」

「万葉集の講義を聴きに横田直助先生の所へ、古事記の講義を聴きに丸山作樂先生の所に参りました」

「それで、貴殿はアメリカに行つて、何をされようと」

「ご懸念尤（もつと）もなことです。私も筑前人。東京に来てから三田の大道を散歩中、異人御者（ぎよしゃ）が馬車の周りに集まり来る国人の老若男女を問わず、鞭（むち）打ち払う様に、思はず腰刀に手を掛けました。

足利三代木像の首を斬りたる伊予の神官・三輪田綱一郎（みわたつないちろう）殿が松山藩邸内に居られると聞き、訪ねた事もあります。西洋の文物学問を攻撃する方とは、手を携える事は出来ぬものと悟りました。

先ずはアメリカにて言葉を学び、大学に入り法律の勉学をする積りです。斉溥（ながひろ）公からは、必ず一科の専門学を卒業し、帰朝の上、皇国の官吏となりて皇室に忠勤を尽くせとの御言葉を賜りました。斉溥公は、御自分は最早老年で国に尽くす事が出来ないから、若い者を学問させるだけが御奉公であるとおっしゃられました」

歳若くしてこの冷静な物言い。奴に金子君の爪の垢（あか）でも煎じて飲ませてやりたかった。金子君も色々と話を聞いて来た。

「それで何時、長州から東京にお出になられたのですか」

「僕か。僕は、箱館で一戦交えて、東京に来た。伏見の戦いでは、会津藩兵や新撰組の者どもを蹴散らしてやったが、土方歳三（ひじかた としぞう）などは箱館に籠もり居った。東京に来て知ったが、奴等はさしたる者達ではなかった。

沖田総司（おきた そうじ）は、肺病で死んで居った。副長助勤の原田左之助（はらだ さのすけ）も、鉄砲傷がもとで死んで居った。局長の近藤勇（こんどう いさみ）に至つては、永倉新八（ながくら しんぱち）が会津での最期の一戦を迫ると逡巡（しゅんじゆん）し、永倉の憤慨を買つたという話だ。所詮（しよせん）、武蔵多摩の百姓あがりの者ども。

可笑（おか）しな話を随分聞いた」

「どのような」

「新撰組結成にあたり、麻の羽織に小倉の袴（はかま）を新調したというのだ」

「それが、何か」

「羽織の袖は浅黄色（あさぎいろ）で、忠臣蔵の義士に見立てて、だんだんに染めたというのだ。可笑しな格好ではないか。東国の田舎者（いなかも）めが。綿入れでも引つ掛けて居ればよいものを。京に出ても、金がない。それで芹沢鴨（せりざわかも）が大坂に行き、鴻池（こうのいけ）から脅して作ったのだ。新撰組の京での狼藉（ろうぜき）の数々、まるで木曾義仲ではないか。果ては、内輪揉（も）めで芹沢鴨を惨殺（ざんさつ）したのだ」

「芹沢鴨（せりざわかも）の事は、確かな事は、分かり兼ねますが、近藤勇に何かが起きた事は確かです。芹沢鴨は、芹沢城主の末裔の玉造党の者といつても、大層な乱暴者だったそうです」

金子君は新撰組を庇（かば）うような事を言った。

「乱暴者」

「近藤は、文久三年二月、將軍家茂の警護で京に上り、清河八郎（きよかわはちろう）と袂（たもと）を分かつと、芹沢らと会津藩預かりの壬生（みぶ）浪士として京に留まり、蛤御門（はまぐりごもん）警護の手柄で新撰組の局長になった男です。近藤勇は、甲陽鎮撫隊（こうようちんぶたい）を率いた時、会津侯より宗貞の業物（わざもの）を賜つたとか。鞘（さや）に菊ちらしの蒔絵（まきえ）があつたそうです」

金子君は近藤最負（びいき）なのか、妙な事を口走つた。

「近藤勇の愛刀は、虎徹（こてつ）ではなかったか」

「売つたとか」

「贖物(がんぶつ)だったのか」

「お金に困っていたとか」

「金子君は、与太話(よたばなし)が好きなのか」

「作り話では、ありません」

金子君は向きになった。

「済まぬ事を申した。馴染(なじ)みの者と話す調子になってしまった。ちと、口が過ぎた。僕も東京に来て、近藤を斬首した板橋の庚申塚(こうしんづか)に出掛けたものだ。牛込二十騎町高麗(こま)屋敷にあった道場跡も見に行つた。新政府も、京都三条河原に首を晒す事は、なかったのだ。近藤勇など、梟首(きょうしゅ)に値しない男だ。総州流山にて、大久保大和などと偽名して、投降した男だ。大久保大和などと、大久保先生への当て付けか。まあ、よい。僕の戦話は、そんな所だ」

「それでは、彰義隊(しょうぎたい)とは一戦交えて居らぬのですか」

「そうじゃ。伏見の戦いの後、僕等は帰藩を命じられた。賊軍征伐の先鋒には、土佐の板垣先生がなられた。彰義隊の天野八郎とは、一戦交えてみたかった。徳川の軟弱者など、相手ではない。薩摩軍が黒門口を固めると、天野八郎は、黒門口危うしと山王台へ駆け戻るも、徳川の者は一人も付いて来なかったという。徳川の柔、極(きわ)まれりとは、この事だ。せめて天野八郎のような勇者をこの手にて納めんが、武家に生まれし者の勤めではないか」

「それで、東京では、何をされて居られたのですか」

「木戸先生の書生をして居った。木戸先生には、皇学を学びたいと申し出たが、君ら若い者は道の用である洋学を先ず学べと。それで『西洋事情』などを読んで居ったが、どうも新政府のなす事が気になって、身が入らぬ」

「どういう事ですか」

「箱館戦争（はこだてせんそう）を終え、東京に來ると、戊辰戦争で忠死された方々の靈を祀るという話が持ち上がった。居った。それで、木戸先生に話を伺うと、上野山内に招魂（しょうこん）場を造ると申される」

「上野にですか」

「そうだ。上野の地を清浄して招魂（しょうこん）場にすると申された。招魂社の事は、我が長州藩は慶応四年正月、諸藩に先駆けて京都靈山の靈明舎において、禁門堺町御門で斃（たお）られた長州藩並びに諸藩の方々百八十名の外に、伏見の戦いで斃（たお）られた四十五名の方々の靈を祀って居ったのだ。それを態々（わざわざ）、上野に祀られると木戸先生はおっしゃられるのだ」

「何故、木戸先生は上野に」

「何もおっしゃられなかった。思うに上野は東叡山（とうえいざん）と称し、府下第一の靈山。若くして江戸に出られ、旧時の盛大なるを惜しまれての事だ。話が解せぬのが、大村先生だった」

「大村先生が何か。大村先生は、上野は亡魂の地と申され、九段坂上に招魂社（しょうこんしゃ）を建てられたと聞いて居りますが」

「招魂社のある九段坂上馬場は、もとは幕府の歩兵訓練場ではないか」

「確かに、九段坂上馬場は幕府の歩兵訓練場跡ですが、明治二年六月二十九日に招魂場が開場された時、会津征討総督を勤められた小松宮嘉彰（こまつのみやあきひと）親王様が祭主となられ、岩倉大使の随員をされて居られる五辻安仲（いつつじ やすなか）殿が勅使となり、酒食を献じられたと聞いて居ります。招魂場の選定は、軍務官知官事の小松宮嘉彰親王様が、副知官事の大村先生に土地の選定を依頼されたのではないですか。それで大村先生の何が、

解せぬ事と申されるのですか」

「貴殿も承知の通り、招魂社祭礼にては、花火が打ち上げられ、競馬に相撲の興行が催される。挙句の果てに、若松町から芝居(しばい)出張興行だ。賽人(さいじん)雑沓(ざつとう)は申すまでも無い事なれども、石灯並ぶ賽路にて踊り戯れる者も居る。江戸の町人の事なれば、とても御一新の殉難(じゅんなん)者の霊を弔(とむら)って居るとは思えぬのだ。そう思わぬか。何か勝ち誇って居るようにさえ思えるのだ。これでは、殉難された方の霊が、浮かばれぬではないか。

大村先生は何故に、斯(か)かる地を招魂場に選定されたのか、僕には解せぬのだ。要路の方のなかには、坂上で眺望がよいなどと申されるお方もある。大村先生は招魂場開場に際し、坂下にあつた町屋を九段坂の南側に立ち退かせる事もされた。木戸先生が庶民の困苦を思い、反対されたのにだ。今、富士見町といつて居る所だが、大村先生は斯(か)かる事までして、招魂場を九段坂上にお創りになられる事はなかつたのだ」

「誰かに凋落(ちようらく)されたとしても、申されるのですか」

「そうとしか思えぬのだ。楠公社(なんこうしゃ)の事もそうだ。尾張の徳川慶勝(よしかつ)殿は、斯(か)かる事を見越して、慶応三年十一月、朝廷に建白をされて居られたのだ。楠正成(くすのきまさしげ)一門の者、忠節を皇家に尽くし、その一死をもつて国に殉じ、誠に以て臣子の亀鑑(きかん)。皇都の然(しか)るべき地に楠公社(なんこうしゃ)を建てられ、嘉永(かえい)安政(あんせい)以来、国事の為に身を亡ぼされた殉難者の霊を合祀(ごうし)され、楠社境内に安置されんと。

それを伊藤先生は、君は大楠公(だいなんこう)、大楠公と申すが、大楠公が如何(いか)なる者か知つての事かと。あの頃、尾張の慶勝殿にしても、表立って上奏するのは憚(はばか)られたと申されるのだ。本来なれば大村先生が、

陣頭指揮を執り、皇都の然（しか）るべき地に楠公社を建てられて然るべきものを、新政府は何故に、楠公社建設の地を兵庫表とされるに止まり、帝都に建てんとされなかったのか。

木戸先生に意見するも、木戸先生は先ずは上野山内の論だ。楠公社などという話ではない。そういう訳で、なす事もなく、江戸の町を彷徨して居ったが、木戸先生の用事で市ヶ谷の旧加賀藩邸近傍に出向いた時だ。通りすがりに八幡神社があり、拝殿いたした所、応神（おうじん）天皇甲冑（かつちゆう）の礼体が祀（まつ）つてあつた。これこそ、神仏の思召（おぼしめ）しというものだと思つて、帰つて来たものだ。

そう思つて帰つて来た矢先、大村先生が、京都三条木屋町であのような事になつてしまわれた。新政府の中には、上野戦争の軍議で大村先生が薩摩の海江田信義（かいえだ のぶよし）殿に『君はいくさを知らぬ』と言つた事から、薩摩の恨みを買う事になつたのだと申される方も居るが、そのような単純な事ではないのだ」

「それでは、どういう事なのですか」

「巷間（こうかん）伝わる様に、黒門口の事で薩摩と陰悪になつた事は事実であるが、西郷さんの取成しで、事なきを得たのだ。それが原因で、大村先生が殺される事などあり得ん。事はそのような事ではないのだ。大村先生は、常々、これからは新政府の戦役の事に百姓町人を当らせると申して居られた。戦の事は、侍（さむらい）に任せておけばよいものを、士族の恨みを買われてしまわれたのだ」

そう言うと、私は少し後悔した。

「斯（か）かる愚痴（ぐち）めいた事、申してしまつた」

「そのような事、ありません」

金子君は頭（かぶり）振つた。金子君を見込んで留学生との議論に誘つたところ、黒田長和（ながとも）公の船酔いひ

どく、食事もままならないと言う。黒田斉溥（ながひろ）公から旧君臣の関係を離れ、長和公と同行する学生と心得よどのお言葉を賜（たま）わるも、金子君が身のまわりの世話をして居るといふ。金子君は隣に座つて居つた小僧を促し、席を立て行つた。

金子君とすつかり話し込んでしまった。伊藤先生の部屋を訪れると、議論は始まつていた。既（すで）に一悶着（ひともんぢやく）があつたとみえて、薩人は承伏しかねぬ様子であつた。伊藤先生は、私に座つて議論に加わるよう命じた。

「御一新（ごいっしん）の事たい。御一新の精神がどげんした」

野武士風の男が迫つた。

「尊皇攘夷（そのんかうじょうい）の精神に非（あら）ずという事です」

瘦せた面長の男が答えた。

「それでは聞こう。御一新の精神とは何であつたのか」

伊藤先生が間に入った。

「上帝（じょうてい）の御維新（ごいしん）かと」

優男が小さな声で答えた。

「おいは鳥羽の戦いでも上野でも越後でも賊軍（ぞくぐん）と戦つたが、維新（いしん）などと聞いた事なか」

野武士が声を荒々しくあげた。

「薩人がそのような事であるから、話にならないのだ。だから薩摩は立ち行かなくなるのだ」

「話にならないのは、おはんの方だ。おいは、そげん作り話を信用せん。中江君は席を立ててもうたではなかか。福井

藩はどうかしとる。それで誰が坂本さんを斬ったというのか。おはんは、薩摩を疑つて居るのか」

「新撰組（しんせんぐみ）の者は、手を出して居らぬと言っただけだ」

「どげん事か。瓢亭（ひょうてい）の下駄（げた）も、刀の鞘（さや）も新撰組のものたい。新撰組が手を出さんば、誰が手を下したとか。それとも見廻組（みまわりぐみ）の仕業か」

野武士は興奮していた。

「見廻組（みまわりぐみ）は、斬り捨てなどせぬ」

「どげん事だ」

「木戸さんを見れ」

「木戸さんがどげんした」

「池田屋での事だ。寸での所で難を逃れられた。蛤御門（はまぐりごもん）の後には、会津藩の羅卒（らそつ）に捕らえられるも、厠（かわや）から姿を消された」

「おはんは、木戸さんが見廻組と内通して居ったというのか。どげん事ですか、伊藤先生」

あらぬ方に話が転がり、伊藤先生は困惑顔であった。伊藤先生は、弁明に躍起となった。

「木戸さんは、蛤御門（はまぐりごもん）の事には関わられて居らぬのだ」

「どげん事ですか」

薩人は伊藤先生に迫った。

「木戸さんは、男山八幡にて来島又兵衛（きじま またべえ）殿から罵倒（ばとう）され辱めを受け、油小路（あぶらのこうじ）の因州藩邸に身を隠して居られたのだ」

福井人は勝誇った顔をした。

「それで、おはんは薩摩を疑って居るのか」

「疑って居らぬ」

「嘘言え。西郷さんは、坂本さんが寺田屋から近江屋に身を移した事を知って居ったと言ったではなかか」

「よいか。西郷さんが坂本さんを斬るという事は、岩倉公を斬るようなものだ。ありえん事だ」

「おはんの話はおかしか」

「おかしくはない」

「おかしか。王政復古の大号令が発せられるや、西郷さんは小御所（ごごしよ）の会議で岩倉公と刺し違えんとしたと

言うたではなかか」

「そのような事は言つては居らぬ。その様な覚悟で事に臨んだと言つたのだ。芝居というもの。決死の覚悟を以て、岩倉公に迫つたという事だ」

言葉に窮した薩人は、伊藤先生に助けを求めた。

「伊藤先生、坂本さんを斬つたのは、新撰組の者ではなかとですか」

伊藤先生は、暫く考えて居られたが、徐（おもむろ）に言われた。

「龍馬を斬つた者は、見廻組の者だ。与頭（よがしら）佐々木唯三郎ら七人が、近江屋を襲つたのだ」

福井人は顔色を変えた。

「伊藤副使、話が違ふではありませんか。木戸先生は見廻組（みまわりぐみ）の者に救われたとお話くださったではありませんか」

「救われたなどとはと言つては居らぬ。木戸さんの時と、龍馬の時とは、話が違ふのだ」

「何を根拠に、伊藤副使はそのような事を申されるのですか」

「新政府は、箱館（はこだて）で降伏した幕臣から龍馬暗殺の取調べを行ったのだ。今井信郎（いまい のぶお）という見廻組の者が、白状した」

「その今井は、今どうして居るのですか」

「東京の伝馬町（でんまちょう）の獄に居る」

「何故、断罪に処さないのでですか」

「今井は、手を下して居らぬと言うのだ。今井が申すには、龍馬を召捕らんと近江屋の一階で土肥仲蔵、桜井大三郎と控えて居つたと」

「どういう事でしょうか。それでは誰が、坂本先生を斬つたと言うのですか」

「二階に上がった渡辺吉太郎、高橋安次郎、桂隼之助の三名が、抛無（よんどころな）く討ち果してしまつたと」

「抛無（よんどころな）くとは、どういう事ですか」

「抛無（よんどころな）くとは、抛無くじゃ」

「それで、坂本先生を斬つた者たちは」

「箱館で死んだ」

「それでは、死人に口なしという事ではありませんか。そのような好い加減な供述を、伊藤副使は信じて居られるのですか。坂本先生は、問答無用で斬られたのです。御用もなかつたのです。その今井某（なにがし）の言う事は、本当なのですか」

「今井も龍馬の儀は、新役の事ゆえ承知して居らぬと言うのだ。龍馬に如何様(いかよう)の不審あるかと思ひしも、上からの命令だったと」

「上からの命令。それは、松平肥後守容保(かたもり)の事ですか」

「分からぬ」

「分からぬとは、どういう事ですか」

「今井も分からぬと言って居る。閣老等重職の命令か、松平肥後守(ひご)のかみ)の指図(さしず)か、その何れであるが、その誰かは分からぬと」

「そげん事で、どげんとするのですか、伊藤副使。京都守護職付きの見廻組の事なれば、松平肥後守の指図に間違いなか。何を逡巡(しゅんじゆん)されて居られるのですか」

今度は薩人が詰め寄った。

「今井は斬つて居らぬと申すのだ。証拠もないのだ。そのように申す者を、新政府は極刑には出来ぬ」

伊藤先生は苦しい弁明を繰り返し、私の方を振り返った。

「貴公が早く来ぬから、あらぬ話になつてしまうのだ」

伊藤先生は恨(うら)めしそうな顔をされた。

「その話は、もうよかです。おかしな話ばする福井が、悪かです。今日は御一新(ごいつしん)の話をばしに来たとです」

薩人が話を戻した。

「おかしな話ではない」

福井人は言い返した。

「そげん話なら、おいも知って居る」

「何を知って居る」

「春嶽（しゅんがく）公と斉彬（なりあきら）公の話たい」

「春嶽公と斉彬公の何を知って居るといふのだ」

「攘夷の秘策たい。春嶽公と斉彬公は、攘夷の秘策をねとつた」

「どんな秘策だ」

「斉昭（なりあき）公を将軍後見職にいたし、攘夷の断行たい」

「話にならぬ」

「話にならんのは、おはんの方たい。春嶽公は、斉彬公に申された」

「何をだ」

「醜女（しこめ）の恋慕に押し倒され、腰刀を抜かずして婦女子の手ごめに逢つたと」

「何の事だ」

「ペリー艦隊が来航するや、幕府は異人に屈し、和親条約を結び居つた事たい」

「それは、事情が変わつたのだ」

「事情」

「そうだ。事情が変わつたのだ」

福井人は冷静さを装つた。

「おはんは何を言うちよる。どげん変わったとか」

「春嶽(しゅんがく)公は、阿部伊勢守(いせのかみ)に建議を出されたのだ」

「どげん建議か」

「慶喜(よしのぶ)公を將軍継嗣(けいし)に据え、斉昭(なりあき)公・斉彬(なりあきら)公を国内事務宰相とする。肥前鍋島直正(なべしま なおまさ)殿を外国事務宰相とし、その補佐役に川路・永井・岩瀬を添える。その他、天下有名達識の士を御儒者の名目で選挙し、京師(けいし)の守護には彦根戸田を差し添え尾張因州が行い、蝦夷(えぞ)には遠州土州侯を遣わすと」

「それが春嶽(しゅんがく)公の建議か」

「そうだ」

「それで、阿部伊勢守はどげん申したと」

「一、二年前なら理屈も立ったと、取り合われなかった」

「一、二年前なら理屈も立ったとは、どげん事か」

「將軍家慶(いえよし)公がお亡くなりになられる一、二年前の話ならばと。家慶公ご存命ならば、それも理屈に適ったと」

「何故、家慶存命なら、理屈に適うとか」

「家慶公が居らねば、斉昭(なりあき)公が何をするか分からぬ」

「それで、阿部伊勢守は春嶽(しゅんがく)公の建議を取り合わなかったとか。それは話がおかしくはななか。ペリーが来航後、幕府は慌てて斉昭公を海防参与(さんよ)に就任させたのではななか」

「それは、嘉永（かえい）六年六月、ペリーが来春の再来航を告げて日本を離れるや、家慶公がお亡くなりになられたからだ。春嶽（しゅんかく）公が家慶（いえよし）公の御遺言を飾（た）めて、斉昭公を將軍家の補翼（ほよく）とする様にと阿部伊勢守に進言されたからだ」

「それで、どげんした」

「斉昭（なりあき）公は、安政二年には毎月三次の登城の幕政参与に就かれた。その後、將軍家定公の御意向で隔日登城となられた」

「それは、攘夷決行に備えての事ではなかか」

「そうではない」

「それでは、隔日登城とは、どげん事か」

「庶政更新の議に参画（さんかく）して頂くためだ」

「庶政更新とは、何の事だ」

「幕府は方針を平和開国に転換したのだ。そのための庶政更新だ」

「阿部伊勢守は、斉昭（なりあき）公を張子の虎にしたという事か」

「そういう事だ。斉昭公は御不満で、幕政参与を辞められた。開国と海防とは、別の事ではない。海防なくして開国もない。海防は攘夷のためではない。開港の事は、嘉永（かえい）・安政（あんせい）の時に始まったものではない。天保（てんぽう）・弘化（こうか）より、鎖港論と開港論があつた。それに又、双方に尊王論と佐幕論があつたから、話が複雑になつたのだ」

「おほんの話は、おかしか」

「おかしくはない。我々が元服前の嘉永安政の話だ。おはんが知らぬだけだ。嘉永安政の時に、幕府に阿部伊勢守（いせのかみ）があり、薩摩に島津斉彬（しまづなりあきら）公、土佐に山内容堂（やまうちようどう）公、筑前に黒田長溥（くろだながひろ）公、伊予に伊達宗城（だてむねなり）公があり、密かに開国の国是を胸に秘められて居られた。旧弊を一掃し、将軍家自ら万機を躬行（きゆうこう）し、諸有司が尽力すれば、開国の道も開けるものと」

「斉彬公は海防を止めにしたと申すか」

「止めにしたのではない。貧窮諸侯の富国を致さねば強兵にもならぬではないか。斉彬公は春嶽公に申された。富国を先にし戦（いくさ）を後にする事、強（あなが）ち恥づべき事ではないと。春嶽公は、富国を先にせば、世情は戦争がないものと考え、因循（いんじゆん）怠惰（たいだ）に陥るではないかと反論されたが、春嶽公は事を単純にお考えになるくらいがあられた」

「主君に対して、無礼ではなかか」

「諫言（かんげん）するのが、臣下の勤め。春嶽公は橋本先生を遣わし、川路聖謨（かわじとしあきら）殿に慶喜公継嗣の事も入説された」

「春嶽（しゅんがく）公の腹心は、どげん入説したとか」

「慶喜（よしのぶ）公を將軍継嗣として、幕政の改革を促すようにと」

「川路聖謨（かわじとしあきら）と申す者は、何者か」

「斉昭（なりあき）公と懇意の幕臣だ」

「川路は、どげん言うた」

「よい顔をされなかつた。他の幕閣も、春嶽（しゅんがく）公の例の御催促かとり合われなかつた。そこで、橋本先生

は目付の岩瀬忠震(いわせ ただなり)殿と謀つて一芝居を企てられた」

「その橋本という者は、本当に春嶽(しゅんがく)公の腹心か」

「堀田備中守(びつちゅうのかみ)は、春嶽公に善き家来を持たれたと申された」

「橋本は、本当に賢臣なのか」

「西郷さんとは、懇意な筈だ」

「西郷さんは、そげん者の話をされた事はなかな。西郷さんは、その者を知つて居るとか」

「勿論だ。お二人は、江戸で慶喜公継嗣(けいし)の事で奔走された間柄だ。橋本先生は、ワシントンに商館を設ける事も考えて居られた」

「また、商売の話か」

「橋本先生は聖人の道を説かれたのだ」

「福井藩では、商売が聖人の道か」

「人倫日用の外に、聖人の道というものは無いのだ。福井藩では先ず経済有用の学を起こし、その後で義理の学を行う事にした」

「福井藩では、『新論』を読んだ者は居らんとか」

薩人は声を荒(あら)げた。

「貴殿は、会沢先生を誤解して居る」

「何を誤解して居るとか」

「会沢先生は攘夷の精神を以て、開国せよと申されて居るのだ」

「おはんの頭は、どうかして居る。攘夷の精神を以て開国などと」

「会沢先生は、神州の道も夷狄(いてき)の道に化する運命にあると説かれて居られるのだ。それでも皇国の民は、禽獸(きんじゅう)に陥らぬようと説かれて居られるのだ。会沢先生は慶喜公の師だ」

「我が邦は諸州の首(はじめ)たい。邪氣を祓(はら)わんば、神州がすたる」

「それは理を枉(ま)げて、自ら誇り、他人を賤(いや)しめんとする者の言。狂妄(きょうもう)と申すもの。国典(こくてん)の貸さざるもの、士論の容れざる所だ。貴殿は、天照皇太神(あまてらすおほみかみ)が生み出された所以(ゆえん)を知らないのだ。その時より数千万年を経ても、皇太神(おほみかみ)の子々孫々繩々(じょうじょう)綿々(めんめん)として天下の主として万物を統(す)べ治められて居られるのだ」

「おはんは、何を言うちよる。国典(こくてん)の貸さざるものなどと。その長人さん、黙って居らんで、何か言わんね。長州には、勤皇の志士は居らんとか」

漸(ようや)く、長州の名声を轟(とどろ)かせる時が来た。大弁舌をなす事とした。

「王を尊び、夷(い)を攘(はら)い、国体を重んじる事、我が藩の信条とする所です。我が藩は臣節(しんせつ)を励まし、人材を育成してきたからこそ、今日ここに在るのです。」

我が国の歴史において、武臣府を開くは頼朝にはじまり、陪臣(ばいしん)命を執ったのは義時の時。逆臣尊氏に至っては国を奪い、平右府・豊臣関白・源大相国(だいそうこく)に至っては、その志、固(もと)より尊皇敵愾(てきがい)に在る事は、申すまでもない事。一天万乘(いつてんばんじょう)の君主が虚器(きよき)を擁(よう)して居られては、益々朝威が衰退するとの念(おも)いから、我が長州藩は王政復古の大事業をなしたのです」

福井人は憮然としていた。

「長州には失望した。それは、天下の公論ではない。そもそも国体という語は、宋書に往々にしてあるも、我が国の典には見当たらずものだ」

「それは、どげん事か」

薩人が口を挟んだ。

「彼の『新論』において国体と申すは、太陽の出づる所、元氣の源(もと)づく所。皇国は、日出(い)づる国ではななか」
「確かに太陽は元氣の源なれども、太陽、東より出(い)づるといえば、我が国より東にアメリカあり、アメリカの東には西洋諸国があるのではないか」

「おはんは、氣は確かか。地が丸かと本気で思うちよるのか」

福井人は薩人の罵倒にも、意に介さなかつた。

「天下を照らす太陽は、東方から出るものと呉人は言った」

「それが、どげんした」

「西方の蜀(しよく)人は言った。太陽東から出るも、終いには西に入ってしまうと」

「そげん理屈をこねて、戊申(ぼしん)の役を戦ったもんは、何処(どこ)にも居らん」

薩人は机を叩いて立ち上がった。

「だから道理を説いて居るのだ。太陽、地球より大にして、一昼一夜、世界万国を照らすものだ」

「おはんの話には、君臣の大義というものがなか。おいは帰る」

薩人が出て行くと、福井人は伊藤先生に詰め寄った。

「あのような道理を弁(わきま)えぬ者を使節団に加えておいて、よいものでしょうか。事を起こしてからは、遅いので

はありませんか」

「僕もあの時分そうであった。心配には及ぶまい」

伊藤先生は気休めを言った。

「そうでしょうか。あのような者が西洋文明を見て道理を悟るとは思えません。一時はその眩(まぶ)しさに崇拜者も出てきましよう。しかし、酔いが醒めると、以前にもまして激しい攘夷主義者になりはしませんか」

福井人は憤懣(ふんまん)やるかたなかった。

「大久保さんが入れたのだ」

「大久保先生が。何故です」

「見聞すれば、気も変わろうと。村田新八(むらた しんぱち)さんの事もそうだ」

「そのような取るに足らぬ事で」

「西郷さんに騙(だま)されたと」

「西郷さんに」

「倒幕後に攘夷をと」

「西郷さんがそのような事を」

「方便(ほうべん)じゃろう。薩摩だけではないのだ」

「どういう事ですか」

「長州にも居るのだ」

私は俯(うつむ)いた。ただ、事の成り行きを見守るだけであった。

伊藤先生は福井人を制して、例の話をするよう命じた。福井人は、春嶽(しゅんがく)公が堀田備中の意向を受け、横井小楠(よこい しょうなん)先生を招聘(しょうへい)した時の話を始めた。

「小楠(しょうなん)先生は、幕府御聖堂の朱子学を堯舜三代の聖天子賢臣たちが考えた事と違って居ると申されました。堯舜(ぎょうしゅん)三代の聖天子賢臣たちが考えた事は、目に視、耳に聞く万物の動揺変転を天帝の命を受けたものと敬畏し、天帝に代わって工作工夫をこらす事だと。それは山川・草木・鳥獸・貨物それぞれの特性を利用し、地をひらき、山野に路をつけ、地上のあらゆるものを人間の生活を豊かにするために役立てる事であると。この天帝を敬し天帝の命を受け、水・火・木・金・土・穀の六府の功用を利用し、人間生活に役立てて工作工夫する事こそ、聖人の政治だと。所が幕府の役人で経世済民(けいせいさいみん)の心を心がける者は皆無。それどころか、幕府は諸大名の力を弱めるため参勤交代を命じたり、土木工事や各地の警固警備などを行わせました。小楠(しょうなん)先生は幕府の独善的な政治を改めさせ、天下公共の正理に従い京都朝廷を尊重し、真の君臣の大義を明らかにしなければならぬと申されました。

安政年間の知者の例にもれず、小楠先生もロシア最頂(びいき)でした。小楠先生は申されました。ロシアではピョートル大帝の中興から、国内の政令がよくゆきとどき、国王は民家などに泊って国情を視察する。大臣はじめ官吏は世論に従って任免され、年貢は十分の一と決まっているから、民は豊かだと。学校も男女とも村の学校に入り、優秀な者は郷の学校、郡の学校、部の学校へと引き上げられ、最後にペテルブルクの大学校に入ります。ロシアでこのような事が行われるのは、この国のキリスト教が我が国に渡来した切支丹(キリシタン)と異なり、天意に基づき人倫の道を定めたからです。

小楠(しょうなん)先生は貿易そのものには反対されませんでした。西洋列強の強圧的な態度には異を唱えられ

ました。外国とは信義に基づいて交渉を行い、無理を強いるものであれば、戦争になつても已(や)む無しと。

文久元年ロシア軍艦が対馬を占領すると、小楠(しょうなん)先生は春嶽(しゅんがく)公の唱える破約攘夷に荷担されました。不信に思われた大久保忠寛(ただひろ)殿が小楠先生にその真意を質されましたが、要領を得ませんでした。慶喜(よしのぶ)公が春嶽公の破約攘夷を敢然として却けられたと聞かれ、小楠先生は余が眼識の及ばざりしは慚愧(ざんき)の至りと申されたそうです。

そうは言つても、小楠(しょうなん)先生の世界情勢への洞察は秀(ひい)でたものでした。西洋人は万国一体・四海兄弟と唱えて居るが、それは原則というもの。中国でも華夷(かい)の差別をしたように、他民族に親疎の差別がある。しかし、みな同じ人類です。華夷東西の区別などなく、公正かつ盛大に交通貿易を行う事が自然の理だと。

西洋人は貿易から生じる利益の事を悟り、昔日のように無闇に他国を略奪しなくなりました。しかし、貿易を断れば、戦争をしかけます。彼らは、一度ひどい苦しみを味わわせておけば、あとは双方共に安定した利益が得られると思つて居るのです。彼らの考えは利害から出発しているとはいへ、結果への見通しについては易のように精密です。

小楠(しょうなん)先生は、申されて居られました。我が国には、神道の神聖な道を世界に押しひろめよと説く者があるが、公共の天理をもつて現在の国際紛争を解決しようという気概がなければ、単に勢力を張るだけで、後日必ず災害を招く事になると」

そう言うと、福井人は伊藤先生の方に向かい、声を詰まらせた。

「春嶽(しゅんがく)公に御仁徳があれば、安政の大獄にて橋本先生もあのような事には……。文久三年夏、小楠先生挙藩上京の策に御英断を下されて居られたなら……」

あとは涙で机に伏せてしまった。伊藤先生は福井人の肩を叩いて、帰室を促した。

「今日とはんだ事になつてしまった」

伊藤先生は私に詫(わ)びたが、私は怪訝(げげん)な思いで伊藤先生に問い返した。

「福井人の話を聞いて居りますと、小楠殿は、松陰先生とは志が違うのではないかと思えるのですが」
「そうやも知れぬ」

「橋本殿の事もそうです。橋本殿は、松陰先生と亡骸(なきがら)を隣り合わせにされた方ではないのですか」

「安政の時代に井伊大老が居らねば、松陰先生と亡骸を隣り合わせにされる事もなかつたやも知れぬ。

『電信伝へ来つて口陳(こうちん)を快くす

活機(かつき) 全く両条の綸(りん)による

今より羈客(きかく) 応(まさ)に夢なかるべし

万里の雲山 比隣のごとし』

橋本左内(さない)の詩じゃ。書生論議の及ぶ所ではない。万里の雲山を隔てた地も、電信で隣の地のようになつたといふのだ。左内は早く生まれすぎた。幕吏も知つて居つたはずじゃ」

「何をです」

「左内の聡明さを。左内は常盤橋(ときわばし)の越前藩邸で幕吏から審問を受けた」

「橋本先生は、幕吏から何を審問されたのですか」

「儒者との付き合いじゃ」

「橋本先生は誰と付き合われて居られたのですか」

「塩谷宕陰(しおのや)とういん)だ。水野越前守忠邦の儒者じゃ。左内は、宕陰の所で孟子を読んでいた。松陰先生も

象山（しょうざん）先生の門人になる前に、宥陰の所へ行つた事があつた。貴公は知つて居つたか」

「初耳です。それで松陰先生は、宥陰（とういん）殿の門人になられたのですか」

「松陰先生にはそういう気はない。人物を確かめに行かれただけじゃ。松陰先生は名刺も出さずに居間へ上がりこみ、長州の吉田寅次郎（とらじろう）と名乗り、宥陰の耳もとで御忠告申上げたのじゃ」

「松陰先生は、何を忠告されたのですか」

「方今（ほうこん）、幕府正義の士を悪（にく）む事、蛇蝎（だかつ）の如く、近日先生を捕らえて投獄の事あるべしと。有志の人が、吉辛（つみ）なくして死地に就くを見るに忍びずと申されて居ると」

「吉辛（つみ）なくして死地に就くと松陰先生は、申されたのですか」

「そうじゃ。それがどうした」

「キリシタン共が、そのような話をしていたような気がしますが。松陰先生は、宥陰（とういん）殿をキリシタンと疑われたではありませんか。それで宥陰殿は、何と答えられたのですか」

「驚いて、松陰先生の忠告に感謝した。それで、松陰先生は師匠（ししょう）にするに足らぬ人物と思われた」

「やはりそうではありませんか。それで、幕吏は橋本先生もキリシタンではないかと探ろうとしたのでありませぬか」

「幕吏は、橋本左内にそのような事を訊問して居らぬ」

「それでは、幕吏は、橋本先生の何を探ろうとしたのですか」

「薩摩との関係だ。左内は藩儒との関係を問い質（ただ）されたが、薩州には儒者と申す者は居らぬと答えたのだ」

「薩摩に儒者が居らぬとは、どういう事なのでしょう」

「名を挙げるに値する者が居らぬという事じゃ。左内は、学問を志す同志として日下部伊三次（くさかべいそうじ）

殿の名を挙げた。貴公は日下部伊三次殿の名を聞いた事があるだろう」

「勿論です。鶉飼幸吉(うがいこうきち)殿と共に戊午(ぼご)の密勅を奉じて江戸水戸藩邸に入った方です」

「伊三次殿は、江戸で朝川善庵(あさかわぜんあん)に学び、川路聖謨(かわじとしあきら)殿の知遇を受けられた。伊三治(いそうじ)殿の御父上様は連(むらじ)殿と申して、もとは海江田(かいえだ)姓を称して居られた。連(むらじ)殿は薩摩藩の副留守として江戸の藩邸にあつたが、脱藩され浪人となられた」

「何故に、浪人となられたのですか」

「中傷され免黜(めんちゆつ)された。薩摩には、御父上のお考えを受け入れる余地はなかった。御父上の流浪の旅は、卒都姿(そとば)が薩摩の鬼海が島から遙々、安芸の宮島に流れ着くようなものじやった」

「御父上様は、安芸に住まわれたのですか」

「安芸ではない。常陸だ。連殿は水戸城北、多賀郡上桜井村の寺に身を寄せ、塾を開かれた」

「常陸(ひたち)にですか」

「その後、斉昭(なりあき)公のご意向で、連(むらじ)殿は太田郷にあつた益習館(えきしゅうかん)の館長に就かれた。久慈郡太田郷の西山は、光圀(みつくに)公隠居の地、村人から逃山といわれた所だ。弘化元年に斉昭公が幕府より謹慎処分を受けると、息子の伊三治(いそうじ)殿は、益習館(えきしゅうかん)を離れ、江戸にて遊学された。

その後伊三治(いそうじ)殿は、再び水戸家にご奉公されたが、安政三年春、水戸家より暇を頂き、江戸に罷り出た時に左内と知り合いになられたそうじや」

「それで橋本先生の罪状は、何だったのですか」

「自藩主を差し置き、危険人物と交際し、一橋慶喜(よしのぶ)擁立につき鷹司(たかつかさ)家等に運動したるは幕

府を軽侮した所業と。寺社奉行、町奉行、勘定奉行、大目付、目付による五手調べにては遠島刑に処せられる事となつたのだが、井伊直弼(いい なおすけ)が老中と議し、一等重くして死罪としたのだ」

「それでは、井伊の所業、松陰先生の時と同じではないですか」

「そうじゃ。幕府でも名のある儒者が退けられると、迷走が始まったのだ。薩摩でも久光殿が桜田門外の事から手引けたのも、薩摩に名のある藩儒(はんじゅ)が居らなかつたからじゃ。大久保さんは慌てた」

「どういう事でしょうか」

「久光殿は伊地知(いぢち)高崎の両名を帰藩させたのじゃ。残された有村雄助(ありむら ゆうすけ)殿は、水戸藩の金子孫次郎(かねこ まごじろう)殿と義拳を企てるも、薩摩藩の手で捕らえられ、国許(くにもと)に送られ、腹を斬らされたのじゃ」

「その有村殿とは、井伊の首を抱え遠藤但馬守(たじまのかみ)辻番所で見事な最期を遂げられた有村治左衛門(じざえもん)殿の兄上様の事ですか」

「そうじゃ。有村家と日下部家とは懇意。安政の大獄で日下部伊三次(くさかべいそうじ)殿が亡くなされると、伊三次殿の無念は、有村兄弟に託された。伊三次殿の妻の静殿は、治左衛門を見込んで、治左衛門を娘の婿にと申された。治左衛門は、安政四年八月に江戸詰となるも、陰で辻斬りを行う乱暴者。西郷さんは、その行動を戒めて居られたそうじゃ。西郷さんは警戒されて居られた」

「何をです」

「治左衛門の矛先が、開国派に向かう事を」

「有村治左衛門殿は、安政七年三月三日、雪の日、唯一の薩摩藩士として見事な最期を遂げられたものではありませ

ぬか」

「そうじゃ。桜田門外で井伊大老の首を討ち取った唯一の薩摩藩士じゃ」

「それでは、何故に西郷さんは」

「西郷さんは桜田義拳の時、奄美大島に流されていたが、流罪御免となり鹿児島に戻り、斉彬公の墓に参ったその足で有村家を訪れ、母上に詫(わ)びたそうじゃ」

「何をです」

「常に治左衛門(じざえもん)殿を戒めて居りましたが、現在(いま)となつては、適(あつぱ)れの御振舞、只今(ただいま)も位牌(いはい)に向かつて、只管(ひたすら)自分の失言を詫(わ)びました次第(しだい)でござる」と。これも時勢というものじゃ」

外にも伊藤先生は、海江田信義(かいえだ のぶよし)先生の事も話されたが、要領の得ない話であつた。海江田信義先生は有村三兄弟の御長兄。文久二年に日下部家の養子となり、日下部家の旧姓海江田を名乗られたとの事。海江田先生は、あの生麦村で久光公の行列の前面を横切る無礼な夷人を斬りつけた豪傑であられたが、伊藤先生が海江田先生の事を島津斉興(なりおき)の茶坊主と口にされたところを見ると、有村一族をよく思われて居られてなかつたようだ。大村先生殺害の関与を疑われての事か、伊藤先生は渋い顔をされ、奴を呼んでくるよう言われた。

部屋に戻ると、奴は興味津々(しんしん)に話を切り出して来た。

「議論はどうであつた」

「どうもこうもない」

「元気がないではないか」

「人の世とは悲しいものだ」

「どうした」

「人の心の移ろいは、如何（いかん）ともし難いものだ」

「福井に論駁（ろんぱく）されたのか」

「そうではない」

「それでは、何故、そのように落ち込んで居る」

「松陰先生の事だ。松陰先生の話聞いて居ると、自分の心の中にこれと同じ事があると思えるのだが、伊藤先生の話となると、一つも心の琴線に触れるものがない。伊藤先生の話は、甘言美辞によって夷人の陥穽（かんせい）にはまる者の言に思えるのだ」

「それはお主の考え違いだ」

「何がだ」

「伊藤先生は、風が吹き過ぎてしまわぬうちに早くも散つてゆかれた花を惜しまれて居るのだ」

「そのような事を言つても、松陰先生は喜ばれぬ」

「松陰先生ではない」

「誰の事だ」

「高杉先生だ」

「伊藤先生の話は、合点の行かぬ事ばかりだ。もうよい。それより伊藤先生が呼びだ」

「何の用だ。議論の事か」

「議論はもう止めた。裁判の事ではないか。多分、大事に及ばぬ」

「そうか。すぐ行く」

奴が部屋を出ると、川原殿のもとを訪ねる事にした。川原殿なら松陰先生の本当の姿を存じて居られるに違いない。川原殿の部屋を訪ねると、矢張りお仕事中であった。机の上には使い古された辞書が置いてあった。

「貴殿も留学するのであろう」

背を向けて仕事をしている川原から声がした。

「伊藤先生にはアメリカかイギリスか、どちらかにするようにと。しかし、船員が何を話しているのやら、全く分かりません」

「言葉なら心配に及ぶまい。それより心構えの方が問題だ」

「先ずは交際せよと申されるのですか」

私は川原の背中越しに言った。

「西洋人の習慣に慣れる事だ。西洋人の考えを知るには、聖書を読んでみるのも悪くはない」

「聖書には荒唐無稽な話が沢山あると聞いて居りますが。大隈先生は、切支丹（キリシタン）宗門御禁制を掲げた高札（こうさつ）を撤去せよと申す夷人に、固く邪宗門（じゃしゅうもん）は認めずと申されました」

「その辺の所は、海舟殿もフルベツキ殿に随分聞いて居られた。現今の彼の方の事情も詳らかにならぬのに、古（いにしえ）の事は尚更だ。拙者（せつしや）も外国人に聞いてみたい事が沢山ある。アメリカでの仕事を終えると、オランダに渡る積りだ」

川原は俄（にわ）かに立ち上がると、椅子を私の方に向けて言った。

「オランダへ行かれて、何をなさるのですか」

「オランダ商館に居った蘭人と旧交を温める事にして居る。エジプトを脱出したモーセという偉人が、カナンの地に入る事なく砂漠の地で亡くなられたのはどうした事かなど聞いてみたい」

「何故に、そのような事を」

「外国人は、太古の話が好きなのだ。世界各地で、色々な古物を掘り起こし、研究をして居る。ウイリアムズという通詞の事を存じて居るか」

「いえ。ウイリアムズが何か」

「寅がペリー艦隊に乗り込んだときのアメリカの通詞だ」

「そのウイリアムズが、どうしたと申されるのでしょうか」

「日本の兵隊は、変だと」

「変だとは、どういう事なのでしょうか」

「たぶたぶの半ズボンにタイト・ストッキングを穿いて居ると言うのだ」

「それが変なのでしょうか」

「そうだ。支那風のように、どこかエジプトの軍隊に似て居ると言うのだ」

「それは他人の空似というものです。そのような戯れ言(ざれごと)を信じるから、幕府は公家衆から東夷と嘲笑(あざわら)られるのです。幕府が西夷に軟弱な姿勢を示すから、西夷からそのような嘲(あざけ)りを受けるのです」

「そうではないのだ。ウイリアムズは下田にて八幡様に奉納された絵馬を見て、エジプト王プトレマイオス三世が遭難から救われた時のベレニケの供物を思い出したのだ」

「どうして、そのような話になるのですか」

「難船を描いた絵馬の下に、弁髪（べんぱつ）が供えられていたからだ。貴殿にこのような事を申しても詮無（せんない）事であった。兎（と）も角、彼方（あちら）の古（いにしえ）の事情を知らずとも、卑屈になる事はない。知らずとも、我が国の先人達は外国人と堂々と交際して居った。南蛮（なんばん）人が渡来した時も、宣教師に対して雄弁に語り得たのは、語るべき何かを持ち合わせていたからだ」

川原は立ち上がると、また椅子の向きを変えられた。

「何か用があるのか」

「お仕事中では」

「仕事中と分かつて来たのだろうか」

「川路殿は、松陰先生の命の恩人というお話は本当なのですか」

「本当だ。聖謨（としあきら）殿が阿部伊勢守に掛け合つたのだ。何故、そのような事を聞く」

「一言お礼申し上げたく」

「それならば、太郎を紹介してもよいぞ。拙者も忙しくて、貴殿の相手も出来ない。太郎なら相談相手に丁度よい。斉昭殿の事もよく存じて居る。何時か、川路を紹介致そう」

川原は再び机に向かい、仕事を始めた。中々、立ち去らぬ私に声をかけた。

「まだ何か、話があるのか」

「川原殿は何故に、このようなものを」

「これか。これは、桂川甫周（ほしゅう）先生の形見だ」

「形見」

『和蘭字彙』（おらんだじい）といって、長崎の商館長ブーフが作った蘭日辞書を、甫周（ほしゅう）先生が手を入れられ、安政二年に前編を安政五年に後編を刊行されたものだ。貴殿は『解体新書』を存じて居るか」

「小塚原（こづかはら）にての腑分（ふわ）けの話ではありませぬか」

「そうではない。『解体新書』は『ターヘル・アナトミア』という蘭語の医書を翻訳したものだ。桂川家は代々の幕府奥医師で、明和の時、先代の甫周先生が前野良沢（まえのりょうたく）殿、杉田玄白（すぎたげんぱく）殿、中川淳庵（なかがわじゅんあん）殿らと『ターヘル・アナトミア』の翻訳を始められた。今を遡る事、百年前の事だ。

小塚原（こづかっぱら）にての腑分けの話が書いてあるのは、『蘭学事始』（らんがくことはじめ）という書物だ。明和八年の春、玄白殿のもとに、町奉行曲淵（まがりぶち）甲斐守から明日、お抱え医師の腑分（ふわ）けがある、お望みならばとの手紙が来た。玄白殿、良沢殿、淳庵殿のお三人は小塚原（こづかっぱら）に赴かれ、腑分けを見聞した。腑分けされたのは、青茶婆と渾名（あだな）された大罪を犯した京生れの老婆だ」

川原は仕事の手を止めることなく、私に背を向けたまま、話を続けて呉れた。

「大村先生が、腑分（ふわ）けされたという話は、本当なですか」

「本当だ。貴殿は知らぬのか。幕府のお玉ヶ池種痘所から、貰い子を殺したおなごの腑分けを頼まれたのだ。大村殿と面識はなかったのか」

「大村先生の事は、山田先生から伺って居ります。大村先生は、木戸先生と同じ、医家の出。三田尻の蘭医梅田幽齋（うめだゆうさい）殿の門に入られ、オランダ兵学の知識を見込まれて、宇和島藩に招聘されたそうです」

「そうだ。伊達宗城（だてむねなり）殿の参勤に従い、江戸に出られ、安政三年、麹町に鳩居堂（きゅうきやどう）とい

う塾を開かれた。益次郎殿は、大坂は緒方洪庵（おがた こうあん）殿の適塾（てきじゆく）で塾頭を勤められたお方。江戸で幕府の蕃書調所（ばんしよしらしよ）の教授をされて居られた時に、腑分けの話が持ち込まれたのだ」

川原はそう言うと、また立ち上がり、椅子の向きを変えられた。

「木戸君は、このような肝心な話を貴殿にして居らぬのか」

「取り立てて何も」

「木戸君は貴殿にも、御実家の和田家の事は話さないのか」

「そうです。養家の木戸家に気を遣われて居られるようです」

「御実家の和田家は御藩医で、毛利元就（もとなり）公七男の元政殿の血を引かれる名家と聞いて居ったのだが。そういう事なれば、拙者が話さねばなるまい。大村殿が腑分けを行った時と、甫周（ほしゅう）先生（せんせい）の頃とは、様子が大分違っていたのだ。何しろ、甫周先生の頃は、お抱え医師などは、腑分（ふわ）けなどはしない」

「それでは誰が、腑分けを」

「玄白殿らが小塚原（こづかばら）で腑分けを見聞いた時、虎松という下賤の者が腑分けの刀を執る事になって居ったが、病で、代わりに九十になる祖父が行った。若い時から、腑分けを手掛けたとあって、体を切り開いては、これは心臓、これは肝臓、これは胆嚢（たんのう）、これは胃と指さし、お抱え医師に教えたのだ」

玄白殿らはオランダ人から手に入れた『ターヘル・アナトミア』と『カスパリユス・アナトミア』という人体解剖図解書を取り出し、照らし合わせてみた。すると、その蘭書の図と違って居るものはなかった。これまで九蔵と称し、五蔵六腑といってきたものが、実際とは違って居ったのだ。

その翌日から、築地鉄砲洲（てっぽうず）中津藩中屋敷内の良沢殿の家で『ターヘル・アナトミア』の翻訳に取り掛かっ

たのだ。

千年來の支那と日本の説の誤りをただし、天地に身を立ててゆく医師の使命として、人体構造の真理を明らかにせんとされたのだ」

「先代の桂川甫周（ほしゅう）殿は、小塚原（こづかはら）に行かれなかったのですか」

「行かれなかった。翻訳を手伝われただけだ」

「桂川殿は幕府奥医師ではないのですか。時世を憚ったと申されるのですか」

「桂川家は蘭医の名門。桂川家はもと森島姓で大和の出であるが、六代將軍家宣（いえのぶ）公が甲府に居られた時からの侍医だ。江戸開府当初は、医師の地位も高く、幕吏屋敷にても御目見え医者に開門して居ったのだが、次第にそのような事もなくなつた。これも『武家諸法度』の案文に儒者・医師には乗輿（じようよ）を許すとあつたものを、医陰の両道というように改めてしまつたからだ。咸臨丸でアメリカに行った時も、侍を見ても驚かぬ者も、坊主が医師をして居るのには驚いて居つた」

川原は机の上にあつた『和蘭字彙』（おらんだじい）を私に手渡すと、何時もの椅子に座るよう促した。

「それで何故に、今頃蘭典などを繙（ひもと）かれて居られるのですか」

「スランガステーンの事を調べて居る」

「スランガステーン？」

「吸毒石の事だ。オランダ人は、この石で腫物の膿を吸うのだ」

「何故に、そのような石の事を。デ・ロング公使のお仕事とは、そのような事なのですか」

「そうだ。何を疑つて居るのだ」

「疑つてなど居りませぬ。秘密のお仕事なのですか。スランガステーンが、どうしたと申されるのですか」

「例の平賀源内の話だ。出島のオランダ商館長が江戸に来て、源内にスランガステーンを見せた。すると、翌日、源内は故郷讃岐の小豆島でとれた竜の骨を商館長に見せたのだ」

「何故に、源内はその様な事を」

「商館長が、セイロン島で手に入れたスランガステーンを大蛇の頭から出た石だと申すのだ。源内は支那の『本草綱目（ほんぞうこうもく）』を読んで居ったから、竜の骨だと言うと、商館長は、この世に竜など居らぬと申すから、源内は小豆島の竜の骨を取り出したのだ。商館長はこれを見て、源内の学識に感心して、源内に蘭語の鳥獸図鑑、植物図鑑、貝類図鑑一式を贈ったというのだ。どうだ。面白い話だと思わぬか」

私は返事に窮した。

「お話としては面白いと思いますが、外交交渉にて役に立つお話とは思いませんが」

「そうだな。二百年、三百年先になれば、面白い話になるのだが、今となって時代遅れの蘭学などして居るから、使節から外れるのだな」

川原は苦笑していたが、ご機嫌であった。

「今日は、何か大事な話をしに来たのではないのか。よいのだ。何の話だ」

「橋本先生の事を伺いに参りました」

「左内がどうした」

「川原殿は、橋本先生を御存知なのですか」

「川路殿の邸宅で会った事がある。緒方洪庵（おがた こうあん）の適塾（てきじゆく）で蘭医学を学んだ俊英だ。左内

の何を聞きたいのだ」

「松陰先生との御関係です」

「御関係？やはり、寅の話を書きに来たのか」

「橋本先生と松陰先生とは、どのような御関係だったのですか」

「御関係はない。二人とも安政の大獄で死罪になるも、面識はない」

「それでは何故に、松陰先生は橋本先生の隣に埋葬されて居られるのですか」

「それは、拙者の方が聞きたいぐらいだ。木戸君か伊藤君か知らぬが、そうしたのであろう」

「橋本先生と松陰先生とは、本当に御関係はなかったのですか。松陰先生は橋本先生が『資治通鑑（しじつがん）』の註をつくられたと知って感心されて居られたと聞いて居りますが。面識は本当になかったのですか」

「それは江戸伝馬町（でんまちょう）の獄中にての話。寅は藤野保三郎という者から左内の人物を聞き、面悟なきを悔いたという話だ」

「それだけですか」

「そうだ。それだけとは、どういう事だ」

「伝馬町の獄にての話です。松陰先生は、幕吏に伏見要駕（ようが）の策や間部（まなべ）要撃（ようげき）の事も供述されたと聞いて居りますが、本当なのですか」

「評定の事か。本当だ」

「御存知の事があれば、教えて頂きたいのですが」

「寅は評定所にて、先ず甲寅（こういん）の歳の墨使応接次第と航海雄略の論を申し述べたのだ」

「それで、幕吏は何と」

「何も」

「何もと申されますのは」

「三度の取調べの後に、口書読聞かせがあつた。下田渡航の時と随分幕吏の態度が違つたと、寅は憤慨して居つたとか」

「態度が違つたと申されますのは」

「寅が申し述べた墨使応接や航海雄略の論には触れず、国力充実の後、御打払い然るべくとの論が書き付けてあつたという話だ」

「松陰先生は、幕吏に陥られたという事ですか」

「寅は心中を見透かされたのだ」

「見透かされた？」

「寅が航海雄略の論を述べるなどと言う事は、どういう事か、貴殿でも分かるう」

「神功皇后（じんぐうこうごう）以来の雄大な計略に思いを致されての事」

「そうだ」

「それでは何故に、松陰先生は伏見要駕（ようが）の策や間部要撃（ようげき）の策までも幕吏に申し述べたのでしょうか」

「寅は正論を以て、井伊大老を諫めんとしたのだ。寅が伏見要駕の策や間部要撃を幕吏に申し述べたのは、先帝の御意向を以て尊皇家の井伊大老を諫めんとしたからだ。死罪になるほどの事ではないと考えて居つたのだ。阿部伊勢守

（いせのかみ）様が生きて居られたら、あのような事にはならんだつたやもしれぬ。寅は見込み違いをしたのだ」

「松陰先生は、死を以て井伊大老を諫めんとされたのではありませんか。松陰先生には、倒幕の御意志がなかったとでも」

「日下部伊三次（くさかべいそうじ）殿は幕吏の訊問（じんもん）に、このような幕府のあり方では、今後三年か五年の安泰も覚束無（おぼつかない）と死を覚悟して申されたが、寅は日下部殿のような態度をとらなかつた」

川原は素つ気なく言った。

「元気がないではないか。何か外に話があつて、参つたのではないのか。遠慮には及ぶまい。何があつたのだ」

私は萎えた心を奮い起こし、川原に昨日からの顛末を話した。川原は一通り話を聞き終えると、微笑んで居られた。

「良いお話を聞かれた。流石に福井には隠れた人材が居る。幕府の役人でもそこまで究める者はなかつた。またその必要もなかつた」

「どういう事でしょうか」

「林大学頭から文宣（ぶんせん）公廟（びょう）の話があつても、祐筆（ゆうひつ）でさえ文宣公を知つて居る者は、なかなか居らなかつた。修身齐家治国平天下（しゅうしんせいいかちこくへいてんか）とか言つて居るだけで、経綸を行おうという気構えなどない。そのような幕府にあつて海防掛が開明的な施策を執り得たのは、儒教の教養のなせる業だ。岩瀬忠震（いわせただなり）殿は林大学頭復斉（ふくさい）殿の外孫だけある。天帝に代わり貪婪（どんらん）虎狼（こうろう）の俗を化し、五世界中一帝となそうというのだから。海舟殿も大久保忠寛（ただひろ）殿と洋学所を創つた時、まづ儒教を学ばせる事にした。西洋諸学を究めた者が、耶蘇（やそ）教になる事を憚つての事だ。海舟殿は心得て居られた。『天地を万物の大父母となして見ればわれも人も人間の形ある程の者は皆兄弟なり』と。高杉殿から聞いて居

らぬのか」

「何をです」

「本心という事だ。高杉殿は柳生新陰流の達人。陽明学にも造詣が深かったと聞いて居るが。高杉殿なら、我も天地も一致なる事、悟られて居られる筈」

「何分、私は政事向きの事ばかりで、そのような事に耳を貸しませんでした。高杉先生は、陽明学にも造詣が深く、良知は如何にして手にする事ができるものか御伺いしたいと思つて居りましたが、高杉先生は先を急がれてしまわれました。四境戦争の最中、肺の病を得て世を去られましたが、死んだなら、釈迦(しゃか)や孔子に追いつき、道の奥義を尋ねんと申されて居られたそうです」

「それは残念な事をされた」

川原は、えらく納得して居られた。

「それで、誰の教えに学ぶのがよいものなのでしょうか」

「先ずは、中江藤樹(なかえとうじゆ)だ。我が国陽明学の開祖。近江聖人。それに門弟の熊沢蕃山(くまざわばんざん)に学ぶのもよい。蕃山は備前岡山藩の弊政を改革した儒服をつけた英雄だ。蕃山のお家は質素。懸物(かけもの)が二つしかなかったという。一つは義経の弓流しの図。もう一つは源重之(みなもとしげゆき)の和歌だ」

「どのような和歌を」

『つくば山はやましげ山しげけれど 思ひ入るにはさはらざりけり』

「筑波山がどうしたと申されるのですか」

「その昔、御祖神(みおやのかみ)の尊が駿河国福慈岳(ふくじのたけ)に宿を借りようとした時、『新粟初嘗(ワセノニ

ヒナメシテ)家内諱忌(ヤヌチモノイミタリ)』と拒まれた」

「福慈岳」

「富士山だ。所が筑波山に行つたところ、新嘗(にいなえ)の祭りであつたが、快く泊まる事が出来たというのだ」

「それは、どういう事なのでしようか」

「富士には古(いにしえ)より、厳格な掟が守られていたという事だ」

「それでは、筑波山と陽明学とはどういう関係にあると申されるのですか」

「これは心得というもの。蕃山(ばんざん)が、いましめに用いられたもの。それで、先ずは学ぶのだ」

「何を学べと申されるのですか」

「文思(ぶんし)を学ぶのだ。これが第一だ」

「文思?そのような事で、良知が得られるものなのでしょうか」

「書経には堯の徳として『文思安安(あんあん)』と書いてある。古(いにしえ)の学の要は、この『思』の一字に尽きる」

「思を考究すれば、良知が得られると申されるのですか」

「そうだ。格物致知(かくぶつちち)の事は、この『思』を考究する事だ。身を修め、澄心(ちようしん)の修行を行い、虚心清浄になつても、この『思』がなければ、外界の理を知るに至らないのだ。一身の修養から天下の政治にいたるまで、みなこの『思』に出るものなのだ」

「お話が、よく分かりませぬが。その『思』を考究するにはどうすればよいのですか」

「人心の知覚を考究する事だ」

「人心の知覚」

「人心の知覚は無限の広さをもつ。この知覚を押し広めていけば、全世界の事すべて心に入ってくる。さすれば、世界中の物事の理を、みな自分のものとする事が出来る」

「そのような事で、天地と一致する事が出来るものなのでしょうか」

「高杉殿御存命中に、もつと教えを請うておくべきであつたな。今からでも、遅くはない。貴殿の周りには、生き証人という者が居るではないか」

「それでは、川原殿にお伺いしたい儀があります」

「何だ」

「横井小楠（よこい しょうなん）殿の事です。小楠殿とは、どのようなお方だったのででしょうか。小楠殿は、申されたと聞いて居ります」

「何をだ」

「水戸学の事です。今、アメリカと戦（いくさ）せずば、義公水戸光圀（みつくに）様以来の水戸学節義の伝統も水の泡となつてしまう。たとえ夷狄（いてき）に勝つ見込みなくとも、水戸を始め天下の有志が、正気の旗印のもとに戦死すればよい。恥を忍んで和を乞うなど嘆かわしい限りだと。松陰先生は、小楠殿と兵論を戦わせるのを楽しみにして居られたと聞いて居りましたが、福井人の話を聞いて居ると、どうも邪教に惑わされて居られるようで」

「どういう事だ、申してみれ」

「西洋人は、四海は平等であり、万人は相愛せと言つては、陰で盛んに毒牙を磨いて居ると会沢正志斎（あいざわせいしさい）先生は申されました。兵までも、博愛のためだと言つて戦をして居ると。通商の事も、国防の程を窺い、大丈夫と思つたら大兵を挙げ、その国を奪うのです。その隙がなければ、今度は人心を邪道で誘うのです」

「その点は、小楠殿も十分心得て居られた。通商条約を締結し、世界に国を開くのだ。英明の方が將軍職に就かねば、国が危うくなる。將軍繼嗣(けいし)は血筋から決すべきではないと唱えられたが、熊本藩では小楠殿の意見は容れられず、寅とも兵論を交わす事なく、招聘先の福井藩に旅立たれたのだ」

「西郷さんが慶喜のために奔走されたという話は、本当なのでしょうか」

「本当だ。阿部殿と斉彬(なりあきら)殿は、機を見て慶喜公を西の丸に入れんとしたが、家定公と御生母本寿院(ほんじゅいん)様は慶喜公を好まなかった。そこで、斉彬殿は篤姫(あつひめ)様を近衛家の養女として、家定公の御台所とされたのだ。この天璋院(てんしょういん)様の御輿入(おこしい)れに尽力したのが、西郷だ。安政五年、斉彬(なりあきら)殿の命を受けた西郷は、左内と協力して、天璋院様を通じて大奥の工作を行った。所がだ。肝心の天璋院様までもが將軍繼嗣(けいし)の事は紀州侯が宜しいとおっしゃる」

「何故にですか」

「阿部殿が逝去されると、斉昭(なりあき)殿は九条閑白に通商条約締結は朝廷の御意思ではないと宣言されるようにとの書を贈られたのだ。將軍繼嗣の事でも、斉昭殿は越前の春嶽(しゅんがく)殿に、徳川の天下存亡の境に吾家より出でし者によつて天下を失つてはと申され、次の將軍を尾張か紀州又は田安に致したいと打ち明けられた。そうかと思えば、幕府に貿易取引を行ないたいと願ひ出たりもした」

「斉昭公が、貿易取引などという話をするものなのでしょうか。幕府の捏造(ねつぞう)に違いありません」

「捏造(ねつぞう)などではない。事の発端は、老中首席の堀田殿が、通商条約を機に公使館をアメリカに置かんと、慶喜公と米国一覽に赴かんとされたからだ。それで斉昭殿は、自らアメリカに行く事を願ひ出られたのだ」

「お戯れを」

「お戯れなどではない。お戯れをおつしやているのは、斉昭殿の方だ。斉昭殿は、流人を引き連れ、ワシントンの公使になろうと申し出られたのだ。斉昭殿がこうだ。慶喜公擁立に慎重な者が出て来ても不思議はない。斉彬殿は火消役にまわった。堀田殿には、慶喜公は斉昭殿とは人物において抜群の相違があり、斉昭殿の干渉さえなくすれば御懸念は無用と申された。それでも心配な堀田殿は、慶喜公に斉昭殿の京都への文通を止めて下さるよう直々に依頼された」

「それで斉昭公は」

「斉昭殿といえども、人の親だ。堀田殿に京都へは今後申し遣わせないとの一筆を書かれた。これには幕閣一同驚いた」

「慶喜は、斉昭公に何と申し上げたのですか」

「父君二十余年来の宿論である尊皇攘夷の大義を主張する事は、悪(あ)しき事ではない。今更堀田殿等が申す和親交易の説に左袒(さたん)せよとは申さない。却つて宿論を執つて動じない方が願わしい。けれども、京都へ文通し、輦下(れんか)の人心を動かし、宗家施設の妨ともなるべき事をなし、公辺御使に向かいあらぬ暴言を吐くとはと」

「親の心、子知らずとはこの事です」

「大義は、親をも滅すものだ」

「慶喜が、斉昭公に手に掛けたと申されるのですか」

「慶喜公は、そのような事はなされない。舜が天子であった時、父瞽叟が人を殺し捕らえられたら、舜はどうするであろうかと孟子に問う者があつたが、孟子は舜は天子の位をすて父を負つて世を逃れるであろうと答えて居る。」

それでも、川路聖謨(かわじ)としあきら(殿などは、慶喜公を將軍継嗣(けいし)とする事に懸念を抱かれた」

「川路殿は、慶喜の何を懸念されたのですか」

「聡明な事だ。孟子が舜の徳について『人に取りて以て善をなす。耕稼（こうか）陶漁（とうぎよ）より以て帝となるに至るまで、人に取るに非ざるものなし』と述べた事を、慶喜公は称えて居られたからだ」

「それにどんな意味があるというのでしょうか」

「慶喜公は、家康公の御意向をよく御理解されて居られたのだ。家康公は儒生に、凡（おおよ）そ天下の主たらんものは四書の理に通ぜねばかなわぬと申された。もし全部知る事が出来ぬのであれば、よくよく孟子の一書を味い知るようにと」

「それが恐れるに値する事なのでしょうか」

「慶喜公は、御自身が將軍職に就かれた時、幕府は消滅するものと申されたのだ。これには開国を唱える幕閣の間からも、高慢なお考えの持ち主と敬遠された。斉昭殿も、その所を懸念された。和親条約締結後、幕政改革が問題となった時、斉昭殿は慶喜公に諭された」

「斉昭公は何とおっしゃられたのですか」

「我が国は天照太御神（あまてらすおほみかみ）の詔（みことり）のまにまに、御代々の天皇しろしめされ、天地日月と共に長久の御国、神胤（しんいん）一本で皇位を継いでいる国である。

周代の封建制は、大夫（たいふ）の子は大夫となり、士の子は士となる。不徳・不才の人物も重役に就く弊害はあるが、君臣の恩義は深い。それに比べ国郡の太守を役人として選ぶ秦の郡県制は、人物が揃い善政が行われる事もあるが、所詮、君臣の恩義は浅いと。

近ごろ、夷狄（いでき）もまた人類であり丁寧にあしらうべきだという者もあるが、夷狄と公平に交われば、御国の

大和魂うせ果て、禽獸(きんじゅう)の道が横行する事になると。

斉昭殿は心配された。南蛮北狄(なんばん ぼくてき)の教えを布教すると、主君父母よりも本尊を尊び、信仰のためには主君父母に反逆する事になると。それを防ぐには風土の似た漢土の教えで、忠孝の大節を明かにする事だと。斉昭殿は天保十三年の時、水野越前守に意見をされた事があった」

「どのような御意見を」

「尊皇を唱える奸賊(かんぞく)が神武天皇陵修復營を企てぬよう、幕府は尊皇の誠意を披瀝(ひれき)し、諸侯・流民・外夷等の非望の念を断ち切るようにと。水野殿も斉昭殿も攘夷論を盲信する輩(やから)など畏れて居らぬ。攘夷を名として尊王を説き、その志を伸ばそうとする者を畏れたのだ。

水戸藩の不幸は、身を挺(てい)して主君を諫める者が居らなかつた事だ。海舟殿は、嘆いて居られた。藤田東湖などは、学問もあり、議論も強く、剣術も達人だが、国を想う赤心がなかつた。幕府に直言すればよいものを、書生を集めて天狗になって居った。

仕舞(しま)いには、『我が国が墨(すみ)となつても攘夷をしなければならぬ』などと言って、十二、三歳になる前髪垂らした息子を側に据え、『こいつどもを真つ先に立て、大砲の筒先にて美事(みごと)に打死(うちじ)に致させる』と涙をこぼして話して居るのだ」

川原が感情を露(あらわ)にして話すのは、珍しい事であつた。暫くあつて、川原は話を始められたが、昔日の想いから表情は歪んでいた。

「あれは咸臨丸でアメリカから浦賀に戻つて来た時だ。捕吏が船中に踏み込んで来るではないか。聞くと伊井大老が暗殺されたという。これも遣唐使からの伝統だ」

「伝統」

「行きはよいよい帰りはこわいという事だ。安政から文久に変わる数年、その変わりようと言ったらなかった。あの頃、俗説放議は衆愚に宜（よろ）しく、攘夷党の声は大きくなる一方だ。諸侯も公卿も壮士に和し、条約の事は必ず勅許を得べしと騒ぐ。それから物騒な時代が続いた。安藤対馬守（つしまのかみ）襲撃に関係した者が、長州屋敷に駆け込み、長州藩もいよいよ攘夷の仲間に入ったかと落胆したものだ。

事の起こりは、安藤殿が廢帝の事跡を調べさせたからだというものだ。江戸で廢帝の事跡を調べたと言って、万古一統の天日継（あめのひつぎ）を危うくする者と騒ぎを起こしたのだ。貴殿は、文久二年、塙（はなわ）次郎が殺害されるに及んだ事を知って居るのか」

「勿論です。話は聞き及んで居ります。伊藤先生が越智斧太郎（おちおのたろう）と変名して、塙次郎を殺害に及んだのです」

「では、捨札を建てたのを知って居るか」

「いえ。どのような」

「『此者儀、昨年安藤対馬守と同腹致し、兼て御国体を弁（わかま）へながら、前田健助兩人と、恐れ多くも所謂（いわゆる）旧記を取調べ候段、大逆の至り也』と」

「御国体を弁（わかま）えながらとは、どういう事なのですか」

「御国体を弁（わかま）えながらとは、御国体を弁えながらだ」

「それでは、安藤対馬守は、何故に廢帝の事跡を塙次郎に調べさせたのですか」

「廢帝とは、言いがかりだ。攘夷派の」

「言いがかり。それでは何故に、安藤対馬守は旧記を調べさせたのですか」

「開国に当り、西洋社会の禍を未萌（みぼう）に防ぐためだ」

「禍を防ぐ？」

「我が国は、青海原潮の八百重（やおえ）を知らす所にして、皇祖伊邪那岐（いざなぎ）大神の速須佐之男命（はやすさのおのみこと）が事依りし所。されど皇大御国（すめらのおおみくに）は大地の最初に成れる国にして、造物主の寵愛し給う事は、人智の及ばぬもの。古今、世界万国の蒼生（そうせい）を安んずるは皇国の要務なれど、太古神聖の教法は断絶し、天孫天降以後、人君太古の教法に敬遵従事せずして、遊惰（ゆうだ）放埒（はうらつ）、美女を愛し烈婦を嫌いて、経済の要務を蔑如（べつじよ）して、兄弟相争い親戚相殺し、ついには『君君たらず臣臣たらず』の風俗となつてしまつたのだ。大名持（おおなもち）・少彦名（すくなひこ）の規模頽敗（たいはい）して、国体の衰微（すいび）せし事今日に至つたのだ。安藤対馬守は、古史伝説を調べさせ、既（すで）に廃絶せし秘法を見出さんとされたのだ」

「秘法？」

「越智斧太郎（おちおのたろう）が逆立ちし、塙（はなわ）次郎を暗殺する位だ。中津の福沢が、宙返りし身を潜めるのも当然の事。塩漬けにされてはかなわぬからな。

あの頃、攘夷の浪人から天下の政を妨げているのは、勝と横井であると言われた。龍馬は海舟殿を斬りに行った時、海舟殿に地球儀を見せられ悟つたのだ」

「坂本先生は一体、何を悟つたと申されるのですか」

「龍馬は龍馬という事だ。物部安芳（ものべやすよし）の申す事は、二、三百年もしないと分からぬ事だ」

「二、三百年」

「人物とは月日が経って見出されるものだ。二、三百年もすると、また人物が現われて、二、三百年前に自分と同じ考えを抱いた者が居ったと言ひ出し、世の中も騒ぎ出すものだ。

兎に角、星の瞬きにくらぶれば、我等の存在など小さな物だ。夷人夷人と目くじらを立てる事など、愚かな事だ」
「それでは、安政開国などという事は、所詮（しよせん）叶わぬ夢では」

「そのような事はない」

川原は何度も繰り返した。

「それでは、何故に」

「一言で言うのは難しい。その心積りはあるのか」

川原は話をせずにはいられないようであった。

「勿論です」

「宜（よろ）しいのか。大嘗祭（だいじようさい）に行かなくとも」

川原は席を立つよう促し、また明晩にという事にした。

広間には、既に一同が集会していた。烏帽子（えぼし）・直垂（ひたたれ）姿の岩倉大使が列席されると、烏帽子・直垂の由来が説明された。それに引き続き、一同にシャンパンが振舞われ、岩倉大使が共に遙かに祝志を送りたいと演説されると、一同は陛下の方歳を祝し杯を掲げた。

岩倉大使の側では、デ・ロング氏が盛んに同席の外国人に岩倉公の演説を通訳していた。

「川原殿は、危ないと思われた事はないのですか」

「何をだ」

「政府要人の側に夷人を置いておく事です。フルベッキなどは、陰で政府要路に耶蘇（やそ）教を吹聴しているではありませんか」

「その事なら、心配には及ばぬ」

川原はいとも簡単に言った。

「何故にですか」

「彼の国の宗教家は、国権を手にして、宗旨を強制するような事はせぬ。取り分け、フルベッキ殿のダッチ・リフォームド・チャーチにおいては」

「それでは宗旨が徹底せぬではありませんか。フルベッキは、何をしようとしているのですか」

「ソーシャル・リホームだ」

「ソーシャル・リホーム？」

「彼の国に行けば、分かる事だ」

川原は神妙な顔をされた。ホール中央では、岩倉大使がスピーチを終えると、今度はデ・ロング公使が演説を始めた。

「何を申して居るのですか」

「日米両国の親善を希望する旨を述べられて居られる。岩倉大使への復詞だ」

デ・ロング夫人とその娘の傍に、奴の誇らしげな顔があった。

横浜を発つて、早や七日。前日から降り出した雨は、一段と激しくなってきた。船は何時になく揺れ、アメリカ号の外輪は音を立てていた。

奴はおなごの事で奔走していた。夕食後、部屋に戻ると、奴は嬉しそうに言った。

「君の言う通りであつた」

「何がだ」

「伊藤先生が大事にならぬよう、上手く取り仕切つて居られる」

「よいのか。恥を晒す事になりはしまいか」

「木戸先生もお許しになられた。小事での模擬裁判となつた」

「そうか」

「どうした」

奴は私の顔色を窺つた。今更、トミーが賊軍の隊長であつたなどと、野暮な事を言うのは止した。

「いや、大した事ではない」

「よいから、言ってみろ」

「そうか。お主、井伊大老をどう思う」

「藪から棒に何だ。どうした」

「伊藤先生が申されるのだ。あの彦根藩にしても尊皇藩だと」

「井伊家は、宗良親王（むねながしんのう）を奉じ、南朝に忠勤したと申されたのか」

「そうは申して居らぬ」

「それでは、伊藤先生は何を申された」

「井伊大老が斬られてからも、彦根には鳳輦（ほうれん）を彦根城に移し、勤皇倒幕派と大いに争うとの論があった。そこで高杉先生の命で、越智斧太郎（おちおのたろう）が密偵として近江八幡に入ったそうだ。知って居ったか」

奴は驚いた顔をした。

「本当にそのような話をされたのか。君は越智斧太郎が何をしたか知って居るのか」

「勿論だ。国学者の塙（はなわ）次郎を斬った者だ」

「その越智斧太郎が、何者か知って居るのか」

「勿論だ。越智斧太郎は伊藤先生の変名だ」

「何故、伊藤先生は君にそのような大事を話した」

「僕は伊藤先生の随員だ。伊藤先生が開国策の話ばかりするから、伊藤先生に本当に尊皇攘夷の志士であられたのかと詰問したのだ。それで、伊藤先生は僕も一端の尊攘派の志士であったと申された。その証拠に文久二年、幕府の御用学者の塙次郎を殺害したと申されたのだ」

奴は動揺の色を隠せなかった。

「それで伊藤先生は、彦根で何をされたと申された」

「彦根藩の内情を調べられたと」

「それで、どうだったと」

「彦根鳳輦(ほうれん)や城池修繕の事など途方もない風説であつたと。その旨を藩に報告し、藩より朝廷に申し上げた」と

「どのようにして彦根に入られたと申された」

「西川吉輔(よしすけ)という者を頼つたと。その西川が、お主が崇拝している多賀神社の神官を紹介して呉れたそうだ。それで、先生は彦根藩の寺社方元締役や至誠組の者に会う事が出来たと。お主、変だと思わぬか」

「何がだ」

「城池修繕の事だ。何故に、池の事など朝廷に申し上げるのだ」

「井伊家の事だ。赤備えだ」

「赤備え？戦を始めようというのか」

「そうではない」

「君は、『しお』の字の偏を知って居るのか」

「土偏ではないか。何故に、そのような事を聞く」

「君が井伊大老が本当に尊王家なのかと聞くからだ。』とく来ても見てましものを 山城の多賀(たか)の槻群(つきむら)散りにけるかも』」

「また、歌か。お主の好きな多賀社の事か。次は何だ」

『志賀(しか)の海女(あま)は 藻(め)刈り鹽(しお)焼き 暇(いとま)なみ 髪梳(くしげ)の小櫛(をくし)取りも見なくに』」

「今度は海女か。少し調子が変わらないか」

「よいのだ」

「どうしてよいのだ」

『「軽(かる)の池の浦廻(うらみ)行き廻(み)る鴨(か)すらに 玉藻(たまも)のうへにひとり寝(ね)なくに』」

「鴨(か)の話(はなし)をしてどうする。井伊(い)と何か関係(かんけい)があるのか」

「鴨(か)ですらの話(はなし)だ。『いにしへのふるき堤(つゝみ)は 年深(としふか)み 池(い)のなぎさに水草(すいそう)生(な)みくさお(ひ)にけり』」

「お主(おま)の好きな水草(すいそう)か。池(い)に水草(すいそう)が生(な)えて、どうだというのだ。古(いにしえ)は違(ちが)ったのか」

「井伊(い)家の家風(かふう)だ。直弼(なおすけ)は、埋木舎(うもれぎのや)に居(い)ったのだ。兄上(あにがみ)の直亮(なおあき)殿(だん)は、日光供奉(にっこうくわんぷ) (ぐぶ)御勤(ごきん)めにあたり、多賀祈禱(たがいのり) (きとう) 礼(れい)に干鯛(かみづ)を一折(ひと)さし上げられたのだ」

「お主(おま)は、何を言(い)いたいのだ。城池(じょうい)を修繕(しゆせん)して、鯛(たい)でも飼(か)おうというのか」

「君(きみ)は、玉藻城(たまもじょう)の事(こと)を知らぬのか」

「高松城(たかまつじょう)がどうした」

『「鹽竈(しおがま)にいつか来(き)にけむ朝(あ)なぎに 釣(つ)する舟(ふね)はこゝに寄(よ)らなむ』」

「もうよい。所(ところ)でお主(おま)は、岡本(おかもと)黄石(こうせき) という男(おとこ)の事(こと)を聞(き)いた事(こと)があるか。伊藤(いとう)先生(せんせい)は、大老(だいろう)を諫(い)めて居(い)ったと申(まを)されるのだ」

「井伊(い)家の家老(かろう)だ。岡本(おかもと)がどうした。会(あ)われたのか」

「いや、会(あ)われなかつたそうだ」

「何故(なにが)、会(あ)われなかつた」

「そのような事(こと)、僕(ぼく)には分(わ)からぬ」

「それで、伊藤先生は彦根で何をされた」

『太平記』を講釈して居る渋谷という医師の家に行き、その仲間に会った。皆、学問もあり、皇室の式微(しきび)を歎き、外夷の跳梁(ちようりよう)を憤つて居つたと。これら至誠組の者と酒を飲み交わし、無二の忠誠を誓つたと申された」

「どういう事だ。話して呉れぬか」

奴は珍しく頭を下げて来た。

「また、伊藤先生の自慢話だ。伊藤先生は座敷で一曲舞つた後、庭に降り、小さな池の畔(ほと)りにある老松の下枝を気合いもろとも斬りつけ、刀を収め座敷に戻ると、一同から盃を献されたそうだ。考えてみる。こんな馬鹿な話はない。松陰先生の首を斬つた赤鬼どもだ。伊藤先生は尊皇家だと言われるが、掃部頭(かもんのかみ)暗殺には皆、憤慨して居つたのだ。そのような者たちと何故に、伊藤先生は酒を飲み交わせねばならぬのだ」

「井伊家の事だ、察しは付く」

「察しは付くとは、何だ」

「尊氏だ」

「尊氏。逆臣という事か」

「そうではない。尊氏を悪く言う者は多いが、僕はそう思わぬ。尊氏は高潔の士だ」

「高潔の士。官軍に弓を引く者を何故に、高潔の士などと言う」

「諱(いみな)の尊治(たかはる)の一字を賜い、高氏を尊氏とされたのは、後醍醐帝ではないのか」

「それは、高氏が逆賊の北条一族を滅ぼしたからだ。高潔の士などというものではない。野心から行つたものだ。お主

は知らぬのか。足利は代々天下を窺いし者。源義家は七代の孫に生まれ変わり天下を取ろうとした者だ。その七代孫の足利家時は、八幡大菩薩に三代の中に天下を取らしめ給えと祈願して切腹して死んだのだ。その三代目が高氏だ。その高氏の事だ。後醍醐帝に叛く事など朝飯前の事。京にあつて、後醍醐帝に無断で鎌倉に攻め入ったのも、野心あつての事」

「それは天台座主の護良親王（もりながしんのう）が、征夷大將軍たらんとしたからだ」

「親王様自ら將軍になつて、何が悪い。そもそも皇室の衰微を招いたのも、武門が將軍となり、諸国に守護地頭を置き、朝廷を蔑ろにした故。護良親王はその事を足利にしらしめんとされたのだ。尊氏は独断で臣下の者に信濃、常陸を領与したのだ。何故に、逆臣が世に憚（はばか）る」

「尊氏こそが源氏の嫡流（ちやくりゆう）。退いて功を為すは武略の道だ。京を追われし尊氏は、丹波篠村に退き、更に筑紫に落ちるや、香椎宮（かしいぐう）に詣で敬神の深さを示したのだ。多々良浜の戦い（たたらはまのたたかい）では僅か三百騎で臨み、天下の武將となつた。官軍に北畠親房（ちかふさ）・顕家（あきいえ）父子あるも、所詮（しよせ）ん、伊達も結城も奥州の武人」

「所詮、武人とはどういう事だ。伊達も結城も南朝の忠臣ではないか」

「北畠顕家公、兵を募り京にて尊氏軍を破るも、足利方の吉良軍、大挙して東北は多賀城に攻め入つたのだ。伊達行朝（だて ゆきとも）は尊良親王（たかながしんのう）の第一王子・守永王を奉じ、多賀城の回復を謀るも、多賀城は吉良軍の守る所。」

北畠親房公、陸奥伊勢を固め、常陸は筑波山麓の小田城にあつて、遠く九州は阿蘇大宮司惟時（これとき）殿に支援を求めるも、後醍醐帝に神の御加護はなかつたのだ。君徳のない方は栄える事はないと、親房公は申された」

「親房公が、そのような事を申すものか。お主は親房公を尊氏に仕立てる気か」

「君は何も分かって居らぬのだ。嵯峨天皇の皇子皇孫に源氏の姓を与えたのも、桓武天皇の皇子葛原親王（かずらわらしんのう）の子高望が平氏の姓を賜ったのも、平城天皇の皇子阿保親王（あぼしんのう）の子、行平・業平が在原の姓を賜り臣籍に下されたのも、みな国をおもわれての事。天下の万民は皆、神の子。天子独り喜び、万民が泣くようでは、天も許さず、神も祝福を与えない。神は万民の生活を安らかにする事を本願されるものだ。足利尊氏、断じて逆臣などという事はない」

「まだ、そのような事を申す。執事の高師直（こうのもろなお）などは、吉野の皇居を焼き払った挙句に、二条前関白の妹君を犯したというではないか。東国武将の怨念が感じられる。高師直を執事とする尊氏などは天下の大逆臣だ」

「高師直が二条前関白の妹君を犯したのは、大織冠（だいしよくかん）藤原鎌足の末裔だからだ」

「鎌足公に何の罪があると申すのだ。妄言は止せ」

「妄言ではない。鎌足は常陸の生まれにして、都の者となったからだ」

「尊氏として似たような者。それでは何故に、高師直（こうのもろなお）は直義（ただよし）を亡き者にしようとしたのだ。高師直に野心があつたからではないのか」

「野心があつたのは、直義の方だ。直義こそ覇府を復権しようとした輩だ。尊氏は遁世して道心に専念し、弟の直義の政に誤りのないものにしてしようとしたのだ。その尊氏を新田義貞が討とうとしたのだ」

「今度は、義貞公を逆臣にしようというのか。義貞公こそ鎌倉攻めに際して、稲村崎（いなむらさがさき）で黄金作りの太刀を海中に投じ竜神に祈り、干上った海中を真一文字に渡って逆臣北条一族を滅亡させた建武中興第一の功勞者。そもそもの話、家康如きが南朝の忠臣・新田氏の出というのが、可笑しな話だ。家康は征夷大將軍にならんと、

新田氏の子孫になりましたのではないのか」

「家康公は新田一族、清和源氏の流れを汲むお方だ」

「それでは何故に、松平を称した」

「松平氏を名乗るは、戦国の世を生きるため。戦略というものだ」

「どういう戦略だ。北朝の足利を憚ったのではないのか」

「そうではない。実は松平元康(まつだいらもとやす)は家康公ではないのだ」

「どういう事だ。それでは家康は、一体誰だ」

「世良田元信(せらだもとのぶ)だ」

「世良田元信」

「新田の支流に徳川、世良田、江田の三流があるのだ。新田義貞は、鎌倉に尊氏を攻め込むに当たり、尊氏に与する支流の一族を討って出たのだ。家康公の御父上は、江田の一族で、下野国(しもつけのくに)都賀郡(つがのこおり)小野寺林に隠れ、修験者となられたのだ」

奴の法螺(ほら)話が始まった。

「家康は、下野で生れたというのか」

「そうではない。家康公は、駿府(すんぶ)は宮の前のお生れ。生母様は於大の方(おだいのかた)様だ。御父上は諸国を放浪された」

「於大の方とは、伝通院(でんづういん)の事か。伝通院は、確か水野家の出であろう」

「そういう事になっている」

「そういう事になっているとは、どういう事だ。家康の母は伝通院ではないのか」

「だから、そういう事になって居ると申したではないか。於大の方（おだいのかた）様は、尾張の豪族・水野忠政（ただまさ）の娘で、父上の御意向で、三河の豪族・松平広忠（ひろただ）に嫁がれ、竹千代こと家康公をお生みになられたという事になって居る」

「なつて居るとはどういう事だ」

「なつて居るからなつて居るのだ。水野家では、於大の方様の兄上の水野信元（のぶもと）の代になると、松平家の主君である今川家と絶縁し、織田家に従った。それで、於大の方様は、松平広忠から離縁され、水野家に戻られ、程なくして、阿古居（あぐい）城主・久松俊勝に再嫁された」

「それで、家康はどうしたのだ。孤児にでもなつたのか」

「家康公は駿府華陽院（けよういん）境内にて、御祖母様の源応尼（げんおうに）様の手で鞠養（きくよう）された」

「源応尼」

「名を於万（おまん）と申され、土地の者は觶（ささら）者というも、源三位頼政公の裔孫（えいそん）。幼少の家康公は、大河内源三郎殿の庇護を受けられた」

「大河内源三郎とは、何者だ」

「於万（おまん）様の甥御様だ」

私は笑った。

「そのような事で、竹千代は家康ではないと言うのか。それでは、幼名を竹千代と言っている松平元康は何者だと言うのだ」

「松平元康は三河の豪族の松平広忠（ひろただ）のれっきとした子。駿府は宮が崎の邸第（ていだい）で今川の質子となつた者。父広忠逝去に及び、十二にして家を継ぎ、今川義元の媒（なかだち）で関口氏の娘を娶（めと）り、竹千代と亀姫をもうけ、岡崎城主となつた」

「それではどうして、お主は徳川家康を世良田元信（せらだもとのぶ）などと言うのだ。その世良田元信はどの様にして天下を取る事が出来たのだ」

「松平元康が今川義元より上洛の先陣を承るや、家康公は宮が崎の邸第にあつた竹千代を連れ出し、尾州に赴き信長公に進めんとされたのだ」

「鷹（ささら）者に何故に、そのような事が出来る」

「大河内源三郎殿の妻は、竹千代の乳母」

「乳母が何故に、そのような事をする」

「鎌倉幕府にても、執権北条貞時（さだとき）の乳母の夫の平頼綱（よりつな）が、外戚の安達泰盛（あだち やすもり）をなきものにしたのだ。徳川も似たようなもの。竹千代を連れ出し、元康が一類・家臣の狼狽を誘い、元康が出でるを待ったのだ」

「お主は、そのような事で松平家に乗っ取れると思つて居るのか」

「家康公股肱（ここう）の臣、石川四郎、阿倍四郎五郎、酒井忠次、大久保忠世」

「それで、元康は出でたのか」

「松平は今川との旧好を重んじ、一子を棄てても節を屈しない。惛介（けんかい）不屈の氣象は、流石に三河武士だ。家臣も門閥者流の通弊、眼識ありて時事に通曉（つうぎょう）する者なし。松平元康、冥頑（めいがん）悟らず、自ら

夷滅(いめつ)を招いたのだ」

「夷滅」

「往昔、朋と橋下に相会せむ事を約し、橋下に至りて待つに洪水至る。約に背(そむ)かむ事を怕(おそれ、橋柱を抱きて、溺れて死す」

「何の事だ」

「誰が東風競わず、中原の鹿、誰が手に帰するかという事だ。家康公にも誤算があった。岡崎兵と戦わば、織田氏は応援するものと信じて居られたが、信長公と内通せし水野信元殿も動かれない。それで轍(わだち)を改め、松平元康に申し出られた。山中の一城を降さんと。後世、加茂郡山中が徳川家発揚の地と称せられたのは、このためだ。この時から、家康公は、世良田二郎三郎元信と名乗られたのだ」

「それで、どのようにして松平家に乗ったのだ」

「事は、森山の宿陣で起きた。織田氏は桶狭間の一戦後も、清洲城中に屏息(へいそく)。織田と通せし西三河の各城も向背を変じ、松平元康の指麾(しき)の下に立つようになった。森山の宿陣にて、家康公の忠臣・安倍貞吉が、織田家に内通するものと嫌疑を被った時、息子の安倍弥七郎(やしちろう)が、松平元康に斬り付けたのだ。往昔、駿府は安倍市といいし所。家康公は松平元康の喪を秘し、尾張東春日井郡森山の宿陣から本国三河に立ち返り、菅生山に松平元康を茶毘(だび)にふし、一本松を植えられたのだ。今は清康公の墓所と称されて居る所だ」

「それで世良田元信が、松平元康になりすましたと言うのか」

「そうだ。この時、名を家康と改められ、松平家康となられたのだ」

「竹千代は、どうした」

「竹千代は信長公の猶子（ゆうし）とし、信康と称し、徳姫を娶（めと）られた」

「信康は、家康の子ではないのか。秀忠は」

「秀忠は、家康公の御子だ。母堂様は、西郷の局（つぼね）。遠州佐野郡西郷村美人谷に居られたお方だ」

奴は真顔で言った。

「お主は、何時から戯作者の仲間になった」

「何の事だ」

奴は恍けた。

「僕は真面目に話して居るのだ。誰がそのような話をした」

「重野安繹（しげの やすつぐ）殿が、ある方から聞いた話だ」

「そのような話をするから重野殿は、使節団から外されるのだ。岩国藩では、そういう話になつて居るのか」

「君が、家康公を新田の末裔ではないと言うからだ」

「お主に加勢せよとは言つては居らぬ。戯作者は、下心ある者。吉川は毛利を欺き、徳川に付いた家柄。家康を辱めておいて、お主は何を言わんとして居るのだ。木戸先生への当て付けではないか。橋の下で溺れたなどと」

「そのような事、何時申した」

「それでは、何だ。松陰先生への当て付けか。觔者（ささらもの）などの事を申して。お主は、久子殿が姦通の罪を犯し、野山獄に入られたと思つて居るのだろうか」

「僕が何時、そのような事を申した」

「それでは何故に、觔者（ささらもの）の事など言う」

「そう向きになるな。元来、鯨者と申すは、断頭の土壇(どだん)に刀を洗い、梟首(きょうしゅ)の架下に夜を守りし者。女性は市人の門に踊りて錢を乞い、比丘尼(びくに)となりては、血腥(ちなまぐさ)き生首を携持し、軍門に入り献誠(けんかく)実檢を司る者。子女をして家を継がしめるは、それこそ、勤王の誉というものだ」

「勤皇の誉」

「後に説教者となりて、三味線に合わせて説教を語り、勧進せし者。豊後節(ぶんごぶし)、義太夫節(ぎだゆうぶし)、文弥節(ぶんやぶし)も往古は説教節(せつきょうぶし)。高杉先生は、三味線を弾かれたと聞いて居るが」

「お主の説教はもうよい。お主に加勢して貰わなくとも、よいのだ。家康が新田義貞公の末裔とは思えぬと言っただけの事だ。それがお主の手か」

「何の事だ」

「家康を修験者か乞食(こじき)坊主の輩にしておいて、新田義貞公を兇徒(きょうと)に仕立てる。戯作(げさく)としては面白い筋書きだ。草履(ぞうり)持ちの秀吉と乞食坊主の家康が、天下を二分して争うのだからな」

「何も僕が新田義貞を兇徒(きょうと)に仕立てたわけではない。新田一族にも尊氏に与する者もあつたと言っただけだ。ただ、義貞は武人、尊氏公とは違ふ」

「どう違ふと言うのだ」

「義貞を梟首(ひいき)にされた後醍醐帝は、流刑地の隠岐島(おきのしま)を出御されるや、伯耆国(ほうきのくに)に名和長年(なわながとし)を召し、出雲大社にて綸旨を奉拝させたのだ」

「出雲大社で綸旨を奉拝させて、何が悪い。尊氏などに政を任せておいたら何を仕出かした事か。高師直などは、王なくして叶うまじなら木で造るか金で鑄ろと言つたではないか。お主は、五条磧(かわら)に足利三代木像の首が、晒

(さら)されたのを知らぬのか。お主は東国の者の戯(ざ)れ言を真に受けすぎるのではないか。お主は何と言うたか、覚えて居るか」

奴は不快な顔をした。

「勿論だ。『覇府(はふ)の立ちてより、天子威福を関東に譲り、南面して己(おの)れを恭(うやうや)しみたまふ』。後醍醐帝も義貞の武威に慢心される事なく、正成(まさしげ)の進言を容れ、尊氏公を召し抱えられて居られたなら、正成正季(まさすえ)兄弟も湊川(みなとがわ)で死なずに済んだのだ」

「またそのような戯れ言を」

「戯れ言ではない。楠木正成は後醍醐帝の夢に、『樹の陰に南(南)へ向(向)へる座席あり』と暗示された方。戦時においてあの知略。太平の世ならば富み栄えた事であろう。和泉河内兩國の守護として悪党を動かす事、常人の及ぶ所ではない。それだけではない。義貞が尊氏公と手を携えて居ったなら、畿内の太平たる事、後世の語り種になっていた筈だ」

奴は、また訳の分からぬ事を言った。

「もうよい。それより彦根藩が尊皇藩であるのか、ないのか教えて呉れ」

奴はまた、何事かを思案して居った。

「君は『湯(とう)、桀(けつ)を放ち、武王、紂(ちゆう)を伐つと。諸(これ)ありや』というのを知って居るか」

「『孟子』梁惠王(りようけいおう)の湯武放伐(とうぶほうばつ)の事だろう。それがどうした」

「漢土の流儀では、優れた人が選ばれて君主に命じられるが、その者がその職に適さず人民を治める事出来なければ、天が命じた主旨に基づいてその者を伐つ」

「それと彦根藩が勤皇藩である事と、どういう関係があるのだ」

「我が国は、天つ神の血すじを継ぐお方がこの大八州を永く守る国であるから、漢土とは違う。だが、征夷大將軍は天朝から命ぜられたものであるから、その職を疎かにした場合、これを廢してもよい」

「当然じや」

「しかし、天朝の命を承る事なく、長州藩のように勝手に將軍の職務怠慢の責任を追及するような事を行えば、燕（えん）を以て燕を伐つものとなり、春秋に義戦なきものになる。松陰先生の教えだ」

「何が言いたいのだ。それが松陰先生の教えと言うのか。燕を以て燕を伐つとはどういう事だ」

「燕軍が大挙して斉（せい）に攻め込んで来た時、田単（でんたん）が一計を案じた事があった」

「どのような計略だ」

「牛の角に刃物を結わえ、脂をそそいだ葦（あし）を尾に縛り、その端に火をつけ、夜陰に乗じて城壁の穴から放り出した。燕軍は竜が現われたと驚き慄（おの）き、迷惑った」

「どうして、竜が現われるのだ。竜など何処に居る。この世に竜など居ると思つて居るのか」

「そうではない。五色の竜の紋様を描いた赤い絹の衣を、牛に着けておいたのだ。それと同時に、城内にあった者が、銅の器を叩いて大声を上げた。その声は、天地をも揺るがさんばかりにだ」

「それが田単（でんたん）の策か」

「そうだ。斉国では、無実の罪で死んだ女の怨霊が、天神に訴えると、雷鳴電光のもと雷があり、驚いた景公（けいこう）は台から落ちたという話もある」

「それで、燕軍が退いたというのか。また、大袈裟（おおげさ）な事を言う。それが、燕を以て燕を伐つという事か」

「そうだ。燕でも、鄒衍（そうえん）が恵王（けいおう）に忠義を尽し仕えていたが、左右の者が彼の忠義をねたみ、恵

王に讒言(ざんげん)した。鄒衍(すうえん)が獄中で天を仰いで泣くと、天が感じ、盛夏に霜を降らせ、悪を戒めたのだ」

「それが松陰先生の教えと言うのか。怪しいものだ」

「岡本黄石(こうせき)にも会った事もあるぞ」

「何処(どこ)でだ」

「旗差物(はたさしもの)を押し立てて、笛太鼓をヒュードンヒュードン鳴らして遣つて来た」

「冗談言うな」

「本当だ。長州征伐というて。勅命だからな。井伊大老が殺された時、事を穩便に済ませたのが岡本だ」

「お主は、松陰先生の教えを曲解して居る。何処(どこ)へ行く」

「模擬(もぎ)裁判だ。回状を見て居らぬのか」

「雨が降つて居るではないか」

「中甲板で行うのだ」

「裁判官は木戸先生なのか」

「そうだ。木戸先生が裁判官だ」

「弁護人の事はどうなった。安藤が弁護人なのか」

「そうだ」

「お主は、安藤太郎が何者か知つて居るのか」

「伊藤先生から聞いた。箱館(はこだて)で君等と一戦交えたのだらう」

「木戸先生は、承知して居られるのか」

「勿論だ。お考えあつての事だ」

中甲板に行くと、随員始め留学生が傍聴席に詰め掛けていた。密会を遂げた二人が呼び出されると、正面の裁判官席に木戸先生が着かれた。木戸先生が事実の取り調べを行うまでもない事と申されると、被告人からも異議はなかった。二人が真つ赤な顔をして下を向いていると、安藤が立ち上がり、何事かを語り始めた。

「野合は天地自然の結果で、人間の力を以て如何(いかん)とも仕難い事でありますから、今更荒立て之(これ)を罰するという事は出来ないものです。航海の礎(いしずえ)は、羅針盤であるが、夜這星(よばいぼし)に襲われた時には、さしもの羅針盤もその用をなさなくなるものです。天変で如何とも人力で防ぐ事は出来ないものです。夜這星が現れて羅針盤の効用を妨げたと言うて、天を罰する事は出来ないのです。被告人兩名は人間社会の夜這星(よばいぼし)であつて、自然の情理が合体して現れたものでありますから、斯(か)やうな者を罰する事になりますと、恐らくこの傍聴席に居る人の総てが、是(これ)から先の長い旅行中に於いて悉(ことごと)く被告人になるような事が出来ようと思ひます」

安藤は盛んに意味不明な事を申し立てた。伊藤先生も好い気なものだ。幾(いく)ら神戸の海軍塾からの顔馴染(かおなじ)みだといつても、箱館(はこだて)の賊軍(ぞくぐん)と一緒になつて裁判などを。木戸先生までも愚かな事をされる。

「安藤は何を言つて居るのだ」

「被告人の弁護をして居るのだ。よいから、見て居れ。そのうち、分かる」

奴は真面目な顔をして、模擬裁判の様子を見守っていた。模擬裁判は伊藤検事の申し立てに移り、伊藤先生も被告の無罪を主張し始めた。

「本件は、力の弱い夜這星（よばいぼし）が力の強き夜這星を訴えた事から起きたもので、この夜這星を処分する事になりますと、その力の弱い夜這星も傍聴席から引出して処分しなければならないようになりますので、本件を申告してきた力の弱い夜這星の趣意にも違ふ事になります」

伊藤検事の申し立てが終わると、傍聴人席から一斉に笑いが起きた。福地先生は顔を真っ赤にして、周囲の嘲笑を一身に受けていた。木戸先生も頻（しき）りに笑いをこらえて居られたが、真面目な顔をして、被告二人に無罪を申し渡すと、改めて被告人を諭した。

「再犯の場合は嚴重に処分を致すから、再び斯（か）ような事を為す事は許さぬぞ、宜しいか」
模擬裁判が終わると、福地先生は一同から揉（も）みくちやにされていた。

「木戸先生は、ハシヤギすぎではないか。この様な失態、世間に知れたら、後世恥をさらす事になりはしまいか」
「心配はない。大久保先生が、釘を刺されて居られる。君は、何時から心配性になった。夜這（よば）いなど罪に問えば、皇国の民、挙（こぞ）つて罪人ではないか。安藤さんの申す通りだ。考え過ぎだ」

「僕はそのような事で心配して居るのではない。僕が心配して居るのは、皇国の大事だ。大嘗祭（だいじょうさい）の事だ。新帝天祖の大業を継承したまふ所以（ゆえん）の皇国固有の大札に何故に、夷人を迎え入れたのだ。それこそ罪というものではないか」

「天長の恩寵は、洋の東西を問わないものだ。東京城には各国公使が招かれて居るのだ。船中の異人を招いて、杯を掲げたとして、何の罪になるのだ。古来より我が皇国の人民が、五穀を都に送ったのも、天神に供（きょう）じ奉（たてまつ）

らんがためだ。君は、その様な事で憤る前に、為す事があるのではないのか」

「何をだ」

「新嘗祭(にいなめさい)が再興された経緯を知る事だ。古代より行われていた新嘗祭も平安の貴族はないがしろにし、室町の後花園天皇(ごはなぞのてんのう)の御代を最後に執り行われなくなっていたのだ」

「それは北朝方の御代なればではないのか」

「そうではない。後花園天皇は、学問に秀でられ、ことのほか和歌に造詣の深いお方。太田道灌(おおた どうかん)の和歌を聞かれ、草深き関東にもかような和歌をつくる者あるかとご賞賛されたのだ」

「それでは何故に、後花園天皇(ごはなぞのてんのう)の御代を最後に新嘗祭(にいなめさい)が執り行われなくなったのだ」

「後花園天皇の御代の嘉吉(かきつ)三年、吉野朝の復興を謀る輩が土御門内裏(つちみかどだいら)に夜襲をかけ、三種の神器の剣璽(けんじ)を奪うような事があったのだ。その二十年後の寛正(かんしょう)五年、後花園天皇は皇位を譲られ後土御門天皇(ごつちみかどてんのう)の御代になると、応仁の乱が起き、世は戦乱の世となったのだ。

この後花園天皇の御代から途絶えていた新嘗祭(にいなめさい)が再興されたのが、桜町天皇の御代の事だ。この新嘗祭の復興は、吉宗公の御尽力の賜物なのだ」

「お主はそれでも尊皇家か。幕府が朝廷を蔑(ないがし)ろにして来た事を知らぬのか」

「それでは聞くが、君は三日夜餅(みかよのもち)の事を知って居るか」

「何故に、そのような事を聞く」

「君が真の王臣かと思つての事だ。駒下駄(こまげた)など履いて、御機嫌だから」

「王臣気取りで何が悪い」

「駒下駄は御免と云って、婦女子の履物である事を知っての事か」

「また、戯(ぎ)れ言を言う」

「戯れ言ではない。『武蔵野や草より出る時鳥(ほととぎす)』」

「何の事だ」

「馬と牛は草をはみ、草地は畑となる」

「当たり前ではないか」

「深草に住みたる女は、野とならばと嘆いたのだ」

奴はそう言うと、大使の部屋に行ってしまった。側で様子を窺っていた久米先生が、声を掛けて来た。

「御相方は、御見識が深い」

「そうでしょうか。私などの無学に付け込んで、知識をひけらかして居るだけです。御免などと言って」

「駒下駄(こまげた)は、元は婦女子の履物なのです」

「それは本当のですか」

「御所の拝観は、草履(ぞうり)でなされたのですが、雨の降る時だけ、草履の下に木を付け、草履と見做し、御免されたのです」

「そうなのですか」

「君達若い者が無学を恥じる事ではないのです。政府高官とて似たようなものですから。年長の西郷さんすら、衣冠束帯(いかんそくたい)には右往左往したのです。尤も、西郷さんの場合は、あの肥満。西郷さんが肥えだしたのは、大

島在島時からだそうですが、西郷家は元は肥後菊池家の家臣。豚の脂が大好きで、あのような巨漢になってしまい、参朝にも往生したのです」

久米先生は気休めを言ってくれた。

「それでは、三日夜餅(みかよのもち)の事は」

「皇后陛下・藤原美子(はるこ)様、女御(にようご)入内の儀にても、帝は戌の刻(いぬのこく)に御手水間に出御され、御挿鞋(ごそうかい)にて、夜御殿(よんのおとど)西戸より御帳の中に入られ、帝の外戚であらせられる中山忠能(ただやす)卿夫妻が、侍して御衾(おふすま)を覆いたてまつり、三日夜餅(みかよのもち)を供せられたのです」

久米先生は微笑まれ、中甲板(ちゅうかんばん)を後にされた。久米先生も人が悪くなられた。御見識が深いなどと。此度(こたび)の大嘗祭(だいじょうさい)は、初めて甲斐(かい)安房(あわ)両国に齋田(さいでん)が點定(てんじよう)され、東京城に設けられた悠紀殿(ゆきでん)主基殿(すきでん)には、古式床しく柴垣がめぐらされたのだ。皇国の稻穀(とうこく)は、天照大神(あまてらすおおみかみ)、天上の挾田(さなだ)長田(ながた)に殖(うまわ)しめ給ひしものを皇孫降臨の際、下し給へるものなれば、その神恩を忘れ給わず、新帝、豊明節会(とよあかりのせちえ)において高御座(たかみくら)に御し親ら聞食(きこしめ)され、天上の齋庭(ゆにわ)の稻穂を群臣に賜うものなのだ。

奴のようなハイカラが、大きな顔をしていては、皇国の先行きも危いものだ。何しろ、外夷の王が身につけている印章の文字が意味する所は、世界一渾(こんいつ)。婦人が五人の子どもを育てている様は、天主教の教えを五大洲にひろめ統一しようというもの。水戸の斉昭(なりあき)公は、御身の危険も顧みず、幕府に警鐘を鳴らされたのだ。

気が付けば、中甲板(ちゅうかんばん)には誰一人居らなかつた。模擬裁判の喧騒が嘘のように、静かであった。雨は

止まず、曇り硝子の窓に雫が落ちた。

八

夜、川原の部屋を訪れると、川原は私を待ち侘びていたようであつた。テーブルの上にはグラスが置かれてあつた。川原は葡萄酒(ブドウ)酒をグラスに注ぐと、チーズを差し出した。

「待ち人、来たりだ。これなら乳臭くないから、貴殿でも大丈夫だ。滋養をつけるといい。これぞ、まさに醍醐味(だいごみ)というものだ。尤も貴国は、平安の昔から牛を朝廷に貢上されて居る国柄ゆえ、さしたる珍しい物でもないか。開拓使でも西洋式農場をつくろうとして居る。帝も大いに乗り気だ。下田に居つたハリス殿などは、土地の者に山羊(やぎ)を飼う事を勧めて居つた。山羊なら下田のような岩場でも育つ」

昨夜の興奮は影を潜め、川原は穏やかに言つた。

「ハリスと顔見知りなのですか」

「將軍謁見の際、初めて会つた。江戸入府後の日曜日の事だ。お話は、ヒュースケン殿とオランダ語でした。その後、数回、下田の玉泉寺(ぎよくせんじ)でお会ひした。ハリス殿は、千代田城内の一室にて聖書を読み、祈祷(きとう)文を唱えられた事を矜持(きようじ)として居られた」

「幕府は、そのような事を許したのですか」

「幕府は、踏絵を廃したのだ」

「それで、ハリスはどのような男でしたか」

「好奇心旺盛な方であった。先ず、幕閣の服装に興味を示された。両肩は翼を付けて居るようだと。冠(かんむり)に至っては、キルマーノック帽のようだと」

「キルマーノック帽とは」

「スコットランド人が着用している物のようだ」

「それだけですか。何か変わった話は」

「どういう事だ」

「唐人お吉の話です。下田辺りには、夷人の子供が居るといふ話ではありませんか」

「そういう事か」

川原は納得した。

「ハリス殿は、敬虔なキリスト教徒だ」

「耶蘇(やそ)教徒が清廉だといふ証が、どこにありますか。出島のオランダ人の好色な事、このうえもない事と聞いて居ります」

「それはハリス殿と別の話だ。下田の役人が申して居った」

「何をですか」

「ハリス殿は日曜日に体を休ませると。散歩もせぬと。ペリーは、そのような事は、頓着(とんじゃく)しなかつた。ハリス殿が下田に来られたのは、御歳五十三の時だ。そのような歳ではあるまい」

「好色家には歳は関係ありません。火のないところに煙は立たぬと言うではありませんか」

「それは、幕府の役人が仕組んだ事だ。神話を作るためだ」

川原は思いもよらぬ事を口にした。

「神話？大工の許婚(いいなずけ)に蛭子(ひるこ)を授けて、どのような神話が生まれるのでしょうか」

「貴公がそう申すのも無理のない事だ。拙者(せつしゃ)も一時、疑った。だが、ヒュースケン殿からハリス殿の話を書くにつけ、ハリス殿がとてもそのような事をする方とは思えなくなった」

「ヒュースケンは、どのような話を」

「日本人は家屋では履物を脱ぐと申されて居られた。ハリス殿は、なかなかの学者であった。日本の座敷は神聖な所だと納得されたのだ」

「他愛もない」

「聖書の一節にもあるのだ。それに風呂だ」

「風呂？やはり好色家ではありませんか」

「そうではない。日本人は世界でも稀に見るほどきれい好きだと」

「そのような御世辞に乗せられるから、条約交渉を誤るのです。新政府は夷人に侮られると言うて、混浴を禁じたのです。幕府が象山(しょうざん)先生のご忠告に耳を傾けておけば、新政府も夷人から要らぬ侮りを受けなかつたのです。松代藩などは逸早く湯女を厳禁にしたではありませんか」

「そういう事ではない。ハリス殿は賞賛して居られたのだ」

「やはり好色家ではありませんか」

「ハリス殿は申されたのだ。日本の浴場では、男女が身に一条をまとわず平然として居る。しかも、入浴を終えると、何事もなかったかのように帰ると」

「そのような事に何故に、感じ入るのですか」

「西洋ではあり得ない事だからだ。ハリス殿は、日本人の道德の堅実なるを知ったのだ。西洋人もこの澹泊(たんぱく)なる感情に学ぶ所あると」

「本当にハリスはそのような事を言ったのですか」

「彼の地でハリス殿をお尋ねしようと思つて居る。貴殿も一緒に来てはどうだ。さすれば、貴殿の疑念も晴れよう」

「ハリスは、生きて居るのですか」

「存命だ。ペリーの家にも行くこうと思つて居る」

「ペリーも生きて居るのですか」

「ペリーは、万延(まんえん)の使節がアメリカに行く二年前に亡くなつて居る」

「ペリーの家など訪れて、何をなさろうと申されるのですか」

「ペリーの息子に諫言(かんげん)致す」

「諫言。あの傲慢な男の息子に諫言など致して、何をなされようというのです」

「新見・村垣両使が、ペリーの家を訪れた時、二人の息子は不在であつた。当時、長男は船将次官、次男は広東在勤の領事。代わりを為替役人をして居つた女婿(じよせい)の家で、贅(ぜい)を尽くした歓待を受けた。器物はすべて金銀であつたというから、その程が分かる。ニューヨーク州一番の富豪という話だ」

「成金男と決別せんとでも申されるのですか。諫言(かんげん)を聞かぬ時は、川原殿は腹を切られる覚悟は御有り

なのですか」

「拙者も武士の端くれ。所で貴殿は、リベリアという国を知って居るか」

川原は妙な事を聞いて来た。

「何かの書物で読み聞いた覚えがありますが。何故に、リベリアなどの事を」

「四海万国に自ら帝号を称するものに、モゴオル、ペルシヤ、トルコ、ゲルマン、ロシアがある。外にシヤム、ジャワ、スマトラもあるが、シヤムは金持ちなれど、兵力弱し。ジャワ、スマトラは小国。アフリカにはエジプト、リベリアの二独立国があり、他にモロッコあれども帝国の名に値しない。歐洲にてはフランス、イスパニア、スウエーデン、アンゲリアの西夷あれど、その建国の祖はゲルマン。ゲルマンは西洋諸国から見れば、衰え東遷した周のようなもの。ロシアも、曾（かつ）てフランスと肩を並べるゲルマンなるも、悪勢（おぜ）旺となり、新たに帝号を称するようになった。これが、四海万国の大勢というものだ」

「それで、リベリアがどうだと申されるのですか」

「ペリーは、アメリカにいた黒人奴隷のためにリベリアに国を建てたのだ」

「ペリーは、アフリカにも節介をやいたのですか」

「世界万国の蒼生を救済するためだ。世界を混同し万国を統一せんとしたのだ」

「それは口実というもの。西洋諸国は、南洋諸島を併せ、アジアにも手を入れ、領土を蚕食して居るのです。アメリカも荷担して居るのです。川原殿は騙されて居られるのです」

「拙者は諫争（かんそう）致すのだ」

「諫争など致しても、耳を傾ける輩ではありませぬ。聡明な川原殿のお言葉とも思えません。今宵は、そのようなお

戯(たわむ)れを聞きに参つたのではありませぬ。井伊の話を聞きたく参上したのです」

「何故、大老の話を聞きたい」

「長州藩の面子に関わる問題なのです」

「その前にだ。貴殿に聞きたい事があるのだ」

川原殿は私の氣勢を遮るように言った。

「何でしょうか」

「貴殿は以前、筑前人には氣を付けろと申したな」

「それは、奴の口癖です」

「どういう事か」

「平野先生の事で、口論となりました」

「平野次郎がどうしたのだ」

川原は何時になく挑発的な口調であった。

「但馬国(たじまのくに)生野の義挙の事です。平野先生は、三条公と真木殿に諮り、大和行幸の事を推し進められた方なのです。文久三年八月の大和天誅組(てんちゅうぐみ)挙兵に応じて、西国に難を逃れて居られた七卿の御一人であられた沢宣嘉(のぶよし)卿を擁立され、但馬国(たじまのくに)生野の義挙を起こされたのです」

「それで、お相手は平野がどうしたというのだ」

「但馬生野の義挙の事は、平野先生の主唱ではないというのです。奴は真相を知らないのです。生野の義挙の事は、中山前侍従忠光(ただみつ)殿が兵を大和に挙げる事を我が藩の河上彌市(やいち)殿が聞き及び、平野国臣(くにお

み)先生に諮り、兵を挙げることにしたのです。当時、長州に居られました七卿の御一人であられた沢宣嘉(さわのぶよし)卿が但馬に奔(はし)られ、兵を生野銀山に挙げ、大和挙兵に応じたのです」

「それで、お相手は誰が提唱したと言つて居られるのだ」

「戸原卯橋(うきつ)という筑前秋月藩の者だということです。川原殿は存じて居られるのですか」

「存じて居る。世人は、平野次郎が主唱して、戸原卯橋は之(これ)に副(そえ)たるものと言つて居るが」

「それでは、河上彌市(やいち)殿が平野国臣先生に諮つたという話は、嘘と申されるのですか」

「それは、嘘ではない。本当だ。河上彌市殿は、奇兵隊(きへいたい)総督ではなかったのではないのか」

「そうです。河上彌市殿は、高杉先生の後を継がれ第二代奇兵隊総督になられた方です。それでは、但馬生野の義挙の主唱者は戸原卯橋(とほら うきつ)殿だという奴の話は嘘なのですね」

「嘘ではない。但馬生野の義挙の主唱者は、戸原殿だ」

「そのような話、聞いた事がありませんが。戸原殿とは、何方(どなた)なのですか」

「秋月藩黒田侯侍医の息子だ。但馬(たじま)生野の義挙で姫路明石出石(いずし)豊岡藩兵に包围されると、平野次郎は再挙論を主張するも、戸原殿は逃去能(あた)わざるを悟り、快戦決死論を主張されたのだ。戸原殿十七人は、平野次郎と別れ、山口村妙見山下に至り、自害された。戸原殿は、妙見堂の板壁に辞世の歌を遺された。

『思ひ立事は成ねと武士の心正しき末の道かな』

貴殿のお相手は、中々の見識。戸原殿は死後、伊蘇志(いそし)神霊の号を賜い、秋月藩は招魂社(しょうこんしゃ)を創立し、殉難の霊を祀つたのだ。妙見山にても山口村招魂社(しょうこんしゃ)の姓名標札には、戸原卯橋殿を以て

河上彌市殿の上とし、第一主座に置かれて居る」

「そのような事がありましたでしょうか。但馬生野の義挙の事は、平野先生を始め河上彌市殿の同志が生野に至り、代官所を襲ったのです」

「そういう事ではないのだ。貴藩の河上彌市殿も平野次郎と別れ、妙見堂にて最期を遂げられて居るのだ。秋月藩にて王政復古勤王の論を主唱したるは、戸原卯橘殿と海賀宮門（かがみやと）殿を以て嚆矢（こうし）として居るのだ」

「海賀宮門殿？その方も聞いた事がありませんが」

「文久三年四月、伏見寺田屋の件で、鹿児島に赴き大久保ら同志と議せんとするも、その途中にて肥前の中村主計（かずえ）殿と但馬の千葉郁太郎（いくたろう）殿と共に大きな樹に括り付けられた儘（まま）殺された方だ。当時、本藩福岡藩の藩論は正邪に分かれ、海賀宮門殿ら秋月藩の正義の徒は擯斥（ひんせき）されたのだ。御遺体は、同志の方によって日向（ひゆうが）の細島にもたらされ、島民の手で篤く葬られたのだ。貴殿のお相方に尋常ではないものを感じるのは、拙者だけではあるまい。外に何か申されて居らなかつたか。よければ、話して呉れぬか」

「奴の話は、何時（いつ）も浮世離れしているのです。宜しいのですか」

「浮世離れは、何時（いつ）もの事ではないのか」

奴の話でよければと、今夜は私が話をする事になった。

「三条公を始めとする五卿が、長州から太宰府にお移りになられました。その頃、高杉先生は筑前に逃亡され同志を募って居られました。高杉先生は野村望東尼（のむらもとに）という老女のもとに身を潜めて居りました。その望東尼（もとに）が申すには、西郷さんの尽力で薩州も大いに正義のいろをあらわし、かの君の御ためにお命を捨てられる事だと。とは言ってもそこは女性（によしやう）の事、三条の君は源氏物語を偲び、須磨の浦を（こ）こと思つてと言うので

すから、何とも浮き世離れた話です。大宰府には、昔の面影などないのです。奴も、大江殿という所は荒れ果てて松ばかりであったと申して居ります」

「お相手は何故、そのようなお話をされたのか」

「奴の真意など分かり兼ねます。何しろ、新政府には倒幕を果たした後から来て、尊皇論に便乗した輩が随分居ります。奴もその一人です。」

藩主の黒田斉溥（ながひろ）公は、俗論家の強い抵抗に会い、太宰府の尊攘派の志士を幽閉してしまつたなどと言つて居ります」

「俗論家の抵抗とは、どういう事か」

「福岡藩には、勅勘の罪人を領内に止めておくと、種々策動する者も居るから、速やかに策動の禍根を断絶し、国を清めて安寧を図れとの論が起つたそうです。その事で斉溥（ながひろ）侯は、五卿がそのまま長州に居られては、長州藩のためにも五卿のためにも宜しくないと申されて居られたそうです。その斉溥（ながひろ）侯も、俗論派の動きはどうする事も出来なくなり、福岡藩の正義派は斬罰に処せられ、望東尼も姫島に流竄（りゆうざん）されたと言うのです」

「姫島」

「玄界灘に浮かぶ孤島です。奴は見上げた勤皇心であると、涙して居りました。あまりの事に、呆気（あつけ）にとられてしまいました。京では多くの勤皇の志士が倒れたというのです。唐では太宗（たいそう）が起つた時、何やら婆さんが居つて、豪傑連がその婆さんの所に向いたそうです。しかし、ここは皇国です。唐には女人が勤王という事はあるが、皇国にはそういう話は聞いた事がないと、奴に言うてやりました。すると『花になく鶯（うぐいす）、水にすむ

蛙（かわず）の声をきけば、生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける』というのを知らないのかと言ひ居ります。それがどうしたと言うと、奴は情けないという顔をし、昔の事を偲べと言ひ居ります」

「尤もな事だ。貴殿は、蘇東坂（そとうば）の事を知らぬのか」

「存じませぬ。その蘇東坂（そとうば）が何か」

「蘇東坂（そとうば）は書画にても、空に煙雲が流れ行くのを見、鳥の鳴くのを耳に感ずるような自然な感情で接すれば、その書画なくとも、淡々とした気持ちでおられると申されたのだ」

「そうでしょうか」

「さすれば、天地を動かし、理（ことわり）をも待たずして、人倫をも感ぜしめ、鬼神をも泣かしむる事も出来るものだ」

「そのそんな事より、大老の話を伺いたいのですが」

「よいから、もう少し話して呉れぬか」

「そうですか。では、高杉先生は恩人をこのままにしていると、四境戦争の最中、奇兵隊員にこの老女の救出を命じられました。旧福岡藩士等六名が船で姫島に渡り、幽閉されて居った望東尼（もとに）を馬関（ばかん）に連れ出ししました」

「感動的な話ではないか」

「そうでしょうか。女性（によしよ）の道楽にも程があります。松陰先生は、『源氏』『伊勢』の俗書にある淫らな様を嘆かれたのです。『節母烈婦ありて、しかる後に孝子忠臣あり、楠・菊池・結城・瓜生（うりゆう）の諸氏において、われこれを見る』と申されたそうです。勤皇の志士のなかには、望東尼（もとに）に憤慨する者もあつたそうです」

「どういう事だ」

「望東尼（もとに）は白石正一郎殿の御家に世話になりました。白石家は、平野国臣（くにのみ）先生をはじめ諸国の正義の志士を匿（かくま）つた御家です。その白石の御家を望東尼は出ました」

「何か御不満でもあられたのか」

「高杉先生の計らいで、ある者の家に移りましたが、その者の家に移ってからは、望東尼（もとに）は極楽世界に生まれようだと申されたそうです。それもその筈です。望東尼が住まわつた四畳半の茶荘には源氏物語を描いた屏風（びょうぶ）が引き回してあり、炉火（ろか）にて寒さも知らず、机から硯箱（すずりばこ）、短冊（たんざく）、色紙（しきし）など望東尼（もとに）の所望の品でないものではありませんでしたから。高杉先生は望東尼が『数多のものふよりもふかき御あしらせ』と言われたのを聞きになり、お喜びとの事でした。

しかし、幸せな時というものは、そう長く続くものではありません。高杉先生は病の床に臥せられ、望東尼の看病の甲斐もなく、お亡くなりになりました。望東尼（もとに）も高杉先生の後を追うようにして亡くなりました。四境戦争の最中、戦勝を祈つて毎朝齋戒沐浴（さいかいもくよく）、絶食しての天満宮参詣、風邪を拗（こじ）らせての事でした。君公はわざわざ侍医を遣わせたりもなされました。臨終に際しては、君公から賜つた白羽二重の衣装に身を包み、瞑目（めいもく）されたとか。

奴から聞いた話は、こんな所です。このような話でよかつたのでしょうか」

「畏れ入った。このような感動的な話、そうあるものではない」

「そうでしょうか。雑談はこの位にして頂きたいのですが」

「そうか」

「井伊大老は尊皇家という話は、本当なのでしょうか」

「本当だ」

「それでは何故に、勅許を得ずして開国を」

「そこが幕府の幕府たる所以（ゆえん）だ」

「幕府の所以」

「大老が変節したのは、幕府の在り方が複雑だからだ」

「幕府の在り方」

「そもそも家康公は源義家公を祖とする新田源氏の一流。迫害を受けし有親（ありちか）・親氏（ちかうじ）父子は、長阿弥（ちようあみ）・徳阿弥（とくあみ）と号して時宗（じしゆう）僧となり、諸国を放浪の末、三河の地に身を寄せられた。時宗は一遍（いっぺん）上人が開祖。成島司直（なるしま もとなお）殿の話では、享和（きょうわ）二年に武蔵国多摩府中の称名寺（しょうみやうじ）の竹林より、世良田氏徳阿弥（とくあみ）親氏（ちかうじ）と書かれた墓碑が出てきたというのだ」

「家康の祖先は、三河の豪族松平太郎左衛門信重（のぶしげ）の婿養子となり、松平姓を称したのではありませぬか。それで徳川家は賀茂社の神紋・三つ葉葵（みつばあおい）の家紋をいただいたと」

「その話は、深慮を要するもの。徳川家の祖は、新田義重（よししげ）公の四男・義季（よしすえ）公。義季公は下野国（しもつけのくに）得川郷の領主となり、得川（とくがわ）四郎と称され、父上の所領の世良田（せらた）郷も譲り受けられた。家康公は、得の字を徳の字に改め、徳川を名乗られた。家康公は新田源氏の一流なるも、藤原氏を名乗られたのだ」

川原も戯作者の仲間であつたのか、可笑しな事を言った。

「家康が藤原を」

「そうだ。この事は、勸修寺家(かじゅうじけ)も承知の事だ」

「勸修寺家が何故に」

「岡崎に慶岳上人というお方が居られたが、この方が上洛して、近衛前久(このえ さきひさ)卿に家康公の叙爵(じよしゃく)を請われたのだ」

「家康が叙爵を」

「そうだ。近衛前久卿の執奏(しつそう)に依り、従五位下(じゅごいのげ)に叙せられたのだ」

「そのような事、朝廷が御許しになられたのですか」

「吉田兼右(かねみぎ)殿が、万里小路家(までのこうじけ)にて叙爵(じよしゃく)の先例を旧記(きゆうき)で調べられたのだ」

「先例」

「飛驒(ひだ)三木氏の叙爵の例だ」

「三木氏」

「近江佐々木源氏一派である多賀氏の末流だ」

「それでは、徳川は松平と関係ないと申されるのですか」

「そうではない。松平家の鼻祖は、三河国東加茂郡松平村より出でし者。陰陽師(おんみょうじ)にして、世々、藤原を姓とし、五々の桐を家紋とせし者」

「それが幕府の所以(ゆえん)と申されるのですか。井伊大老の変節と何の関係があるというのですか」

「井伊家の始祖・共保(ともやす)殿は藤原氏の底流。藤原冬嗣(ふゆつぐ)六代共資(ともすけ)に継嗣なく、遠江国(とおとうみのくに)井伊谷八幡社の神童に家系を伝えたのだ」

「藤原冬嗣(ふゆつぐ)とは、どういう方なのですか」

「施薬院(せやくいん)を復興し勸学院(かんがくいん)を置かれたお方。所で井伊家の家紋を存じて居るか」

「井桁(いげた)では」

「橘(たちばな)もある」

「橘」

「共保(ともやす)殿が生れし時、井戸の傍に橘の実が落ちて居ったという。都御所の正殿前にある木は、左近の梅転じて桜になるも、右近は橘。

井伊家は応仁の大乱には、駿河の今川に属し、直親(なおちか)殿は二歳の直政(なおまさ)殿を遺し、この世を去った。この遺児を引き取ったのが、家康公だ。井伊の赤備えは、家康公が長篠の戦にて武田勝頼(ただか)つより)を討ち破りし時、直政殿に命じて武田氏の遺臣らを添えて作らせしもの。

井伊家の茶華凡(ちやかぼん)も、『禁中並に公家諸法度』に天子御芸能の事、第一御学問也とある事ゆえ。家康公は和歌は綺語(きご)となるも、我が国の習俗だと申されて奨励された。幕府は、ペリー来航時に『泰平(たいへい)の眠りをさます上喜撰(蒸気船)、たった四杯で夜も寝られず』と揶揄(やゆ)されたが、徳川は太平の世を二百有余年続けたのだ。安政(あんせい)四年閏(うるう)五月、孝明(こうめい)帝は御新造なされた御茶室の和歌御会(ぎよかい)に、

『ときは木の陰を流るゝ水の音にこころすゞしき庭の面かな』
とお詠みになられた」

「川原殿は、茶華凡（ちやかぼん）武士が幕府の正しい在り方だと申されるのですか」

川原は笑った。

「茶は神農（しんのう）より興りしもの。孔門（こうもん）に君子（くんし）儒と小人（しょうじん）儒あるが如き、煎茶家（せんちやか）にては、文人茶と俗人茶がある。多くは、茶飲清事の真趣を解さず、俗人茶に陥るものだ」

「茶飲清事の真趣と申されますのは」

「古の茶道人は、湯会人とは天地よりも違うもの。道具名器を集め奢（おご）り楽しむ者は、目前の外道・天下の掟（おきて）に背き、身を亡ぼすものだ。禅より入るも、茶より入るも道は一つ。その真髓（しんずい）は、天地を貫通するもの。茶友というものは出来がたきもの。古き丸釜の口切に、得意げによく似たる四方の釜を差し出されても、おもしろからずもの。数奇（すき）と申す事も、道具の遠近をいうも、古人は言う。露地・数奇屋の掃除は、外の方より始め、追々、内の方に至るものと」

「どういう事でしょうか」

「松葉は初冬に敷き、春に余寒が去り、取り去るのが道理。敷松葉（しきまつば）は、苔（こけ）を守るもの。露地（ろじ）の道には、関竹・関石を置くもの。貴殿は存じて居るか。関竹は青竹十文字に組み、中を蕨縄（わらびなわ）・しゆる縄にて結び、別れ道の左右の樹木にもたせ置くものと。関石は飛石（とびいし）・畳石（たたみいし）の上に、手ごろの栗石（くりいし）一つのせ置くものと。露地（ろじ）は大切なものだ。往時、茶話に招かれし客は、身分に関係なく、露地門から入ったものだ。露地には内外の区別なく、腰掛も雪隠（せっちん）もなかった。貴殿は茶法を学びし者か」

「師あらずも、心得て居る積りです。松陰先生が嘉永(かえい)の東北遊歴中、斉昭(なりあき)公の茶対という文書を兄上様に書き贈られたそうです」

「貴殿の師は、閉戸先生(へいこせんせい)か」

「何故に、閉戸先生(へいこせんせい)などと申されるのですか」

「斉昭殿ゆえ、そう申して居るのだ。何故、門戸を閉ざされたかだ。茶荘は心広きもの。飛石三ツ四ツへだてて、路地行く雁行(がんこう)を眺めるのも、趣きのあるものだ。露地を進み、物見の石にて、額・石灯籠(いしどうろう)・井筒(いづつ)・大木・捨石(すていし)の類を立ち止まりて見るのも、趣がある。

難しきは、手水鉢(ちようずばち)の水門の捨石。杓(しゃく)は大形にては檜(ひのき)柄杓(ひしゃく)、小形にては杉柄杓、詫び茶人にては銅の杓か瓢(ひさご)の杓。

露地を堪能せば、次は数奇屋(すきや)だ。亭主は井華水(せいかすい)を汲んで釜に仕掛ける事。初座は陰にして、後座は陽。しかれば、初座は事ごとく簾(すだれ)をかけるものにして、葭簾(よしすだれ)伊予簾(いよすだれ)懸けるもよし。後座は陽にして、簾をはずせば、晴れ晴れと致すもの。

座入においては上座入は、上座の分の障子(しょうじ)をあげ、次に下座の方をあげるもの。下座入にては、下座の方をあげ、後に上座をあげる。縁より床に勝手に目を配り、気を閑め座中に入れば、先ず床の掛物(かけもの)、次に花生(はないけ)、香炉(こうろ)に目を遣り、その後勝手に・炉中を見る。茶席には必ず、扇を持参すべきもの」

「何故に、扇(おうぎ)を」

「公家の笏(しゃく)持つが如きもの。茶道の数奇は、見分けが大事。座着の事は、左勝手の席なれば、着座の右の方を正客とし、左へ順に居並び、右勝手の席なれば、着座の左の方を正客とし、右へ順に居並ぶもの。

掛物は茶事の本体を表現するものなれば、道に達した人や仁徳の人の筆跡を掛けるが肝要。数奇屋にての花は、珍花を賞するにあらず。有無転変、飛花落葉を観ずれば宜し。

凡（およ）そ茶の取り合せというものは、長きに短き、角くに丸る、黒きに白きというが如く、古物の内にも新物をも必ず交えるもの。

茶杓（ちやしやく）も流儀を第一とし、他流たりとも、伝授正しきは用い、正しからざるは、細工よしとも用いずものだ。

見分けし友ならば、心は一つ。火は父にして、水は母。茶はその子だ。茶に真香あり、純香あり、浮香（ふこう）あり、間香あり。水に甘あり、冽（れつ）あり、軽あり、重あり。天地の品物生じるや、形氣（かたぎ）相合し、味その中から生じるもの。人も同じ事。お分かりか」

川原は心許無（こころもとな）さそうな顔をされた。

「人には、それぞれ持味があるという事でしょうか。人性の万、同じからずという事でしょうか」

川原は頷いていた。

「茶会にて魚類・菓子など贈るにも、品にも心得ある事だ」

「心得て居ります」

「それでは何故、魚を忌みする」

「仏号仏画の前にては、肉を食するのも似つかわしくありませんから」

「本当に心得て居るのか。貴殿は、何時から吉良上野介（きらこうずけのすけ）になられた。そのような意地の悪い事を申す。まさか古くからの客を持って成すに畳（たたみ）を新しく入れ替えるなどと、野暮な事を申すのではあるまい

「どういふ事でしょうか。客人を迎えるのです。新しい畳(たたみ)に入れ替えて何の不都合があると申されるのでしょうか」

「それでは、院使(いんし)饗応役(きょうおうやく)の伊予(いよ)吉田藩主・伊達宗春(だてむねはる)殿と同じではないか。そうではないのか。食にても同じ事。客を持て成すに、山国の客へは山物を出し、海国の人には海品を以てし、東国の人には東国の産物、西国の人には西国の物産を用ゆるが本意。東国の客に西国の品、北国の人には南国の品を出すは、大なる僻事(ひがごと)。水栗は、必ず供されるもの」

「水栗など供されて、どうしようと言うのですか。川原殿は、甘党なのですか」

「水栗は毒を解(げ)するもの。客を持て成すに珍物(ちんぶつ)を誉とせず、尋常の品にて取り合すが殊勝。有りあまる持て成しは、道の廢(すた)れたる事。尋常の品にて持て成すが、志(こころざし)というもの」

「志(こころざし)」

「客は残さず食するが作法。楊枝(ようじ)は一本楊枝のみ持帰るが法。再び遭い難き事ゆえだ。かと言って、古きものがよいからと、辻番の親父に上下に刀を差ささせても、大名の代わりになりはしまい。そこが政(まつりごと)の悩ましい所だ」

「どういふ事でしょうか」

「家康公は国を治めるには、三つの道があると申された。一に国を量り、二に人を量り、三に食を量るといふ事だ。国を量るとは国の大小、地の遠近、田畠山野海川を能(よ)く知って之(これ)を治める事だ」

「人を量るとは」

「人の衆寡（しゅうか）を量り、産業に迷わざる様に治める事だ。最後の食を量るとは、食の饒乏を量り之を治める事だ。家康公はこの三を知らぬ者は、国を治める事はできぬとおっしゃた。政道とは術の事だ。茶道を政道の助けにするのはよいが、それだけでは、この世が極楽浄土になるものではない。通商の事に通じて居らねば」

「何故に、そういう話になるのですか」

「仏道においても茶道においても、その修行を究めれば、森羅万象（しんらばんしょう）事々物々（じじぶつぶつ）無量無辺（むりょうむへん）の世界も、皆是（こ）れ法身（ほっしん）の如来（にょらい）の化現（けげん）ならざるはなし、穢土（えど）といひ浄土（じょうど）というも二つにはあらずとの境地に至るも、この世が浄土に及ぶという事はないのだ。ただ、政道において、有無を融通せば、この世が幾分か極楽浄土に近づくという話だ。

堀田殿も朝廷への御話を樂觀して居られた。京都には、鷹司（たかつかさ）太閤（たいこう）が居られる。オランダ好きの鷹司太閤は、開国に大賛成だ。往古に三韓鞮鞻（まつかつ）と交通ありし時も皇朝の文物盛んになり、寛永（かんえい）以来の和蘭唐土との貿易も弊害あるを聞かぬ。下田条約により海外の事情も知れ、関東より奏上せしアメリカとの条約は勅許せられて差し支えなどないと申された。

尤も流石の太閤も、現今の京都では往古のような壮麗さもなく、警衛も整って居らぬと、近畿での開港は不可とされたが、朝廷への工作には、抜かりはなかった。島津斉彬（しまづなりあきら）殿御親戚筋の近衛公父子への御上のご信任は篤い」

「それでは、京では開国の準備が出来て居ったと申されるのですか」

「安政四年には、島津斉彬（しまづなりあきら）殿は近衛邸において三条実万（さねつむ）卿に謁し、同志の申し合わせを披瀝（ひれき）されて居られた。斉彬殿は、安政三年十二月江戸にて日向縁（ゆかり）の篤姫（あつひめ）様の將軍

家輿入(こしい)れを無事終えられ、下国の途中、伏見に滞在された。この時、斎彬殿は昔年の念願を果たされたのだ」

「念願」

「大名の御所への出入りは堅く禁じられていたが、斎彬殿は野装束(のしょうぞく)に変じ馬より降り徒歩(かち)にて、御筑地内に入り、陣笠を脱し地に跪(ひざまず)き皇宮を拝されたのだ。また近衛邸より仙洞御所(せんとうごしよ)に至り拝覧もされた。来秋出府の途次、琉球人を俱(ぐ)し、上洛に及ばん事も考えて居られた」

「何故に琉球人を」

「琉球船は日の丸を掲げしもの。皇国に日を昇らせるためには、須佐之男命(すさのおのみこと)と海神三姫のお力添えが必要なのだ。貴殿は京都御所に宗像(むなかた)の姫神様が祀られて居るのを知って居るか」

「それは初耳です。何故に御所に」

「京に都を遷された翌年、桓武天皇が藤原冬嗣(ふじわらのふゆつぐ)卿にお命じになられて、皇居鎮護の神として祀られたのだ。宗像神の事は存じて居ろう」

「勿論です。天照大神(あまてらすおおみかみ)様と須佐之男命(すさのおのみこと)との誓約(うけひ)にてお生まれになられた多紀理比売命(たきりひめのみこと)、多岐都比売命(たぎつひめのみこと)、市寸島比売命(いちきしまひめのみこと)の姫神様です」

「左様。須佐之男尊(すさのおのみこと)は伊邪那岐尊(いざなぎのみこと)から海原を支配するように命じられたのだが、伊邪那美尊(いざなみのみこと)がいる根の国へ行く事を望み泣き叫んだため、追放された。

そこで須佐之男尊は、姉の天照大神(あまてらすおおみかみ)にお会いしてから根の国へ行こうと思ひ、天照大神が

治められている高天原（たかまがはら）へと登って行かれた。所が天照大神（あまてらすおおみかみ）は須佐之男尊（すさのおのみこと）が高天原を奪いに来たのだと思込んで居られたから、須佐之男尊（すさのおのみこと）は天照大神（あまてらすおおみかみ）の疑いを解くため、二神で天の安河（あめのやすかわ）を挟んで宇氣比（うけひ）を行う事を申し出られ、どちらの心根が正しいか示そうとされたのだ。

その際、天照大神（あまてらすおおみかみ）は男子を得ることを、須佐之男尊（すさのおのみこと）は女子を得ることを神に誓約しておいたのだが、天照大神（あまてらすおおみかみ）が須佐之男命（すさのおのみこと）の持つて居られた天叢雲劍（あまのむらくものつるぎ）を噛み砕かれると、吹き出した息の霧から三柱の女神がお生まれになられ、須佐之男命（すさのおのみこと）の心根の清浄（しようじよう）なる事が証明されたのだ」

「それで、斉彬（なりあきら）侯は、琉球人を俱（ぐ）し、上洛せんとされたと申されるのですか」

「そうだ」

「貴殿は、保元の乱に敗れし源為朝（みなもと）のためと（も）が琉球に漂着したという話を聞いた事があるか」

川原は、また突飛もない事を聞いて来た。

「いえ。何故に源為朝（ためと）が琉球などに行かねばならぬのですか。保元の乱にて、崇徳上皇（すとくじようこ）う）方の源為朝は、後白河天皇方の源義朝（よしと）と平清盛に敗れ、都にて斬首されたのではないですか」

「為朝（ためと）は、保元の乱に敗れて伊豆大島に流されたというのだ」

「一族の情と申されるのですか。それで、為朝は伊豆大島に流されて、どうなったというのですか」

「為朝は鎮西八郎（ちんぜいはちろう）と称されただけあつて暴れ者。伊豆大島に流されても、利島、式根島、神津島などを荒らし回り、青ヶ島を征服した帰りに台風に遭遇し、琉球に漂着したというのだ。そこで島の按司（あじ）の妹

との間に尊敦(そんとん) という子供をもうけ、伊豆大島に戻って来たというのだ」

「何故にそういう話になるのですか。また、戯作者(げさくしゃ)の作り話を持ち出されて居られるのではないですか」

「そうではない。『中山世鑑(ちゅうざんせいかん)』という琉球の書物に書かれて居るのだ」

「琉球の書物にですか。薩摩藩か幕府の作り話ではありませんか。それで、尊敦(そんとん)とか申す為朝(ためとも)の子はどうなったのですか」

「成人して浦添(うらそえ)の按司(あじ)となり、王統の天孫氏(てんそんし)を討った逆臣の利勇(りゆう)という者を滅ぼし、舜天王(しゅんてんおう)となり、新たに王朝を開いたというのだ」

「それは何時の事ですか」

「皇国にて頼朝公が鎌倉に幕府を開かれた頃の話だ」

「それで、その舜天王(しゅんてんおう)が、どうしたと申されるのですか」

「死の間際に、足利一族に遺言された」

「足利の一族にですか。如何なる」

「我が魂は庶兄・足利義包(よしかね)の家に去る。義包(よしかね)の子孫に、我が名尊敦(そんとん)の『尊』の字のある者が現れたら、それが舜天の生まれ変わりであると」

「生まれ変わり」

「そうだ。肉体は滅ぶとも、情念は残るもの。想念なれば時空を超えるもの」

「おかしな話です」

「そう申すな」

「そう申されても足利の話なればです。足利は代々天下を窺いし者。源義家は七代の孫に生まれ変わり天下を取ろうとし、その七代孫の足利家時は、天下を我がものにする事が出来ず、八幡大菩薩に三代の中に天下を取らしめ給えと祈願して切腹して死んだのです。その三代目が尊氏こと高氏なのです」

「源義家の曾孫(そうそん)の足利義包(よしかね)より七代下れば高氏。その高氏が後醍醐帝から御名の一字を賜って尊氏と名乗られたのだ」

「川原殿は、尊氏が琉球王の生まれ変わりなどと、信じて居られるのですか。川原殿のお話とも思えません。足利のことなれば、皇国を我がものにせんとする作り話ではありませんか」

「まあ、よい。貴殿がそう申すならば。信じるも信じまいも、貴殿次第だ。しかし、かかる話を信じなくとも、皇国と琉球との結びつきは深く、大和朝廷の時代より遙かに遡るものだという事だ」

「斉彬(なりあきら)侯は秘策をめぐらされたと申されるのですか」

「そうだ。かかる秘策も、阿部殿が亡くなられてから、齒車が狂いだした。堀田殿上洛(じょうらく)に先立ち林大学頭(だいがくのかみ)復斉(ふくさい)殿が幕府の方針を説明しに行かれたのだが、京の情勢は林大学頭(だいがくのかみ)が説明して同意が得られるものではなかった。

御上はこれまで鷹司(たかつかさ)太閤の意向に従われて居られたが、アメリカからの申し出通りになっては後世に恥を残し、伊勢を始め先代の方々に對して申し訳ないとおっしゃり、堀田備中上京に際して獻物(けんもつ)を受けないうようにと九条閑白尚忠(ひさただ)殿にお命じにされたのだ。

平素、老後の楽しみに黄白(こうはく)を貯えて居った公卿(くぎょう)も、此度の一件はたとえ流罪になつてもとの覚悟だ。御上は、人心折り合いを考慮して、三家以下諸大名の意見を聞いた上、その意見書を入れよとおっしゃる

も、鷹司(たかつかさ)太閤には差し向かつて御自分の存念をお話しする事は出来ない。何しろ、政通(まさみち)卿は、御父上の仁孝(にんこう)帝の御代の関白、太政大臣。その上、御祖父の光格(こうかく)帝の関白をも勤められたお方だ。そこで、九条関白に入来して助けて呉れるよう頼まれたのだ。

堀田備中は、何としても勅答は拝受出来ぬ。武家伝奏(ぶけてんそう)を御宿の本能寺に呼び、外国人の意向を説明されたのだ。外国人はかつて南蛮(なんばん)人が堺で交易を行い、京地に南蛮寺を建てた時のような交際を望んで居ると」

「慶喜(よしのぶ)は、信長にならんとしたとでも申されるのですか」

「慶喜公は、水戸家の出。尊皇家だ。幕府は、京師十里四方の地には外国人の立ち入りを禁じ、その代りに兵庫を開く事にしたが、その際も山城国と尼カ崎猪名川(いながわ)に限り立ち入る事が出来ぬようにしたのだ。それでも京で公卿(くぎよう)の説得に当たって居られた岩瀬殿などには、随分酷い陰口が叩かれた。口先にては富国強兵を唱えて居るが、詰まるところ商売国に致(いた)す積りだと」

「凶星ではありませぬか。幕府は、皇国を商売国にせんとしたのではありませぬか」

「幕府は、世界の大勢を説いたのだ。京の攘夷公卿(くぎよう)には分らぬ事。京の情勢に不安を抱かれた直弼(なおすけ)殿は、京に長野主馬(しゆめ)を遣わし、堀田殿を裏から支えられた」

川原は私の怒りを新たにする者の名を口にした。

「ちと、お待ち下さい。その長野と申す者は、あの安政の大獄の首謀者の長野主膳(しゆぜん)の事ではありませぬか」「如何にも。長野主馬(しゆめ)は、長野主膳の事だ。直弼(なおすけ)殿の埋木舎(うもれぎのや)で和歌や茶の相手をされた方。直弼殿が藩主になられると、弘道館国学寮の学頭となった。直弼殿の命を受け、堀田殿の条約勅許の

事を助けるべく、京の九条家に入りました。九条家には、多田加寿江(かずえ)という奥女中を入れておいた」

「その多田加寿江(かずえ)とは、何者ですか」

「江州(ごうしゅう)多賀村の神官の娘で、直弼殿に主膳を引き合わせた方だ。主膳が紀州家附家老の水野忠央(ただなか)殿の知行地である志賀谷村で国典歌学を教授できたのも、加寿江殿のお陰だ」

「何故に、そのような事を」

「水野土佐守(とさのかみ)は篤学の士を招き、古来の歌集・物語・医書・日記・行事等を丹鶴叢書(たんかくそうしよ)と名づけ編輯(へんしゅう)して居られたのだ。土佐守の異才は、それにとどまらぬ。測量技術を具(そな)え、蝦夷(えぞ)地を開墾して雄略を示さんとされたのだ。大和・和泉の村人、土佐守の奸を罵るも、動ずるものではない」

川原の話に、ふと木戸先生の言葉が頭を過ぎった。

「それで分かりました」

「何が分かったのだ」

「松陰先生が、おっしゃられた事です」

「寅が何を申した」

「幕府の真の主謀者は水野土佐守と。佐倉も上田も鯖江(さばえ)も靡(なび)いただけで、紀伊の幼君も違勅の思召しは決していない事だと。これで全てが分かりました。長野主膳(しゅぜん)という者が、水野土佐守の手の者であったという事で」

「本当に分ったのか」

「全てが分かりました。それで、主膳(しゅぜん)は京で何を工作したのですか」

「九条関白に交易地を始めとする幕府の内情を申し上げ、直弼（なおすけ）殿の御意向を伝えられた。関白は生きて直書を得たと喜び、関東御委任に同意する所となった。堀田殿は、九条関白と鷹司太閤からの御意向を受けられ、江戸に朝廷言上案文を送られた。京での工作は上手くいって居ったのだ。それで江戸の方では、老中松平忠固（まつただいら）ただかた）殿が台慮（たいりよ）を伺い、堀田殿へ答書を発した」

「どの様な」

「『人心の居合は、如何やうにも関東にて引受け、宸襟（しんきん）を勞し奉る事なかるべし』と。宸襟（しんきん）を悩まされる問題だけに無理強いする事は出来ない。そうしたなか鷹司太閤が、御上に内覧辞退を申し出られた」

「何故に、鷹司（たかつかさ）太閤は内覧辞退を」

「甥御（おいご）の慶喜公のためだ。御自分が表立っているのは、將軍継嗣（けいし）の話に支障を来たす。御上は太閤内覧辞退を天の助けと思われ、九条関白に天下国家のため見違なく万事を取り計られるようおっしゃるも、今度は関白が御上をお諫め申し上げた」

「九条関白は、何を申したのですか」

「江戸からの奉書で人心の居合を大樹（たいじゆ）が引受けた以上、朝家が強いて御異言なさるべきではないと。御上は、そうなつては一大事。交易を下田箱館の二港にとどめ和親条約に戻すとの別の勅答を用意させた」

「先帝の思召しは、攘夷にあらせられたのではないのですか」

「そうだ。御上が攘夷の念を抱かれて居られる以上、万が一、嚴勅を下されては、公武の疎隔を来たす事になると、新たな勅答案が作られた」

「どの様な」

「人心の折り合いは幕府で責任を持ち、幕政の大変革に関しては、『関東において御勘考(かんこう)あるべく様、御頼み遊ばれたく候』との。この勅答文案を手にした鷹司太閤は、甚(いた)く感激された」

「それで先帝は」

「多勢に無勢に困惑された。それでも、今回の返答は国家の安危に関わると、文案を改めるよう仰せ下された。それで公卿八十八人が、九条閑白邸に赴き勅裁案の変更を請うた」

「八十八という数に、何か特別の意味があるのでしうか」

「御推察の通り、八十八は米の解字なれば、九条閑白に讓国の御意がある事を示したのだ。条約勅許の事は御上の御意向で如何とも出来なかつたが、その分、慶喜公継嗣(けいし)問題の方は上手くいった」

「上手くいったとは、どういう事ですか」

私は怪訝な顔をした。

「水戸家を立物にしたのだ。斉彬(なりあきら)殿による近衛(このえ)家への工作が功を奏し、將軍継嗣(けいし)に関して、英傑(えいけつ)・人望(にんぼう)・年長の三件をもって選挙し早々に治定されるようにとの天意が、堀田殿に伝えられたのだ。これには、此方(こちら)の足並みが乱れたくらいだ」

「足並みが乱れたと申されますのは」

「御沙汰(ごさた)に年長の二字を加えるか否か議論となった。除くと紀州の慶福(よしとみ)殿に、加えると尾張の慶勝(よしかつ)殿にとれる。斉昭(なりあき)殿と春嶽(しゅんがく)殿が裏で慶勝(よしかつ)殿を推して居られたから、慶喜公擁立のためにも、春嶽殿と鷹司太閤との御関係を修復しなければならなくなった。そこで堀田殿は、春嶽殿から鷹司家侍講の三國大学殿に書を贈って貰う事にした」

「それで春嶽(しゅんがく)公は、如何なる書を」

「英明の慶喜(よしのぶ)公を差し置きその他の人物が継嗣(けいし)では、列藩の失望を招き、皇国のためにもならないと書き贈られた。春嶽殿から協力を取り付けた太閤父子は早速、近衛殿へ御沙汰(ごさた)の周旋を依頼された。

これで誰もが継嗣問題は慶喜公に落着したものだと思った。攘夷の時にあって紀州侯のような少年では、とても天慮に適(かな)わぬだろうと」

「それでは何故に、紀州が將軍継嗣(けいし)になったのですか」

「慶喜公が將軍となり、水戸家を立物にして大變革に及べば、国家に大過を招き兼ねないと、長野主膳(ながのしゅぜん)が危惧したのだ。斉昭殿は、天下は攘夷でなければ治らないと公卿(くぎょう)に入説して居られる。彦根藩家老の岡本殿も、直弼(なおすけ)殿に水戸藩主父子と協力し朝旨を尊奉するようにと進言されたのだ。無頼の徒が、京に集まり、公卿縉紳(しんしん)と謀り、水戸薩摩その他の諸藩が、陰で後援を成せば、事が宮闕(きゅうけつ)九重の深に及び兼ねない。ここは家定(いえさだ)公の御英断を仰ぎ、紀州の慶福(よしとみ)殿を擁立するしか道はない。直弼(なおすけ)殿にも九条閑白にも、堀田殿への同調は止めて貰う事にした。ここに至って、主膳は直弼殿に説いたのだ。血脈近い方を差し置き發明の方になどとは皇国の風儀ではないと。九条閑白も慶喜公継嗣(けいし)の事から手を引かれた」

「天意はどうされたのですか」

「堀田殿には九条閑白から年長の条件だけが口上で伝えられた。幕府には『急務多端之時節、養君御治定、西丸御守護政務御扶助に相成り候はば御にぎやかにて御宜く思召され候』との達書(たつしよ)が下されたのだ。そもそのもの話、御上が不審に思われての事。斉昭(なりあき)殿が自分の御子を賢明の人と申される訳もないと。近衛(このえ)

殿に命じられ天意は取り下げられ、堀田殿は京で何ら得るところなく、帰府された」

川原は堀田備中上洛(じょうらく)の顛末(てんまつ)を語り終えると、飲みかけの葡萄酒(ぶどうしゆ)を飲み干し、一息ついた。

「政(まつりごと)とは上手くいかぬものだ。堀田殿帰府後の事は、明晩にしよう。直弼(なおすけ)殿の大老就職の話もそれからだ」

川原は不機嫌そうに言った。

「お疲れなのですか」

「歳は争えぬものだ」

九

翌日、夕食後、頃合を見計らって川原の部屋に行くと、下鼻の広がりが目につく男が座っていた。川路であった。会釈を交わす間もなく、椅子を手にした川原が戻って来た。

「何時か、太郎を紹介しようと思つて居つたが、なかなか出来なかった。太郎は英国にも留学して居る。よい相談相手になつて呉れる筈だ」

川原は我等に椅子に座るよう促した。先ずは、此方から御挨拶を申す事にした。

「御祖父様(おじいさま)の御噂は、予(かね)てより御伺いして居りました。御忠誠の程、畏れ入ります。御祖父様(おじいさま)は、我が心の師・吉田松陰先生の命の恩人様と聞き、一言御礼を申し上げたいと思つて居りました」

「そう申して頂けますれば、亡き祖父も喜んで呉れるものと」

「お差し障りがなければ、御祖父様(おじいさま)の御人柄が偲(しの)ばれる御話をして頂ければと思ひまして」

「そういう事でしたら」

川路は椅子に着くと、在りし日の祖父の思い出を語り始めた。

「祖父の徳川家への忠誠言うまでも無き事ながら、王室への御奉公、長州の方にも心に留めて置かれたき事で御座ります。この儀は亡臣の愁(うれ)いから申し上げる事には御座なく、長州様の御為と心置きくごされ。

祖父は安政二年九月、京都御造営ならびに大坂砲台所御用のため、四十五人のものを召し連れ、江戸を出立致しました。その時、吾(われ)も板橋まで見送りに参りました。祖父一行は大宮、熊谷と宿をとり、京への旅路を始めましたが、水戸藩に仕えて居られた宮崎復太郎殿などは、大宮まで見送りに来られました。

祖父の日記によりますれば、旅の途中、松平大膳太夫(だいでんたいぶ)様御一行と行き逢い、『御威光有り難き候』と記してあつた事を覚えて居ります。確かあれは、中山道は加納(かのう)宿を出立いたし、美濃国赤坂にて昼休みをし、関ヶ原を越え、近江国醒ヶ井(さめがい)に着いた時と存じます。本陣の庭に山裾(やますそ)にて大いなる池があつたと書かれてありました。

さて、祖父が京に到着致しますれば、中川宮朝彦(あさひこ)親王様からの使者が参りました。此度(こたび)の中川宮様の事は、御存知の事と思ひますが、宮は伏見宮邦家(ふしみのみや)くにいえ親王様の第四子であられ、文政八年に先々代の仁孝(にんこう)天皇の御養子となられ、興福寺一乗院に入られ、尊応(そんおう)法親王と称され

たお方です。嘉永五年、尊融(そんゆう)の名を賜わり京の青蓮院(しょうれんいん)に移されましたが、天台座主を兼ねられました。宮は栗田口(あわたぐち)に御住まいにられましたので、栗田宮と呼ばれて居られました。

宮様には、祖父が奈良奉行の御役目(おやくめ)を勤めし際、御懇(ごこん)の御詞(おことば)を賜りましたので、京都御造営の御役目の際も、禁裏(きんり)の御修法の御指導を仰ぐ所存でした。しかしながら、宮様とは、かつての御交際を望むべくもなくなりました。宮様は、南都一乗院宮より召し連れられた御家来を祖父のもとに遣わされ、左衛門尉(さえもん)のじょう)罷(まか)り出る事相成り難ければ、富塚高村の両名を差し出すようにとのお言葉を賜りました。この時、宮様は南都より二条宰相を呼び寄せたと祖父が申して居った所を察しますと、祖父は宮様を頼りになるお方とは考えて居らなかつたようです。

祖父はひとり京都所司代に謁見(えっけん)し、旧仙洞御所(せんとうごしよ)内に設けられた御造営事務所にて、紫宸(ししん)、清涼の両殿を始め常御殿その他の建物を見て回りました。仙洞御所(せんとうごしよ)の御庭を拝見いたしますに、自然の山を開き、池を大いに穿(う)がちたるものにして、古木大石多く、光格(こうかく)天皇皇居たりし日々の姿が偲(おも)われましたが、御崩御後、庭木は朽(く)ち、建物は柱が傾き、朽ちるがままに捨て置かれて居りました。月見の御宴(ぎよえん)ありし御橋(みはし)の御亭(おてい)も、田植え御覧の御亭もくち倒れ、古の姿今あるは、汀(みぎわ)の松の緑ばかり。古木の桜と紅葉の生えたる御庭(おにわ)には苔(こけ)も生える事もなく、芝の上には誰かが持ち忘れた湿地(しめじ)を見るにつけ、祖父は涙を催わさずにいられたと申して居りました。

王室を尊ぶ事、将軍家の御職務、況(ま)してやその家来たる者にては申すまでもない事。祖父は禁裏付(きんりづき)に参内(さんない)さんだい)天機(てんき)伺(こ)い奉る事を願(ねが)い出ましたが、願(ねが)いは叶(かな)いませんでした。禁裏(きんり)出入り厳禁(げん)の旧幕時代の事ゆえ、祖父の志の篤(とく)き一端、お察(さ)し頂(た)けたならば忝(かたじけな)く存(ぞん)じまする」

「此方（こちら）こそ。御祖父様（おじいさま）の篤き志、畏れ入る次第です」

「されば、お伺いの儀の吉田様の事ですが、拙者にては詳細は存じ上げて申して居りませぬ。ただ、あの事件は、佐久間象山（さくま しょうざん）殿が連座された事ゆえ、その事なら詳細を存じて居ります」

「何なりとお話頂けましたら、幸いに御座（ござ）ります」

「あの事は、祖父が下田奉行を仰せつかった時の事で御座ります。その前年、浦賀にペリーが来航し、その後長崎にプチャーチンが来航しました。祖父はロシア使節との応接に長崎に参り、お役目を果たすと、今度は下田表にて御用を命じられました。下田、浦賀は古の豪傑が見出した大切な地。幕府は奉行を置き、將軍家御上洛（じょうらく）の御時には、必ず浦賀へ兵船をとり揃えて、警護する事になって居りました。祖父が申すには、日本武尊（やまとたけるのみこと）東夷御征伐時も、浦賀より渡り給いし事。走水観音（はしりみずかんのん）には、いなた姫を祀（まつ）りしものとか。何分、祖父の学問には及ぶべくもなく、委細は申上げられませぬが、お役目重き事を承知くださればと申上げました。

このような事を申上げましたのも、先程申しましたように吉田様の詳細を存じて居りませぬからにはかありません。ただ、吾（わ）が祖父から聞き及んで居る事を申上げますれば、ペリーが大統領の国書を手渡し引き上げると、佐久間殿は祖父を尋ね、議論に及んだそうです。佐久間殿は、アメリカ船は一旦は引取ったが、来年出直して来る。就いては、和戦いづれにしても、人を彼の国に遣わして、その形勢事情を探索させる事が当今第一の急務と説かれたそうです。祖父はそれは難しい、とても出来ないと申したそうですから、吉田様の一件はこの話から出てきたものと思われまます。吉田様御一件、アメリカ人も重々ご心情を察せられたとの事。幕府との和親条約相成らずば、吉田様御願い聞き届けられたものを、幕府との交渉、思いのほか友好裏に運び、吉田様一件、幕府の知れるところとならば信

義にも拘わると。吉田様には近き将来、渡航相成る御時世が来るものと論し申されたとか。吉田様がどういふ御所存で御奉行所に出頭されたのか、深くは存じませぬが、嘉永(かえい)七年三月、佐久間象山(さくましようざん)殿は吉田様密航連累(れんるい)に由り、井戸(いど)対馬守(つしまのかみ)の手にて審問を受けられました。下田奉行の法庭にて諮問終わるや、象山(しようざん)終身在獄或は死刑との声が上がりましたのも、アメリカとの和親に反対する者の声でありました。

祖父は佐久間象山(しようざん)の如き俊傑(しゅんけつ)たる者を、国家多事の日に、獄裡(ごくり)の人となりてはと惜(お)しまれ、阿部伊勢守(いせのかみ)様に相談申上げました。祖父は佐久間殿の急務十傑(じゅっけつ)の策を阿部伊勢守様に呈して居りましたから、伊勢守様も佐久間殿の偉才を惜しまれ、特に井戸対馬守(つしまのかみ)に密旨を下され、与力(よりき)等の俗論を排されました。祖父の尽力もさる事ながら、伊勢守様の英慮(えいりよ)おわしなくば、国家損失この上もなきところでした。幸いな事に、佐久間殿は国許(くにもと)にて蟄居(ちつきよ)となり、松代藩主真田幸貫(さなだゆきつら)公へ御引渡しとなりました。この時、吉田様も憂国の至誠より海外の事情を探らんとしたものと、寛典(かんでん)に処せられたと聞き及んで居ります。お尋ねの儀は、これだけで御座りますが、態々(わざわざ)お招き頂いた上は、当家と真田家の縁を少々申上げますれば、祖父も喜んで呉れるものと存じます

「忝(かたじけな)いお言葉」

「祖父は内藤吉兵衛(きちべえ)の長男として豊後(ぶんご)日田に生まれ、徳川家直参(じきさん)・川路光房の養嗣子(ようし)となり、老中水野越前守(えちぜんのかみ)忠邦殿からご信任を受け、佐渡奉行、小普請奉行(こぶしんぶぎよう)、普請奉行(ふしんぶぎよう)の御役を頂戴いたしました。普請奉行(ふしんぶぎよう)としてのお役目は、

家慶（いえよし）公のご意向を一心にうけたものでした。天保（てんぽう）九年三月、江戸城西丸より火を失い炎上。当時、西丸は退隠せられた家斉（いえなり）前將軍のお住い。その再築に家慶公は殊の外、ご熱心であられました。

西丸再築には、尾州（びしゅう）家より木材が献じられる事になりました。通常ならば領内の白鳥港辺りに貯蔵せし木材を江戸に送る所、尾領木曾の山中より新たに伐木したるものとの厳命が祖父に仰せ下りました。この時の尾張家の歓待、ただならず、お料理には中間（ちゆうげん）の者までにも鯛の焼物があつたそうです。祖父は尾張殿よりのお品に付、頂戴いたすべく申し付けるも、流石（さすが）に酒は上下一同一滴も相成らずと申し付けました。

祖父は国典への造詣（ぞうけい）が深く、記紀の研究を怠りませんでした。内にありては白石の書を読み、林子平（し（い））の所説を玩味し、外にありては崑山（かざん）殿や象山（しょうざん）殿と親交を持つなどして、絶えず海外へ目を向けて居りました。祖父の考えは早くから、暫（しばら）く和を講じて、国力を養い、兵を蓄えるに如（し）かずとの考えでした。天保（てんぽう）九年、英人モリソン渡来せんとする説ありし時、佐渡奉行たりし祖父は、異国船打払の法を廃する儀を出しました。

天保十二年六月御老中に就職されました信濃松代藩第八代藩主・真田幸貫（ゆきつら）公とは、祖父は親しく交際させて頂き、幸貫（ゆきつら）公の聡明は祖父の感じ入る所でした。『忘るなよこの船きたる浦波の 遠き山家にすむ人もみな』。幸貫公が詠まれたお歌です。天保十三年外船漂流民送致の事に関し長崎奉行から申稟（しんりん）がありました。水野忠邦（ただくに）公と真田幸貫（さなだ ゆきつら）公が堀田正睦（ほつた まさよし）公を交え、打払いの可否を議論されました。水野忠邦公は斥攘（せきじょう）説を主張され、文政八年の無二念打払令（むにねんうちばらいれい）の実行の論でありましたが、真田幸貫公はこれを不可とされ、漂流民送來船の砲撃に反対されました。ご両人の意見が分かれまして、家慶公にご決裁を請われ、家慶公は幸貫公の説を執られました。それ故、祖

父が嘉永（かえい）六年に和議論を主張せし事は、ゆえ無き事ではありません。ただ、天保年間より我が国の富強は一向に進みませんでしたから、祖父の論は暫（しばらく）く講和して、国力を養うとの論に止まり、開国通商の説を強く主張するということではありませんでした。

当時、幸貫公の諮問に答えた象山殿の海防八策は、卓見でありました。備えなければ城下の盟（ちかい）の恥辱（ちじよく）を受ける憂いがあり、先ずオランダへの銅輸出を禁止し、これを以て洋製の大砲を増産し、オランダから軍艦を購入すると共に、彼の国の兵学者、鉄砲師、船大工等を招聘（しょうへい）致すと。軍艦、銃器等を我が国人の手に依つて製造出来るようになるまでは、寺院堂宇（どうう）の梵鐘（ぼんしょう）（ぼんしょう）の類を悉（ことごと）く供出せしめ、大小砲を製造すべきであると。幸貫公は象山殿の策を採用せんと閣老に諮るも容れられず、斉昭公も梵鐘（ぼんしょう）（ぼんしょう）の類の供出の事に難色を示されたので、幸貫公は遺憾に思われ台閣（たいかく）を退かれました。

幸貫（ゆきつら）公は、斉昭（なりあき）公はじめ島津斉彬（しまづなりあきら）公、細川斉護（ほそかわなりもり）公、鍋島齐正（なべしまなおまさ）公といった当時、明君の誉れの高いお方と親交を持たれましたが、斉昭公とのご交際の始まりは、祖父が藤田東湖（ふじたとうこ）殿に勧めし事でした。その藤田殿が、安政（あんせい）二年の大地震で江戸小石川の水戸藩邸で亡くなられました事は、国家激動の時を考えますと残念でたまりません。広く天下に人材を求められた幸貫公は、佐久間象山殿に祖父との交際を命ぜられました。

松平大膳太夫（だいでんたいぶ）様のご家臣様に向かつて、このような事は申すまでもない事は、重々承知しております。されど、このような事を申しましたのも、祖父の遺言でもあります。祖父は安政（あんせい）二年の内裡（だいり）御造営に際し、天朝より賜はりたる御料の御絹（おきぬ）にて鎧直垂（よろいひたたれ）を製し、これに菊の水紋様を染めました。この事は楠公（なんこう）を慕う心より生れしものですが、その意のある所は、楠正成（くすのきまささし

げ)公の大事業を慕うという大それた心から生まれたものではありません。正成を鏡として、俗に言う役不足とおもわず、椽(えん)の下の力もちという事を厭(いと)わず、小さき正成なるべしが祖父の遺言です。祖父は、只々(ただただ)諫言(かんげん)を申上げ、お用(もち)いなき事を少しも怨みたるけしきなく、正成(まさしげ)公、さらさらと討死(うちじに)されたるは、難き事と申して居りました。

幕臣の勝手な物言いに、お気を悪くされたのではないかと心配して居りますが、祖父の誠忠、深意の程、察し頂けたならば、仕合せです」

「忝いお言葉。御祖父様(おじいさま)が、斉昭公を始め、佐久間象山先生との深いご親交など、存じ居らぬ事ばかり。宜しければ、もう少しお話いただけませぬか」

川路はいい顔をしなかった。

「太郎殿、よいお話をされた。袖振るも多少の縁と申すではないか」

川原は話を促した。

「ご時世に差し障りのある事も御座います。この辺で」

川路は固辞した。

「太郎殿、そのような事では、幕臣の名折れとなるではないか」

川原は川路に再度奮起を促したが、川路は応じようとしなかった。川原は、その場を取繕った。

「聖謨(としあきら)殿は、將軍家と斉昭公の取成しに苦労されたのだ」

「取成しと申されますのは」

「弘化(こうか)四年八月、家慶(いえよし)公の命により、阿部殿は水戸家老中山備後守(びんごのかみ)を召し、斉

昭（なりあき）公の御子・七郎麿（しちろうまる）君の一橋家相続の御意（ぎよい）を伝えられたのだが、斉昭公には気の進まぬ話であった。と申すのも、斉昭公のご希望は、兄上の慶篤（よしあつ）殿であった。水戸家から將軍家にご養子を入れぬが慣例なれど、水戸家は王室をお守りするようにとの家康公のご遺言があられた。家慶公は並々ならぬご決意で慶喜公を一橋家にお迎えになられた。その事は前にもお話しした通り。家慶公は嘉永（かえい）二年、旧典を復興され、下総（しもうさ）小金原（こがねはら）にて鹿狩を挙行され、阿部伊勢守を通じて、小金原（こがねはら）の獲物を斉昭殿に贈られたのだ。貴殿は、何か感じ入る所はあらぬのか」

「武門の威厳を示すために、行なつたではありませんか」

「そうではない。深念ありての事」

「深念」

「この年の秋、家慶（いえよし）公は奥向の侍女（じじよ）百人余りを引き連れ、小石川の水戸邸に臨まれた。後樂園の紅葉、池中の朱塗（しゆぬり）の舟に映じられたれば、將軍親（みずか）ら棹（さお）を執り舟を行（やり）、涵徳亭（かんとくてい）にては燭（しょく）を秉（と）りて酒宴を催された。斉昭公、自画の菊花の屏風（びようぶ）を献じたれば、家慶公欣然（きんぜん）として快納されたのだ」

「將軍家と和解なされたと申されるのですか」

「痛み分けという所だ。家慶公は斉昭殿の事を終始『油断のならぬ御方』と申されたそうだ」

「それで。聖謨（としあきら）殿は水戸家のために奔走されたと申されるのですか」

「そうだ。宮崎殿の事もそうだ。この話は、太郎殿からお話された方がよからう。太郎殿」

傍らで黙して居った川路が、話を継いだ。

「宮崎殿は、先にお話しました通り、水戸藩に仕えられたお方です。その水戸藩は、御存知の事と存じますが、弘化の初、斉昭（なりあき）公は家慶（いえよし）公のご不興を買い、幕禮（ばつけん）を蒙りました。その頃、宮崎殿は江戸に上り、朝川善庵（あさかわ ぜんあん）に学ばれて居りました。宮崎殿は、斉昭公の汚名を雪（そそ）がんと四方に奔走されましたが、この事が却つて水戸藩士から睨（にら）まれ、宮崎殿は身を危うくされました。この宮崎殿の窮地を救ったのが、祖父なのです」

「その宮崎殿と申される方の事、もう少し詳しくお話いただけませぬか」

「それなれば、何なりとお話致します。幕府はペリー来航するや、再び斉昭公を頼りとする所となりました。この時、祖父は藤田東湖（とうこ）殿とお話しをされ、宮崎殿を斉昭公近侍（きんじ）の員に加えようとされました。幸い水戸家も宮崎殿のお召しを決めて居られていましたが、宮崎殿のご返答は意外なものでした」

「宮崎殿は、何を申されたのでしょうか」

「別に志望の子細ありと」

「別の志と申されますのは」

「宮崎家は、島津家に仕えられたお家柄なのです」

「どういう事なのでしょうか」

「宮崎殿の御祖父様（おじいさま）は、晩年に故ありて薩摩を去られ、遠く水戸にて恩遇を蒙られたのです。水戸家御仕官の話に、宮崎殿申されるに、『我子孫何事にあれ、一旦水戸家の御（おん）ため、心力を尽くし上は、何卒（なにとぞ）世々の旧主たる島津家に帰参を懇願すべし』が、御祖父様（おじいさま）と御父様（おとうさま）のご遺言との事。祖父は斉彬公にも知遇を受けて居りましたので、その旨をお伝えしました」

「それで、宮崎殿は島津家へ戻られたのですか」

「そうです。斉彬（なりあきら）公より直々に斉昭（なりあき）公にお話しされました。宮崎殿は京に在りし時分、御父上に従い三条実万（さんじょう さねつむ）卿のお邸に出入りされて居りましたから、斉彬公は得がたい家臣を手に入れました。斉彬公は旧記を審査せられ、宮崎殿を本姓に復し、日下部伊三次（くさかべ いそうじ）と名乗らせました。内訌（ないこう）の絶えない薩摩にあつて、斉彬公のご英断でありました」

「川路殿、暫（しばらく）くお待ち下さい。今おつしやつた日下部（くさかべ）殿とは、水戸藩に勅諭（ちよくじょう）を携えられた日下部伊三次（くさかべ いそうじ）殿の事ですか」

「そうです。宮崎殿は、水戸藩に戊午（ぼご）の勅諭（ちよくじょう）を携えられた日下部伊三次（くさかべ いそうじ）殿です」

「ここまで川路が話すと、又、川原が口を挟んだ。

「聖謨（としあきら）殿も斉昭（なりあき）殿とのご関係で随分誤解されたのだ」

「と、申されますのは」

私は怪訝（けげん）な顔して、川原に問うた。

「ペリー艦隊来航するや、聖謨（としあきら）殿は筒井（つつい）肥前守（ひぜんのかみ）と共に斉昭公に謁し、斉昭公から佩刀（はかし）を授かったと聞くと、貴殿はどう思う」

「それは、征討將軍に節刀（せつとう）を賜ったも同然の事。斉昭公は攘夷決行を促されたものと」

「貴殿がそう思われるのも無理からぬ事。あの時、多くの者がそう思った。今では征討將軍に刀劍（とうけん）を授けているが、古来は旄牛（からうし）の尾を編んで旗飾りとした旗を授けていたのだ。唐では、旌節（せいせつ）が授けられ

「旌節(せいせつ)」

「旗竿(はたざお)の先に銅の竜首を付け、旄牛(からうし)の尾を赤く染めたものを垂らしたものだ」

「そのような物を掲げてどうしようというのですか。川原殿も、斉昭公は幕府の張子の虎であったと申されるのですか。何故(なにゆえ)に節刀のお話をされるのですか。何故(なにゆえ)の征夷大將軍と申されるのですか」

川原は少し困惑していた。

「貴殿の知らぬ古(いにしえ)の話をして、話を混乱させたやも知れぬが、兎も角、聖謨(としあきら)殿には斉昭公を興し海防国事の議に参与せしめんとされたが、それを以て攘夷など行おうとのお考えはなかったという事だ。勘定奉行(かんじょうぶぎょう)であられた聖謨殿は、阿部殿の意を受けて斉昭殿のもとに参られ、申上げられた。たとえ戦(いくさ)に勝利せしも、財政は一年も堪えない。十年の間に国力の整備に努め、即時攘夷実行をお控え下さるようにと。あの頃、幕府には水戸の隠居と伊勢守の要なき企てとの流言があった」

「海防を要なき企てと申されますか」

「外寇(がいこう)よりも内乱を恐れる者達だ。外様大名には大船を造らせぬと。首謀者は内藤駿河守(するがのみ)なるも、黒幕は直弼(なおすけ)殿。斉昭殿再登用の話が起るや、直弼殿は本郷丹波守(たんばのみ)を使って家定公に、斉昭公御政務に参与するは国家の不利との書を呈さんとされた。その呈書を、本郷丹波守が誤る真似をして阿部殿に送付されたのだ」

「本郷丹波守が、寝返ったと申されますか。井伊はどうなったのですか」

「堀田殿の執り成しで事なきを得た」

「それで阿部伊勢守(いせのかみ)様は、斉昭公と手を組まれたと申されるのですか」

「手を組まれたと言っては、聊(いささ)か奇異な話となる。斉昭公と阿部殿とのご関係は複雑。高松藩は水戸の末家。斉昭公は、弘化の内訌(ないこう)以来、阿部殿が高松藩と気脈を通じて居るのではないかとお疑であった。斉昭公は申されたそうだ。大奥姉小路(あねがこうじ)は阿部と同腹、大將軍よりいずる事は一より十まで姉小路に付し、阿部と謀らしめていると」

「幕府と高松藩の邪(よこしま)な話は、耳にして居ります。安政三年、高松藩は水戸家を奪わんと役付の割付けをして居った所、斉昭公はこの動きを察知されました。古昔(こせき)にては切腹致させ程の事と激怒された斉昭公は、幕府に訴え出んとするも、あろう事か、幕府は水戸藩の側医師に毒を盛らせ、斉昭公を亡き者にせんとしたのです」

川路は困ったという顔をした。

「それは噂話だ。斯様(かよう)に幕府と水戸家の関係が、悪かったという事だ」

川原が慌てて話を遮(さえぎ)ったが、川路は席を立った。

「河原殿、今日はそのような話をしに来たのではありませぬ。お約束が違います」

「お約束と申されるのは」

私が間に入った。

「河原殿が日下部(くさかべ)殿のお話をして下されと申しますから、今日は参ったのです。何方(どなた)にとお聞きした所、長州の方にとのお話。水戸藩への勅諭(ちよくじょう)のお話、とてもお分かりいただけぬ事と、お断り申上げたのですが、河原殿の宿論、是非、薩長の方々にお話くだされと申されては、お断りする事も出来なく、参ったのです」

「それは、申し訳ない事を致しました。御身にかかわるお話、彼是(あれこれ)と穿鑿(せんさく)いたしました。お許しください。どうか、お氣を取り戻して、お話くださいませぬか」

川路は難しい顔をしていたが、また話を始めた。

「水戸藩へ下された勅諭(ちよくじょう)は、万里小路(までのこうじ)大納言(だいなごん)から水戸藩京都詰・鶴飼吉左衛門(うがい きちざえもん)殿に授けられたもの。その写しを日下部殿に渡され、東海・中山両道へ分かれ江戸に向かわれた事は、御存知の事と」

「存じて居ります。吉左衛門(きちざえもん)殿は、ご子息の幸吉(こうきち)殿に勅諭を託された事も」

「幕府への勅諭(ちよくじょう)は、大久保忠寛(ただひろ)殿に授けられました。安政五年八月水戸藩と幕府に下された戊午(ぼご)の勅諭は、巷間(こうかん)伝えられて居るような攘夷の勅諭ではないのです」

「それでは、どのような勅諭と申されるのですか。水戸藩と幕府に下された勅諭は攘夷の勅諭ではないとは」

「貴殿は勅諭をどのように聞き及んで居る」

川原が口を挟んだ。

「叡慮(えいりよ)の趣、將軍・三家・家門・外様・譜代一同群議ありて、この儀に付きて幕府または尾張水戸の両家より御答あるべくと。叡慮の事ゆえ、攘夷決行を促したものと」

「そうではないのだ。ペリー来航以来の国是(こくぜ)を示しておいたのだ。無智の政体との悔りを受けぬように」

「どういう事でしょうか」

「勅諭には、『蛮夷(ばんい)の儀は暫(しばらく)く差置き、国家の大事により、大老・老中・其他三家・三卿・家門・列藩・外様・譜代とも一同議評定ありて、徳川家を扶助し、内を整へ外夷の侮(あなど)りを受けざるやうにとの思召(お

ぼしめし』とあるのだ。攘夷(じょうい)勅諭(ちよくじょう)なら、『蛮夷の儀は暫く差置き』などと書かれはしまい
これに川路が続いた。

「幕府に下された勅諭の添書にも、関東においても大改革の時節、三家始め相心得るよう別段水戸中納言(ちゆうなごん)へ仰せ下されるようにとあるのです。勅諭の趣旨は幕政の改革を促したものです。巷間(こうかん)伝えられたものは、幕府の権威を貶(おとし)めるため、攘夷派の志士が騒ぎ立てたもので、勅諭(ちよくじょう)の精神を正しく伝えたものではありません」

「しからば、川路殿は、勅諭の御精神は、如何(いか)なるものと」

「皇道を挽回致すものと存じて居ります」

「それこそ、攘夷勅諭と申すものではありませんか」

「そうではないのです。大老・老中・御三家・御三卿・家門・列藩・外様・譜代、挙(こぞ)って評定をなし、皇国永世御安全の道を開くようにと申されて居られるのです」

「そのような事で、皇道が挽回されるとお考えなのですか」

「如何(いか)にも。これは、日下部(くさかべ)殿が奔走せし所以(ゆえん)。さもなくば、水戸藩の安泰もなく、御血脈断絶の憂き目にも会い兼ねなかつたのです。日下部殿は、幕府より蒙った斉昭公頑迷固陋(がんめいこうろう)の汚名を雪(そそ)ぐため、開国策に奔走され、水戸徳川家をして徳川中興の基(もと)を開かんとされたのです。勅諭(ちよくじょう)を授かりし鶉飼吉左衛門(うがいきちざえもん)殿は、京の姉小路(あねこうじ)のご実家に出入りし、家慶(いえよし)公・阿部伊勢守様のご意向を入説されたお方なのです」

川原がまた、口を挟んで来た。

「貴殿が耳を疑うのも無理からぬ事だ。あの俊英の橋本左内(さない)をしても、そうであつた。水戸始め尾張も攘夷を信奉。一方、井伊大老を始めとする閣老は、幕府の権威を笠に着せ、世界の趨勢(すうせい)を顧みず、幕政改革を疎かにせし者たち。左内も皇道潰壊(かいかい)、再び日月の光、世に現れずと慨歎(がいたん)して居つた所、豈(あに)図(はか)らずや、公明正大の降勅。天道善を祐(たす)け、皇威国内に輝かし外夷(がい)も波及致すものと氣を新たにしたものだ。貴殿が驚くのも無理からぬ事。水戸藩に下された勅諭の副書にも、御三家の隠居にも列藩一同にも御趣意相心得伝達されるよう念が押されたのだ。水戸家もさる事なく、尾張家も固陋(こうろう)。慶勝(よしかつ)殿御実父であられる美濃国高須(たかす)藩主松平義建(よしたつ)殿は、事態を深くご憂慮(ゆうりよ)され、市ヶ谷の尾張藩邸(へ)参られ慶勝殿に諫言されたとお話」

「御家老の竹腰(たけのこし)殿も、大骨折りとこの事でした。徳川慶勝殿、世に言う高須(たかす)四兄弟なれど、松平容保(かたもり)殿、松平定敬(さだあき)殿とは異母兄弟。慶勝殿の御祖父九代高須藩主・松平義和(よしなり)殿は、六代水戸藩主徳川治保(はるもり)殿の御子です。義和(よしなり)殿の御子の十代高須藩主松平義建(よしたつ)殿は、七代水戸藩主徳川治紀(はるとし)殿の女(むすめ)を妻とされましたから、慶勝殿は斉昭殿の甥御(おいご)という事になられます」

「全国には、心得違ひせし国持大名も居る。水戸のご隠居の尻を押し、挙(こぞ)つて京師(へ)罷(まか)り越しという事になれば、一大事。それでも、直弼(なおすけ)殿は動かれなかつた」

「動かなかつた」

「そうだ。直弼殿は動かれなかつたのだ」

「川原殿は変な事を申される。大獄の事は、井伊の所業ではありませぬか」

川原が複雑な顔をしていると、川路が助け舟を出して来た。

「そうではないのです。河原殿は、井伊大老が京の手入れをされなかったなどと申されて居られるではありません。ただ、動かなかったと申されて居られるのです」

「それは、詭弁と申すもの」

「そうではないのです」

川路は再度、否定したが、見兼ねた川原が口を開いた。

「太郎殿、その事は拙者(せつしや)からお話し致す。拙者が大老が動かなかったと申すのは、水野土佐守(とさのかみ)との激論あつての事だ」

「水野土佐守は、井伊大老の一味ではありませぬか。如何(いか)なる激論があつたと申されるのですか」

「水野土佐守は、彦根高松の工夫にて先帝を廃し、勅命を以て攘夷の外藩を掣肘(せいちゆう)致そうとされたのだ」

「井伊は、その企てに与して居らなかったとでも申されるのですか」

「そうは申して居らぬ。幕府は、嘉永(かえい)七年正月、高松藩主松平頼胤(よりたね)殿に家定公將軍宣下の名代を勤めさせ、安政二年十二月には皇宮造営を命じたのだ。安政(あんせい)四年九月には高松藩世子松平頼聰(よりとし)殿と直弼(なおすけ)殿の息女彌千代(やちよ)姫との縁組を纏(まと)め、安政五年四月、直弼殿が大老に就職される直前に婚儀を執り行なわせたのだ」

「やはり、井伊は廢帝(はいてい)の企てに与(くみ)していたのではありませぬか」

「事はそう単純な話ではないのだ。直弼(なおすけ)殿は尊皇家」

「それでは、高松藩が企てたとも申されるのですか」

「貴殿は高松藩士・長谷川宗右衛門(そうえもん)・速水(はやみ)父子の事は、存じて居ろう」

「勿論です。松陰(しょういん)先生伝馬町(でんまちょう)牢獄にてのお話に、伝え聞いて居ります。長谷川先生は、宗家水戸家との親睦にご奔走、井伊の安政の大獄により投獄されたのです。長谷川先生、『むしろ玉と為りて砕くるも、瓦(かわら)と為りて全うする勿(なか)れ』とのご覚悟。松陰先生にそのご覚悟の程を示されたのです」

「それだけか。外には。寅は獄中、同志に宗右衛門(そうえもん)殿との記念を勧められしも、よしとしなかったのだ」
「それは、何かの間違いでは。長谷川先生、弘化(こうか)元年に斉昭公が幕府の嫌疑を蒙られ幽閉されるや、幕府に上書して冤(えん)を請われたのです。嘉永(かえい)六年、ペリーが浦賀に来るや、海防策を草し斉昭公に献じられたと聞いて居ります。どういう事なのですか。松陰先生が、長谷川先生との記念をよしとされなかったというのは」

「宗右衛門殿は、享和三年、高松藩藩儒の御家に生れ、九代藩主松平頼恕(よりひろ)公の近侍を勤められた方。頼恕(よりひろ)公は、水戸藩主徳川治紀(はるとし)公の御二男、斉昭殿の兄上。頼恕(よりひろ)公は、高松藩に養子に入られ、第五代藩主松平頼恭(よりたか)公の志を継がれ、高松城西の丸に考信閣を建てられ、『大日本史』修史事業を継続されたお方だ」

「なれば、何故に、松陰先生が長谷川先生と記念をよしとされなかったと申されるのですか。松陰先生は、獄吏の目を憚ったではありませんか。どういう事なのですか。お話ください」

「高松藩十代藩主松平頼胤(よしたね)殿は、斉昭殿にも劣らぬ慷慨家(こうがい)か。先代の頼恕(よりひろ)公とは、水と油で、文化年間から御激論があつたのだ。ペリーが来航すると、阿部伊勢守の諮問に答え、開国は皇国を軽蔑侮辱するものと申された。江戸藩邸詰の宗右衛門(そうえもん)殿は頼胤(よしたね)殿の諫争に努められたが、安政四年、甥の松崎洸右衛門(しづえもん)殿とともに高松屏居(へいきよ)となられたのだ。宗右衛門(そうえもん)殿

は高松にて幽閉の身となるも、安政五年八月戊午（ぼご）の勅諭（ちよくじょう）が下ると、京に亡命され、水戸藩留守居役（るすいやく）鶴飼吉左衛門（うがい きちざえもん）殿に面会せんとされた。されども幕吏の探索厳しく、江戸に向かわれる事にされた。鶴飼（うがい）殿は宗右衛門（そうえもん）殿の事を聞き及び、彼の藩にも珍しき志の人ありと申されたそうだ」

すると川路が、また話を継いだ。

「そのような事、何も驚く事ではないのです。宗右衛門（そうえもん）殿は江戸に赴く途次、信州伊那（いな）河野村の洞岩寺を訪れ、河野新左衛門（しんざえもん）方に寄寓し、兵を募られたのです。河野村を後にされた宗右衛門（そうえもん）殿は、日下部伊三次（くさかべいそうじ）殿に会わんと江戸に入りましたが、日下部（くさかべ）殿は既に獄にありました。水戸に至るも、幕吏が迫ります。ご子息の速水（はやみ）殿は、宗右衛門殿の身代わりにならんとして、江戸藩邸に自首されますが、宗右衛門（そうえもん）殿は関東を離れ、京都に潜入されました。御藩主頼胤（よりたね）殿が、大老の安政の大獄に加勢されると、ご観念されて、大坂の高松藩邸に自首されたのです」

川路の顔には、憂国の情が見て取られた。川路が呟いた。

「井伊大老は、人望なき方。大老は祖父の事を、悪説に与して居ると申しました」

「悪説」

「堀割の一件です。祖父は家慶公のもとで普請奉行（ふしんぶぎょう）をして居りましたから」

「普請奉行が、どうかされたのですか」

「これは申し上げ難い儀なれど、長州は毛利家の家臣の方なれば、憚（はばか）る事はございません。これも河原殿の受売りなれど」

川路は川原と目を合わせた。

「憚(はばか)られる事など、何が御座いましょうか。何なりとお話ください」

「されば。大江匡房(おおえのまさふさ)卿より八幡太郎義家に伝わりし兵法は、荻生徂徠(おぎゅうそらい)によれば、武者に限らず、火消や普請の者、果ては猪狩の類にても、その限りではないのです。その詳細は、学なき私が申す事ではないのですが、徂徠(そらい)が『韓非子(かんぴし)』を読むに至り、『鄭懸の人、豚を売る』の条に暗示されて居るとの事ですが、未だ謎とされております。子細は申し上げかねますが、奥向き義民義挙に関わること故、通商条約締結後、堀田殿罷免に至ったのも、井伊大老が奥向きの事から手を引かれたからです。祖父の事も勿論、夏目家の事もそうです」

「夏目家」

「貴殿は、夏目長右衛門(なつめ ちようえもん)殿の事を知っておろう」

川原が口を挟んだ。

「存じませぬが」

「それでは、南部藩士・相馬大作(そうま だいさく)の事なら知って居ろう。寅も東北遊覧した事でもあるし」

「その事なら、存じて居ります。津軽藩主・越中守(えつちゅうのかみ)寧親(やすちか)の帰城道筋にて要撃せんとするも、幕吏の手によって小塚原(こづかはら)に露と消えられし方。それで夏目殿が、どうしたと申されるのですか」

「相馬殿は、江戸で夏目長右衛門(なつめ ちようえもん)殿から武芸を学ばれたのだ」

「それで、井伊家とどの様な関係があるのですか。井伊が何かしたのですか」

「何もされなかつた」

「何もされなかつたとは、どういう事ですか」

「三方ヶ原の戦いで、家康公の窮地を救われし夏目吉信殿の武勇は、語り草。夏目家家紋、井の中の菊。井伊家とは、深き縁のあるお家柄。されど、直弼殿は御側衆御用御取次（ごようおとりつぎ）の職にあつた夏目信明殿が卒去されても、ご一族には何もされなかつたのだ」

「何もされなかつたと申されるのは、少し語弊があります。大老は小石川の川路邸を、夏目殿のご遺族にあてがわれたのです。何でも夏目家のご先祖は、信州伊那（いな）郡夏目村の豪族であると聞いて居ります。当時、夏目家のお屋敷は、後の文久元年十一月から日光奉行を勤められた小花和（おばなわ）内膳正（ないぜん）のしょう度正（なりまさ）殿の牛込（うしごめ）小日向（こひなた）馬場東横町のお屋敷の隣りにあり、両家は懇意にされて居られました。度正（なりまさ）殿のお父上は、夏目信行殿のご三男で、小花和（おばなわ）家に養子として入られ、小花和（おばなわ）家の親戚の米田（こめだ）家から嫁を娶（めと）り、お生まれになられたのが度正（なりまさ）殿なのです。今、この使節に随行して居られる長野桂次郎（ながのけいじろう）殿は、度正（なりまさ）殿のご次男なのです。度正（なりまさ）殿の日光奉行のお役目に関しては、井伊大老御存命の時から話がありましたが、大老が桜田門外の変で亡くなられた後に晴れてご就任とされましたが、朝野で攘夷が激しくなつた文久二年十二月に御役御免（おやくごめん）となられたのです」

川路が静かな声で言った。

「川路家は、どうされたのですか」

「急なお達し。大叔父の井上清直（きよなお）殿のもとに身を寄せました。後に御用御取次（ごようおとりつぎ）に登用された薬師寺（やくしじ）筑前守（ちくぜんのかみ）元真（もとざね）殿が住まわれていた表六番町のお宅に移りま

したが、小石川の邸宅とは比べ様もなく」

「それは、さぞかし悔しい思いを」

「邸宅の事もさりながら、祖父は、要路にありし日にしたためた御三家、諸侯への建言書草案書簡等を火に投じられました。この時、私もお手伝い致しましたが、事の重大さに身震い致しました」

「拙者も、太郎殿から手元に残された書類を見せて貰ったが、返す返す残念でたまらない。聖謨（としあきら）殿が交わりし天下の志士との書簡が残って居ったらと思うと」

「井伊の所業、憎むべしというものです」

「祖父聖謨（としあきら）は、甲斐（かい）武田家の遺臣。井伊の赤甲軍団とは、因縁浅からぬ間柄。悪説に与しているなどとは、言語道断（ごんごどうだん）の事です」

川原も頷いていた。

「もう、遅くなりました。今宵はこれ迄という事で、宜しゅう御座いましょうか」

「太郎殿、今宵は本当に有難う御座った」

川原は微笑まれた。

「川路殿、大変なお話、畏れ入りました。お見知り置きの程、お願い申し上げます」

「此方（こちら）こそ」

川路は安堵（あんど）の表情を浮かべて、部屋を後にした。

川原は川路を送ると、堀田備中（びつちゅう）帰府後の顛末（てんまつ）を話し始めた。

「やはり阿部殿ほどの力量を持った閣老（かくろう）が居らなくては、事は出来なかったという事だ」

「事」

「阿部殿が幕府を纏(まと)め、斉彬(なりあきら)殿が朝廷と外様大名の工作を行う。お二人が最善を尽くして初めて成就する密計であった」

「密計」

「そうだ。もともと、直弼(なおすけ)殿は、阿部殿のなされる事を好く思われて居らなかつた。阿部伊勢守(いせのみ)が登用したる海防掛(かいぼうがかり)の面々、枢要(すうよう)職務を誇り、おのがままなる事ばかりを申し、上を犯す不遜の振舞いと怒り心頭であられた。岩瀬肥後守(ひごのかみ)などは、不敬の申し立てもあれば、取り除けずしては叶うまじと、その機を窺つて居られたのだ」

「不敬の申し立てと申されますのは」

「天朝(てんてう)へ御伺(ごご)濟にならずしてアメリカとの仮条約調印は出来ないとお考えは、井伊殿と若年寄の本多美濃守(みののかみ)だけであつた。堀田殿がアメリカ一条に関する御上(おかみ)のご返答を江戸に持ち帰ると、ご返答を布告するか否かが問題となつた。ご返答には、三家以下諸大名へも台命を下され、再応衆議の上、言上あるべくとある。上田藩主松平忠固(ただかた)殿は勅許の奏請も無用としたくらいだ、反対である事は申すまでもない。京の事情を知る堀田殿も、勿論、公表しては大事に至ると反対されたが、この時、大老に就職された直弼(なおすけ)殿は、老獐(ろうかい)に立ち回れたのだ。御上(おかみ)が今一応諸侯の赤心を尋ねよとの仰せであるから、諸侯の存慮を尋ねるようにと申された」

「それは見上げた御心掛けではありませんか。川原殿は何故に、老獐(ろうかい)などと申されるのですか」

「直弼(なおすけ)殿はその上で、内奏を取り締まるようにと申されたのだ。將軍家のご意向を腹藏無く命じ、もし内

乱を企てるものがあれば退治するまでの事と。直弼殿は御三家諸大名に登城を命じ、勅旨を伝達した。將軍家のご意向に反対したのは、やはり水戸尾張の御三家筋であった。斉昭（なりあき）殿は、老中方に直々に建言された」

「斉昭公は、どのようなご建言をなされたのですか」

「夷狄（いてき）の事は暫（しばら）く差し置き、閣僚は共和政治を模倣しているが、我が国は封建の国であり、強いて施行してもお模（かたぎ）通りにならないと。その上で、武備が整うまでの十五年間、差し障（さしさわ）りのない一、二港を開き、公使駐在、直貿易、教会設立の三件は決して許されないようにと」

「川原殿は、斉昭（なりあき）公を内乱を企てる者と申されるのですか」

「斉昭殿が、内乱を企てる筈もない。この時、返す返す残念だったのは、松平忠固（ただかた）殿の事だ。条約調印の事を急がれ、慶喜公継嗣（けいし）の事は、斉昭殿攘夷派の勢力を助長し条約調印に差し障りが出ると言い出されたのだ。その一方で、忠固（ただかた）殿は京での長袖者流（ちょうしゅうしゃりゅう）の論議を頼んでは、時機を誤ると、条約調印の断行を發議された。このままでは、アメリカとの平和開国の交渉が水の泡となると。そのみか、岩瀬殿の論には廢帝に似たものがあるなどと申されて、大老に同調されてしまわれた。直弼（なおすけ）殿からは小身者の分際で權威を誇ると嫌われて居ったのだ。」

「これには、土岐（とき）殿などは憤懣（ふんまん）やるかたない。慶喜（よしのぶ）公西城の事は家斉公薨去（こうきよ）の砌（みぎり）、家慶公の思召しによるもの。慶喜公人傑にて天下の為にと言を尽くすも、忠の道を知らぬ者と言われる。伊賀守ほどの学のある方がだ。口惜（くちお）しいと、今にも腹かつ切りかねぬご様子であった。一橋の面々も条約調印の事で朋党（ほうとう）の論に落ち、慶喜公継嗣（けいし）の事で堀田殿は孤立された」

「井伊の本心は、那邊（なへん）にあったのでしょうか。本当に条約調印の事に反対だったのですか」

「反対も何もない。台命(たいめい)だ。幕府は、アメリカを手始めに条約を調印し、諸国に向けて開国せんとしたのだ。大老は井上岩瀬の兩人を招き、勅許(ちよつきよ)を得るまでは調印を延期するよう命じられたが、堀田殿と松平忠固(ただかた)殿はハリスからイギリス・フランス艦隊来航との報を得ると、仮条約(かりじょうやく)調印の事を断行された。京ではとても勅許(ちよつきよ)を得られものではなかった。国を閉ざした時にも、勅を得なかったのだ。堀田殿ら老中方は、連署にて宿次奉書(しゆくつきしよ)を広橋・万里小路(までのこうじ)の両伝奏(てんそう)に送致された。この時、大老は、堀田殿と松平忠固(ただかた)殿の職を奪い、掛川藩主太田備後守(びんごのかみ)、鯖江(さばえ)藩主間部(まなべ)下総守(しもうさのかみ)、西尾藩主松平和泉守(いずみのかみ)を老中に任じられたのだ。老獪(ろうかい)と申したのは、この事だ。表向きは、独断調印の不敬を糺された事になって居るが、何の事はない。直弼(なおすけ)殿が、奥向きの事から手を引かれただけだ。阿部殿登用の有志の中にも、大老に荷担する者も現れ、奥祐筆(おくゆうひつ)に向かい正論の同類は追々貶黜(へんちゆうつ)、堀田遠からずとの放言を致す。仮条約調印の事は、然(さ)したる事ではない」

「条約調印の事が、然(さ)したる事ではないとは、どういう事でしょうか。通商条約が調印されると、斉昭(なりあき)公はご長男の慶篤(よしあつ)殿と尾張の慶勝(よしかつ)殿とともにご登城され、それが元で幽閉されたのではないのですか。斉昭公は登城して、井伊に何と申されたのかご存じないのですか」

「存じて居る。春嶽(しゅんがく)殿を大老にと申されたのだ。それには、間部殿が大老を二人置く例がないと退けられた。慶喜(よしのぶ)公継嗣の事は、慶勝殿から申し出られたが、大老は台慮であるから取り計らう事が出来ない」と申されたのだ。この時、春嶽(しゅんがく)殿も一緒に登城されたが、御三家とは身分が違ふと別席となった」

「井伊は斉昭公と春嶽(しゅんがく)公を離間せんとしたのですか」

「そうだ。井伊殿は事前に春嶽殿に協力を求められて居ったのだ。紀州の慶福（よしとみ）殿が將軍継嗣に決まつても、持論をすてて忠誠を尽して欲しいと」

「慶喜は登城したのですか」

「斉昭殿と別にご登城され、条約調印の事を一片の宿次奉書（しゆくつぎほうしよ）で済ませたのは不敬ではないかと大老に問い質された」

「井伊は何と」

「不日私どもの中一人上京させ、委曲を奏聞させると約束された。慶喜公も紀州侯を継嗣とする事に異存がないと申されたのだ。慶喜公のご登城は、田安慶頼（よしより）殿と正規のもの。慶喜公の御処分は、謂れの無き事。江戸がこの有様だ。薩摩にあつて斉彬（なりあきら）殿は、一大決心の時を迎えられた」

「一大決心」

「このままでは皇国の大改革が滞ると、斉彬（なりあきら）殿は兵を率いて上京される事を決心されたのだ。これまでも、再三、近衛家から異国船到来に備えて京都警衛にあたるよう依頼されても、天下大乱を誘発する事を恐れ断つて居られたのだ。」

その手始めに、斉彬（なりあきら）殿は西郷を筑前の黒田斉溥（ながひろ）殿の所に遣わし、斉彬殿の意のあるところを直々に伝えられた。その後、西郷は吉井友実（よししいともざね）と大坂に入り、情勢を探った。二人は関東の形勢が一変した事を知り愕然（がくぜん）とした。西郷は吉井と京都に入り、同志の前で一首。

『東風（こち）吹かば花や散るらん橘の香をば袂につゝみしものを』

「いち」

「東風の古名だ」

「その心は」

「東風は風なれど、靡（なび）くの意に非ず。東風の音は、遠近に近し。そこにまた、西郷を悲しみのどん底に陥れる知らせが入った。斉彬殿がお亡くなりになられたのだ。西郷は殉死を決意するも、近衛家に入入りする僧月照に諫められたのだ。この話は、御存知の事」

「勿論です。それで西郷さんは」

「江戸に向かった」

「江戸で何をされたのですか」

「勅諭（ちよくじょう）の事で水戸尾張両藩に接触しようとした。水戸藩に下された勅諭は、実は斉彬殿の入京を待つて下される事になっていたもの。突然の斉彬殿の御不幸で、水戸藩に下される事になったのだ。江戸に赴いた西郷は、水戸藩へ下された勅諭と同じものを持参した。だが、先帝の強固なご意向を知って、江戸での工作を諦（あきら）め京に戻った。京では近衛家から月照（げっしょう）の保護を依頼されたが、とても匿（かくま）えるものではない。西郷と月照は薩摩に行くも、追いつめられたのだ」

「それで西郷さんと月照殿は、入水自殺をされた」

「そうだ。西郷は古の遺制の丸木船に月照を乗せて、鹿児島湾から日向に向かったのだ」

「丸木船」

「そうだ。古を伝える丸木船でだ。鹿児島湾から三里計り行くと、心岳寺（しんがくじ）という寺が左方に見える。その地を龍が水というが、そこに来ると、西郷は和尚（おしょう）に『一寸（いっすん）此処（ここ）へお出下され』と叫び、

心岳寺の謂われを話した」

「どの様な」

「天文・天正の頃、藩主義久（よしひさ）と義弘（よしひろ）の兄弟は秀吉と和睦したが、その弟の歳久（としひさ）は、義久義弘の意に逆らって、太閤帰陣の途中に待伏せ狙撃せんとした。それが太閤に聞こえて、割腹が命ぜられた所が心岳寺だと。西郷は、鹿児島藩士は歳久（としひさ）を不憫に思い今も参詣が絶えませぬと言って、和尚に心岳寺に向かつて合掌膜拝（もはい）させると、大手を伸ばし和尚（おしょう）を抱き抱え海中にざんぶと飛び込んだのだ。同乗していた平野次郎は驚愕し、船頭水手（かこ）残らず海に飛び込み、兩人を引き揚げた。浜で焚き火をして温めたところ、西郷は体気が付いて来たが、和尚には氣息（きそく）がない。仕方がないから、二人を船に乗せて帰って来た。西郷は三日三夜人事不省であったが、三日目に人事を覚えるようになった。西郷が申すには、和尚は法体のことであれば、劍戟（けんげき）を用いずして死んだ方が宜かろうと考えたと」

「西郷さんがそのような事を」

「薩摩藩では、江戸で勅諭（ちよくじょう）を周旋（しゅうせん）せんとした西郷を奄美大島（あまみおおしま）に流す事にした」

「西郷さんが奄美大島に流されたのは、月照（げっしょう）殿を匿（かくま）ったからではないのですか」

「それは表向きの事」

「大久保先生は、何をして居られたのですか」

「精忠組（せいちゅうぐみ）有志と京に上り、井伊大老の息の掛かった九条閑白と所司代（しよしだい）の酒井忠義（ただあき）殿を倒す事にした。大久保は流刑直前の西郷に書を送り、突出決行の時期について意見を求めた」

「それで、西郷さんは」

「軽挙すべきでない。肥後藩が同意しても、越前藩に問い合わせよ。それで大久保は、越前藩と連合して蹶起（けつき）する事にした。勿論、それが叶わぬ時は、脱藩して義挙に加わる覚悟であったが」

「それで、大久保先生は蹶起（けつき）されたのですか」

「自重した。藩主忠義（ただよし）殿と実父の久光（ひさみつ）殿が、大久保に万一時変到来の節は順聖公のご深意を貫き、誠忠を尽くして呉れる様にと自重を求めたのだ」

「順聖公」

「斉彬（なりあきら）殿のことだ」

「それで大久保先生は、自重されたのですか」

「そうだ」

「大久保先生にして、大事をなす事が出来なかつたのですか」

あの時、間部詮勝（まなべあきかつ）を要撃しておけば。あの抑え難い感情にまた襲われた。

「それで、井伊は間部（まなべ）を上京させ、如何（いか）なる奏上をしたのですか」

「蒸気船等の発明により夷国の軍備は昔日の比ではない今日、先ず神奈川長崎箱館新潟で交易を許し、別条なければ五、六年後に兵庫も開港し、海岸防備を整え十三、四年後再び条約を再考するものと。今般下田に入港したアメリカ船の情報では、英仏両軍が清国との勝利に乗じて近々日本に渡来する模様であるから、清国の轍（てつ）を踏まぬよう、アメリカと仮条約を結んだと」

「それでは、慶喜の口上と違わぬではありませんか」

「間部殿は、慶喜公が決して口にされぬ事を申された」

「どのような」

「大老は幾万(いくまん)の夷艦(いかん)が来ようともし勅許(ちよつきよ)を得た上での決心であつたが、備中守・伊賀守の両人が大老の病氣不参に乗じ独断で調印してしまった。これは慶喜を西丸に入れ悪計を遂げようとする水戸老卿の隠謀に起因するものであると」

「川原殿は、先帝がそのような言い逃れを聞き入られるとでもお思いのですか。先帝はご讓位の事を口にされたからには、後白河法皇のように、法衣をまとわれ内乱に臨まれるお覚悟を示されたのではないのですか」

「好い加減な話でもないのだ。幕府は攘夷を企(たくら)みし者たちに手を焼いて居つたのだ。江戸、京、彦根にて攘夷を煽り、その騒ぎに乗じて江戸にて將軍家茂(いえもち)公を廃し、京にあつては先帝を廃して中川宮を樹立せんとする者たちが居つたのだ。それ故、長野主膳(しゅぜん)は京での弾圧に臨み、大老に意見された。主上(しゅじょう)に思召(おぼしめ)し違いさえなければ朝家のご衰微を招く事はないと。御上(おかみ)も、幕府の弾圧が鷹司(たかつかさ)父子に及ぶと、大樹(たいじゆ)以下大老老中の真意は鎖国の良法に引戻す事だと解され、和宮(かずのみや)様降嫁(こうか)の事をお許しになられたのだ。それで、公武合体して早く国威を挽回すべしとのご宣達(せんたつ)が下されたのだ。鷹司(たかつかさ)太閤は、戊午(ぼご)の勅詔(ちよくじよう)を幕府と水戸藩に下されしお方。御老中の中には、勅詔(ちよくじよう)には九条閑白の副署なく、偽勅(いちよく)同様、穩便に済ませよとの声もあつただが」

川原は溜息をついた。

「慶喜(よしのぶ)公も家茂(いえもち)公も、通商の事も朝廷尊奉(そんぽう)の事も考えは同じだった。ただ、慶喜公

は諸侯一致の事を考えられた。紀州侯を擁立した者達は、この考えを警戒した。それでいて、俄（にわか）通商をやるうというのだ。本気で共和政治をやるうという者はいなくなつた。直弼（なおすけ）殿が登用した者は、幕府の権威をかざす者たち。彦根も水戸と変わらぬ尊攘藩。大老は丸腰だ。桜田門外の事は、起こるべくして起こつた事だ。直弼（なおすけ）殿は、徒（いたずら）に虚威を張り、区々の名分を争い、事態を悪化させてしまつた」

川原は苦悩の表情を深めた。

「幕府は岩瀬殿、永井殿、川路殿といった事務精練な能吏を失い、古学に通じたる賢者も政権を離れてしまつた。水野土佐守は、故郷新宮（しんぐうし）に身を潜めた。故に、直弼（なおすけ）殿亡き後、安藤対馬守（つしまのかみ）は古（いにしえ）の政治を行うべく事を進められたのだ。されど開国の事は、御上（おかみ）がお許しにならない。そこで貴藩の長井雅楽（ながい うた）殿が航海遠略策（こうかいえんりやくさく）と称し、経綸（けいりん）的開国論を唱えられた。御上（おかみ）のご意向を逆手に取つて、天照大神（あまてらすおおみかみ）の遺訓（いくん）に基づき、開港して国威を海外に宣揚（せんよう）せんよとせんよというのだ。慶親（よしちか）殿は、文久元年に京に長井殿を遣わし、岩倉殿の力添えを得て公武の間を周旋されたのだ」

川原は私の顔色を窺つた。

「所がだ。残念な事に、慶喜公將軍後見職就任と時を同じくして、貴藩が藩論を攘夷に転換してしまつた。その頃、長州の方々が、どのようなお考えで長井殿の暗殺を企てられたのかは存ぜぬ。しかも、土州と謀つて三条勅使を東下させるや、岩倉殿を幽閉の身としてしまつた。文久三年八月十八日に朝廷から貴藩の者が放逐されると、今度は嘆願と称して長州藩兵が京周辺に結集する。この時、海舟（かいしゅう）殿は神戸の海軍仮局に居られたが、長州藩が順逆を誤り戦闘が起きたと大坂から飛脚（ひきやく）が来たのだ」

「長州藩が順逆を誤ったと申されるのですか」

「そうだ。海舟殿は匿って居られた長州人に、上洛される長門守（ながとのかみ）には無謀の徒と事をなさらぬようにと言付けをして、大坂に向かわれたのだ。海舟殿は禁門（きんもん）堺町御門（さかいまちごもん）の後、毛利父子のために寛大な処置が下るよう周旋されたのだ」

「幕臣の勝先生が、君公父子のために」

「慶喜（よしのぶ）公のお考えだ。長州藩兵入京に際し、会津桑名両藩士がこれを討たんとするも、慶喜公はこれを固く制止されて居られたのだ」

「何故に」

「時期に朝廷より長州入京御免（ごめん）の御沙汰（ごさた）も出ると」

「それでは何故に、前將軍は」

「長藩兵が暴発し、会藩に攻撃を仕掛けたからだ。慶喜公は大砲方に命じて、鷹司（たかつかさ）家に火を放ち事態沈静を図るも、長州方は御所（ごしよ）目掛けて砲撃をなしたのだ」

「我が藩は嘆願に赴いたのです。御所（ごしよ）に砲撃などという事は、幕府の誣言（ふげん）です。我が藩は、毛利元就（もうりもととなり）公の時代に勅命により陶晴賢（すえはるかた）を討伐。正親町（おおぎまち）天皇の御踐祚（ごせんそ）にあたりましては、石州の銀山を獻納（けんのおう）。以来、毛利家は朝廷とは特別な関係にあるのです。奏聞（そうもん）は勧修寺（かじゅうじ）家の手を経て行われ、女房奉書（にようぼうほうしよ）を賜る特別な家柄なのです」

「それでは聞こう。毛利氏の祖は、何処（どこ）の出であった」

「大江家です。毛利家は天穂日命（あめのほひのみこと）・野見宿禰（のみすくね）を祖とする大江の末流にして、大

江氏は平城（へいぜい）天皇の皇子（みこ）の阿保親王（あぼしんのう）より出られたのです」

「それでは、天穂日命（あめのほひのみこと）が、いかなる神が存じて居るのか」

「勿論です。天照大神（あまてらすおおみかみ）様と須佐之男命（すさのおのみこと）との誓約（うけひ）の折、天照大神（あまてらすおおみかみ）様の勾玉（まがたま）からお生まれになられた男神様です」

「それでは何故、天穂日命（あめのほひのみこと）は、天照大神（あまてらすおおみかみ）からの国土奉還の使命に背かれ、須佐之男尊（すさのおのみこと）の御子の大国主神（おおくにぬしのかみ）の家来になられたのだ」

「そのような神様のご事情、私には分からぬ事です」

「土師（はじ）氏の事は」

「毛利家、祖とする所ではありません」

「誰がそのような事を申した」

「私のような若輩者が、軽々しく論ずる所ではないのです。松陰先生も申されて居られたそうです。我が藩の歴世を誣（し）いる事は、出来ないものだ」と

「そういう事か。大江匡房（おおえのまさふさ）公の事は、どのように聞いて居る」

「公は源義家の事を兵法を知らぬ者と申されたとか」

「それでは伊予守（いよのかみ）の事は」

「何の事でしようか」

「受領（ずりよう）国司（こくし）を定める心賦（しんぷ）は、学ぶべきものではないのか。それでは、『傀儡子記（くぐつ

き）』の事は」

「何故に、人形回しの事など申されるのですか」

「それでは、ご曾孫の大江広元（おおえのひろもと）公の事は。まさか、存じて居らぬなどと申すまい。広元公は頼朝公の招きで、公文所（くもんじよ）の別当となられたお方」

川原殿は、ひどく落胆して居られた。それが一体どうしたとの思いもあつたが、あのような顔をする川原を見た事がなかった。

「川原殿は何故に、そのような事を聞かれるのですか」

「兎も角、貴藩の者と土佐藩の者が、十津川の郷士を使い御所（ごしよ）に潜入し鳳輦（ほうれん）を動かさんとした事は、紛れも無い事。慶喜公は、禁裏附（きんりづき）糟谷（かすや）筑後守から十津川郷士が鳳輦（ほうれん）を奪わんとする密報があり、御上（おかみ）を急ぎ紫宸殿（ししんでん）にお移し給われたのだ。すると、禁中に侵入していた郷士等も諦め、板輿（いたごし）を擁し去つたのだ。一旦、勅命出れば、跡へはお引き遊ばれずという事か。後鳥羽（ごことば）帝・後醍醐（ごだいご）帝のご厄難も顧みない。万事が万事、こうだ」

川原は忌々しそうに言う、更に話を続けた。

「幕府では、小笠原長行（おがさわら）ながみち殿など、どうせ攘夷など出来ぬのだから、はつきり御上（おかみ）に申すと文久三年四月上洛された。お聞き入れにならない時には、承久の時の覚悟でだ。この時、慶喜公は京から江戸にお戻りなられた。途中、熱田にお泊りの時に、江戸から目付の堀宮内殿が参り、生麦事件（なまむぎじけん）の賠償金を支払う事になったと言つて来た。慶喜公は此度は攘夷を是非しなければならぬから、異存を申すものは手付にするとのご書面を江戸に送られた。勿論、慶喜公には攘夷などというお考えはない」

「方便と申されるのですか」

「そうだ。先ずは京に引き連れた武田耕雲斎(たけだ こううんさい)を熱田から出立致す事にさせたのだ」

「何故に、そのような事を」

「承久(じょうきゅう)の事になつては、大変だ。一先ず、緩めておいたのだ。源頼朝の母は、熱田神宮宮司藤原季範(すえのり)の娘」

「藤原季範(ふじわらの すえのり)」

「熱田神宮二十三世大宮司員職(かずとも)が、娘の松御前に藤原南家の季兼(すえかね)を婿取りさせて、生まれた子が季範(すえのり)だ。季範が大宮司家を継ぐと、大宮司家は尾張氏を改め藤原氏を称したのだ。尾張氏は天火明命(あめのほあかりのみこと)の後で、天下明命(あまのほしほみのみこと)の御子と申されるから、瓊杵尊(にぎのみこと)のご同胞であらせられる。そもその話、尾張氏は大和国葛城高尾張村の出。小止与命(おとよのみこと)の代に尾張國小針に移られ、そこで、大印岐(おおいみき)が女・真敷刀俣(ましきとべ)を娶られ、建稲種公(たけいなだのみき)と宮簀姫(みやずひめ)を儲けられたのだ。

それにしても長州倒幕の企て、巧妙。加茂行幸(ぎょうこう)にて將軍家を供奉(ぐぶ)、お辞儀をさせる。次に、八幡行幸(ぎょうこう)にて攘夷の節刀を賜らんとする。最後に大和行幸(ぎょうこう)という事になつて、京方を倒幕に引つ張り込まんとする」

川原の話は、深夜延々と及んだ。慶応元年五月、將軍家茂(いえもち)公自ら再征長のために江戸を發たれたが、家茂公は慶応二年正月、祖先以来の忠勤により毛利大膳(だいぜん)父子に格別寛大なご処置を下されるよう朝廷にご奏請されたという。何故に、將軍家がそのような事をとの問いに、家茂(いえもち)公は天主台にお上りご遠望され、毎日、講武所(こうぶしょ)馬場にて近侍(きんじ)や供方(ともがた)と武術乗馬をご御覽になられて居られたと

いう。川原は紀州家奥向きの話などされたが、また明晩の事となつた。私が部屋に戻ろうとすると、川原は止めた。暗闇で寢床を整えたのでは、頭を高くして歩けなくなると。川原の部屋で一夜を明かす事とした。

十

翌朝、食堂に出掛けると大久保先生が居られた。お宅でも洋服を着て過ごされて居るといふから、そのハイカラ振り板に付いていた。朝はいつもパンと紅茶だという。

金子堅太郎(かねこけんたろう)君が何時もの小僧を連れて、食卓に現われた。

「宜しいのですか」

「何がだ」

「留学生は、伊藤先生のご高論を拝聴して居ります」

「よいのだ。伊藤先生の話には、耳に聾(たこ)が出来て居る」

「伊藤副使の随員をされて居られるのでは」

「皇国の先行きを案じての事だ」

「皇国の先行き」

「貴殿は水戸学を修め、漢学の修養ある者なれば、お分かり頂ける事。我等は尊攘の大義を唱え、幕府を倒したの

だ。かかる世を誰が望んだ」

「かかる世」

「そうは思わぬか。我が支藩の岩国藩にても、吉川経幹（きつかわ つねまさ）殿の御三男・重吉（ちようきち）君を使節に託された」

「それが、どうかされましたか」

「岩国のお城住まいから、江戸にては長屋住まい。入江二郎と名乗られ、身分を隠され、開成学校に通われて居られたのだ。ご本人は英語学級で首席を得、お喜びとの事というが、御年（おんとし）十三歳。木戸先生は新知識を身に付け、他日に期すものと申されるが、かかる軽挙、如何（いか）なる結末を招くか、案じて居るのだ。貴殿もそう思わぬか」

金子君は困った顔をした。

「その者は、幾（いく）つになられた」

「十四です」

金子君の傍らでダフダフのズボンを穿いた小僧が、暇を持って余し立っていた。

「何故に使節に」

「この者は、団琢磨（だん たくま）と申しまして、団権大参事（ごんのだいさんじ）のご養子です。ご実父様の神尾宅之丞（たくのじょう）殿は、長溥（ながひろ）公の近侍（きんじ）をして居られた方です。此度（こたび）の洋行の事は、長溥（ながひろ）公が我等の如き封建の遺風に馴染（なじ）まぬ少年を長知（ながとも）殿の随行にとおっしゃられての事です」

金子君は話を逸(そ)らした。

「それで伊藤先生は、留学生に何を話されて居られるのだ」

「イギリスに留学された時の話や昨年、アメリカに行かれた時の話です。先日山口副使のご子息を他愛も無い事でおからかいになつて居られました」

「他愛も無い事とは、どんな事か」

金子君は少し躊躇していた。

「俊太郎(しゅんたろう)君は、米国にて大統領となる学問をする積りとか」

「ご同輩ではないか」

「ご同輩など申されては困ります。私はアメリカで法律の勉強を致すのです。俊太郎君は、大学卒業の暁には日本に帰り、天子様に代わり大統領になると。これには流石(さすが)の伊藤副使も、将来逆反(ぎやくほん)人になる積りかと大笑いして立ち去られました。俊太郎(しゅんたろう)君は、けな気なものです」

「けな気」

「伊藤副使に親父(おやじ)殿の事を貶(けな)されたものですから」

「伊藤先生は、何を言われた」

「おまえの親父は馬鹿(ばか)じゃと」

「本当にそのように言われたのか」

「俊太郎君も負けては居りません。天子様が馬鹿(ばか)を副使になさる筈(はず)がないと。僕の親父が馬鹿なら、同役のおまえも馬鹿じゃと。これには、伊藤副使も一本やられたと」

「他愛もない。困つたものだ」

「俊太郎君、九歳の少年といえ、利発な御子（おこ）と評判です」

金子君はそう言うと言と視線を伏せた。食事を終えられた大久保先生が通り過ぎて行かれた。

金子君は声を潜めて言った。

「存じて居られますか」

「何をだ」

「島津の先君斉彬（なりあきら）公と黒田の老公が縁戚にあられた事を。老公は島津重豪（しまづ しげひで）公の御七男。斉彬公は重豪（しげひで）公の御孫なのです」

「それは、知らんじやった」

「斉彬（なりあきら）公の蘭癖は有名ですが、老公（ろうこう）も中々なものです。ペリーが来航すると、万国の形勢鎖国を許さず、自由に海外渡航を許し、国威を宣揚（せんよう）されよと幕府に建言されたそうですから。東京にても老公は何時も洋服を着られ、和服姿を目にした事はありません」

やはり、真の友は得難きものなのか。水戸学を修めし金子君にして、この物言い。金子君も西洋被（かぶ）れの一類か。朱に交われれば赤くなるもの。

「貴藩の紋は、確か黒丸ではなかつたのではないのか。何時から日の丸を掲げられた」

金子君は怪訝な顔をした。

「何の事ですか。我が藩の紋を朱に染めれとでも申されるのですか。お気に召されないのでですか」

「あれは幕府のハイカラ共が掲げたものだ」

「何故、そのような事を申されるのですか。日の丸を黒に染めろとでも申されて居られるのですか」

金子君の感情を害したようであつた。

「お気を悪くされたなら、僕の不徳の致す所だ。僕が言いたかつた事は、西郷さんが、斉彬（なりあきら）公に意見された事を存じて居られるかという事なのだ」

「西郷さんが、斉彬公にどのような意見をされたと申されるのですか」

「国家万一の危急に備える時に、水戸あたりでも蘭癖ある者を悪むもの少くないと」

金子君は眉を顰（ひそ）めた。

「それは何時のお話ですか」

「安政の初め、江戸藩邸で御庭番（おにわばん）を勤められた頃の話だ」

「その話なら、伊藤先生がお話されて居られました」

「どのような話をされた」

「その話は藤田東湖（ふじたとうこ）先生辺りから出た話とおっしゃって居られました」

金子君はそう言うと、小僧と席を立てて行つた。

部屋に戻ると、奴が待ち受けて居つた。

「何処に居つた」

「何処でもよいではないか」

「君も側に置けなくなつた。昨夜、伊藤先生が来られたぞ」

「何しに來られた」

「留学の話だ」

「その事なら、木戸先生から話して貰う。木戸先生には、秘策が御ありだ。それより、長崎に居ったあの者たちは、どうするのだ。大和（やまと）郡山（こおりやま）藩の預けとなったと聞くが」

「耶蘇教（やそきょう）が解禁されるまで、吉野の天川に送る事になった。津藩預けになった者もだ」

「井上先生は何故に、あのような措置を取られた。井上先生は、隠れキリシタンではあるまいな」

「いやしくも平田の学を学んだ者なら、そのような事を口にするものではない。神道は宇宙の大道だ。井上先生の養父様は、大層な神道家だ。毎朝肩衣（かたぎぬ）姿で神棚に拝伏（はいふく）して祝詞（のりと）を唱えて居られたという。井上先生も傍らで拝伏して居られたそうだ」

「それで、あのような処置を下したというのか」

「養母様は、観音様を熱心に信仰されて居られた。毎夜、観音堂参詣（さんけい）をされて居られたとか。井上先生も同伴され、観音経を読誦（どくじゆ）された」

「それは養家の志道（しじ）家の話であろう。僕が知りたいのは、生家の事だ。井上家は本当に名家なのか」

「井上氏なくして今の毛利氏はない。毛利元就公は井上氏の力で、本家を継がれる事になられたのだ。井上氏は信濃高井郡井上に土着した清和源氏の名族だ」

「それでは何故に、元就（もとなり）公は井上一族を誅滅（ちゆうめつ）されたのだ」

「毛利家を凌ぐものになったからだ」

「それでは何故に、井上先生は君公父子に仕えて居る」

「支族の五郎三郎と申される方が、元就公に恭順の意を示されたからだ。井上家では家督を継がれると、五郎三郎と名乗られるそうさ。天文（てんぶん）年間の事だ。色々あったのだ。毛利家が井上先生一族を討ったのも、尼子（あまご）が新宮党（しんぐうとう）を討ったのも、至誠を尽くされての事だ」

「どうい事だ。何故に尼子が至誠を尽くしたなどと言う」

「毛利の成功も尼子の失敗も紙一重だ。かつて尼子経久（あまご つねひさ）は、足利義晴（よしはる）を將軍にせんとして、近江（おうみ）観音寺城主・佐々木定頼（さだより）に一味したのだ」

「尼子経久（あまご）つねひさは何故に、佐々木定頼（さだより）に近づいた」

「尼子は近江佐々木氏の後裔（こうえい）だ。佐々木定綱（ささき さだつな）の子孫が近江犬上郡（いぬがみこおり）尼子に住し、出雲の守護代として月山富田城（がつさんどじょう）に入り、出雲尼子氏の始をなしたのだ。君は前原一誠（まえはら いっせい）殿の事を知らぬのか。前原殿の一族は、尼子の支族。出雲に移り住む前に、近江は湖南の米原村に居られたのだ」

「何故に、そのような事を詮索（せんさく）する」

「近江犬上郡の鎮守は、多賀社。もとは得宗領（とくそうりょう）、執権北条氏の得分地だ。神官の多賀氏は御家人だ」

「神官が武士とは妙ではないか」

「妙ではない。北条氏滅亡に及び、得宗領（とくそうりょう）消滅するも、衆徒（しゅと）神人（じんしん）、相会し、衆議を決したのだ。一時、南朝に与（くみ）するも、北朝方への無二軍忠を誇ったのだ」

「何故に、そのような事を言うのだ。元就公を貶（おとし）めんとして居るのではないか。元就公が尼子を討って、何が

悪いのだ。尼子の比丘尼(びくに)など」

私は疑いの目を向けた。

「そうではない。元就公は軍法正しく仁愛深きお方。陶晴賢(すえ はるかた)との厳島の戦いにては、密かに山本堪助(やまもと かんすけ)と会し、雲州(うんしゅう)尼子との戦にては、京の医師・曲直瀬道三(まなせ どうさん)に政事の得失を聞かれた。尼子義久(あまご よしひさ)、倫久(ともひさ)、秀久(ひでひさ)の三兄弟も、毛利に月山富田城(がつさん)とだじょう)を明け渡し芸州に赴く時、杵筑(きづき)の社(やしろ)の前で、ただただ稲田姫(いなだひめ)の運命を嘆かれたのだ」

「何故に、尼子が稲田姫の運命を嘆くのだ。須佐之男命(すさのおのみこと)と契りを結び、八重垣を作り、約束を交わしたからか。須佐之男命(あ)しき心があつたということか」

「君は何故、須佐之男尊(すさのおのみこと)を悪く言う。須佐之男尊は八岐大蛇(やまたのおろち)を退治されたのだ。八岐大蛇(やまたのおろち)に悩まされて居られた足名椎(アシナヅチ)手名椎(テナヅチ)の老夫婦は、八岐大蛇(やまたのおろち)退治の御札に、稲田姫(いなだひめ)を須佐之男尊(すさのおのみこと)にたてまつる事にしたのだ」

「そうではなからう。須佐之男命(すさのおのみこと)は、足名椎(アシナヅチ)手名椎(テナヅチ)夫婦に『吾は天照大御神の伊呂勢(いろせ)なり』と名乗られ、八岐大蛇(やまたのおろち)退治の見返りに、稲田姫(いなだひめ)様を求められたのだ。そうでなければ、何故に天照大御神(あまてらすおおみかみ)様は須佐之男命に『汝(いまし)なほ黒(きたな)き心あり。汝と相見るを欲せず』とおっしゃられて、天の岩屋戸にお隠れにならねばならなかったのだ」

「君は須佐之男尊(すさのおのみこと)が騙したと言うのか。それが君の国学というものか」

「そうだ。本当は出雲の足名椎(アシナヅチ)手名椎(テナヅチ)は、蛇を奉って居つたのだ。大和の三輪山にては、蛇を

崇めて居る。出雲にても蛇を崇めて居つたのだ。それを須佐之男命(すさのおのみこと)が天照大御神(あまてらすおみかみ)様の弟神と言って、退治してしまったのだ。出雲国は、平世(やすくに)と知らしめす国。天下造らせし大神命が、意宇郡(おうのこほり)・拜志郷(はやしのさと)にて『吾が御心の波夜志(はやし)』と詔(の)りたまひし所。そこに乱暴者の須佐之男命が意宇郡(おうのこほり)・安来郷(やすぎのさと)に来て、『吾が御心は安平(やす)くなりぬ』と言つたが、黒(きたな)き心ある故、意宇郡(おうのこほり)に身を置かれる事は出来なかつたのだ」

「それで、須佐之男尊が須佐郷(すさのさと)に参られたと言うのか」

「そうだ」

「そうではなからう。飯石郡(いひしのこほり)・須佐郷(すさのさと)も国処。須佐之男尊は『この国は小き国なれども国処なり』とおっしゃつて、御魂を鎮め置かれたのだ。同じ飯石郡(いひしのこほり)の多禰郷(たねのさと)は、その昔、大穴持命(おおあなもちのみこと)が須久奈比古命(すくなひこのみこと)と天下を巡行(めぐ)りたまひし時に、古(いにしえ)の稻種を落とされた所だ」

「もうよい。お主が、尼子義久(あまご)よしひき)が稲田姫の運命を嘆いたなどと言つたからだ。天照大神様の御心に背かれた須佐之男命(すさのおのみこと)に悪(あく)しき心があつたからではないか。そうではないのか。お主は天照大御神(あまてらすおみかみ)様に非があつたと言うのか」

「そのような事は申して居らぬ。ただ、岩戸開きの時に、思兼命(おもいがねのみこと)をはじめ伊弉許理度売命(いにしりどめのみこと)・天兒屋命(あめのこやねのみこと)・太玉命(ふとだまのみこと)・天宇受売命(あめのうずめのみこと)・手力男命(てぢからおのみこと)が、祝詞(のりと)神楽(かぐら)にて天照大神(あまてらすおみかみ)様を騙したと言つて居るのだ。そうではないか。天宇受売命(あめのうずめのみこと)が乳房かき出し踊り、腰の衣のひも

を陰部まで押し下げると、八百万の神の大笑。不思議に思われた天照大神（あまてらすおおみかみ）は、岩屋戸を少しお開きになられたのだ」

「そのような戯けた事を言うて喜んで居ると、国が滅ぶというものだ。松陰先生が生きて居られたら、八つ裂きにされるというものだ」

「だから、稲田姫は憂き目をみられたのだ」

「もうよい。それと毛利とどういう関係があるのだ」

「厳島（いつくしま）の戦いにて、一匹の牡鹿が元就（もととなり）公、隆元（たかもと）殿、元春（もとはる）殿の前に現れたのだ。元就公は神武天皇が大和の国に向われた時、八咫鳥（やたがらす）の案内にて、険しい山道を越え、戦に勝利した例と同じだと申され、厳島の大明神に向いて二礼し、紅葉を踏み分け鹿の後を付いて行かれたのだ」

「お主は、本当に鹿の後を付いて行ったと思つて居るのか」

「そのような事、言われるまでもない事。元就公は、戦略で戦をされた事がないと申して居るだけだ。輝元、隆景、元長お三方は、杵筑（きづき）大明神へ参詣し、出雲の逆徒退治は戦略によるものではない事を神に誓われた。しかも稲田姫の御心を思われ、千家（せんげ）・北島両国造（くにのみやつこ）の舞や能の持成しを断われて居られるのだ。現に月山富田城（がつさんどだじょう）にて毛利に降伏せし尼子義久（あまごよしひさ）、倫久（ともひさ）、秀久（ひでひさ）の三兄弟は、安芸国（あきのくに）で捕われの身となるも、その後許され、毛利氏に仕え、佐々木氏としてご維新を迎えられて居られるのだ」

「それで、山中鹿之助（やまなかしかのすけ）も助命したというのか」

「鹿之助（しかのすけ）の事は、宍戸（ししど）安芸守隆家（たかいえ）と口羽（くちば）刑部大輔（きょうぶだゆう）通良

(みちよし)が、鹿之助(しかのすけ)味方になれば良薬とならんと申し出た事。鹿之助討つは、元就公ご存生の時の申し定め。元春公お一人が、今更何の評定ありやと申されたのだ」

「鬼吉川(きつかわ)の面目躍如という事か」

「所が、他の者が同意せず、鹿之助に周防徳地(とくち)に一千貫、伯耆(ほうき)大山の麓に一千貫の食地を安堵してしまつたのだ。尚も鹿之助は元春公に取り入れんとして、伊予国(押し)渡り彼の地より長宗我部(ちようそかべ)が領地の土佐国へ切り入らんと願ひ出るも、元春公許さず、されば九州に渡り豊筑より大友の地を切り従えんとするも、これも元春公は許されなかつた。それで鹿之助は、新宮党の尼子勝久を擁し、秀吉のもとに奔つたのだ。元春公の智勇は申すまでもない事。大内尼子大友の剛敵退治の時、元就公、故なく元春公を先鋒とされたのではない」

「お国自慢はもうよい」

「お国自慢などではない。毛利家の誉れを申して居るのだ。山中鹿之助(しかのすけ)と図り尼子(あまご)家を再興しようとした尼子勝久などは、法衣を纏(まと)い、抖藪(とそう)行脚の間に生涯を終えるところ、秀吉を頼り、播州(ばんしゅう)上月城(こうづきじょう)に籠もり、美作を経て出雲に入らんとした男だ。吉川(きつかわ)小早川の軍に囲まれ、自刃(じじん)に及ぶ運命だつたのだ。」

月山北麓(がつさんほくろく)の新宮谷で生まれし鹿之助も同じ事。丈高く、骨荒く、眼大きく光有りて、鬚髭(しゆし)多く、胸より手足まで毛生えたる者。幼くして父と離れ、母一人に育てられるも、この母は賢女。麻を植え、布子(ぬのこ)を調じ、茜(あかね)の裏を付け鹿之助に与えられた。鹿之助は神社仏閣に押し入り、往古より伝来する珍宝重器を奪うも、戦に及んでは、梨打烏帽子(なしうちえぼし)に赤熊(しゃくま)植えたる冑(かぶと)著(き)たる兵は、討つべからずとの下知する者。毛利に一味し因州(いんしゅう)私部(きさいちべ)の城に籠(こ)もつた大坪甚兵

衛（おおつぼ じんべえ）は、鹿之助が人に逢いて林に入るは、鹿の名に応じたものと鹿之助を嘲（あざけ）るも、そういう毛利家も、戦国の世のならわしを免れる事は出来なかったのだ。輝元（てるもと）殿は天下泰平たらしめんと信長公と水魚の盟約をなすも、足利義昭（あしかが よしあき）の備後（びんご）下向により、両家は胡越（こえつ）の隔たりとなつてしまった。輝元殿、備中（びっちゅう）高松の城において秀吉の水攻めに和睦するも、元春公は長男の元長様に家督を譲り、山中において、石に漱（くちすす）ぎ流れに枕（まくら）して余生を送られたのだ」

「それは、石に枕（まくら）し流れに漱（くちすす）ぐのではないか」

「元春公は、口惜しかったのだ。秀吉の行状（ぎようじよう）、軽薄の度を増して行つた。伊藤先生の一族も秀吉と戦われた」

「その話なら、聞いて居る。秀吉四国攻めの話であろう。伊藤先生一族は美濃より伊予の河野氏に援軍を送つたのだらう」

「そうだ。秀吉は輝元公に先陣を勤めさせたのだ。河野通直（こうの なおみち）は伊予国（いよのくに）温泉郡（おんせんごおり）湯月城（ゆづきじよう）に拠り戦つたが、隆景（たかかげ）殿と大和納言（だいなごん）秀長（ひでなが）の軍に城を囲まれた。隆景（たかかげ）殿は名家河野氏を滅ぼす事を惜しまれ、降伏して安芸でお家の再興を図る事を促された」

「それで河野氏の再興は成つたのか」

「戦国の世だ。弓矢八幡（ゆみややはちまん）も河野氏をお守りにはならなかった。戦国の世の事とはいえ、盛者必衰（じようしゃひつすい）とはこの事だ。毛利氏も例外ではない」

「それでは、井上氏は何故に亡ばぬのだ」

「亡ばぬよう信濃から移つて来た」

「何故にだ」

「足利義満から安芸国山縣郡に土地を授けられたからだ」

「やはり、そうではないか。井上家は足利の手によるもの。御殿山（ごてんやま）の事もそうだ。御殿山に何かあるのか」

「御殿山（ごてんやま）は品海（ひんかい）を臨む景勝地だ。西国大名送迎の御殿（ごてん）があったから御殿山という。桜の木が植えられ吉野山を彷彿とさせる春景色も、文久の時、桜は切り崩され、山は切り崩され、その土で御台場（おだいば）を造つたのだ。今は、浜辺に佇（たたず）み、昔日を偲（しの）ぶだけだ。往時は、将軍家が鷹狩を行ったものだ。それで御殿山（ごてんやま）が、どうした。井上先生が何だというのだ」

奴は怪訝な顔をした。

「井上先生は英国公使館を焼き討ちにする気など、なかったのだ。ただ、虚勢を張られたのだ」

「どうして、そう思うのだ」

「井上先生は焼き打ちに使う炭団（たどん）を、品川の女郎（じょうろう）部屋に忘れて来たのだ。井上先生は松陰門下生というのか」

「井上先生は松陰門下ではないが、高杉先生伊藤先生の同志だ」

「井上一族は天下の大逆臣ではないか。長去沢（おさりざわ）の銅山の事で、井上先生には悪い噂が絶えないではないか。欲の皮の井上と陰口されるのも、尤もな事だ」

「そう申すなら、伊藤先生に聞いてみるがよい。丁度、伊藤先生がお呼びだ」

奴は伊藤先生の書置きを渡すと、部屋を出て行った。末尾に和歌が添えてあった。伊藤先生の部屋に行くと、福井人が食いがついていた。伊藤先生は、またイギリス留学の話を持ち出し、得意満面であった。

「畠山（はたけやま）さんとは奇縁というか、不思議な巡り合わせになって居る」

「それが薩摩藩の留学生と申されるのですか」

「そうじゃ。僕等が横浜から日本を出立したのは、文久（ぶんきゆう）三年五月十二日の夜。朝廷から求められた攘夷（じょうい）期限日前に決行する予定であったが、故あつてそうなった。薩摩藩の留学生が出立したのは、元治二年三月二十二日。出国に先立ち楠公社（なんこうしゃ）に参詣し、伊集院（いじゅういん）にて妙円寺に参詣し、武運を祈誓（きせい）して来たそうだ。薩摩藩の留学生とは、僕と聞多（もんだ）は急遽帰国して入れ違いじゃ。イギリスに残った山尾さんと井上勝さんと遠藤さんの話では、薩摩藩の留学生に声を掛ける事を控えて居ったそうじゃが、そこは異国での事。長州から面会を申し入れた。薩摩藩の留学生も、ウイリアムソンさんのお世話になった」

「ウイリアムソン」

「ユニバーシティ・カレッジで、化学の教授をされて居られた方じゃ。僕等はロンドンに着いて言葉の稽古をする事になった。だが、誰も引き受け手が無い。一同落胆して居ったが、ウイリアムソン夫人から教えて貰う事になった。グラバーの伝（つて）じゃ。」

元々、慶喜（よしのぶ）公と薩摩の考えに違いはなかった事は、左内（さない）も存じて居る事。特に今、外務卿（がいむきよう）をして居る寺島さんなどは、ドイツのように諸大名が盟約を結び、京で政事を議定し、それを天子に奏聞し六十余州に施行する。その議定は公卿（くぎよう）及び列侯（れつこう）が上院で、諸侯の臣が下院で担うというの

じや。斉彬(なりあきら)公は、蘭文地理書でドイツの連邦制度の事を知つて、幕府衰退に対する妙案と考へて居られたそうじや」

「春嶽(しゅんがく)公が阿部老中にお出しになられた建議書のなかにも、諸大名参暇之条(しよだいましようさんかのじよう)というものがあつたそうです」

「慶喜(よしのぶ)公も津和野藩の西周(にしあまね)にイギリスの政治の仕組みを調べさせていた。慶喜公の大政奉還に關して、幕府には色々と議論があつた。四海の間に安からずば、その罪は將軍の負うところ。家康の自負する所じや。叡慮(えいりよ)は天道のままにめぐらせ給(たま)わんという事じや。岩倉公も大久保さんも、慶喜公を家康の再来と畏れられた。兎も角、慶喜公も攘夷を標榜する者に政權を任せるわけにはいかない。それで慶喜公は禁裏(きんり)に参内されて、公卿(くぎよう)諸族諸藩會議の制度を立て、大統領となつて指図するのがよいと考へて居られた。慶喜公の論にも、一理ある」

「どういう事でしょうか。伊藤副使は、尊攘派ではなかつたのでは。佐幕派なのですか」

「僕等は佐幕派ではない」

福井人は不可解な顔をした。

「それでは何故、留学されたのですか」

「僕らがイギリスに留学する事になつたのは、若殿が聞多(もんだ)にお命じになられたからだ」

「長州藩は、攘夷(じようい)が藩論ではなかつたではありませんか」

「そうじや。我が藩は攘夷の詔(みこと)のりを奉じ、天下に先駆けて馬関(ばかん)海峡で攘夷を致す事になつた。だが、一口に攘夷決行と言つても、大事じや。国が亡び兼ねない。久坂玄瑞(くさかげんずい)と山縣半蔵(やまがたは

んぞう)が信州松代の佐久間象山(しょうざん)先生を訪ね、意見を求めた」

「佐久間先生は、何と申されましたか」

「先ずは夷国(いこく)へ渡り、その国情や兵備の状況を取り調べる事が肝要だと。その頃、我が藩は山尾さんの尽力で、横浜のジャーディン・マゾン会社から蒸気船を買い入れ、壬戌丸(じんじゅつまる)と命名するも、誰も蒸気船の操縦が出来ぬ。聞多(もんだ)と山尾さんが、勝海舟の門人で長州人の土屋平四郎を捜し出して相談すると、高木三郎という庄内(しょうない)藩の方を紹介して呉れた」

「庄内(しょうない)藩の方ですか」

「そうじゃ。高木さんのお陰で、我が藩はやっと壬戌丸(じんじゅつまる)を動かす事が出来たのだ。攘夷と言うても、長州の船備は、その程度じゃ。若殿も、夷国(いこく)の状態も一通り知っておきたい、学ぶべき事は学んでよかろうと申され、密かに留学生をイギリスに派遣する事になったのじゃ」

「何故、井上先生に」

「若殿(わかとの)は、徳山毛利家から萩毛利家にご養子に入られたお方。聞多(もんだ)の親父殿も徳山藩の棟居(むねすえ)家から井上家へ養子に入られた。聞多(もんだ)は井上家の次男で、安政二年二十一歳の時、志道(しじ)家の養子になった。養父の慎平殿は、儒者・能見洞菴の弟で、頗る神道癖のある方であられた。聞多(もんだ)はこの年の秋に、藩公の参勤に随行して江戸に初めて出、桜田藩邸内の有備館に寄宿し、劍客・斎藤弥九郎(さいとう やくろ)殿の塾に学ぶなどして文武の修行に励んで居ったが、安政(あんせい)五年、時勢を鑑み蘭学を志し、肥前の岩屋玄蔵(いわやげんぞう)に学ぶ一方、砲術をも学ばんとして江川太郎左衛門(えがわたろうざえもん)殿の塾に入ったのだ。聞多(もんだ)は、万延(まんえん)元年春に君公の小姓役(こしょうやく)となり、その後、文久(ぶんきゅう)二

年七月若殿の小姓役に転ずると、若殿に海軍興隆の事を薦めたのだ。僕等は横浜でイギリス人の手を借りて、上海（シャンハイ）に行く帆前船（ほまえせん）に乗り込んだが、上海（シャンハイ）に着いて街を見て回ったら、聞多（もんた）はもう帰ると言う」

「何故ですか」

「日本の対岸の上海ですら、この盛況だ。イギリス、フランスの本国がどの位のものか想像がついた。引き返して君公に、従来の方針を改め、開国に進むよう申し上げると言うのだ。

そういう事だから、英国から帰国するのに何の躊躇（ちゅうちよ）もなかった。ある日、ジャーデイン＝マジソン商会の支配人がパーリアメントに連れて行って呉れた。ジャパンとかジャパニーズという言葉が聞こえてくる。

翌日、ウィリアムソン夫人がロンドン・タイムス紙を持って来て、イギリス、フランス、アメリカ、オランダの四ヶ国が毛利さんと戦をすると教えて呉れた。辞書を頼りにタイムス紙を読んで、長州藩の砲撃の事や薩英戦争の事も知った。もし列国と戦争になれば長州藩はお仕舞いだ。急いで帰国し若殿をお諫めする事にした。

イギリスから横浜に戻るとイギリス公使の周旋で、豊前（ぶぜん）の姫島（ひめしま）まで軍艦で送って貰った。そこから山口に行ったが、藩論が二つにも三つにも分かれて混乱して居る」

「二つにも三つにもと、申されますのは」

「開国か攘夷（じょうい）かで二つに。開国にても、尊王（そのんおう）か佐幕で二派に分かれて居った」

「それで、伊藤副使はどの派に居られたのですか」

「尊王攘夷派じゃ。じゃが僕等の尊王攘夷は、攘夷の精神を以て開国を行うものじゃ。イギリスから急遽帰国したのも、そのためだ。兎に角、時局を何とかせねばならぬ。聞多（もんた）が若殿に拝謁（はいえつ）してお諫め申し上げた

が、藩論は既に開戦に決して居り、今変更できないと。お父上の思召（おぼしめ）しも、老臣の考えもあるとおつしやる。その様な事では、国が滅び兼ねない。要人を盛んに説得して居ったところ、頼りの聞多（もんた）までもが、攘夷論に変心してしまった」

「何故にですか」

「聞多（もんた）に会つて、政府の役人から貴様が攘夷論になったと聞かされたが、どういうわけかと聞くと、あれほどに吾々（われわれ）がいうのを聞かずに、防長が焦土となつてもよいと言ひ居った者が、京都の敗報を聞いて、俺に出てくれという。そこで、かねてのご注文通り、防長が焦土となるまで遣るがいい、事ここに至つてはもはや和議論はやれぬと言つたそうじゃ。百年の後、長州人は実に頑固でわけの分からぬものであつたが、ともかくも勤王で滅亡したという事だけは歴史に遺るだろうと。そのほうにお手伝いをいたすと」

「それで、伊藤副使も戦に加つたのですか」

「加わるものもない。君公と若殿の命で、四ヶ国艦隊に和睦の申し入れを行い、下関から壇ノ浦に出かけたところ、四ヶ国艦隊が攻撃を始めたのだ。四ヶ国艦隊が攻撃を始めて三日で、壇ノ浦、前田の両砲台が占領された。藩の役人も講和の交渉を我らに頼むほかなかつた。それで聞多（もんた）が若殿にお目見得して釘をさした。たとえ朝廷のお沙汰でも我が国の為にならぬと思えば、死を以て朝廷の思召（おぼしめ）しを拒む覚悟がなければと。朝廷のお沙汰ならば、已（や）むを得ず戦いを続けるというのであれば、この和議の取り計らいはお引受け致し兼ねますと。若殿も死を以て朝廷を諫め開国の趣旨に基づくように致すから、その方もこの役を勤めて貰いたいと仰せになられた。

僕も実際ロンドンに行くまでは攘夷の虚妄を払拭（ふっしょく）する事が出来なかつた。ましてや列国艦隊を目の前にしている奇兵隊（きへいたい）始め諸隊は、本物の攘夷隊だ。今、陸軍卿（きよう）をして居る山県狂介（きようすけ）に

も兵隊の訓練や武器の精鋭からも到底攘夷など行えないと説いたが、狂介（ききょうすけ）は、天下の形勢ここに至っては馬関（ばかん）が焦土に化しても尊皇攘夷（そのうじょうい）の本義を貫徹する外ないと言うのだ。

奇兵隊（きへいたい）が出来たもの、馬関（ばかん）を守っている撰鋒隊（せんぼうたい）が因循姑息（いんじゆんこそく）の門閥派で役に立たぬから、狂介が高杉さんに頼んだものだ。高杉さんは攘夷戦争の事には反対であったが、君命もあって受けた。高杉さんは百姓町人からも死を怖れないものを集めた。当時、開国論を口にする者などあれば、立ち所に殺された。それでも、君等は以前は同志だったから、殺す訳にいかぬと言う者もあり助かった」

「それでは長州も開国云々の話では、なかったという事ですか」

「そうじゃ」

伊藤先生は渋い顔をされた。

「それで、講和の事はどうされたのですか」

「講和の交渉は高杉さんが正使となり、僕と井上さんが通訳となった。高杉さんは四ヶ国の賠償要求に対して、馬関で商戦を砲撃したのは朝廷のお沙汰に従つての事。我が藩にその責任はない、砲撃の責任は幕府にあると言うから、イギリス側がどういふ事だと言う。そこで高杉さんは、我が国神代の説明を始められた」

「どのような」

『抑（そもそも）、国常立尊（くにとこたちのみこと）は天之瓊牙（あめのぬほこ）を以て、滄冥（そうめい）を探る、その劍の先に、滴（したた）った露が凝（こ）こって礮馭慮島（おのころじま）となる』と」

「伊藤副使が通訳されたのですか」

「高杉さんがイギリス通詞のアーネスト・サトウに向かって言ったのじゃ。サトウは長州藩から砲撃を受けた商船の賠

償金の交渉を行つてゐるのだと反論して来たが、サトウも此方(こちら)の真意を分かつていた筈じゃ」

「どうして、そのような事が分るのですか」

「彦島(ひこしま)を渡すよう言つて来た」

「彦島を」

「そうじゃ。彦島は昔、引島(ひきしま)と言つて居つたが、忌みて彦島と言うようになった。僕の師である吉田松陰先生は、逸早く馬関(ばかん)の防備の事を提唱され、嘉永(かえい)三年、この辺りの視察をされた。武蔵・小次郎の決闘ありし岩柳島(がんりゅうじま)を左に見、豊前(ぶぜん)の芽苺(めかり)の明神を右に遥観して、龜山八幡の下に至つた。八幡改方(ばはんあらためがた)と宿を取られた松陰先生は、翌日、海路の難所を通り抜け、壇ノ浦(だんのうら)に至つた」

福井人は伊藤先生の意を図りかねていた。

「それで長州藩は、彦島の事をどうされたのですか」

「世子から君公にご相談申し上げると、君公は異人が欲しいというならと申された」

「慶親(よしちか)公が、本当にそのような事を申されたのですか」

「そうじゃ。君公父子は、久光(ひさみつ)殿と違つて根つからの攘夷家ではない」

「それでは、彦島は」

「この時、久保断三(だんぞう)さんが和議をすると斬られると僕等に知らせて呉れた。久保さんは、僕と同じ吉田松陰(よしだしよういん)先生の門人で、その親父殿は僕の手習師匠(てならいししよう)じゃ。それで、高杉さんと山に逃げたが、聞多(もんだ)が君公に掛け合つて、手を掛けさせぬとの言質を取つて、講和の交渉を始めた。その時、僕等

は、彦島の事をイギリス側に伝えなかつた」

「香港（ホンコン）の二の舞を恐れられたという事ですか」

「彦島は大変な島じゃ。僕等を殺しに来た神代直人（こうじろ なおと）は、御楯隊（みたてたい）の巨頭。維新後、大村益次郎（おおむら ますじろう）さんを西洋崇拜の国賊と言つて、斬つた者じゃ」

「御楯隊（みたてたい）」

「慶応元年、俗論党との内戦が起きた時、使節で理事官をして居る山田顕義（やまだ あきよし）さんが、太田市之進（おおた いちのしん）と作つた隊じゃ」

「山田先生が。山田先生も伊藤副使のお命を狙われたのですか」

伊藤先生は笑われた。

「山田さんは、僕等の仲間じゃ。山田さんは、堺町御門の戦に敗れ帰郷した者と御楯隊（みたてたい）を結成するも、御楯隊は内訌（ないこう）で二派に分かれた。山田さんは整武隊（せいぶたい）の総管となり、幕府が征長と称して周防大島を占領するや、高杉さんの命で丙寅丸（へいゐんまる）の砲術長となり、大島の奪回に奮闘したのじゃ。鳥羽伏見の役後、黒田さんと箱館に赴き、榎本（えのもと）軍を降伏させた。あそこに控えて居る者も、蝦夷地（えぞち）に赴いた者じゃ」

福井人は徐（おもむろ）に私の方に視線を向けると、微（かす）かに敬意を示した。

「それで薩長同盟の事じゃ。慶応二年の暮に、英国のキング提督が軍艦四隻を率いて三田尻を訪れたが、これは先にパークス公使が鹿兒島往訪後、下関にて君公父子との会見を約せしも、事ならず、公使の代理として表敬訪問したもののじゃ。高杉さんと僕は、彦島一件の事もあって、応接に預かる事はしなかつた。岩国藩主の吉川経幹（きつかわ つね

まさ)公と我が藩から宍戸璣(ししど たまき)殿と木戸さんが当たった。君公父子は山口より三田尻に出向かれ、キング提督一行を貞永隼太宅にて歓待した。

キング提督も答礼として、君公父子を旗艦プリンス・ローヤル号に招待し、午餐(ごさん)を饗(きよう)した。君公父子は、キング提督を挟み並んで写真を撮られた。もし、あの写真が攘夷家の目に触れる事あらば、必ずや怒りを買ったにちがいない」

「それが、薩長同盟の経緯と申されるですか」

「そう先を急ぐものではない。薩長同盟の成立には、色々な事を話せねば、分からぬ事なのじゃ」

「色々な話と申されますのは」

福井人は納得できぬ顔をしていたが、伊藤先生は盛んに勿体を付けていた。

「君は、我が藩の長井雅楽(ながいうた)という方を存じて居るか」

「勿論です。長井殿は、公武合体を周旋(しゅうせん)された方。薩長同盟の事で何をされたと申されるのですか」

「嘉永(かえい)三年、防長二国に洪水あり、元就(もとなり)公の菩提寺(ぼだいじ)洞春寺(とうしゅんじ)のある後山が崩壊した事があつた。『天災の来るは、必ず人事より起こる』は、君公の聖戒とされた所。品行端正ならざる乎(や)、撰挙其(その)の人を得ざる乎(や)、有司其(その)の職を尽さざる乎(や)と。君公は、後山の崩壊を洞春公(とうしゅんこう)尊霊の震怒に触れしものと思われ、特に長井殿に命じ、洞春公(とうしゅんこう)の廟(びよう)に君公反省自戒の誠意を告げさせたのじゃ。明倫館(めいりんかん)が泰西(たいせい)の学を以てするは、長井殿によるもの。君公は、長井殿を小姓役(こしょうやく)から奥番格に進め、明倫館(めいりんかん)内用掛(ないようがかり)とさせ、明倫館を改革させたのじゃ。長井殿は、文久(ぶんきゅう)元年諸藩に先駆け、鎖国は天照大神(あまてらすおほ)

みかみ)の遺訓に反すると開国策を唱え公武の周旋(しゅうせん)を行われた。公武を合体し内海の一和を図り、我より航海して海国の事情を探り、その長所を以て彼を制せんとされたのじゃ。長井殿は、江家(ごうけ)の長井四郎の裔(えい)だけあって人物。開国して互港(ごこう)互市(ごし)すると、遠からず五大洲が皇国に貢ぎ物を捧げる日が来ると申された。長井殿は京で正親町三条(おおぎまちさんじょう)実愛卿を、江戸で安藤久世(あんどうくせい)閣老を説かれたが、その論は堀田備中(びつちゅう)の論にもあつたから、公武合体論として大いに受け入れられる所となつたのじゃ。しかし、開国の方針では天下の人心が折り合わない。先ず第一に叡慮(えいりよ)に背く。文久(ぶんきゅう)二年京藩邸(きょうはんぢ)で御前大評定となつた。老臣(らうしん)山田宇右衛門(やまだ うえもん)は、勝算のない攘夷(らいてい)は黎民(れいみん)に塗炭(とたん)の苦しみをもたらすと痛論するも、攘夷の叡慮(えいりよ)は牢乎(ろうこ)として動かぬと従来(じゆらい)の開国の方針を改める事になつた。藩論が急変すると、長井殿は割腹(わりはら)という事態に至り、来原先生も切腹された」

「来原(くるはら)先生」

「僕が安政三年秋に長州藩の相州(そうしゅう)警備に出仕した時、学問の手解きをして頂いた方だ。毎朝未明に僕を起こし、勤番小屋にて提灯(ちようちん)の光で詩経(しきやう)や経書(けいしよ)を口授して頂いた。来原(くるはら)先生は先見の明のある方で、我が藩も西洋式の銃陣をやらねばならぬという事で、自ら太鼓(たいこ)を敲(たた)かれた。その事で譴責を受け、帰藩の命を受けるも、時勢は止められぬもの。来原(くるはら)先生は藩命で、三、四十人の者を引連れ、長崎に西洋調練の稽古に行かれたが、僕も先生に従つて長崎に行った。来原(くるはら)先生は長井雅楽(ながいうた)の従兄弟(いとこ)。定めのある事であつた」

「定め？」

「来原(くるはら)先生は、定めを受け入れられ、切腹されたのだ。僕は京藩邸(きょうはんぢ)の御用飛脚となつて先生の遺髪(いは

つ)を携えて萩に下った。来原先生の奥様は、木戸さんの妹君。遺児・彦太郎君は、昨年、僕が渡米した時に、アメリカに就学させてきた。来原先生の学問、見識、人格は木戸さんの遙かに上にあり、もし生きて居られたなら、国家の重責を担う真の政治家として木戸さん以上の方になられた筈じゃ。あれは、文久(ぶんきゆう)二年の事じゃった。長井殿が公武の周旋(しゅうせん)をしている時、来原先生は、薩摩に入られた」

「薩摩に。薩摩領内関門、厳鎖にして他国人の入境など」

「物産取組の名を以てした。君公の命だ。交易の話だ。薩摩とは、長州から米、塩、紙の三白を送り、薩摩からは砂糖を送る事で話が出来て居った。三田尻の塩が天下にその名を轟かせたのは、寛政(かんせい)年間、海辺の開拓に始まる事じゃ。海面に長堤を築くも、暴風にて忽(たちま)ち破壊された。そこで佐藤信淵(さとう)のぶひろ)を招き、家伝の石法にて塩焼(しおやき)浜をなし土地を堅(かた)め、その後新田とし、米を産するようにしたのじゃ。

来原(くるはら)先生は薩摩入りに際して、先ず肥後に入り、尊王の大義を説かれた」

「而(し)て、肥後藩は何と」

「未だ藩論の決定せざるとの有志の言葉があつた。来原先生は、有志多き大藩の英断なきを失望され、肥後薩摩の国境を越え、川内(せんだい)川を渡り、伊集院(いじゅういん)駅に向かわれた。鹿兒島入城に備え、大久保さんに書を贈られたが、大久保さんからは返事はなかつた」

「何故、大久保先生は」

「君は、大久保さんのお父上が、喜界島(きかいがしま)に流された事を知つて居るか」

「お由良(ゆら)の方の件でしょうか」

「そうじゃ。薩摩の内訌(ないこう)、複雑怪奇。嘉永(かえい)年間、斉彬(なりあきら)公相統時も、曾祖父・重豪(し

げひで)公の風あれば、お家の先途も危ういと、の風評を立てられた。この時、伊集院平(いじゅういんたいら)の一派は、斉興(なりおき)公の侍女(じじよ)で久光(ひさみつ)公の実母のお由良(ゆら)の方に取り入り、島津久徳(ひさのり)の一味となり、集會政事を誹議し、花倉茶屋にて異賊調伏(いぞくちようぶく)の修法の悪事を行なっているとの噂を流した。斉彬(なりあきら)公を擁する正義党は免役(めんえき)遠島となり、ある者は切腹された。大久保さんの父・次右衛門(じえもん)殿も喜界島(きかいがしま)へ流され、大久保さんも御役御免(おやくごめん)となられた。大山巖(おおやまいわお)さんの話では、次右衛門(じえもん)殿は交際をよくされた方で、若い者をお宅に呼ばれては、鶏汁(けいじる)を振舞われたそうじゃ。この時、西郷さんのお父上の吉兵衛(きちべえ)殿は、自刃された赤山鞆(ゆきえ)久普(ひさひろ)殿のお家に入出入りして居られたが、お咎(とが)めを受ける事はなかった」

「赤山殿と申されます方は」

「赤山久普(ひさひろ)殿は城代家老島津久風(しまづ ひさかぜ)殿のご次男。島津一門の日置(ひおき)家の方。日置家の用達をされて居られた吉兵衛(きちべえ)殿は、赤山久普(ひさひろ)殿の自刃に立ち会われたのじゃ。介錯(か いしゃく)は加藤新平という撃劍(げきけん)家の手によつてなされ、吉兵衛(きちべえ)殿は赤山殿の血染めの肩衣を持ち帰り、西郷さんと大久保さんに示された。その時、吉兵衛(きちべえ)殿は武士ほど物憂(ものう)げなものはないと嘆かれたそうじゃ。西郷さん二十四、大久保さん二十二の嘉永(かえい)三年の事じゃ」

「それで来原殿は、薩摩に入られ、どうされたのですか」

「大山さん樺山(かばやま)さんに面晤(めんご)を請うたが、願ひ聞き遂げられず、空しく時を過(と)して居られると、監察府より帰藩を促されたという。幸ひ、帰路に及び大山さんと有馬さんと会し、時事を論じる事が出来た。それで、大久保さんと小松さんに書を贈り、再び鹿児島に赴かんとされたのじゃ。来原(くるはら)先生は大久保さんに

会つて、満腔(まんこう)の赤心を吐露(とろ)し、宿志を貫徹せんとされた。義旗(ぎぎ)を掲げて直(ただ)ちに朝家(ちようか)の厄(やく)を釈(と)き、尊攘の大倫を明(あきら)かにして永く皇沢(こうたく)に俗せしめんとする所信を述べんとされたのじゃ」

「長州は薩摩に諮(はか)り、朝家の厄(やく)を釈(と)かれんとされたと申されるのですか」

「そうじゃ」

「それで来原(くるはら)殿は、大久保先生と会う事は出来たのですか」

「出来なかつた。その代わりに、有馬さんと村田さんと田中さんが市来(いちき)に来て、小松さんの意を伝えに来た」
「帯刀(たてわき)殿の。どのような」

「来原(くるはら)先生の申し出は、藩庁から久光(ひさみつ)公のお耳にも届いて居ると」

「それで、久光(ひさみつ)殿は」

「皇国の為め、御尽力の程、感心致された」と

「それだけですか。久光(ひさみつ)殿は、薩長同盟の事は申されなかつたのですか」

「何も。来原先生から義挙の申し入れがあつたが、久光殿は、此方(こちら)に於(おい)て義挙と申訳は之れ無くと申された。ただ、・・・」

「ただ、何でしょうか」

「近年京都江戸の間、不穩の事ゆえ、順聖公没期にも申置の旨もあり、その辺に付いては、段々尽力致すと申された。その節は、長州も必ず御一致下されと」

「久光(ひさみつ)殿が、そのような事を申されたのですか」

「長州の藩論転換には、色々な事があつた。久光（ひさみつ）殿上洛（じょうらく）の事がなければ、来原先生もあのよ
うな事にならなかつたものを。君公は中山忠能（なかやまただやす）殿から島津と協力して大原勅使（ちよくし）江
戸東下を輔翼（ほよく）するようにとの達を受けられたが、その名代として若殿（わかとの）が江戸に下り、久光殿と
談じる事になった。その前に木戸さんが大原勅使（ちよくし）に会い、寺田屋にて薩摩藩士八人を斬殺せし経緯をお
話したのだが、対面を重んじられる久光殿ゆえ、長州との協力など話にも上がらなかつた。斉彬（なりあきら）公ご存
命であれば、事は違つた筈じゃ。西郷さんも、寺田屋の事で久光殿の怒りを買ひ、沖永良部島（おきのえらぶじま）に
島流しとなつた」

伊藤先生は何時もの話を繰り返した。

「寺田屋の事は、承知して居ります。それで、如何（いか）なる経緯で薩長同盟は成つたのでしょうか」

福井人は訝（いぶか）しげに言つた。

「文久三年八月十八日、朝廷俄（にわ）かに我が藩の堺町門の宿衛を罷（や）められ、君公父子の入京を禁じられ、条
公以下七卿の参朝を停められ長州に落ちし事は、承知の事」

「勿論です」

「我が藩は、大和御親征の事で嫌疑を被り、勧修寺（かじゅうじ）右中弁（うちゅうべん）經理（つねおさ）卿より詰問
を受けた。我が藩は十月、奉勅始末を記述し、井原主計（いはらかずえ）殿を上京せしめた。主計（かずえ）殿、伏見
の藩邸に至り、勧修寺（かじゅうじ）家に入京を請うも叶わず、勧修寺（かじゅうじ）卿自ら藤森にお出でましになら
れ、我が藩の陳する所を聞かれた。

一方、長州にあつては、頻りに京への再発進を唱える者がいた。三条公は、自ら奇兵隊（きへいたい）を率いて入京す

ると君公世子に申し出られた。若殿が早晩上京致しますので、お待ち下さるようにとお諫め申し上げたが、そうこうしているうちに、元治(げんじ)元年五月、京で新撰組が池田屋に踏み込み、我が藩の吉田稔麿(としまる)さんを始め肥後の宮部鼎蔵(みやべていざう)等の尊攘派壮士を亡き者にした。池田屋の事で、とても激派を抑えきれなくなった所、来島殿が喜多村の力士隊(りきしたい)という相撲取りを身边護衛とし、遊撃隊(ゆうげきたい)の有志を引き連れ京に向かわれた」

「来島(きじま)殿？初めてお聞きするお名前です。どういう方なですか」

「又兵衛(またべえ)と申され、勇猛なるも聡明な方。来原(くるはら)先生や木戸さんと親しく交わり、常に万邦に交通するに非ずんば、皇国を富強ならしめんと申された方じゃ」

「それで来島(きじま)殿は、遊撃隊(ゆうげきたい)を率いて京に向かわれたというのですか」

「そうじゃ。君命を受けた高杉さんが、防府の宮市で今、外に手を出すのは得策ではないと説得されたが、来島(きじま)殿は耳を貸されない。来島(きじま)殿は、幕府の腰抜けどもなど相手ではない。相手は、京都守護職の松平容保(まつだいら)かたもり)一人。高杉さんに松平肥後守(ひごのかみ)の生首を抱えて来るまで見て居れ、戦をせぬなら、高い所へ上って見物して居れと申され、武備も整わぬままに京に向かわれた。それで高杉さんも、君命を忘れ、京に逃亡された。この時、西郷さんは『今日の事は長州と会津との私闘なれば』と言って、幕府への出兵を辞し、薩州兵には持重を促したそうじゃ」

「その西郷さんのお話は、伺って居ります。それで来島(きじま)殿は、どのようにして京に入られたのですか」

「男山八幡宮の本隊を離れ、嵯峨の天龍寺に移り、そこから京に進入すると、越前藩兵も、慶喜(よしのぶ)公の兵も道を避けて、来島(きじま)隊を通したのじゃ。京の人も、長州様の御出陣と拝みに出て来る。来島(きじま)殿は、御

所の蛤御門(はまぐりごもん)から御花畑に切り込まれたが、銃丸を腹に打たれ落馬、残念と一声叫び、自ら首を刎(は)ねられた。会津方相手だけなら、負ける道理はなかった」

「伊藤副使は、何を根拠にその様な事を申されるのですか」

「来島(きじま)殿は、日野・勸修寺(かじゅうじ)の両邸に長州の壮士を潜ませておいたのだ。筑垣の陰より、公卿(くぎよう)御門から参内する中將を待ち受け、鉄砲一発の下に致さんとしたのじゃ」

「それでは何故、松平肥後守(ひごのかみ)は」

「来島(きじま)殿の逆撃を聞き知り、陣羽織を着て日の御門より参内したのじゃ」

「それでは何故、薩摩と激戦に」

「長州では来島(きじま)殿が出て行かれると、真木和泉(まきいずみ)など外から来た者たちが、来島(きじま)殿を無残な死を遂げさせてはならぬとの論を起こし、これに久坂(くさか)ら有志が応じ、数百の兵を率いて京に向けて発進してしまった。久坂の一隊が長州を出ると、今度は福原越後(ふくはらえちご)の隊も長州を出て行った。これらは江戸に行つて此方(こちら)の事情を述べて嘆願するという穏健な者たちだったが、伏見にて急遽、京へ嘆願に上るといふ事になった」

「歎願と申されますか」

「攘夷の勅命、君公父子はその期限を誤らなかつたのだ。朝廷に君公父子の忠誠を察せられ、非常の恩典を請うたのじゃ。その事を幕吏に申し出るも、伏見の藤森にて受けると言う。埒(らち)が明かぬと福原越後(ふくはらえちご)の隊が入京せんとするも、幕軍の攻撃を受け撤退と相なつた。それで、来島(きじま)隊が京に進入して行つたのじゃ。

来島(きじま)隊の後を追つて精兵を率いて来た国司信濃(くにしの)しなの、益田右衛門介(ますだうえもん)のすけ)

の二隊も、松平容保(まつだいら かたもり)を討たんと京に向かう事になった。

国司信濃(くにし しなの)の一族は、南北朝期の観応の擾乱(かんのうのじょうらん)の後に、安芸国高田郡国司(くにし)に下向した高(こう)一族。高氏(こうし)は毛利氏に重臣として仕え、毛利師親(もろちか)公には、高師泰(こうのもろやす)が側に仕えた。その師泰(もろやす)は足利尊氏に仕え、新田義貞軍を箱根・竹ノ下の戦いで打ち破り、湊川の戦いでは武功を挙げ、楠木正行(くすのき まさつら)が挙兵すると、兄の高師直(こうのもろなお)とこれを討つて居るのだ。国司有純に至つては、毛利豊元(とよもと)公の娘を娶り、元就(もとなり)公の後見人となつて居る」

「伊藤副使は何故、その様な話をされるのですか」

「真木隊の話をするためじゃ。久坂玄瑞(くさか げんずい)一人、『今卒(にわか)に兵を挙げ闕(けつ)に迫りば、反名免れず』と兵庫にて若殿(わかとの)が至るを待つよう真木和泉(まきいずみ)に進言したが、真木和泉に『此機を一失せば再挙の期なし』と斥けられた」

「それで久坂殿は出陣されたのですか」

「そうじゃ。木戸さんも真木和泉(まきいずみ)に世子軍を待つようと諫められて居られたのだが、真木和泉は御上を諫争申上げると、浪士を率い、天王寺の陣所を出発し、堺町御門に向かったのじゃ。形は尊氏(たかうじ)なるも、心は楠公(なんこう)と」

「形は尊氏なるも、心は楠公？」

福井人は酷く不可解な顔をしていたが、伊藤先生は話を続けられた。

「堺町御門には筑前の軍勢が固めて居つたが、前夜より久坂、入江、松山深蔵(しんぞう)等が鷹司(たかつかさ)邸に

潜み、真木和泉(まき いずみ)率いる浪士隊が堺町御門に押し寄せて来るのを待つて居った。真木等浪士隊が鷹司(たかつかさ)邸に入らんとするや、筑前軍は鷹司邸の表門を目掛けて発砲するも、鷹司邸に潜んで居った長州勢が現われるや敗走した。蛤御門(はまぐりごもん)から御所に突入した浪士隊は、越前兵桑名兵を討ち、御花畑へと突き進んでいったのじゃ。薩州兵は乾御門(いぬいごもん)の傍らで合戦の模様を眺めて居ったが、長州兵が公卿(くぎょう)御門に入らんとするや、四門の大砲を押し進め長州の横合より打ち出して来た。会津桑名両藩の軍勢も不意の応援に力を得、長州勢に攻めかかり、大激戦となったのじゃ。西郷さんが長州隊に脛(すね)を銃丸で打抜かれ落馬し怪我(けが)を負うたというのは、この時の話じゃ」

「木戸先生は、何をして居られたのですか」

「この時、木戸さんは因州(いんしゅう)藩邸に居られた」

「因州(いんしゅう)藩邸で何をして居られたのですか」

「鳳輦(ほうれん)を叡山(えいざん)に動かさんとされて居られた」

「叡山にですか。そのような事、出来るもののですか」

福井人は驚いて居った。

「木戸さんは、加賀藩の重役に説いていたのだ。京で事変が起きたら、鳳輦(ほうれん)を彦根に遷(うつ)さんとする者があるから、加賀藩兵が阻止して呉れるようにと」

「何故、加賀藩のですか」

「御所で事が起きれば、御上を有栖川(ありすがわ)邸に移し奉らんとする者が居ったからだ」

「何故、有栖川(ありすがわ)邸のですか」

「有栖川（ありすがわ）家は、慶喜（よしのぶ）公生母のご実家じゃ。有栖川邸をお守りするは加賀藩兵」

「それで木戸先生は、加賀藩兵の手で、鳳輦（ほうれん）を叡山に動かさんとされたのですか」

「そうじゃ。木戸先生の論は、象山（しょうざん）先生の論と違って居った。今、大使随行をされている内海（うつみ）さんも、有栖川（ありすがわ）邸をお守りしていたが、木戸さんは、事がなるまで、この事を内海さんにも秘せて居られた。御上（おかみ）もお出ましになられる事はなかった」

「それで激派の方は、どうされたのですか」

「久坂玄瑞（くさか げんずい）は火の手が揚がり鉄砲の音が鳴り響く鷹司（たかつかさ）邸にあつて、鷹司閔白に御上（おかみ）への哀訴歎願の事を申し出るも、鷹司閔白は久坂を振り払い、参内されてしまわれた。玄瑞は、敵兵に囲まれ死を覚悟するも、品川弥二郎（しながわ やじろう）、南貞助（みなみ ていすけ）、河北義次郎（かわきた ぎじろう）（）、志道貫一（しじ かんいち）その他を呼び集め、論じた」

「何と論されたのですか」

「今ここで残らず死んでは折角の誠意が分らぬ事になる。君公は万死を顧みず、公武の間を周旋（しゅうせん）されて居られたのだと」

「誠意と申されますか」

「そうじゃ。君公の誠意、やはり松下村塾で学びし者でなければ分らぬ事なのだ。恐れ乍ら九重深宮（しんきゅう）の玉座時論（よきとことごと）く叡聞（えいぶん）に達せず、頻りに破約攘夷（はやくじょうい）を以て関東（くわんと）へ仰せ出される。破約攘夷（はやくじょうい）と申す儀は、時勢事理を深く察し仕る者は、決して落着仕らざる事と」

伊藤先生は苦しげに話をされた。

「それでは久坂先生の攘夷は、口実だった申されるのですか」

伊藤先生は、この件に関して返答はされなかった。

「それでは、久坂先生は何をなさんとされたのですか」

伊藤先生は暫し沈黙されて居られた。

「玄瑞は、一同には為すべき仕事があるからと諫め、寺島殿、有吉殿、入江兄様と割腹を遂げたのじゃ」

「一同の為すべき仕事と申されますのは、何なのですか」

福井人は食い下がった。

「我が藩は毛利輝元（もうりてるもと）公開府の萩を離れ、藩府を山口に移し、その日に備えた。山口の城郭市街は大改造され、小郡海岸へ舟で行けるよう鰯石（わにいし）川の淵を浚渫（しゅんせつ）したのだ」

「真木和泉（まき いずみ）殿も、天王山にて自刃（じじん）されたと聞いて居りますが。真木和泉殿は、破約攘夷（はやくじょうい）の説を唱えられていたではありませんか」

「真木和泉（まき いずみ）は、条公と行動を共にされた方。鷹司（たかつかさ）邸より天王山に退き、予が最期の模様を条公及び君公父子に告げよと言って、自刃（じじん）された。条公は長州兵の敗北を三田尻（みたじり）よりの海路、お知りになった。長州にお戻りになれば、内訌（ないこう）にお身を晒（さら）す事になるとお引き留めする者もいたが、条公は若殿（わかとの）との約束があると申され、山口にお戻りになられた」

「お約束とは」

「我が藩は文久（ぶんきゅう）三年に、山口に政事堂を設け、萩から君公父子が移られたが、大楠公（だいなんこう）湊川（みなとがわ）戦死の命日に、盛大に大祭礼を行ったのだ」

「それが、三条公とのお約束なのですか。三条公は長州に戻られ何をされたのですか」

「条公が長州にお戻りになられると、今度は四ヶ国艦隊が襲来する。講和の話が起こると、条公は太守(たいしゆ)が尊攘の大義を首唱し、天下を風動した事は天下の斉(ひと)しく認むる所と、講和の議を排された。条公は若殿に申された。我等の素志は攘夷の先鋒たらんと。」

僕と聞多(もんだ)は英国で薩英戦争の事や長州藩の異国船砲撃の事を知り、急ぎ帰国して、藩の要路の者に盛んに説いていた。今、横浜にあつて馬関(ばかん)を砲撃しようとしている船の構造はこうで、戦争しても勝てるものではない。毛利家一藩でこれに対抗しても何の益もない。王政復古して日本の国力を統一しなければ、とても外国に抵抗できるものではないと」

「それで、どうなりましたか」

福井人は冷ややかに言った。

「無駄であつた。夷人を打ち払えとえらい勢じゃ。宜しい、それならどうして打払うかと聞くと、日本国の海岸一面に大砲を残らず並べると。それなら鉄砲の地金はどこから持つて来るかと言うと、寺の釣鐘を鑄潰(いつぶ)すと言う。話にならない。それで僕等は改めて勅諭を(ちよくじよう)貰き、天下の謀を為すという事にしたのじゃ」

「勅諭(ちよくじよう)」

「安政五年に幕府と水戸藩に下された戊午(ぼご)の勅諭(ちよくじよう)じゃ」

「それで天下の謀と申されますのは」

「元治(げんじ)元年八月、四ヶ国と講和を終えると、アメリカ船が馬関(ばかん)に来ると言う知らせがあつた。高杉さんは、条公を奉じてアメリカに航し、それから欧州各国を歴遊しようと言う。天下の事は五年十年の後でも遅くは

ない。条公に宇内(うだい)の形勢をご覧にいれ、経綸(けいりん)の大策を講究しようでないかと。それで岩倉大使の随員をして居る野村靖さんを五卿のもとに遣いに出し、それから高杉さんが直々に条公に拝謁し、ご意向を確かめられた。高杉さんは改めて条公にお尋ねになられた。お一人で脱走なされますかと」

「三条公は何と答えられたのですか」

「勿論であると。然(しか)ればと我等は馬関に手配に行った」

「三条公が密航したという話は、聞いた事がありませんが」

「残念な事に、アメリカ船は去った後だった。しかも、翌日、条公の遣いの者が来て、条公は天下の規範と為り、万世の基準となる身、脱走して外国に赴くという事はその道を得ぬと言って来た」

「それが、天下の謀という事なのですか。薩長同盟は、どうなつたのですか」

福井人は不満げな顔をしたが、尚も伊藤先生は弁明を続けた。

「京で長州の激派を退けた事で、幕府は勢い付いた。老中小笠原長行(おがさわらながみち)は、君公世子蟄居(ちつきよ)、山口城崩城、十万石減地を要求する。俗論党政府は幕府の力に屈し、藩内の諸隊の解散を命じ、藩政府は元治(げんじ)元年十一月、恭順の証として切腹した国司信濃(くにししのの)、福原越後(ふくはらえちご)、益田親施(ますだちかのぶ)の三家老の首を広島の国泰寺(こくたいじ)前に晒し、幼少の興丸君を当主に立てお家の安泰(あんたい)を図った。幸い征長軍の参謀の西郷さんが、長州との事を穩便に済ませようと、徳川家と関係が深い岩国藩主・吉川経幹(きつかわつねまさ)殿と話を付け、宮城(ききゅうじょう)襲撃の事は、三家老が勝手に為したという事にした。しかし、小笠原壱岐守(いきのかみ)が強硬に君公父子の隠居を迫る。これには幕府と一戦交えてもお守りするしかない。若殿(わかとの)も必死だ。藩論を何とか倒幕とまで言わぬまでも、幕府に対して強硬な姿勢を示さねば御

身が危ない。聞多（もんだ）に直々に手紙を書き、窮状を訴えて来られた。謹慎を命ぜられて居った広沢さんにも、萩での御前会議出席が認められた位だ、その必死さが分かる。聞多（もんだ）の奮闘で、御前会議は飽くまでも幕府と争うという事になった。藩論は武備恭順論と称されるものになったが、藩内の俗論党の勢力は日増しに強くなる。高杉さんは禁門の後、君命に背き京都に逃亡した罪で萩の野山獄にあったが、萩に俗論党が跋扈（ばつこ）するのを見るに忍びず、香油（こうゆ）瓶を刀の柄の先にぶら下げ田舎（いなか）神官風情（ふぜい）に変装して山口に脱出された。それから元治（げんじ）元年十月、馬関（ばかん）から筑前（ちくぜん）へ出られた」

「高杉先生は、筑前（ちくぜん）で何をされたのですか」

「九州の正義の士を糾合せんとされた。博多鰯町（いわしまち）の対州問屋・石蔵屋卯平（いしくらやうへい）宅に寓して居られたが、平尾村の山荘にあった野村望東尼（のむらもとに）という女尼（によに）が、西郷さんが薩摩から参られて居られるから、お会いしてはと勧めに来たと言うのだ」

「と言うのだとは、どういう事なのですか」

「僕はその頃、高杉さんと行動を共にしていたが、高杉さんから西郷さんに会ったという話は聞いたことがない」

「それでは、どうしてそのような話をされるのですか」

「薩長同盟の事で、筑前（ちくぜん）藩の月形洗蔵（つきがたせんぞう）と中村円太（えんた）の勧めで、高杉さんが西郷さんに会ったと言う者が居るのだ」

「そこで、高杉先生と西郷さんが薩長同盟の事を話されたと申されるのですか」

「そうではない。高杉さんは、西郷さんに会おうとはされなかったそうじゃ」

「それでは、西郷さんにお会いになられたという話は嘘なのですか」

「そうではないらしい。高杉さんは野村望東尼(のむらもとに)の『くれなゐの大和錦もいろいろ 糸まじらねば綾は織られじ』との一首に、漸く西郷さんに会う気になられたが、高杉さんは西郷さんに『貴殿は孤島に永く居られたがヨク歩いて来られたな』と皮肉を言われたそうじゃ。西郷さんも『この大島三左衛門(さんざえもん)も腰膝(ひざ)立ざりしも、其後国家のための奔走に斯様(かよう)に練習しようした』と応じる。禁門堺町御門の遺恨がある。薩長が手を取らねばならぬ事は分かつて居るが、すぐにそういう話にはならなかったようじゃ」

「伊藤副使は、どうして居られたのですか」

「僕は対馬(つしま)に行く積もりで馬関(ばかん)に潜伏していた。そのころ対馬藩に紛擾(ふんじょう)があり、情勢を探って居った。高杉さんは家老の平田大江殿と謀つて、大宰府の内訌(ないこう)を収めようとして居られた。その事で平田殿の同志は、対馬藩から弾圧されたが、野村望東尼(のむらもとに)始め侠客(きょうかく)の石蔵屋(いしかくらや)・うへい)らの尽力で、馬関(ばかん)に難を逃れる事が出来たのじゃ。高杉さんも長藩が幕府に謝罪したと聞き、俗論党を殺戮(さつりく)せんと馬関(ばかん)に戻つて来た。その時、西郷さんも馬関に来て、稻荷町(いなぎ)なりちよう)の対帆楼(たいはんろう)で高杉さんとまた会つたそうじゃ」

「それで、薩長同盟の話がなつたと申されるのですか」

「そこでもそういう話には、ならなかつたらしい。両雄再び会うも、話は纏まらぬ。高杉さんが、『足下平生友誼(ゆうぎ)を思つて僕に一頭の馬を借(か)せよ、君公毛利家の為に行かん』と朱の眈(まなじり)がさけんばかりに西郷さんに迫るも、西郷さんは高杉さんに応じなかつた。それで高杉さんと僕は、元治(げんじ)二年正月に君公父子の窮状を救わんと、遊撃隊(ゆうげきたい)・力士隊(りきしたい)等僅か八十人を率いて馬関(ばかん)で義兵を挙げたのじゃ。このまま俗論党が藩政を握つていたら、洞春公(とうしゅんこう)のご遺志が背かれると」

「随分、無謀な事を」

「義挙(ぎきよ)というものは、兵の多寡(たか)ではない。尤もこれには諸隊長官等が随分反対した。時期尚早だとか、五卿が萩の君公世子に面会なされてからだとか言つて。高杉さんが萩の君公世子を直諫(ちよつかん)すると言うも、応ずる者はない。諫言(かんげん)のご採用ない時は腹搔(か)つ切り臍腑(ぞうふ)を捉(つか)み出し、城門の前に置き並べ、君公の聡明に奉る決心だと言つてもだ。それから高杉さんは烏帽子(えぼし)形の兜(かぶと)姿で馬に乗り、長府(ちようふ)功山寺(こうざんじ)に居られた三条公のもとを訪れ、長州男児の肝玉をお目に入れますと言つて義挙を宣言された。我等は先ず伊勢の会所を襲い、俗論党の井上源右衛門(げんえもん)と寺内弥次右衛門(やじえもん)を渡せと掛け合つた」

「そのような事で、諸隊を掌握できるものなのですか」

「そう簡単なものではなかつた。高杉さんが奇兵隊(きへいたい)軍艦の山縣狂介(やまがたきようすけ)に『わしとお前は焼山(やきやま)かづら うらは切れても根はきれぬ』と説き、漸(ようやく)く俗論党(ぞくろんとう)と一戦交える事になつた。俗論党との戦は何とか勝利する事が出来たが、萩の士のなかに鎮静(ちんせい)会議員という者たちが居つた」

「どういう人達なのですか」

「君公に俗論政府の役人を退け、諸隊の申し出を容れ、速やかに改革にご着手をと進言した者たちじや」

「先生方のお仲間なのですか」

「お仲間ではない」

「伊藤先生は、改革派ではないのですか」

「改革派じや」

「それでは何故。諸隊は何を申し入れたのですか」

「君公に楠木正成（くすのき まさしげ）が三代、皇室のために死に万世忠臣の鑑（かがみ）となり、今に至って生きているとの建白をしたのじゃ」

「それでは、先生方は不忠者という事ではありませんか。それで慶親（よしちか）公は、どうされたのですか」

「長府（ちようふ）清末（きよすえ）両侯及び政府員列席の君前会議を開き、鎮静会議員の申し入れを嘉納（かのう）された」

「先生方は、どうされたのですか」

「高杉さんと僕は、そのような事で義挙を起こしたのではない。高杉さんは萩沖の艦船を使って空砲をどんどん撃たせたと、君公は齋戒沐浴（さいかいもくよく）して、祖先の靈前にみな不肖（ふしよう）のいたすところ、今より既往（きおう）を悔い、維新の政を布く積もりであるから、神明のご加護をと祈願されたのだ。それから君公は山口に赴かれ、毛利家の仰徳社を多賀神社の隣に設けられ、そこで臨時祭を行った。諸隊士に参拝が許され、君公の意のあるところを示されたのだ」

「それで、伊藤副使はどうされたのですか」

「最早、藩内の事は憂うるに足らぬことだ。我が藩は前々政府の方針を取り、尊王の大義を貫く事になった。後は天下の大事をなすだけだ。それには先ず防長の腹を五大洲へ推し出さねばならぬ。それで高杉さんと僕は、藩から許可を得て長崎で洋行を企てたのだ。じゃが長崎に行つてグラバーに相談してみると、洋行するより駐日公使のパークスを紹介するから馬関（ばかん）開港に尽力したらどうだと言う。グラバーの言う事も尤もだ。それから高杉さんと馬関（ばかん）に戻つて策を練つた。聞多（もんだ）が藩庁に掛け合い、高杉さんと僕が伊崎新地（いざきしんち）都合役と

して馬関(ばかん)に駐在する事になった。馬関は長府(ちようふ)藩領地で、一部が清末(きよすえ)藩領地。そこで馬関の土地を本家に譲って貰い、その代替地を与えようという事になった。交渉始めた矢先、厄介な事になった」

「厄介(やつかい)な事とは」

「長府(ちようふ)清末(きよすえ)の藩士が、高杉井上伊藤を殺してしまえと命を狙う。長府侯は僕らの論に好意を寄せて呉れたが、攘夷主義者には何の事か分からぬ。国体を辱(はずかし)めぬ様、開港せよなどは。それで、僕は一時、身を潜める事にした」

「何処(どこ)に行かれたのですか」

「高杉さんは『徒然草(つれづれぐさ)』を求め大坂に出られた。その後、讃岐(さぬき)琴平に行かれ、日柳燕石(くさなぎ えんせき)という勤王家の侠客(ききょうかく)の所に身を寄せた」

「高杉さんは、何故『徒然草(つれづれぐさ)』などを」

「賢女の問いに、笑われぬようにだ」

「それ、またどうしてそのような事を申されるのですか」

「皇居で露台(ろだい)朝餉(あさがれい)、何々殿、何々門と称しているのを聞くと感動するものじゃ。小菰(こじとみ)・小板敷(こいたじき)・高遣戸(たかやりど)などは、なお更の事」

福井人は眉を顰(ひそ)めたが、伊藤先生は介されなかった。改めて福井人は伊藤先生に尋ねた。

「それで女性は、何を問うというのです」

「『郭公(かつこう)や聞き給へる』かと」

「それで何と答えるのです」

『岩倉にて聞きて候ひしやらん』と」

「それで、先生方は岩倉公と手を握られたと申されるのですか」

「話は秘せられて居るものだ。兼好法師(けんこうほうし)は記して居る。法華読誦(どくじゆ)の功により、六根淨(ろくこんじよう)の人となられた性空上人(しょうくうしやうにん)という高僧が、旅の仮屋(かりや)に立ち入られたと」

「高杉先生は、法華經(ほけきやう)を唱えられたとでも」

「高杉さんは、田舎風情(ふぜい)の神官、法華經は唱えられない」

「それでは、その仮屋(かりや)に何があったのですか」

「豆を煮る音が聞こえて来たが、その僧侶には豆が我を煮てひどい目にあわせて居ると言つて居るように聞こえたのだ」

福井人はまた怪訝(けげん)な顔をした。

「伊藤副使は、高杉先生をお豆様だと申されて居られるのですか」

「何時、僕がそのような事を言った。高杉さんは戦略家じゃ。あれは、幕軍との四境戦争の際、高杉さんが馬関(ばかん)の桜山招魂場(しょうこんじやう)の麓(ふもと)で養生されて居られた時だ。高杉さんの提唱で、桜山招魂社(しょうこんしゃ)の鎮座祭(ちんざさい)を行った。太鼓(たいこ)とホラ貝を合図に奇兵隊(きへいたい)が行進した。小倉戦争での小倉城自焼の事も、奇兵隊開闢(かいびやく)総督高杉さんの策謀の賜物(たまもの)だ。高杉さんは、動けば雷電(らいでん)の如(ごと)く、発すれば風雨の如(ごと)し。小倉・肥後・久留米の藩士は動揺したのじゃ」

「それで薩長の同盟の事は、どうなったのですか」

「だから薩長同盟の経緯を話したのじゃ」

「お豆の話がですか」

「薩長同盟の遠因は、鎌倉の法華堂(ほつけどう)にあるものなのじゃ」

「そのお堂に何があると申されるのですか」

「頼朝公、島津忠久(しまづただひさ)公、大江広元(おおえのひろもと)公の墓だ。頼朝公と忠久(ただひさ)公の墓は、故あつて島津重豪(しまづしげひで)公が修せしものだ」

「それで、西郷さんと高杉さんは上手くいかなかったと申されるのですか」

「長州では、禁門(きんもん)堺町御門の事で俗論党が勢力を得るなか、杉徳輔(すぎのりすけ)と山田宇右衛門(やまだうえもん)が政権にあつた。藩に人物が居らなくなったので、但馬(たじま)に潜んで居られた木戸さんを帰国させて、藩政を立て直そうとした。木戸さんが戻り、暫(しばら)くすると土佐の坂本さんが長州に来て、薩摩の方から長州と連合したいと言つて来た。この時、高杉さんは四国に在り、聞多(もんだ)は九州に居つた」

「それでは、薩長同盟の事は、木戸先生と坂本さんがなした事なのですか」

「木戸さん半分、高杉さん半分じゃ。高杉さんは木戸さんの執り成しで讃岐から戻るも、足下は藩の事に容喙(ようかい)する義理なしと言う」

「どういう事でしょうか」

「久坂(くさか)、来島(きじま)、入江が忠死をして居るに一人逃匿(とうとく)し、恭順党の跋扈(ばつこ)熾(さか)んなる時も帰らず、下火の処(ところ)に帰ると。木戸さんも笑い飛ばして抗弁(かうべん)されなかった。高杉さんの立腹も無理もない。高杉さんは言つて居られた。開国にせよ攘夷にせよ公武周旋(しゅうせん)などとは無駄(むだ)だと。君公

父子は国に戻られ、富国強兵の政をなすべきだと。取り分け朝廷からの攘夷の周旋(しゅうせん)はお断りになられ、是非(ぜひ)にでもと言うならば勤王の師を起こして幕府の罪を糺(ただ)されよと。高杉さんの防長割拠論(かつきよろん)じゃ」

「幕府の罪と申されますのは」

「文久三年三月家茂(いえもち)公が上洛(じょうらく)し、先帝にお供して賀茂社と石清水八幡に攘夷祈願をする事になったが、将軍家が帝のお供して賀茂社にて攘夷祈願など、前代未聞の事じゃ。高杉さんも、この時、学習院御用掛(ごようかかり)の藩命を受け京に入られるが、直ぐに暇を請われたのだ」

「どういう事なのでしょう」

「高杉さんは、僕は大人洲(おおやしま)の国に生きているから、国を開いた神である天照大神(あまてらすおおみかみ)を日夜念じ、我が学問、我が事業成就の推挙人になつてもらうつもりで一旦は京に出られたが、直ぐにその考えを放棄されたのだ」

「何故ですか」

「この時、学習院に出仕した者に、木戸さんの外に土佐の土方楠左衛門(ひじかた くすぎえもん)、福岡の平野国臣(ひらの くにおみ)、熊本(くまもと)の宮部鼎蔵(みやべ ていざう)、筑前(ちくぜん)の真木和泉(まき いずみ)などが居つたが、到底、高杉さんの論とは折り合わない。学習院は元々、光格天皇(こうかくてんのう)がお考えられたもので、弘化四年、条公のお父上の三条実万(さんじょう さねつむ)公が、日の御門前に開講されたものじゃ。

松陰先生も、学習院を四民共学の天朝の学校にと考えて居られたが、晩年、攘夷派に荷担するお考えになられた。高杉さんは松陰先生の策に逡巡(しゆんじゆん)されて居られたが、決別されたのだ。高杉さんの天朝論は、防長二州の真の割拠

から始まるもの。文久三年、学習院に集いし尊皇攘夷派は、国事を議論する所となり、木戸さんは条公と孝明帝の大和行幸(やまとぎょうこう)神武天皇陵参拝の策を画策するも、これは高杉さんの与(くみ)する所ではない」

「それは本当の話なのですか。高杉殿は、家茂(いえもち)公上洛に際し、家茂公を刺すとの論議を出されたと聞いて居りますが」

「確かに、高杉さんは、家茂公が攘夷のことを定めず江戸へ戻るといふ話を聞かれ、家茂公を刺すとの論議を出し、関白の鷹司輔熙(たかつかさすけひろ)卿の所に、將軍が公家門を出る所を刺すつもりであると十六、七人の者を押しかけさせた。鷹司関白が驚き宥(なだ)めたので、事はならなかったが、高杉さんは騒ぎを起こさせただけだ。公卿など当てにならぬ事を証(あか)すためだ。玄瑞(げんずい)もこの事を肝に銘じておけば、堺町御門の事であのような事になることはなかったのだ。

高杉さんの先見の明じゃ。高杉さんに理解のある者も、高杉さんの論は十年もすればそうなるが、今はその時期ではないと諫めた。周布政之助(すふまさのすけ)殿などは、今は尊皇攘夷で公武の間を周旋(しゅうせん)して、幕府の勢力を段々殺(そ)いで行くのがよいと言うて、高杉さんを学習院御用掛(ごようかかり)に就けて、公武の周旋をさせようと考えたのだ。これには高杉さんは、十年間隠遁(いんとん)して時機を待つと言つて、東行(とうぎょう)と号され頭を剃(そ)られてしまわれた。

その時の歌が『西へ行く人を慕ふて東行く 我が心をば神や知るらむ』。聞多(もんだ)も、攘夷党に襲われた時の傷の養生かたがた、小倉藩周辺の勤王藩の動向を探りに別府の温泉に行つた。若松屋という宿に身を寄せた。聞多(もんだ)の背中(せなか)の古傷を見ると、今でも生きているのが不思議なくらいだ。その事で噂(うわさ)になった」

「どの様な」

「夜遅く楠湯（くすのゆ）に変な人が来ると。若松屋の亭主が、生国（しょうごく）と職業を問うたところを見れば、聞多（もんた）は身分のある者の成りの果てと間違われたようだ」

「それで、井上先生は何と答えられたのですか」

「馬関（ばかん）の住人で土方人足の業を営むものと。亭主も事情を察したのであろう。当今は長州人に対して役人の探索が厳しいから、豊前長洲（ぶぜんながす）の博徒（ばくと）灘亀（なだかめ）のところに身を寄せるよう勧めた。宇佐八幡とは目と鼻の先じゃ」

「それで、傷の方はどうなされたのですか」

「聞多（もんた）が元気で生きている所を見れば、楠湯のお陰じやろう。なにしろ入浴していると、ある士人が妻と娘を伴って浴場に来たというのじゃから。その時も、聞多（もんた）は刀痕（とうこん）の訳を聞かれた」

「何と答えられたのですか」

「姦通（かんつう）の非行を犯したと」

「嘘も方便という事ですか」

「満更（まんざら）、嘘でもない。聞多（もんた）が今日あるのも、鏡のお陰じやから」

「鏡」

「京都祇園（ぎおん）の中西君尾という芸妓から貰った。イギリスに行った時も、懐に忍ばせておいた鍔物のものだ。刺客が聞多（もんた）に止めを刺すに及び、刃先が鏡に当たって命拾いをした」

「それは、それは」

「攘夷の怨念は、尋常ではない。高杉、広沢、井上の姦物（かんぶつ）を刺さんと狙って居った。聞多（もんた）も広沢宅

に立ち寄った帰りに襲われた。膾(なます)の如(ごと)く叩かれたが、幸い、美濃国安八郡(あんぱちのこおり)の郷士で、緒方洪庵(おがた こうあん)の塾で外科手術の助手をした事のある者が居った。その者に刀傷を畳針(たたみばり)で縫い合わせて貰った。長州も開国云々の話ではなかった」

「そのような事で、どのようにして薩長同盟は成ったのですか」

福井人は信じられぬという顔をした。

「慶応元年五月、坂本さんが来て、西郷さんと木戸さんが馬関(ばかん)で話をする事になったが、肝心の西郷さんは来なかった」

「何故、西郷さんは来られなかったのですか」

「根回しされて居られた。讃岐(さぬき)に居られた高杉さんの所に二人、使者が来た。一人は水戸の斎藤佐次右衛門(さじえもん)、もう一人は久留米の古松簡二(ふるまつ かんじ)。斎藤は高杉さんに、国家のために手を握らんと申し入れた」

「それで、高杉先生は」

「斎藤の説を容れたら、長藩は辱められると。自分の目の黒い内は許さないと」

「高杉先生は、何故そのような事を」

「奇兵隊総督・赤根武人(あかね たけと)が、三条公の警護をして居る土州の土方楠左衛(ひじかた くすぎえもん)と諮り、事を為さんとして居ったのじゃ」

「どういう事ですか。奇兵隊は高杉先生が創設された隊ではないのですか」

「赤根は高杉さんの義拳に反対したのだ。軍監の福田良輔(りょうすけ)が功山寺(こうざんじ)に来て、義拳を止め

た。『晋作、汝(なんじ)既に獄中の苦を忘れたるや』と」

「それで、斎藤殿はどうされたのですか」

「何も言わず帰った」

「西郷さんが、探りを入れたという事ですか」

「薩摩は、右を向くも左に向くも自由だ」

「久留米の古松殿は、何を申されたのですか」

「何も。斎藤佐次右衛門(さじえもん)が去ると、高杉さんは残った古松(ふるまつ)に、馬関(ばかん)という所はどういう所か知って居るか」と聞いたそうじゃ」

「高杉先生は何故、そのような事を」

「薩が中原に意のある以上、馬関の海峡を渡らず、その大志を達する事が出来るかと」

「どういう事なのでしょうか」

「君は『隼人(はやひと)の名に負ふ夜声 いちしろくわが名は告(の)りつ妻と頼ませ』という和歌を知って居るか」

「存じません。誰の歌でしょうか」

「万葉の歌だ。それでは、『海(わた)の底沖つ白波龍田山 いつか越えなむ妹があたり見む』という歌を知って居るか」

「わたの底」

「海の底だの事だ。長田王の御歌だ。『隼人(はやひと)の薩摩の瀬戸を 雲居なす遠くもわれは今日見つるかも』という事だ」

相変わらぬ伊藤先生の話に、福井人は腑(ふ)に落ちぬ顔をしていた。

「それで高杉先生は、薩摩にどうせよと申されたのですか」

「何も言わずとも分かる事じゃ。西郷さんは、高杉さんと宥和(ゆうわ)を図らんと、五卿の事に尽力されたのだ」

「高杉先生と宥和(ゆうわ)を図る」

「四ヶ国艦隊襲撃後、幕府は長州に強く五卿の引渡し求めて来た。君公世子は、俗論派で固める萩に戻られる。俗論党政府は、益田、国司(くにし)、福原の三大夫の首を広島総督府に差し出し、三条公以下諸卿を他藩に移さんとした事は承知のことと思う。

幸いな事に西郷さんと高崎正風(たかさき まさかぜ)が、征長総督の徳川慶勝(よしかつ)殿に諮り、五卿は黒田、細川、有馬、島津、鍋島の九州諸家に預け入れられる事とし、元治(げんじ)元年十二月、西郷さんが下関に来て奇兵隊(きへいたい)軍監の山縣狂介(やまがたきようすけ)と話を付けたのじゃ。

条公の所には、筑前藩主の命を受けた月形洗蔵(つきがた せんぞう)と早川養敬(はやかわ ようけい)が赴き、九州遷座の事を申上げたが、依然、条公は『我輩今は決する処(ところ)あり』とおっしゃる。長州では奇兵隊を始め諸隊の者が、盛んに九州遷座の事に反対して居ったが、君公が五卿を引き止めんとする諸隊を誅伐(ちゅうばつ)するに及び、漸(ようや)く慶応元年正月に、五卿は大宰府(だざいふ)に向かわれたのじゃ。

西郷さんの遣いで高杉さんの所に来た齋藤佐次右衛門(さじえもん)などは、大宰府(だざいふ)に盛んに出入りし、九州の尊攘派と呼応し、長州の尊攘派と通ぜんとした。筑前藩では五卿が大宰府に居られる事で、内訌(ないこう)が起こり、慶応元年十月に月形洗蔵(つきがた せんぞう)は斬罪に処せられた。このまま条公が太宰府に居られては、本物の尊攘派の首謀者になり兼ねない。そこで西郷さんが、条公に帰京を促されたのだ」

「どの様にして」

「薩摩の大山巖（おおやまいわお）さんの仲介で、小林甚六郎（じんろくろう）殿がお話しされた」

「小林甚六郎殿とは」

「慶応二年正月、幕府が五卿監督のために筑前藩に送った方じゃ」

「何故、幕府の者が三条公の説得を」

「小林甚六郎殿は、条公のお父上の実万（さねつむ）公が嘉永（かえい）七年勅使となりて東下された折、懇遇を蒙り、同じく懇遇を蒙った日下部伊三次（くさかべいそうじ）殿と親交を持った方じゃ」

「それで三条公にどの様なお話を」

「今の二条関白ならば、近衛（このえ）鷹司（たかつかさ）殿には嫌疑あれど、五卿にはあらねば帰洛（きらく）容易なるべしと」

「三条公のお返事は」

「西下の事は、偏（ひとえ）に朝廷を憂慮する裏情（うらなさけ）に出るもの。何ぞ帰洛（きらく）復職の事を頼まんと。』

『いつはあれどけふはことさら 湊川せゞの白波袖にかけつ』

元治（げんじ）元年五月二十五日、条公が楠公祭（なんこうさい）にてお詠みになられたものじゃ。条公は四ヶ国艦隊来襲時、かかる国難に当りては勅勘（ちよつかん）の身とて、いかで傍観すべきかと申され、土方楠左衛門（ひじかたくすぎえもん）に向かい、馬関（ばかん）にて攘夷の指揮を掌るべしと命じられたお方。

小林甚六郎殿は一言も呈せず、恐懼（きょうく）して退出したという。条公のご意志は固い。龍馬も五卿の事で周旋（しゅうせん）に奔走（ほんそう）した。坂本さんは何処（どこ）へ行っても容れられる人であったが、坂本さんと一緒に

長州に来た男の議論は、坂本さんと違つて居つた」

「議論が、坂本先生と違つて居つたと申されるのは」

「その男は、僕と聞多(もんだ)を殺しに来た男だ」

「それは、誰なのですか」

「中岡慎太郎(なかおか しんたろう)だ」

「中岡慎太郎殿がですか」

「そうじゃ」

「それは、何時の話ですか」

「イギリスから戻り、山口に帰つた時のことだ。僕等は湯田(ゆだ)の瓦屋(かわらや)という宿に居つたが、中岡が、『この家に異人が二疋(ひき)泊まっているか』と酒に酔つて上がり込み、僕に『君らは大和魂を知っているか』と短刀を僕の胸に突きつけたのだ」

「それで、先生は」

「あの頃、皆が攘夷熱にうなされて半狂乱じゃ。中岡は以前、僕等と勤王論をやつて居つたから、聞多(もんだ)が中岡をだんだんと論じつけると、中岡は弱り込んで居つた。

そういう訳で中岡は陸援隊(りくえんたい)に十津川の攘夷派の郷士を組み入れて居つた。坂本さんは勝海舟(かつかいしゅう)の遣いで、横井小楠(よこい しょうなん)を訪ねた事があつたが、その時、小楠は坂本さんに乱臣賊子(らんしんぞくし)となるなかれと戒められたそうじゃ」

「その話は、聞き及んで居ります。それで坂本先生は、同盟の事をどうされたのですか」

「西郷さんに掛け合つて、船と銃を長州藩に融通して呉れた。木戸さんは、薩摩の動きに疑心暗鬼(ぎしんあんき)だ。寺田屋の事で、行き違いもあつた。慶応元年七月、僕と聞多(もんだ)が長崎に出かけ、坂本さんから銃を購入した。亀山社中(かめやましやちゅう)の周旋で小松さんと会い、藩に薩摩の情勢を報告した。会津の藩論は開国にして幕府を助けるもので、薩摩は会津と絶交し開国勤王によつて皇威を回復する事になつたと。薩摩の勤王は俄(にわ)かに信じ難い事ではあつたが」

「伊藤副使にしても、やはり薩摩への不信は拭いきれなかつたという事ですか」

「薩摩も開国へ向けて色々動いて居つたのだが。君は、山階宮(やましなのみや)の事を聞き及んで居るのか」

「話は承つて居ります」

「どのように聞いて居る」

「山階宮(やましなのみや)は伏見宮邦家(ふしみのみや)の御子で、勸修寺(かじゅうじ)門跡。中川宮の兄上様で、光格(こうかく)天皇のご養子となられ、文政六年親王の宣下を受けられました。光格天皇亡き後、他国密行の咎(とが)で伏見宮伝系を除かれ、安政五年に勸修寺室外の山科(やましな)村に帰住を許されるまで、東寺(とうじ)に幽閉されて居られたそうです。元治(げんじ)元年、山階宮の称号を賜わるにあたり、久光殿は小松帯刀(たてわき)殿を春嶽(しゅんがく)公の許(もと)に遣わされ、周旋(しゅうせん)を依頼されたそうです。この事で、坂本先生も我が藩に周旋に來られました。山階宮(やましなのみや)は西洋の事情に明るく、山科(やましな)に宮を訪ねられた高崎正風(たかさきまさかぜ)殿に、欧羅巴(ヨーロッパ)の何処(どこ)が共和政治で、何処(どこ)が君主独裁であると申さ、高崎殿の時局のお尋ねにも、事務七十余条を示されたとか。高崎殿は宮の賢明な事に感嘆され、久光殿に宮のお力添えで朝政の刷新を囑らん事を申上げられたそうです。薩摩藩は山階宮(やましなのみや)

に働き掛け、朝廷に国家経緯(けいりん)上、開国の止むべからざる所以(ゆえん)を説いて貰い、開国の詔勅(しようちやく)を煥發(かんぱつ)したまう様に取り運ばんとしたそうです。それでも、伊藤副使は、薩摩の勤王は信じ難い事であつたと申されるのですか」

「そうじゃ。高崎正風(まさかぜ)は開国を唱えるも、元来は慷慨(こうがい)雄略(ゆうりやく)の者。胡人(こじん)吹笛(すいてき)の形勢を憂う者じゃ。中川宮も開国の事を唱えられて居られたが、攘夷の叡慮は少しも変わらずと申され、家茂(いえもち)公の条約勅許奏請(そうせい)の事に激怒され、大樹(たいじゆ)の胡服(こふく)を著すは、彼の正朔(せいさく)を受くるに等しく、大樹(たいじゆ)の首はねて天下に謝すべしと申されたのだ」

「伊藤副使の物言いは、佐幕派のようです」

「そのように聞こえるなら、致し方ない。じゃが、家茂(いえもち)公は元治(げんじ)元年正月、再上洛(じようらく)して開国進取の説を以て攘夷党を説き伏せ、海陸の兵備を改善し、対外的の経緯(けいりん)を聴取せんとされたのじゃ」

「神戸の軍艦操練所(ぐんかんそうれんじよ)の事を申されて居られるのですか」

「そうじゃ」

「家茂(いえもち)公は元治(げんじ)元年三月には、佐久間象山(しようざん)先生を京に招聘(しょうへい)し、山階宮(やましなのみや)を始め中川宮や慶喜(よしのぶ)公に、象山(しようざん)先生の持論を建策させたのじゃ」

「佐久間先生は、山階宮に何を説かれたのですか。伊藤副使は、ご存じなのですか」

「勿論じゃ」

「それでは、お話ください。佐久間先生は、山階宮(やましなのみや)に何を説かれたのですか」

「象山(しょうざん)先生は、孝明(こうめい)帝のご猶子(ゆうし)となられた山階宮に開国策と彦根遷幸(せんこう)の論を説かれたのじゃ」

「彦根遷幸(せんこう)と申されましたか」

「そうじゃ」

「それで、山階宮(やましなのみや)のお答えは」

「流石(さすが)の山階宮も此節(このせつ)の国体に付、尤(もつと)も神妙の事なれど、世上治まるかのご懸念(けねん)を示されたそうじゃ」

「それでは、象山(しょうざん)先生が彦根遷幸(せんこう)の論を唱えられたというのは、本当の話だったのですか」

「本当じゃ。象山(しょうざん)先生は会津藩の広沢富次郎(ひろさわとみじろう)と山本覚馬(やまもとかくま)と図り、会津を後援として遷幸(せんこう)の事を決行せんとされた。この時、幕府の召命で上京された松代藩主・真田幸教(さなだゆきのり)公が大津にあつたので、象山(しょうざん)先生は藩兵をして大津を守備せしめんと諮るも、家老の真田貫道(さなだつらみち)一派により妨げられたのじゃ。尚も象山(しょうざん)先生は幕吏と密議に及び、彦根城遷幸(せんこう)後、皇居を東国に遷(うつ)さんとされた。象山(しょうざん)先生は大津を去り瀬田に至り、彦根藩の衛所(えいしょ)に家老の岡本半介(おかもとはんすけ)を訪い、遷幸(せんこう)の大策を告げんとするも、岡本は面会を謝絶した。象山先生が、あのような事になるとは」

伊藤先生は声を詰まらせた。

「象山(しょうざん)先生を亡き者にした者は、長州藩士ではないのですか。象山先生が襲われたのは、元治元年七月十一日、山階宮(やましなのみや)様に罷(まか)り出、騎馬にての帰り道の事。長州藩が禁門堺町御門の事を起す直

前の事ではありませんか。三条小橋の池田屋にて密議を行い、烈風に乗じて火を京に放ち、主上を長州に連れ去らんとしていたのではないのですか」

「長州は手を下して居らぬ。勿論、藩士の中には、彦根遷幸(せんこう)を唱える象山(しょうざん)先生を殺してしまえという論はあったが、木戸さんが大義名分論を説き、軽拳を戒め、先ずは象山(しょうざん)先生の所へ藩の者を遣わし事実を糺(ただ)すという事になった」

「それで、象山(しょうざん)先生は何と申されたのですか」

「その説だという。京に火を放つという計画を耳にしたから、彦根へ遷(うつ)し奉るは当然の事と申された」

「それが、長州方の勤王と申される事なのですか。そのような事で、薩長同盟は上手くいったのですか」

福井人は、承伏し兼ねていた。

「上手くいかんじやった。慶応元年九月長州征伐(せいばつ)の勅命が將軍に下されると、西郷さんは京から薩摩に戻り、長州への兵力の支援を申し入れて呉れた。その一方、坂本さんを長州に遣わし、兵糧供給の事を依頼して来た。我が藩は西郷さんの申し出を快諾し、馬関(ばかん)から京の薩摩兵に米を送る事にした。

それでも藩と藩の関係というものは、実に難しい。此方(こちら)は此方の事情があり、彼方(あちら)は彼方の事情がある。薩摩名義で購入したユニオン号も、その運用を巡って揉(も)めた。その最中、西郷さんが黒田さんを奇こし、薩長和解の段取りを付けた。京での会談に木戸さんをとの申し入れにも、諸隊が此方(こちら)から頭を下げに行く(と喧(やかま)しい。木戸さんの腰も重い。それで広沢さんが京に行った。薩摩方と勤王論の事などで意気投合するようになった。いよいよ木戸さんが京へ行き、西郷さんや大久保さんそれに小松さんと面会する事になった。

木戸さんは十二月末馬関を出立し、薩摩船で大坂に入り、薩摩の御用船で淀川を遡(さかのぼ)り伏見に着いた。

伏見では村田新八(むらた しんぱち)さんが出迎えて呉れた。それから薩摩の警護で竹田街道から京都に入った。薩摩屋敷では意を尽くした饗応(きょうおう)をして呉れた」

「それで、薩長同盟が成ったのですか。木戸先生は薩摩に何をお話されたのですか」

「従来長州藩が執った方針を説明し、長州藩に他心のなかった事を語った」

「盟約の事は、どのように話されたのですか」

「木戸さんからは口にされなかった」

「西郷さんは、何か申されたのですか」

「西郷さんは傾聴するのみ。何も言わない。そんな日々が何日も続いた。それで、業を煮やした坂本さんが来て木戸さんに詰問した。何故、両藩の要路の者が空しく十余日を費やしているのか。肝胆(かんだん)を吐露(とろ)し大いに天下のために将来を協議しないのかと。」

木戸さんも坂本さんの言う事くらい分かる。皇国の病弊(びょうへい)をみる事、西郷さん大久保さんに劣るものではない。今日より皇国に富国強兵の策を施せば、天下ともに安楽に立至ると申されていた。木戸さんも、西郷さんも、大久保さんも、皆、皇国に共和政治をやり通さねば天に対して相済(あいす)まぬと思っていた。それでも、木戸さんは自ら尊王の事を口にされる事はなかった」

「何故です」

「幕府軍に防長二州三十六万国で対抗しなければならなくなった経緯がある。取り巻きも居る。この様な時に、盟約の事を自分から言い出す事は憐れみを請うようでは出来なかった。たとえ長州が減ぶとも。倒幕の事は、斉彬(なりあきら)公の志であられたから、西郷さんから勤王の事を口にして呉れば、事は容易に運ぶ事であったが」

「それでは何故、西郷さんは黙って居られたのですか」

「木戸さんの心を探られたのだ」

「それで、木戸先生は。木戸先生は、鳳輦(ほうれん)の事を口にされなかったのですか」

「そのような事、公の場で口に来るものではない。その後も木戸さんは、頑(かたく)な態度を取られた。致し方なく、坂本さんが西郷さんの所に行つて、木戸さんが書いた意向をみせた」

「それで、西郷さんは」

「そこは西郷さんだ。坂本さんに薩摩方の説得を約束して呉れた。その夜、坂本さんも同席し、西郷さんから盟約の事を約束して呉れた。それでも心配な木戸さんは、京を離れるにあたり坂本さんに盟約六条を書き示し、坂本さんがその裏に朱書きで誓約を書いたのだ」

「それで長州の方は、収まりがつかいのですか」

「薩摩との事は、長州の志気を弛緩(しかん)させ兼ねない。木戸さんと黒田さんが長州に行き、君公と数名の要路の者にだけ報告した。薩兵二千人直ちに京都に差し向け、一橋、会津、桑名が、長藩の朝廷への周旋(しゅうせん)の道を遮る時は決戦に及ぶと。倒幕の事は尊攘でやったから、開国の国是は浸透しなかった。砲撃芝居だ。事情を知らぬ者は混乱した。ただ、薩摩とは、長州冤罪(えんざい)御免の上は皇威回復立ち至るよう互いに尽力(じんりょく)するとの密約はした。それで奥羽鎮撫総督(ちんぶそうとく)の参謀は、黒田さんと品川弥次が勤める事になったのじゃ」

「黒田さんと品川さんは、参謀を辞退されたと聞いて居りますが」

「そうじゃ。薩長両藩は鳥羽伏見(とばふしみ)の戦いの後、京都の仙台藩屋敷にて執政の但木土佐(ただき とさ)に

錦旗（きんき）と日月旗（じつがつき）を授け、会津攻めの沙汰（さた）を下したのだが、仙台藩本国は、輪王寺宮（りんおうじのみや）を通じて徳川氏の寛典を朝廷に願い出た松平容保（まつだいら かたもり）に与せんとした。それで、薩摩藩は大山綱良（おおおやま つなよし）さんを、我が藩は世良修蔵（せらしゅうぞう）を遣わし、尊王の大義を糺（ただ）す事にしたのじゃ」

「世良さんと申される方は、どういう方なのですか」

「本名を中司修蔵といい、周防国（すおうのくに）大島郡掠野（むくの）村の庄屋の出。嘉永（かえい）五年萩に出で明倫館に学ぶも飽き足らず、安政（あんせい）元年、周防大島郡遠崎（とおざき）の海防僧・月性（げつしょう）に学びし者。文久三年に熊毛郡（くまげのこおり）伊保庄村（いほのしょうむら）阿月（あづき）の領主・浦靱負（うらゆきえ）殿の家臣・木谷良蔵殿の養子となるも、赤根武人（あかね たけと）に一味し、一時、高杉さんと袂を分った。世良修蔵（せらしゅうぞう）と姓を改めたのは、赤根に一味した汚名を雪（そそ）ぐためじゃ」

「汚名」

「そうじゃ。浦靱負（うらゆきえ）殿は、絶家となりし世良家を再興せんとされたのじゃ。以後、世良さんは赤根の奇兵隊を脱し、四境戦争（しきようせんそう）では大島口の戦いで大島奪回に活躍された。鳥羽伏見の戦いの後、奥羽鎮撫総督（ちんぶそうとく）の参謀となり、会津討伐に赴くも、仙台藩の者に亡き者にされてしまった」

「仙台藩の者にですか」

「そうじゃ。新政府は、奥羽鎮撫総督（ちんぶそうとく）の本営を仙台藩藩校の養賢堂（ようけんどう）に置いたのだが、玉虫左太夫（たまむし さだゆう）や若生文十郎（わこうぶんじゅうろう）ら仙台藩の尊攘派が、大山綱良・世良修蔵に罵倒（ばとう）されたと憤慨したのだ」

「罵倒(ばとう)されたとは、どういう事なのでしょうか」

「奥羽鎮撫総督(ちんぶそうとく)参謀の世良さんは、九条道孝総督一行に随行して、軍艦にて大坂から出立。古歌『藻鹽(もしほ)焼く』で有名な塩釜に上陸し、仙台に向かう途中、多賀城(たがじょう)跡にて和歌を詠まれた。『あまつひのくまなくてらす多賀の城 此れぞ都の姿なるらん』。世良さんと共に斬殺された松野儀介は、世良さんが生まれた掠野(むくの)村の隣村の生れ。越智(おち)姓の者」

「それが、罵倒(ばとう)されたと申される事なのですか」

「そうじゃ」

何時もの伊藤節であった。伊藤先生は私の方に向き直り、声を潜めて言った。

「どうも貴公が居ると話に熱が入ってしまう。今日はこの辺にしておかないと。所で、貴公を呼んだのは外でもない。木戸さんにも話しておいた。心配されて居られたから、部屋に居られるだろうから、訪ねるとよからう」

伊藤先生は、盛んに福井人に詫びていた。伊藤先生の勤皇は、信じ難い事であった。

十一

木戸先生の部屋を訪れると、丁度、山田先生と随員の原田殿が、部屋を出られるところであった。お二人はドアを出ると、足早に通り過ぎて行った。

「何か、あったのですか。随分難しい顔をされて居りましたが」

「待遇が召されないのだ」

「幕臣に大きな顔をさせてよいのですか」

「原田殿はフランス語がご堪能（たんのう）な方。致し方ない。今日は、何だ」

木戸先生は不機嫌そうに言われた。

「お願いがあつて参りました」

「あの事か」

「木戸先生はご存じだったのですか」

「春輔（しゅんすけ）から話が あつた」

「それでは何故に、お許しになられたのですか」

「許しはして居らぬ」

「それでは何故に、奴は降誕祭（こうたんさい）に行つたのですか」

「行くなどとも言つては居らぬ」

「木戸先生は、どうされるのですか。耶蘇教（やそきよう）を解禁されるのですか」

「その事は、長崎で聞多（もんだ）も苦労した」

「井上先生は何故に、あの者たちを厳罰に処さなかつたのですか」

「文明開化の世にあつては、罪人といえども厳罰に処せるものではない。聞多（もんだ）も長崎にあつて、あの者たちに
天照皇太神（あまてらすすめのおかみ）のご恩に服するよう説いた」

「そのような事で改宗する者たちではありません。磔（はりつけ）にしても改宗など致しませぬ。何故に、あの者たちは

「耶蘇教（やそきよう）を信じて居るのですか」

「靈魂を救うためだと申して居る。あの者たちの巨魁（きよかい）一人、死罪に処したが、喜んで死んで行った」

「どういう事なのでしょう。靈魂が救われるなどと。死んで靈魂が救われる事などあるのでしょうか」

「あの者たちは、来世に生きるといふのだ。聞多が天照皇太神（あまてらすすめおおかみ）のご恩を説いても、現世限りの事と言つて耳を貸さぬ」

「そのような事ではよろしいのですか。先生はいつからハイカラになられたのですか」

「ハイカラなど、なつては居らぬ。命は貴いものだ。人間の魂は、一度死ねば一切が消え失せる草木鳥獸（ちようじゆ）の魂とは違ふのだ」

「伊藤先生の口車に乗せられて居られるではありませんか」

「そのような事は無い。考えあつての事だ」

「一刻も早くあの者たちを嚴罰に処し、朝鮮の策に着手されるが、先決では」

「その事にも、考えがある」

「考えがあると申されますのは」

「朝鮮の事は、窮余の策。王政復古を果たすも世情すこぶる動揺して居る。堺にては土佐藩兵挙兵に及んだ事は、君も承知の事」

「朝鮮の事は、窮余の策と申されますか」

「今はその時ではない。朝廷にも兵なし。とても朝鮮の事に及ぶ時ではない」

「それでは、どういう時だと」

「それは、何遍（なんべん）も言ったではないか。西洋の文明を入れ、内治を優先する時だと。兵力を以て韓地・釜山（ふざん）港を開港せしも、彼の地、もとより物産、金銀少なく、かえって損失を被る事になりはしまいか」

「木戸先生も打算家になられた」

「今は、皇国の大方向を立て、海陸の技芸を実着にし、万世に維持できるように専念する事だ。韓地の事は、東海に光輝を生じさせてからだ。彼の者たちに、宇内（うだい）の条理を説いても、耳を貸さぬ」

「それこそ、干戈（かんか）をもつて成敗する時ではありませぬか」

「なにも、今日はそのような事を申しに来たのではあるまい。幕臣と密議を凝らして居るといふではないか」

「ご存じのですか」

「あれやこれやと聞こえてくる」

「旧幕臣が先生のお命を狙っているというのは、本当のですか」

「官軍に抗せし者、百も承知の事だ。そのような事を知らずに、使節に加えたと思つて居るのか」

「それでは、何故にそのような者を態々（わざわざ）」

「国家有用な人物、官軍賊軍（ぞくぐん）などと申して居る時ではない。君には、話して居らぬが、幕臣とは浅からぬ縁があるのだ」

木戸先生は言葉を呑みこまれた。

「勝先生の事なら、存じて居ります。勝先生とは、清韓の策など色々な事を論じられたと。姉小路公知（あねがこうじきんと）も）卿が殺されたのは、勝先生と何か関係があつたのですか」

「今更、何故そのような昔の事を聞く」

「兼ね兼ね、不審に思つて居りましたから。姉小路卿(きょう)を亡き者にしたのは、実は会津ではなかったのではないかと。会津は、薩摩の田中雄平殿を下手人に仕立てて置いて、朝命と称して捕らえたのです」

「何故、そう思うのだ。姉小路卿を斬つた現場に、田中雄平の刀があつたという話ではないか」

「そこが、怪しいところです。薩人の話では、濡れ衣だということです。何でも、祇園(ぎおん)新地の妓楼(ぎろう)で遊女と戯れて居つた所、刀を何者かに盗まれたそうです。しよつぴかれた会津藩邸で、武士の面目を失つたと腹を十文字に搔(か)き裂かれ、薩摩武士の腑(ふ)を示されたとの事。それにです」

「それに、何だ」

「木戸先生は、おかしいと思われませんか。姉小路卿は攘夷家の中の攘夷家であられたのです」

「そうだ。姉小路(あねがこうじ)卿は、条公とは学習院でのご学友で、尊攘派の急先鋒であられた」

「そうなれば、先ずは会津あたりの開国派を疑うのが筋。次に開国派のなかでも佐幕派に絞れば、姉小路(あねがこうじ)卿殺害のことは、やはり、勝先生に与(くみ)されたからではありませんか」

「そうやも、知れぬ。あの時は、勝さんが將軍家茂(いえもち)を動かし、神戸村に軍艦操練所(ぐんかんそうれんじよ)を創ろうとされた。文久(ぶんきゆう)三年に併設された海軍塾には、龍馬や春輔(しゅんすけ)、薩摩の伊東や紀州の陸奥を入れ、皇国一大共有の海軍を創らんとされて居られた。

姉小路(あねがこうじ)卿は攘夷家の中のものであられたが、海防の事はお分かりない。西洋の軍艦にては、僅(わず)か四、五艘(そう)で皇国六十余州の海岸を自在に攻撃出来る故、皇国にても追討すべき軍艦が必要だと、君公より朝廷に建白されたのだが、姉小路(あねがこうじ)卿は鎖国の旧制に復し、防備の事は砲台でやると申される。それで、勝さんが姉小路卿を順動丸(じゅんどうまる)にお連れし、摂津海岸を巡視して、海軍による防禦(ぼうぎよ)

を説かれた。それで、佐幕派の怒りを買ったのかもしれない」

「先生は随分、他人事のようにお話をされます。先生は、姉小路（あねがこうじ）卿と海軍建設に奔走されたと申されたではありませんか。姉小路（あねがこうじ）家は、藤原鎌足公の末裔（まつえい）なれば、大化の大改革に倣つて、天皇御親政の新たな国家を建設されんとしたのではありませぬか」

「それは、そうだが、姉小路（あねがこうじ）家は三条家と事情が違ふのだ」

「事情が違ふと申されますのは」

「姉小路（あねがこうじ）家は藤原北家（ふじわらほつけ）閑院流（かんいんりゅう）の出であるが、南朝に仕え、一時、没落して居られたが、再興を図られたのだ」

「それでは、姉小路（あねがこうじ）家の末裔が、家康に仕えたという話は本当のですか」

「それは、小一条（こいちじょう）流の出の者たち。この者たちは、建武（けんむ）の新政で飛驒（ひだ）国司（こくし）に任じられ、代々飛驒国司家となつていたが、室町時代、守護の京極氏との争いに敗れ、京極氏の家臣・三木良頼（よしより）が姉小路の名を名乗つたのだ。この姉小路氏も秀吉との戦いに敗れ、その生き残つた者たちが家康に仕え、三木氏を名乗つたのだ。今は姉小路（あねがこうじ）氏に復したが、公知（きんとも）卿とは同じ藤原の出なるも、片や京のお方、片や飛驒（ひだ）の者たち。育ちも血筋も違ふ。姉小路卿の事は、そういう事だ。後で折々話す。今日、君に話すのは、その事ではない」

「それでは、どんな事でしょうか」

「今までは時世を憚（はばか）つて居つたが、君にも話しておかねばならぬ事がある。中島三郎助（なかじま さぶろうすけ）殿を存じて居るか」

「存じませぬが」

「そうか」

「何方(どなた)ですか」

「ペリー艦隊が浦賀に来航するや、浦賀奉行と称して、真つ先にペリー艦隊と掛け合われた方だ。幕府はペリーが去ると、大船建造の禁を解き、浦賀与力(よりにき)であられた中島先生に軍艦製造の命を下したのだ」

「木戸先生は、中島殿とどのような関係なのですか」

「造船の師だ。我が藩が萩の恵美須(えびす)岬の造船所にて、安政(あんせい)三年にスクーネル形船の丙辰丸(へいしんまる)を造ったのは、存じておろう」

「勿論です」

「それに先立ち、安政(あんせい)二年、僕は君公より剣術修養の傍ら、船艦製造の技術も講習せんと命を受けた。それで浦賀で中島殿に師事を請い、中島家の納屋に居し、修養した」

「木戸先生がですか」

「そうだ。英庵殿に周旋して貰った」

「英庵」

「東条英庵(とうじょう えいあん)といつて毛利筑前のご家臣。医師をして居られたが、蘭学に通じて居られる故、幕府の兵学者となられた。英庵(えいあん)殿は、松陰先生に佐久間象山先生を紹介された方だ。

中島先生には、癸丑(きちゆう)・甲寅(こういん)のペリー来航の時から、異国船の動向を教えて貰った。江戸から萩・野山獄に居られた松陰先生に幕府の動きを報告していたが、松陰先生は僕の書を読まれて、勝先生と中島先生の

確執(かくしつ)を嘆かれて居られた。アメリカ、ロシア、イギリス、フランスの四患に対峙(たいじ)し、古朝廷の姿に復せんとする時にと」

「何故に、勝先生と中島先生は」

「士大夫(したいふ)の嫉妬(しつと)は畏るべきも、夷狄(いてき)にはないものだ。神州の大患(たいん)、皆、これから生じると言つても過言ではない」

「どういう事なのでしょう」

「松陰先生は申された。『幕府の吏皆、肉食(にくじき)の鄙夫(ひふ)と紈袴(がんこ)の子弟(こ)なれば、一、二の傑物あれども、衆楚(しゅうそ)の囂々(ごうごう)、一斉(せい)人の能く克つべきに非ず』と」

「木戸先生の話は難しく、分かりかねます。勝先生は中島先生と仲が悪かったですか」

「勝先生と中島先生は、長崎海軍伝習所での同期。中島先生は、勝先生の三歳年長なれども、同じ釜の飯を食べられた仲。士大夫(したいふ)の嫉妬(しつと)と申すは、そのような事ではない。

兎に角、安政の時の事は、貴殿には想像のつかぬ事ばかりだ。若かれし頃、僕も手塚律蔵(てづかりつぞう)先生の又新(ゆうしん)塾に通った事も、今は昔の話。蘭学を究めんとしたが、国事に奔走、初志を断念せざるを得なかった」

「手塚先生」

「周防(すおう)熊毛郡(くまげ)こおり)小周防村の生まれの人で、長崎で蘭学を学ばれ、江戸本郷で家塾を開かれた方だ。安政三年、英庵(えいあん)殿と共に幕府蕃書調所(ばんしょ)の教授方とられた。手塚先生は、西周(にし あまね)さんや神田孝平(かんだ たかひら)さんの師だ。西さんは石見(いわみ)津和野の人で、オランダ留学後、開成所教授として『万国公法』の翻訳をなした。あの頃、藩庁には蘭語が飛び交っていた」

「神田殿は、どういう方なのですか」

「美濃の人で、杉田玄白（すぎた げんぱく）、伊藤玄朴（いとう げんぼく）に蘭学を学び、手塚先生の又新塾に入門された方だ。僕は神田さんから歩兵調練書の手解きを受けた」

「そのような事が、あったのですか」

「色々な事があつた。あれは安政二年の事だつた。君公の明断で、坪井九右衛門（つばい くえもん）殿が再拔擢された時、僕は積年の赤心が感孚（かんぷ）した思いであつた」

「木戸先生は、坪井（つばい）殿の味方をされて居られたのですか。村田清風（むらた せいふう）先生の軍制改革を支持されていたものと思つて居りましたが。三十七カ年賦（ねんぷ）皆済（かいさい）仕法（しほう）は名案ではありませぬか」

「軍事だけでは世の中、上手く行かぬもの。通商を盛んにして、初めて世の中は上手く行くものなのだ」

「木戸先生まで、そのような事を申されては困ります」

「そう申すな。物産を交易し、有無（うむ）を融通して、初めて国力が培養されるのだ。僕は長州に一大商社を興さんと薩摩の五代友厚（ごだいともあつ）さんと計画して居つたのだ」

「それは、松陰先生の教えに反して居られるのではないですか」

「そうかも知れぬ。松陰（しょういん）先生も坪井（つばい）殿の事は憂慮されて居られた。坪井（つばい）殿は明敏才能の持主なるも、異同の論必ず蜂起すると。事は松陰（しょういん）先生のおっしゃた通りになつた。坪井殿は文久三年、切腹と相成つた。松陰先生は、明倫館（めいりんかん）の事も憂慮されて居られた」

「松陰先生は、明倫館（めいりんかん）の何を」

「館名の明倫は、荻生徂徠（おぎゆう そらい）の高弟・山県周南（やまがた しゅうなん）が、人倫を明かにせんと撰じたるもの。斉広（なりとう）公の時、幕府の儒臣・林述斎（はやし じゅっさい）を招聘し、山県太華（やまがた たいか）を斉広（なりとう）公の侍読となした。天保八年に慶親（よしちか）公が封を襲い、翌年、入萩に及び、山県太華（やまがた たいか）を明倫館の祭酒（さいしゅ）となしたのだ。松陰先生は、申された。経書を読むの第一義は、聖賢（せいけん）に阿（おも）ねらぬ事だと。若（も）し少しにても阿（おも）る所あれば、道明ならずと。それで、松陰先生は『講孟筭記（こうもう さつき）』の評を山県太華（やまがた たいか）に求められた」

「そのお話は、伺って居ります。松陰先生は、孔孟が生国を離れて、他国に往き君を求めるのは、我が父を頑愚（がんぐ）として家を出て、隣家の翁（おきな）を父することに斉（ひと）しいとおっしゃられたと。木戸先生は、これを松下村塾門弟の心すべき事だとおっしゃられました。されば松陰先生は入門を請われた吉田稔麿（よしだ としまろ）殿に、『孟子』で百里奚（ひやくりけい）が虞公（ぐこう）を諫めずに去ったのを智賢と論じている事を問われたのではありませんか。木戸先生がご存じない訳がありません」

「勿論だ。稔麿（としまる）は、百里奚（ひやくりけい）が虞公（ぐこう）を諫めず、死ぬこともせず、何を以て智賢と言えるだろうかと答えて、入門を許されたのだ」

「ならば、木戸先生は耶蘇教（やそきょう）の事はどうされるのですか。徂徠（そらい）は邪教（じやくきょう）に惑わされて居るのではないですか。松陰先生の尊皇攘夷は、どうされるのですか。松陰先生は、ペリーを斬りに行かれたのではないのですか。松陰先生は宮部先生に『斬れるか』とおっしゃたと申されたではないですか」

「それは宮部殿に覚醒を促されての事」

「覚醒」

「癸丑甲寅の時は、我が神州の正氣から覚醒を促された時であつた。勿論、松陰先生もアメリカ船打払いとなれば、死を以て国に報ずる覚悟であられたが、僕の劍術の師であられる斎藤弥九郎(さいとう やくろう)先生は、『和戦の二字は、一朝に決すもの。何ぞ小田原評定(おだわらひようじょう)を必要とするか』とおっしゃた」

「どういう事でしょうか」

「和戦の決は、大將軍の方寸(ほうすん)にあるもの。松陰先生も、孟子の『吾が及ぶ所に非ざるなり』の意だと申されて、斎藤先生の卓見に感服して居られたのだ」

「それはおかしな話です。君主を諫めるが、臣の勤め。將軍は夷人(いじん)に屈したのです」

「松陰先生は、夷人(いじん)を心底憎まれる事はなかつたのだ。『春秋』の夷狄(いてき)を疾(にく)むは、純(もつぱ)ら夷狄(いてき)なるを疾(にく)むに非ずと申されたのだ。孟子の『吾、夏を用て意を變ずる者を聞く。未だ夷に變ぜらるる者を聞かざるなり』という事だ」

「それは、聖賢に阿(おも)ねく論でありませぬか」

「そうではないのだ」

「それでは、どういふ事なのですか」

「松陰先生は、夷狄(いてき)にして中国に進む者と、中国にして夷狄(いてき)に流るる者との差別を明かにする事が、急務だと申され、中国を以てして流れて夷狄(いてき)に入る者を悪(にく)まれたただけだ。夷人(いじん)を心底憎まれる事はなかつたのだ」

「それは、木戸先生の詭弁(きべん)です。攘夷のことは、松陰先生の策謀だと申されるのですか。松陰先生が、夷人(いじん)を心底憎まれる事はなかつたなどと信じられません。詭弁(きべん)です」

「詭弁(きべん)などではない。松陰先生は、皇国の用を成すに至りては、其(その)人夷狄(いてき)に生ずるを以て是を疾(にく)まば、孟子何ぞ陳良(ちんりょう)を称美することを得んやおつしやったのだ」

「それで、新政府は、西洋からお雇い外国人を入れたというのですか」

「そうだ。古の賢君は、夷狄(いてき)の者であっても、賢なる者は敢(あえ)て捨てず、用いたのだ。況(いわ)んや其(その)の術をやという事だ。西洋の大砲船艦、医薬の法、天地の学、皆吾(われ)に用ありだ」

「それで木戸先生は、僕等に道の用を学べとおつしやるのですか」

「そうだ。だが、もし君が夷狄(いてき)の心を挟み、夷狄(いてき)に流ることになれば、僕は君を斬らねばならぬこととなる。佐久間象山(さくま しょうざん)先生が『この任務は、心に深く忠義の志を持つており、国の恩義を知っている人物でなければ、必ず大害を生ずるようになる』と申され、松陰先生にアメリカ渡航の任務を託されたのだ。幸いペリー再来航後、事は斎藤弥九郎(さいとう やくろう)先生が予見された通り、平穩に推移したれば、松陰先生は海外に出て知識を求めんとされたのだ。

あの頃、水肥連合し、幕府を鞭撻(べんたつ)して攘夷の挙に出でんとする策もあつた。水肥両藩主の書信の往復となり、藤田東湖(ふじた とうこ)長岡監物(ながおか けんもつ)の応酬(おうしゅう)となつたが、事はならなかつたのだ。肥後の横井小楠(よこい しょうなん)も藤田東湖(ふじた とうこ)に書簡を贈り、水戸の老公が幕府の後見人になつたのを機に、二百年太平因循(いんじゆん)の弊政を一時に挽回し、江戸を必死の戦場と定め、我が神州の正気を天地の間に明に示さんとしたのだ」

「それでは何故に、水肥の連合は成らなかつたのですか」

「肝心の斉昭(なりあき)公が、我が神州の正気を天地の間に示す事を欲せられなかつたのだ。それを察せられた長岡

監物（ながおかけんもつ）は、江戸を去つて行かれた。

折しもあの時、象山（しょうざん）先生が幕府軍艦購入の際、人材をオランダ船にて海外に出で、世界の情勢を探るよう幕臣に働き掛けて居られた。松陰（しょういん）先生は象山（しょうざん）先生の意見が採用された暁（あかつき）には、随従して世界の情勢を観察せんとされた。しかし、象山（しょうざん）先生の建白は採用される事なく、松陰先生は嘉永（かえい）六年九月、江戸を発ち、長崎碇泊中のロシア軍艦に乗ろうとされた。象山（しょうざん）先生は松陰先生長崎行きに際し、『五洲自ら隣を為す。周流形勢を究めよ。一見は百聞を超ゆ』との詩を贈られたのだ。

「それで、松陰先生は宮部鼎蔵（みやべていどう）殿に、夷人（いじん）を斬つても無駄ではないかと覚醒を促されたと申されるのですか。それでは、何故に、宮部殿は松陰先生と事を共にされなかったのですか」

「覚醒に至らなかつたからだ。松陰先生が変節されたと思われたのだ。嘉永（かえい）七年三月京橋ぎわの伊勢本という酒楼（しゅろう）に登り、松陰先生が同志一同にアメリカ渡航の計画を打ち明けられた時だ。宮部殿お一人がアメリカ渡航の事に反対された。これは危険な計画だ」と

「松陰先生の身を案じられたのではないですか」

「そうではない。宮部鼎蔵（みやべていどう）殿は、松陰先生が尊攘の志を捨てたと思われたのだ。それで良蔵（りようぞう）殿が、松陰（しょういん）先生のために助け舟を出された」

「来原（くるはら）殿が」

「宮部殿に、外国の国情を探る事は今、必要と思うかと問われた」

「宮部先生は何と申されたのですか」

「勿論必要だと。それで、良蔵殿が』とすれば、さらし首になろうとも寅二（とらじ）が憾（うら）みに思う事はあるま

い』と申されたのだ。それから誰も口を開こうとしなかったが、肥後の永島三平（ながとりさん・ぺい）殿が『思いきった事に全力をあげてやるのが吉田君の長所だ』と申されると、松陰（しょういん）先生は、筆を執り決意の程を示された」

「松陰先生のご決断。御国（みくに）を想うお心が察せられます」

「宮部殿は松陰先生との別れに際し、腰の刀を脱し、松陰（しょういん）先生の刀と替え、餞別（せんべつ）に歌を口ずさまれた」

「どのようなお歌を」

『皇神（すめかみ）の真の道を畏（かしこ）みて 思ひつつ行け思ひつつ行け』と

「象山（しょうざん）先生は、象山先生は、下田踏海（しもだとうかい）の挙に、お言葉はなかったのですか」

「松陰先生は、象山（しょうざん）先生のお宅に向かれたが、象山先生は横浜に行かれて、お留守であった。松陰先生は、『しばらく鎌倉の山中の隠棲（いんせい）し、平生の志を遂げようと存じます』との書を家人に託された」

「松陰（しょういん）先生は何故に、斯様（かよう）な偽りを申されたのでしょうか」

「禍を他に及ぼさぬためだ。僕と良蔵（りょうぞう）殿は松陰先生のために小舟の手配をしようとしたが、松陰先生はこの申し出を断わられた」

「松陰（しょういん）先生に当てがあつたのでしょうか。やはり、ペリーを斬りに行かれたのではないですか」

「そのような事はない。松陰（しょういん）先生は、先ずはペリー艦隊の碇泊の様子を探りに横浜に出られたのだ。そこで、象山（しょうざん）先生の従僕をして居る銀蔵と出会い、象山先生が漁師に扮（ふん）してアメリカ船に行くという

話を聞き、松陰（しょういん）先生も同行する事にした」

「そのような事で、アメリカ船見物が出来るものなのでしょうか」

「出来たのだ。土地の漁民は随分、アメリカ船に乗り込んで居った」

「それで松陰（しょういん）先生は、アメリカ船見物をされたのですか」

「漁師がお咎（とが）めを恐れて断わってきた。その後も何回か漁師に話を持ち掛けたが断わられた。松陰（しょういん）先生、象山（しょうざん）先生、金子重之輔（かねこしげのすけ）の三人は、行く手を阻む荒れ狂う波を幾度（いくたび）呪った事か。英雄といえども天の前では、無力なものだ。それでも、松陰（しょういん）先生は諦められなかった。本牧（ほんもく）に出かけ、地形や海の状態を調べられ、アメリカ人に差し出す文に書き添えられた。横浜村の南、海岸が断絶した人家のないところで、午後八時ごろ火を点じ合図するから、はしけで迎えに来てくれと。」

象山（しょうざん）先生は薪水（しんすい）を積むご用船なればと、松陰（しょういん）先生に浦賀の知り合いの役人への添書を持たせたが、肝心の船が来ない。来ても与力（よりき）等が乗り込んで居る。そうこうしているうちに、ペリー艦隊は下田へ行ってしまったのだ」

「それで、松陰（しょういん）先生は下田踏海（しもだとうかい）の事を行われた」

「下田に向かわれる途中、松陰先生は熱海（あたみ）に宿をとられ、何度も温泉に浸（つ）かられた。熱海のもうもうと湯気（ゆけ）立つ様は、島原の雲仙（うんぜん）や信州の浅間山にも劣らぬものと申された」

「松陰（しょういん）先生は、下田に物見遊山（ゆさん）に参られたのではありません。お話をはぐらかさないで下さい」「はぐらかしてなど居らぬ。あの頃は、温泉の事は国体に関わる大事な話だったのだ」

「そのような事が、あるものなのでしょうか。温泉の事などが、何故に御国（みくに）の国体に関わりがあるのでしょうか。それより、松陰（しょういん）先生は下田で何をなされたか、お話ください」

木戸先生は何かをおつしやられようとされたが、私の気魄（きはく）に負けてか、諦められた。木戸先生は俄（にわ）かに席を進められた。

「ペリー艦隊が下田に現われたのは、松陰（しょういん）先生が下田に着いた日の朝の事。それからアメリカ人は毎日上陸し、あちこち歩き回った。松陰先生は木村軍太郎（きむらぐんたろう）殿と宿を同じくされ、木村殿から望遠鏡を借り、ペリー艦隊の様子を窺（うかが）つて居られた」

「その木村軍太郎とは、金子重之助（かねこしげのすけ）殿が『ああいうやつが世間を惑わす』と申された佐倉（さくら）藩士の事では」

「そうだ」

「和親通商の話ばかりする輩（やから）と聞いて居りますか」

「木村殿も象山（しょうざん）先生門下。藩主堀田正睦（ほったまさよし）殿の命で、西洋兵法の研究をされた方だ。幕府が火繩銃を廃し西洋銃法を用い、弓組（ゆみぐみ）長柄組（ながえぐみ）を廃して西洋兵式に改めたのは、堀田殿のご尽力。重之助が木村殿の事で松陰（しょういん）先生に国体を顧みない輩（やから）と嘯（う）み付いても、松陰先生は笑つてとり合われなかつたのだ」

「夷人（いじん）たちは、下田で何をして居ったのですか」

「測量だ。はしけを出して、海岸の岩を白く塗り、樹の上に白旗を結びつけて居った」

「木戸先生は、測量をして居つたと申されるのですか。夷人（いじん）は、測量と称して、皇国を窺う段取りをしていたのではないのですか。松陰先生が、そのような横暴な振る舞いをお許しになるとお思ひなのですか。姉崎の弁財天（べざいてん）に潜まれ、夜が更けるのを待たれた松陰先生のご心情が察せられます。ミシシッピ号へ乗移る際、小舟を失

う事なく、刀を携え米艦に上がる事が出来ましたなら、松陰先生も心置きなく本望(ほんもう)を達せられた事でしょうに」

「そのような事はないのだ」

木戸先生は困惑されて言った。

「それでは、どういう事なのですか」

「松陰先生は、刀の事など考えられないで米艦に乗り込まれたのだ」

「刀は武士の魂ではありませんか」

「重之助(しげのすけ)は恥辱と考えたが、松陰(しょういん)先生には、そのようなお考えはない。敗れる時は、そのようなものだ。後世の歴史家は、『奇を好んで方法を知らず、こういう結果になった』と書くかも知れぬが、それは事の本質を知らぬ者。悲しい事だが、やり方が下手だったという問題ではない。松陰(しょういん)先生は、敗れるべくして敗れたのだ」

「敗れるべくして敗れたとは、何を申されて居られるのですか」

「松陰先生は、孫子の『上智を以て間者(かんじゃ)と為す』を引いて、失敗もまた当然だろうと申されて居られるのだ。上智なく下寓で謀ったようなものだ」と。

象山(しょうざん)先生は松陰(しょういん)先生の『幽囚録(ゆうしゅうろく)』を見て、ところどころ怒りや憾(うら)らみに似た言葉があると申された。『王道の偏(かたよ)る事なきに非ずんば、胡(なん)ぞ文明の今のごときを瞻(み)んや』という事だ。雄大な計画というものの、万世に光り輝き、また後世の者が模範として、学ぶべきものだ。この話も、追々しよう。それより、今日は御国(みくに)の国体の事を話しておかねばなるまい」

「木戸先生のお話は、何時も難し過ぎます。私にも分かるように、お話しして下さい」

「君には、松陰先生が東北遊歴の際、水戸の会沢正志齋(あいざわ せいしさい)先生のもとを訪ねた事を話したはずだ。滔々(とうとう)として時事を語る松陰先生に、会沢先生は、『日本書紀』を始とする六国史(りつこくし)は読んで居るか、皇道の大本を研究した事があるか、上古神聖肇国(ちようこく)の由来を知って居るのかと問われたのだ」

「話は承知して居ります。宮部殿も、また会沢先生から同じ事を言われ、故郷に戻り、国典の研究を始められたそうです。それと、下田踏海(しもだとうかい)の事とどういう関係があるのでしょうか」

「松陰(しょういん)先生は申された。『肥後州は彼の唐山の如き、人倫の至り、聖人の生るる有りとするも、終(つい)に被髪左衽(ひはつさじん)の奪う所。四方猖獗(しようけつ)の賊、故無(ゆえな)く人の国を奪い、唯(ただ)利を之れ求むるを以て急と為し、義の何物たるかを知らざる者。義確立する所無く、其の君を視るに當(あた)つて逆旅(げきりよ)の若(ごと)く、我が皇国に生まれし者は、其(そ)の義を崇め、其(そ)の利を蔑視し、宜しく夷賊(いぞく)の為すところを習ふる事無かるべきなり』と」

「義を崇め、利を蔑視する事は、皇国に生まれし者なれば、誰もが認める所。それで松陰先生は、宮部殿と夷人を斬りに行かれたのはありませぬか」

「松陰先生も宮部殿も互いの心に問うたのだ。『斬れるか』と」

「心こ」

「宮部殿、菊池氏勤王の地に生まれし慷慨(こうがい)激烈(げきれつ)の士。松陰先生は宮部殿のことを菊池氏の心を王朝に用うる者、楠氏と並び称される者と称され、大いに王朝を成し廃典(はいてん)を興さんとされたのだ」

「廃典(はいてん)を興す。木戸先生は変な事を申されます。我が藩の越智斧太郎(おちおのたろう)は、廃典(はいてん)

ん)を興さんとした塙保己一(はなわ ほきいち)の子を亡き者にしたのです。廢典(はいてん)を興すとは、どういう事なのでしょうか。それこそ渡航して、西洋被(かぶ)れになっては元も子もないではありませんか。それとも、木戸先生は我が国の国典が西洋被(かぶ)れているとしても、申されるのですか。木戸先生は、話を誤魔化(ごまか)されておられます。そもその話、大楽源太郎(だいらく げんたろう)先生が、一命を賭して兵を挙げられたのも、高杉先生の馬関(ばかん)挙兵の志を受け継がれての事ではなかったのではないですか。山口では、大楽(だいらく)先生の意見が容れられず、豊後(ぶんご)杵築藩(きつきはん)姫島に脱出され、回天の旗を掲げんとされたのです。それを木戸先生が、反乱軍の探索などと称して豊州(ほうしゅう)に兵を遣わされるから、大楽(だいらく)先生は筑後(ちくご)久留米藩(くるとみはん)の古松簡二(ふるまつかんじ)殿を頼り、久留米に奔り、そこで同士の裏切りに合い、高野八幡宮の裏手の筑後川(ちくごがわ)川原で殺されてしまわれたのです。大楽(だいらく)先生こそ、松陰先生の教えを忠実に守られた正義の士ではありませんか。そうではないのですか。西洋に被(かぶ)れた大村先生が兵制改革など行方から、大楽(だいらく)先生の門弟の神代直人(こうじろ なおと)殿が大村先生を亡き者にしようとされたのです」

「大楽(だいらく)君は、そのような事はせぬ」

「それでは、神代(こうじろ)殿が勝手にやったと申されるのですか。ますます分からなくなりました。一体、松陰(しよういん)先生の尊皇攘夷(そのんこうじょうい)とは何だったのですか、はつきり、お教え下さい」

「松陰先生の尊皇攘夷とは、夷人を攘う事が第一次ではない」

「夷人を攘わぬ、攘夷などありませんようか」

「松陰(しよういん)先生の尊皇攘夷の第一次は、中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)と藤原鎌足(ふじわらのかまたり)が南淵請安(みなぶちのしようあん)に往来し、路上にて如何(いか)なる話をなしかたを思量する事だ。これ

は、秘中の秘。松陰先生は、『日本書紀』三十巻に続き『続日本紀(しよくにほんぎ)』四十巻を読まれ、古昔(こせき)四夷を懾服(しょうふく)せしめた術をもって夷(い)を攘(はら)わんとされたのだ。『皇国雄略』と称されたものだ。松陰先生、下田踏海(しもだとうかい)の挙にて捕らわれの身となるや、方を転じて、自らの旧見を洗い新策をめぐらされたのだ」

「松陰(しよういん)先生の新策と申されますのは」

「それも、随分話したではないか。君臣の義と華夷(かい)の弁(べん)を明らかにする事だ」

「それが、松陰先生の新策なのですか」

「そうだ」

「それでは木戸先生は、我が藩では君臣の義と華夷(かい)の弁(べん)が明らかではなかったと申されるのですか」

「安政(あんせい)二年暮れに、松陰先生は野山獄(のやまごく)を出られ、松本の幽室に戻られた。安政三年からは、吉田稔麿(よしだ としまろ)、松浦松洞(まつうら しようどう)、増野徳民(まし の とくみん)の三生と書を読んで居られた。松陰先生が大計を論ずるも、三生反論に及び、なかでも徳民は、劇論抗議し屈しなかった。それ程、旧見は根強いものであった。松陰先生は有為な青年を教育し、来るべき日に備えられたのだが、松陰先生が間部(まなべ)要撃(ようげき)の事など過激な事を唱えられると、徳民(とくみん)は松下村塾を離れて行った」

「増野(ましの)先生は、文久二年に久坂先生と奸物の長井雅楽(ながい うた)を亡き者にせんとされたお方ではないのですか。そのお方にして、旧見を破る事は出来なかったのですか」

「そうだ」

「何故にですか」

「医師の家故にだ。徳民（とくみん）は玄瑞（げんずい）と行動を共にした事で父上から厳しくお咎（とが）めを受け、周防国（すおうのくに）岩国（いわくに）山代（やましろ）で父上の監視のもとに置かれた。親父殿は、玄瑞（げんずい）の坊主頭を嫌われたのだ」

「徳民殿も医師であられたという事ですか」

「松陰先生は、玄瑞（げんずい）には己（おのれ）の地、己（おのれ）の身より見を起こせと言われて居られた」

「分を弁（わかま）えろと申されたのですか」

「そうではない。つまり多言を費やすより、至誠を積み蓄えよという意味で申されたのだ。兄の家族や朋友（ほうゆう）の幾人が兄（けい）に従って節のため死のうとしているのか。兄（けい）のために協力しようとするものが幾人あるのか。兄（けい）のために財を提供しようとするものが幾人あるのかと」

「徳民殿には、至誠が足りなかった申されるのですか」

「そのような事を申して居らぬ。僕等も徳民（とくみん）云々言える立場にない。安政五年より松陰先生が唱えられた過激な論には、僕等は付いて行けなくなった。江戸にあった久坂も高杉も、間部詮勝（まなべあきかつ）要撃（ようげき）の論には松陰先生に自重を求めた。僕も門下生に松陰先生との書の往復を絶つべしと言った。松陰先生は品川弥二郎（しながわ やじろう）に詰め寄られた。心上に尊攘の二字なくんば、天下何の悪をか悪（にく）みて何の善をか善（よみ）せんと」

「それで、品川先生は何と申されたのですか」

「われ復（ま）た尊攘を言わずと」

「松陰先生は、お許しになられたのですか」

「人は欺(あざむ)く事が出来ても、この松陰を欺(あざむ)く事は出来ない。閻魔大王(えんまだいおう)に檄(げき)し、夜叉(やしや)数頭を駆りて、往いてその舌を抽(ぬ)かんと」

「品川先生は、松陰先生を欺(あざむ)かれたのですか」

「欺きなどしない。弥二(やじ)は弥二で、その言を違えなかつた。この前も洋行して居る弥二(やじ)から、藩の窮状を憂いて手紙が来た」

「品川先生は、何と申されて来られたのですか」

「各様の攘夷党は、たたいも真の大和魂は出申さずにつき、早く閻魔大王(えんまだいおう)にお預け、赤鬼の手にかけるより外に手段はないと」

「品川先生は、何を申されて居られるのですか。松陰先生のお言葉を剽窃(ひょうせつ)などされて。品川先生は大和魂を何と心得て居られるのですか。品川先生は欧州に行かれて、西洋被(かぶ)れになられたではありませんか」

「そうではない。弥二(やじ)は心底、尊攘と申す事はなかつたのだ」

「嘘を申されては困ります。品川先生の尊皇倒幕の事、誰もが認める所。錦の御旗(にしきのみはた)は、大久保先生と品川先生のご尽力によるもの。品川先生は松陰先生のお教えを受けられていないのですか。嘘を申されては困ります」

「嘘ではない」

「それでは私にも、分かるようにお話ください」

「弘化(こうか)四年、信州に大地震あり、虚空蔵山(こくぞうさん)崩壊し、大洪水を引き起こす大惨事があつた」

「虚空蔵山(こくぞうさん)」

「更科(さらしな)にある山だ。またの名を岩倉山ともいう。岩倉山崩壊後、犀川(さいがわ)を堰(せ)き止めるも欠壊、川中島の平野を襲う。家蔵流されるは、風に吹き散る秋の木の葉の如(ごと)しといわれた。この地震で善光寺(ぜんこうじ)一帯潰滅(かいめつ)するも、松代藩創設せし社會により、封民の窮状を救う事が出来た。それと言うも、松代藩主・真田幸弘(さなだ ゆきひろ)公、殖産興業に力を注ぎ、松代藩三十六興利(こうり)公、今も語り継がれし事。幸貫(ゆきつら)公に至り、養祖父(ようそふ)様の志を継がれ、興津湖山(おきつこざん)の広土元一の法の教えを広められた」

「広土元一の法」

「信州、山野にして耕地なし。山に入りて棘茨(とげいばら)を刈り、樹芸を施し、川に臨んで岩石を割って水勢を挫(くじ)き、堤防を築き水害を除き、荒地を新田とした」

「まさか、木戸先生までが、佐藤信淵(さとう のぶひろ)の説に従えと申されるのですか」

「そのような事は言つては居らぬ。松陰先生は申されたのだ。『琵琶を乾さんと欲せばさらに琵琶を鑿(うが)ち、諏訪を埋めんと欲せばさらに諏訪を掘るべし』と」

「琵琶湖や諏訪湖などを掘り返して、どうされ様というのですか。木戸先生は、国譲りに際して、大国主命(おおくにぬしのみこと)の御子の建御名方神(たけみなかたのかみ)が、出雲から信濃に逃れ、諏訪湖のほとりに隠棲(いんせい)されたというお話をされて居られるのですか」

「それは、話の半分というものだ」

「半分？まだ掘り足りないかと申されるのですか。先生は何をおっしゃりたいのですか」

「草莽(そうもう)の民、独り瑞穂(みずほ)の民のみかという事だ。『矢じりもてしるせる君が言の葉は 身を貫きて悲

しかりけり』」

「それは誰の和歌ですか。松陰先生の和歌ですか。矢じりもてなど、松陰先生の和歌とは思えません」

「僕の和歌だ。小楠公（しようなんこう）と題したものだ。僕は同志と正義を村塾に唱え、以て国脈を培養し、天下を維持せんとしたのだ。士たるものは、そういうものだ」

「木戸先生のお話は、矛盾して居ります。それでは何故に、木戸先生は富永有隣（とみなが ゆうりん）先生・大楽源太郎（だいらく げんたろう）先生を見捨てられるような事をされたのですか」

「見捨てたのではない。身の危険も顧みず、萩に説諭に赴いたのだ。奇兵隊（きへいたい）・健武隊（けんぶたい）の解兵が藩庁を囲むなか、出来得る限りの事をした」

「それでは何故に、大楽（だいらく）先生は古松簡二（ふるまつ かんじ）殿と再挙を謀らんと久留米の小河真文（おが わまさぶみ）殿の下に行かれたのですか」

「大楽さんの事は、残念な事をした。勝先生も大楽さんの事を、なかなか話せる男と言って居られたのだが」

「木戸先生は、また他人事のように話をされます」

木戸先生は不愉快な顔をされた。

「それでは、何故に」

私の追求に、木戸先生はもう堪忍袋（かんにんぶくろ）の緒が切れたという顔をした。

「もう、あれこれと昔の話を詮索（せんさく）するのには、今日で終わりにして、道の体である皇学は僕らに任せて、君ら若い者は道の用である洋学を学べ。これからは、立場というものを弁（わきま）える事だ。耶蘇教（やそきょう）の事は、

俊輔（しゅんすけ）に言っておく。僕には考えがあつての事だ。君などが、松陰先生が幕府の吏を肉食（にくじき）の鄙

夫(ひふ)だとか、纨绔(がんこ)の子弟だとかと申されたなどと余計な詮索(せんさく)をしなくてもよいのだ」
木戸先生は偉くご立腹であったが、何故か机の上にあった鏡を私に差し出された。

木戸先生の部屋を後にし、食堂に向かう事とした。食事時(しよくじどき)を過ぎた食堂は、閑散としていた。私が支那人ボーイの問い掛けに愛想なく頷くと、ボーイはテーブルから離れて行った。それと行き違いに伊藤先生がひよっこり現れた。先生はボーイに何事か言つて、此方(こちら)に来られた。

「相変わらず、肉は口にして居らぬのか」

「臭くて、かないません。福沢先生の『西洋旅行案内』を読んで、梅干佃煮(つくだに)を持つて来ましたので、助かつて居ります。毎日、サーデインとかいう鰯(いわし)の油漬(あぶら)ければ、有り難いのですが」

「留学となれば、先ずは食事に慣れる事が肝要(かんよう)じゃ。旅慣れぬ事ゆえ、致し方ない事もある。僕も初めての船旅は散々(さんざん)だった。上海までどうにか着いたが、その先は決まって居らぬ。イギリス商人の斡旋(あつせん)で船に乗り込む事になったが、イギリス行きの目的を聞く。遠藤さんが箱館(はこだて)で宣教師から教えて貰った俄(にわか)英語でネビゲーションと答えたものだから、僕と聞多(もんだ)はイギリスまで水夫の訓練をさせられる羽目になった。それなどは、まだよかった。インド洋の暴風雨は凄(すご)かった。小山のような波が襲(襲)ってくる。アフリカの南端を回る迄(まで)は、酔(酔)うという生易(なまやさ)しいものではなかった。下痢(げり)が酷(ひど)くてもうこれ迄(まで)かと思つた。

そこへ行くと薩摩の留学生は、優雅な船旅(せんりょ)じゃった。市来(いちき)港より船にて羽島(はしま)に出でて異国蒸気船に乗り込み、香港、シンガポール、セイロン、ボンベイに至り、アラビヤのアデンから右にアラビヤ半島を左にアフリカ大陸を見てスエズに着船。蒸気車にてエジプトはアレキサンデルヤに至り、そこから英国の飛脚船にて地中海を横断して

英国に着いたのだから」

「ご心配いただいて、有り難うございます」

私は徐（おもむろ）に懷（ふところ）から書置きを取り出し、伊藤先生に渡した。

『風吹けば沖つ白波立田山 夜半にや君がひとり越ゆらむ』。奴か」

「そうです」

「貴公が夜な夜な出掛けるから、どうもおかしいと言うのだ」

「条公のお話は、本当なのですか。条公までが洋行なさろうとは」

伊藤先生は我が意を得たりという顔をした。

「君ら血気に逸（はや）る者たちの気を動転させては面倒だから、内緒にして居いた」

そう言うと、伊藤先生は妙な話を持ち出した。

「君は僕が大隈さんを出し抜いたと思ってるのだろう。いい話をしてやろう」

伊藤先生は有無（うむ）を言わず話を始めた。

「堀田備中（びつちゆう）が上洛（じようらく）せし時、条約勅許（ちよつきよ）に反対する公家八十八人が九条関白邸に列参した事があった。その直後に岩公は、先帝に『神州万歳策（しんしゅうばんざいさく）』というものを内奏した。

そのなかで岩公は、開港すると商戦船旅泊（りよはく）の国と成り神州の貴きも廢（すた）れるとか、交易すれば五穀を始めとする国産必用諸品、年々乏しくなり自ら兵端を開く原因となるとか、踏絵（ふみえ）を除き夷人（いじん）十里の横行を許すと邪教（じゃきよう）で国民を誘うとか、まあ、開国に関する懸念（けんねん）を書き並べられた。

しかしながら先帝のお望み通りにては、戦争に及び兼ねない。それで岩公は、オランダ・アメリカ両国人の案内にて

皇国より使節を立て、西洋諸国の風習・物産を視察されるよう奏上されたのだ。どうじゃ、これは安政（あんせい）五年の事じゃ。その後、岩公は先帝のご不興を被られしも、動じられなかった。『勅なれば髪はきりもし剃（そ）りもせむきよき心は神ぞ知るらむ』と。

岩公の歌道の師は、鷹司政通（たかつかさ まさみち）卿だ。文久（ぶんきゆう）三年末より集いし有力大名による参与会議が僅か数ヶ月で崩壊した時、岩公は不甲斐（ふがい）なき諸侯に『天地の退きたつ極み照らすべきこの日本の武士やたれ』と詠まれたのじゃ。

岩公のご子息は、長崎の到遠館（ちえんかん）でフルベッキから教えを受けられ、昨年、アメリカのラトガース・カレッジに留学された。僕と一緒に副使をしている山口さんも、到遠館（ちえんかん）でフルベッキから教えを受けた。一昨年、フルベッキを開成学校に招聘（しょうへい）し、政府の顧問にも就いて貰った。本当のことを申せば、使節派遣の話の根は、肥前にあったのだ。ペリー来航時、鍋島閑叟（なべしまかんそう）公が真田幸貫（さなだ ゆきつら）殿とお話されて居られたのじゃ。

維新後、佐賀では鍋島直大（なべしま なおひろ）公洋行の事が、極秘に進められたが、貴公には分かるだろう。あの時分の排外感情を。大隈さんなどは旧守派から改宗者と疑われ、一時地位を危うくした。それで使節団派遣の話は、公にならんかったのじゃ。僕が度々（たびたび）洋行するものだから、大隈さんや聞多（もんだ）には妬（ねた）まられて居る」

伊藤先生は笑って席を立たれた。何故か填（は）められたような気がした。向かいのテーブルでは久米先生が、地図を広げ若い者に何事かを講釈していた。

「航海曆法では日付変更線といって、太平洋上に経度百八十度の子午線（しごせん）がある。日本よりアメリカに向か

う航海において、この線を越える時、日付を一日遅らせる事になって居る。逆にアメリカより日本に戻る時は、日付を一日進める事になって居る。故にアメリカ号が日付変更線を過ぎる二十一日の次の日も、二十一日となる。丁度（ちようど）明日十一月二十一日は、西洋暦の元日に当たる」

「その日付変更線は、洋上に目印があるもののですか」

傍（かたわ）らにいた者が聞いた。

「そのようなものはない。見えないが在るものだ」

「それでは、その線はどの様にして決めてあるのでしょうか」

別の者が聞いた。

「地球上の北と南の極を通過する大円を子午線という。英国ではその基準を英都ロンドンのグリニッジという司天台に置き、東西に一八〇度の子午線（しごせん）を引いて居る。グリニッジの反対側の半円が、東経一八〇度となる。今、各国首都の司天台（してんだい）を基準となつている子午線（しごせん）も、近々英都のものが世界一統のものとなる。我が東京の皇居より一八〇度は、圧瀾的（アトランチック）の洋中にある」

留学生たちは怪訝（けげん）な顔をして互いに顔を見合わせていたが、そのうち食堂を引き上げて行つた。

食堂の隅では、いつものように丁髷（ちよんまげ）頭の岩倉大使と断髪（だんぱつ）頭の大久保先生が碁を打っていた。大使は次の一手を待って、息を潜（ひそ）めて居られた。

不意に誰か肩を叩いた。

「ここに居ったか」

「何か用か」

「今夜、ホールに集合だ」

「何事だ」

「皆で西洋の年越しを祝う。どうした、冴(さえ)えない顔をして。また何か、思い悩んで居ったのか」

「此度(こたび)は、少し深刻だ」

「何だ、言うてみる。何を思い悩んで居った」

「大地が丸い事だ。地の裏の人はどうして居る」

「・・・」

「何故に黙って居る」

「それでは、地の果てはどうなつて居る。崖か滝にでもなつて居ると言うのか。それでは航海など、危なくて出来ぬではないか。君は何故、地球と呼ぶのか知つて居るのか」

「知らぬ。どうしてだ」

「地球とは、大地のありさまだ。丸いゆえ地球とよぶのだ。球の字は、まりという字だ。大地は球をなし、太陽の周りを回つて居るのだ」

「お主は、この大空のなかに落ちもせず、漂(ただよ)つて居ると言うのか。何時、地球が丸いと知つた」

「ずっと、前からだ。君の平田学もその程度の事か」

「どういう事だ」

「古(いにしえ)に高皇生靈神(たかみむすびのかみ)が、天上にましまして、世の中の万(よろず)の物、人間をも作り出されたのだ」

「お主らしからぬ、物言いだ」

「神代には尊い神々が万国を開かれ、その神たちは悉くこの御国（みくに）に出現されたのだ。君はお公家さんが、鞠を蹴って遊んで居るくらいにしか思わんだろうが。大化の改新の始まりも、蹴鞠（けまり）の場からだ。蹴鞠（けまり）に興ずる中大兄皇子（なかのおおえのおうじ）の靴が脱げた時、拾い差し出したのが、中臣鎌足（なかとみ）のかまたりだ。これは、君の語る所ではないのか。松陰先生も来原（くるはら）先生と『土佐日記』の事で、議論されてた」

「何故に『土佐日記』など議論された。『土佐日記』の何処に地球が丸いと書いてある」

「君も鳥になって、空でも飛ぶがよい。空の白雲も、海に立つ白波も同じに見えるはずだ。大地が丸い事は、御国（みくに）の古伝において明らかな事だ。今は天文地理の事は西洋人の方が進んで居るから、その説に従って居るだけだ」

「偉そうに」

「君は何も知らないのだな。穢（けが）れを知らぬ神国などと言うのは、禍（わざわい）の元だ」

「禍（わざわい）の元とは何だ。会沢正志斎（あいざわ）せいしさい先生は『神洲は太陽の出づる所、元気の始まる所』と申されたのだ。夷の邪（よこしま）な事はあきらかだ」

「そのような考えで、不拔の業を開こうとして居るのか。それでは、大経（だいきょう）を立てても、夏夷の邪正も明らかにするまい。高杉先生くらいの学のある方が『天地正大の氣、粹然（すいぜん）』として 神州に 鍾（あつ）まる』と詠じるなら額（うなず）けるが、君くらいの者が、『天地に正氣（せいき）あり、雑然として流形（りゅうけい）に賦（ふ）す』と言っても、まだ分かって居らぬのだ」

「何を言って居るのだ」

「春秋の二分という事を知って居るのか」

「何故にそのような事を聞く」

「日が正東に出で、正西に没するというのは、我が国古来の暦法ではないのだ」

「どういう事だ」

「暦には平実の二法ある。本朝古来より平気を用い、唐土は実気を用いた。本朝の春秋分は、実の春秋分ではないのだ」

「そのようないい加減な事を申すな。そのような事を申して平気なのか」

「だから平気という」

「また、そのような事を。そのような事で、夏夷(かい)の邪正が明らかになるといふのか」

「そうだ。先ず、天人の大道を闡(ひら)く事だ。それで大経(だいきょう)を立て、四海を以て一家となし、万世を一日となすのだ。いい加減なのは、仏を奉ずる者たちだ。天竺(てんじく)では時正に彼岸会(ひがんえ)を修する事になつて居るが、これに関する仏教の所見はないのだ」

「何を根拠にそのような事を言う。僕が邪教(じゃきょう)に惑わされて居るといふのか」

「そのように大声を出すな。岩倉大使・大久保先生の邪魔になるではないか。話は部屋に戻つてからだ」

声を潜めて部屋に戻ると、直ちに奴を問い質した。

「お主は一体、何を知つて居るといふのだ」

「君は、三条実万(さんじょう さねつむ)公が嘉永(かえい)五年、『新論』を先帝に上げられた事を存じて居るのか」

「勿論だ」

「それでは聞くが、攘夷先鋒であられた実美(さねとみ)公は何故、新政府の開国策に反対せぬ」

「それは、お立場というものだ。実美（さねとみ）公は此度（こたび）の使節団に、英明を四方に宣揚し、帰朝するよう祈願されたではないか」

「岩倉公は、四奸二嬪（よんかんにひん）の一人として排斥されたのだぞ」

「それは一時の行き違いというものだ。岩倉公が和宮（かずのみや）様降嫁（こうか）の事で幕府と手を結ぼうとされたからだ。昔の話だ。岩倉公は、三条公の汚名を雪（そそ）がれようとご尽力なされたのを、お主は知らぬのか」

「何も話になつて居らぬ」

「何がだ」

『「く」を思ふ君にひかれて梓弓（あずさゆみ）、八十氏（やそうじ）ひともかくしこそあれ』」

「また歌か。誰の歌だ」

「実万（さねつむ）公の歌だ」

「何の歌だ」

「石亀（いしがめ）を称える和歌だ」

「石亀とは何だ」

「岩倉公の事だ。岩公は実万（さねつむ）公をご尊敬申し上げ、実万（さねつむ）公は岩公に慈愛の情をお示しにいられた。お二人のご交情は深く、天にまで届くものだ。岩公は洛北（らくほく）岩倉村に幽居（ゆうきよ）の身となるも、和漢の学に精進（しょうじん）されたのだ」

「実万（さねつむ）公は何故に、それまでに岩公を寵愛（ちやうあい）された。まさか、岩公は実万公の落し胤（おとしだね）だというのはあるまいな」

「そのような事、あろう筈もない。君は本当に知らぬのか」

「何をだ」

「岩倉公のご出自を」

「岩倉公は堀河家のお生まれ。岩倉家にご養子に入られたのではないのか。岩倉家は村上源氏。岩公は源(みなもと)を名乗られたと聞いて居る」

「それだけか。岩公の実母様は、贈(ぞう)内大臣・勸修寺経逸(かじゅうじ つねはや)卿の女。経逸(つねはや)卿は光格(こうかく)天皇の義父にして、仁孝(にんこう)天皇の外祖父であられたお方」

奴は冷たい視線を投げかけた。

「それでは、実美(さねとみ)公は、実万(さねつむ)公のお子ではないのではないか」

「君の話は、いつも飛躍する。実美(さねとみ)公は、実万(さねつむ)公のお子だ。安政元年、兄の公睦(きんむつ)公がお亡くなりになり、十八の時、嗣子となられたのだ」

「何故に、そのような事を申すのだ。兄上様がお亡くなりになれて、条公はお人が変わられたとでも言うのか」

「朝廷には、我等の与り知れぬ事があるのだ。君は、斉昭(なりあき)侯が嘉永(かえい)五年に地球儀を奉獻(ほうけん)されたのを知って居るのか」

「何故に、地球儀など奉獻(ほうけん)された」

「地球儀を奉獻(ほうけん)され、皇威を海外に輝かすべく、開国進取(しんしゆ)の説を採られるよう奏上されたのだ」

「斉昭(なりあき)公が、開国策を奏上されたというのか。嘘を申すな」

「嘘ではない。慶応四年八月に行われた新帝のご即位の儀においては、斉昭(なりあき)侯が奉獻(ほうけん)された地

球儀を紫宸殿（ししんでん）南庭の中央に据えられたのだ」

「地球儀など南庭の中央に据えてどうしようというのだ」

「ご即位の儀において御上は、左右の御足で皇国を踐踏（せんとう）遊ばされたのだ。君は福羽美静（ふくば よししず）殿を知っておろう」

「勿論だ。どうして、あの男が神祇（じんぎ）大輔（たいふ）をして居るのか。あの男は、三条公を責めて居ったというではないか」

「それは、津和野藩主・亀井茲監（かめい これみ）殿の内意を体しての事。津和野藩から萩藩は、随分有難いご忠告を頂いた。元治（げんじ）甲子の変に至ったのも、条公君公父子が亀井侯のご忠告に耳を貸されなかったからだ。君は知らぬ事だが、福羽美静（ふくば よししず）殿は、長州藩が招魂祭（しょうこんさい）を行う遙か以前の文久二年十二月二十四日、京都東山の靈明舎にて神祇（じんぎ）伯家（はっけ）白川家（しらかわけ）の臣・古川美濃守躬行（みゆき）殿を祭主とされ、梅田雲浜（うめだ うんぴん）殿、鷹司（たかつかさ）家家臣・小林良典（こばやし よしすけ）殿、水戸藩の鵜飼吉左衛門（うがいきちざえもん）殿父子を始めとする同志の靈を弔われたのだ」

「それで、あの男が神祇（じんぎ）大輔（たいふ）をして居るといふのか」

「そうだ。有栖川宮（ありすがわのみや）が大総督となられて関東に進発された時、過ちが起ころぬように錦の御旗（にしきのみはた）を衛護されたのが、亀井家だ。福羽（ふくば）殿は、新政府から御即位新式取調御用を命じられたのだ」

「地球儀を紫宸殿（ししんでん）南庭の中央に据えたのは、福羽の考えか」

「そうだ。太古の昔、天孫は先ず葦原中国（あしはらのなかつくに）全体の形勢を見て降臨されたのだ。中国では、南

庭において焼香を行い、天子の即位を天に告げ、我が朝では代々、天壤無窮(てんじょうむきゅう)の神勅を守り給うたのだ。神道の奥義(おうぎ)だ。家康公などは、その奥義を尾張の義直(よしなお)公と水戸の頼房(よりふさ)公に伝えられた。頼房(よりふさ)公を腰刀(こしな)と思秘蔵(ひかく)すべし、鞘(さや)はしらざるようにと。家康公は会津にも隠しておいた」

「会津に誰を隠したと言うのだ」

「秀忠(ひでただ)公のお子、保科正之(ほしなまさゆき)殿だ。家康公は、敬神の念の深い者を諸藩に配置された。広島藩主浅野長政(あさのよしなが)公は、近江国(おうみのくに)大津城主たりし時、日吉社に社領を奉った。岡山藩主池田光政(いけだみつまさ)公は、神職だけに社事をあたらせた。神職による宗門改(しゅうもんかへ)もあらためは、岡山藩だけだ。弘前藩主津軽信政(つがるのぶまさ)公は、岩木山神社の修造に尽力し、世人をして奥の日光と言わしめた。彦根藩は多賀神社(たがじんじや)に社領として百五十石を寄贈して、篤く崇敬した」

奴は何時もの話を持ち出して来た。

「紀州には奥義は伝わらなかつたのか。紀伊国(きのくに)熊野神社には、醍醐(だいご)天皇の御代(みよ)に宇多(うだ)法皇御幸(みゆき)され、その後も、歴代の上皇様が続々と御幸(みゆき)されて居られる。後白河上皇に至っては三十余度だ。」

お主はまた、亥の子(いのこ)祭りの話をしようというのではあるまいな。熊野社にて、亥の子(いのこ)祭りなど聞いたことがない。お主の郷里の話なれば、それもよしとするが、歴代の上皇様が参られた熊野社に、その様な獣の話を持ち出すなどは、熊野社が穢れるではないか」

奴は黙った。

「何故に、黙る」

「熊野社は神代にては、紀州より出雲の方が名社なのだ。しかも、出雲の熊野杵築(きづき)両社に勅使が遣わされる事は稀になったが、熊野社と杵築(きづき)社とでは杵築社の方が名社なのだ」

「お主は、何が言いたいのだ」

「元明天皇(げんめいてんのう)和銅(わどう)二年には、杵築(きづき)大社は丹波国桑田郡に移り祀られたのだ」

「何故に、そのような枝葉末節な事を申す」

「君のような者が廃仏毀釈(はいぶつきしゃく)云々するからだ。君は偏見を持って居る」

「何を根拠にその様な事を言うのだ。新政府は、八幡大菩薩(はちまんだいぼさつ)の号を止めて八幡大神(はちまんのおおかみ)とし、祇園社(ぎおんしゃ)は八坂神社とした。それだけではない。法華宗で三十番神と称して居る天照大神(あまてらすおおみかみ)様以下の諸神を寺中に祭る事を禁じたのだ。何を根拠に偏見を持って居ると言うのだ」

「君は新政府の真の政体を理解して居らぬのだ。君は京の漢学所が廃された訳を知って居るのか」

「それは、漢学を嫌った西洋被(かぶ)れの所業(しよぎよう)であろう」

「そうではない。新政府の真の政体を悪(にく)む者たちが、孟子を正科に課すべからずとの論を起こしたのだ。皇学所で祀(まつ)つてあった学神は、東京の神祇官(じんぎかん)に返座されたのだ」

「何故に、そのような事で揉(も)めるのだ」

「応神天皇(おうじんてんのう)崇祀(すうし)の事に反対する輩だ。応神天皇(おうじんてんのう)の御代(みよ)は天下太平であられたが、応神天皇は更に生活を豊かにし利便をすすめる政(まつりごと)を行わんとされ、海外から機

織(はたおり)・裁縫(さいほう)・醸造(じょうぞう)・鍛冶(かじ)の技術者を招き入れられた。この事が行われたのは、
応神天皇に公明正大、世界を一家と見なすお考えがあつたからだ。その頃、孔子の事を西夷と言つて居つたのだ」

「お主は、孔子を西夷と申すか」

「応神天皇(おうじんてんのう)は、道理が格別で人の教えになると、漢土から書籍を取り寄せ、皇朝の本とされたのだ。蔑(さげす)んで西夷と呼んだのではない。残念な事に、応神天皇(おうじんてんのう)の御代(みよ)に渡来した書は残つて居らぬ。古くは秦の始皇帝(しこうてい)が五帝三皇の遺書といわれる古典を日本に贈つてきたというが、今は聖武天皇(しょうむてんのう)の御代(みよ)、吉備真備(きびのまきび)が入唐して伝えたものだ。応神天皇(おうじんてんのう)崇祀(すうし)の事に反対する輩は、新政府の政体を解さぬ者たちだ。孟子ご進講を嫌つた者たち。『孟子』は天下に敵のない仁者の軍法だ」

「お主は、何を言つて居るのだ。『孟子』は天下に敵のない仁者の軍法などと」

「よいから、聞いて居れ。よいか。斉の伎撃(ぎげき)は魏の武卒にかなわず、魏の武卒は秦の鋭士(えいし)に勝つ事はできないのだ。それでも秦の鋭士は桓・文の節制(せつせい)に對抗できない。更に桓・文の節制は湯・武の仁義に敵対する事ができないのだ。軍功を立てても、仁義の徳がなければ無駄になる。象山(しょうざん)先生は松陰(しょういん)先生に諭されたのだ。大国の侵略に恐れる事なく、ただ仁政を実施し、人民と苦楽を分かちあう外に方法がないと」

「象山(しょうざん)先生がそのような事を申したのか」
「そうだ。松陰先生も『日本書紀』を読まれ、日羅(にちら)が賊に殺害されるところに及び、声をあげて泣かれたのだ」

「また、戯作者(げさくしゃ)のような事を言う。松陰先生が何故に、声をあげて泣かれたというのだ」

「新羅(しらぎ)出兵の事が問題となった時だ。敏達天皇(びだつてんのう)は韓の地から日羅(にちら)を召還し、意見を求められた」

「日羅は何と申し上げたのだ」

「天下を治めるには、人民を守り養う事が第一、俄(にわ)かに戦を起すべきではないと。為すべき事は、食料を十分にし、軍事力を充実させ、上下ともども豊かにし、その後、多くの船舶を造って港々に浮かべ、隣国からの使者に見せ畏れを抱かせる」

「それが、お主の言う兵法か。松陰先生は、そのような事で声をあげて泣かれはしない。また、そのような事を申して一芝居でもしようというのか」

「軍法の本意は、万民を恵むためにあるのではないのか。事は単に戦の戦術の問題ではない。兵は不祥の器(ふしようのうつわ)と申すではないか。朝鮮を責め、北は満州の地を割(さ)き、南は台湾・呂宋(ルソン)を収めてどうしようというのだ。況(ま)してやアメリカ、ロシア、イギリス、フランスがアジア州を窺(うかが)って居るなどと称して、兵を地球の果てまで送ってどうするのだ。遠方に人民武器を送れば、国の物資は欠乏し、人民は貧しくなるは必定。これは『孫子』の作戦篇に記す所。兵法のいろはではないか。神功皇后(じんぐうこうごう)以来の真の雄略を行い進取の気象を示すと言うが、君のような慷慨家(こうがい)が、順逆を誤り、国を危くする。瓢箪(ひょうたん)の馬印を船の舳(へさき)に押し立てた秀吉のように、朝鮮から陶工(すえつくり)を連れて来るのが落ちだ。朝鮮の事は、百済(くだら)には有能な使を遣し、百済王もしくは高官に罪を問わせるだけで、十分だ。敢(あ)えて主とならずとも」

「どの様にして百済王に罪を問わせるのだ。百済王など居らぬではないか」

「中古三韓の酋長、馬飼部(うまかいべ)となりて皇国に仕えるは、祝意に叶(かな)うもの。君のような生兵法(なま

びようほう)は大怪我の基だ。不逞(ふてい)な輩(やから)を増長させるだけだ」

「何が言いたいのだ」

「皇城内の豊受大神宮(とようけたいじんぐう)末社・田上大水(たのえおおみず)社・遙拝所(ようはいじよ)より火が発し、炎上したのだ。豊受姫命(とようけひめのみこと)の篤い御徳(おんとく)によって、結構な五穀を飽き食いをしているのだ。これは、天智天皇(てんちてんのう)の英明をしても、藤原鎌足(ふじわらの)かまたりの知略をもつても繕えぬ事。後の人、天照大神(あまてらすおおみかみ)は胎藏界(たいぞうかい)の大日如来(だいにちによらい)と言ひ、豊受大神(とようけのおおみかみ)は金剛界(こんごうかい)の大日如来(だいにちによらい)と(あまてらすおおみかみ)やがて豊受大神(とようけのおおみかみ)となるは、世人のいう天御中至尊(あめのみなかぬしのみこと)と同神の事と言うても、また仏にては大梵天王(だいぼんてんのう)の事だと言うても繕えぬ事だ」

「お主は、何を言つて居るのだ。神仏混交の邪教(じゃきよう)に捕われて居る」

「君がそう思うならば、それでもよい。よい機会だから、君に聞いておきたい事がある」

「なんだ」

「親鸞(しんらん)は何故、常陸に行ったかだ」

「何故に、そのような事を聞く。念仏を唱えに行つたのだろう。坊主が妻帯などするから、越後を彷徨い、東国に行き着いたという事だ。比叡山から破門されるのも当たりだ」

「それでは一遍上人(いっぺんしょうにん)は、何故、紀州熊野山に登り、念仏を唱えられた」

「そのような事、どうでもよい。今は廃仏毀釈(はいぶつきしゃく)のご時世なのを分からぬのか。何故に、そのような事を聞く」

「君が松陰先生、松陰先生と言うからだ。僕は君が道を踏み外さぬように言つて居るだけだ。伊藤先生に聞いてみる」
「何故に、伊藤先生に聞かねばならぬのだ」

「一遍上人(いつぺんしょうにん)の本姓は越智(おち)」

「越智(おち)」

「一遍上人(いつぺんしょうにん)は伊予国の武将・河野通信(こうのみちのぶ)の孫。伊藤先生とは同族だ」

「何処へ行く」

「お主と議論すると、気が滅入る。海を見に行く」

デッキに出ると、雨が激しく甲板を叩きつけていた。風は強く、雨雲は遠くの視界を遮った。白波が逆立って、アメリカ号に押し寄せていた。

一体、誰が御一新(ごいつしん)の大業を成したと思つて居るのだ。帝から授けられし錦旗は、後醍醐帝が北条高時(ほうじょう)の征伐せし時、出征大将に与えたる官軍の標識に倣えるもの。征討大総督・有栖川宮熾仁親王(ありすがわのみや)の賜り、征討大將軍・仁和寺宮嘉彰親王(にんなじのみや)の賜り、岩倉公の命に依り玉松操(たままつみさお)殿が大江匡房(おおえのみさふさ)公の様に授けられし錦旗は、大久保先生が大和錦と紅白の緞子(どんす)を買い求め、品川先生が反物を山口に持ち帰り、諸隊会議所において有職師(ゆうそくし)・岡吉春殿に調製させたものなのだ。調製された日月章の錦旗(きんぎ)各二旒(りゅう)と菊花章の紅白旗各十旒(りゅう)は、その半分を山口城に密蔵し、残り半分を京都に送り、相国寺(しょうこくじ)林光院(りんこういん)の薩藩邸内に密蔵しておいたのだ。慶応三年十二月九日王政復古の大事

令が発せられるや、薩藩邸内に密蔵せし錦旗（きんき）は岩倉公の手を経て朝廷に納められ、官軍東下の際に掲げたのだ。亀井家が護衛などせずとも、何処（どこ）に誤りが起こると言うのだ。

雨は止みそうになかった。アメリカ号の外輪が、けたたましい音を立てていた。ふと誰かが肩を叩いた。川原であった。

「また、悩んで居られる。こんな所に居つては、折角の筒袖（つつそで）が台無しではないか」

川原は袖を引いて、廊下に導いた。

「今度はどんな事で悩まれて居られた」

「難しい話です」

「難しいとは、どんな話か」

川原は私の顔を窺った。

「幕吏は皆、肉食（にくじき）の鄙夫（ひふ）と紈袴（がんこ）の子弟だと、松陰先生はおっしゃられたと木戸先生が申されるのです。どういう事なのでしょうか」

「それは、寅一流の皮肉だ」

「皮肉？」

「それは下腹者（したはらもの）が申す事だ」

「川原殿は、幕臣を貶（おとし）められて喜んで居られるのですか」

「喜んでなど居らぬ」

「それでは、どうしてそのように嬉しそうな顔をなさるのですか」

「寅は分かつて居るのだ」

「松陰先生は、何を分かつて居られると」

立ち話もなんだ。部屋に戻ろう。長州の方が、そのような事では、後世の史家が困るではないか」

川原は部屋に戻ると、タオルを差し出して呉れた。

「松陰先生は、何を分かつて居られると申されるのですか」

「密航の事を自首した時の事だ。捕らわれし下田獄の番人から『赤穂義臣伝』『三河後風土記』『真田三代記』を借り読み、囚人に向かい皇国の皇国たる所以(ゆえん)、人倫の人倫の所以(ゆえん)、夷人の憎むべき所以(ゆえん)を声高に説いたのだ。

豪傑とは時と所によつて相応の態度をとるものだ。相手を知り、機を見る事が肝心だ」

「松陰先生に二心(ふたごころ)があつたと申されるのですか」

「そうだ。嘉永六年九月、寅は宮部鼎蔵(みやべていざう)と長崎から戻ると、鎌倉に遊び、申して居った。人々皆海防海防といわざるはなしと」

「それは、松陰先生の持論です」

「しかるに未だ民政民政という人あるを聞かずと兄の梅太郎殿に申して居ったとか。西洋夷狄にさえ貧院・病院・幼院があり、下に恵む道を行なつて居るのに、めでたき大養徳(やまと)御国においてこの制度がないのは、大欠典ではないかと。上慢暴下の罪、今の有司は免かれざる事と。真の御維新の精神は、兄上の杉梅太郎殿にあられるのだ」

「川原殿は、松陰先生の器が小さいと申されて居られるのですか」

「そうだ。昔、橋本左内から高山彦九郎(たかやま ひこくろう)の面白い話を聞いた事がある。高山彦九郎は、幼く

して叔父方に寄食され、十六にして辞去するに際し、小備前脇差菊一文字の太刀(たち)にて、その決意の程を叔父様に示されたというのだ。

貴殿は、あれやこれやと寅の事を聞き回つて居るようだが、寅の話は相手を見て話した事。況(ま)してや、門下生が話す事となると」

「門下生が話す事となると、どうだと申されるのですか」

「熟慮を要するという事だ」

「熟慮」

「そうだ。熟慮を要するのだ」

川原は私の目を見た。

「川原殿、お聞きしたい儀が、御座います」

「どうした。突然、そのように改まつて」

『鶯の子になりにける時鳥(ほととぎす)』という歌をご存じでしょうか」

「どうして、その様な事を聞く」

「伊藤先生が、知つて居るかと思はれるものですか」

「源三位(げんざんみ)頼政(よりまさ)公のお歌だ。知らぬのか。頼政公の著名なる歌人であられた事を。『香をとめて山ほととぎす落ちくやと空までかをれ宿の橘』」

「どういう事なのでしょう。橘(たちばな)が、どうした申されるのですか」

『藤浪の花は盛になりにけり平城(なら)の京(みやこ)を思ほすや君』。お分かりかな。頼政公の一族には、頼実(よ

りぎね」という優れた歌人が居られた。母は藤原南家（ふじわらなんけ）で、橘三千代（たちばなのみちよ）の流れをくむお方だ」

「橘三千代？」

「縣犬養東人（あがたいぬかいのあずまびと）の女で、橘宿禰（すくね）の姓（かばね）を賜れた。三野王（みののおう）との間に葛城王（かつらぎのおおきみ）、牟漏女王（むろのおおきみ）を儲けられ、藤原不比等（ふじわらのふひと）との間に光明皇后（こうみょうこうごう）を儲けられた。和銅三年の平城遷都にあたり、藤原不比等邸と橘三千代邸は大路を挟んで南北に分かれてあった。藤原北家（ふじわらほつけ）は牟漏女王（むろのおおきみ）が不比等の男の房前（ふささき）を婿に取り、後代、房前の統が家を継ぎ北家全盛の世となったのだ。『霍公鳥（ほととぎす）来居も鳴かぬか わが宿の花橘の地（つち）に散らむ見む』という事か」

「それと伊藤先生が申された事と、何か関係があるのですか」

「清少納言（せいしょうなごん）は、言つて居る。藤の花にかくれたるはをかしと。六位の藏人（くろうど）などは、紫革（むらさきがわ）して伊予簾（いよすだれ）かけわたし、布障子（ぬのそうじ）はらせて住まひたると」

「それでは何故に、時鳥（ほととぎす）は鶯の子になったのでしょうか」

「鶯（うぐいす）は何と鳴くのだ」

「ホケキョウと」

「そうだ」

「それが、どうしたと申されるのですか」

「賀茂の田植える早乙女（さおとめ）たちは、郭公（ほととぎす）を嘗（な）める者たち。郭公（ほととぎす）を鶯に劣

るものと。元応(げんおう)元年の大嘗会にては、琵琶の名手、菊亭の大臣(おとど)こと藤原兼季(ふじわらのかねすえ)が、名器『玄上』を失せたる故、鹿頸(ろっけい)の柱を飯糊(めしのり)にて取り付けた『牧馬』を弾じられ、事なきを得たが、衣被(きぬかづ)きの女は、『牧馬』の柱を外してしまったのだ。事は後醍醐帝のご即位の時だ」

「その女にお咎めは」

「お咎め。何の罪があるというのだ」

「真面目にお話下さい」

「真面目に話して居る。寅も複雑な思いであったのだ」

「何故に、松陰先生が」

「アメリカ密航を同志に打ち明ける前々日の三月三日の事だ。寅は同志と花見に行ったのだ」

「松陰先生が花見に。ペリー艦隊が来航しているというのですか」

「そうだ」

「何かの間違えでは」

「間違えなどではない」

「何が起ったと申されるのですか」

「林大学頭(だいがくのかみ)以下幕府の役人が、数度にわたるペリーとの応接を終えると、和親通商の事が取決められたとの噂が流れた。江戸の庶民は、もう戦がないものと思ひ、花見に繰り出したのだ。松陰の同志も鳥山邸に集い、花見に出掛けた。寅も人の子だ。密航すれば、生きて再び江戸の春景色を目にする事もない」

「そういうお話でしたか」

「さりとて、陶醉できぬのが寅の性格。あたり一面、桜が咲き誇るも、花に舞う蝶のように浮かれ、柳にこびる鶯のように歌い騒ぐ者達に慨歎（がいたん）して居ったのだ」

「お話を聞いて、目が覚めた思いです。川原殿にお願いが、御座ります」

「また、何だ」

「川原殿に和歌の師になって頂きたく」

「何故に、拙者に」

「ある方から、和歌は兵法の序と申して、教養のある立派な方は、花や月について語るが、しつこくもて囃（はや）す事はせぬものだ」と聞いて居りました。今、川原殿から松陰先生のお話を伺って、少しその方の申された意味が分かった気がしました。以前からよい和歌の師が居らないものかと探して居りました。国典を手にするも、幕末の動乱。御一新にては、木戸先生から平田連に関わるな、君等若人は洋学を学べと申され、あれやこれやの事で、思うに任せず、落胆して居りました」

「和歌でよいのか。寅ならば和歌より漢詩をよくしたのではないか」

「松陰先生の漢詩は、史学の嗜（たしな）みでされたと聞いて居ります」

「戯（たわむ）れと申すのか」

「会沢先生は、『万葉集』を学べとおっしゃられて居られるのです」

「外にも、よい師は居るのではないか」

「そう申されては、困るのです」

「無い袖は振れぬ。拙者のような東人（あずまびと）が」

「宜しいのです」

「では、早速伝授致す。貴殿のお気に召すやら。

『もししきの大宮人の藪(かづら)けるしだり柳は 見れど飽かぬかも』
拙者の愛歌だ」

「そのお心は」

「お心もなにもない。柳だ、柳だ。では、これはどうかな。

『水を多み高田(あげ)に種蒔き 稗(ひえ)を多み 選らえし業ぞわがひとり寝る』

「稗(ひえ)」

「これなども、よい。

『しなざる越の君らと かくしこそ柳藪(かづら)き 楽しく遊ばめ』。

長州人ならば、解せる筈だ」

「どういう事でしょうか」

「毛利元春(もうり もとはる)公のご事蹟を偲ぶのだ」

「何故に、吉川の元春公を」

「吉川の元春公ではない。師親(もろちか)公の事だ」

「何故に師親(もろちか)公なのですか。御祖父様の毛利貞親(さだちか)公と父上様の毛利親衡(ちかひら)公は、後醍醐天皇の南朝方に従い越後国南条荘にてご活躍されたお話を聞いて居りますが、師親(もろちか)公お一人、足利

尊氏に与(くみ)した毛利一族の反逆人というお話なのです」

「如何にも。毛利師親（もろちか）公は、高師泰（こうのもろやす）から諱（いみな）を与えられ、曾祖父の毛利時親（もうりときちか）公の命で終生、尊氏方に与されたのだ」

「それでは、何故に毛利師親（もろちか）公のご事蹟を偲ばなければならないのですか」

「越人との交わりを偲ぶのだ。直弼（なおすけ）殿も柳を愛され、柳王舎（やぎわのや）と号せられた」

「何を申されたのですか。井伊の話など持ち出されて」

『うゑ置し柳の木の芽はるばると 聞くもうれしき人の言の葉』。

彦根の普請方（ふしんかた）より玄関先に植えられた柳の木が、大事に育てられて居るのを直弼（なおすけ）殿が聞いての歌だ。だが、それも所詮（しよせん）、戯れの恋。村山たか女の事も。

『君がこの今日の出でまし待得てぞ 萩の錦もはえまさりける』

「今度は、萩を愛したと申されるのですか。井伊の赤鬼の事は、もうよいのです」

「これは、長野主膳（しゅぜん）殿の歌。主膳殿は、貴殿の考えているようなお方ではない。なかなかの人情家だ」

「どうして、そのような事を申されるのでしょうか」

「水戸の御老公の一件で、斉藤喜助と申される水戸藩の方が、主膳（しゅぜん）殿の所に歎願（たんがん）に来られたのだ」

「歎願（たんがん）？井伊の家臣に何を歎願されたと申されるのですか」

「水戸家存続のお取り計らいだ」

「どういう事でしょうか。何故に水戸藩の方が」

「安政五年八月水戸藩（戊午（ぼご））の密勅が下された時だ。幕府は、太田丹波守と鈴木石見守を江戸藩邸に呼び寄

せ、執政の職に就かせたのだ。太田鈴木の両名は、幕政改革に異論と唱えられる斉昭殿に諫言(かんげん)申上げるに及び、ご不興を蒙り国許(くに)にもとに戻されていたのだ。両名が江戸に呼び戻されると、讃州(さんしゅう)侯と合心して、高松藩より水戸家に相続人を入れるとの噂が立った」

「それで、斉藤殿が主膳殿の所に歎願(たんがん)に來られたというのですか」

「そうだ」

「斉藤殿は、主膳殿と面識はあつたのですか」

「ない。斉藤殿は、藁(わら)にも縫(すが)る思いで主膳殿のもとを訪れたのだ。斉藤殿は落涙されて主膳殿に申された。尊君の事、小石川にては甚(はなは)だ悪(あく)しく聞(き)こえども、此度(こたび)の事は御当主・中納言(ちゆうなごん)様に御別条(ごべつじょう)これなき事では済(す)ませぬ事ゆえと」

「それで、主膳(しゅぜん)殿は」

「主膳(しゅぜん)殿お一人で、どうこうなる話ではない。大老の側役の宇津木六之丞(うつぎ ろくのじょう)殿にかか
る軽率(けいそつ)な事をなさらぬようにと戒められたそうだ」

「そのような事が。長野主膳(しゅぜん)殿と申される方は、どういふお方(かた)のですか」

「お生まれは、伊勢国のお生まれと聞いて居るが、肥後国というお話もある。十一の時、新宮(しんぐう)丹鶴城(たんかくじょう)主・水野忠啓(みずの ただあき)殿のもとに預けられたとお話。
かくじょう)主・水野忠啓(みずの ただあき)殿のもとに預けられたとお話。」

この丹鶴城(たんかくじょう)に、面白い話がある。城の名は、この地に保元の乱で崇徳上皇方につき後白河天皇方に敗れた源為義(みなもと)のためよしと熊野別当(くまのべつどう)の娘との子である丹鶴(たんかく)と申す方の住まいがあつたからだとか。

その丹鶴城が築城されたのは大坂夏の陣後、新宮に入った浅野氏によるもの。その浅野氏は芸州に国替えとなり、家康公の十男であられる頼宣（よりのぶ）公が紀州徳川家の祖となられた時、付家老として水野重仲（しげなか）殿が入城されたのだ。それ故、水野忠啓（ただあき）殿は、紀州徳川家の主席家老。お分かりかな」

「浅野家のお話ならば、伊藤先生から聞いて居ります」

「それで、主膳（しゅぜん）殿は、水野忠啓（ただあき）殿のお子の忠央（ただなか）殿とは竹馬の友である事は、以前にお話致した。忠啓（ただあき）殿のもとに來られる前は、阿蘇山の長野村に居られたそうだ」

「阿蘇に」

「育ての親であられる阿蘇惟清（あそこれきよ）殿は、阿蘇神社大宮司」

「ならば、長野主膳（ながの しゅぜん）殿は、神武天皇から綿々と続くお家で育てられたという事ですか」

「左様。然（しか）れども」

「然（しか）れども何なんですか」

「阿蘇神社大宮司は神武天皇から綿々と続くお家柄なれども、この世に存在するもので、天以上に厳格なものはない。古来より聖人は、非常に真面目な気持ちで天を崇拜し、民はその信仰を絶やす事は無かったのだ。今日に至るまで、太古の純朴な神々が祀られて居るのも、家康公が諸国に鎮座する神社の守護を功臣にお命じになられたからだ。長髓彦（ながすねびこ）は、大和に入られた神武天皇に遣いを出して言われたのだ。昔、天つ神の子の櫛玉（くしたま）饒速（にぎはや）日命（ひのみこと）が天から降り、私の妹の三炊屋媛（みかしきやひめ）と結婚し、可美真手命（うましまでのみこと）がお生まれになられた。だから、私は饒速日命（にぎはやひのみこと）を君として仕えているのだと。今日はこの位にしておくか。今宵（こよい）は愉快的な酒を酌み交わそうではないか」

川原は、手を打つて笑った。

十二

夜が更けると、夷人たちも、三々五々ホールに集まつて来た。横浜の港を發つて明日で十日。川原と出会わなければ、なんとも退屈な旅となつていた事か。木戸伊藤両先生、西郷さん、大久保先生の事も分かつてきた。清濁(せいだく)併せ吞むが政(まつりごと)。大人になれという事か。

果てしなき大洋を木の葉の如きものにて横断せんとするのだ。天のご加護を祈念するも、夷人と酒を酌み交わすのも悪くはなかつた。奴の顔を立ててやる事にした。

「お主の事を誤解していた。詫びたい」

「何だ、突然」

「あれから、また、伊藤先生の部屋を訪ねた。お主の言う通りだ。僕は本当に何も知らなかつた」

「本当に分かつたのか」

「分かつた。お主の申す事、すべて分つた。その昔、柳生新陰流(やぎゅうしんかげりゅう)の話聞き及び、合点のいかぬ事ばかりであつたが、漸く分かつた。天下は我のもの、我もまた天下のもの。天下を有(たも)つというは、我と天下の一体を自得する事だ。権勢をとり、生殺(せいさつ)の柄(へい)を握つて天下に号令する事ではない。自得を体得せ

ば、道と一体になる事が出来るのだ。顔淵(がんえん)も坐忘(ざぼう)したではないのか」

奴は渋い顔をしていた。

「何をそのような顔をする。お主は言ったではないか。昔の人の事を想えと。お主は本当に古今和漢の学に秀でて居る。伊藤先生は、『鶯(うぐいす)の子になりにつける時鳥(ほととぎす)』という歌を知つて居るかと思された」

「伊藤先生は何故、そのような話をされた」

「藤原氏の話に及んでの事だ」

「藤原氏のどんな話だ」

「松陰先生が、藤原寅次郎(とらじろう)と名乗られた経緯だ。ご養子に入られた吉田家は、一条の朝臣藤原行成(ふじわらのゆきなり)卿からの出。藤原にも色々ある。三条公の御家は、藤原鎌足公より十一代、太政大臣・藤原公季(ふじわらのきんすえ)卿より出(い)で、ご家業を笛をなす清華(せいが)中の名家。神楽にて笛、箏(しちりき)の音を聞くと、清々しい想いになるものだ」

「それで何が分かったと言うのだ」

「伊藤先生ご一家が、萩に来られた顛末(てんまつ)だ。身分なき者の清廉(せいれん)さじゃ。清少納言(せいしようなごん)も言つて居る」

「何をだ」

「六位の蔵人(くろうど)などは、紫革(むらさきがわ)して伊予簾(いよすだれ)かけわたし、布障子(ぬのそうじ)はらせて住まひたると。先生一家は、藤の花に隠れられたのだ」

「本当に伊藤先生がそのような事を話したのか。誰か君に入れ智恵をして居るのではないか」

「それは、下種（げす）の勘繰（かんぐ）りというものだ」

「そうか」

奴はさめた声で言った。

「何だ、その物言いは。褒めたのに」

「君は伊藤先生の何が分かったというのだ。僕は伊藤先生の気が知れないぞ」

「どういう事だ」

「イギリスに密航された時、頼山陽（らいさんよう）の『日本政記』を携えて行かれた事だ。君も知ってるだろう」

「勿論だ。伊藤先生のご自慢だ。それがどうした」

「今夏、伊藤先生とアメリカ視察を終えられた芳川顛正（よしかわ あきまさ）先生と話す機会があった」

「どんな話をした」

『日本政記（にほんせいぎ）』の話だ。伊藤先生は、馬関（ばかん）義挙の後、長崎で芳川（よしかわ）殿から英語を学ばれ、再度の洋行を期して居られたが、大政奉還（たいせいほうかん）の報が入り、国事に奔走（ほんそう）される事となられた。長崎を離れるに当たり、幼少からの愛読書である『日本政記』を記念として芳川殿に贈られたそうだ。それで、芳川殿が、どう思うかと聞かれるのだ」

「何をだ」

「伊藤先生は何故、『日本政記』を携えてイギリスに行ったのかと」

「それは、尊皇攘夷（そのうじょうい）の志を忘れぬためだ。それこそ、松陰先生の大和魂というものではないか。芳川（よしかわ）殿は何故に、そのような事を聞かれる。お主は何と答えた」

「これには困った。松陰先生と伊藤先生とは、事情が違ふのだ」

「事情が違ふ」

「松陰先生は、頼山陽（らいさんよう）を好まれて居られぬのだ」

「松陰先生が、山陽を好まれて居られぬとは、どういう事だ」

「松陰先生は、山陽を読むも、藤氏・源平・北条・足利・織豊（しよくほう）等の事蹟（じせき）に及び、それが切なると征夷府にて太政大臣を兼ねると申されると申されたそうだ」

「征夷府が太政大臣を兼ねるとは、どういう事だ」

「諫（いさ）むる時の議論になると申されて居られるのだ」

「誰を諫（いさ）めると言うのだ」

「御上（おかみ）をだ」

「誰がそのような事を言ったのだ」

「久坂（くさか）先生だ。松陰先生は大江広元（おおえのひろもと）公の事蹟（じせき）に及び、久坂先生の文に忠告されたそうだ」

「久坂（くさか）先生のどのような文にご忠告されたのだ」

「『祖宗（そそう）是れを以て其の上を諫めて臣子乃ち顧みる、是れを以て吾が君に勧めて可ならんや』との久坂（くさか）先生の文だ」

「久坂先生が、そのような文を書かれたのか。それと、伊藤先生がイギリスに『日本政記（にほんせいぎ）』を携えて行かれたのと、どういう関係があると言うのだ」

「君は藤原藤房（ふじわらの ふじふさ）卿と楠正成（くすのき まさしげ）公の水魚の交を知らぬのか。伊藤先生は藤房（ふじふさ）卿を尊敬されて居られるのだ」

「伊藤先生が、そのようなお公家さんの名を口にされた事など、ないぞ。そのお公家さんは、何者だ」

「建武中興（けんむちゆうこう）の日に嗟嘆（さたん）し、『君、上に周（まる）きは、天の徳にして施し、臣下に定まるは、地の徳にして受く、天地の位にかなへば、明君賢臣の符号と云ふなり』と申されたお方だ。藤房（ふじふさ）卿は大楠公（だいなんこう）に申されたそうだ。『君其徳なきを、臣として諫を為す事如何（いかん）ぞや』と」

「それで、大楠公（だいなんこう）は何と答えられた」

『諫を納れて、臣を用ふるは、明君なり。共に進み、共に栄へん事、臣の道なり。諫を納れず、其臣を用ひざれば、或は死し、或は退き、或は隠れぬ、是賢臣の道なり』と」

「そのお公家さんは、どうした」

「分からぬ」

「分からぬとは、どういう事だ」

「分からぬように、諸国を放浪された」

「恥じたのではないか。大楠公（だいなんこう）の忠勇に。伊藤先生もイギリスに『日本政記』を持参されたのも、恥を忍んでの事だ」

「どうして分る」

「伊藤先生が皇国を発たれる時、詠じられた歌を思い出した」

「どのような歌だ」

『ますらをの恥を忍びて行く旅は すめらみくにの為とこそ知れ』だ。やはり、大楠公(だいなんこう)の忠勇に恥じられたのだ」

「そうではあるまい」

「何故に、そのような事を言う」

「伊藤先生は、狩人(ますらお)と申されて居られるのだ」

「何故に、そのような事を言う」

「伊藤先生が、幼少の時の話をされたのを思い出した」

「どんな話だ」

「産土神(うぶすながみ)天満宮(てんまんぐう)の山車(だし)を引出して悪餓鬼(わるがき)と遊んで居ったと」

「それと『日本政記』とどういう関係がある」

「始めは悪い事と思つて、止めるも、皆が聴き入れぬから、自分も仲間に入ったと」

「そのような子供騙(だま)しの話をするのは、止せ。いやしくとも伊藤先生は国事に奔走(ほんそう)されて居られた

のだ。真面目に話をして居るのだ」

「三つ児の魂百までと申すではないか。考えてもみれ」

「何をだ」

「伊藤先生が『日本政記』を贈られたのは、慶応三年。イギリスで攘夷の虚妄を知ったと申されて居られるではないか」

「そう深く考えるな。お札に贈られたのだ。それとも何か、芳川(よしかわ)殿が何か申されたのか」

「あれこれ聞いてみたが、はつきりした事は申されなかった」

「伊藤先生は、頼山陽（らいさんよう）の尊皇論に感銘を受け、御維新にて神武天皇東征論に倣い、皇国に郡県制（ぐんけんせい）をひかれ、天皇御親政（ごしんせい）の世を行わんとされたのではないのか」

「そうではないのだ。芳川（よしかわ）先生が申されるに、伊藤先生は芳川先生と別れ、神戸で兵庫県知事をされて居られたが、何とか郡県の政治にしなければと国是綱目（こくぜこうもく）というものを書かれ、政府に提出された」

「やはり、そうではないか。伊藤先生は頼山陽（らいさんよう）の尊皇論に感銘を受けられたのだ」

「芳川先生も、伊藤先生から贈られた『日本政記』に、兵制統一とか貨幣統一とかの伊藤先生の添え書きがあったと申されたが、伊藤先生の眼目は王制にあるのだと。昔の王制論に拠（よ）つて開国論の主義を採るといふものだ。それには学校を興し、国民を教育しなければならぬということを国是綱目（こくぜこうもく）に書かれたそうだ。

それと言うのも、維新の五年前、井上先生らとともに英国に遊び、その文物燦然（さんぜん）たるを目撃したからだというのだ。維新の精神は、周に依るもの。周は封建制にて、郡県制（ぐんけんせい）は秦（しん）にて由来するものなれど、芳川先生が申されるに、伊藤先生は、いわゆる周の文明は、その実、西洋において実行せらるるといふも過言ではないと思ひ、爾来（じらい）、尊王開国のために一身を犠牲に供せんと決心されたというのだ。

芳川先生は、それ以上、何もお話されないで、お茶を濁された。結局、伊藤先生の気が知れぬという事で、芳川先生と別れて来た。その後、折に触れ、『日本政記』を読み返してもみたが、どういう事か分からなかった」

「そうか。お主ほどの者にも分からぬ事か。知ったかぶりして、恥ずかしい」

「いや、恥じ入る事はない。持つべきものは友だ」

「どうした」

「君と話しているうちに閃（ひらめ）いた」

「何をだ」

「伊藤先生のご心境だ」

「そうか、閃(ひらめ)いたか。教えて呉れ。伊藤先生は何故に、『日本政記』を持参された」

『古池や蛙飛びこむ水の音』

「また馬鹿を言う。蛙(かわず)が池に飛び込んで、どんな音がするといふのだ。芭蕉(ばしょう)の駄作ではないか」

「君は蛇に睨(にら)まれた蛙を知らぬのか。龍神様には蛙を供えるものだ」

「伊藤先生が蛙(かわず)というのか」

「そういう事だ。それでは、これはどうだ。『稻妻の行く先見たり不破の関』」

「人をからかうにも程がある」

「からかつて居るのではない。それでは、君は鶴(ぬえ)を知つて居るか」

「また何だ。それは、空を飛ぶ怪鳥の事だ。それがどうした。僕が源頼政(みなもと)のよりまさ(公)が鶴(ぬえ)を退治されといふ話を知らぬとでも思つて居るのか」

「それでは、伊藤先生が厳島(いつくしま)神社を崇拜されて居られるのを知つて居るか」

「その話は聞いて居る」

「それでは、伊藤先生が平清盛を崇拜されて居られるのは」

「何故に、その様な話をする。山陽(さんよう)の話と何か関係あるのか。頼山陽(らいさんよう)は、安芸国(あきのくに)の人なれば、何か秘せられて居るといふのか。清盛は法華経を厳島神社に奉納したといふ話を聞いて居るが」

「それでは、九条家が厳島神社を鎮守されて居るのを知つて居るか」

「何故に、九条家が厳島神社を鎮守されて居るのだ。藤原五摂家（ごせつけ）の九条家が、何故に宗像三女神（むなかたさんじょじん）の湍津姫命（たぎつひめのみこと）、市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）、田心姫命（たごりひめのみこと）を祀るのだ」

「平清盛が、摂津国（せつつのくに）は兵庫津（ひょうごのつ）に経が島（きょうがしま）を造成した際に、厳島社を勧請（かんじょう）したのだ。後に母の姉の祇園女御（ぎおんのにょうご）を合祀され、京都御所建礼門（けんれいもん）南方にある九条邸の拾翠池（しゅうすいいけ）の嶋中（しまじゅう）に移されたのだ」

「それが、どうした。それで、鶴（ぬえ）がどうしたと言うのだ。清盛と何か関係あるのか」

「ある夜、藤の侍従（じじゅう）季賢（すえかた）が野番をして居ると、南殿に鶴（ぬえ）の音がした。季賢（すえかた）が、南殿に朝敵あり、罷（まか）り出て搦（から）めよと叫ぶも、誰も罷（まか）り出ない。そこで、左衛門尉（さえもん）のじょう）の清盛が罷（まか）り出たのだ。鶴（ぬえ）は、目に見えぬ姿なきもの。清盛は、どのように捕らえようかと思案した」

「清盛は、捕らえる事は出来たのか」

「出来た。それで、叡覧（えいらん）ありてのご評定となった」

「それは、鶴（ぬえ）であったのか」

「違った」

「違った。何であったのだ、清盛が捕らえた物は」

「毛朱（もみ）だ」

「毛朱（もみ）？」

「唐名で、年老了鼠（ねずみ）の事だ」

「鼠（ねずみ）。誰がそのような事を言うたのだ」

「朝川善庵（あさかわ ぜんあん）という儒者だ」

「もうよい」

奴の話を実に受けた、私が愚かであった。奴に背を向けて行く所は、川原の所しかなかった。川原は異人と何やら話をして居った。話が一段落すると、川原はその異人を私に紹介した。異人は私と握手を終えると、船室に戻って行った。

「何をお話でしたか」

「日本の王制復古（おうせいふく）の事を話して居った。彼は日本に革命が起り、封建制がなくなつたと思つたが、そうではなかつたと」

「どういう事でしょうか」

「アメリカにてもフランスにても、町人が代表なくして課税なしと叫んで戦つたのだと。所が日本人の誰に聞いてみても、満足な説明が得られない。日本で起つたのは、レストレーションではないのかと」

「レストレーション？」

「イギリスで革命が起き共和制となるも、程なくしてオランダから王となる者を呼び寄せ、王制を回復した。彼の者たちは、これをレストレーションと呼んで居る。彼の国の王は、君臨（くんりん）しても統治しない」

「異人は何時もおかしな事を言い居ります。我等は、町人風情（ふぜい）のために戊辰（ぼしん）の役を戦つたのではあ

りませぬ。それで、川原殿はどう申されたのですか」

「日本の多くの者が、御維新(ごいしん)に判然として居らぬと言った。友人に福沢諭吉と申す著名な文人が居るが、彼をしても御一新(ごいっしん)の帰趨(きすう)には気が動転したと言つてやった。すると自分の国に起きた事が分分かぬとは、どういう事だ。そのような不誠実な態度でよいのかと詰め寄られた」

「それで何と申されたのですか」

「此方(こちら)にも面子(めんつ)がある。拙者(せつしや)には一通りの講釈はあるが、日本の事情を話すには、些(いささ)か言葉が不自由だ。何時か貴方(あなた)の国の言葉で自分の考えを著すから、貴方(あなた)に贈りましよと約束した。貴方(あなた)も日本の事を学んで下されと言うと、彼も宜しいと言う。そこに貴殿が来たから、話をお仕舞いにした」

「福沢先生が動転していたというのは、本当なのですか」

「本当だ。慶応三年夏、長崎から江戸に戻った。久し振りの江戸で、事情が分からぬ。福沢に会おうと思つたら、謹慎中だというではないか。謹慎と言つても、面会ぐらい訳ない。福沢に会つて江戸の事情は大体分かつたが、福沢は薩長の動きが分かつて居らぬ。此方(こちら)は長崎にいてお見通しだ。おかしかった」

川原は誇らしげに言った。

「福沢先生は何故に、謹慎されて居られたのですか」

「原因は年の始めに渡米した時の放言らしい。謹慎が命じられたのは、薩長がいよいよ倒幕という時だ。アメリカでこんな政府潰(つぶ)すがいいなどと放言したのだから、安政(あんせい)三年に亡くなった兄の話が持ち出されたと苦笑して居つた。福沢の実兄は鹿児島に行つていると噂を立てられたと。そう言つても、福沢と話をしているうちに、謹

慎も無理からぬ事と思つた。相変わらずの放言三昧(ざんまい)だ。

役人は相変わらず公を私にして居る。何を買うにも御用(ごよう)だとか言つて、勝手に値を付ける。果ては横流しだ。今年渡米した時も、役人が三井の手代に安い時に買い入れた弗(ドル)もあるうから、その安い弗(ドル)と両替したいなどと言つて居つたと言ふのだ。手代も商売そつちのけで平伏(へいふく)して、かしこまりましたと言つて居ると。こんな政府、潰(つぶ)さねばと思ふのは無理からぬ事ではないかと。

それではいつその事、薩長に商売の自由でも説いて、幕府を倒してしまえばよいではないかと言つと、これまた困つたという顔をした。大名旗本の借財は何だ。商人が偉いのか、侍が偉いのか、分からぬ。それでいて、町人は町人で誰も商売を自由にして、新しい世を創ろうとは考へては居らぬ。ましてや薩長にそのような道理が分かる者など居らぬ。長州では奇兵隊(きへいたい)とかいつて、百姓町人を集めて兵隊にして居るが、もしあのような乱暴人が天下を自由にしようになつたら、それこそ亡国だ。国を渡せぬと言ふのだ。

それで福沢にこれからどうする、門閥制度は親の敵(かたき)ではないかと聞くと、將軍に文明開化の説を吹き込んで大変革を行うと言ふ。大君のモナルキとか言つて居つた。賢明な大名四、五人集まつて会合したところで、私の志を遂げるのが関の山だ。島津幕府云々と言ひ出す輩も居る。ましてや諸大名の寄せ集めの話し合ひでは、とても文明開化は進まぬと言ふのだ。

そうこうしているうちに、中島三郎助(なかじま さぶろうすけ)殿が福沢の事を老中稲葉美濃守(みののかみ)に掛け合つて呉れたと言ふのだ」

「中島先生が」

「中島先生？ 貴殿は中島殿を知つて居るのか」

「中島先生は木戸先生の蘭学の師です。江戸に出られ剣術修行の傍ら蘭学を学ばれたそうです。川原殿は、中島先生を存じて居られるのですか」

「勿論だ。貴殿は本当に中島殿を存じて居るのか」

「お話は、木戸先生から伺つて居ります。それで、福沢先生は出仕(しゅっし)できたのですか」

「中島殿のご尽力で、出仕する事に相成つた。福沢などは、幕臣などに放言せずともよかつたのだ。相手を違(たが)えた」

「相手を違(たが)えた」

「そうだ。相手を違えたのだ」

この時、夷人(いじん)たちはグラスをかざし奇声を上げた。爆竹の音がホールに鳴り響き、夷人(いじん)たちの歓声にかき消され、川原の声は聞こえなくなった。

「薩長に国民政府の何たるか、国民軍の何たるかを啓蒙してやったら、薩長の倒幕も趣を変えていたやもしれぬという事だ」

「国民軍？」

「福沢の首一つに値する大仕事だつたのだ。まあ、幕府を倒すに大義を唱えるなどという事は、西郷も大久保も木戸も出来なかつた事。それを福沢に望むなど、酷な話だ。致し方ないという事か。あとは薩長の芝居だ。部屋で飲み直した」

川原はそう言うと、周りを見渡した。

「何方かお捜しで」

「役者の面々だ」

視線の先には、岩倉大使と談笑している木戸大久保両先生がいた。側にいた伊藤先生は、此方(こちら)の様子を窺っていた。

宴たけなわの広間を抜け出し川原の部屋に戻ると、川原は棚の陰から酒瓶を取り出し、グラスを私に渡した。

「それで、大君のモナルキの方はどうなりましたか」

私は話を切り出した。

「それより、先ずは乾杯だ」

川原はグラスに琥珀(こほく)色の液体を注いだ。

「何に乾杯しましょうか」

「先ずは慶喜(よしのぶ)公にだ」

「前將軍にですか」

「そうだ。『梨(なし)、棗(なつめ)、黍(きみ)に粟(あは)つぎ、延(は)ふ田葛(くず)の、後(のち)も逢はむと、葵(あ

ふひ)花咲く』」

「葵(あおい)花咲くとは」

「徒花(あだばな)だ」

「徒花(あだばな)」

「封建制にては、花咲き君に逢う事はなかったのだ」

「それで、大政奉還(たいせいほうかん)を行ったと申されるのですか」

「そうだ。国体の益々の尊厳を極めんとされたのだ」

川原はグラスを掲げた。

「梨とは、何の事でしょうか。あの李下(りか)に冠(かんむり)を正さずという梨の木のことなのでしょうか。そのお心は」

「貴殿は、大中臣能宣(おおなかとみ)のよしのぶ(よしのぶ)を知って居るか」

「存じませぬ」

「それでは、清原元輔(きよはらのもとすけ)は」

「清少納言の父では」

「それでは源順(みなものしたごう)は」

「存じませぬ」

「それでは紀時文(きのときぶみ)は」

「紀と申されるからには、紀一族。紀貫之(きのつらゆき)と関係ある方では」

「息子だ。それでは、坂上望城(さかのうえのもちき)は」

「存じませぬ。その方々は何をされたのですか」

「和歌を梨壺(なしつぼ)に置かれ、撰じられた。梨壺(なしつぼ)の五人という」

「梨壺(なしつぼ)」

「格条(きやくじょう)に『朝は身分賤(いや)しき者も夕には公卿となる』とある。我が国上古において官職は、和歌にて行いの正しさを量り、才能ある者を登用した。寛弘(かんこう)以前においては、貴賤を問わず、才能があれば、大

将や参議にまでなったのだ」

「それでは棗(なつめ)とは」

「貴殿は棗の木を知らぬのか」

「何処(どこ)に生えているものなのですか」

「分からぬ」

「分からぬとは、どういう事なのでしょうか」

「昔、鎌麻呂(かままる)が木の元を掃除して、手入れをして居ったのだが。拙者にも分からぬ」

「分からぬ、分からぬと申されては、此方(こちら)が困ります。分かるようお話ください」

「分からぬように、隠れて居る。利休は、棗(なつめ)の蓋(ふた)は半月に手をかけ、茶杓(ちやしやく)を円く置くと申して居る」

「ますます、分からなくなりました」

「今、俄(にわ)かに分かるような事ではない」

「それでは、黍(きび)に粟(あわ)継ぎとは」

「それも、拙者には分からぬ事だ」

「それでは、何方に聞けば分かる事なのでしょうか」

「ペリーだ」

「ペリー？」

「そうだ。ペリーに聞けば分かるやもしれぬ」

「また、そのような事を。ペリーに和歌が分かると申されるのですか」

「ペリーは四海を股にかけた男。

『百伝ふ（ももつたふ）八十（やそ）の島廻（しまみ）を漕（こ）ぎ来れど 粟（あわ）の小島し見れど飽かぬかも』
「それでは、葛（くず）とは」

「田葛（くず）は延うも、国栖（くず）の地の者の意か。田は、元は狩猟牧畜の地の意、後に禾穀（かこく）の地となるもの。夏（か）殷（いん）にあつては熊神を祀り、周にあつては黍稷（しよしよく）の君を始祖とした」

「それは、周の始祖・后稷（こうしよく）の事ですか」

「そうだ。梨に棗（なつめ）に黍（きび）に粟（あわ）に葛（くず）に葵（あおい）が、膳（ぜん）に揃った所で、ペリーに乾杯するの悪くは無い」

「また、戯（たわむ）れを」

「戯（たわむ）れなどではない」

「お酔いのですか。真面目（まじめ）にお答えください」

「酔つては居らぬ。慶応三年、西郷が久光（ひさみつ）殿の使者として容堂（ようどう）侯に会いに行った事があつた」

「西郷さんが土佐へ。それで西郷さんは、どのような話をされたのですか」

「大政奉還（たいせいほうかん）の話だ」

「それで、容堂（ようどう）殿は」

「容堂（ようどう）侯も人が悪い。西郷に言ったのさ。『九カ国は手に入ったかと』」

「それで、西郷さんは」

「西郷も負けては居らぬ。『四国はもうお手に入りましたか』と」

川原は微笑みを浮かべ、グラスの酒を飲み干した。

「それだけですか」

「そうだ。酔つて候（よつて）さうろうの事。西郷は何も言わず、帰つた。兎に角（とにかく）、慶喜（よしのぶ）公は京にあって、難しい舵取りを迫られた。幕府の廃止をはかるものと疑われた」

「そのような話、何処（どこ）から出て来るものなのでしょうか」

「水戸の出だと申す者たちだ。本荘、阿部の両老中が上洛（じょうらく）し、禁裏御守衛総督（きんりごごしゅえい）さうとく（の）慶喜公を始め守護職松平容保（まつだいら）かたもり、所司代松平定敬（まつだいら）さだあき（に）東下を強いた。

その手の話はまだある。家茂（いえもち）公は海軍奉行をお役御免となつた海舟殿を大坂に呼び出し、長州征伐に反対する大久保と岩下を説得するようにとお話された」

「勝先生にですか。それで、勝先生はどうされたのですか」

「断つた」

「將軍のご意向をですか」

「そうだ。大久保岩下の方が理に適（かな）つて」と

「理とは」

「国家の利にならない。そもそも話に無理があつた。フランス公使ロッシュは、慶喜（よしのぶ）公に国防は幕府だけで行い、諸侯に海陸軍を持たせないほうが統治しやすいと持ち掛けたのだ。小栗忠順（おぐり）ただまさ（は）ロッシュの紹介でフランスから銀六百万両と軍艦数艘（そう）を借り受け、薩摩の殲滅（せんめつ）を企てて居つた」

「そのような事があっても、川原殿は前將軍を庇（かば）われるのですか」

「長州が元治（げんじ）甲子の年に、堺町御門で順逆を誤らねば、こういう事にはならなかったのだ。慶喜公は、事態の收拾にご尽力なされたのだ」

川原は真面目な顔をした。

「何をおっしゃりたいのでしょうか」

「慶応二年再征長の最中、大坂城で家茂（いえもち）公がお亡くなりになると、慶喜公は長州との停戦交渉を海舟殿に依頼されたのだ」

「長州と停戦」

「そうだ。慶喜公のご意向はこうだ。徳川家相統にあたつて政治を一新し、諸大名を大坂に召集し、衆議によつて長州の処分を公正に行うと。それで、海舟殿は、長州との談判に広島に行かれた」

「そのような事、聞いた事ありませんが。広島にですか」

「そうだ。宮島だ。君ら若い者の耳に入らぬのも無理からぬ事だ。談判に出向くにも、手間取つて居った」

「それで我が藩から誰が」

「広沢殿と井上聞多（いのうえもんた）殿が参られた」

「広沢先生と井上先生が。それで勝先生とどんな談判を」

「談判などと申す堅苦しいものではない。帰京したら直ちに貴藩国境にある兵を引き上げるから、貴藩も請願などと唱えて多勢で押し上げる事がないようにと」

川原は酒瓶を差し出した。

「両先生は、その様な事で納得されたのですか」

「広沢殿は、海舟殿に尊慮（そんりよ）のあるところをはかねてより承知して居りますと」

「それでは何故に、幕府は長州遠征などという事を」

「岩倉殿の工作が失敗したからだ」

「岩倉公の工作と申されますのは」

「大原殿に征長軍を解くよう諫奏（かんそう）を行わたのだ。それが慶喜（よしのぶ）公に災いした」

「何故に、大原殿の諫奏（かんそう）が前將軍に災いするのですか」

「幕府は建言をした二十二人の公卿を処罰したのだ。それで、京の情勢が一変し、朝廷は長州征伐を説く佐幕派の手に実権を握られてしまったのだ。大原殿の諫奏（かんそう）が上手くいけば、岩倉殿は朝廷よりの召集に関八州の一領主の資格で慶喜（よしのぶ）公を参加させる積りであった」

「前將軍を」

「だから慶喜（よしのぶ）公は、將軍職を固辞されて居られたのだ」

「岩倉公にそのようなお考えがあったとは」

「これには西郷と大久保が反対した。今、諸侯が召集されても、旧習が踏襲されるだけで国是の一新はされないと」

「西郷大久保両先生のご奮起がなければ、王政復古（おうせいふつこ）の事も、慶応の夢と化すところでした」

「衰えたといえ徳川の威光は絶大だ。現に在京の諸大名は、慶喜（よしのぶ）公の將軍職推戴（すいたい）を奏上し、

先帝は慶喜公に將軍宣下をされた」

「それでは何故に、慶喜（よしのぶ）は將軍職を受けたのですか」

「関八州の一領主として召集される道が頓挫（とんざ）した故、先ずは幕府の旧弊を一新せんと將軍職を受けられたのだ。しかる後に大政奉還（たいせいほうかん）をなす。慶喜（よしのぶ）公は広く天下の公議を尽くせば、皇国も必ず海外万国と並立つとの思いから朝廷に政権を返上されたのだ。後は薩長土州藩士の芝居だ」

川原はグラスの酒を飲み干した。

「そのような事があるものなのでしょうか。川原殿は、前將軍は騙されたとでも申されるのですか」

「騙されなどして居らぬ」

「それでは何故に、芝居などと申されるのですか」

「聡明な藩主が居らなかつたからだ。そこで、西郷と大久保は久光（ひさみつ）殿に説いたのだ」

川原はまた酒瓶を差し出した。

「どのように」

「松平春嶽（まつだいら しゅんがく）殿と山内容堂（やまうち ようどう）侯と伊達宗城（だて むねなり）殿と会さ
れ、慶喜公に大政の奉還を迫るようにと」

「それで、久光（ひさみつ）殿は」

「政権を返上させる事には同意されたが、西郷と大久保とは、考えが違われた」

「西郷さんと大久保先生は、王政復古（おうせいふつこ）を説かれたのではないのですか」

「久光（ひさみつ）殿は郡県制（ぐんけんせい）に反対だ。久光殿が、正論をもって慶喜公に大政の返上を迫れるものではない」

「それでは、四侯は何をもって前將軍に迫られたのですか」

「朝廷に無断で兵庫開港を外国に確約した事だ。これには慶喜公熲貞(びいき)の容堂(ようどう)殿が反対した」

「四侯は大政奉還(たいせいほうかん)の話がされなかったのですか」

「そのような話はなかった。結局、四侯は長州藩に寛大な処分を下し、長州藩を加え改革を行うよう慶喜(よしのぶ)公に申し上げただけだ」

「西郷大久保両先生は納得されたのですか」

「納得する筈がない。久光(ひさみつ)殿では駄目だ。容堂(ようどう)殿を動かし慶喜(よしのぶ)公に大政を奉還させる事にした」

「容堂(ようどう)侯にですか」

「そうだ」

「龍馬(りょうま)を遣って、後藤象二郎(ごとう)しょうじろうに薩摩と盟約を取り交わさせた」

「坂本先生を。土佐は薩摩とどの様な盟約を結んだと申されるのですか」

「薩土盟約(さつどめいやく)の第一義は、国体を協正し万世万国にわたって恥じずだ。地球上を考えても日本のような封建制の国はない」

「そのような事、薩長の盟約にはありませんが」

「そうだ。薩土の盟約は高尚なのだ。日本の封建政体は上帝の存在を知らず、古郡県の政体を変じて大政を幕府に帰したために生じたものだ。薩土(さつど)の盟約は、この上帝の存在を知らずして、如何(いか)なる国体の協正(きょうせい)が出来るかと謳(うた)って居るのだ。それこそ、真の国体というものだ。万世万国にわたって恥じぬよう、国体の協正(きょうせい)を行おうというのだ。さすれば、どういう事なる」

「存じませぬ」

「有無(うむ)を通じ、人民共和による公明正大な事業を行うのだ。取り分け交易は、外夷の侮(あなど)りを受けぬよう全洲同力だ。交易を幕府が独占しては、諸外国の侮りをうける。然らば、どうなる」

「存じませぬ」

「王制復古(おうせいふつこ)だ。古郡県制が復古されるのだ」

「そのような盟約を、誰が結んだのですか」

「薩摩は西郷に大久保に小松だ。土佐は後藤、福岡、寺村、真辺、龍馬に中岡だ」

「中岡先生もですか」

「そうだ」

「それでは坂本先生の事は、中岡先生の巻き添えだったのではないですか」

「そうではない。そのような事ではないのだ。刺客(しかく)は、龍馬を狙ったのだ」

川原はきつぱりと否定した。

「何故にですか」

「刺客は、『坂本先生、しばらく』と声をかけて居るのだ。貴殿は話を聞いて居らぬのか。龍馬を斬ったのは、今井信郎(いまいのぶお)だ」

「それでは川原殿は、刑部大輔(きょうぶたいふ)であられた佐々木先生の取調べに、手落ちがあつたと申されるのですか。伊藤先生も、今井は近江屋の一階に居って、手を下して居らぬと申されましたが」

「龍馬を斬ったのは、今井信郎(いまいのぶお)だ。近江屋の二階にて龍馬を仕留める事の出来る者など、今井信郎(いまいのぶお)だ」

まいのぶお)おいて外には考えられぬのだ。今井は、急に京に呼び寄せられたのだ」

川原は声を震わせていた。

「それでは何故に、新政府は今井を厳罰に処さないのですか」

「今、幕臣に龍馬暗殺の真相を供述されては、新政府が困る。一橋家も望まれる所ではない。海舟殿の話では、一橋家附用人(ようにん)から目付(めつけ)に転じた榎本(えのもと)対馬守(つしまのかみ)辺りが、佐々木唯三郎(ささきたださぶろう)に命じたものではないかと申された」

「榎本(えのもと)対馬守(つしまのかみ)とは、何者なのですか」

「榎本道章(えのもと みちあき)といって、慶喜(よしのぶ)公將軍就職の事を押し進め、鳥羽伏見の戦いに際しては、主戦論を唱え、箱館(はこだて)に脱走せし者」

「それでは、前將軍が首謀者という事ではありませんか」

「慶喜(よしのぶ)公に関わりのない事」

「何故に、そのような事が申せましょうか」

「慶喜(よしのぶ)公は、禁裏御守衛総督(きんりごしゅえいそうとく)」

「それが、どうしたと申されるのですか」

「貴殿は存じて居らぬ事だが、元治(げんじ)元年の勸修寺(かじゅうじ)宮のご一件では、孝明(こうめい)帝は先帝のお咎(とが)めありし者とご難色を示されたが、慶喜(よしのぶ)公を始め松平春嶽(まつだいら しゅんがく)殿、松平容保(まつだいら かたもり)殿、伊達宗城(だて むねなり)殿、島津久光(しまづ ひさみつ)殿が連署して朝廷に建言されたのだ。孝明帝は一橋中納言(ちゆうなごん)以下の建言であればとおっしゃられ、勸修寺宮(かじゅうじのみや)

を伏見宮家に復系し、ご自分の養子とされ、山階宮(やましなのみや)親王とされたのだ」

私は川原の意図を掴(つか)みかねた。

「その事と坂本先生の事と、どういう関係があると申されるのですか」

「それでは今、中川宮は、どうされて居られる。中川宮は一橋家の者と通牒(つうちょう)し、榎本武揚(えのもとたけあき)と結び再び幕府再興を図ろうとし、慶応四年八月、広島藩兵の手で幽閉(ゆうへい)されたのではないのか。この時、慶喜(よしのぶ)公は、中川宮の申出をきっぱりと断(つ)わられて居られるのだ。慶喜公が中川宮と事を共にされるという事は、有り得ない事だ」

川原は強い口調で言った。

「川原殿は、何を申されたいのですか」

「勸修寺(かじゅうじ)は醍醐(だいが)天皇が創建されたもの」

「存じて居ります」

「それだけか。醍醐天皇のご生母は、胤子(たねこ)様と申されて、藤原冬嗣(ふじわらのふゆつぐ)の孫の藤原高藤(ふじわらのたかふじ)が、山城国宇治郡の大領(だいらょう)であった宮道弥益(みやじのいやす)の娘との間にもうけられたお子。勸修寺は、宮道弥益(みやじのいやす)のお家を寺に改め、胤子(たねこ)様がお父上の諡号(しごう)をとって勸修寺と号されたものなのだ。

近くには勸修寺の鎮守社である吉利俱八幡宮(きりくはちまんぐう)があり、祭神として応神天皇(おうじんてんのう)・仲哀天皇(ちゅうあいてんのう)・神功皇后(じんぐうこうごう)が祀(まつ)られて居る」

「それで、何故に坂本先生は殺されたと申されるのですか」

私は怪訝(けげん)な顔を浮かべた。

「貴殿は、刺客(しかく)が松代藩と書かれた手札を坂本先生の下僕(げぼく)の藤吉に差し出したという話を聞いて居るか」

「勿論です。それが何か」

「松代藩といえ、象山(しょうざん)門下と思うが筋。容堂(ようどう)侯は、文久二年十二月に赦免(しゃめん)された象山殿を招聘(しょうへい)せんと、松代藩主・真田信濃守幸教(ゆきのり)殿に依頼されたのだ。貴藩も象山殿を招聘(しょうへい)せんとしたのではないのか。取り次いだ藤吉が、疑わなかったのも無理もない。龍馬(りょうま)は嘉永(かえい)六年からの象山殿の門弟だ。その象山殿が襲われたのも、山階宮晃親王(やましなのみや)あきらしんの(う)を訪れた帰り。海舟殿にも、山階宮(やましなのみや)が会って西洋の事情を聞きたいとお申出があつたが、慶喜(よしのぶ)公の忠臣・原市之進(はらいちのしん)殿が止められた」

川原は寂しげに言った。

「何故に」

「表向き売国の奸臣(かんしん)とみなされ、暗殺の標的にされるからだ。現に原市之進(はらいちのしん)殿も慶応三年八月、京都二条で幕臣の鈴木豊次郎に殺されたのだ。龍馬(りょうま)を斬った今井信郎(いまいのぶお)は、踏み絵を踏まされたのだ」

川原は思いも寄らぬ事を言った。

「踏み絵？」

「佐幕(さぼく)派の中に隠れキリシタンが居つたのだ」

「それでは、坂本先生もキリストンだったと申されるのですか」

「龍馬(りょうま)は古(いにしえ)のキリシタン。おこぜ組に与(くみ)する者」

「おこぜ？」

「土佐にては、深海の怪魚オコゼを山の女神に捧(ささ)げし者たち。土地の者から蔑(さげす)みを受けるも、封建制を厭(いと)う自由な海の民の末裔(まつえい)。龍馬の事だ。今、生きて居たら、古(いにしえ)のキリシタンとなりて、世界の海を駆け回って居ることだ」

川原は遠い目をしていた。

「古(いにしえ)のキリシタン」

「そうだ。オランダ人の話では、古(いにしえ)のキリシタンは魚を信奉して居ったとか」

「どういう事なのでしょうか」

「名古屋城天守閣に何が掲げてある」

「金鯪(きんしゃち)です」

「高知城天守閣にも鯪(しゃち)が掲げられて居る」

「佐幕(さばく)の隠れキリシタンが、天守閣に鯪(しゃち)を掲げたと申されるのですか」

「江戸・千代田城内も捜せば、何かが秘せられて居るはずだ」

「それで、今井にお咎(とが)めがなかったと申されるのですか」

「そうだ。伊藤殿にお確かめになられれば、分る事。波多野小太郎(はたのこたろう)は、兵庫県知事をされて居られた伊藤殿に県官として仕えて居ったのではないのか」

「それが何か」

「波多野（はたの）は見廻組（みまわりぐみ）の旗本だ」

「伊藤先生が見廻組の者を」

「そうだ。波多野は、会津の山本覚馬（やまもと かくま）、桑名の山崎幸一郎と京にあり、鳥羽伏見の戦いが始まると、薩摩屋敷に監禁と称して匿（かくま）われた者だ。今井の事、伊藤殿がご存じない訳がない」

「そのような事が、あるものなのでしょうか。中岡先生は、刺客（しかく）が『こなくそ』と叫んで斬り込んで来たと言われたそうです。『こなくそ』は伊予の方言なれば、新撰組（しんせんぐみ）の原田佐之助（はらだ さのすけ）あたりの仕事では」

「それは、龍馬暗殺を新撰組（しんせんぐみ）の仕業にみせ掛ける下手な芝居か、あるいは意味深長な物言い。兎も角（ともかく）、龍馬の事が公になると、新政府が困るのだ。共和政治に支障を来たす。西郷も大久保も、土佐の内訌（ないこう）に身を晒（さら）す事はしまい。容堂（ようどう）殿は、藩内の内訌（ないこう）には手を焼いて居られたのだ」

「内訌（ないこう）。共和政治。どういう事でしょうか」

「長宗我部（ちようそかべ）氏は、秦の始皇帝の末裔（まつえい）。初め信濃国に住みしも、仁徳天皇（にんとくてんのう）の時、波多の姓を賜わり、その後、経略地を土佐、伊予、讃岐、阿波の四国に及ぼしたのだ。長宗我部氏は天正十四年、讃岐国主・仙石秀久（せんごく ひでひさ）と秀吉の命を奉じ、豊後国（ぶんごくに）戸次川（へつぎがわ）で島津軍と戦い、慶長五年、関ヶ原の戦いにて家康公に敗れると、山内一豊（やまうち かつとよ）が土佐に入国したのだ。

山内一豊は、長宗我部（ちようそかべ）の遺臣を郷士（ごうし）に取り立て、新田開墾に従事せしめた」

「それが土佐藩の内訌(ないこう)と申されるのですか。坂本先生は、土佐勤皇党(とさきんのうとう)に居られたと聞いて居ります。文久二年四月、武市瑞山(たけち ずいざん)先生率いる土佐勤皇党(とさきんのうとう)は、吉田東洋(よしだ どうよう)を亡き者にしたのです」

「龍馬は、東洋暗殺の直前に脱藩して居り、東洋暗殺に関わっては居らぬ」

「坂本先生は、文久二年正月に萩に来られたのは、尊皇攘夷(そのんかうじょうい)の事で、木戸先生、久坂先生とお話するためではなかったのですか」

「龍馬が文久二年正月に萩を訪れたのは、津田政治と三宮新右衛門(しんうえもん)と貴藩に劍術修行と称しての事だ。藩の許可があつての事だ。折しも、和宮様と家茂公のご婚札を控え、毛利家は古例に依り、勧修寺(かじゅうじ)家の執奏(しつそう)を以て和宮様ご婚儀を慶し、獻品(けんびん)を贈られたのだ」

「坂本先生が、公武合体(こうぶがたい)の事に与(くみ)していたとでも申されるのですか」

「龍馬が桂と久坂と何を話したが知らぬが、文久年間、貴藩が公武間を周旋(しゅうせん)せし事、誰もが知る所ではないのか」

「それは長井雅楽(ながい うた)による奸計(かんけい)」

「毛利家公武周旋(しゅうせん)の事は、奸計などというものではない。貴藩の公武周旋(しゅうせん)は、誇るべきもの。文久元年五月、慶親(よしちか)殿は毛利筑前殿の家臣・甲谷岩熊を介して、長井殿を正親町三条(おおぎまちさんじょう)大納言(だいなごん)実愛(さねなる)卿に謁見させ、慶親殿が幕府に建言せし旨趣(ししゆ)を詳説させ居るので。正親町三条(おおぎまちさんじょう)卿は、大いに賛じられ、その大意を筆記させ提出せしめたのだ。慶親(よしちか)殿は、安政四年の堀田殿の御沙汰(ごさた)の旨趣(ししゆ)に基づき、幕府にご制度お改めの事と航海

術お開きの事を建白されたのだ」

「君公は、堀田備中と同腹だったと申されるのですか」

「如何(いか)にも。慶親(よしちか)殿は、建白されたのだ。『開国の御国是、勅諭(ちよくじょう)となり仰せ出だされ、将軍家、遵奉(じゅんぼう)遊ばれ、台命(たいめい)を以て列藩(御沙汰(ごさた)に相成れば、条理判然、神州億兆の人心一和、一団の正気と成り、御国威(ごこくい)は五大洲に振られ、御大業(ごたいぎょう)も成就(じょうじゅ)するもの』と。慶親(よしちか)殿、及ばずながらも大海の涓滴(けんてき)のご決意。斉彬(なりあきら)公亡き後、諸侯中、勤王の志業を窮(きわ)めんとされたお方は、慶親(よしちか)殿おいて外に居られなかった」

「それでは、君公が、長井雅楽(ながい)うた)が上奏せし文書を下し戻されるよう内願されたという話は、嘘なのか」

「嘘ではない。本当だ」

「ならば、上奏は長井雅楽による奸計(かんけい)によるものではないのではありませぬか」

「そうではない。開国の国是(こうぜ)には朝廷のご改革が絡み、慶親(よしちか)殿お一人のお力でどうする事も出来ぬ事もあられたのだ」

「どういう事なのでしょう」

「朝廷ご改革の事は、神代(かみよ)の時代からのご経緯(けいゐ)もあり、伊邪那岐命(いざなぎのみこと)が淡路島多賀の地に幽閉された経緯(けいゐ)もある」

「神代(かみよ)の時代からのご経緯(けいゐ)」

「天照大神(あまてらすおおみかみ)と素戔嗚尊(すさのおのみこと)の宇気比(うけい)の事だ。長州藩には、天照大

神(あまてらすおおみかみ)の神勅を奉じて、大国主神(おおくにぬしのかみ)が国土を瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)に献上された国譲りの経緯(けいゐ)もある。

斉彬(なりあきら)公(ご)存命ならば、斯(か)かる事態に至る事もなかったやもしれぬが、折悪(おりあ)しく、文久二年四月、久光(ひさみつ)殿が上洛(じょうらく)に及び、大原勅使に同行され江戸に赴かれる事になり、ここから薩長の詰まらぬ先陣争いが始まったのだ。

大原勅使の事も、老中の安藤対馬守と久世大和守との間を離間(りかん)せんとして、久世(くぜ)大和守を京に徴(ちよう)せんとしたのだが、久世(くぜ)大和守が上洛(じょうらく)に応じる様子なき故、大原勅使を江戸に遣わす事になったのだ」

「長州の尊皇攘夷を詰まらぬ先陣争いと申されるのですか」

「そうだ。あれで維新が五年遅れたのだ。大原勅使東下に及び岩倉殿は心配され、薩長両藩は皇室の股肱(ここう)となす所であるから、薩長の協和を図るようにと説かれた。岩倉殿は、前年の文久元年十一月、慶親(よしちか)殿参勤と時を同じくして江戸に下り、安藤対馬守久世大和守と面晤(めんご)され、朝廷が開国の詔勅(しようちよく)を渙発(かんぱつ)される様、幕府に働き掛けたのだ。しかも岩倉殿は、江戸にて將軍家の誓書を取り付けられたのだ」

「誓書」

「そうだ。將軍家茂(いえもち)公の誓書だ」

「將軍家が一体、何を誓約されたと申されるのですか」

「廃帝企画なき事の誓約だ。岩倉殿は安藤対馬守と久世大和守に面晤(めんご)され、廃帝企画を訊問(じんもん)

されたそうだ」

「それで、久世大和守と安藤対馬守は」

「草葬(そうもう)激徒が捏造(ねつぞう)したもので、幕府老吏(ろうり)は夢にも知らぬものと申された」

「言逃れではありませんか。久世大和守と安藤対馬守は、狂言の稽古(けいこ)でもして居ったではありませんか。岩公も岩公です。安藤対馬守など相手にされて」

「狂言などと申すものではないのだ。幕府には直弼(なおすけ)殿大老就任時より、様々な嫌疑を被り、噂が絶えなかった。風輦(れん)を海中の孤島に遷(うつ)し奉るとか、主上を伊勢に遷(うつ)し両大神宮の祭主と為し奉るとか。

噂の中で、直弼(なおすけ)殿が胆を冷やしたのはこれだ。井伊大老は九条閑白と同腹(どうふく)にて、主上を仙洞御所(せんとうごしよ)に移し奉り、祐宮(さちのみや)様を擁護して新帝と仰ぎ奉り、閑白を以て摂政と為し、外国条約一件は幕府が意の如く取計らうと」

「火のない所に煙は立たぬものです」

私は勝ち誇ったように言った。

「まあ、そういう事だ」

川原は何時もの含み笑いをした。

「そういう事とは、どういう事ですか」

「噂通りになつては、大変だからな。主膳(しゅぜん)殿が井伊大老を諫め、京都所司代の酒井忠義(さかいただあき)殿に迫られたという事だ」

「どのように」

「鷹司(たかつかさ)近衛(このえ)両氏の内意を承けた梅田源二郎が、関白大老同腹(どうふく)にて反逆を謀るとの説をとばして居る。その証拠を示さんと八月五日に匿名(とくめい)の謗書(ぼうしょ)を堂上(どうじょう)方の邸内に投じた」と

「松陰先生御所(ごしよ)落文(おとしぶみ)の件ですか」

「そうだ」

「あれは、梅田先生の取調を幕吏が捏造(ねつぞう)した事なのです。松陰先生は、落文など書かれて居られないのです。松陰先生は、匿名(とくめい)で事を行おうなどと、卑怯(ひきょう)な事をされる方ではないのです」

「そういう事ではないのだ」

川原は首を振った。

「それでは、どういう事なのですか」

「あれは、主膳(しゅぜん)が捏造(ねつぞう)したものです。安政の大獄で捕らえられた雲浜殿と門弟が、それを見て、寅が書いたものに似ていると言ったとか」

「やはり、松陰先生です。松陰先生が落文(おとしぶみ)などと、姑息(こそく)な手段を使われる筈がないのです。それで、酒井若狭守(わかさのかみ)は、どうしたと申されるのですか」

「主膳(しゅぜん)殿に迫られるも、雲浜(うんびん)殿に手を下される事には、躊躇(ちゅうちよ)された」

「何故に」

「雲浜(うんびん)殿を捕らわば、鷹司(たかつかさ)近衛(このえ)両卿の情を害し、公武の間のみならず、堂上(どうじょう)方の間にも不和を招く事になるからだ」

「酒井若狭守（わかさのかみ）は小浜（おばま）藩主なれば、累（るい）が及ぶのを恐れただけではありませぬか」
私は川原に反論を試みた。

「そのような事ではないのだ」

「それでは、何故に」

「小浜（おばま）藩は若狭国なれば、北条得宗家（とくそうけ）の支配が及びし土地柄」

「それがどうして、堂上（どうじょう）方（かた）の間に不和を招く事になるのでしょうか」

「五摂家（せつけ）の一つである九条家の祖は、九条兼実（くじょう かねざね）卿。後白河法皇と不和があつた兼実（かねざね）卿は、頼朝公の力で摂政関白となり、その後、摂関職は近衛家と九条家から出される事となつたのだ」

「堂上（どうじょう）方（かた）にも内証（ないしょう）があつたと申されるのですか」

「鎌倉幕府の時からの話だ。頼朝公の力で摂政関白となつた九条兼実（くじょう かねざね）卿も、頼朝公が娘様の大姫様を後鳥羽天皇の後宮に入れんとして、関白の地位を追わたが、頼朝公死後、九条家は復権して、兼実（かねざね）卿のご子息の良経（よしつね）卿が、土御門天皇（つちみかどてんのう）の摂政となられたのだ。九条家と北条得宗家（とくそうけ）のご関係は、ご存じの事」

「摂家将軍（せつけしょうぐん）の件でしうか」

「そうだ。兼実（かねざね）卿の孫の道家（みちいえ）卿の時、三代将軍源実朝（みなもとの さねとも）公が暗殺され源氏の血が絶えると、執権の北条義時（ほうじょう よしとき）が、道家卿のご息子の頼経（よりつね）卿を摂家将軍（せつけしょうぐん）にされたのだ」

「それでは何故に、鷹司（たかつかさ）家が」

「これも鎌倉時代の話。寛元(かんげん)四年の宮騒動(みやそうどう)にて、執権北条時頼(ほうじょうときより)は撰家将軍(せんけしやうぐん)の頼経(よりつね)卿の職を廃し、近衛家より鷹司家を興し、九条家に対抗させたのだ。

兎も角、京都所司代の酒井若狭守は梅田雲浜(うめだ うんびん)殿に手を下されなかつたのだ。京都の町奉行も、関東より近衛卿と親しい者を召捕つては、如何(いか)なる大変となるやと反対されたのだ」

「それでは何故に、梅田先生は捕らえられたのですか」

「間部詮勝(まなべ あきかつ)殿が上京する前に、長野主膳(しゆぜん)殿が伏見奉行・内藤豊後守(ぶんごのかみ)正繩(まさつな)殿に迫つての事だ。事態は切迫していた」

「事態は切迫していたとは、何が起きたというのでしょうか」

「安政五年八月五日、貴藩の甲谷岩熊殿が密書を携えて、京から萩(向かわれた)のだ。正親町三条(おおぎまちさんじょう)中納言(ちゆうなごん)実愛(さねなる)卿が、御所の非蔵人(くろうど)口より召し入れられ、中山大納言(だいなごん)列座の上、授けられたものだ」

「それは、どのような密書だったのですか」

「十一月上旬までの間に、国内擾乱(じようらん)の兆(きざし)ありとの密書だ。甲谷殿は萩に戻られ、家老の益田殿に内謁(ないえつ)されると、益田殿より慶親(よしちか)公にその旨を申し上げられた。密書には、忠勇の人ありと書かれてあったのだ」

「君公の事を申されるのですか」

「斉彬(なりあきら)殿は、深謀遠慮(しんぼうえんりよ)を巡らして居られたのだ。その密書には、事を他事に託し、密(ひそ)かに衆を撰州(せんしゅう)の辺りに潜居せしめ、万一急変あるの節、機に応じて内裡(ないり)を守護し、叡

慮(えいりよ)を安んじ奉れば、誠に天下の忠臣なりと書かれてあつたのだ」

「斉彬(なりあきら)殿は、亡くなられて居られたのでは」

「そうだ」

「君公が、斉彬(なりあきら)殿のお代わりになられたと申されますか」

「そうだ。それで、貴藩は周布政之助(すふ まさのすけ)殿を使者として、京に遣わす事になった。周布(すふ)殿が京に赴かんとするその時に、京藩邸から右大臣の鷹司輔熙(たかつかさ すけひろ)卿の密書を携えた急飛脚(はやびきやく)が到来したそうだ。

密書には、水戸家に下された勅諭(ちよくじょう)の写しが添えてあつたそうだ。周布(すふ)殿は、慶親殿より新たに訓令を受けて京に赴かれ、鷹司(たかつかさ)右大臣と正親町三条(おおぎまちさんじょう)中納言(ちゅうなごん)に謁し、情勢を探られた。安政五年十月、周布殿が京より戻られると、慶親(よしちか)殿は勤王志業の端緒を開かんとされたのだ」

「端緒」

「安政五年九月水戸藩に下された勅諭(ちよくじょう)は、幕府改革を促したるものと前にお話した通り。慶親(よしちか)殿は、江戸の参勤の途上、伏見にて青蓮院宮(しょうれんいんのみや)、近衛忠熙(このえただひろ)卿、三条実万(さんじょう さねつむ)卿に令旨を仰ぎ、幕府改革に出馬せんとされたのだ。

周布(すふ)殿が上京された九月は、将(まさ)に安政の大獄が始まらんとして居った。九月七日には、梅田雲浜(うめだ うんぴん)殿が捕らえられる。その五日前には、梁川星巖(やながわ せいがん)殿がコレラで亡くなられて居られた。間部(まなべ)殿が入京した翌日の十八日には、西町奉行が水戸藩留守居役の鵜飼吉左衛門(うがい きちざえ

もん)父子を召喚した。

堂上(どうじょう)にては、間部上京、暴政行われるとの風説に、間部(まなべ)襲撃するか、有志の武力を以て彦根城を陥(おとし)れるかとの非常の論もあつたが、次第に軟化されていかれた」

「何故に」

「そこは堂上(どうじょう)の方々、幕府に近い九条家との同士討ちを恐れられたのだ。近衛忠熙(このえただひろ)卿は斎彬(なりあきら)殿亡き故に、間部(まなべ)上京につき、一応事情承(うけたまわ)るとの論になられた。強硬論は右大臣鷹司輔熙(たかつかさ すけひろ)卿のみにて、三条実万(さんじょう さねつむ)卿は定意清論にて押し通すお覚悟であられた」

「清論」

「実万(さねつむ)卿は堀田殿の条約勅許の事に先立ち、朝廷にご清論を建白をされて居られたのだ。『大樹(たいじゆ)も寛永(かんえい)以前の先蹤(せんしょう)を履(ふ)み、軽装上洛(じょうらく)し、異国処置の朝議に参与せば、朝廷と柳営(りゅうえい)の間に於て猜疑(さいぎ)を起すが如き患(わざわい)なきのみならず、君臣一致公武合同を諸侯衆民に知らしめんと』。同士討ちを恐れられたのは、何も実万(さねつむ)卿だけではない」

「どういう事なんでしょうか」

「越前鯖江(さばえ)藩主の間部詮勝(まなべあきかつ)殿は、江戸にて梁川星巖(やながわせいがん)殿から詩作の手解きを受けて居られたのだ。星巖(せいがん)殿は間部殿上京の報に接し、二十五篇の詩を作り、大津に出でて、压制の策に出ぬよう諭されようとされたのだ」

「梁川(やながわ)先生が、間部下総と」

「そうだ」

私は困惑を隠しきれなかった。

「それで、梁川（やながわ）先生は、大津にお出になられたのですか」

「その前に、長野主膳（しゅぜん）殿が機先を制してしまわれた。間部（まなべ）殿に圧制の策を迫られたのだ。梁川星巖（やながわせいがん）、草野の一詩人なれども、国家安危の時に当りては、黙止するを得ずと。正論にては、幕府が滅び兼ねない。幕政改革など論じている時ではないと。主膳殿が、『漫言作るは、自ら大罪の逃がるべからざる』と申されたのも、自戒を込めての事」

「それで、君公が幕政改革にご出馬されたと申されますか」

「貴藩は山県半蔵（やまがたはんぞう）殿を伏見に遣わし、四藩合従（がっししょう）の事を探索させると、その策は四藩政府の与り知らぬ事となつて居った。逆に尾・水・越・薩の藩士が、盛んに長州に援を求めに来た。寅は何としても、幕政改革に出馬せんとする慶親（よしちか）公の参府を阻止したかった。寅は同志十七名と血盟し、間部殿を刺さんとする。周布政之助（すふまさのすけ）殿が、百万言を設けて阻止せんとするも、寅は聞かぬ。それで、長州藩は安政五年十一月二十九日、実家の杉家に寅の厳囚を命じ、長州藩に向けられた間部殿要撃（ようげき）の嫌疑を晴らすため、長井殿を江戸に遣わしたのだ。」

安政六年正月には、梅田雲浜（うめだうんびん）殿の門弟の大高又次郎（おおたかまたじろう）殿と平島武次郎（ひらしまたけじろう）殿が、伏見義拳の決行を促しに要路の者に会わんとし、萩に来られた」

「義拳」

「播磨（はりま）林田藩士・大高又次郎（おおたかまたじろう）は、赤穂四十七士の子孫。平島武次郎（ひらしまた

けじろう)は、備中の浪人。伏見は天明(てんめい)の時、伏見奉行・小堀政方(こぼりまさかた)の悪政に憤った伏見元町年寄(としより)で鍛冶屋(かじや)の文殊九助(もんじゅくすけ)を始めとして、麴屋(こうじや)の麴屋伝兵衛(こうじやでんべえ)、薪炭屋(しんたんや)の柴屋伊兵衛(しばやいへえ)、塩屋の伏見屋清左衛門(ふしみやせいざえもん)、深草焼(ふかくさやき)の焼塩屋権兵衛(やきしおやごんべえ)、百姓の丸屋九兵衛(まるやくへえ)、材木屋の板屋市右衛門(いたやいちえもん)の七名が江戸に赴き、幕府に直訴を行い、見事義拳を遂げし者達が住まいし土地。

あの時、寅は藩に兩人の志は志と聞き、伏見の計画は断るがよいと意見したのだ」

「そのような嘘を申されては困ります。松陰先生は、赤根先生を遣わし、梅田先生が投ぜられた伏見獄を破らんとされたのです」

私は声を荒げた。

「それは、慶親(よしちか)公参府を阻止せんがための奇策。また寅が、入江兄弟に伏見要駕(ふしみようが)の策を授けたのも、慶親(よしちか)公参府を阻止せんがためだ」

「そのような事が、あるものなのでしょうか」

「開国派の岩倉殿と攘夷派の大原殿とは、伏見要駕(ふしみようが)の策でお考えが違われたのだ。慶親(よしちか)殿は、岩倉殿に与(くみ)されたのだ。その後も慶親(よしちか)殿は長井殿を遣わし、幕政改革の事に邁進されたのだ。文久元年六月には、公儀人・三井善右衛門(ぜんえもん)を早川庄次郎殿のお宅に遣わした」

「早川殿？」

「奥祐筆(おくゆうひつ)組頭で、貴藩の御頼入をされて居られた方だ。長井殿は早川殿の周旋(しゅうせん)に依り、

老中方に「面晤（めんご）を請うたのだが、中々叶わぬ」

「何故にですか」

「安藤対馬守（つしまのかみ）と久世（くぜ）大和守（やまとのかみ）の折り合いが付かなかったのだ」

「折り合い」

「安藤殿は対馬守で、久世殿が大和守という事だ。皇室の御国体（ごこくたい）の事で揉（も）めていては、幕政改革が滞る。久世大和守は長井雅楽（ながい うた）殿に会われ、直（じか）に安藤対馬守に面晤（めんご）して演説されるよう申されたのだ」

「それで、安藤対馬守は」

「雅楽（うた）殿の建言を聞かれ、時艱（じかん）救済の策は、この外に求むべからずと申されたそうだ」

「それで、御国体（ごこくたい）の事は」

「安藤対馬守は聡明な方。孤高なる事、慶喜（よしのぶ）公も及ばぬ」

「ならば、誓書の話は嘘ではありませんか」

「嘘ではない。幕府にても、安藤対馬守の論は奥向きの話。対馬守は折り合いを付けられたのだ。それで、岩倉殿は廃帝企画なき事を認（したた）めた誓書を、久世安藤殿ら四老中から取り付けられただけでなく、將軍家ご自筆のものも京へ持ち帰えられたのだ。文久元年十二月京に戻られた岩倉殿が、誓書を御前に上られると、御上（おかみ）は大樹（たいじゆ）が自書たること疑いなしとおっしゃられたとの事。その岩倉殿も、翌年に久光（ひさみつ）殿が上洛（じょうらく）されると、朝廷でのお立場を怪しくされた」

「どういう事でしょうか。幕府から誓書を取り付けられた岩公が、お立場を怪しくされたとは」

「御上（おかみ）から勅を賜り、久光（ひさみつ）殿の応接にあたるようにと仰せ付けられたのだが、辞退されたのだ」
「岩倉公は何故に」

「員外の身ゆえ、公然と廷議（ていぎ）に参与せば、他の誹謗（ひぼう）を招くと申されたのは、表向きの事。実は岩倉殿は、久光殿を信用されて居られてなかったのだ。折しも、近衛家も御国体（ごこくたい）の事で、その論を変えられて居られた」

「近衛家が」

「そうだ。文久二年七月に近衛忠熙（このえただひろ）卿が閑白（かんぱく）になられたが、忠熙卿は、綾小路有長（あやのこうじ）ありなが）卿と東久世通禧（ひがしくぜみちとみ）卿を宮中に召されたなかで、岩倉殿に蟄居（ちつきよ）をお命じになられたのだ。

忠熙（ただひろ）卿は、安政三年に斉彬（なりあきら）殿の計らいで島津今和泉（いまいずみ）領主・島津忠剛（しまづただたけ）の娘様の篤姫（あつひめ）様を養女とされ、慶喜（よしのぶ）公の將軍継嗣問題（しょうぐんけいしもんだい）に尽力された方であられたのだが、何分ご正室は郁姫（いくひめ）様。郁姫（いくひめ）様のお父上は九代藩主・島津斉宣（しまづなりのおぶ）殿で、兄上は十代藩主の斉興（なりおき）殿。郁姫（いくひめ）様は斉興（なりおき）殿の側室のお由羅（ゆら）の方に養育され方だ。

お分かりかな。その後、岩倉殿が洛北（らくほく）の地・岩倉村に幽閉の身となられた事は存じておろうが、お咎（とが）めの理由は、安政五年戊午（つちのえうま）以来の公武御間（おあいだ）の取扱い振りに付、酒井若狭守の奸謀（かんぼう）（かんぼう）に与（くみ）し、主上の英明を汚し奉るといふものであった」

「岩倉公が、酒井若狭守の奸謀（かんぼう）に与（くみ）していたとは残念です」

「奸謀(かんぼう)などと申すものではない。井伊大老が間部殿を入京させ、町奉行に命じて朝野の志士を逮捕し親王大臣を威嚇(いかく)せんとする。岩倉殿は、京都所司代(しよしだい)の酒井若狭守をして間部殿が暴挙を行うのを諫(いさ)めんとされたのだ。

だが、久光殿上洛(じょうらく)を機に、岩倉殿も攘夷勢力を抑えきれなくなった。京都大坂の間に浪人が集結し、九条閑白と酒井若狭守を襲撃せんとする。岩倉殿は酒井若狭守と諮られ、久光殿に浪士の処分せしむる事にしたが、その久光殿も、大原勅使(ちよくし)東下からの帰路、従者が武州(ぶしゅう)生麦(なまむぎ)村で英人を殺傷する。諸卿も真の叡慮(えいりよ)が攘夷であらせられることを天下にしらしめんとする。近衛忠熙(このえただひろ)卿も意中おだやかでなくなり、文久三年三月、率然と閑白の職を辞されてしまわれた。

前右大臣鷹司輔熙(たかつかさ すけひろ)卿が閑白となると、正親町実徳(おおぎまちさねあつ)卿、三条西季知(さんじょうにし すえとも)卿、橋本実麗(はしもと さねあきら)卿、豊岡随資(とよおか あやすけ)卿、東園基敬(ひがしそのもとゆき)朝臣、滋野井実在(しげのい さねあり)朝臣、姉小路公知(あねがこうじ きんとも)朝臣、壬生基修(みぶもとおさ)朝臣、正親町公董(おおぎまち きんただ)朝臣、石山基文(いしやまもとふみ)朝臣、錦小路頼徳(にしきのこうじ よりのり)、沢宣嘉(さわのぶよし)の十二名が参朝して鷹司(たかつかさ)閑白に攘夷を迫る。勅使(ちよくし)となられ東下された実美(さねとみ)殿の声望は俄(にわ)かに高まるも、その内実は危ないものであったのだ」

「危ない」

「実美(さねとみ)殿は、文久三年正月上洛された慶喜(よしのぶ)公のご旅館を訪れ、速やかに攘夷期限を定むべしと迫られたが、容堂(ようどう)殿には浪士強迫の内情を訴えて居られた」

「そのような事が、あるものなのでしょいか。条公は『今の江戸は昔の武蔵野なれば、武蔵は野となるも妨げなし』とおっしゃったと聞いて居ります。条公は尊皇倒幕の急先鋒なれば、それは容堂(ようどう)侯のお話では」

私は疑念の声を上げた。

「三条家と山内家とはご姻戚(いんせき)。実美殿のご生母は、山内豊策(やまうち とよかず)殿の娘・紀子様。容堂殿の夫人は、実万(さねつむ)殿の養女・正姫様だ。容堂殿の作り話などではない。毛利家も山内家と姻戚(いんせき)ではなかったのではないのか」

「確かに慶親(よしちか)公の養女・喜久姫様と山内豊範(やまうち とよのり)殿とは、文久二年十二月、婚礼に及んで居りますが、その後、我が藩と土佐藩がうまく行かなくなったのも、容堂(ようどう)侯が我が藩の尊皇攘夷をちらかしになさりましたからです。容堂侯は、『長州の政府はこんなものだ』と瓢箪(ひょうたん)を逆さまにした絵を描かれたそうです」

「容堂(ようどう)殿は、長州藩士の攘夷を憂えたのだ。容堂殿の佐幕(さばく)は誰もが認める所なれど、容堂殿の佐幕は皇国を思っている事」

「それは、少し大袈裟(おおげさ)のおおげさの物言いではありませんか」

「大袈裟な事はない。安政五年八月、水戸藩士・鶴飼吉左衛門(うがい きちざえもん)・幸吉(こうきち)父子が京より携えし水戸藩への勅諭(ちよくじょう)が、諸卿諸侯へ回達されしは、容堂殿のご尽力。当時、土佐藩の重責を担う者に吉田東洋(よしだ とうよう)あれども、吉田東洋は長宗我部元親(ちようそかべ もとちか)の末裔。安政の時は、土佐藩の中には国政の大改革を担う人材は育って居らなかったが、此度(こたび)は違う」

「どう違うと申されますか」

「後藤象二郎(ごとう しょうじろう)、福岡孝弟(ふくおか たかちか)といった長浜村にて吉田東洋の鶴田塾で学びし新おこぜ組の面々が力をつけて居ったのだ。容堂殿は後藤と福岡を板倉老中のもとに遣わし、建白書を提出させたが、その建白書の基になったものは、後藤が薩摩と盟約したものと龍馬が考え出した『船中八策(せんちゅうはつさく)』というものであったのだ。」

大政奉還(たいせいほうかん)に関しては、その方策と内容に土佐藩にも議論があった。『四海の間に安からずば、その罪將軍の負うところ。叡慮(えいりよ)は天道のままにめぐらせ給わん』。家康公の自負された所だ。帝(みかど)が直(じか)に政治を行うは、徳川家の容れる所ではない。然(しか)らば、どうなる。王制復古だ。王政復古ではない。古郡県制が復古されるのだ。古郡県制が復古され、諸侯(しよこう)会議が開かれ、慶喜公が諸侯(しよこう)会議を主宰され、政柄(せいへい)を執られるが賢明(けんめい)というものではないのか」

「まさか、川原殿は坂本先生が諸侯(しよこう)会議の主宰者に前將軍を推していたなどと申されるのですか」

「そのまさかだ。龍馬は慶喜公が容堂殿の建白書を受納された事を聞き、『よくも断じ給へるものかな』と感涙した。この人のためなら生命を捧げるも惜(お)しからずと」

「それでは、坂本先生に手を下したのは薩摩ではありませぬか」

「容堂殿も心配されて居られた。板垣が、中岡の仲介で西郷大久保と倒幕の密約を結んで居ったから。事があらぬ方に進むと、皇国そのものが立ち行かなくなる」

「それでは、板垣先生が坂本先生を殺(あや)めたと申されるのですか」

「それは、あり得ぬ事。板垣は吉田東洋の鶴田塾で学びし者」

「それでは、あらぬ方とは」

「板垣退助(いたがきたいすけ)の旧姓は乾(いぬい)。その乾氏は甲斐(かい)武田氏の臣なるも、武田氏滅亡後、山内一豊(やまうちかつとよ)に召抱えられたのだ」

「それが何か」

「その乾が、土佐藩兵を率いた戊辰戦争(ぼしんせんそう)では、甲斐源氏の流れを汲む板垣氏の後裔(こうえい)であるとし、板垣氏を名乗ったのだ。板垣氏は、清和天皇の苗裔(びょうえい)にして、新羅三郎義光(しんら さぶろう よしみつ)の後胤(こういん)」

「それがあらぬ方と申されますか」

「そうだ。容堂殿は、ご心配されて居られたが、事無きを得た」

「何をですか」

「勤王の事だ。板垣は日光攻めに際し、日光東照宮に立て籠もる大鳥圭介(おとり けいすけ)らを焼き討ちせんとする薩摩藩を諫(いさ)め、日光山を戦火から守ったのだ」

「それでは、容堂侯は薩摩を心配されたと申されますか」

「それにしても薩摩も芝居がうまい。慶喜公が大政を奉還されると、薩摩は京都御所(ごしよ)小御所(ごごしよ)で大立回りを演じた。西郷大久保は、慶喜公を政権に参与せしめんとする容堂殿に短刀をちらつかせたのだ。

慶喜公は、安政からの志を遂げる好機とお考えになられて居られたのだ。大政奉還を機に、上院に公卿諸大名を、下院に諸藩士を選び、公論によつて政(まつりごと)を行えば、日本も行く末、西洋のような郡県制になると信じて居られた。幕臣からは夢のような話と笑われたが」

「確かに夢のような話です」

「会津藩でも、大政奉還の事に反対せぬ者でも、懸念をして居った。手代木直右衛門(てしろぎ すぐえもん)殿などは、大政奉還された所で、公議の見通しなく、外国のような議事院になるか疑問だと。人材登用の事も名分はよいが、交易事務に慣れぬ者では役にたたないと。」

朝幕ともに有力者は下にある。慶喜公は、その下にある者の論によって百事公論に決せば、今の難局は打開できるものと考えて居られた。祖宗(そそう)三百年の政権を奉還する際も、譜代大名以下旗本を召して衆議を尽くそうとされたが、紛擾(ふんじょう)を招き兼ねない。それで後藤、福岡、小松を始めとする諸藩の重役を召し、大政奉還(たいせいほうかん)の事を伝えたのだ。慶喜公に何の罪があるというのだ」

川原は私を挑発するかのように行った。

「ご不満のですか」

「何の不満があろう。慶喜公は、王制復古(おうせいふく)の御沙汰(ごさた)で旧職が廃せられるのは当然の事と、別段驚きを示されなかった。内大臣辞職の事も然(さ)したる事ではなかった。ただ、二百万石上納の事は、慶喜公お一人では如何(いかん)ともし難い事であった。」

慶喜公は従来幕府に多くの失政はあったものの、臣道において不忠無道を行った覚えはない。改革に反対しているのではない。そのやり方が問題なのだ。公議を待たず、武力をちらつかせ、不同意ならば、兵を挙げて討伐しようという

「川原殿は、やはり薩長の所業(しょぎょう)を恨まれて居られる」

「恨んでなど居らぬ。ここで妥協すれば、大変革も水泡(すいぼう)に帰す。慶喜公に辞官納地(じかん)の事だ。西郷は薩

摩藩士を江戸に忍ばせて、火付け強盗を行わせた。これには慶喜公も海舟殿も激怒した。会津桑名その他諸藩兵の激昂はいうまでもない。それで薩摩の君側の奸(くんそくのかん)を除くべく、討薩表を掲げ幕府歩兵隊・会津藩兵・桑名藩兵が京に向かったのだ」

「それでは、前將軍は何故に、あの戦のさなか大坂を離れ江戸へ戻ったのですか」

「兵法のいろはだ。」

『彼を知り己を知れば、百戦して殆(あや)うからず。彼を知らずして己を知れば、一勝一負(いつししょういっふ)す。彼を知らず己を知らざれば、戦う毎に必ず敗る』

今の幕府では、とても共和政治など行えるものではない。慶喜公は大坂城中にあつて嘆息して居られた。老中首座の板倉勝静(いたくらかつきよ)殿は、慶喜公と刺し違えんとする者たちに負け、慶喜公に出陣の許しを請うたが、慶喜公は読みさしの孫子を指し、兵法のなんたるかを説かれた。今、幕府に西郷吉之助(さいごうきちのすけ)に匹敵すべき人物ありや。大久保一蔵(おおくぼいちぞう)ほどの者ありやと」

「前將軍がですか」

「そうだ。慶喜公は吉井以下薩摩藩士の名を挙げ、これらの人に拮抗する者が幕府にあるかを尋ねられた」

「板倉は何と」

「答える事が出来なかつた。それで慶喜公は、このような有様では朝敵の汚名を被るのが関の山だから、決して我より戦を挑むなど戒められた」

「それでは何故に、会津桑名の藩兵は出陣したのですか」

「死に場所を与えたのだ」

「そのような事がありましようか。私はその時、官軍の陣中に居りました。幕軍一万五千に対し官軍は僅か五千。官軍が勝利した事は、今でも不思議な事です。淀城など戦わずして開城されたのですから」

「稲葉美濃守(みののかみ)の事だ、皇室を思っている事。大政奉還の報が、江戸に齎(もた)らされた時だ。江戸城で大評定が開かれた。老中の稲葉美濃守は、意見を具申された」

「どのような」

「將軍家上表勅許(ちよつきよ)を得ば、即日より公家・武家・外藩(がいはん)・親藩(しんぱん)等の名義を廃し、將軍家は摂関家を兼ねよと」

「將軍家が摂関家を兼ねるとは、どういう事でしょうか。それは將軍家が実権を握る口実ではありませぬか」

私は苛立(いらだ)ちを押さえきれなくなったが、川原は平然としていた。

「そのように申すな。美濃守(みののかみ)は上下の議事院を開き、衆議公論によりて国是(こくぜ)を定めるように申されたのだ」

「信じ難い話です」

「信じ難いのは、幕臣として同じ事だ。慶喜公は奸藩(かんはん)の所為は内幕の事、顕然と朝廷に列(つらね)り、天子を擁し号令いたすと申された。元治(げんじ)元年、貴藩の兵隊が歎願(たんがん)と称して禁中に押し寄せた時もそうだ。慶喜公が鷹司(たかつかさ)邸に破裂弾を打ち、焼き払われたのも、禁裏(きんり)守護の諸藩に貴藩の来島又兵衛(きじま またべえ)殿に心を寄せるものがなかったからだ」

「川原殿は、何を申されて居られるのですか」

「来島(きじま)殿の遊撃隊にては、嗟峨(さが)辺りの人望もよく、天竜寺(てんりゅうじ)脇の太秦(うずまさ)に幕

府の者百人ばかり出張せしも、差し障りなく、来島(きじま)殿は歎願(たんがん)書を慶喜公に差し出す事が出来たのだ。残念な事に、松平容保(まつだいら)殿にはご決断(けつだん)がなかった」

「ご決断」

「松平容保(まつだいら)殿には、佐久間象山(さくま)殿が策を薦めて居られた。比叡山立ち退きと称して彦根還幸(かんこう)をと。容保(かたもり)殿にも、御上(おかみ)にも、そのご決断(けつだん)があらせなかった。容保(かたもり)殿は、来島(きじま)隊が嵯峨の天竜寺に入るを聞き、白鉢巻(はちまき)にて参内されたのだ。加えて残念な事は、長州藩だ」

「長州藩の何が、残念と申されますか」

「真木和泉(まき いずみ)や久坂玄瑞(くさか げんずい)ら山崎隊が、歎願(たんがん)と称して遣つて来た事だ。淀(よど)城主・稲葉正邦(いなば まさくに)殿に嘆願書の取次ぎを依頼するも、慶喜公は貴藩の京藩邸留守居役(るすいやく)・乃美織江(のみ おりえ)殿を召し諭して居られたのだ」

「何をです」

『長藩(ながはん)久しく勤王を以て天下に著(あら)はる。何ぞ兵を挟み上を要する』と。もし、あの時、長州兵が鷹司(たかつかさ)邸に突入せんとする浪士隊を迎撃(げいげき)して居れば」

「何を申されて居られるのですか」

「慶喜公は、原市之進(はら いちのしん)殿におつしやられたのだ。『長人悔悟(かいご)して自ら退かば、芋(いも)の奸策(かんさく)行(な)う所なし。さもなくば薩人(さつじん)いよいよ愉快を叫びて相(あい)慶(けい)するに至らん。さるにても術中に陥(おちい)れる長人の愚(おろ)は、憐(あわれ)むに堪(こた)えたり』と。」

もしあの時、浪士隊の為すが儘(まま)にして置いたら、長州方に天子を奪い奉らんとすの計略が起きかねなかつたのだ。それで止むを得ず、御所内より会津藩士・山本覚馬(やまもと かくま)等が大小砲を打ち出し、慶喜公が殿前の大庭に胡床(こしょう)を据え戦の指揮を執られたのだ。

久坂玄瑞(くさか げんずい)も真木和泉(まき いずみ)などと行動を共にせず自重して居れば、貴殿に代わつて此処(ここ)に居つたやもしれぬ。真木和泉(まき いずみ)、尊皇攘夷を唱え、嘉永(かえい)五年より文久(ぶんきゅう)二年に及ぶまで、久留米藩により幽囚(ゆうしゅう)されし者。久坂玄瑞(くさか げんずい)、学なき男ではあるまい。久留米藩主・有馬頼永(ありま よりとう)殿、見事なご仁政。民家相会し尊位をもうけ、酒食を献じて万歳を祝つて居られたのだ」

「何を申されたいのですか」

「有馬氏、国主大名の格式といえども、譜代恩顧の親臣(しんしん)。頼永(よりとう)殿は幼くして、異母弟の石州(せきしゅう)津和野藩主・亀井茲監(かめい これみ)殿と佐藤一斎(さと ういっさい)に師事されたのだ。佐藤一斎は、あの林述斎(はやし じゅっさい)が後を託した人物。長州藩も津和野藩と共に、一新の治を行い、民間富有(ふゆう)に努めて居つたのだ。今や天地を經綸(けいりん)し宇宙を總統する者、唯(ただ)名義のみなれど、一日之(これ)を廢すれば、天地傾倒(ばんせい)塗炭(とたん)に落ちるは言を待たず事」

川原はそう言うのと、何事かを言わんとしたが、躊躇(ちゅうちよ)した。

「川原殿は、何を申されたいのですか」

「戊辰(ぼしん)戦争の時、幕府に檄文(げきぶん)があつたのだ」

「どのような」

「戊辰(ぼしん)の役(えき)は、保元(ほうげん)の役(えき)だと」

「保元(ほうげん)の役」

「過ちは保元(ほうげん)の役に始まるものだ」

「過ち」

「王法仏法の対立は、保元の役に始まったものだ。後白河帝は源義朝(みなもと)のよしとを詔(しよう)して父を弑(しい)せしめ、大義名分(たいぎめいぶん)を廃されたのだ」

「後白河帝が、過ちを冒(おか)されたと申されるのですか」

「戊辰(ぼしん)戦争にては、幕府にあつて慶喜(よしのぶ)公を討たんとする者、因州(いんしゅう)備前(びぜん)に彦根藩との声があつた。因幡国(いなば)のくに鳥取藩主・池田慶徳(いけだ よしのり)殿は、慶喜(よしのぶ)公の兄上。備前国(びぜん)のくに岡山藩主・池田茂政(いけだ もちまさ)殿は弟君。慶喜公は、元治(げんじ)甲子の時、長州兵が堺町御門を攻めんとするに及び、日の門外に会津の手代木直右衛門(てしろぎ)すぐえもん殿を麾(さしまね)き申された。『因備二藩は余が兄弟なれど、その心測るべからざれば十分の注意を要す。殊(こと)に天皇ご動座の事もあらば大事にいたらん。肥後守(ひごのかみ)と共によく守護し奉(たてまつ)れ』と」

「川原殿は、前將軍の敵は薩長にあらずとも申されたいのですか」

「そうだ。家茂(いえもち)公征長の際に、講武所(こうぶしよ)隊、白地の陣羽織(じんばおり)の背に日の丸を織り込んだのも、また、戊辰(ぼしん)正月、幕府砲兵、小石川門より出でるに、白地に日の丸の大旗を立てたのも、慶喜(よしのぶ)公に名分一日も蔑(ないがし)ろにせんとする志があられたからだ。」

だが、このお考えに危惧する者があつた。因州(いんしゅう)備前(びぜん)だけではない。水戸藩にても紀州藩に、皇

室のご安泰のためにも、幕威を回復したほうがよいのではないかと申し入れた程だ」

「水戸藩が、そのような事を」

「水戸藩だけでない。一橋家もそうだ」

「一橋家が」

「そうだ。その昔、寅が『紀伊に党する者は皆邪人（じゃにん）なり。一橋を援くる者は皆忠臣なり』と言ったのも、その意だ」

「それでは、前將軍は何故に。心変わりされたと申されるのですか」

「皇国のためだ。海舟（かいしゅう）殿の話では、西軍を破る事は雑作（ぞうさ）のない事であったと。軍艦もあり、大坂の制海権も握って居ったからな」

「それでは、何故に」

「西軍が幼帝を擁し長州に落ち延びはしまいかと心配して居ったのだ」

「それは、長州の秘策です。倒幕の密勅（みっちよく）が降る直前、大久保大山巖両先生が伊藤先生の案内で山口に入り、君公父子に面謁（めんえつ）され、兵力を以て事に臨む事を誓われました。その際、木戸先生が大久保先生に問われました」

「何をだ」

川原は強い口調で言った。

「大挙の日に至り鳳輦（ほうれん）を他国に奉（たてまつ）る事とならば、何処（どこ）にと」

「大久保は何と申した」

「先ず、浪華(なにわ)城を以て適地と」

「それで木戸は」

「幕府が外夷の力を借り摂海(せっかい)より抵抗せば、一時僻遠(へきえん)の地にと提案されました」

「大久保は同意したのか」

「いいえ。然(しか)る場合は、勤皇諸藩の中で最も地の利を得たる所に鳳輦(ほうれん)を奉(ほう)ずるとお答えになつたそうです」

「その勤王諸藩の中、最も地の利を得たる所とは、何処(どこ)か」

「分かりません」

「木戸は貴殿に話して居らぬのか」

「大久保先生のお考えは、聞いて居りません。木戸先生は、それ以上の事はお話になられませんでした。諸先生の胸中にある事ゆえ、私のような者の考えに及ぶ所ではありません。木戸先生も大久保先生も、前將軍が大坂城に籠城(ろうじょう)するのでないかと、只々(ただただ)心配して居られたそうです」

「そのような愚かな事、慶喜公はなされない。海舟(かいしゅう)殿も同じ考えだ。戦鬪が長引いて幕府が外債を募るような事になれば、日本も危うくなる。まあ、鳥羽伏見の事は、西軍の不戦勝というところだ。江戸では、戦鬪は少々の行き違いから起きた事、然(さ)したる事はないと樂觀して居った。剽軽者(ひょうけいもの)の福沢は、城中に出かけて様子を見に行つたよ」

「江戸城内は、どのような様子でありましたか」

「東照宮(とうしょうぐう)三百年の洪業(こうぎょう)を一朝に捨てるとはと憤る者が、賊軍(ぞくぐん)を箱根で皆

殺しにするとか言つて、息巻いて居つたそうだ」

「それで福沢先生は」

「袴(かみしも)を着て慶喜公にお目見得(めみえ)する加藤弘蔵(かとう こうぞう)を捕まえ、和戦の如何(いかん)を聞きだそうとした」

「それで、加藤先生は」

「馬鹿々々(ばかばか)しいと相手にされなかつたのだ」

「馬鹿々々(ばかばか)しいとは、どういう事ですか」

「加藤は、慶喜公と公議所(こうぎしょ)の話をしに行かれたのだ。慶喜公は江戸にて西洋風の議會を開く準備をして居られたのだ。加藤は文久元年に『隣草(となりぐさ)』を著し、上下分権の政体を立て公会を設け、公明寛大の政治を施すべしと唱えて居つたのだ。西軍には、その様な話はあつたか」

「そのような話、聞いた事がありません。京では戦に勝つたものの、畿内(きない)の諸藩さえ掌握(しょうあく)して居りませんでした」

「そうであらう」

「西郷さん一人が攻め上ると言つて、進軍してしまわれましたが、周りを固めよとの意見が大勢でした。勝算云々(うんぬん)の話も、あつたものではありませんでした」

川原は我が意を得たという顔をした。

「西郷の事だ。海舟(かいしゅう)殿を信じたまでの事だ。品川まで東軍が押し寄せ、江戸城をいよいよ総攻撃という時だ。海舟殿が出された一片の手紙で、西郷は田町の薩摩屋敷まで談判にやって来た。色々難しい議論もあつたが、西

郷が一身にかけて引き受けるという事になった。それで慶喜公は水戸の弘道館で謹慎(きんしん)という事で、江戸城を明け渡す事になったのだ。慶喜公は旗本の生活を考えると、海舟殿の措置は拙速(せつそく)に過ぎるとご不満であつたが。

それにしても長州も薩摩も随分(ずいぶん)難儀(なんぎ)をして居るではないか。貴殿は大義のために遙々(はるばる)箱館(はこだて)まで行つたのではないのか」

「愚弄(ぐろう)されては困ります」

「愚弄(ぐろう)などして居らぬ。賞賛して居るのだ。聡明な慶喜公といえども、廃藩置県(はいはんちけん)の断行など至難の業だ。その事をお悟りになられての駿府(すんぷ)でのご謹慎生活なのだ。

芝居(しばい)する方も難儀(なんぎ)であつたらう。慶喜公を窮地に追い込んで、お命をお助けしようというのだから。当面は慶喜公に罪人になって貰わねば、元の木阿弥(もくあみ)だ。いつの日にか、東京城麝香の間(じゃこうのま)にでもお出ましになられ、御上(おかみ)と浮世の事と旧懐(きゅうかい)されるのを願うのみだ。

福沢も新政府のこの快挙に驚喜(きょうき)して居つた。何せ福沢は再三仕官の話があつても、新政府を攘夷(じょうい)政府とみなして居つたから断つて居つた。あれは会津追討令が下り、仙台藩が朝敵になつた頃だ。福沢の所にアメリカでの留学で気が狂(ふ)れ、戻つて来た仙台藩の者が居つた」

「福沢先生が、朝敵を匿(かくま)つて居られたと申されるのですか」

「そうだ。薩摩と土佐の者が、世話をしていた」

「薩摩と土佐が、仙台藩の者を」

「貴殿は大槻磐溪(おおつき ばんけい)殿を存じて居るか」

「存じませぬが。何方(どなた)でしょうか」

「仙台藩の侍講(じこう)で、逸早(いちはや)く開港論を唱えられた方だ。ペリーが来航すると、態々(わざわざ)四艘(そう)軍艦を仕立て国書を持参するからには、一通りのお諭し位の事にては帰帆(きはん)致し間敷(まじ)くと申され、近海の一島を与え、石炭等差置き渡せばと林大学頭(だいがくのかみ)健殿に上申された」

「そのような国賊(こくぞく)を生かしておいてよいものなのでしょうか。川原殿は何故に、そのような者の話をされるのですか」

「そう申すな。寅(とら)も密航前に磐溪(ばんけい)殿のもとを訪ねているのだ」

「松陰(しょういん)先生が、何故に」

「磐溪(ばんけい)殿は漁師の舟で黒船に乗り付け、通詞(つうじ)の羅森(ろしん)に詩を贈って居られた。寅(とら)も黒船に乗り付けると羅森(ろしん)に面会を求めたのだ」

「その話は、本当なのですか」

「本当だ。磐溪(ばんけい)殿は、アメリカの事情に通じて居らぬ者では対等に話が出来ぬと、土佐の漂流民・ジョン万次郎(まんじろう)殿を招致して、アメリカとの談判に用いるようにと上申されて居られた」

「万次郎(まんじろう)殿が反対されたのだ」

「斉昭(なりあき)殿が反対されたのだ」

「そういうお話なのですか。所で、中島先生は今、どうして居られるのですか」

「どうして、そのような事を聞く」

「中島先生は、ペリー艦隊に先陣を切られたお方。ペリーと会見したのではないのですか」

「中島三郎助（なかじま さぶろうすけ）殿は、ペリーと会見などして居らぬ」

「違うのですか」

「中島殿は旗艦（きかん）サスケハンナ号に乗り込み、提督との会見を申し入れたが、その地位に相応（ふさわ）しい者にしか謁見（えっけん）しないと申すから、通詞（つうじ）の堀達之助（ほり たつのすけ）殿を介し、コンテと申す大尉と談判を行っただけだ」

「どのような」

「我が国の国法では、浦賀奉行（うらがぶぎょう）は外国人と謁見（えっけん）しない事になって居る。長崎に向かわれよ」

「それで、アメリカ側は」

「大統領より国書を携（たずさ）えて日本に派遣されたからには、国書を相当の礼儀を持って浦賀にて受け取られたいと。それから、番船（ばんせん）を撤退するようにと」

「何故に」

「今回の来航の目的は和親ゆえ」

「それで、中島先生は何と」

「傲慢不遜（ごうまんふそん）の申立に怒り心頭にもなるも、直ぐに一隻（せき）残らず撤退させた」

「何故に」

「ご内意だ」

「ご内意」

「家慶(いえよし)公の思召(おぼしめし)だ。穩便(おんびん)専用(せんよう)に致(いた)すべしとの」

「天下の征夷大將軍(せいいたいしようぐん)が」

「天下の征夷大將軍たればこそ。番船(ばんせん)差出し、彼(かの)船を取巻など致(いた)し候(そうら)はば、却(かえ)つて気を起(こ)し宜(よろ)しからずとおつしやられたのだ」

「本当にご内意(ないい)なのですか」

「本当だ。上陸(じやうりく)せしも、民家(みや)へ立寄り(たてよ)りとも、格別(かくべつ)乱暴致(いた)さずば、その儘(まま)に見捨て置く(みく)ようと。翌日(あした)、与力(よりき)の香山栄左衛門(かやま えいざえもん)殿(だん)が、浦賀奉行(うらがぶぎよう)と称(なづ)してサスケハンナ号(ごう)に向(む)かれた」

「中島先生(なかしま)は、お咎(とが)めを受けられたのですか」

「どういう事(こと)だ」

「中島先生(なかしま)はご内意(ないい)に反(ひ)して番船(ばんせん)を」

「彼の船(ふね)の素姓(すじやう)を調べに行(い)ったのだ。よもや、フランスの軍艦(いくさぶね)が助太刀(すけだち)に來(き)たやも知れぬと思(おも)つての事(こと)だ。お咎(とが)めを受けるものではない。幕府(ばくふ)はアメリカ艦船(かんぶね)が江戸湾(えどわん)に侵入(しゆり)した時も、一発(いちぱつ)の砲撃(ぱうげき)を加(く)える事もなかつたのだ」

「それで、今(いま)、中島先生(なかしま)は何処(どこ)に」

「亡(な)くなられた」

「それは、惜(お)しい事を(こと)されました」

「小五郎(こごろう)は、何も申(ま)して居(ゐ)らぬのか」

川原は不思議な顔をした。

「何をですか」

「中島殿を亡き者にした者の事を」

「何も」

「貴殿が中島殿を亡き者にしたのだ」

「冗談はお止めください。中島殿は、伏見の役（えき）に身を投じられたと申されるのですか」

「そうではない」

「それでは、越後の河合継之助（かわい つぐのすけ）の助太刀（すけだち）をされたとでも」

「そうではない」

「それでは、箱館（はこだて）にて榎本武揚（えのもと たけあき）に与（くみ）したと申されるのですか」

「そうだ。貴殿は千代ヶ岡（ちよがおか）の砲台を攻め込まなかったか」

「千代ヶ岡（ちよがおか）には、我が整武隊（せいぶたい）が山田先生の指揮のもと決死の覚悟をもって、突撃いたしました」

「した」

「その千代ヶ岡（ちよがおか）の砲台を死守されて居られたのが、中島父子だ。拙者（せつしや）も中島殿を止めに品川まで赴いたのだが。中島殿はご子息お二人を引き連れ、開陽丸（かいようまる）艦長として品海（ひんかい）を脱し、蝦夷地（えぞち）へ向かわれた」

「中島殿は、フレードを唱えねば、腹の虫がおさまらなくなられたとでも申されるのですか」

「中島殿は、そのような事は申されない。」

『ほととぎす われも血をはく思いかな』。中島殿の辞世だ」

「ほととぎす」

「三河武士も同じ思いだ」

「そのような事、あるものなのでしょうか」

『かくのみにありけるものを 萩の花咲きてありやと 問ひし君はも』

「それも」

「これは万葉の歌だ。小五郎も中島父子蝦夷地（えぞち）脱出の噂を聞き、中島殿のお宅を訪ねたが、お宅を知られた後だった」

「川原殿は、木戸先生と面識（めんしき）お有りなのですか」

「勿論（もちろん）だ」

「そういう事でしたか」

私は改（あら）めて不明を恥じた。

「それで、香山（かやま）殿は。ペリーと何を」

私は力なく尋ねた。

「香山（かやま）殿もペリーと直接交渉はして居らぬのだ。謁見（えっけん）を申し出るも、アメリカ側は応じなかった。艦長のブカナン、参謀長のアダムス、副官のコンテーが、香山殿との応接に当たった」

「正体を見抜かれたではありませんか」

「あの飲助（のみすけ）殿の事だ。そうやも知れぬ。交渉にてはアメリカ側に、当地は異国応接の地にあらずして、長

崎にて国書を渡されよと申すも、アメリカ側は長崎にて国書を渡す事は出来ぬと言い張って聞かぬ。当地において適当な人物を選任して、国書手交(しゅこう)に応じなければ、提督は兵を率いて、自ら国書を皇帝に手交する覚悟であると言う」

「それで香山(かやま)殿は」

「船中の形勢、尋常(じんじょう)ではない。平穩の取扱いも出来難い。香山殿は、江戸に命を仰ぐから、時間を呉れよと申された」

「それで、アメリカ側は何と」

「この儀は日本政府も存じ居る事と。四日目の昼過ぎ迄(まで)にご返答なければ、江戸表に罷(まか)り越し、存念(ぞんねん)通り取計らうと」

「幕府が存じて居る儀とは、どういう事でしょうか」

「アメリカは、爪哇(ジャワ)のオランダ総督を通じて幕府へ書面を出して来たのだ。幕府はオランダといえども文書の遣り取りは出来ぬ。そこで、長崎在留のオランダ人より口頭で長崎の役人に伝言させたのだ」

「何を言ってきたのですか」

「国書受け渡しの話だ。それで埒(らち)があかぬので、香山殿は、在勤浦賀奉行(ざいきんうらがぶぎょう)の戸田伊豆守氏栄(いどいずのかみ)とだいかみうじよし殿の命で、江戸に向かれ、在府浦賀奉行(ざいふううらがぶぎょう)の井戸石見守弘道(いどいわみのかみひろみち)殿にアメリカとの応接の次第を演達された。アメリカ人申すに、浦賀表に渡来致(いた)した儀は、予(か)ねて政府に通達に及び置き事、政府は能々(よくよく)存じ居る事と」

「井戸石見守(いどいわみのかみ)は存じて居ったのですか」

「勿論だ」

「それで、石見守は何とされたのですか」

「戸田伊豆守（とだ いずのかみ）の伺書（うかがいしよ）を阿部殿に差し出し、その指揮を請うた」

「戸田伊豆守（とだ いずのかみ）は、どのような伺（うかがい）を」

「共和政治の国法は厳格で、国許（くにもと）出帆（しゅつぱん）の節より、江戸表に罷（まか）り越す様に申し付けられ、使命を過しは大罪を受ける故、ご承知して呉れる様にと落涙（らくるい）いたして居ると」

今夜の川原の話は、俄（にわ）かに信じられぬ事ばかりであった。

「アメリカ人が、落涙（らくるい）などするものなのでしょうか」

川原は笑われた。

「戸田伊豆守（とだ いずのかみ）の泣き落しだ。此度（こたび）軍船数艘（そう）で渡来したのは、御国（みくに）を尊敬する諸邦の先格（せんかく）にて、早々の御下知（ごげじ）なくば、手切（てぎり）のご合図に成ってとはと申されたのだ」

「戸田伊豆守（とだ いずのかみ）も、御国（みくに）を尊敬する諸邦の先格（せんかく）などと、よくも言ったものです。

ペリーは恫喝（どうかつ）しに遣つて来たのです。戸田伊豆守の物言い、恫喝（どうかつ）に屈し者の物言いではありませんか。それで阿部伊勢守（あべいせのかみ）様は、何とされたのですか」

「国書を受くべしとの命を下された。アメリカの所業を苦々しく思われた井戸石見守（いど いわみのかみ）も、『米船（べいせん）渡来には深き趣意があらん』と申され、今回限り特別の取計らいを香山殿に命じられたのだ。これには香山殿、落涙（らくるい）に及ぶ事、数刻（すうこく）」

「何故に」

「香山(かやま)殿は、ずっと心を煩(わづら)わして居られたのだ。前年、アメリカの国務事務頭(がしら)のカーラントンが皇国への交易を企てたるとの風説を耳にされ、風説の趣(おもむき)を確かめるべく、当時、在府浦賀奉行であられた戸田伊豆守(とだ いずのかみ)の所に罷(まか)り出られた。戸田伊豆守(とだ いずのかみ)より、阿部殿に交易筋などの噂話のお伺(うかがい)を立てると、阿部殿は物産をオランダが引き受け、アメリカに渡し、以後渡来致(いた)さぬとの長崎奉行・牧志摩守(まき しまのかみ)義制(よしのり)殿の見込みを話された。

それでも心配な香山(かやま)殿は、在勤浦賀奉行をして居られた水野筑後守忠徳(みずの ちくご)のかみ ただのり)殿からオランダ風説書の写しを手にされた。風説書には、確かに明年(みょうねん)三月に石炭置場借用のためアメリカより軍艦渡来致(いた)すと書かれてあったが、三月に入っても、四月には入っても、それと思われる艦船の入港もなく、五月に入っても来ない。阿部殿の申される通り、渡来致(いた)さぬものかと思いしも、今日か翌日かと待つて居る所に、漸(ようや)く現れたのだ」

「その待ち人は、随分ぞんざいな待ち人ではありませぬか」

「そう申されるな。漸(ようや)く待ち人が来たのだ」

「それで、香山(かやま)殿はどうされたのですか」

「江戸から戻られると、通詞(つうじ)の堀達之助(ほり たつのすけ)殿、副通詞の立石得十郎(たていし とくじゆう)ろう)殿を引連れ、サスケハンナ号にて幕府の返答を伝えられた。国書を受取るための接待館が久里浜(くりはま)に築造され、將軍から任命された応接官が、この任に当たると。ただ、国書の返答は長崎にてオランダ人若(も)しくは支那(しな)人の手を経てなされると申し渡した。これには、アメリカ側が猛烈に反発した。国書に対して相当な返答がなければ、提督(ていとく)は合衆国に対する侮辱(ぶじよく)と見なすと」

「本性(ほんしょう)を現したではありませぬか」

「それで、また難題を持ち出してきた。国書のほかに、アメリカ政府よりの添書を江戸表に傳達し、直ちにそのご返翰(へんかん)を請いたいと。日本側がそのような枝葉な物はご国書と一緒に差し出されよと申すと、昨年中、傳達に及んだ事ゆえ隙取(ひまどり)にはならぬと申し、これなきは本願の主意に適わぬ故、速やかに一戦に及び、御老中方に直談判致すと、荒手の申し分を致した」

「矢張り、幕府はアメリカ人の脅しに屈したのではありませぬか」

私は何時もの憤りを新たにした。

「そうではない。香山(かやま)殿も負けては居らぬ。香山殿がアメリカ側に申したのだ」

「何をです」

「その節は事平の用向き故、白旗を掲げて参つて呉れと。さすれば鉄砲(てっぽう)打掛(うちかけ)申間敷(もうすまじ)と」

「それは愉快な。それで、アメリカ人は何と」

私は快哉(かいさい)を叫んだが、川原は表情を変える事なく、話を続けた。

「居合わせた者達一同、面(おもて)に殺気が表れたとか。日本側が書翰(しょかん)の趣意は兼々(かねがね)心得て居るも、国家緊要の儀につき速やかに評決致し難し故、ご国書と一緒に致すようにと申し入れると、ペリーの承知したとの書面を受取った。

香山(かやま)殿も大変であった。殺気立つアメリカ人の応接には難渋した。万一事を起こされては大変、宥(なだ)め賺(すか)すのに大変であったと」

「香山(かやま)殿は、何とアメリカ人を宥(なだ)めたのですか」

「万里の波涛(はとう)を凌(しの)ぎ、国命を受け、使節として罷(まか)り越し候(そうろう)切意、空敷(むなし)く致すようなご不仁(ふじん)のご処置を有間敷(あるまじ)と。国書受取りの話が纏(まと)まると、アメリカ人も落ち着き、格別に扱いやすくなったとか。香山(かやま)殿が申すに、イギリス人に比ぶれば、格段に温厚な者たちであったと。船中では、出島にての交際が行なわれた」

「黒船が出島と申されるのですか」

「香山(かやま)殿はブランドーにウイスキーに舌鼓(したつづみ)をうちながら、会話を交わされた。アメリカ人は、日本人が世界の情勢に疎(うと)いと思つたのか、地球儀を差し出すから、香山殿はワシントン、ニューヨーク、英仏始め西洋諸国を指差してやつたのだ。鉄道や蒸気船の話は、朝飯前。太平洋と大西洋を横断する運河は成就するやと質問してやつたのさ。幕府はモリソン号来航の時から、オレゴンの事なども知つて居つたのだ」

「オレゴン？」

「カルフォルニアの北にある土地だ。アメリカとイギリスが争つて居つた。アメリカ人も香山(かやま)殿に気を許したのであろう。国書を入れた箱まで見せた。青漆塗(せいしつぬり)に四方の縁は黒漆塗(こくしつぬり)、箱の左右に『吉祥(きつしょう)』との漢字が記してあつた。

六月九日、久里浜(くりはま)にて、ペリーより戸田、井戸両浦賀奉行にファイルモア大統領の親書が手渡されたが、黒人二人がペリーが持ち来る大統領の親書を護衛して居つたそうだ。書翰(しょかん)には、合せ口に白蠟(はくろう)が流され、その上に朱印が押しあつた。日本側が国書を受取ると、ペリーは来春、再び返答を聞きに来航すると言つて去つて行つたのだ」

「ペリーが艦隊を江戸湾奥深くまで進行させたのは、祝砲を放つためだという話は、本当なのでしうか」

「本当だ。江戸城に居られる家慶(いえよし)公からその船影が分かるようにするためだ。尤(もつと)も、故国でペリーの所業を耳にされたシーボルト殿は、激怒して居ったそうだ」

「シーボルトが何故に」

「ペリーは、シーボルト殿が書かれた家慶(いえよし)公宛のオランダ国王の親書を、日本来航の際、持参していたのだ。『殿下の聡明は一八四二年貴国の八月十三日、長崎奉行の前に於(おい)て甲必丹(キャピタン)に読み聞かせし令書に因(よつ)て明らかなり』との。シーボルト殿は、ペリーのかかる暴挙は、長年のオランダとロシアの努力を無にするものであると憤懣(ふんまん)に耐えなかつたそうだ。拙者(せつしや)のオランダ商館員の友人も申して居った。ペリーの所業(しよぎよう)、かのユダヤ王ヘロデにも勝るとも劣らぬ残忍なものと」

「シーボルトは、ペリーに出し抜かれたとでも申されるのですか」

「鳶(とび)に油揚(あぶらあ)げを攫(さら)われたようなものだ。それもペリー出航後、十日後にして振り出しに戻った」

「振り出しに戻った」

「ペリーが頼りとする家慶(いえよし)公が、薨去(こうきよ)されたのだ。幕府は長崎のオランダ商館に申し伝えを依頼した。当分、大統領の書簡の事に関わつて居られぬ故、その旨をアメリカ政府に伝えて貰いたいと。拙者(せつしや)も俄(にわ)かに信じられなかつたのだから、ペリーもそう思ったに違いない。だが、家慶(いえよし)公薨去(こうきよ)の事は本当であつた。もし、ペリー再来航時に家慶(いえよし)公がご存命であつたならば」

川原は椅子を立たれた。

「もし、家慶(いえよし)将軍が存命ならば、どうなつたと申されるのですか」
私も席を立った。

「慶喜(よしのぶ)公は、西の丸に入られて居られたのだ」

「それで、ペリー再来航時に前将軍が西の丸に入っていたなら、どうだったと申されるのですか」

「鎌倉にて、歴史的会談が行われていたのだ」

「鎌倉？」

「そうだ。幕府はアメリカ側に鎌倉にて会談を行なう事を申し入れて居つたのだ」

「前将軍が鎌倉でペリーと会談を。前将軍ご出馬とは、川原のお話では」

「事がならぬ時とは、そういうものだ。アメリカ側は、何か謀略があるのではないかと怖(おそ)れたようだ。会談は江戸近郊で行なうと譲らなかつた。運悪く、アメリカ船も鎌倉沖で座礁(ざしょう)して居つたから。」

『鎌倉の見越(みごし)の崎の岩崩(いはくえ)の 君が悔ゆべき心は持たじ』

「東夷(とうい)が西夷(せいい)と会して、一体何をなそうというのです」

「契りを結ぶのだ」

「契り？」

「古(いにしえ)に違(たが)えた誓いを結び直すのだ。」

『まかなしみき寝(ね)に我(わ)は行く 鎌倉の美奈の瀬川に潮満つなむか』。

夢であつた」

「夢」

「そうだ。夢だ。弘化（こうか）四年、慶喜公一橋家相続に及び、家慶（いえよし）公、一橋邸に及ぶ事数回。家慶（いえよし）公謡（うた）い慶喜（よしのぶ）公舞い、時には慶喜公謡い、家慶公舞う。その姿は、実の親子のようであられたという。もし、あの時、家慶公がご存命なら、我等（われら）幕臣は、この上もなき栄光を手にしものを。それも、今となつては夢のまた夢。家慶公はこの世を去られ、慶喜（よしのぶ）公はご謹慎の身」

川原は椅子に着かれた。

「安政（あんせい）には夢があつたと申されるのですか」

「そうではない」

「川原殿はそう申されたではありませんか」

「志（こころざし）だ。安政（あんせい）には志（こころざし）があつたのだ。安政（あんせい）五年、堀田殿が上洛（じょうらく）し、慶喜（よしのぶ）公継嗣（けいし）の内勅（ないてい）が下されるよう工作されて居つた時の事だ。海舟殿は、薩摩藩の長崎海軍伝習生を引き連れて、咸臨丸（かんりんまる）で鹿児島に行かれたのだ」

「薩摩に何かあつたのですか」

「万一の時を考えての事だ。斉彬（なりあきら）殿は海舟（かいしゅう）殿に後継者として、久光（ひさみつ）殿を紹介されたのだ」

「万一とは、どういう事でしょうか」

「万一は、万（ばん）一（いち）だ。内証（ないしやう）のない（こう）の時ではない。大事への備えは十分出来ていた。集成館（しゅうせいがん）での大砲製造場や鉄板製造場には、オランダ人も驚いて居つた」

「斉彬（なりあきら）殿は安政年間に大事を」

「そうだ。西郷は斉彬（なりあきら）殿の満腹の経綸（けいりん）を十余年の時を経て実行しただけの事だ。開国を唱えるだけなら凡庸（ぼんよう）なお殿様でも出来る。だが、王制復古（おうせいふっこ）となると話は別だ。幕府で西郷の腹を分かつて居つたのは、海舟殿に大久保忠寛（おおくぼただひろ）殿に、それに慶喜公だ。久光（ひさみつ）殿は、西郷と大久保が勝手にやった事と申して居られる」

「久光（ひさみつ）殿がそのような事を」

「万古不易（ばんこふえき）の皇統も共和政治の悪弊に陥（おちい）り、洋夷（ようい）の属国になると。人の世は皮肉なものだ」

「皮肉」

「そうではないか。斉彬（なりあきら）殿の志を継がれ、開国と申された久光（ひさみつ）殿が、王制復古（おうせいふっこ）に異を唱えられたのだ。攘夷の先鋒となられた敬親（たかちか）殿は、どうであられた」

「木戸先生が版籍奉還（はんせきほうかん）の事をお話に山口に赴かれた時の事です。多数の士族もある事だから、これ等（ら）が俄（にわ）かに職を失つたらどんな珍事が出来ないともかぎらん。その実行方法に充分注意しろとの有り難いお言葉を賜りました」

「そうであろう」

川原は頷（うなず）いていた。

「木戸先生は西郷さんや大久保先生が鹿児島で随分手こずるものですから、ご不満の様子でした。伊藤先生と井上先生が世襲知事の事に反対して辞表を提出したものですから、大久保先生も世襲の話撤回されました」

「それにしても、王制復古（おうせいふっこ）が上手くいったのは、家康公のご人徳の賜物（たまもの）だ」

「家康の？」

「大坂城落城時に、天海（てんかい）からの進言を受けられたのだ」

「どのような」

「豊臣秀頼（とよとみ ひでより）を殺したのは天下の為。徳川も他日の用意をせねばならぬと」

「他日とは」

「徳川が政権を失った時だ。人を殺さぬように権を移すようにと申された」

「天海（てんかい）は今日の事態を予見されていたと申されるのですか」

「そうだ。全国に所領を小さく分けておくようにと家康公に申されたのだ。天海（てんかい）は頭を丸くして居らねば、家康公に弓を引いたお方」

「家康に弓を引くとは、どういう事でしょうか。天海は、武州（ぶしゅう）川越（かぎ）は喜多院（きたいん）の住職ではないのですか」

「そうだ。天海は喜多院（きたいん）の住職なれど、葦名（あしな）氏」

「葦名（あしな）氏」

「毛利家は、相模国（さがみのくに）毛利荘（もうりしょう）から安芸国（あきのくに）吉田荘（よしだのしょう）に移られしお家なれば、葦名（あしな）氏の事はご存じの事。

天海は会津の宗家亡びて流浪の末に、叡山にて坊主になられたのだ。家康公が天海を重用されたのも、戒めにされる為」

「戒め」

「政(まつりごと)を行うは、天下の為。家光公の座右に、品川東海寺(とうかいじ)を開山された沢庵(たくあん)和尚(おしょう)が置かれたのも、剣法指南役(しなんやく)に柳生但馬守宗矩(やぎゅう たじまのかみ むねのり)が就かれたのも、家光公が道を誤らぬようにするため。

その家光公亡き後、幼き家綱(いえつな)公を補佐されたのが、家光公異母弟の会津侯・保科正之(ほしなまさゆき)殿。その保科正之(ほしなまさゆき)殿は、京生れの朱学者・山崎闇斎(やまざき あんさい)に師事されてしまわれた。

陸奥国(むつのくに)会津若松生まれの山鹿素行(やまが そこう)先生は、『聖教要録(せいきようろく)』を著(あらわ)すも、幕府から不届(ふとど)きなる書物との汚名を着せられ、赤穂(あこう)浅野家にお預けの身となられたのだ」

「何故に、その様な話をされるのですか」

「この数百年、武士だけが漫然(まんぜん)と何もせず飽食暖衣(ほうしょくだんい)をしてきたが、それでは立ち行かぬ世になったのだ。諸藩も幕府と共にする運命にあったのだ。大久保が大坂遷都(せんと)を唱えたのを存じておろす。大久保が何故、大坂遷都(せんと)を唱えたのか分かるか。御維新(ごいしん)の所以(ゆえん)を示すためだ」

「大坂遷都(せんと)が何故に、御維新(ごいしん)の所以(ゆえん)のですか」

「民の父母たる天賦(てんぷ)の君道を履行するのだ。仁徳天皇(にんとくてんのう)の御代(みよ)の天下万世の賞賛、大坂ほど新政府の理念に適った地はない。

仁徳(にんとく)帝は、民の貧しいのを思いやり、三年間、税を免除されたのだ。皇居は傷み宮廷人の衣服は惨めな有様となったが、仁徳帝は高屋にのぼられ煙立つ民のかまどの賑わいをお喜びになられたのだ」

「それでは、東京奠都(てんと)は何故にと申されるのですか」

「江戸には、東照宮(とうしょうぐう)三百年の洪業(こうぎょう)を一朝に捨てるとはと憤る者も居れば、稲葉美濃守(みののかみ)のように諸有司・諸大名・以下悉(ことごと)く江戸を引払い京都に移住させるという者も居った。新政府が京にあつて守旧派の抵抗に難渋していたところに、海舟殿が將軍家始め諸藩の方々がいなくなつては江戸の町人が困ると大久保に掛け合つたのだ。京にて大久保が車駕(しゃが)東幸(とうこう)の儀を論ずるに及ぶと、異論続出。草莽(そうもう)の士が要路の門に至り、車駕(しゃが)東幸(とうこう)の事を諫止(かんし)せんとした」

「どういう事なのでしょう。草莽(そうもう)の士が東幸(とうこう)を諫止(かんし)せんとしたなどと申される事は。新帝の東幸(とうこう)の事は、神武天皇(じんむてんのう)御東征(ごとうせい)に則(のつと)て行われたのです。『是(これ)朕(ちん)の海内(かいだい)一家、東西同視する所以(ゆえん)』とのご英断を下され、鳳輦(ほうれん)を東へと進められたのです」

「貴殿は神武天皇(じんむてんのう)御東征に則(のつと)たと申すが、貴藩と三条殿が押し進めた大和行幸(やまとぎようこう)神武天皇陵参拝の儀の取り止めを命じられたのは、先帝の孝明帝であられたのを存じて居らぬのか。先帝の存念は攘夷なるも、政治は関東へ委任が筋。不逞(ふてい)の輩(やから)が唱える王政復古(おうせいふく)の論を不快に思われたのだ。幕府に従わざれば、尊皇の道が絶たれると。」

貴殿は、鳳輦(ほうれん)を東へと進められたる事は、如何様に存じて居るのか。京にては、明治元年八月二十七日辰の刻に紫宸殿(ししんでん)にて即位の大札が挙行され、新帝は九月二十日に京都から鳳輦(ほうれん)を東に進められ、十月十三日に江戸千代田城にご入城されたが、婚礼の儀のため、一旦還幸(かんこう)あそばされたのだ。この時、還幸(かんこう)の鳳輦(ほうれん)に扈從(こしやう)せし大久保は、吉原宿で富士を仰いで和歌を詠んだのだ」

「どのような」

『大君の御馬の塵の数に入りて 富士を見んとはおもひかけきや』。

慶喜(よしのぶ)公継嗣問題(けいしもんだい)に始まり王制復古(おうせいふつこ)の事に奔走(ほんそう)せし大久保も、車駕(しゃが)東幸(とうこう)の事は流石(さすが)に想像(さうぞう)にする事は出来なかつた筈だ。斉彬(なりあきら)の志(こころざし)を思うと些(いささ)か複雑(ふくざん)な心境であつたろうが。

御上(おかみ)は十二月二十二日、恙無(つづがな)く京にご着輦(ちやくれん)。二十八日、従三位(じゆさんみ)一条美子(いちじょう)はるこ様との女御(にようご)入内(じゆだい)の儀(ぎ)が執り行なわれ、京にても御維新(ごいしん)の事が始まろうとした矢先の事だつた。明治二年正月五日、横井小楠(よこいしようなん)殿が十津川郷士(ごうし)等に襲われた。宮中から戻る途中の事だ。博学をもつて新政府に耶蘇教(やそきよう)の拡張を謀る者と」

「やはり横井小楠(よこいしようなん)は、耶蘇(やそ)教徒だつたという事ですか」

「そうではない」

「そう申されたではありませんか」

「そうではない。『天道覚明論』という阿蘇(あそ)神社の拝殿に投げ込まれたものを、小楠殿が書いたものと見なされたのだ。それには神州三千年、万国に卓絶する国なりとも僅(わず)かに三千年と記してあつたのだ」

「その何処(どこ)が、耶蘇(やそ)教徒だとみなされたのでしょうか。皇国の三千年は、エジプト、支那(しな)に比(くら)ぶれば僅(わず)かでありますが、アメリカなどに比(ひ)すれば卑下(ひげ)するものではありませんが」

「政事(せいじ)は血統に拠らずして英明の主、賢者が行うもの。これは小楠(しようなん)殿の持論。小楠殿を襲いし者たちは、廢帝の説を唱え天日嗣(あめのひつぎ)を危(あやう)くせんとする者と見なしたのだ」

「その『天道覚明論』とは、どのようなものだったのですか」

『宇宙ある所の諸万国、皆な是(こ)れ一身体にして人我無く親疎(しんそ)無き理を明らかにし、内外同一なる事を審(つまびら)かにすべし。古(いにしえ)より英明の主、威徳(いとく)宇宙に博(ひろ)く、万国帰嚮(ききよう)するに至る者は、其(そ)の胸襟(きょうきん)闊達(かつたつ)、物として容れざるはなし。其(そ)の慈仁(じじん)化育(かいく)、心、天と異なる事なきなり。此(か)くの如(ごと)きにして、世界の主、蒼生(そうせい)の君と云う可(べ)き也』。

弾正台(だんじょうだい)も小楠殿を国賊(こくぞく)と断定し、守旧派からは兇徒(きようとう)の死罪一等を減じる嘆願書が出された。神明の国に生まれながら洋服を着用し、洋式帽子を被り、筑地内を徘徊(はいかい)する政府高官を憤(い)つての事だ。

政府要人の動揺は尋常(じんじょう)ではなかった。岩倉殿の提言で行われた輔相(ほしやう)・議定(ぎじょう)・参与(さんよ)の公選も、他日共和政治を唱える者が出ると申され、容堂(ようどう)殿、春嶽(しゅんがく)殿、宗城(むねなり)殿が反対された。容堂(ようどう)殿のお声は裏返(うらかへ)つて居られたが、公選の事は、今回限りの事となつてしまつた。

だが、今(いま)ここに至(いた)つて漸(ようや)く西洋文明を見聞する時が来た。諸国を巡歴(じゆんれき)すれば、文明社会の何たるか、政府の何たるか、法律の何たるかを知る事が出来よう。さすれば、これから日本で起きようとする事の意味も分(わ)かるう」

「日本で起きる事と申されますのは」

「新政府は華士族に、農工商に従事する自由を認めたのだ。これから士族も自活して生計を立ていかねばならぬ」

「越後屋の天下が来ると言う者も居りませんが」

「まあ、そう拙速（せっそく）にものを考えなさるな。士農工商の世であったのだ。商売を賤（いや）しむなという事だ。道理の分からぬ公卿（くぎよう）や攘夷主義者には、商売国のどこが悪いと開き直るのも一計だ。皆が坊主や聖人君主では、世間というものが成り立たぬではないか」

川原はそう言うのと、『学問のすゝめ』と題する冊子を例の西洋靴から取り出した。日本を発つ前、福沢先生から今度出版するものと渡されたという。川原はこれが御維新（ごいしん）の精神だと言って、冒頭の一節を読んで聞かせて呉れた。

『天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり。されば天より人を生ずるには、万人は万人皆同じ位にして、生れながら貴賤（きせん）上下の差別なく、万物の靈たる身と心との働（はたらき）を以（もつ）て天地の間にあるよろづの物を資（と）り、以（もつ）て衣食住の用を達し、自由自在、互に人の妨（さまたげ）をなさずして各安樂にこの世を渡らしめ給ふの趣意なり』

「何の事でしょうか」

「人民共和の大策を施（ほどこ）せという事だ。大久保が『天朝を奉護（ほうご）し、皇威を海外に灼然（しゃくぜん）たらしむる』と言ったのもここに眼目があるのだ。滅び行く幕府の自刃（じじん）を介錯（かいしゃく）した攘夷（じようい）派も、それに抗した佐幕（さぼく）派も、新時代に殉（じゆん）ずる運命にあったのだ。新たに生まれた新政府にこの考えなくして、何処（どこ）に四民平等の考えが生まれて来ようか。土のない時代が来たのだ。民の生活を向上させる事が、政府の務めになったのだ。新らし好きの我が国の事だ、訳無い事だ。貴殿には、別の道を行ってほしい」

「別の道」

「そうだ。愚（おろ）かなる人間のなす事ゆえ」

川原はそう言うと、暫（しば）し沈黙した。夜は薄らと明けていた。

「デッキに出て日本の夜明けを仰（あ）ごうではないか」

川原は静かに言った。

昨日来の雨雲も遠のき、地平線には仄（ほの）かに光が差していた。波音が潮風にこだまし、朝焼けが眩（まぶ）しかった。

「皇国に御維新（ごいしん）の歴史が白日の下（もと）に晒（さら）される日が来ましようか」

「そうありたいし、そうあるべきだ。すべては、新政府の成否にかかつて居る。その手始めとして、此度（こたび）の使節団だ。上手くいけば、あの昇る朝日のように我々の頭上に燦然（さんぜん）と輝くやもしれぬ」

「下手（へた）をすれば」

「そうだな。日付変更線（ひづけへんこうせん）のような事になるか」

川原は妙な事を口にした。

「それは、どういう事でしょうか」

「明日また二十一日は確かに在るが、変更線（へんこうせん）の向こうの日本では、在らぬという事だ」

川原は微（かす）かに微笑（ほほえ）んだ。何が変わるという事はなかった。天は高く、ただ茫洋（ぼうよう）とした海原が眼前に広がっていた。

参考文献(文献名／著者名 発行地 出版社名 発行年月)

幕末維新

大日本維新史料／維新史料編纂事務局…明治書院 1938-1943。

維新史／維新史料編纂会…吉川弘文館、1983・7。

「明治維新」の哲学／市井三郎…講談社、1967…(講談社現代新書)。

明治維新／遠山茂樹…東京…岩波書店、1951・2…(岩波全書 128)。

幕政改革／家近良樹編…東京…吉川弘文館、2001・2…(幕末維新論集／田中彰、松尾正人、宮

地正人編 3)。

伊藤痴遊全集、第1-18巻、続第1-12巻／伊藤痴遊…平凡社、昭和4年至6年。

近世日本国民史 第30-80巻／徳富猪一郎…明治書院・時事通信社 1934・9-1960・12 天皇の世紀 1

10／大仏次郎…朝日新聞社、1969-1974。

日本外交文書…条約改正関係／日本学術振興会編纂…東京…日本外交文書頒布会、1959。

幕末外國關係文書／東京帝國大學文科大學史料編纂掛編(大日本古文書／東京帝國大學文科大學史料編纂

掛編)…東京…東京帝國大學文科大學史料編纂掛、1910。

幕末外交談／田辺太一 坂田精一訳・校注 1、2…東京…平凡社、1966・6-1966・8…(東洋文庫

岩倉使節団

特命全權大使米歐回覽実記 / 久米邦武編 田中彰校注 1 | 5 | 東京 .. 岩波書店、1977・9 | 1982・5
 | (岩波文庫 青(33) | 141 | 15)。

岩倉使節団 .. 明治維新のなかの米欧 / 田中彰 . | 東京 .. 講談社、1977・10 | (講談社現代新書 487)。

明治維新観の研究 / 田中彰 . | 札幌 .. 北海道大学図書刊行会、1987・3。

菅原彬州「岩倉使節団の従者と同航留学生」中央大学100周年記念論文集 / 中央大学100周年記念論文集
 法学部編集委員会編 法学部 . | 八王子 .. 中央大学、1985・10。

岩倉使節団のパリ .. 山田顕義と木戸孝允その点と線の軌跡 / 富田仁 . | 東京 .. 翰林書房、1997・7。

長州藩

防長近世史談 / 村田峯次郎 . | 大小社、昭和2。

防長回天史 / 末松謙澄 . | 修訂 . | 柏書房、1980・5。

幕末の長州 .. 維新志士出現の背景 / 田中彰 . | 東京 .. 中央公論社、1965・11 | (中公新書 86)。

毛利元就

毛利元就 / 瀬川秀雄 . | 大阪 .. 創元社、1942・2 | (日本文化名選)。

毛利元就 / 及川儀右衛門 . | 京都 .. 星野書店、1942・5。

毛利元就卿傳 / 三卿伝編纂所編 特装版 . | 徳山(山口県) .. マツノ書店、1997・5。

洞春公略譜 常栄公略譜 天樹公略譜 大照公略譜 / 「瀧鶴台」 村田峯次郎編。 | 東京 .. 稲垣常三郎、1891。(長周叢書 第10回)。

吉川元春

吉川元春 / 瀬川秀雄 特装版。 | 徳山 .. マツノ書店、1997・5。

吉川元春元長兩公の御事蹟 / 瀬川秀雄。 | 東京 .. 瀬川秀雄、1937・6。

小早川隆景

小早川隆景 / 渡辺世祐、川上多助 特装版。 | 徳山 .. マツノ書店、1997・5。

毛利敬親

忠正公勤王事績 / 中原邦平。 | 訂正・補修「版」。 | 東京 .. 防長史談会、1911・5。

毛利十一代史 / 大田報助編 第1冊 | 第10冊。 | 限定版。 | 東京 .. 名出版、1972。

吉川経幹

吉川経家公御事蹟 / 瀬川秀雄編。 | 東京 .. 瀬川秀雄、1931・2。

故男爵吉川重吉卿自叙伝 / 大塚武松。 | 井原豊、大正6。

大江匡房

平安朝儀式書成立史の研究 / 所功。 | 東京 .. 国書刊行会、1985・12。

大江匡房 / 川口久雄 日本歴史学会編。 | 東京 .. 吉川弘文館、1968・5 (人物叢書 / 日本歴史学会編

148)。

吉田松陰

吉田松陰全集 / 山口縣教育會編纂 第1卷 - 第10卷。 - 東京。 - 岩波書店、1934-1936。
吉田松陰全集 / 山口縣教育會編纂 第1卷 - 第12卷。 - 東京。 - 岩波書店、1938-1940。

講孟餘話 / 吉田松陰 廣瀬豊校訂。 - 東京。 - 岩波書店、1936・12 - (岩波文庫 1387-1388b)。

講孟筭記 / 吉田松陰近藤啓吾全訳注 上、下。 - 東京。 - 講談社、1979・11-1980・10 - (講談社学術文庫「442-443」)。

吉田松陰書簡集 / 廣瀬豊篇。 - 岩波書店、1937・4 (岩波文庫；1488?1489、青(33)-021-2)。

吉田松陰 / 徳富蘇峰。 - 岩波書店、1981・11 - (岩波文庫)。

宇都宮黙霖・吉田松陰往復書翰 / 川上喜蔵編。 - 東京。 - 錦正社、1972 - (国学研究叢書；第5編)。吉田松陰言行録 / 廣瀬豊。 - 東京。 - 三省堂、1938・12 - (小型修養叢書)。

吉田松陰 / 松本三之介責任編集(日本の名 31) - 東京。 - 中央公論社、1973・11。

吉田松陰の母 / 福本義亮。 - 誠文堂新光社、昭和16。

松陰と女囚と明治維新 / 田中彰。 - 東京。 - 日本放送出版協会、1991・3 - (NHKブックス 619)。

杉梅太郎

杉民治先生伝 / 中村助四郎。 - マツノ書店、1981・8。

木戸孝允

松菊木戸公傳 / 木戸公傳記編纂所編 上、下。 - 東京。 - 明治書院、1927・9。

木戸孝允日記 / 日本史籍協會編 1、2、3 - 東京。 - 東京大學出版會、1967 - (日本史籍協會叢書 74
176)。

木戸孝允文書第一 / 木戸孝允日本史籍協會編東京大學出版會、1971 (日本史籍協會叢書 77)。
幕末愛國歌 / 川田順、東京…第一書房、1939・6。

伊藤博文

藤公餘影 / 古谷久綱、第4版、東京…民友社、1911。

孝子伊藤公 / 末松謙澄、東京…末松謙澄、東京…博文館、1911・1。

伊藤博文伝 / 春畝公追頌會編 上卷、中卷、下卷、再版、東京…統正社、1942・12。

藤公美談 .. 附諸名士逸話 .. 薨去十五周年記念 / 里村千介、3版、大阪…精華堂書店、1925。

伊藤公全集 / 小松緑編輯第1、第2卷、第3卷、東京…伊藤公全集刊行會、1927・1 | 1927・6。

回天秘録錦を繞りて / 小松緑、東京…千倉書房、昭和11。

伊藤公直話 / 伊藤博文述、小松緑編、東京…千倉書房、1936・7。

伊藤博文直話 / 新人物往來社、新人物往來社、2010・4 | (新人物文庫 71)。

伊豫の湯 / 虚子 桃甫畫、愛媛…森知之、1919。

伊曾乃神社 .. 伊豫上代史考 / 大倉糸馬、松岡靜雄共考、東京…郷土研究社、1932・7。

河野氏の歴史と道後湯築城 川岡 勉 / 青葉図書 1998・2。

ふく百話 / 中原雅夫、西日本教育図書、1973。

来原良蔵

来原良蔵伝 / 妻木忠太上、下、東京…開明堂、1940。

高杉晋作

高杉晋作の「革命日記」／一坂太郎。――朝日新聞出版、2010・9（朝日新書 236）。
紅噴隨筆／児玉花外、岡村盛花堂、明治45・1。

東行先生遺文／東行先生五十年祭記念會編。――東京…民友社、1916・5。

奇兵隊日記／日本史籍協會編1、4。――東京…東京大學出版會、1971。（日本史籍協會叢書 85―88）。

杉晋作全集／高杉晋作 堀哲三郎編 上卷、下卷。――東京…人物往來社、1974・5。

高杉晋作。――學習研究社、1996・5。――（歴史群像シリーズ 46）。

井上馨

井上伯傳／中原邦平編述 卷之1、附録第2冊。――東京…中原邦平、1907・5。

世外井上公伝／井上馨侯伝記編纂會 第1、5卷。――東京…内外書籍、1933・11―1934・9。

密航留学生たちの明治維新…井上馨と幕末藩士／犬塚孝明。――東京…日本放送出版協會、2001・8。――

（NHKブックス 921）。

山田顕義

山田顕義関係資料／日本大学精神文化研究所、日本大学教育制度研究所編 第1集、第2集、第3集。――

日本大学精神文化研究所…日本大学教育制度研究所、1985―1987。

山田顕義…人と思想／日本大学総合科学研究所編。――日本大学総合科学研究所、1992・3。

品川弥次郎

品川子爵傳／村田峯次郎。――東京…大日本圖書、1910・4。

内海忠勝

内海忠勝／高橋文雄・内海忠勝顕彰会、1966。

井上勝

井上勝伝／上田広・東京・井上勝銅像を再建する会、1959・10。

広沢真臣

廣澤眞臣日記／日本史籍協会編・東京大学出版会、1973・11（日本史籍協會叢書 177）。

山県有朋

公爵山縣有朋傳／徳富猪一郎編述 上、中、下卷・東京・山縣有朋公記念事業會、1933・2。

王政復古義挙録／小河一敏・懐旧記事／山県有朋・東京・新人物往来社、1969（幕末維新史料叢書 5）。

来島又兵衛

来嶋又兵衛文書・新資料／瓜生等勝・美祢・瓜生等勝、1984・10。

来嶋又兵衛文書・続新資料／瓜生等勝・美祢・西圓寺、1997・3。

「来島又兵衛」野史台維新史料叢書 13／日本史籍協会・東京大学出版会、1974。

長井雅楽

長井雅楽詳傳／中原邦平編述 白杵華臣校訂・徳山・マツノ書店、1979・12。

久坂玄瑞

松下村塾偉人久坂玄瑞／福本義亮・東京・誠文堂、1934・3。

武田勘治者『久坂玄瑞』道統社、1944。

高杉晋作と久坂玄瑞… 変革期の青年像 / 池田諭。 | 東京… 大和書房(大和選書)、1972。
久坂玄瑞全集 / 福本義亮編。 | 限定版。 | 徳山… マツノ書店、1978・2。

大楽源太郎

幕末維新長州風雲録 / 木村高士。 | 新人物往来社、1995・9。 | (歴研ブックス)。

大楽源太郎 / 内田伸。 | 風説社、1971。

前原一誠

前原一誠傳 / 妻木忠太。 | 東京… 積文館、1934・10。

大村益次郎

大村益次郎 / 大村益次郎先生傳記刊行會編「本編」、附録。 | 東京… 肇書房、1944・4。

周布政之助

周布政之助伝 / 周布公平、妻木忠太 栗谷良弼、伊木寿一校閲 上、下巻。 | 東京… 東京大学出版会、1977。

野村靖

追懷録 / 野村靖。 | マツノ書店、1999・8。 | (維新回顧録叢書 4)。

吉田稔麿

松陰先生と吉田稔麿 / 来栖守衛、山口、山口県教育会、昭和13。

世良修蔵

世良修蔵 / 谷林博。 | 新人物往来社、1974。

奥羽戊辰戦争と仙台藩…世良修蔵事件顛末／藤原相之助。一東京…柏書房、1981・7。

河上弥市

「河上弥市」野史台維新史料叢書。13／日本史籍協会編。一東京…東京大学出版会、1974。

赤根武人

近世偉人百話／中川克一編、至誠堂、明治42。

月性

佛法護国論／月性。1856・10。一(山口県立図書館所蔵)。

野史台維新史料叢書7／日本史籍協会。一東京…東京大学出版会、1974・7。一(日本史籍協会叢書別

編7)。

土屋蕭海

「薩藩功罪断案」野史台維新史料叢書2／日本史籍協会編。一東京…東京大学出版会、1973。

薩摩藩

島津斉彬

照國公文書／照國。島津家臨時編輯所編。1、2。一東京…島津家臨時編輯所、1910・11。

島津齊彬…維新英傑／東秀雄。一東京…平凡社、1926・10。

島津斉彬言行録／島津斉彬牧野伸顕序。一東京…岩波書店、1944・11。一(岩波文庫)。

島津斉彬公伝／池田俊彦。一東京…岩崎育英奨学会、1954・3。

島津斉彬文書／島津斉彬文書刊行会編。上、中、下卷。1。一東京…吉川弘文館、1959。一1969。

島津斉彬 / 芳即正 … 新装版。 | 東京 … 吉川弘文館、1993・11 | (人物叢書 / 日本歴史学会編集「通巻204」)。

島津久光

島津久光公實紀 / 岩崎幸、島津公爵家編輯所「輯」卷1 | 卷8 | 「東京」…「島津公爵家編輯所」 | 東京 … 国文社、1910・12。

大久保利通

大久保利通傳 / 勝田孫彌 上卷、中卷、下卷。 | 東京 … 同文館、1910・7 | 1911・3。

大久保利通日記 上卷、下卷。 | 東京 … 日本史籍協會、1927・3 | 1927・4。

大久保利通文書 / 大久保利通 1 | 10。 | 東京 … 日本史籍協會、1927 | 1929。

甲東逸話 / 勝田孫彌。 | 東京 … 富山房、1928・5。

大久保利通 / 白柳秀湖。 | 東京 … 潮文閣、1943・11。

顧録 / 牧野伸顕 上卷、下卷。 | 東京 … 中央公論社、1977 | 1978 | (中公文庫)。

西郷隆盛

西郷隆盛文書 … 全 / 日本史籍協會編輯。 | 東京 … 日本史籍協會、1923・1。

大西郷全集 / 大西郷全集刊行会編 第1卷、第2卷、第3卷。 | 東京 … 大西郷全集刊行会、1926 | 1927。

西郷隆盛 … | 学習研究社、1990・1 | (歴史群像シリーズ 16)。

黒田清隆

田清隆とホーレス・ケプロン…北海道開拓の二大恩人―その生涯とその事蹟／逢坂信?…札幌…北海タイムス社、1962・9。

黒田清隆／井黒弥太郎…新装版、東京…吉川弘文館、1987・11（人物叢書／日本歴史学会編集）。

重野安繹

重野博士史學論文集／薩藩史研究會編纂 上巻、中巻、下巻、東京…雄山閣、1938-1939。

日下部伊三次

「日下部伊三次陳情書」野史台維新史料叢書、33／日本史籍協會編、東京…東京大学出版会、1974。

大山巖

元帥公爵大山巖／大山元帥傳編纂委員編、東京…大山元帥傳刊行会、1935・3。

寺島宗則

寺島宗則／犬塚孝明…新装版、東京…吉川弘文館、1990・10（人物叢書／日本歴史学会編集

[201]）。

畠山義成

明治維新対外関係史研究／犬塚孝明、東京…吉川弘文館、1987・7。

薩摩藩英国留学生／犬塚孝明、東京…中央公論社、1974・10（中公新書 375）。

「畠山義成洋行日記」「畠山義成書翰草稿」新修森有禮全集／森有禮 上沼八郎、犬塚孝明共編 第4巻…文泉堂書店、1999。

有馬新七

有馬新七先生傳記及遺稿／渡辺盛衛・東京…海外社、1931・5。

有馬新七／橋本実…錦城出版、1944。

海江田信義

維新前後実歴史伝／海江田信義口述 西河称「編述」1、2、3 | 復刻版・東京…東京大学出版会、1980・1 | 1980・4 | (続日本史籍協会叢書／日本史籍協会編 第4期第1 | 3)。

月照

月照／友松円諦 日本歴史学会編・東京…吉川弘文館、1961・4 | (人物叢書／日本歴史学会編 64)。

土佐藩

土佐遺聞録／寺石正路編・訂補、開成社、明治42・5。

山内容堂

容堂公記傳／平尾道雄・東京…大日本出版社峯文荘、1943・11。

山内容堂／平尾道雄 日本歴史学会編・東京…吉川弘文館、1961・9 | (人物叢書／日本歴史学会編 75)。

後藤象二郎

伯爵後藤象二郎／大町桂月・東京…富山房、1914・10。

坂本龍馬

土佐之武士道 / 安芸喜代香、――安芸喜代香、明治39・6。

坂本龍馬關係文書 / 岩崎英重編輯 第一、第二、――東京…日本史籍協會、1926・4、1926・6。

坂本龍馬を斬った男 / 今井幸彦、――新人物往来社、1971。

坂本龍馬のすべて / 平尾道雄編、――東京…新人物往来社、1979・6。坂本龍馬海援隊隊士列伝 / 山田一

郎他、――東京…新人物往来社、1988・2。

坂本龍馬、――学習研究社、1991・4、――(歴史群像シリーズ 23)。

坂本龍馬 / 飛鳥井雅道、――東京…講談社、2002・5、――(講談社学術文庫「1546」)。

瀬戸内の海人文化 / 大林太良者代表、――東京…小学館、1991・3、――(海と列島文化 / 網野善彦「ほか」

編 第9巻)。

中岡慎太郎

中岡慎太郎…新訂陸援隊始末記 / 平尾道雄、――東京…白竜社、1966。

中岡慎太郎全集 / 中岡慎太郎「著」宮地佐一郎編集・解説、――東京…勁草書房、1991・6。

史籍雑纂 1、2、――復刻版、――東京…東京大学出版会、1977、――(続日本史籍協会叢書 / 日本史籍協会

編 第2期8、11)。

佐々木高行

土佐偉人傳 / 寺石正路「正」、續、――高知…澤本書店、1914。

勤王秘史佐佐木老侯昔日談 / 津田茂麿編輯、――東京…國晃館、1915・3。

保古飛呂比…佐佐木高行日記 / 佐佐木高行 東京大学史料編纂所編纂 1、12、――東京…東京大学出版会、

1970-1979。

田中光頭

青山餘影.. 田中光頭伯小傳 / 熊澤一衛. | 東京.. 青山書院、1924・2。

維新風雲回顧録 / 田中光頭. | 東京.. 大日本雄弁会講談社、1928。

伯爵田中青山 / 澤本健三編. | 東京.. 田中伯傳記刊行會、1929・9。

吉田東洋

吉田東洋 / 平尾道雄. | 吉川弘文館、1959 | (人物叢書)。

吉田東洋遺稿. | 日本史籍協會、1929 | (日本史籍協會叢書)。

中浜万次郎

中濱萬次郎傳 / 中濱東一郎編. | 東京.. 富山房、1936・4。

佐賀藩

鍋島直正

鍋島直正公傳 / 「久米邦武執筆編述」中野禮四郎編纂 第1編 | 「別卷」. | 東京.. 侯爵鍋島家編纂所、1920-1921。

大隈重信

大隈侯八十五年史 / 大隈侯八十五年史編纂会編 第1卷、第2卷、第3卷. | 東京.. 大隈侯八十五年史編纂会、1926。

久米邦武

久米博士九十年回顧録／久米邦武 上巻、下巻。復刻版。東京…宗高書房、1985・3。

久米邦武文書 3 岩倉使節団關係／久米美術館編 吉川弘文館 2001・4。

久米邦武歴史著作集 第2巻／大久保利謙。吉川弘文館、1989・12。

水戸藩

水戸学と維新の風雲／北条重直。東京修文館、昭和7。

水戸學派の尊皇及び經綸／高須芳次郎 東京…雄山閣、1936・10。

大日本史に現はれた尊皇精神／高須芳次郎 東京…誠文堂新光社、1940・8。

徳川齊昭

水戸義公・烈公集／高須芳次郎編。東京…水戸學大系刊行會、1941・3。〔水戸學大系／高須芳次郎編 第5巻〕。

「日の丸」「ヒノマル」…国旗の正しい理解のために／三浦朱門、吹浦忠正、海竜社、2001・1。

桜田門外の變

維新前史 桜田義挙録 上・中・下編／岩崎 英重…吉川弘文館、1911。

桜田快挙烈士銘々伝／吉田奈良丸口演、郁文舎、明治45・6。

櫻吹雪…幕末秘史／安岡重雄作。東京…八千代生命保險、1926・10。

藤田東湖

藤田東湖／川崎三郎。春陽堂、1897。

正名論／藤田幽谷。及門遺範／會澤正志斎。弘道館記述義(上)／藤田東湖。東京…雄山閣、1

938・11（日本学叢書8）。

藤田東湖言行録／望月茂。東京…三省堂、1939。

藤田東湖傳／高須芳次郎。東京…誠文堂新光社、1941・10。

藤田東湖／西村文則。東京…光書房、1942・2。

藤田東湖全集／高須芳次郎編 第1卷―第6卷。東京…研文書院、1943―1944。

藤田東湖／橋川文三責任編集・訳。東京…中央公論社、1974・1（日本の名29）―1974。

会沢正志齋

水戸学会会沢新論の研究／大野慎。東京…文昭社、1941。

藤田東湖／橋川文三責任編集・訳。東京…中央公論社、1974・1（日本の名29）。

近藤重藏

近藤重藏…全／長田權二郎。東京…裳華書房、1896・8（偉人史叢臨時）。

武田耕雲齋

武田耕雲齋詳伝。上、下／大内地山。水戸学精神作興会、昭和11。

高松藩

香川縣史 第2篇／香川県…高松、1909。

新修 高松市史 1 通史編 高松市史編修室編 高松 1964・12。

香川県史 通史編 第四卷 近世Ⅱ／香川県編…高松、1989・3。

長谷川宗右衛門

長谷川宗右衛門…田村掘越に潜伏した幕末勤王の志士／武田彦左衛門編…掘越史学会、1969。

平賀源内

平賀源内全集／平賀源内；平賀源内先生顕彰會「編」上、下巻。東京…中文館書店、1935・2。

青葉士弘

高松藩儒青葉士弘伝／近石泰秋。高松…高松藩儒青葉士弘先生顕彰會、1987・3。

会津藩

京都守護職始末…旧会津藩老臣の手記／山川浩遠山茂樹校注 金子光晴訳 1、2。東京…平凡社、1965・8・1966・2。（東洋文庫 49、60）。

日下義雄

日下義雄傳／中村孝也。東京…長谷井千代松、1928・3。

山本覚馬

山本覚馬／青山霞村。京都…同志社、1928・12。

福岡藩

平野国臣

平野国臣／宮部力次。東京…裳華書房、1896・7。（偉人史叢 第5巻）。

平野國臣傳／春山育次郎。東京…平凡社、1929・9。

「神武必勝論中巻、下巻（平野次郎）」論策／日本史籍協会編。東京…東京大学出版会、1973・4。

（日本史籍協會叢書 別編 2。野史台維新史料叢書／日本史籍協会編 2）。

「平野国臣伝」野史台維新史料叢書 12 / 日本史籍協会編 1東京…東京大学出版会、1973。

金子堅太郎

帝國憲法制定の精神 歐米各國學者政治家の評論 / 金子堅太郎述 1東京…日本文化協會、1935・9 1
(憲法教育資料 / 文部省思想局編)。

金子堅太郎自叙伝 / 「金子堅太郎」高瀬暢彦編 第1集、第2集 1東京…日本大学精神文化研究所、20
03・3 12004・3 1 (研究叢書 / 日本大学精神文化研究所「編」 11 12)。

平賀義質

子爵花房義質君事略 / 黒瀬義門編 1東京…小林武之助、1913・7。

団琢磨

男爵團琢磨傳 / 故團男爵傳記編纂委員會編 上、下 1東京…故團男爵傳記編纂委員會、1938 1
38。

秋月藩

戸原卯橋

勤皇家戸原卯橋 / 武藤正行…講談社、1944。

「海賀菅門伝」「戸原卯橋事蹟」野史台維新史料叢書13 / 日本史籍協会編 1東京…
東京大学出版会、1974。

肥後藩

長岡監物

肥後先哲偉蹟 / 武藤嚴男遺稿 後篇。 | 熊本 .. 肥後先哲偉蹟後篇刊行会、1928・7。
肥後先哲評傳 / 荒木精之編。 | 熊本 .. 日本談義社、1941・5。

宮部鼎藏

菊池武光伝・宮部鼎藏伝（勤皇烈士顕彰叢書） / 荒木精之 .. 文松堂出版、1944。
菊池勤王史 / 平泉澄 .. 菊池氏勤皇顕彰会、昭和16。

安場保和

安場咬菜・父母の追憶 / 村田保定編。 | 東京 .. 安場保健、1938・12。
久留米藩

真木和泉守遺文 / 眞木保臣先生顕彰會。 | 東京 .. 伯爵有馬家修史所、1913。

徳島藩

伯爵芳川顕正小伝 / 水野秀雄。 | 芳川顕正伯遺業顕彰会、昭和15。

岡山藩

子爵花房義質君事略 / 黒瀬義門編。 | 東京 .. 小林武之助、1913・7。

庄内藩

高木三郎翁小伝 / 高木正義。 | 高木事務所、明治43・3。

島原藩

涙痕録（丸山作楽伝） / 丸山正彦。 | 丸山正彦、明治32・12。

尾張藩

子爵田中不二麿伝 / 西尾豊作・大空社、1987・9 (伝記叢書 19)。

天皇・公卿・戦国武将

神武天皇

神武天皇と大和十津川 / 岡彩雲・十津川村(奈良県)・十津川村史蹟顯彰會、1937・12。

後醍醐天皇

後醍醐天皇御事蹟 / 吉野神宮奉賛會編・吉野神宮奉賛會、1932。

孝明天皇

孝明天皇紀 / 「宮内省先帝御事蹟取調掛編」第1 | 附圖目錄并略解 | 「京都」・平安神宮、1967・1981。

幕末の天皇 / 藤田覚・東京・講談社、1994・9 (講談社選書メチエ 26)。

明治天皇

明治天皇紀・第1、第2 / 宮内庁編・東京・吉川弘文館、1968、1969。

明治天皇と北海道 / 西郷従徳謹述・東京・明治天皇聖蹟保存會、1936・10。

岩倉具視

岩倉公實記 / 多田好問編 上、中、下 | 再版 | 東京・岩倉公舊蹟保存會、1927・7。

三条実美

三條實美傳 / 三井甲之・東京・大日本雄辯會講談社、1944・11。

七卿西竄始末 / 日本史籍協会編 1 | 6 | 東京 .. 東京大学出版会、1972・6 | 1974・6 | (日本史籍協會叢書 別編 17 | 22 . 野史台維新史料叢書 / 日本史籍協会編 17 | 22)。

「常陸帯」野史台維新史料叢書 . 28 / 日本史籍協会編 . | 東京 .. 東京大学出版会、1973。

七卿落 / 池辺義象 .. 辰文館、明治45・3。

五卿滞在記録 / 日本史籍協会編 . | 覆刻 . | 東京 .. 東京大学出版会、1971・12 | (日本史籍協會叢書 99)。

三条実万

三條實萬手録 .. 原名忠成公手録書類寫 / 岩崎英重編輯 第一、第二 . | 東京 .. 日本史籍協會、1925・9 | 1926・1。

三条家文書 / 日本史籍協会編 第一 . | 東京 .. 日本史籍協会、1916 | (日本史籍協會叢書)。

中川宮朝彦親王

朝彦親王日記 / 久邇宮朝彦 [著] 大塚武松編輯 上卷、下卷 . | 東京 .. 日本史籍協會、1929・2 | 1929・7。

維新回天史の一面 .. 久邇宮朝彦親王を中心としての考察 / 徳富猪一郎 | 東京 .. 民友社、1929・5。

有栖川家

有栖川宮総記 / 高松宮家 [編] . | 「東京」 .. 高松宮家、1940・12。

東久世通禧

東久世通禧日記 . 上、下卷 / 霞会館華族資料調査委員会 . | 霞会館、1992・1、1993・3。

山階宮家

山階宮三代 / 山階会編 上、下。 | 東京 .. 山階会、1982・2。

勸修寺家

勸修寺經理日記 .. 全 / 日本史籍協會編輯。 | 東京 .. 日本史籍協會、1920・1。

姉小路公知

姉小路公知傳 / 關博直述。 | 東京 .. 博文館、1905。

九条尚忠

九條尚忠文書三 / 日本史籍協會編(日本史籍協會叢書 ; 93) | 東京 .. 東京大學出版會、1971。

吾妻鏡の思想史 .. 北条時頼を読む / 市川浩史。 | 東京 .. 吉川弘文館、2002・4。

源頼政

源頼政 / 多賀宗隼 日本歴史学会編 | 吉川弘文館、1973・2 | (人物叢書 / 日本歴史学会編 166)。

近衛前久

流浪の戦国貴族近衛前久 .. 天下一統に翻弄された生涯 / 谷口研語。 | 東京 .. 中央公論社、1994・10 |

(中公新書 1213)。

足利尊氏

闇黒日本史 / 伊藤銀月 .. 隆文館、明治39・6。

楠木正成

密寶楠公遺訓書 / 堀田善太郎編。 | 東京 .. 楠公研究会、1932・11。

北畠親房

神皇正統記 / 「北畠親房」平泉澄編纂 一、四、一東京…三秀舎、1933・4。

慈円 北畠親房 / 永原慶二責任編集、一東京…中央公論社、1971・6、(日本の名 9)。

日本古典の研究 / 田中卓、一皇学館大学出版部、1973。

將軍・老中・旗本・佐幕府派

徳川將軍列伝 / 北島正元、一秋田書店、1991・4。

戊辰物語 / 東京日日新聞社会部、一岩波書店、1983・1、(岩波文庫)。

徳川家康

東照宮御實紀附録…徳川家康 / 堀田璋左右、川上多助共編 萩野由之監修(日本偉人言行資料) 一東京…

國史研究会、1915・8。

徳川家康言行録 / 百目木劍虹、一東亜堂書房、大正4、(修養史伝 第4編)。

「徳川氏の姓氏に就いて」渡邊世祐『史学雑誌』第30編第11号、大正8年11月7日。

史疑…徳川家康事蹟 / 村岡素一郎、一東京…民友社、1902・4。

改正三河後風土記 / 成島司直撰、金松堂、1886。

徳川光圀

徳川光圀言行録 / 渡邊修二郎、一東京…内外出版協会、1908・5、(偉人研究 第32編)。

徳川吉宗

徳川吉宗 / 辻達也 日本歴史学会編、一東京…吉川弘文館、1958・12、(人物叢書 / 日本歴史学会

徳川慶喜

昔夢会筆記 .. 徳川慶喜公回想談 / 渋沢栄一編 大久保利謙校訂. | 東京 .. 平凡社、1966・10 | (東洋文庫 76)。

徳川慶喜公伝 / 澁澤栄一 藤井貞文解説 1 | 4 | 東京 .. 平凡社、1967・4 | 1968・1 | (東洋文庫 8、95、98、107)。

水野忠邦

水野閣老 / 福地桜痴、一二三館、明治28、29。

水野忠邦 / 北島正元 日本歴史学会編. | 東京 .. 吉川弘文館、1969・10 | (人物叢書 / 日本歴史学会編 154)。

真田幸貫

海防の先覺者真田幸貫傳 / 大平喜間多. | 東京 .. 昭和刊行會. | 東京 .. 文松堂書店、1944・5。

感應公と象山先生 / 埴科郡教育會編. | 稻荷山町 (長野県) .. 寺澤鶴吉. | 東京 .. 榊原文盛堂、1913・10。

阿部正弘

阿部正弘事蹟 / 渡辺修二郎 [] 1、2 | 復刻版. | 東京 .. 東京大学出版会、1978・5 | 6 | (続日本史籍協会叢書 / 日本史籍協会編 第3期第6、7卷)。

堀田正睦

日本外交の先覚堀田閣老伝 / 佐藤顕理、博文館、明治41・8。

井伊直弼

井伊大老と開港 / 中村勝麻呂・ | 東京・啓成社、1909。

世界の平和を謀る井伊大老とハリス / 北村寿四郎・ | 近江人協会、昭和9。

井伊直弼 / 吉田常吉 日本歴史学会編・ | 東京・吉川弘文館、1963・10・ | (人物叢書 / 日本歴史学会編 113)。

開国始末 / 島田三郎・ | 東京・人物往来社、1968・8・ | (幕末維新史料叢書 1)。

幕末風聞探索書・井伊家史料 / 井伊正弘編 上・安政五年編、中・安政六年編、下・万延・文久編・ | 東京・雄山閣出版、1967・3・1968。

幕末風聞探索書・井伊家史料 / 井伊正弘編・set・下・万延・文久編・ | 復刻版・ | 東京・雄山閣、1999。

侍中由緒帳 / 彦根城博物館編集 1・9・ | 彦根・彦根市教育委員会、1994・3

・ | (彦根藩史料叢書 / 彦根城博物館編集)。

茶湯一会集 / 奥田正造・ | 奥田正造、昭和11。

井伊大老茶道談 / 井伊直弼「述」中村勝麻呂「編」・ | 復刻版・ | 東京・東京大学出版会、1978・11
・ | (続日本史籍協会叢書 / 日本史籍協会編 第3期第15)。

当世茶事おぼえがき・『茶湯一会集』に学ぶ / 筒井紘一・ | 淡交社、1991・7。

村垣範正

幕末外國關係文書之一 / 東京帝國大學文科大學史料編纂掛編(大日本古文書 / 東京帝國大學文科大學史料編纂掛編) | 東京 .. 東京帝國大學文科大學史料編纂掛、1910・3。

夷狄の國へ .. 幕末遣外使節物語 / 尾佐竹猛、 | 東京 .. 萬里閣書房、1929・7。

米使日記 / 村垣淡路守範正 阿部隆一編、 | 東京 .. 文學社、1943・11。

航海日記 / 村垣淡路守範正 吉田常吉編、 | 東京 .. 時事通信社、1959・4 | (時事新書 . 日米兩國關係史 中)。

万延元年 遣米使節史料集成 第1〜7卷 日米修好通商百年記念行事運営会 / 編 風間書房 1961・6 (1961・7)。

幕末維新外交史料集成 / 維新史学会編 ; 第1-6卷、 | 東京 .. 財政經濟學會、1942・12-1944・3。

旧事諮問録 / 旧東京帝國大學史談会編、 | 東京 .. 青蛙房、1964・10 | (青蛙選書 3)、 | 1964。

村垣淡路守公務日記之一〜四(大日本古文書 幕末外國關係文書 付録2) / 東京大學史料編纂所編 | 東京 .. 東京大學出版会、1973・11。

安藤信正

大橋訥菴先生全集 / 平泉澄、寺田剛編 上卷、中卷、下卷、 | 東京 .. 至文堂、1938・6-1943・7。

林復齋

「亜米利加応接掛林大学頭」「等墨夷応接録」大日本古文書、幕末外國關係文書 附録之1-7 / 東京大學史料編纂所編 .. 東京大學、1913-1967。

岩瀬忠震

砲菴十種 / 栗本鋤雲「著」岡敬孝校、東京…報知社、1892・3。

岩瀬忠震…日本を開国させた外交家 / 松岡英夫、東京…中央公論社、1981・10 | (中公新書 630)。

勝海舟

海國史談 / 足立栗園、東京…中外商業新報商況社、1905・10。

海軍歴史鈔 / 本宿宅命編、博文館、明治24・10。

海舟言行録 / 楫東正彦編纂、東京…光融館、1907・6。

長崎海軍伝習所の日々 / ファン・カッテンディーケ 水田信利訳、東京…平凡社、1964・9 | (東洋文庫 26)。

夢酔独言他 / 勝小吉 勝部真長編、東京…平凡社、1969・5 | (東洋文庫 138)。

勝海舟全集 / 江藤淳、勝部真長編 1 | 20、別巻、付録、東京…勁草書房、1970 | 1982。

氷川清話…付勝海舟伝 / 勝海舟「述」勝部真長編、東京…角川書店、1972・4 | (角川文庫 2885)。

勝海舟 / 江藤淳責任編集(日本の名 32) | 東京…中央公論社、1978・2。

海舟座談 / 勝海舟「他」…新訂 勝部真長校注、岩波書店、1983・2 | (岩波文庫)。

木村喜毅

遣外使節日記纂輯 / 日本史籍協会編(日本史籍協會叢書 96 | 98) | 東京…東京大学出版会、1971・11。

三十年史 / 木村芥舟編、東京…木村駿吉、東京…交詢社(発売)、1892。

福沢諭吉

福翁自伝 / 福沢諭吉「他」. . . 新訂. . . 岩波書店、1978・10 . . . (岩波文庫。

学問のすゝめ / 福澤諭吉. . . 改版90刷. . . 東京. . . 岩波書店、2008・12 . . . (岩波文庫)。

福澤諭吉傳 / 石河幹明 第1巻 - 第4巻. . . 慶応義塾蔵版. . . 東京. . . 岩波書店、1932。

福澤全集 / 時事新報社編纂 第1巻 - 第10巻. . . 東京. . . 国民図書、1925・12 - 1926・9。

福沢諭吉全集 / 慶応義塾編纂 第1巻 - 別巻. . . 東京. . . 岩波書店、1958・12 - 1971・12。

川路聖謨

川路聖謨之生涯 / 川路寛堂編述. . . 東京. . . 世界文庫、1970 (近代文芸資料複刻叢書；第8集)。

川路聖謨文書 / 大塚武松編輯 1 - 8 . . . 東京. . . 日本史籍協会、1932・7 - 1934・12。

長崎日記 下田日記 / 川路聖謨 藤井貞文、川田貞夫校注. . . 東京. . . 平凡社、1968・10 . . . (東洋文庫

124)。

夏目右衛門

江戸幕府役職武鑑編年集成 第32巻 / 深井雅海、藤實久美子. . . 東洋書林、1999・5。

長野主膳

安政の大獄 .. 井伊直弼と長野主膳 / 松岡英夫. . . 東京. . . 中央公論新社、2001・3 . . . (中公新書 158

0)。

水野忠央

丹鶴叢書 / 水野忠央編. . . 新宮. . . 丹鶴城、1847 - 1853。

岡本半輔

吳黄石先生小傳／吳秀三編・東京…吳秀三、1917・9。

近藤勇

近藤勇／松村巖著、内外出版協会、明治36・5。

榎本武揚

榎本武揚伝／井黒弥太郎・札幌…みやま書房、1968。

榎本武揚…資料／加茂儀一編集・解説・東京…新人物往来社、1969・8。

榎本武揚／加茂儀一・東京…中央公論社、1988・4（中公文庫）・1988。

大鳥圭介

「大鳥圭介獄中日記（大鳥圭介）」現代日本記録全集 第3 士族の反乱…筑摩書房 1970。

中島三郎助

中島三郎助…浦賀奉行所の與力、同心衆／多々良四郎…鈴木徳彌、1977・4。

浦賀奉行史／高橋恭一・東京…名出版、1974・9。

玉虫誼茂

玉虫左太夫略傳／「山本晃編」・仙台…山本晃 1930・4。

仙台戊辰史／藤原相之助 1、2、3…復刻版・東京…東京大學出版會、1980・12―1981・7

（続日本史籍協会叢書／日本史籍協会編 第4期第10―12）。

松平慶永

戊辰日記／松平慶永岩崎英重編。一東京。日本史籍協會、1925。

逸事史補／松平慶永編。守護職小史／北原雅長。一東京。人物往來社、1968。（幕末維新史料叢書4）。

松平春嶽／川端太平 日本歷史学会編。一東京。吉川弘文館、1967・3。（人物叢書／日本歷史学会編138）。

松平春嶽全集／松平春嶽全集編纂委員會編 第1卷。第4卷。一東京。原書房、1973。1980。（明治百年史叢書 第197卷。第200卷）。

徳川慶勝

昔咄抄録。徳川義貞。徳川光友 慶勝公履歴附録。徳川慶勝／堀田璋左右、川上多助共編 萩野由之監修。一東京。國史研究会、1915・11。（日本偉人言行資料）。

原市之進

維新之源・新撰組始末記其他／日本史籍協會編。一東京。東京大学出版会、1974・4。（日本史籍協會叢書 別編30。野史台維新史料叢書／日本史籍協會編30）。

中根雪江

再夢紀事／中根雪江日本史籍協會「編」全。一東京。日本史籍協會、1922。

續再夢紀事／中根雪江日本史籍協會「編」第1。6。一東京。日本史籍協會、1921。1922。

洪沢栄一

澁澤栄一傳記資料／龍門社編纂 第1卷。一東京。岩波書店、1944・6。

福地源一郎

幕府衰亡論 / 福地源一郎 石塚裕道校注、東京…平凡社、1967・2（東洋文庫 84）。
幕末政治家 / 福地源一郎、東京…平凡社、1989・5（東洋文庫 501）。
懷往事談 幕末政治家 / 福地源一郎、復刻版、東京…東京大学出版会、1979・6（続日本史籍協会叢書 / 日本史籍協会編 第3期第20）。

加藤弘蔵

加藤弘之自叙傳…附金婚式記事概略 追遠碑建設始末 / 加藤弘之先生八十歳祝賀會編輯、東京…加藤弘之先生八十歳祝賀會、1915・6。

桂川甫周

北槎聞略…大黒屋光太夫ロシア漂流記 / 桂川甫周 亀井高孝校訂、東京…岩波書店、1990・10（岩波文庫 33（青）14561）。

ロシア國物語…寛政四年露國使節アダム・ラクスマン来朝記事並漂流民幸太夫ノ物語 / 桂川甫周、「製作地不明」…「製作者不明」、北海道大学附属図書館所蔵。

高橋景保

高橋景保の研究 / 上原久、東京…講談社、1977・3。

満州語のはなし / 今西龍、「京城府」…「出版者不明」、1931・1（青邨説叢 卷2）。

鳥居耀蔵

鳥居耀蔵…天保の改革の弾圧者 / 松岡英夫、東京…中央公論社、1991・11（中公新書）・渡辺華山

高野長英／佐藤昌介責任編集、東京…中央公論社、1972・11（日本の名25）。

津田仙

津田仙…明治の基督者…伝記・津田仙／都田豊三郎、東京…大空社、2000・12（伝記叢書341）。

自叙益田孝翁傳／長井實、再版、鎌倉…長井實、1939・11。

津田梅子

津田梅子／吉川利一、東京…婦女新聞社、1930・2。

山川咲子

男爵山川先生伝／花見朔巳、故男爵山川先生記念会、昭和14。

林董

後は昔の記他…林董回顧録／「林董」；由井正臣校注、東京…平凡社、1970・10（東洋文庫173）。

安藤太郎

安藤太郎文集／「安藤太郎」永田基編、東京…日本國民禁酒同盟、1929・8。

長野桂次郎

櫻井成廣「日光奉行小花和内膳正父子」『大日光52』（昭和55年6月15日発行）。

櫻井成廣氏が『大日光』で発表されました「日光奉行小花和内膳正父子」の内容を引用するに際し、『ひ孫が紹介する、トミー・立石斧次郎（長野桂次郎）のホームページの管理人であられる櫻井成孝氏から御許可を頂きました。改めて御礼申し上げます。

修好事始 / 村山有。 | 東京。時事通信社、1960 | (時事新書。日米両国関係史上)。
トミーという名の日本人。日米修好史話 / 金井圓。 | 東京。文一総合出版、1979・5。

文人・思想家

現代日本思想大系。第1 | 筑摩書房、1966。

「放屁論 後編(平賀源内) 蘭学事始(杉田玄白) 覚醒と構想 夢物語(高野長英) 慎機論(渡辺崋山) 混同大論
(佐藤信淵) 感応公に上りて天下当今の要務を陳ず(佐久間象山) 時事を痛論したる幕府へ上書稿(佐久間象山)
書簡六通(吉田松陰) 遺米使日記(村垣淡路守) 国是三論(横井小楠) 隣草(加藤弘之) 維新前の洋学者たち(今
泉みね) 真政大意草稿(加藤弘之) 百一新論(西周)」。林羅山
林羅山 / 堀勇雄 日本歴史学会編。 | 東京。吉川弘文館、1964・6 | (人物叢書 / 日本歴史学会編 1
18)。

新井白石

新井白石の研究 / 宮崎道生。 | 東京。吉川弘文館、1958。

荻生徂徠

荻生徂徠全集。第3、6巻 / 今中寛司、奈良本辰也。 | 河出書房新社、1975、1973。

塙保己一

塙保己一記念論文集 / 塙保己一検校百五十年祭記念論文集編集委員会編。 | 東京。温故学会、197

1。

塙保己一 / 太田善麿 日本歴史学会編。 | 東京。 | 吉川弘文館、1966・12 | (人物叢書 / 日本歴史学会編 137)。

塙保己一の生涯 / 市村宏。 | 日本書院、1946・5。

湯浅常山

常山紀談。上、中、下巻 / 湯浅常山「他」。 | 岩波書店、昭和13 | 15 | (岩波文庫)。

佐藤信淵

佐藤信淵 / 下村湖人。 | 東京。 | 大日本雄辯會講談社、1942・2 | (偉人傳文庫 12)。

秋田の生める佐藤信淵先生 / 秋田縣教育會編。 | 秋田。 | 石川書店、1931・3。

佐藤一齋と其の門人 / 高瀬代次郎。 | 東京。 | 南陽堂本店、1922・11。

頼山陽

頼山陽とその時代 / 中村真一郎。 | 東京。 | 中央公論社、1971。

頼山陽と明治維新。 | 「通議」による新考察 / 徳田進。 | 東京。 | 芦書房、1972。

平田篤胤

平田篤胤の古典精神 / 竹下数馬。 | 東京。 | 文松堂書店、1943・4。

本多利明

本多利明集・青木昆陽集・安藤昌益集 / 本多利明「ほか」。 | 東京。 | 大日本思想全集刊行會、1932・8 | (大日本思想全集 11)。

本多利明集 / 横川四郎編。 | 東京。 | 誠文堂、1935・3 | (近世社会経済学説大系)。

杉田玄白

杉田玄白 平賀源内 司馬江漢 / 芳賀徹責任編集。 | 東京 .. 中央公論社、1971・4 | (日本の名 22)。

高野長英

高野長英傳 / 高野長運。 | 東京 .. 岩波書店、1943・1。

渡辺華山高野長英 / 佐藤昌介責任編集。 | 東京 .. 中央公論社、1972・11 | (日本の名 25)。

高野長英 (日本思想大系 55) / 佐藤昌介校注。 | 東京 .. 岩波書店、1971・6。

朝川善庵

善庵隨筆 / 朝川鼎。 | 東京 .. 吉川弘文館、1927・8 | (日本隨筆大成 / 日本隨筆大成編輯部編 第1

期 卷5)。

梁川星巖

梁川星巖全集 / 梁川星巖全集刊行會編 ; 第1-5卷。 | 岐阜 .. 梁川星巖全集刊行會、1956-1958。

梁川星巖 藤森弘庵 / 上野日出刀。 | 東京 .. 明德出版社、1998・3 | (叢書・日本の思想家 儒学篇 37)。

佐久間象山

象山全集 / 「佐久間象山」信濃教育會編 上、下。 | 東京 .. 尚文館、1913・9。

佐久間象山 横井小楠 / 松浦玲責任編集。 | 東京 .. 中央公論社、1970・7 | (日本の名 30)。

佐久間象山 / 宮本仲。 | 増訂版。 | 岩波書店、1940。

佐久間象山の人と思想 / 金子鷹之助。 | 東京 .. 今日の問題社、1943・6 | 1943。

佐久間象山 / 大平喜間多 日本歴史学会編。 | 東京 .. 吉川弘文館、1959・4 | (人物叢書 / 日本歴史

梅田雲浜

梅田雲濱遺稿竝傳／佐伯仲藏編。一東京…有明堂書店、1929・10。
謹皇偉人梅田雲濱／梅田薫。一東京…東京正生院、1942・10。

梅田雲濱／北島正元。一東京…地人書館、1943・6（維新勤皇遺文選書）。

梅田雲浜関係史料／青木晦藏、佐伯仲藏〔編〕。一復刻版。一東京…東京大学出版会、1976・11（続
日本史籍協会叢書／日本史籍協会編 第2期第4卷）。

小浜市史；通史編 上卷／小浜市史編纂委員会編。一小浜（福井県）…小浜市、1992。

福井県史 1ノ1..藩政時代以前。 2ノ2..藩政時代。一福井…福井県1920、1921。

橋本左内

橋本景岳全集／橋本左内景岳會編 上、下。一東京…景岳會、1939・9。一1939。

橋本左内／西村文則。一東京…昭文堂、1909・2。

橋本左内／山口宗之新装版。一東京…吉川弘文館、1985・12（人物叢書／日本歴史学会編集）。

横井小楠

佐久間象山 横井小楠／松浦玲責任編集。一東京…中央公論社、1970・7（日本の名 30）。

横井小楠傳／山崎正董 上卷、中卷、下卷。一東京…日新書院、1942・7。一1942・10。

西周

西周全集／大久保利謙編 第1、4卷。一〔復刻版〕。一東京…宗高書房、1960・3。一1981・10。

西周 加藤弘之 / 植手通有責任編集。 | 東京 .. 中央公論社、1972・1 | (日本の名 34)。

外国人

ケンペル

幕末キリスト教経済思想史 / 小田信士。 | 教文館、1982・3。

ケンペル江戸参府紀行 / 呉秀三譯註 上、下。 | 改訂復刻版。 | 東京 .. 雄松堂書店、1966・9 | (異國叢書)。

レザノフ

日本滞在日記 .. 1804-1805 / レザノフ 大島幹雄訳。 | 東京 .. 岩波書店、2000・8 | (岩波文庫青(33)-479-1)。

マテオ・リッチ

マテオ・リッチ伝 / 平川祐弘 1、2、3 | 東京 .. 平凡社、1969・2-1997・12 | (東洋文庫 141、624、627)。

天主教義 / マテオ・リッチ 柴田篤訳注。 | 東京 .. 平凡社、2004・7 | (東洋文庫 728)。

康熙帝

康熙帝伝 / ブーヴェ ; 後藤末雄訳 矢沢利彦校注。 | 東京 .. 平凡社、970・1 | (東洋文庫 155)。

シーボルト

シーボルト先生 .. その生涯及び功業 / 呉秀三 1、2、3 | 東京 .. 平凡社、1967・11-1968・6 |

(東洋文庫 103、115、117)。

江戸参府紀行 / ジーボルト 斎藤信訳。一 東京…平凡社、1967・3。一 (東洋文庫 87)。

マクドナルド

日本回想記 / マクドナルド「他」…一 刀水書房、1979・11。一 (刀水歴史全書 5)。

ペリ

提督彼理 / 米山梅吉、博文館、明治29・9。

ペリリ提督日本遠征記 / ペリリ「著」鈴木周作抄譯。一 東京…大同館、1912・6。

ペリリ提督日本遠征記 / ペリリ「著」土屋喬雄、玉城肇共譯 上巻、下巻。一 東京…弘文荘、1935・3。一

936・3。

ペリー日本遠征隨行記 / S. Welis Williams Williams 洞富雄訳。一 東京…雄松堂書店、1970

・7。一 (新異國叢書 8)。

日本開国 / アルフレッド・タマリン「他」…一 高文堂出版社、1986・5。

ペリリ提督琉球訪問記 / ペリリ「著」神田精輝著訳。一 東京…国書刊行会、1997・7。

南浦書信…ペリー来航と浦賀奉行戸田伊豆守氏栄の書簡集 / 浦賀近世史研究会監修。一 東京…未來社、2

002・3。

伝記。ペリー提督の日本開国 / サミュエル・エリオット・モリソン「他」…一 双葉社、2000・4。

黒船来航と音楽 / 笠原潔。一 東京…吉川弘文館、2001・6。一 (歴史文化ライブラリー 119)。

ハリス

維新秘史日米外交の真相／タウンセント・ハリス「他」．．．金港堂書籍、1913。

日本滞在記／ハリス「著」坂田精一譯上、中、下．．．東京．．．岩波書店、1953・11・1954・10．．．（岩波文庫）。

アメリカ総領事ハリスの着任．．．東京．．．社会思想社、1983・1．．．（現代教養文庫 1072）．．．（下田物語／スタットラー・金井圓「ほか」共訳）上）。

玉泉寺領事館と奉行所の確執．．．東京．．．社会思想社、1983・2．．．（現代教養文庫 1073）．．．（下田物語／スタットラー・金井圓「ほか」共訳）中）。

総領事ハリスの江戸への旅行．．．東京．．．社会思想社、1983・4．．．（現代教養文庫 1074）．．．（下田物語／スタットラー・金井圓「ほか」共訳）下）。

ヒュースケン

ヒュースケン日本日記．．．1855-1861／ヒュースケン青木枝朗訳．．．岩波書店、1989・7．．．（岩波文庫）。

リンカーン

「リンカーン」近世泰西英傑伝 第3巻 大日本文明協会／大日本文明協会編、1911。

フルベツキ

世界史のなかの明治維新／坂田吉雄、吉田光邦．．．京都大学人文科学研究所、1973。

フルベツキ書簡集／高谷道男編訳．．．東京．．．新教出版社、1978・7。

明治維新とあるお雇い外国人．．．フルベツキの生涯／大橋昭夫、平野日出雄．．．東京．．．新人物往来社、1988・10。

カリホルニヤ開化秘史 / 河村幽川。 | 東京… 公人書房、1933・11。

日本古典文学

万葉集・上、中、下 / 桜井満。 | 旺文社、1974、1974、1975。 | (旺文社文庫)。

古事記成立考 / 大和岩雄。 | 大和書房、1988・5。

日本書紀 / 井上光貞編 川副武胤「ほか」訳。 | 東京… 中央公論社、1971・1。 | (日本の名 1)。

古事記・日本書紀論集… 神田秀夫先生喜寿記念 / 中村啓信「ほか」編。 | 東京… 続群書類従完成会、198

9・12。

日本神代伝集成 / 泥谷良次郎。 | 日本神代伝集成刊行所、昭和13。

常陸国風土記 / 秋本吉徳全訳注。 | 東京… 講談社、2001・10。 | (講談社学術文庫)。

枕草子 / 「清少納言」他。 | 岩波書店、1962。 | (岩波文庫)。

日本古典文学大系 32、33 平家物語 上、下 / 高木市之助校注。 | 岩波書店、1959・2。

徒然草 ; 現代語訳対照 / 吉田兼好 安良岡康作訳注。 | 旺文社、1971。 | (旺文社文庫)。

陰徳太平記 / 「香川宣阿著」香川正矩集編 堯眞補遺 上、下。 | 東京… 早稲田大学出版部、1913。 |

(通俗日本全史 / 早稲田大学編輯部 第13・14巻)。

陰徳太平記 / 香川正矩「他」。 | 教育社、1980・3。 | (教育社新書 13・15)。

仮名手本忠臣蔵 / 竹田出雲「他」。 | 岩波書店、昭和12。 | (岩波文庫)。

中国思想

「山海経」中国古典文学大系 8 抱朴子 / 本田濟訳 | 平凡社、1969・9。

新釈詩経 / 目加田誠。 | 岩波書店、1954 | (岩波新書)。

新釈漢文大系 62 淮南子 下 | 明治書院、1988・6。

新釈漢文大系 53 孔子家語 | 明治書院、1996・10。

「孟子(湯浅幸孫、日原利国、加地伸行訳)」「世界古典文学全集 18 | 筑摩書房、1971。

四書五経 .. 中国思想の形成と展開 / 竹内照夫。 | 東京 .. 平凡社、1965・6 | (東洋文庫 44)。

『書経 上下』新釈漢文大系 25 加藤常賢(上卷)・小野沢精一(下卷) 明治書院(昭和62年5版)。

「伯夷列伝」新釈漢文大系 88 史記 8 | 明治書院、1990・2。

朱子学と陽明学 / 島田虔次。 | 岩波書店、1967 | (岩波新書)。

その他

古代オリエント史と私 / 三笠宮崇仁。 | 東京 .. 学生社、1984・6。

夏王朝 / 岡村秀典。 | 講談社、2003・12。

百済王族伝説の謎 / 荒木博之。 | 三一書房、1998・8。

ブタ礼讃 / H. D. ダネンベルク 福井康雄訳。 | 東京 .. 博品社、1995・7。

若き日の近松門左衛門 / 宮原 英一 叢文社 1998・8。

武田軍師・山本勘介の謎 / 渡辺勝正、新人物往来社、1988・6。

狩猟民俗と修験道 / 永松敦。 | 東京 .. 白水社、1993・8。

神代史発掘 2 大國主命と銅鐸 / 渡部義任 | 有峰書店新社、1995・5。

鴻池善右衛門 / 宮本又次 日本歴史学会編、| 東京 .. 吉川弘文館、1958・9 | (人物叢書 / 日本歴史学会編 3)。

吾輩は猫である。 上、下巻 / 夏目漱石、| 新潮社、1949 | (新潮文庫)。
坊っちゃん / 夏目漱石、| 新潮社、1950 | (新潮文庫)。

牧野信之助「中世に於ける多賀神社の維持について」『歴史と地理』二十四巻第一号。

土地及び聚落史上の諸問題 / 牧野信之助、| 東京 .. 河出書房、1938・10。

喜田貞吉 .. 歴史学と民俗学 / 上田正昭、| 東京 .. 講談社、1978・5 | (日本民俗文化大系 5)。

習合思想史論考 / 村山修一 | 塙書房、1987・11。

芸能と鎮魂 .. 歓楽と救済のダイナミズム / 守屋毅編集 守屋毅「ほか」執筆、| 東京 .. 春秋社、1988・9 |

(大系仏教と日本人 / 井上光貞、上山春平監修 7)。

招婿婚の研究 / 高群逸枝、| 大日本雄弁会講談社、1953。

家族と女性の歴史 .. 古代・中世 / 前近代女性史研究会編、| 東京 .. 吉川弘文館、1989・8。

慶長見聞集 / 三浦浄心(茂正)他、富山房、明治39・6、| (袖珍名文庫 巻25)。

琉球使者の江戸上り / 宮城栄昌著、| 東京 .. 第一書房、1982・10 | (南島文化叢書 / 高宮廣衛「ほか」編 4)。

日本国家の成立と諸氏族 / 田中卓、| 東京 .. 国書刊行会、1986・10 | (田中卓作集 2)。

吉備高原の神と人 .. 村里の祭礼風土記 / 神崎宣武、| 東京 .. 中央公論社、1983・12 | (中公新書 71

- 赤松氏・三木氏の文献と研究 / 神栄宣郷 神栄赴郷編 | 神栄赴郷、1974・10。
- 利休大事典 / 千宗左、千宗室、千宗守監修 熊倉功夫「ほか」編集委員 | 淡交社、1989・10。
- 必携千利休事典 / 世界文化社、2000・7 | (お茶人の友 19)。
- 箱館英学事始め / 井上能孝 | 札幌 | 北海道新聞社、1987・11 | (道新選書 3)。
- 幕末志士の生活 / 芳賀登 | 東京 | 雄山閣出版、1982・6 | (生活史叢書 8)。
- 江戸の自治制 / 後藤新平 | 東京 | 二松堂書店、1922・3。
- 塩飽の島びとたち / よねもとひとし | 日本出版放送企画、1998・8。
- 江戸のナポレオン伝説 | 西洋英雄伝はどう読まれたか / 岩下哲典 | 東京 | 中央公論新社、1999・9 | (中公新書 1495)。
- (中公新書 1495)。
- 漱目漱石を江戸から読む | 新しい女と古い男 / 小谷野敦 | 東京 | 中央公論社、1995・3 | (中公新書 1233)。
- フランス學のあけぼの | 佛學事始とその背景 / 富田仁 | 東京 | カルチャー出版社、1975・6。
- 保元の乱・平治の乱 / 河内祥輔 | 東京 | 吉川弘文館、2002・6。
- 熱田神宮史料考 / 尾崎久彌 | 京都 | 大雅堂、1944・8。
- 日本人の神と仏 日光山の信仰と歴史 / 菅原信海 | 法蔵館、2001・8。
- 「天海僧正血統考」黒川真頼全集 / 黒川真道編輯 第四 | 東京 | 国書刊行会、1910。
- 平安貴族社会の研究 / 橋本義彦 | 吉川弘文館、1976。

撰関時代と古記録／山中裕、吉川弘文館、1991・6。

比叡山と天台仏教の研究／村山修一編。…名出版、1975・7。―(山岳宗教史研究叢書 2)。

天武の時代…壬申の乱をめぐる歴史と神話／山本幸司。―東京…朝日新聞社、1995・5。―(朝日選書 526)。

天皇の祭り…大嘗祭Ⅱ天皇即位式の構造／吉野裕子。―講談社、2000・11。―(講談社学術文庫)。

鎌倉時代通俗史談／大森金五郎…長風社、明治45・3。

世事見聞録／本庄榮治郎「ほか」編 第1巻) …改造社、1926・6。

兵法家伝書／柳生宗矩 渡辺一郎校注。―岩波書店、1985・8。―(岩波文庫 青(33) 1026-1)。

正史赤穂義士 殿中の刃傷から義士遺族の処分まで／渡辺世祐。―井筒調策校訂。…光和堂、1971・1。

口伝解禁近松門左衛門の真実／近松洋男…中央公論新社、2003・11。

赤穂義士実話／重野安繹述他、大成館、明治22・12。

赤穂義士／福地桜痴編、勝山堂、明治35・3。

遠藤潤「幕末社会と宗教的復古運動。―白川家と平田国学 古川躬行を焦点として―」『國學院大學日本文化研究所紀要』第83輯 平成11年3月。

加藤隆久「招魂社の源流」『神道史研究』第15巻第5・6号、／神道史學會、昭和42年11月。

近世に於ける神祇思想／藤井貞文。―春秋社、昭和19。

招魂社成立史の研究／小林健三、照沼好文。―東京…錦正社、1969。―(国学研究叢書 第1編)。

江戸軟派雑考／尾崎久弥。―春陽堂、大正14。

江戸名所圖會 / 塚本哲三編 1-4巻。 | 東京。 | 有朋堂書店、1914-1918。

新編武蔵風土記稿 / 蘆田伊人編 第1-12巻 | 増訂。 | 東京。 | 雄山閣、1957・2-1958・1 | (大日本地誌大系 / 蘆田伊人編 1-12)。

「江戸・東京歴史の散歩道 江戸・東京の名残りと情緒の探訪 1 江戸・東京文庫 中央区・台東区・墨田区・江東区」… 街と暮らし社編、1999・9。

麹町區史… 全 / 東京市麹町區編。 | 東京。 | 東京市麹町區、1935・3。

江戸史蹟 / 戸川残花。 | 内外出版協會、1912・2版。

辞典・事典

明治維新人名辞典 / 日本歴史学会。 | 吉川弘文館、1981・9。

明治人名辞典… [1] *ses* 1-3 下巻。 | 東京。 | 日本図書センター、1987・10。

日本歴史人名辞典 日置 昌一… 名刊行会 1973・4。

「人名辞典」大事典 上ジャンル別編 人名情報研究会編。 | 日本図書センター 2007・6。

「人名辞典」大事典 下 地域編 / 外国編 人名情報研究会編。 | 日本図書センター 2007・6。

来日西洋人名事典 / 武内博編。 | 東京。 | 日外アソシエーツ。 | 紀伊國屋書店、1983・3。

フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』。